福井県埋蔵文化財調査報告　第136集

舟 寄 遺 跡

― 九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査 ―

２０１３

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

このたび、国営九頭竜川下流土地改良事業に伴って、坂井市丸岡町舟寄地係において、平成17年度に発掘調査を実施しました舟寄（ふなよせ）遺跡の調査成果がまとまり、福井県埋蔵文化財調査報告第136集として刊行することとなりました。

舟寄遺跡は縄文時代中期の遺跡であり、現在の地表面から約1.5ｍの地下で確認されました。狭い調査面積にもかかわらず、竪穴住居や掘立柱建物などの多数の遺構が検出され、縄文土器や石器などの多量の遺物が出土しました。

とくに、竪穴住居は20棟を超え、さらに調査範囲外にも広がることが確実であり、大規模な集落遺跡であると予想されます。また、竪穴住居や掘立柱建物が弧状に並んで配置されており、東日本において認められる環状集落と似た集落構造であったことが明らかとなりました。

出土した縄文土器や石器は質・量ともに充実した内容であり、完全な形に近い土器や石鏃等の微細な石器が多量に出土しました。これらのなかには北陸地方や東海地方からの影響がうかがえる土器をはじめとして、黒曜石やヒスイを用いた石器なども認められ、他の地域の人びととの交流があったことが推測できます。

このように、舟寄遺跡は県内における縄文時代の代表的な遺跡のひとつとして位置付けることができ、今回の発掘調査によって得られた貴重な成果は、今後ますます教育や学術に寄与していくものと思われます。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

平成25年３月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所　長　　佐　藤　　圭

例　　言

1　本書は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが国営九頭竜川下流土地改良事業に伴い、平成17年度に実施した舟寄遺跡（福井県坂井市丸岡町舟寄所在）の発掘調査報告書である。

2　舟寄遺跡の調査は、農林水産省北陸農政局九頭竜川下流農業水利事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　発掘調査は平成17年７月27日～平成18年３月27日まで実施した。調査は山本孝一・田邊和歌子が担当した。

4　出土遺物の整理作業は、平成18年４月１日～平成25年３月22日まで福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。

5　本書の編集は山本が行い、田中祐二・古山明日香・山本が分担して執筆した。また、付章第４節は丸山真史氏（奈良文化財研究所）より原稿を頂いた。さらに、付章第１～３節は各分析を委託した株式会社パレオ・ラボから提出された成果報告に山本が加筆・編集して掲載した。執筆分担は以下のとおりである。

山本　第１～４章、第５章第１・３節、第６章　　田中　第５章第２節
古山　第５章第２節 13）玉類　　パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ　付章第１節
黒澤一男（パレオ・ラボ）　付章第２節　　新山雅広（パレオ・ラボ）　付章第３節
丸山真史（奈良文化財研究所）　付章第４節

6　遺構・遺物の写真撮影および写真図版の作成は山本が行った。遺構の実測図作成は調査担当職員と現場作業員が行い、遺物の出土状況図・実測図作成は執筆分担職員と京藤洋・宮澤多紀および整理作業員が行った。なお、石器実測・トレースは株式会社アルカに作成を委託した。

7　自然科学的分析では、AMS 年代測定・土壌分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。また、出土した獣骨片の同定を奈良文化財研究所の丸山真史氏に依頼した。

8　舟寄遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書との齟齬がある場合、本書をもって訂正したものと了解されたい。

9　本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。

10　本書に掲載した遺構配置図および調査区俯瞰写真は、株式会社かんこうに委託して作成したものであり、一部改変して使用した。

11　発掘調査ならびに遺物整理に際しては、次の機関のご協力を得た。（五十音順）

坂井市教育委員会　坂井市丸岡町舟寄区　農林水産省北陸農政局九頭竜川下流農業水利事務所

12　本書の作成にあたっては、次の方々からご助言・ご指導を頂いた。（敬称略・五十音順）

木下哲夫　清水克彦　高野紗奈江　千葉豊　寺﨑裕助　冨井眞　松井政信　山岸洋一　山口充

13　発掘調査には、地元の方々の参加･ご協力を得た。また、遺物整理作業は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

凡　　例

1　本書における水平レベルの表示は海抜高（m）を示し、方位はすべて座標北を使用した。座標値は国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく。

2　本書で用いる遺構記号は以下のとおりである。

堅穴住居：SI　　掘立柱建物：SB　　土坑：SK　　柱穴・ピット：SP　　遺物集中域：SQ

堅穴住居に付属する柱穴および掘立柱建物を構成する柱穴：P

3　柱穴・ピットについては、遺物が出土したもの、土層断面図などの遺構実測図を作成したものにのみ遺構番号を付した。なお、遺構配置図には本文中において関連するもののみを記載した。

4　挿図における遺構実測図の縮尺は以下のとおりである。

堅穴住居：1/60　　堅穴住居遺物出土状況図：1/60　　堅穴住居内炉：1/30　　堅穴住居覆土上面遺構図：1/100

掘立柱建物：1/60　　土器埋設遺構：1/40　　焼土土坑：1/40　　土坑：1/60・1/40　　柱穴・ピット：1/40

落ち込み：1/60　　遺物集中域：1/40

5　挿図における遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

縄文土器：1/5・1/4・1/3　　石器：1/6・1/4・1/3・2/3・1/2　　土製品：1/3　　石製品：2/3

6　遺物出土状況図に掲載した縄文土器の実測図の縮尺は任意である。

7　遺構断面図における遺物の表現は以下のとおりである。

土器・土製品：白　　石器・礫：斜線

8　遺構断面図では遺構確認土層（地山）を網かけで表現したが、遺物の垂直分布図では行っていない。

9　遺物実測図と遺構実測図および写真図版の遺物番号は符号する。写真図版では、挿図番号－遺物番号の表記を用いた。なお、写真図版の縮尺は不同である。

10　土器の器種名は一部を除き「形土器」を省略して記載した。

目　　次

第１章　調査の経緯 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　調査の概要 …… 5
第１節　基本層序 …… 5
第２節　遺構の分布 …… 6
第３節　遺物の出土状況 …… 6

第４章　遺構 …… 9
第１節　竪穴住居 …… 9
第２節　掘立柱建物・柱穴列 …… 53
第３節　土器埋設遺構 …… 65
第４節　焼土土坑 …… 67
第５節　土坑 …… 68
第６節　柱穴 …… 77
第７節　落ち込み …… 79
第８節　遺物集中域 …… 79
第９節　同一個体土器の異所的分布 …… 83

第５章　遺物 …… 85
第１節　縄文土器 …… 85
第２節　石器・石製品 …… 159
第３節　土製品 …… 191

第６章　まとめ …… 197
第１節　集落構成 …… 197
第２節　遺構変遷 …… 198

付　章　自然科学的分析 …… 201
第１節　放射性炭素年代測定 …… 201
第２節　珪藻化石群集 …… 204
第３節　花粉化石群集 …… 209
第４節　動物遺存体 …… 212

写 真 図 版 目 次

図版第１　遺跡
（１）調査区遠景（東方上空から）
（２）調査区全景（上空から）
図版第２　遺構　竪穴住居
（１）SI01・02（南東方から）
（２）SI03（北東方から）
（３）SI04　遺物出土状況（西方から）
（４）SI04　炉（北東方から）
（５）SI04－P6　炉石検出状況（南西方から）
（６）SI05　遺物出土状況（北東方から）
（７）SI05　三角擽形土製品出土状況（西方から）
（８）SI05（東方から）
図版第３　遺構　竪穴住居
（１）SI05　炉（西方から）
（２）SI05　炉床土器（南方から）
（３）SI05－P10　遺物出土状況（西方から）
（４）SI06　遺物出土状況（北東方から）
（５）SI06　炉（東方から）
（６）SI06　炉床土器（北東方から）
（７）SI07　遺物出土状況（西方から）
（８）SI07（東方から）
図版第４　遺構　竪穴住居
（１）SI07　炉（北東方から）
（２）SI08　遺物出土状況（北西方から）
（３）SI09　遺物出土状況（北方から）
（４）SI10　遺物出土状況（南西方から）
（５）SI10　炉（南東方から）
（６）SI11　遺物出土状況（南方から）
（７）SI11（北西方から）
（８）SI11　炉（東方から）
図版第５　遺構　竪穴住居
（１）SI12・13（南東方から）
（２）SI14 遺物出土状況（東方から）
（３）SI14 炉床土器（北方から）
（４）土器埋設遺構７検出状況（西方から）
（５）土器埋設遺構７半裁状況（北西方から）
（６）SI15　遺物出土状況（北東方から）
（７）SI15　炉（北西方から）
（８）SI16 上層　炉（南方から）
図版第６　遺構　竪穴住居
（１）SI16　下層（北西方から）
（２）SI16 下層　炉（南方から）
（３）SI17　遺物出土状況（北東方から）
（４）SI18　遺物出土状況（南方から）
（５）SI18（北方から）
（６）SI18　炉（南西方から）
（７）SI19　遺物出土状況（北西方から）
（８）SI19　炉（南西方から）
図版第７　遺構 竪穴住居・土器埋設遺構・土坑
(1) SI20 遺物出土状況（北西方から）
(2) SI20 炉（西方から）
(3) 土器埋設遺構 2 半裁状況（西方から）
(4) 土器埋設遺構 3 半裁状況（南方から）
(5) 土器埋設遺構 4（南方から）
(6) 土器埋設遺構 5 半裁状況（南西方から）
(7) 土器埋設遺構 6（北西方から）
(8) SK18（北東方から）
図版第８　遺構 土坑・柱穴
(1) SK05 遺物出土状況（北東方から）
(2) SK30 遺物出土状況（北方から）
(3) SK34 遺物出土状況（北西方から）
(4) SK40 遺物出土状況（北東方から）
(5) SK41 遺物出土状況（東方から）
(6) SK42 遺物出土状況（西方から）
(7) SK43（南西方から）
(8) SP692 遺物出土状況（北東方から）
図版第９　遺構 柱穴・落ち込み
(1) SB04－P2 遺物出土状況（北方から）
(2) SB06－P3 焼成粘土塊出土状況（東方から）
(3) SB13－P4 遺物出土状況（北東方から）
(4) SB16－P3 遺物出土状況（南西方から）
(5) SP517 遺物出土状況（東方から）
(6) SP132 礫出土状況（西方から）
(7) SP657 礫出土状況（北方から）
(8) 落ち込み 土層堆積状況（北東方から）
図版第10　遺構 焼土土坑・遺物集中域
(1) 焼土土坑 1 半裁状況（南西方から）
(2) 焼土土坑 2 検出状況（南西方から）
(3) SQ2 遺物出土状況（北方から）
(4) SQ2 遺物出土状況（西方から）
(5) SQ4 遺物出土状況（北東方から）
(6) SQ5 遺物出土状況（北東方から）

（7）SQ6 遺物出土状況（南西方から）
（8）SQ6 遺物出土状況（南方から）
図版第11　遺物 縄文土器
図版第12　遺物 縄文土器
図版第13　遺物 縄文土器
図版第14　遺物 縄文土器
図版第15　遺物 縄文土器
図版第16　遺物 縄文土器
図版第17　遺物 縄文土器
図版第18　遺物 縄文土器
図版第19　遺物 縄文土器
図版第20　遺物 縄文土器
図版第21　遺物 縄文土器
図版第22　遺物 縄文土器
図版第23　遺物 縄文土器
図版第24　遺物 縄文土器
図版第25　遺物 縄文土器
図版第26　遺物 石器
図版第27　遺物 石器
図版第28　遺物 石器
図版第29　遺物 石器・石製品
図版第30　遺物 土製品

挿　図　目　次

第 1 図　調査区位置図 …… 2
第 2 図　周辺の地形図 …… 3
第 3 図　周辺の縄文時代遺跡分布図 …… 4
第 4 図　基本土層柱状図 …… 5
第 5 図　遺構配置図 …… 7－8
第 6 図　竪穴住居配置図 …… 9
第 7 図　SI01実測図 …… 11
第 8 図　SI02･03実測図 …… 12
第 9 図　SI04実測図 …… 13
第 10 図　SI04炉･柱穴実測図 …… 14
第 11 図　SI04遺物出土状況図１ …… 15
第 12 図　SI04遺物出土状況図２ …… 16
第 13 図　SI04遺物出土状況図３ …… 17
第 14 図　SI05実測図 …… 18
第 15 図　SI05炉･柱穴実測図 …… 19
第 16 図　SI05遺物出土状況図 …… 20
第 17 図　SI06実測図 …… 21
第 18 図　SI06遺物出土状況図 …… 22
第 19 図　SI07炉実測図 …… 22
第 20 図　SI07実測図 …… 23
第 21 図　SI07遺物出土状況図１ …… 24
第 22 図　SI07遺物出土状況図２ …… 25
第 23 図　SI08実測図 …… 26
第 24 図　SI08遺物出土状況図 …… 27
第 25 図　SI09実測図 …… 28
第 26 図　SI09遺物出土状況図 …… 29
第 27 図　SI10炉実測図 …… 29
第 28 図　SI10実測図 …… 30
第 29 図　SI10遺物出土状況図 …… 31
第 30 図　SI11実測図 …… 32
第 31 図　SI11遺物出土状況図 …… 33
第 32 図　SI12･13･21実測図 …… 34
第 33 図　SI14実測図 …… 35
第 34 図　SI14遺物出土状況図 …… 36
第 35 図　SI15炉実測図 …… 37
第 36 図　SI15実測図 …… 38
第 37 図　SI15遺物出土状況図 …… 39
第 38 図　SI16実測図 …… 40
第 39 図　SI16炉実測図 …… 41
第 40 図　SI17実測図 …… 42
第 41 図　SI17遺物出土状図 …… 43
第 42 図　SI18実測図 …… 44
第 43 図　SI18・19炉実測図 …… 45
第 44 図　SI18遺物出土状況図 …… 46
第 45 図　SI19実測図 …… 47
第 46 図　SI19遺物出土状況図１ …… 48
第 47 図　SI19遺物出土状況図２ …… 49
第 48 図　SI20実測図 …… 50

第 49 図　SI20炉実測図 …… 51
第 50 図　SI20遺物出土状況図 …… 52
第 51 図　掘立柱建物・柱穴列配置図 …… 53
第 52 図　SB01・02実測図 …… 55
第 53 図　SB04～06実測図 …… 56
第 54 図　SB07実測図 …… 57
第 55 図　SB08実測図 …… 58
第 56 図　SB09・15実測図 …… 59
第 57 図　SB10実測図 …… 60
第 58 図　SB12実測図 …… 61
第 59 図　SB11・13・14実測図 …… 62
第 60 図　SB16実測図 …… 63
第 61 図　SB03・17～19, SA 1 実測図 …… 64
第 62 図　土器埋設遺構実測図 …… 66
第 63 図　焼土土坑実測図 …… 67
第 64 図　土坑実測図 1 …… 69
第 65 図　土坑実測図 2 …… 70
第 66 図　土坑実測図 3 …… 71
第 67 図　土坑実測図 4 …… 72
第 68 図　土坑実測図 5 …… 73
第 69 図　土坑実測図 6 …… 74
第 70 図　柱穴実測図 1 …… 77
第 71 図　柱穴実測図 2 …… 78
第 72 図　落ち込み実測図 …… 79
第 73 図　遺物集中域配置図 …… 79
第 74 図　SQ 1 ～ 4 遺物出土状況図 …… 80
第 75 図　SQ 5 遺物出土状況図 …… 81
第 76 図　SQ 6 遺物出土状況図 …… 82
第 77 図　同一個体土器出土箇所図 1 …… 83
第 78 図　同一個体土器出土箇所図 2 …… 84
第 79 図　SI04出土土器実測図 1 …… 95
第 80 図　SI04出土土器実測図 2 …… 96
第 81 図　SI04出土土器実測図 3 …… 97
第 82 図　SI02～04出土土器実測図 …… 98
第 83 図　SI05出土土器実測図 …… 99
第 84 図　SI05・06出土土器実測図 ……100
第 85 図　SI07出土土器実測図 1 ……101
第 86 図　SI07出土土器実測図 2 ……102
第 87 図　SI07・08出土土器実測図 1 ……103
第 88 図　SI07出土土器実測図 3 ……104
第 89 図　SI07・08出土土器実測図 2 ……105
第 90 図　SI09出土土器実測図 ……106
第 91 図　SI14出土土器実測図 ……107
第 92 図　SI10・11・14出土土器実測図 ……108
第 93 図　SI15出土土器実測図 1 ……109
第 94 図　SI15出土土器実測図 2 ……110
第 95 図　SI16出土土器実測図 ……111
第 96 図　SI17出土土器実測図 ……112
第 97 図　SI12・13・17・21出土土器実測図 ……113
第 98 図　SI18出土土器実測図 1 ……114
第 99 図　SI18出土土器実測図 2 ……115
第100図　SI18出土土器実測図 3 ……116
第101図　SI18出土土器実測図 4 ……117
第102図　SI19出土土器実測図 1 ……118
第103図　SI19出土土器実測図 2 ……119
第104図　SI19出土土器実測図 3 ……120
第105図　SI19出土土器実測図 4 ……121
第106図　SI19出土土器実測図 5 ……122
第107図　SI20出土土器実測図 1 ……123
第108図　SI20出土土器実測図 2 ……124
第109図　掘立柱建物出土土器実測図 1 ……125
第110図　掘立柱建物出土土器実測図 2 ……126
第111図　掘立柱建物出土土器実測図 3 ……127
第112図　土器埋設遺構出土土器実測図 1 ……128
第113図　土器埋設遺構出土土器実測図 2 ……129
第114図　土坑出土土器実測図 1 ……130
第115図　土坑出土土器実測図 2 ……131
第116図　土坑出土土器実測図 3 ……132
第117図　土坑出土土器実測図 4 ……133
第118図　土坑出土土器実測図 5 ……134
第119図　土坑出土土器実測図 6 ……135
第120図　土坑出土土器実測図 7 ……136
第121図　土坑出土土器実測図 8 ……137
第122図　土坑出土土器実測図 9 ……138
第123図　土坑・焼土土坑・落ち込み出土
　　土器実測図 ……139

第124図　柱穴出土土器実測図１ ……140
第125図　柱穴出土土器実測図２ ……141
第126図　柱穴出土土器実測図３ ……142
第127図　遺物集中域出土土器実測図１ ……143
第128図　遺物集中域出土土器実測図２ ……144
第129図　遺物集中域出土土器実測図３ ……145
第130図　遺物集中域出土土器実測図４ ……146
第131図　遺物集中域出土土器実測図５ ……147
第132図　遺物包含層出土土器実測図１ ……148
第133図　遺物包含層出土土器実測図２ ……149
第134図　遺物包含層出土土器実測図３ ……150
第135図　遺物包含層出土土器実測図４ ……151
第136図　遺物包含層出土土器実測図５ ……152
第137図　遺物包含層出土土器実測図６ ……153
第138図　遺物包含層出土土器実測図７ ……154
第139図　石鏃実測図１ ……160
第140図　石鏃実測図２ ……161
第141図　石鏃実測図３ ……162
第142図　石鏃実測図４ ……163
第143図　石鏃･石錐実測図 ……164
第144図　石匙･スクレイパー類実測図 ……166
第145図　異形石器実測図 ……167
第146図　打製石斧実測図１ ……168
第147図　打製石斧実測図２ ……169
第148図　打製石斧実測図３ ……170
第149図　打製石斧実測図４ ……171
第150図　打製石斧実測図５ ……172
第151図　磨製石斧実測図 ……174
第152図　石錘実測図１ ……175
第153図　石錘実測図２ ……176
第154図　磨石類実測図１ ……178
第155図　磨石類実測図２ ……179
第156図　磨石類実測図３ ……180
第157図　石皿類実測図 ……181
第158図　石皿類･砥石実測図 ……182
第159図　玉類実測図 ……183
第160図　その他の石製品実測図 ……184
第161図　土製品･焼成粘土塊実測図 ……192
第162図　土製円盤実測図 ……193
第163図　焼成粘土塊実測図 ……163
第164図　集落構成図 ……197
第165図　主要深鉢時期分別図 ……199
第166図　遺構変遷図 ……200
第167図　各資料暦年較正図 ……203
第168図　A2区における珪藻化石分布図 ……206
第169図　A15区における珪藻化石分布図 ……207
第170図　珪藻化石顕微鏡写真 ……207
第171図　花粉化石顕微鏡写真 ……211
第172図　焼獣骨の出土量分布図 ……213

表　目　次

第１表　土坑計測一覧表 …… 75
第２表　縄文土器一覧表 …… 155
第３表　遺構別石器数量一覧表 …… 185
第４表　石器観察表 …… 186
第５表　土製円盤観察表 …… 196
第６表　焼成粘土塊観察表 …… 196
第７表　測定試料および処理一覧表 …… 203
第８表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果一覧表 …… 203
第９表　珪藻化石産出表 …… 208
第10表　花粉化石産出一覧表 …… 211
第11表　種名表 …… 212
第12表　動物遺存体一覧表 …… 214

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

舟寄遺跡は坂井市丸岡町舟寄に所在し、縄文時代から近世の遺物の散布地として福井県遺跡地図に登録され（福井県遺跡地図番号 13027)、周知の遺跡となっていた。

福井県北部の福井平野・坂井平野に位置する九頭竜川下流域は、米作を中心とする穀倉地帯を形成している。この農業を支える現在の基幹的用水路は老朽化が進んでおり、開水路を新たにパイプライン化し、農業用水の再編および配水システムの再構築による水配分の効率化、維持管理費の軽減、地域用水機能の増進を目的とする農業用水再編対策事業が計画された。

これに伴い、事業者である農林水産省北陸農政局九頭竜川下流農業水利事業所（以下、北陸農政局とする）と福井県教育庁文化課（以下、県文化課とする）との間で協議が行われた。登録された周知の遺跡内において開削工法によるパイプ埋設部分や調圧水槽をはじめとする付属施設など、地下に影響をおよぼす箇所については、事前に遺跡の遺存状況を把握し、埋蔵文化財の取り扱いに関する協議資料を得るため、試掘調査を実施することとなった。

これを受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文とする）が、平成11年度から試掘調査を実施し、計画路線のうち、十郷用水路では、南から上安田向田遺跡、高柳・上安田遺跡、舟寄遺跡、舟寄福島通遺跡、若宮遺跡の５遺跡において埋蔵文化財の遺存を確認した。この結果をもとに、北陸農政局と県文化課との間で改めて協議が行われ、事業により止むを得ず破壊される範囲において、県埋文が記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

舟寄遺跡については、試掘調査を平成15年10月２・３日に実施し、計画路線内において推定される遺跡の範囲約1,500㎡について発掘調査を実施することとなった。調査必要範囲のうち、南端部約50㎡については、仮設農道の取り回しの関係から、当初からの調査を見送り、翌年度以降に事業の進捗に応じて工事立会で対応することとなった。調査期間は平成17年７月から平成18年３月まで継続することで決定した。

第２節　調査の経過

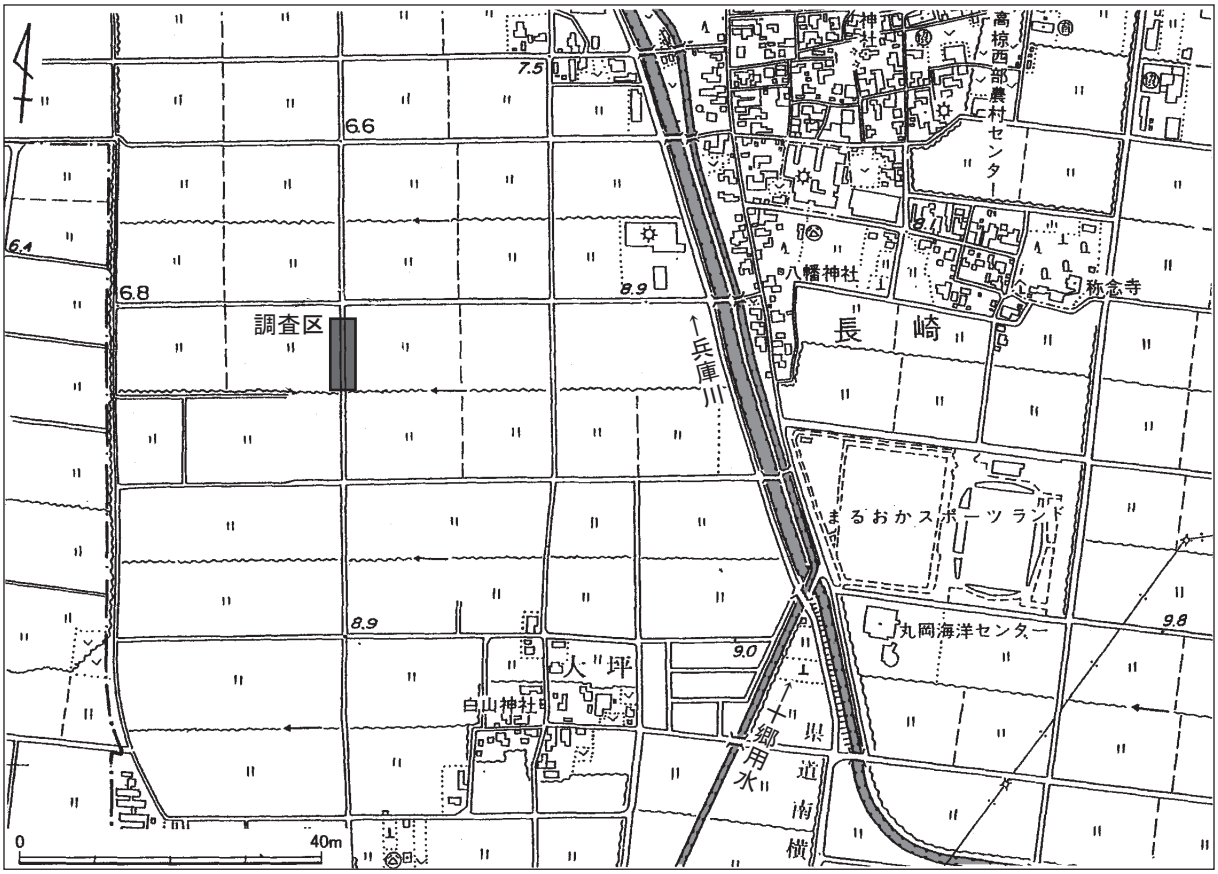
１　現地調査（第１図）

今回の調査区は現舟寄集落から約600m南西方に位置し、県道南横地・芦原線沿いに北西方へ平行して流れる十郷用水と兵庫川の左岸に展開する広域な水田部内に立地する。現況は舗装農道を中心とし、東西両側が水田であった。標高は舗装農道では約6.5m、水田部では約６ｍを測り、調査区内の遺構確認面は北端部で5.4m、南端部で4.6mを測る。

調査区は南北辺約80m、東西辺約20mを測る長方形を呈する。調査区内には１辺５ｍごとの区画割を行い、南北方向では北から順に１～16区、東西方向では西側から順にＡ～Ｄ区を設定した。

調査は平成17年７月27日～平成18年３月27日の期間で実施した。基本測量と空中写真測量および放射性炭素年代測定などの自然科学的分析は外部委託を行った。その他、遺跡現地説明会を隣接する舟寄福島通遺跡と合同で３月12日に開催し、地元住民を中心に約90人の見学者が来跡された。

調査区内は遺物包含層の上面が農道擁壁の影響を一部受けていたが、遺構確認面は後世の影響を受け



第１図　調査区位置図（縮尺 1/1,000）

ておらず、遺存状況は良好であった。

作業工程は調査区北側から順次、遺物包含層の掘削に着手し、これを完了後、遺構掘削を行う計画であった。しかし、調査開始直後に行ったトレンチによる下層面の再確認の結果、多数の竪穴住居や土坑などの存在が明確となった。このため、天候不順が予想される秋期以降に遺構掘削が集中しないように、調査区北側の１～８区までは、遺物包含層除去から遺構掘削までを連続して行う工程に変更した。その後、遺物包含層から多量の剥片石器が出土し、また、試掘調査で予想された以上の遺構密度および遺構出土遺物が認められたため、当初の工程より遅滞が生じた。さらに、12月初頭の大規模な積雪によって、年内の作業は中止せざるを得なかった。このため、翌年１・２月においても作業を実施し、計画どおり３月27日で終了することができた。調査区南端のＢ～Ｄ15・16区については、平成18年12月14・15日に工事立会を実施し、本遺跡にかかわる現地調査をすべて終了した。

２　遺物整理

発掘調査で出土した遺物量はコンテナ230箱分である。遺物整理は平成18年４月から開始し、平成24年３月まで継続して実施した。作業の内容は平成18･19年度に洗浄･注記、平成20年に注記･接合･復元、平成21年度に復元・実測・トレースを実施した。出土した縄文土器の多くが、遺構出土品であり、特に竪穴住居出土品は残存率と接合率が高い状況であった。接合では、遺構内以外にも遺構外・遺構間についても実施し、多くの器形復元個体を得ることができた。実測では、拓本を中心に行う方針となった。平成22年にトレース・写真撮影を行った。また、石器の実測・トレースは外部委託を行った。平成23年度にトレース・写真撮影を行い、原稿を執筆して本報告書を刊行した。

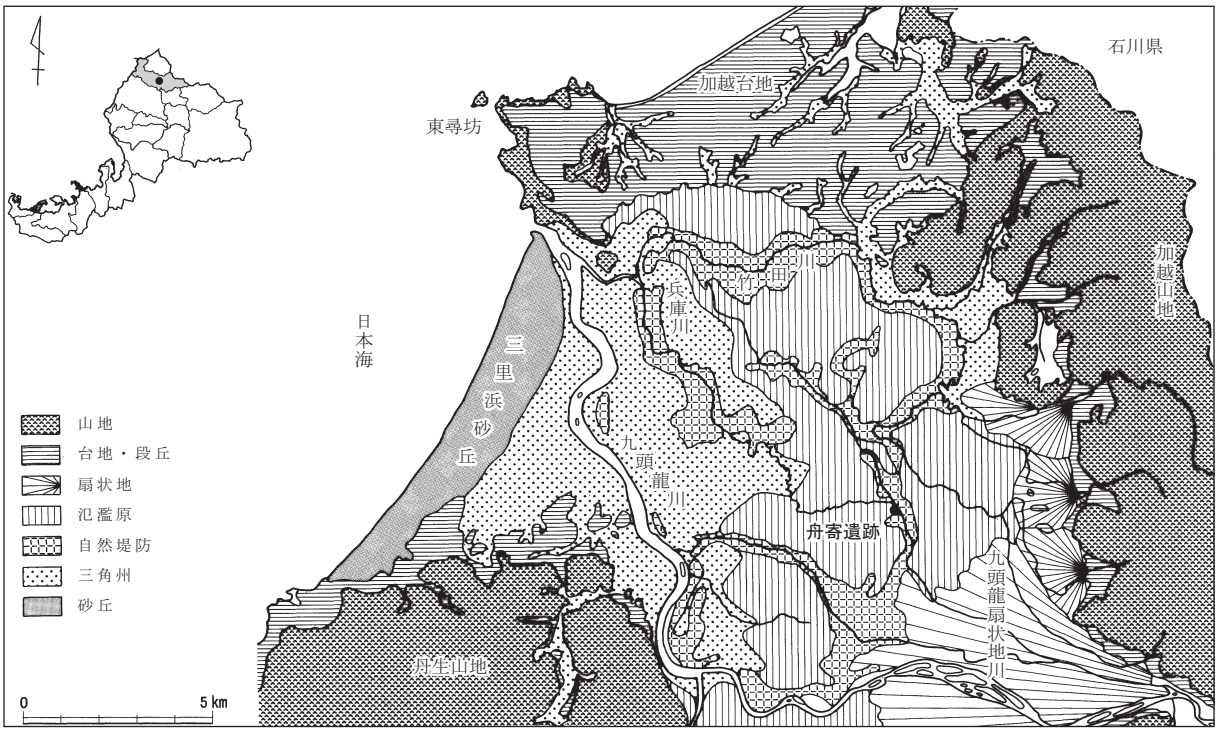
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

舟寄遺跡が所在する坂井市は福井県北部に位置する。福井県北部の地形は九頭竜川・竹田川・兵庫川などにより形成された沖積平野が大部分を占めている。この沖積平野は坂井平野と呼称され、東側を加越山地、北部を加越台地、西側を日本海に囲まれ、南側は九頭竜川を挟み福井平野へと続く。九頭竜川をはじめとする各河川の流域は山地から平野への流入部が扇状地、平野中央部が氾濫原、中央部から下流域が広域な三角州となる。氾濫原上には自然堤防および後背湿地が形成されている。舟寄遺跡の周辺は兵庫川流域にあたり、おおむね自然堤防および氾濫原として地形区分されている（第２図）。

しかし、過去に行われた土地改良事業によって自然堤防の掘削と後背湿地への盛土が行われ、同様に河川改修事業によって流域の変更が行われ、現在では景観上や地図上において旧地形が容易に識別できなくなっている。また、沖積平野は丘陵地と比べ、河川の氾濫などによる地形の変化が起こりやすい。この自然環境の変化は坂井平野における遺跡分布が時代・時期ごとに異なる要因のひとつとしてあげられる。このため、坂井平野内の遺跡が立地する詳細な旧地形の把握は、発掘調査や試掘調査などによる堆積土層の観察や自然科学的分析以外には困難であるといえる。

舟寄遺跡の調査区内は遺構確認面の土層から高地部であったことがわかる。遺構確認面は南北間で約0.8mの比高があり、標高の低い南側に向かい緩やかに傾斜する。試掘調査の結果からは、調査区より南北両側の地形は有機物腐食土層の堆積が確認されており、湿地などの低地部であったと判断される。これらの点から判断すれば、調査区周辺の旧地形は調査区内が自然堤防、北側は河川、南側は後背湿地として想定できる。調査区は東西幅が狭く、この自然堤防の全形や規模は明らかにできないが、おおむね東西方向に延伸し、その幅は調査区長と同程度の約80mを測ると推測される。



第２図　周辺の地形図（縮尺 1/200,000）

第２節　歴史的環境

舟寄遺跡が立地する坂井平野では、縄文時代遺跡の調査例は他時代と比べ少ない。遺跡の時期は前期から晩期にかけて認められ、晩期がもっとも多い。竪穴住居などの遺構が検出された調査例は少なく、集落様相や生業活動などについては、不明な点が多い。以下、舟寄遺跡（第３図１）の周辺に所在する縄文時代遺跡のうち、発掘調査が行われた遺跡を中心とし、中期以降の各時期における概要を述べる。

中期　中期後葉は県内でも遺跡確認数が増加する時期であるが、坂井平野では顕著ではない。中期前葉の遺跡には、下兵庫北遺跡（同図５ 県埋文2004・2005）、上兵庫東遺跡（同図11 県埋文2004・2005）がある。両遺跡ともに廃棄場が検出され、比較的まとまった遺物が出土している。その他、大牧遺跡（同図14 県埋文2012）では、中期中葉の土器が湿地跡から出土している。

後期　県内の沖積平野では、中期より遺跡確認数が増加することから、いわゆる縄文海退との関連で遺跡立地の変化が語られる側面がある。後期前葉から中葉を主体とする遺跡が多く、大関西遺跡（同図４ 坂井市教育委員会2005）、上兵庫錆田遺跡（同図８・10 福井県埋文2004・2005）、沖布目北遺跡（同図18）、大牧遺跡（同図15 県埋文2005）がある。大関西遺跡では、柱穴配置が円形となる半裁材を用いた掘立柱建物をはじめとする遺構が多数検出された。前期から晩期までの遺物も多量に出土している。沖布目北遺跡では平成９年度に県埋文による工事立会が実施され、前葉から中葉にかけての遺物包含層とともに土坑や柱穴などを検出した。その他の遺跡では明確な遺構は検出されていない。

晩期　晩期中葉から遺跡数の増加が認められる。しかし、その多くが遺物のみの出土である。晩期後葉を主体とする遺跡が多く、大味上遺跡（同図２ 県埋文1999）、東寺田遺跡（同図３ 県埋文 2011）、上兵庫錆田遺跡（同図６・７・９ 県埋文2004・2005）、上兵庫東遺跡（同図12 県埋文2004・2005）、上蔵垣内遺跡（同図13 県埋文2011）、若宮遺跡（同図16 県埋文2012）、舟寄福島通遺跡（同図17 県埋文2011）がある。舟寄福島通では、埋設土器10基とともに住居あるいは掘立柱建物の可能性がある柱穴群が検出されている。大味上遺跡・上兵庫錆田遺跡・若宮遺跡では、河川跡などから、まとまった遺物が出土している。



第３図　周辺の縄文時代遺跡分布図（縮尺 1/50,000）

第３章　調査の概要

第１節　基本層序

調査区の現況は舗装農道および水田であり、水田面から1.1～1.9m下位で縄文時代中期の遺構確認面となる。遺構確認面は調査区の南北方向では北側、東西方向では西側が高く、南北間では約0.8m、東西間では約0.1mの比高を測る。

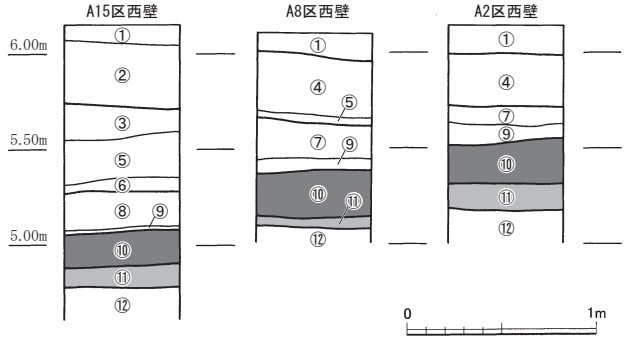
水田面以下で確認した土層は、質・色調などから12層（①～⑫層）に分層した（第４図）。これらの堆積土層は水田耕作関連土（Ⅰ層）・自然堆積層（Ⅱ層・）遺物包含層（Ⅲ～Ⅴ層）・上面で遺構確認面となる自然堤防の基盤層（Ⅵ層）に大別できる。以下、Ⅰ層を除く各層の内容について記述する。

Ⅱ層　③～⑥層で構成される。③･④層は黒色、⑤層は灰色を呈す粘質土であり、ともに粘性が強い。⑥層は黄褐色粘質土であり、やや砂性をもつ。⑤・⑥層は標高の低い調査区南側にのみ堆積する。各土層には炭化物などの含有物をほとんど含まない。堆積時期は不明である。

Ⅲ層　⑦～⑨層で構成される。⑦層は黒灰色粘質土であり、調査区北半部にのみ堆積する。⑧層の暗灰色粘質土の土質はⅡ層に属す⑤層に近似する。⑨層は下層の⑩層との漸移層にあたり、灰白色粘土がしみ状に若干混入する。炭化物などの含有物をほとんど含まない。縄文土器細片をわずかに含む。出土した土器は下層の⑩層や周辺地からの流れ込みによる二次的な混入品と考えられる。なお、付章で提示するが、⑧層中の炭化物の放射性炭素年代測定によれば、弥生時代前期の年代が与えられている。

Ⅳ層　⑩層の黒褐色粘質土が該当する。層厚は約0.2 mを測る。遺物とともに炭化物や焼土粒を多く含む。土器は下層のⅤ層と比べ小破片が多い。中期中葉から後葉の土器が主体となり、中期前葉・後期中葉・晩期初頭・晩期中葉の土器が若干認められる。上面での遺構検出はできなかった。なお、付章で提示するが、含有する炭化物の放射性炭素年代測定によれば、晩期後半の年代が与えられている。また、珪藻・花粉分析によれば、湿り気をもつ陸域環境を示唆する結果が得られている。

Ⅴ層　⑪層の暗緑灰色粘質土が該当する。遺構確認面の土層（Ⅵ層）に近似する。層厚は地区により異なり、0.05 ～ 0.15 mを測る。調査区北側（１～６区）では灰色と粘性が強く、南側に向かい漸次的に黒色と砂性が強くなる。遺物とともに炭化物・焼土粒・焼骨粒を多く含む。Ⅳ層と比べ、遺物の包含量は少ないものの、土器は大形破片が多い。土器の時期は中期中葉から後葉に限られる。遺物集中域はⅥ層で検出した竪穴住居などとは異なり、Ⅳ～Ⅴ層中で確認できた点、同様に焼土土坑の炭化物や焼土塊の集中範囲はⅤ層中で確認できた点、Ⅴ層に含まれる遺物は竪穴住居の位置に重なる地区で多く出土し、住居覆土出土土器と接合する事例が多く認められる点などの複数の点から、Ⅴ層は漸移層の可能性があ



大別	細別	土層	備考
Ⅰ	①	暗灰褐色粘質土	水田耕作関連土。
	②	暗褐色粘質土	基盤整備事業等による盛土。
Ⅱ	③	黒灰色粘質土	
	④	黒色粘質土	
	⑤	暗灰色粘質土	やや均一な土層。調査区南半部のみ堆積。
	⑥	黄褐色粘質土	砂性が強い　調査区南半部のみ堆積。
Ⅲ	⑦	黒灰色粘質土	調査区北半部のみ堆積。
	⑧	暗灰色粘質土	やや均一な土層。
	⑨	暗灰色粘質土	灰白色粘質土をしみ状に含む。
Ⅳ	⑩	黒褐色粘質土	炭化物･焼土粒を多く含む。
Ⅴ	⑪	暗緑灰色粘質土	炭化物･焼土粒･焼骨粒を多く含む。
Ⅵ	⑫	緑灰色粘質土	砂性が強い。調査区北側では黄褐色を呈す。

Ⅳ層：遺物包含層（中期前葉から晩期中葉）、後期以降の遺構構築面の可能性あり。
Ⅴ層：遺物包含層（中期中葉から同後葉）　Ⅵ層：中期中葉から同後葉の遺構確認面。

第４図　基本土層柱状図（縮尺 1/40）

り、本来の遺構構築面については、一律にⅤ層上面にある、またはⅤ層とⅥ層に時間的・層位的に二分する、あるいは竪穴住居の覆土が盛土状に形成された、さらに遺構構築面は平坦ではなく、凹凸があった、などの複数の可能性が想定される。しかし、調査時において、明確には識別できなかったため、実際の遺構構築面とは別の意味で下層のⅥ層上面を遺構確認面とした。

Ⅵ層　⑫層の黄褐色・緑灰色粘質土が該当する。Ⅴ層同様に南側に向かい砂性が強くなる。約１ｍ下位まで同層の堆積を確認した。下位では、しまりとともに砂性が強くなる。なお、付章で提示するが、珪藻・花粉分析によれば、乾燥した陸域環境を示唆する結果が得られている。

第２節　遺構の分布

検出した主要な遺構には、竪穴住居（SI）21棟、掘立柱建物（SB）19棟、柱穴列（SA）１列、土器埋設遺構８基、焼土土坑５基、土坑（SK）96基、柱穴・ピット（SP）700基以上があり、その他に遺物集中域（SQ）６箇所と落ち込み１箇所がある（第５図）。これらの遺構の所属時期は出土遺物から判断すれば、大半が中期中葉から後葉に属す。

分布は調査区北東端部と南東端部に若干の空白部も認められるが、全体として密度が高く、切り合い関係をもつ遺構が多い。特に柱穴・ピットの集中域が調査区中央で認められる。この集中域は視覚的に調査区東側に向かい湾曲する弧状帯として認識できる。この弧状帯を中心として、他の遺構分布をみれば、竪穴住居はおおむね弧状帯の内外に存在し、弧状帯を挟んで二重の同心弧状となる分布が認められる。掘立柱建物の多くは弧状帯と重複し、一部は外側への分布が認められる。土坑には分布上の偏在は特に認められないが、弧状帯周辺に分布する傾向が指摘できる。

第３節　遺物の出土状況

遺物はコンテナバットで230箱分出土した。縄文土器と石器を中心とし、土製品・石製品および焼成粘土塊や骨片がある。出土箇所の約６割が遺構、約４割が遺物包含層であり、出土遺構の大半が竪穴住居である。包含層出土遺物も竪穴住居上方に分布する傾向が認められ、遺構の分布が希薄な調査区北側と南側では出土量は少ない。このことから、遺構密度と遺物包含層出土量との間に一定の相関関係がうかがえる。なお、遺物の種類ごとの集中や分離は分布上からは明確には認められない。

竪穴住居や土坑などの大型遺構には、遺物出土量における多少と出土状況における疎密が認められる。一方、柱穴などの比較的小規模の遺構からも数個体の土器が出土する事例がある。このような出土状況に認められる多様性を同一成因に求めることはできないが、多量で密あるいは個体のまとまりの状況が認められる場合には、他所からの自然的な混入ではなく、遺構廃絶以後の廃棄行為が想定される。

中期中葉と後葉の土器については、遺物包含層や遺構覆土において層位的に分離した出土状況は認められない。土坑や柱穴などの小規模遺構においては、単時期のみの土器の出土事例が数例認められるものの、竪穴住居などの比較的大型の遺構においては、両時期の土器が割合の差異をもちつつ共出する状況が認められる。このため、出土土器群すべてを出土状況に基づいて時間的先後関係として位置づけることは困難であった。同様に、多くの遺構の所属時期についても単時期に限定することは困難であった。

第４章　遺構

ここでは、遺構の種類ごとに概要と個々の内容について記載する。竪穴住居・掘立柱建物・土器埋設遺構･焼土土坑･落ち込み･遺物集中域については、すべてを実測図として提示するが、土坑･柱穴･ピットについては、主要な例のみを提示する。これらの所属時期については、各個には特定できないが、出土遺物から判断すれば、大部分が中期中葉から後葉に属すと想定される。なお、各遺構から出土した遺物の内容や数量については、次章各節を参照されたい。

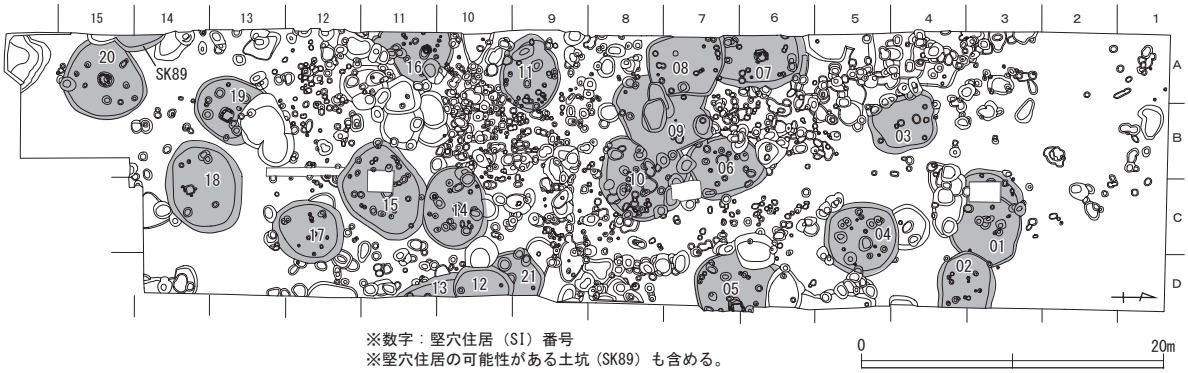
第１節　竪穴住居

ここでは、平面が楕円形や隅丸多角形を呈し、長軸４ｍ、深さ0.2m程度を測る遺構で、内部に付属遺構として炉と考えられる施設と柱穴と考えられるピットを有する遺構を基本として竪穴住居（SI）とする。計21棟を検出した。重複あるいは建て替えの可能性がある事例（SI16 上層・下層）や調査区内では部分的な検出にとどまるが、竪穴住居の可能性を有する土坑（SK89）も含めれば 23 棟となる。

分布は調査区北端の１・２区を除き、ほぼ全域に存在する。部分的な空白部も認められるが、各棟はおおむね近接して存在する。経時的な配置として、柱穴・ピット集中域である弧状帯内に一部位置するものの、その多くが弧状帯の内側と外側に位置し、弧状帯と平行する同心弧状を呈す状況が認められる。住居間の切り合いは主に住居縁辺部で認められ、住居半域におよぶ例は３例（SI08とSI09、SI12とSI21、SI12とSI13）と少ない。なお、弧状帯内の住居は弧状帯を構成する柱穴やピットの多くに切られる。

規模や平面形は多様であり、規格性や斉一性は認められない。規模には長軸380～650cm、短軸 360～550cm、深さ16～44cmの数値幅が認められる。平面形には比較的均整のとれた楕円形（SI14）や隅丸五角形（SI04）もわずかに認められるが、大分部が不整楕円形となる。多くの住居壁面は傾斜角が 45°程度と緩やかであり、壁面側にⅥ層土を主体とする土層が部分的に傾斜堆積する。この土層は壁崩壊土と考えられ、本来の壁面はより急傾斜であった可能性が高い。この点を考慮すれば、平面の規模や形態における多様性の要因のひとつとして、砂性をもつⅥ層土の土質による壁面崩壊が関係すると考えられる。

住居内の炉は重複棟も含め13棟で検出し、住居総数の約７割となる。検出時の状況から想定される廃絶時の炉形態の内訳は、石囲地床炉４例（SI04・05・07・10・16下層）、石囲土器敷炉４例（SI15・16下層・19・20）、土器石併用囲土器敷炉１例（SI18）と石囲石敷炉１例（SI16 上層）であり、その他、石囲部の有無が特定できない炉として、炉の掘り込み部（以下、炉穴とする）のみ１例（SI11）、土器敷



第６図　竪穴住居配置図（縮尺 1/500）

のみ１例（SI06）、土器囲土器敷１例（SI14）がある。地床炉における焼土面および被熱硬化部の位置には、主体となる人為堆積土上面の他、炉穴底面であるⅥ層土上面が１例（SI07）ある。石囲部の平面はすべて方形または隅丸方形となる。炉石として用いる礫はほぼ河原石である。炉石設置状態には、炉穴内（SI05・10・15・16上層・19・20）と住居床面（SI07・18）の２種があり、炉石設置用の深い掘り込みは認められなかった。石囲部の炉石配置形態には、隅角に棒状礫を縦位に配置（SI07・15）、一辺に大形礫を１点配置（SI05･07）、各辺に柱状礫を１点ずつ配置（SI15）、各辺に柱状礫を数点程度配置（SI18～20）などがある。炉穴の平面には楕円形・不正楕円形（SI04・10・11・14・16下層・20）と隅丸長方形・隅丸方形（SI05～07・15・16上層・18・19）がある。炉床土器と想定される土器の器種には深鉢・台付鉢・浅鉢があり、それぞれに有文（SI05・16下層・19・20）と無文（SI06・14・15・18・19）がある。ほぼ完形に復元できた事例は１例（SI06）のみである。炉の改修やかさ上げ認められる事例は３例（SI05・06・15）があり、その他、炉床土器下に被熱硬化部をもつ事例は３例（SI19～20）ある。なお、石囲炉の遺存状況からは、東半部分が調査区外で確認できない１例（SI05）を除き、炉石の部分的または全体的な欠如（SI04）や炉内部のかく乱（SI20）が認められる。この状況から、炉穴や土器敷のみの炉も本来は石囲部を有していた可能性がある。また、事例の多数性から、この炉石抜き取り行為は偶然性に基づくものではなく、住居や炉の廃絶に伴う意図的な行為として認識される。

柱穴は基本的に床面で確認した柱穴およびピットを該当させた。本数と配置には多様性が認められる。住居覆土最上面や各層理面上で、複数の柱穴・ピットを確認した事例があり、これらには住居床面より深いものも多く存在している。このため、住居付属とした柱穴には、住居埋没後に構築された別の柱穴が識別できず混在している可能性がある。柱穴の配置には明確に規則性が看取できる事例は少ないが、平面上で各柱穴を隅角とし、柱穴間を直線で結んだ形状（以下、配置形とする）には、四角形（SI09・18）、五角形（SI04・19）、六角形（SI06・14・17・20）、八角形（SI15）などがあり、その他、傾向として壁周辺に分布（SI03・08・11・12）や床面中央寄りに分布（SI10）などがある。また、複数の柱穴が切り合う事例（SI04・07・17・18）があり、柱材の改修あるいは上屋の建替えを示す可能性がある。

関連遺構には土器埋設遺構が２例ある。内訳はいわゆる屋内埋甕として１例（SI14－土器埋設遺構８）、柱穴抜き取り後の柱穴を利用した土器埋置が１例（SI05－土器埋設遺構７）となる。その他、住居（SI01）に近接し、屋外埋甕の可能性をもつ例が１例（土器埋設遺構１）ある。

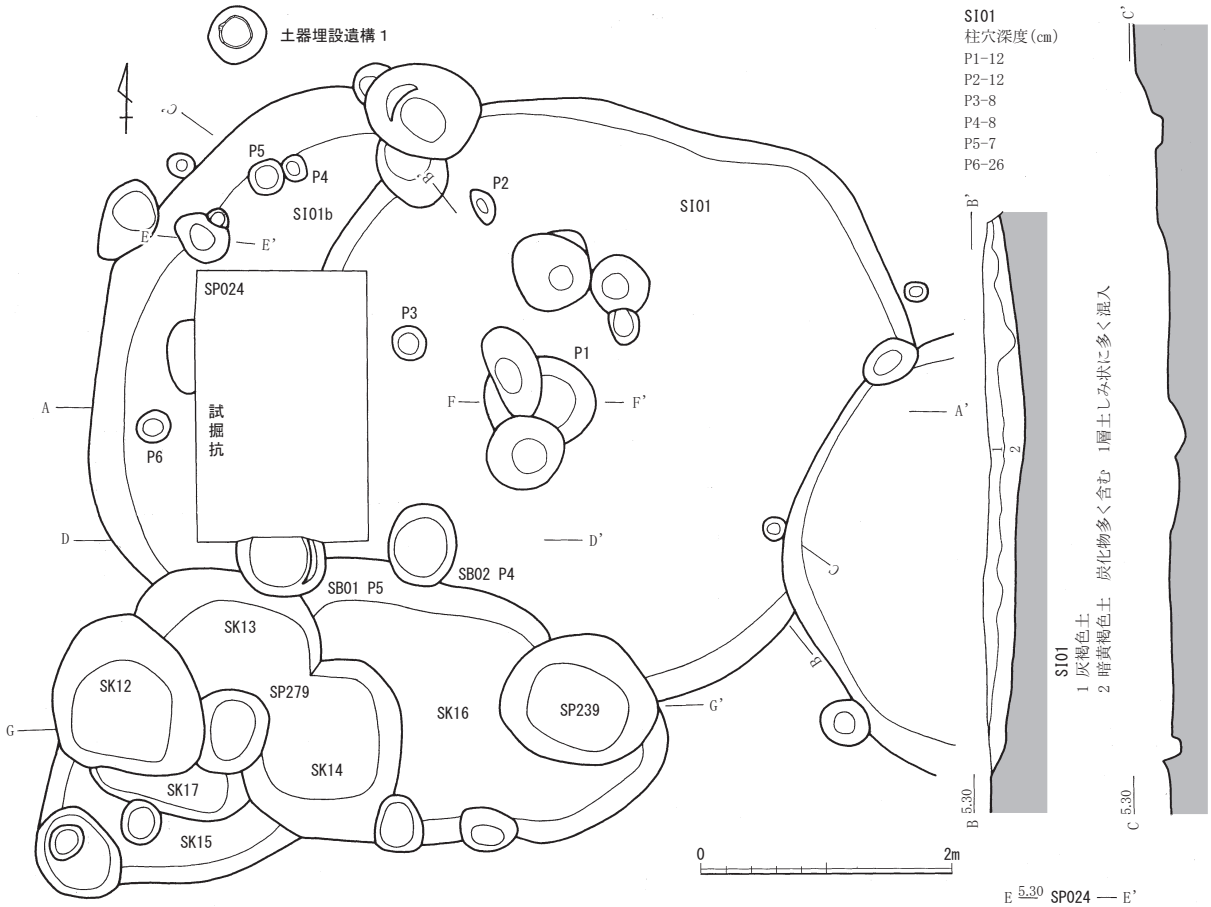
遺物はすべての住居から出土した。内容は土器を中心として、石器・土製品・石製品があり、その他、被熱の有無を含めた自然礫・焼成粘土塊・焼獣骨などがある。住居により出土量の多少がある。多量の場合は土器では略完形品や大形破片を主体とし、住居内での接合率が極めて高い。また、覆土上層から中層にかけて出土する事例が多く、器形復元土器には床面直上からの出土例が極めて少ない。この点からも、出土遺物の多くが住居廃絶後の凹地に廃棄されたと判断される。なお、遺物を多量に含む住居の覆土は黒褐色土が主体となる事例が多く、反対に遺物を少量含む住居の覆土はⅥ層土が主体となる事例が多い。

以下、各竪穴住居の内容について項目ごとに記述を行う。

SI01（第７図）　位置はC3区を中心とする。

形態・規模　平面は不整楕円形を呈し、主軸方向はN77°Wとなる。規模は長軸496cm、短軸484cm、深さ31cmを測る。床面は中央部北西側が緩やかに凹む。

切り合い　SI02、SB01～03、SK13・16に切られ、SQ6に覆われる。



SI01
1 灰褐色土

SP024
1 暗灰褐色土　炭化物大粒多く含む
2 暗灰褐色土　地山ブロック多く含む
3 暗黄褐色土
4 黄褐色土　地山主体
5 黄褐色土　地山主体

SI01
1 暗黄褐色土　地山主体　包含層(Ⅴ層土)しみ状に多く混入

SB01 P5
1 暗灰褐色土
2 黒灰褐色土　炭化物･焼土粒多く含む
3 暗灰褐色粘質土　炭化物･焼土･地山ブロック多く含む
4 暗灰色粘質土　炭化物･地山ブロック多く含む
5 暗灰色粘質土　炭化物多く含む
6 暗黄褐色土
7 黄褐色土　地山主体
8 黄灰色土
9 淡青灰色土
10 暗青灰色土

SK17
1 暗灰褐色粘質土　炭化物多く含む
2 淡褐色粘質土　炭化物多く含む
3 暗青灰色粘質土　炭化物多く含む
暗灰色土しみ状に多く混入

SK12
1 暗黄褐色粘質土　炭化物多く含む
2 暗青灰色粘質土　炭化物多く含む
3 黄褐色土　地山主体(壁崩壊土)
4 淡青灰色土　しまり強い
5 淡青灰色粘質土　炭化物多く含む
6 淡青灰色粘質土

SP279
1 暗灰色粘質土　炭化物多く含む
2 暗青灰色粘質土　炭化物多く含む
3 暗灰色粘質土　炭化物･地山小ブロック多く含む
4 暗灰色粘質土　炭化物多く含む
5 青灰色土　地山主体(壁崩壊土)

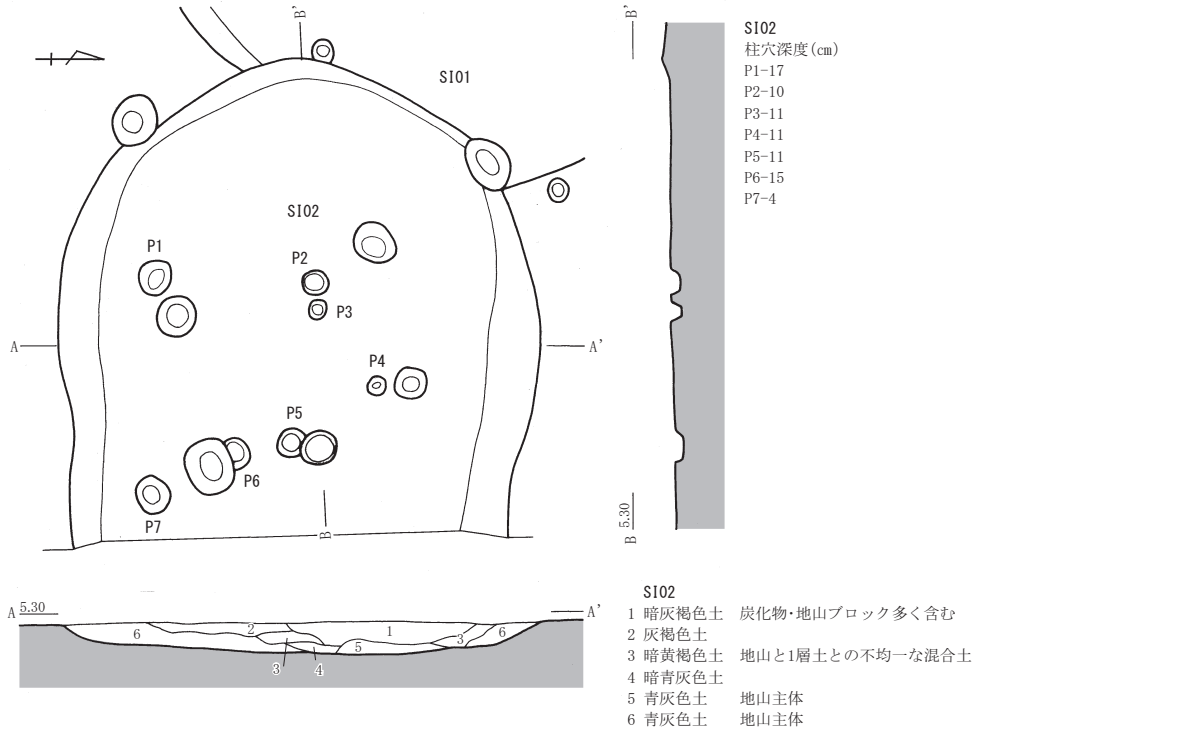
SK14
1 暗灰色粘質土　炭化物多く含む
2 暗青灰色粘質土　炭化物多く含む
3 暗青灰色土　地山と2層土との不均一な混合土

SP239
1 暗灰色土　炭化物多く含む
2 暗青灰色土　炭化物多く含む 地山しみ状に多く混入
3 暗青灰色土　炭化物多く含む
4 暗青灰色土　炭化物多く含む
5 暗青灰色土
6 青灰色土
7 青灰色土
8 青灰色土　地山主体(壁崩壊土)
9 青灰色土　地山主体(壁崩壊土) 砂性強い
10 青灰色砂質土
11 青灰色砂質土　地山主体(壁崩壊土)

SB02 P4
1 暗褐色土
2 暗灰色土 炭化物多く含む　地山しみ状に多く混入
3 黄灰色土 地山ブロック多く含む
4 暗灰色土
5 暗灰色土 炭化物多く含む
6 暗灰色土 炭化物多く含む
7 緑灰色土 地山主体
8 灰色土
9 緑灰色土 地山主体

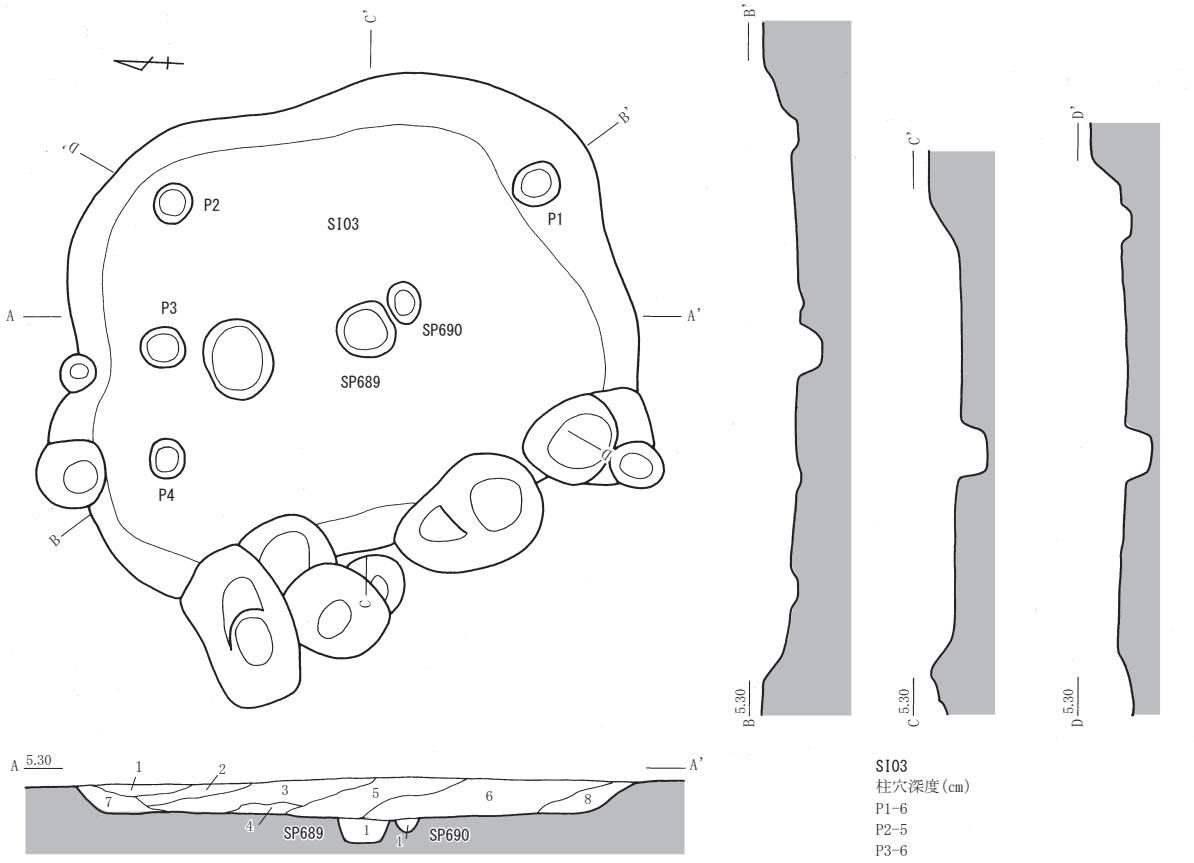
SK16
1 暗灰色粘質土　炭化物多く含む

第７図　SI01 実測図（縮尺 1/60）



SI02
柱穴深度(cm)
P1-17
P2-10
P3-11
P4-11
P5-11
P6-15
P7-4

SI02
1 暗灰褐色土　炭化物･地山ブロック多く含む
2 灰褐色土
3 暗黄褐色土　地山と1層土との不均一な混合土
4 暗青灰色土
5 青灰色土　地山主体
6 青灰色土　地山主体



SI03
柱穴深度(cm)
P1-6
P2-5
P3-6
P4-5

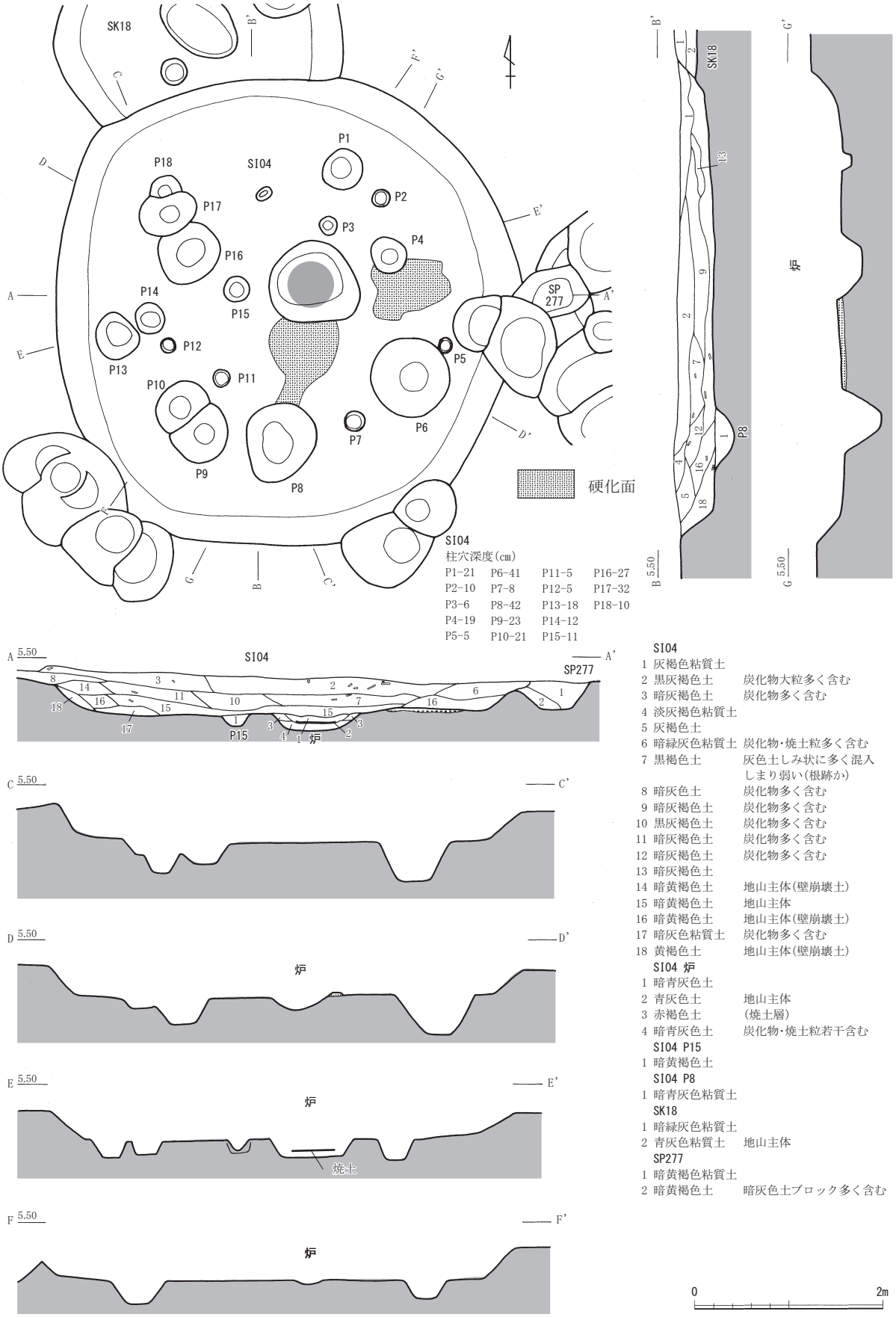
SI03
1 灰褐色土
2 暗灰褐色土
3 暗褐色土　地山ブロック多く含む
4 暗青灰色土　地山ブロック多く含む
5 青灰色砂質土　地山と3層土との不均一な混合土
6 暗青灰色砂質土
7 黄褐色砂質土　地山主体(壁崩壊土)
8 青灰色砂質土　地山主体(壁崩壊土)

SP689
1 暗青灰色砂質土

SP690
1 暗青灰色砂質土

0　2m

第８図　SI02・03 実測図（縮尺 1/60）



SI04
柱穴深度(cm)

P1-21	P6-41	P11-5	P16-27
P2-10	P7-8	P12-5	P17-32
P3-6	P8-42	P13-18	P18-10
P4-19	P9-23	P14-12	
P5-5	P10-21	P15-11	

SI04
1 灰褐色粘質土
2 黒灰褐色土　炭化物大粒多く含む
3 暗灰褐色土　炭化物多く含む
4 淡灰褐色粘質土
5 灰褐色土
6 暗緑灰色粘質土　炭化物・焼土粒多く含む
7 黒褐色土　灰色土しみ状に多く混入しまり弱い(根跡か)
8 暗灰色土　炭化物多く含む
9 暗灰褐色土　炭化物多く含む
10 黒灰褐色土　炭化物多く含む
11 暗灰褐色土　炭化物多く含む
12 暗灰褐色土　炭化物多く含む
13 暗灰褐色土
14 暗黄褐色土　地山主体(壁崩壊土)
15 暗黄褐色土　地山主体
16 暗黄褐色土　地山主体(壁崩壊土)
17 暗灰色粘質土　炭化物多く含む
18 黄褐色土　地山主体(壁崩壊土)

SI04 炉
1 暗青灰色土
2 青灰色土　地山主体
3 赤褐色土　(焼土層)
4 暗青灰色土　炭化物・焼土粒若干含む

SI04 P15
1 暗黄褐色土

SI04 P8
1 暗青灰色粘質土

SK18
1 暗緑灰色粘質土
2 青灰色粘質土　地山主体

SP277
1 暗黄褐色粘質土
2 暗黄褐色土　暗灰色土ブロック多く含む

第９図　SI04 実測図（縮尺 1/60）

覆土　Ⅵ層土を基本とする。上下に２分層した。

炉　炭層や被熱硬化部を検出できなかったが、床面中央に位置するP1が該当する可能性がある。P1は平面が楕円形を呈し、規模が長軸89cm、短軸72cm、深さ12cmを測る。

柱穴　２基（P2・3）検出した。

遺物出土状況　遺物量は比較的少ない。上層を中心としてまばらに出土した。

関連遺構　西側で浅い土坑状の遺構（SI01b）を検出した。平面はSI01から西側へ三日月状に張り出す形状となり、規模は現在値で長軸417cm、短幅135cm、深さ９cmを測る。SI01との切り合い関係はなく、一連の遺構で同時に埋没した可能性がある。内部には柱穴３基（P4～6）を検出した。類例にSI08bがある。その他、約40cm北西部に土器埋設遺構１（第62図）が存在する。関連の有無は不明である。

SI02（第８図）　位置はD3・4区を中心とする。東側部分は調査区外に延びる。

形態・規模　平面は隅丸多角形を呈し、長軸方向はN86°Wとなると推測される。規模は現在値で長軸386cm、短軸387cm、深さ25cmを測る。床面は南北側に向かいやや高くなる。

切り合い　SI01を切り、SB03に切られる。本住居埋没後にSQ2～4が形成される。

覆土　Ⅵ層土を基本とする。５層に分層した。レンズ状堆積となる。

炉　検出できなかった。

柱穴　７基（P1～7）検出した。配置には規則性が認められない。

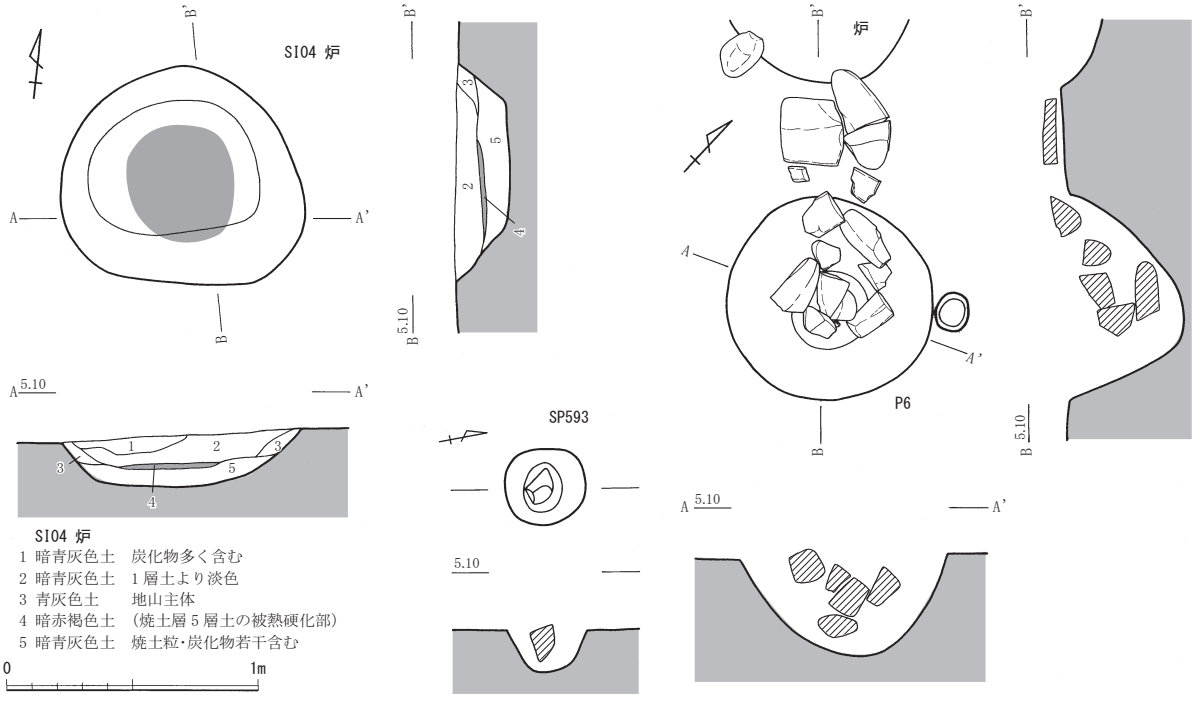
遺物出土状況　遺物量は比較的少ない。主に覆土上層から出土した。

SI03（第８図）　位置はB4・５区を中心とする。

形態・規模　平面は不正楕円形を呈し、長軸方向はN18°Wとなる。規模は長軸506cm、短軸381cm、深さ33cmを測る。床面はほぼ平坦である。

切り合い　SB05・06に切られる。

覆土　Ⅵ層土を基本とする。８層に分層した。土層の多くが南西側から傾斜堆積する。



第10図　SI04炉・柱穴実測図（縮尺1/30）

炉　検出できなかった。

柱穴　４基（P1～4）検出した。壁面寄りに分布する傾向が認められる。

遺物出土状況　遺物量は比較的少ない。主に覆土上層から出土した。

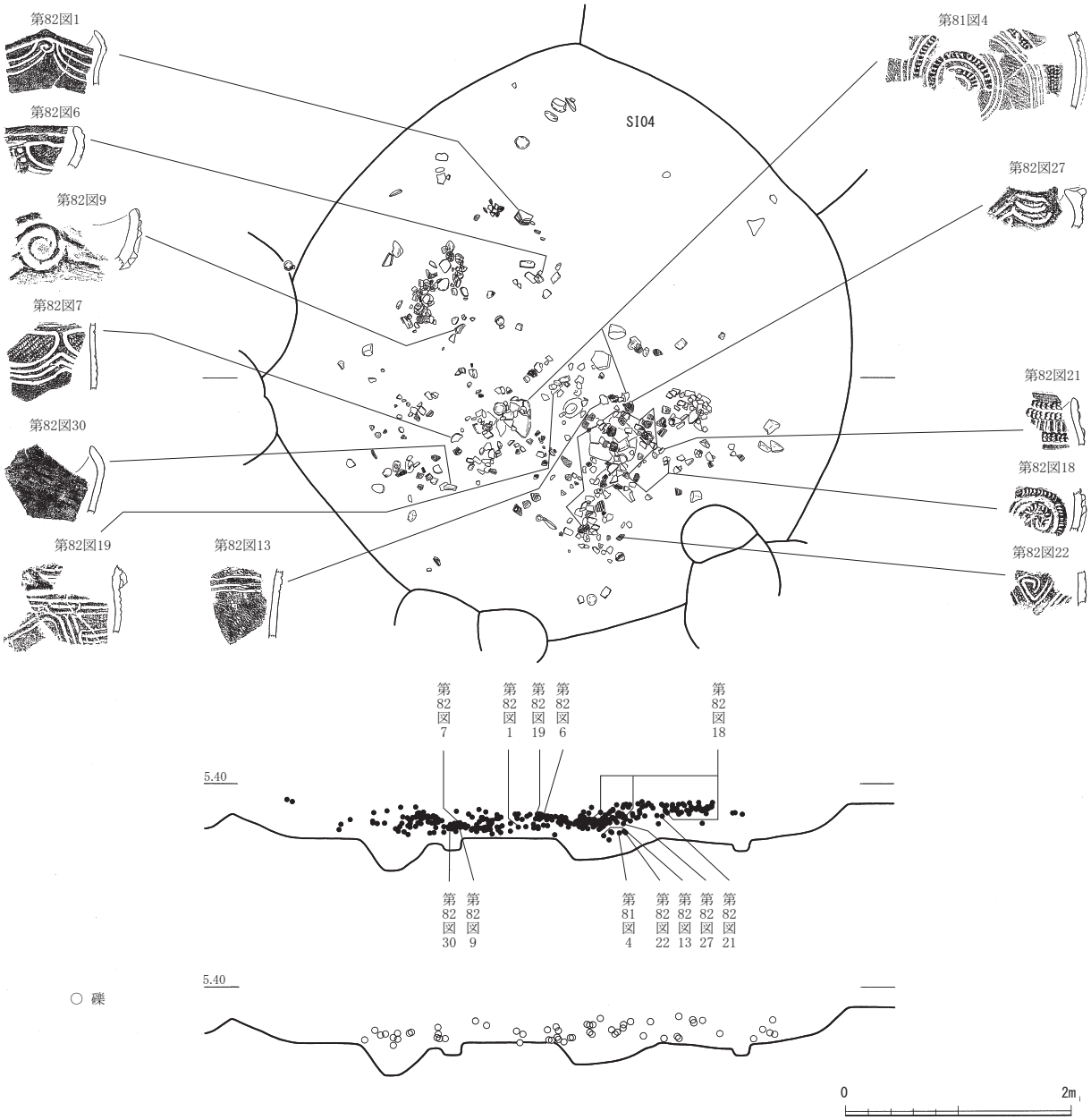
SI04（第９～13図）　位置はC5区を中心とする。

形態・規模　平面は隅丸五角形を呈し、主軸方向はN89°Wとなる。規模は長軸514cm、短軸494cm、深さ44cmを測る。床面は北側壁部に向かいやや高くなる。炉の東側と南側の２箇所で、貼り床の可能性がある鉄分が付着する硬化面を検出した。厚さは最大６cmを測る。

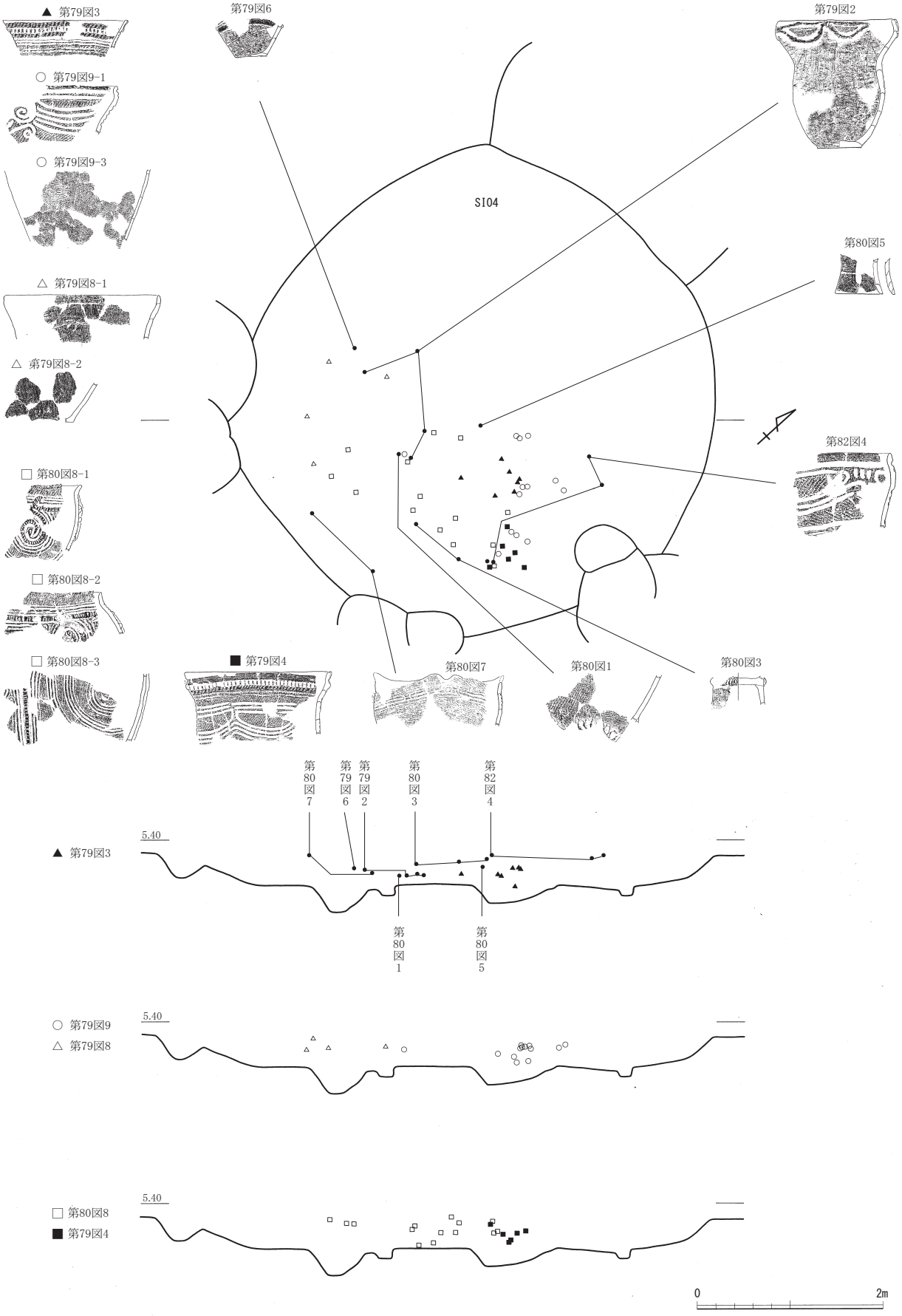
切り合い　SK18を切る。

覆土　18層に分層した。質・色調などから上層（１～７層）・中層（８～14層）・下層（15～18層）に大別できる。全体的に緩やかなレンズ状堆積となる。

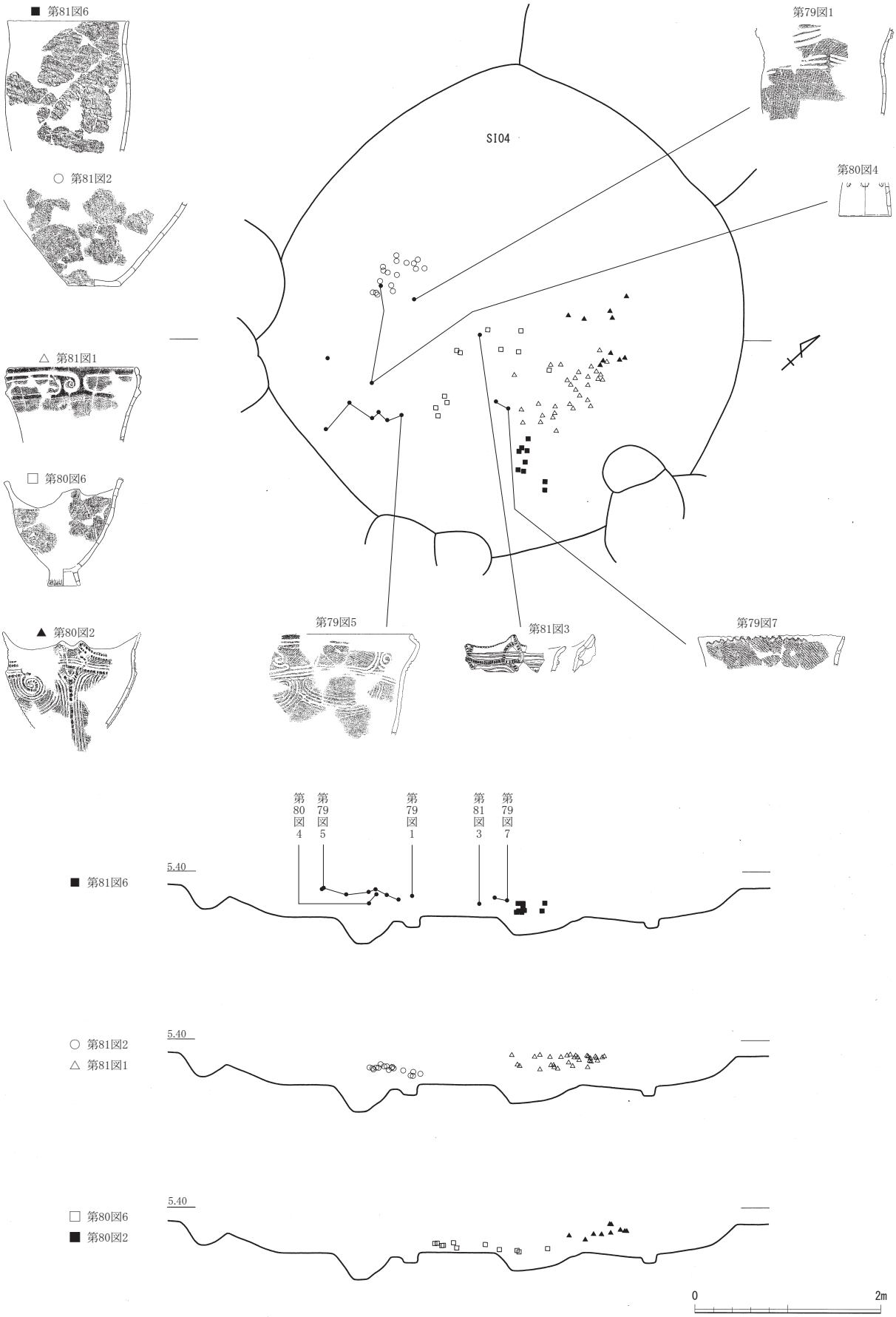
炉（第10図）　床面中央東寄りで１基検出した。炉穴は平面が不整楕円形を呈し、規模が長軸98cm、



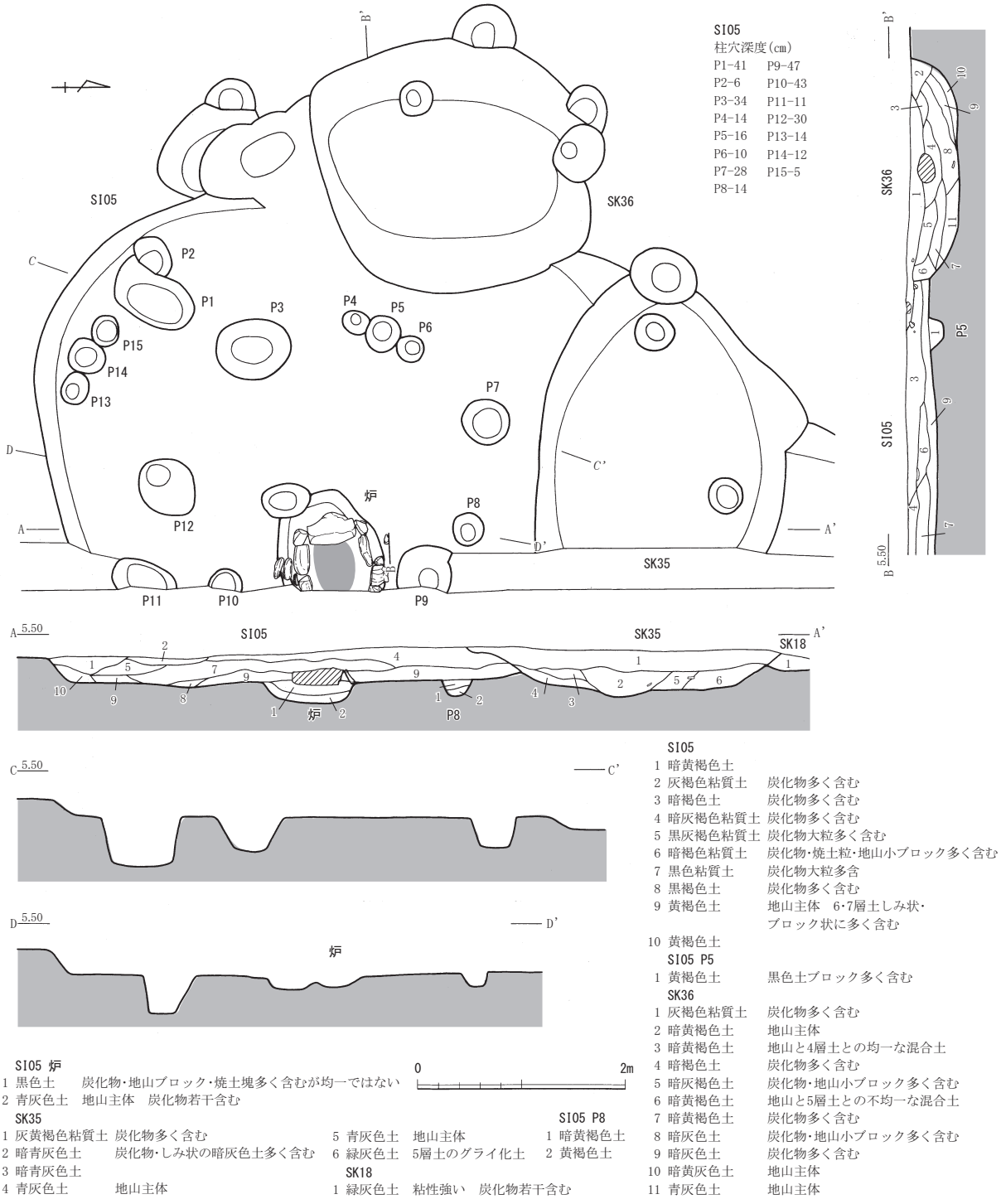
第11図　SI04遺物出土状況図１（縮尺 1/60）



第12図　SI04 遺物出土状況図２（縮尺 1/60）



第13図　SI04 遺物出土状況図３（縮尺 1/60）



第14図　SI05 実測図（縮尺 1/60）

短軸91cm、深さ23cmを測る。覆土下層（５層）の上面に部分的な被熱硬化部（４層）を検出した。柱穴P6・14から炉石が出土したことから、使用時には石囲炉であったと判断される。

柱穴　18基（P1～18）検出した。規模により大型（P6･8～10･16･17）、中型（P1･4･13･14･18）、小型（P2･3･5･7･11･12･15）に大別できる。P1 と大型柱穴の配置形は五角形を呈すが、住居平面形と隅角が一致しない。切り合いからP9－P16とP10－P17 の対応関係が推測される。炉の南東側からP6にかけての床面直上で礫の集中部を検出した。礫は人頭大の河原石を中心とし、被熱赤色化や煤の付着が認められた。P6・14内部でも検出し（第10図）、P6 では礫が北西側から傾斜して底面近くまで入り込

んでいた。この出土状況から判断すれば、これらの礫は炉石であり、住居廃絶時に柱材を抜き取った後、炉石もすべて抜き取り、柱穴内に廃棄したと考えられる。

遺物出土状況（第11～13図）　遺物量は比較的多い。遺物分布では住居北側が比較的希薄となる。主に覆土上層から中層にかけて出土した。上層では確認面であるⅥ層上面より盛り上がる状態で、掌大以下の土器が多量に出土した。器形復元土器は各個にまとまる傾向がうかがえる。なお、床面直上の遺物には磨製石斧（第151図１・２）があり、２点並列した状態で出土した。

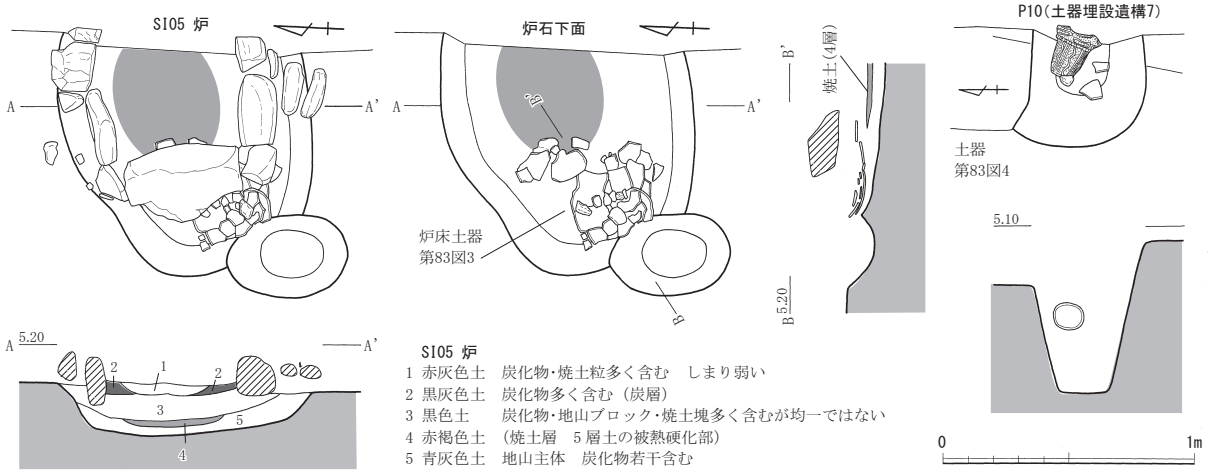
SI05（第14～16図）　位置はD6・7区を中心とする。東側は調査区外に延びる。

形態・規模　平面は楕円形を呈し、長軸方向はN11°Eとなると推測される。規模は現在値で長軸589cm、短軸377cm、深さ33cmを測る。床面は北西側に向かいやや高くなる。

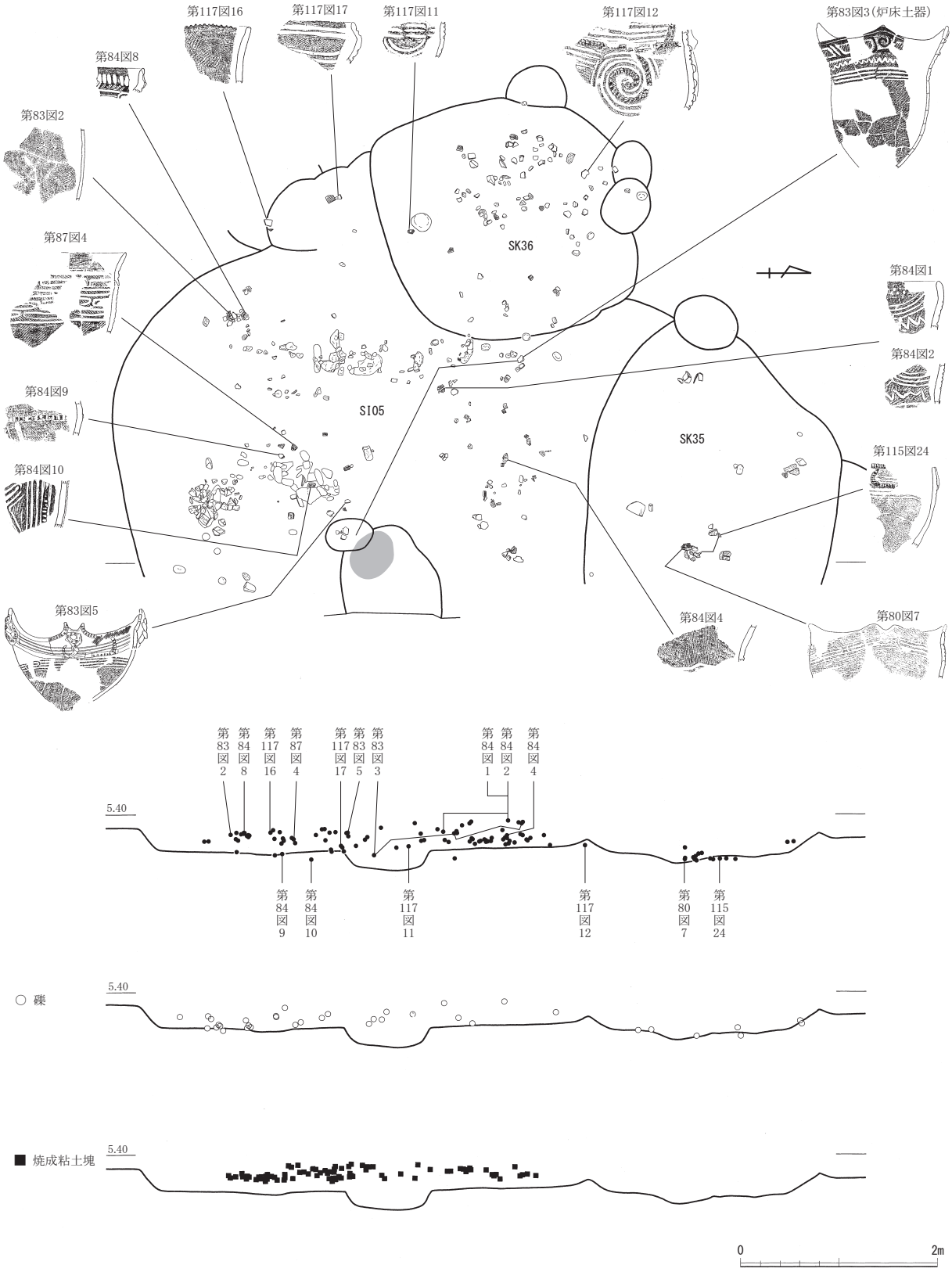
切り合い　SK35・36に切られる。

覆土　10層に分層した。質・色調などから上層（１～４層）・中層（５～８層）・下層（９・10層）に大別できる。中層は主に住居南東側で堆積する。

炉（第15図）　床面東寄りで方形石囲炉を１基検出した。東側は調査区外に位置する。炉石は炉穴内に設置される。石囲部は南西側の短辺に大形の礫を１点配置し、両長辺に複数の円柱状や方柱状のやや小形の礫を列状に並べて配置する。両隅角には立石状の礫は認められない。その他、石囲南側で並列する細長い棒状礫を２点検出した。住居覆土中での検出であり、石囲部に付随したものかは不明である。炉穴は石囲部と一致せず、平面が隅丸方形を呈し、規模が現在値で長軸92cm、幅101cm、深さ19cmを測る。覆土は上層の炉石寄りに炭層（２層）が部分的に堆積するが、直下には被熱硬化部は確認できなかった。中層（３層）は人為堆積土であり、上面に炉石が設置される。下層は炉床と考えられる人為堆積土（５層）とその被熱硬化部（４層）となる。石囲部南西側の大形炉石の直下で、内面を上向きに敷かれた状態の有文深鉢１個体の破片（第83図３）とその西側で浅い小ピットを検出した。これらは炉移設前の炉床土器と炉石抜跡であり、炉床土器を埋め置いて、炉を移設したと推測される。炉穴の平面や覆土には切り合いが認められない点や炉床面には大きな高低差がない点から、移設としては小規模であり、炉中心部の移動程度と判断される。また、上層の炭層（２層）と下層の被熱硬化部（４層）の間には間層（３層）が存在する。検出した炉石は２層土上面に設置されることから、４層の被熱硬化部形成時の炉石ではないことがわかる。４層形成時における炉石の有無は不明であるが、前述の移設とは異なる炉石再配置を伴う炉床のかさ上げとして推測できる。以上から、炉の改修は埋土による地床（４・５層）→石囲土器



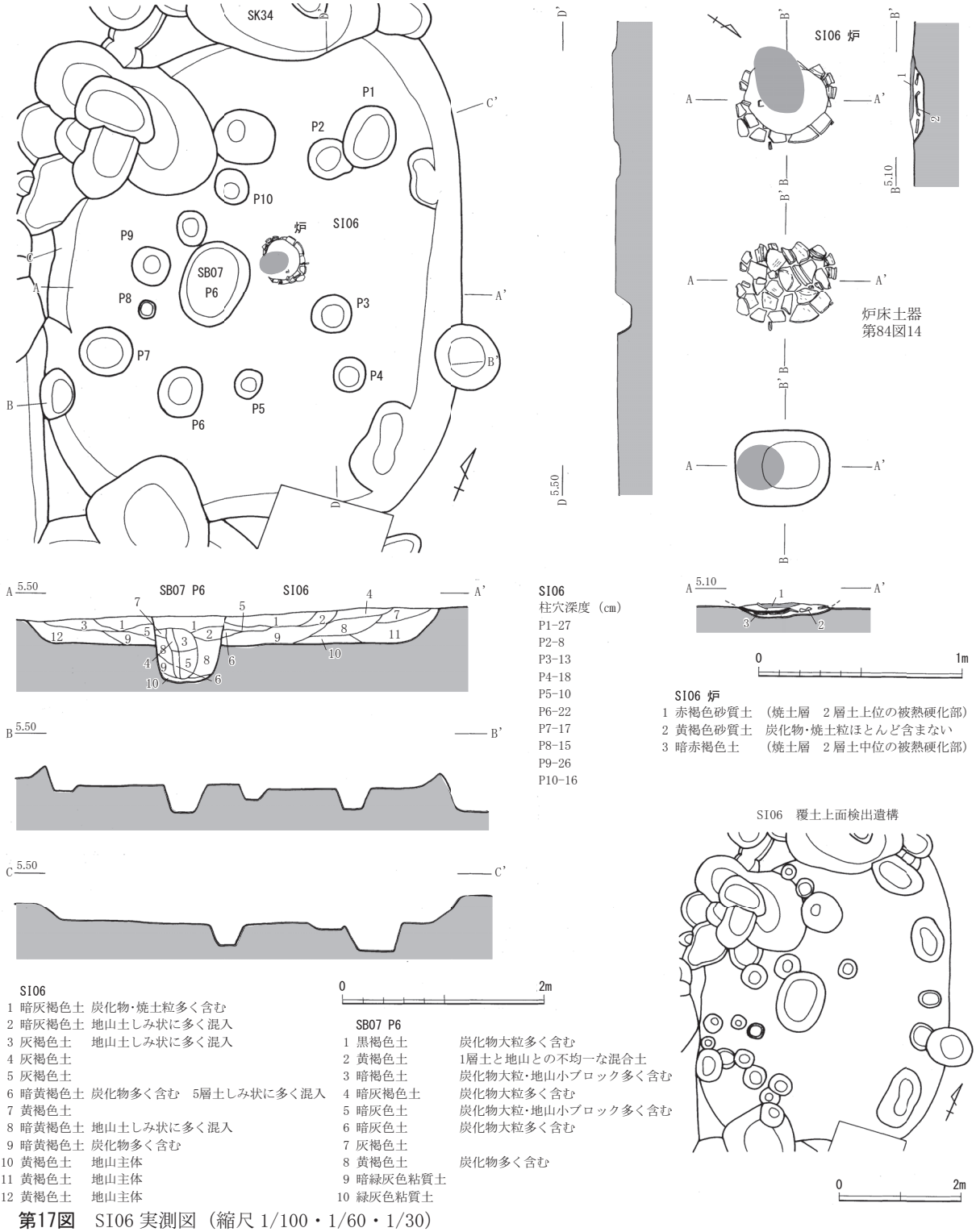
第15図　SI05 炉・柱穴実測図（縮尺 1/30）



第16図　SI05 遺物出土状況図（縮尺 1/60）

→埋土（３層）による炉床のかさ上げと炉石再配置の最低２回が想定される。なお、石囲下部の炉床土器（第83図３）は住居覆土の土器片と接合した（第16図）。

柱穴　15基（P1～15）を検出した。規模により大型（P1・3・7・9・11・12）、小型（P2・4～6・8・



第17図　SI06 実測図（縮尺 1/100・1/60・1/30）

10・13～15）に大別できる。P1を除く大型柱穴の配置形は多角形を呈す。P10からは略完形の土器（第83図４）が横位で出土した（第15図）。柱材抜き取り後の埋置が想定されることから、土器埋設遺構７とした。土器は口縁部全周と底部中央を欠損する。人為的な打ち欠きの可能性が高い。

遺物出土状況（第16図）　遺物量は比較的多い。主に上層から中層にかけて出土した。土器・石器の他、三角錘形土製品（第161図12）や焼成粘土塊・獣骨片などがある。焼成粘土塊は住居南側で多量に出土した。拳大から人頭大を中心とし、最大の個体は長さ約 30cm、幅約 20cm、半乾燥重量で約３kg



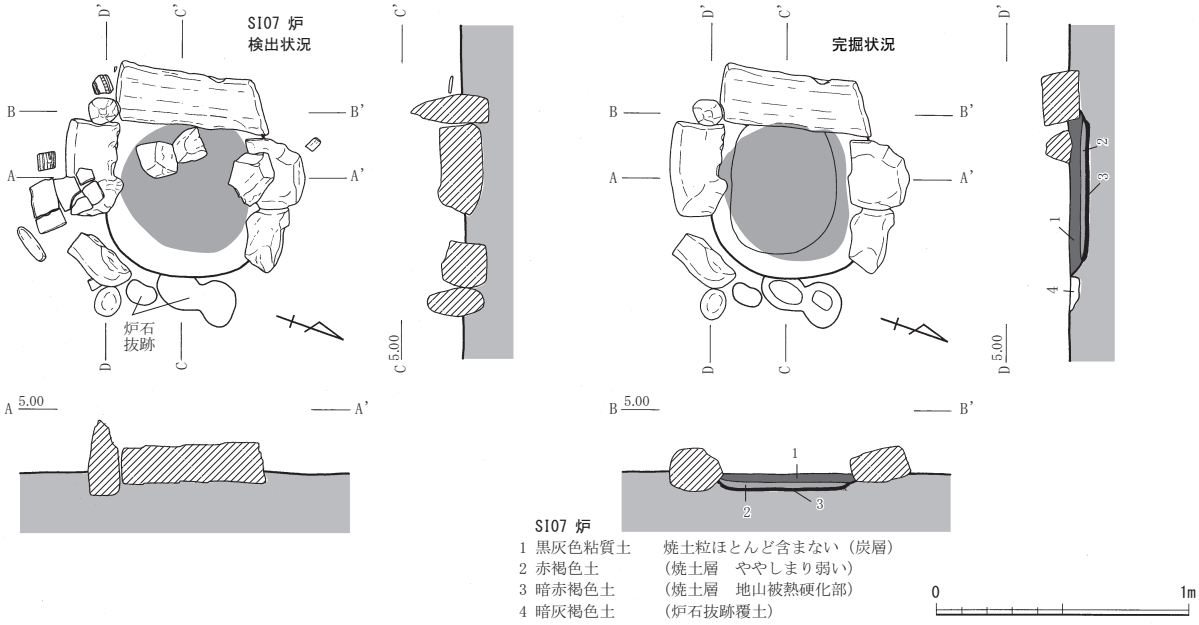
第18図　SI06 遺物出土状況図（縮尺 1/60）

を測る。覆土中には被熱の痕跡や顕著な炭化物の集中が認められないため、廃棄品と考えられる。

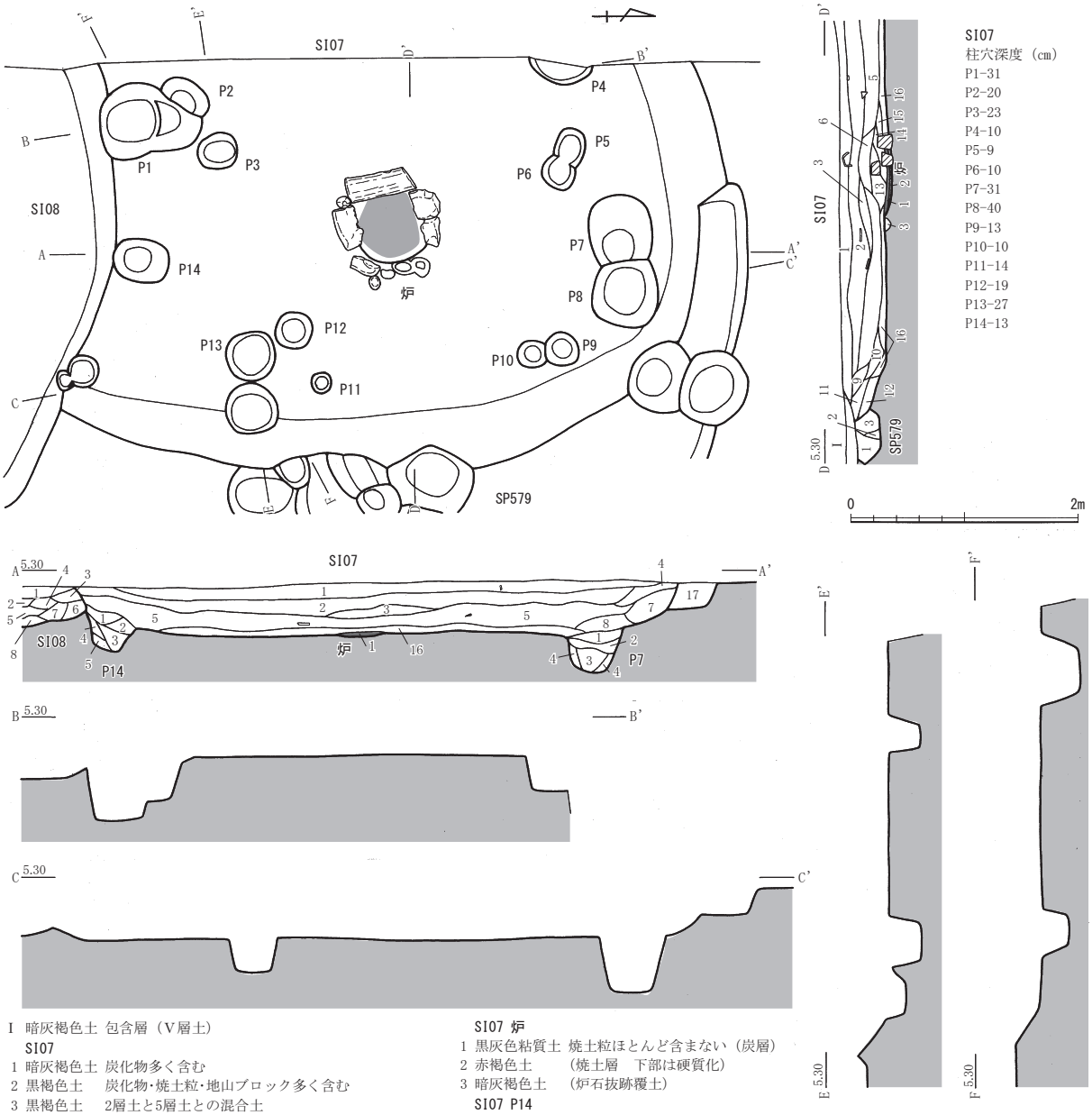
SI06（第17・18図）　位置はB・C6・7区を中心とする。

形態・規模　平面は楕円形を呈し、主軸方向はN20°Wとなる。規模は長軸479cm、短軸412cm、深さ36cmを測る。床面はほぼ平坦である。

切り合い　SI09、SB07、SK34に切られ、SI10と接する。



第19図　SI07 炉実測図（縮尺 1/30）



I　暗灰褐色土　包含層（Ⅴ層土）

SI07
1　暗灰褐色土　炭化物多く含む
2　黒褐色土　　炭化物･焼土粒･地山ブロック多く含む
3　黒褐色土　　2層土と5層土との混合土
4　暗褐色土　　炭化物多く含む
5　黒灰色土　　炭化物大粒･焼土粒多く含む
6　青灰色土　　炭化物多く含む　砂性･しまり強い
7　暗青灰色土　地山主体（壁崩壊土）
8　黒褐色土　　地山しみ状に多く混入
9　暗黄褐色土　5層土と地山との不均一な混合土
10　暗青灰色土　炭化物多く含む　5層土と青灰色土との均一な混合土
11　暗黄褐色土
12　暗青灰色土　炭化物多く含む
13　暗灰色土　　焼土粒多く含む　粘性強い
14　暗青灰色土
15　暗青灰色土　焼土粒多く含む　地山と5層土との混合土
16　黄褐色土　　地山主体（壁崩壊土）
17　暗黄褐色土

SI07 炉
1　黒灰色粘質土　焼土粒ほとんど含まない（炭層）
2　赤褐色土　　（焼土層　下部は硬質化）
3　暗灰褐色土　（炉石抜跡覆土）

SI07 P14
1　青灰色土　　炭化物･SI07の5層土ブロック多く含む
2　黒褐色土　　炭化物多く含む
3　青灰色土　　4層土しみ状に多く混入
4　暗灰色土
5　青灰色土

SI07 P7
1　暗青灰色土　炭化物･SI07の5層土ブロック多く含む
2　黒褐色土　　炭化物･地山小ブロック多く含む
3　暗青灰色土
4　青灰色土　　地山主体

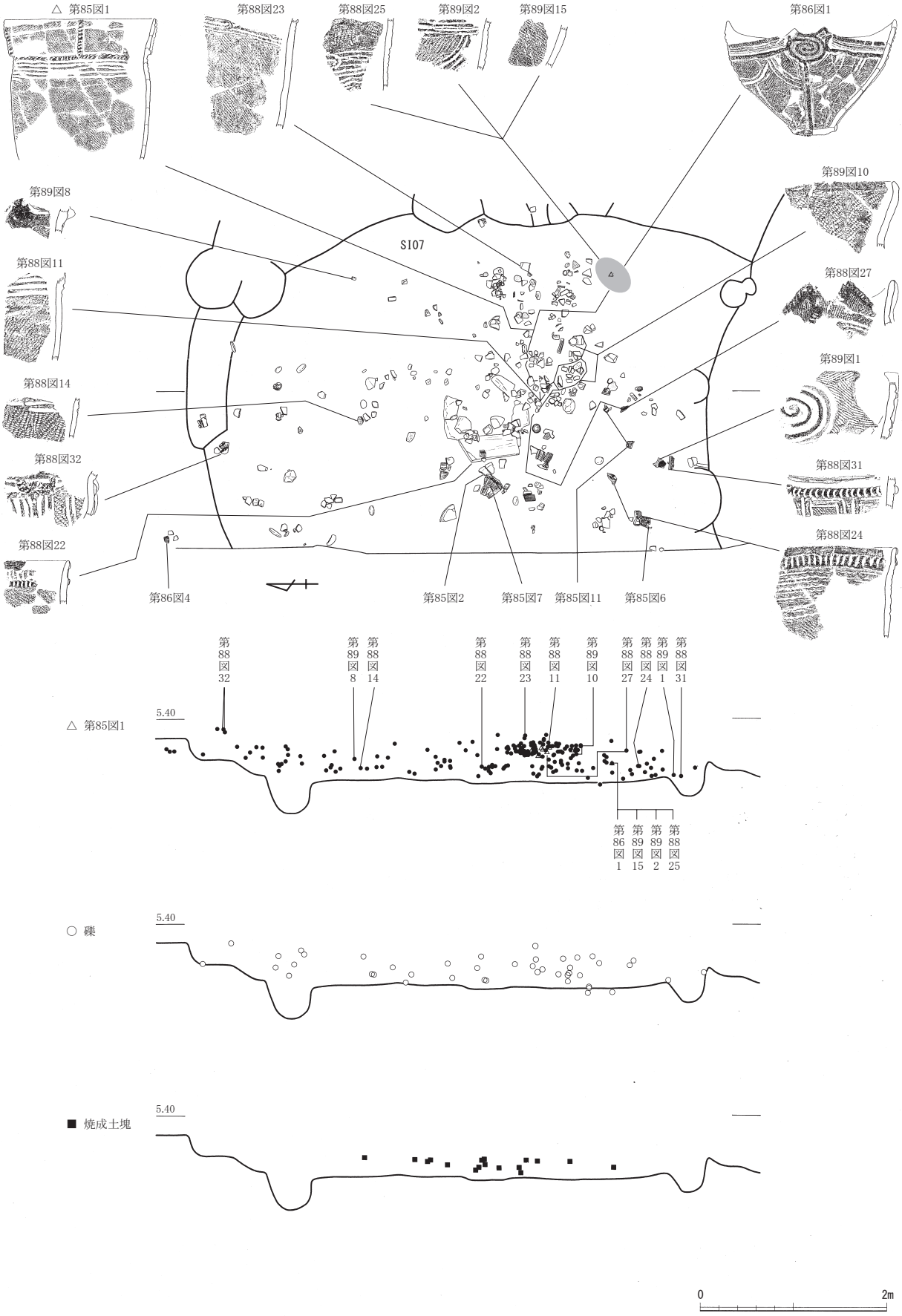
SP579
1　暗黄褐色土
2　暗黄褐色土　3層土しみ状に多く混入
3　暗褐色土

SI08
1　暗灰褐色粘質土
2　暗褐色土
3　暗褐色土　　炭化物多く含む
4　暗黄褐色土　地山しみ状に多く混入
5　暗青灰色土　炭化物多く含む
　　地山しみ状に多く混入
6　暗青灰色土　しみ状の地山多く含む
7　暗灰色土　　地山ブロック多く含む
8　暗黄褐色土　地山主体

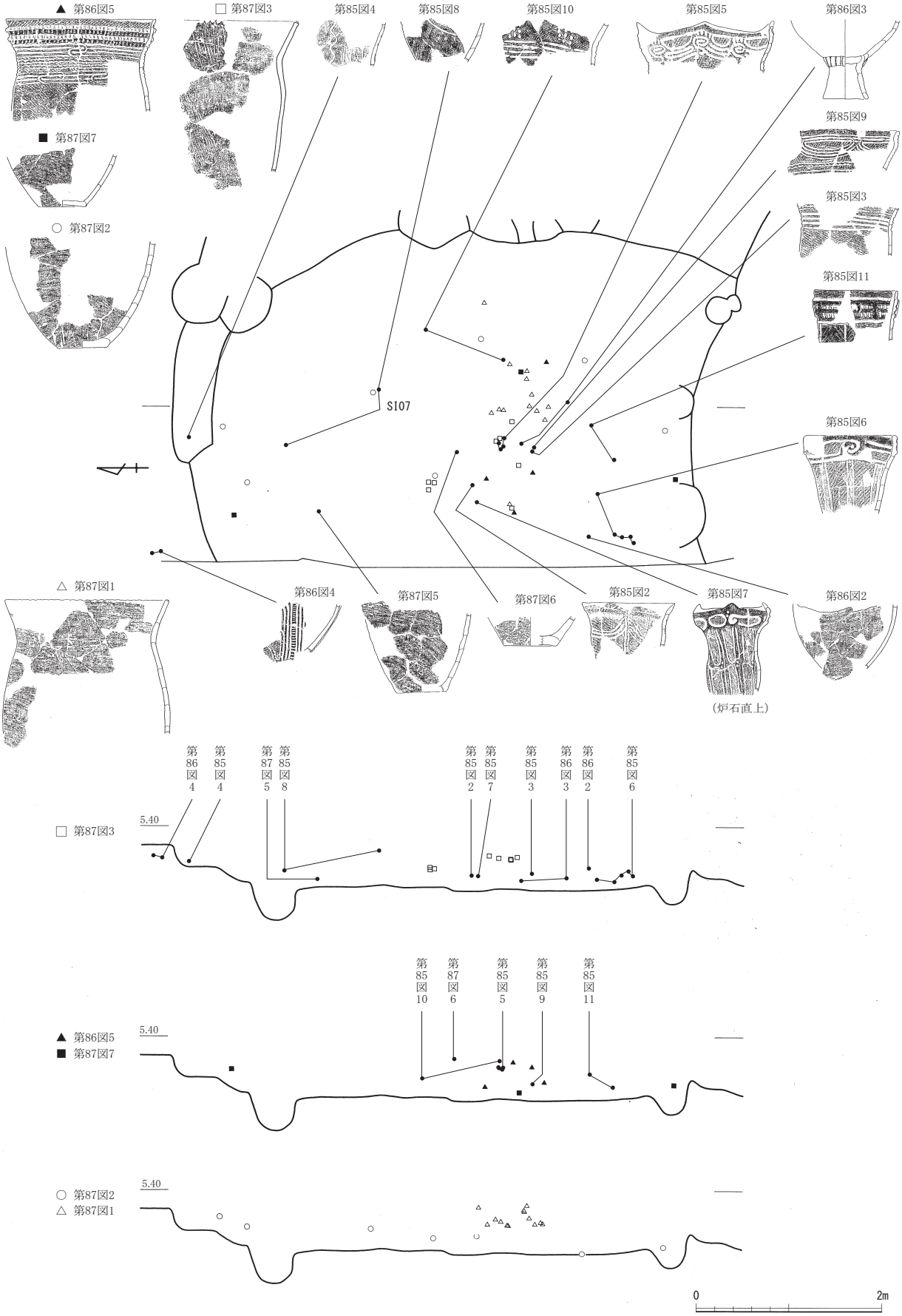
第20図　SI07 実測図（縮尺 1/60）

覆土　Ⅵ層土を基本とする。12層に分層した。主に東側から細かな単位で堆積する。

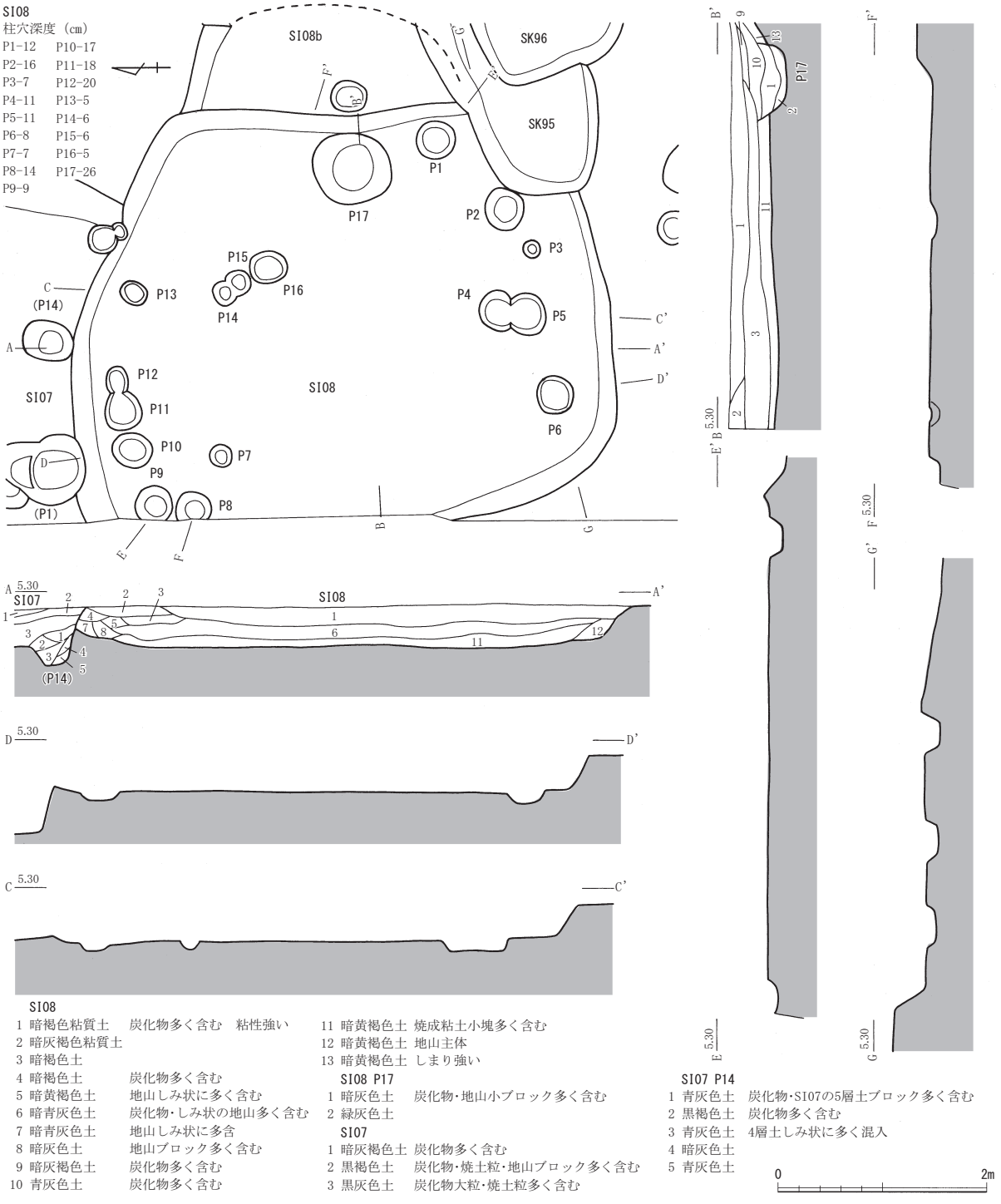
炉　床面中央やや東寄りで土器敷炉を１基検出した。炉穴は平面が隅丸長方形を呈し、規模が長軸45cm、短軸37cm、深さ８cmを測る。炉床土器には略完形の浅鉢１個体（第84図14）を使用する。土器外面を上方に向け、おおむね底部片は中心部に、口縁部片は外側に配置する。土器敷部の上下でⅥ層土とは異なる砂質土（２層）が堆積し、それぞれに被熱硬化部（１・３層）を検出した。上下で被熱硬化部



第21図　SI07 遺物出土状況図１（縮尺 1/60）



第22図　SI07 遺物出土状況図２（縮尺 1/60）



第23図　SI08 実測図（縮尺 1/60）

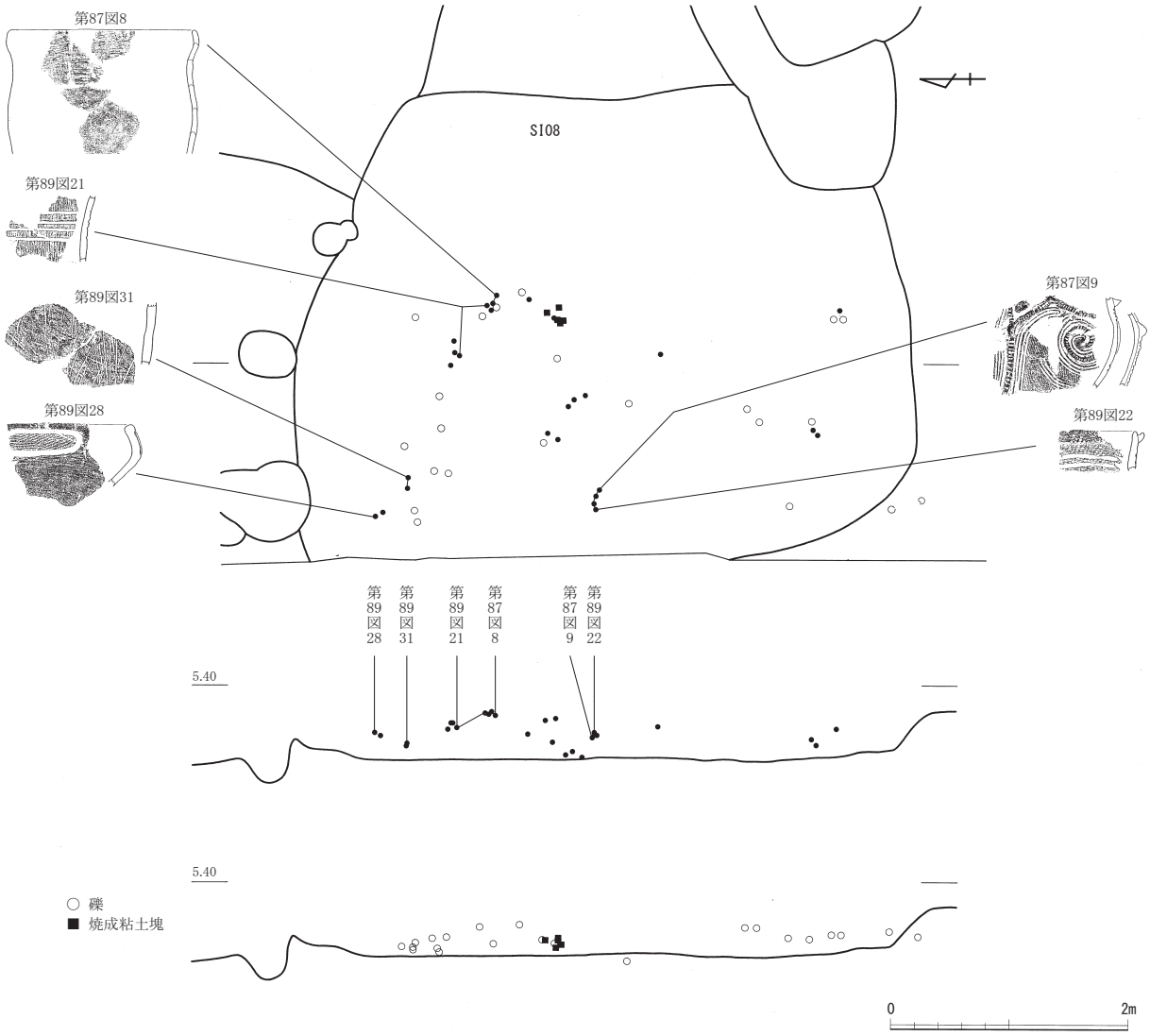
の範囲が異なる。このことから、炉のかさ上げは最低１回行われ、炉床は初段階が土器敷で、次段階がそれを埋めて埋土による地床としたと推定される。

柱穴　10基（P1～10）検出した。床面中央寄りに分布する傾向がうかがえる。配置形には住居長軸と異なるが、P1またはP2－P6 を中心軸とし、P9－P5とP10－P3 が対応する長六角形が推測される。

遺物出土状況　（第18図）遺物量は比較的少ない。礫は主に覆土下層から出土した。

SI07（第19～22図）位置はA6区を中心とする。東側は調査区外に伸びる。

形態・規模　平面は隅丸多角形を呈し、主軸方向は N3°W となると推測される。規模は現在値で長



第24図　SI08 遺物出土状況図（縮尺 1/60）

軸558cm、短軸364cm、深さ44cmを測る。床面はほぼ平坦である。

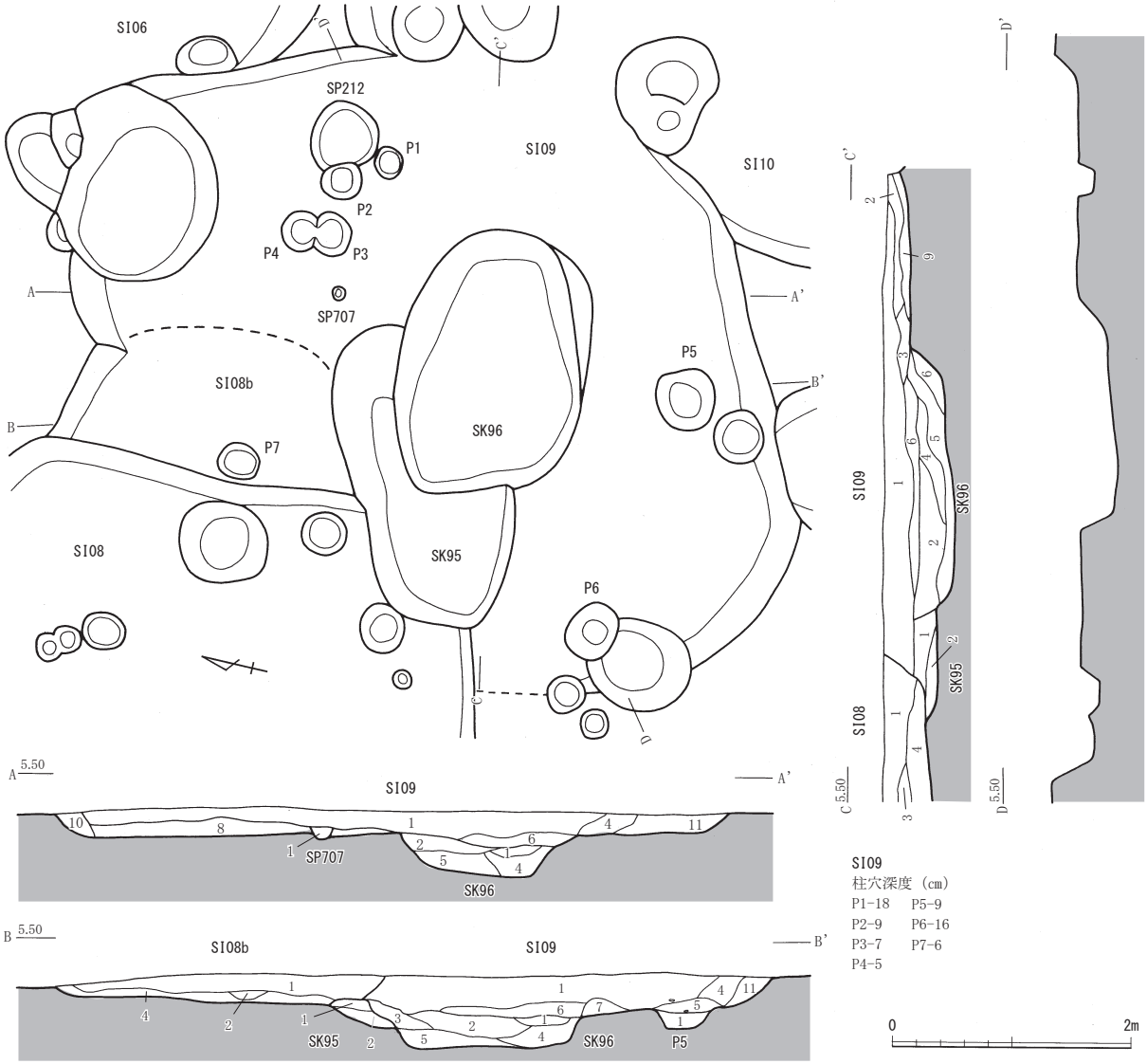
切り合い　SI08を切り、SK23に切られる。

覆土　17層に分層した。質・色調などから上層（１～３層）・中層（４～13層）・下層（14～16層）に大別できる。壁崩壊土を除き、広範囲で堆積するが、炉直上では細かな単位の堆積が認められる。

炉（第19図）　床面中央で方形石囲炉を１基検出した。炉石は炉穴肩部から縁辺部にかけて住居床面に直置き、あるいは接地部を掘削して設置される。石囲部は東辺の一部を欠失するが、炉石抜跡（４層）を確認した。南西側の短辺に方柱状の大形礫を１点配置し、他の三辺に複数のやや小形の礫を列状に並べて配置する。南西・南東隅角部には立石状の棒状礫を配置する。石囲部の各辺は住居平面とおおむね平行する。炉穴は平面が隅丸長方形を呈し、規模が長軸70cm、短軸59cm、深さ６cmを測る。覆土は炭層（１層）と焼土層（２層）のみであり、炉穴底面のⅥ層土がほぼ全域に被熱硬化部（３層）となる。かさ上げは行われていないと判断される。

柱穴　14基（P1～14）検出した。配置形はP7とP8・P12とP13・P1 ～ P3・P4をそれぞれ隅角となる長方形が推測される。P14を含めれば長五角形を呈す。隅角の柱穴には切り合いが認められる。

遺物出土状況（第21・22図）　遺物量は比較的多い。遺物分布では住居中央の南東寄りに集中する傾



SI09
1 暗灰褐色粘質土 炭化物多く含む
2 暗黄褐色土
3 暗黄褐色土
4 暗灰褐色土　地山しみ状に多く混入
5 暗黄褐色土　(P1と関連する土層の可能性あり)
6 黄褐色土　暗褐色土しみ状に多く混入 砂性強い
7 黄褐色土　砂性強い
8 暗黄褐色土　地山主体 1層土ブロック多含
9 黄褐色土　地山主体（壁崩壊土）
10 暗黄褐色土　地山主体
11 暗黄褐色土　地山主体（壁崩壊土）

SK96
1 暗灰色土　炭化物･地山ブロック多く含む
2 暗灰色土
3 青灰色土　(SI09の６層土に近似する)
4 暗灰色粘質土　炭化物･地山ブロック多く含む
5 暗青灰色粘質土 地山主体　暗灰色土ブロック多く含む
6 青灰色土　地山主体（壁崩壊土）

SK95
1 暗青灰色土
2 青灰色土　暗灰色土しみ状に多く混入

SP707
1 暗褐色土

SI09 P5
1 暗灰色土

SI08b
1 暗褐色粘質土 炭化物多く含む 粘性強い
2 暗黄褐色土　炭化物多く含む
　地山しみ状に多く混入
3 暗褐色粘質土（ピット覆土か）
4 暗黄褐色土　地山主体

第25図　SI09 実測図（縮尺 1/60）

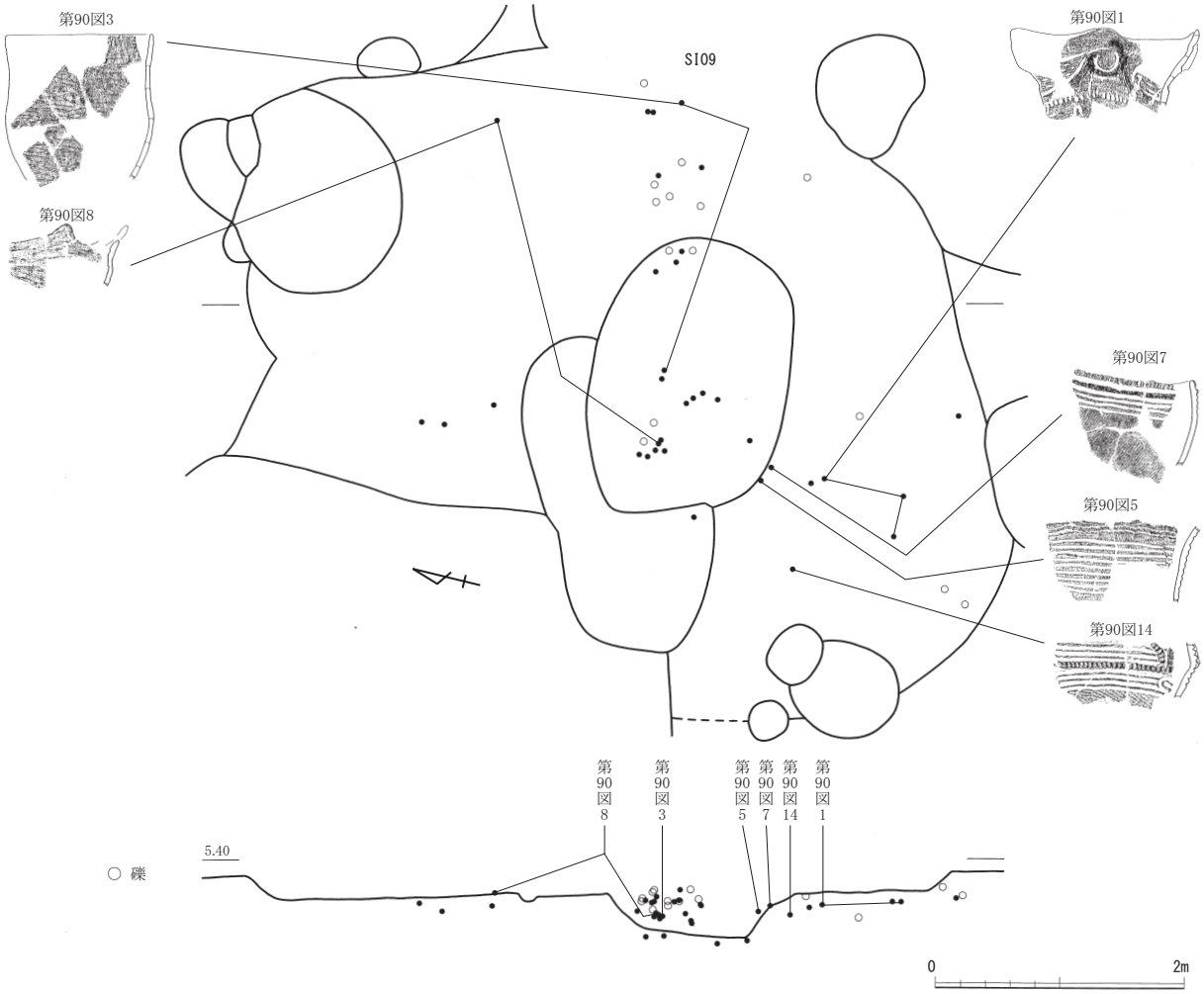
向が認められる。主に覆土上層から中層にかけて、土器や石器の他、拳大程度の焼成粘土塊が多量に出土した。器形復元土器は各個でまとまる例と分散する例が認められる。床面直上の遺物はほとんどないが、炉石上面と同じ高さで、器形復元個体（第85図２・６・７など）がやや多く認められる。

SI08（第23・24図）　位置はA7区を中心とする。西側の一部が調査区外に延びる。

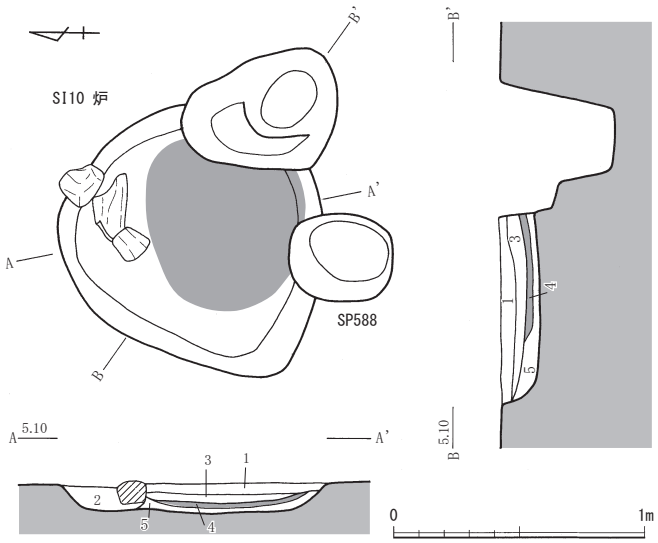
形態・規模　平面は不整隅丸五角形を呈し、主軸方向はN5°Wとなると推測される。規模は現在値で長軸521cm、短軸402cm、深さ43cmを測る。床面は東側に向かいやや高くなる。

切り合い　SI09を切り、SI07に切られる。

覆土　Ⅵ層土を基本とする。12層に分層した。壁面周辺には細かな単位の堆積が認められる。



第26図　SI09 遺物出土状況図（縮尺 1/60）



SI10 炉
1 暗黄褐色土　炭化物多く含む（炉廃棄後堆積土）
2 黄褐色砂質土　地山ブロック多く含む
3 暗灰色粘質土　炭化物多く含む
4 赤褐色土　（焼土層 5 層土の被熱硬化部）
5 青灰色粘質土　地山主体

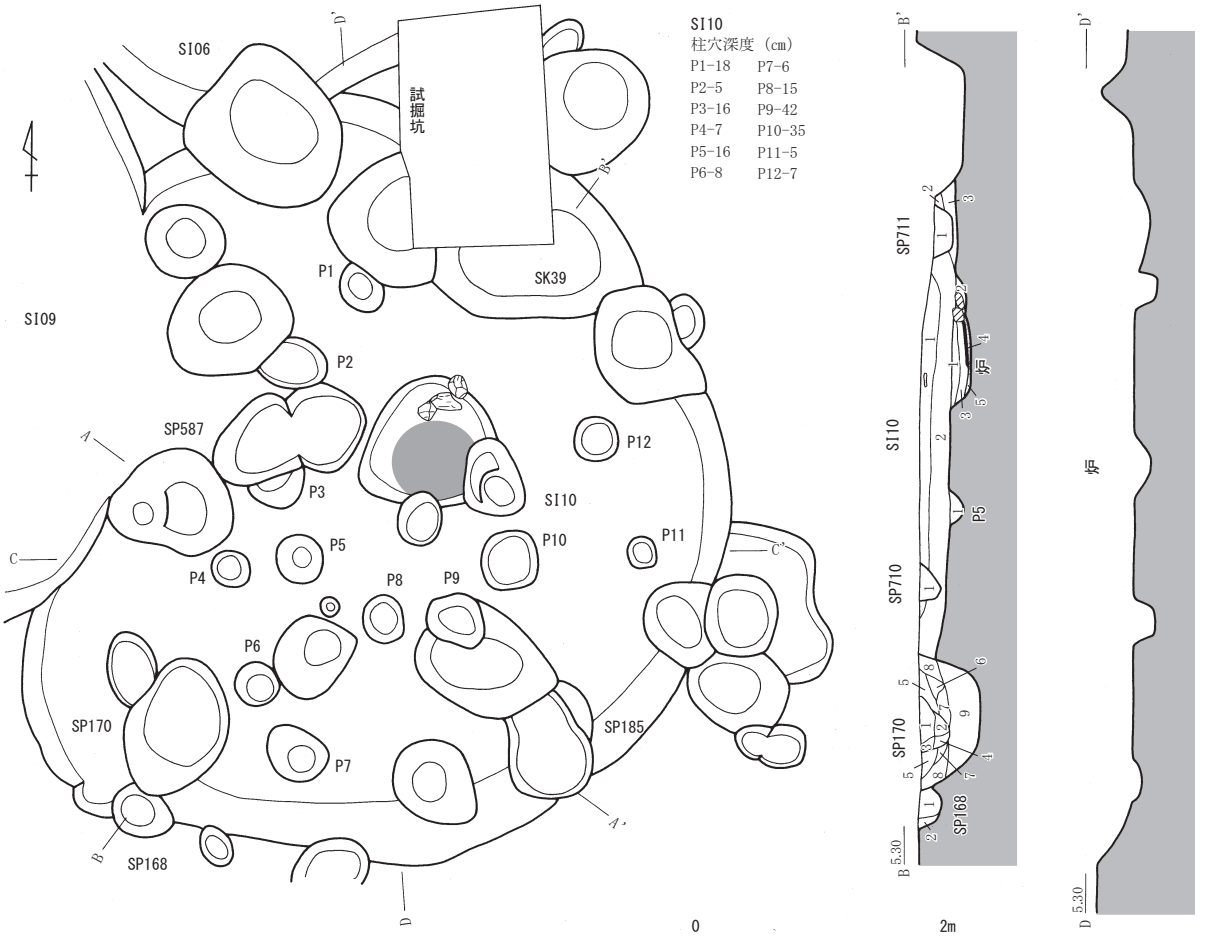
第27図　SI10 炉実測図（縮尺 1/30）

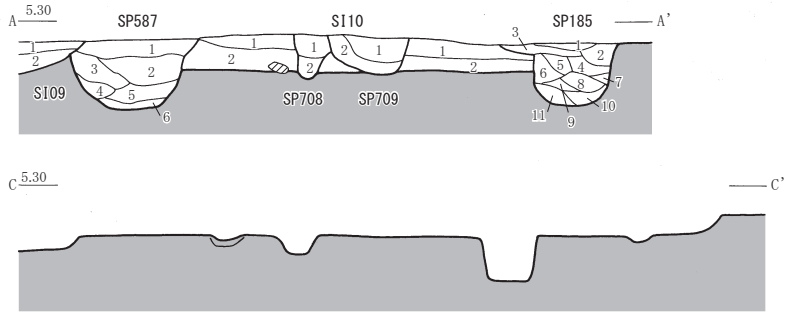
炉　検出できなかった。

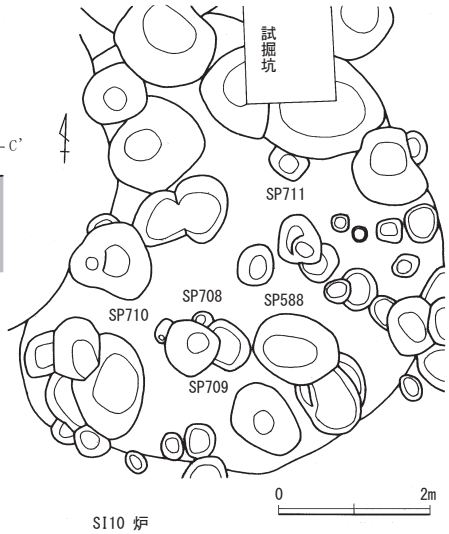
柱穴　17基（P1～17）検出した。P17以外はすべて小規模である。P14～16 以外は、北側・南側壁寄りの分布が認められる。なお、P17は住居覆土の堆積中に構築されており、本住居に帰属しない可能性がある。

遺物出土状況（第24図）　遺物量は比較的少ない。土器は上層、礫は下層に分布する傾向がうかがえる。

関連遺構　SI09との切り合い部で、本住居と一連の覆土が堆積し、切り合いが認められない遺構（SI08b）を検出した。平面は本住居から東側に半円状に張り出す形状となる。床面は本住居より15cm程度高く、SI09と同程度となる。類例にSI01bがある。







SI10
1 暗褐色土
2 暗黄褐色土　地山土と1層土との不均一な混合土
3 青灰色土　しまり強い

SP709
1 黒褐色土　炭化物多く含む
2 暗褐色土　炭化物･地山ブロック多く含む

SP708
1 黒褐色土　炭化物多く含む
2 暗褐色土　炭化物多く含む

SP185
1 暗褐色土
2 暗褐色土　炭化物･地山ブロック多く含む
3 暗褐色土　炭化物･地山ブロック多く含む
4 褐色土　炭化物多く含む
　地山土しみ状に多く混入
5 褐色土
6 暗黄褐色土　炭化物･地山ブロック多く含む
7 暗黄褐色土
8 暗灰褐色土　炭化物･地山ブロック多く含む
9 暗青灰色土
10 暗青灰色土　炭化物･地山ブロック多く含む
11 青灰色土　地山主体

SP587
1 暗褐色土　炭化物多く含む
　地山土しみ状に多く混入
2 暗青灰色土　地山ブロック多く含む
3 暗青灰色土　地山土しみ状に多く混入
4 青灰色粘質土　地山主体
5 暗青灰色粘質土　炭化物多く含む
6 青灰色粘質土　地山主体

SI09
1 暗黄褐色土
2 黄褐色土　地山主体（壁崩壊土）

SP168
1 暗黄褐色土
2 黄褐色土　地山主体

SP170
1 黒褐色土　炭化物多く含む
2 黒灰褐色土　炭化物多く含む
3 黒褐色土　炭化物多く含む
4 黒褐色土　地山ブロック多く含む
5 黒褐色土　炭化物多く含む
6 黒灰褐色土　炭化物･地山ブロック多く含む
7 暗褐色土　炭化物･焼土粒多く含む
8 暗褐色土　炭化物･地山ブロック多く含む
9 灰褐色土　炭化物多く含む

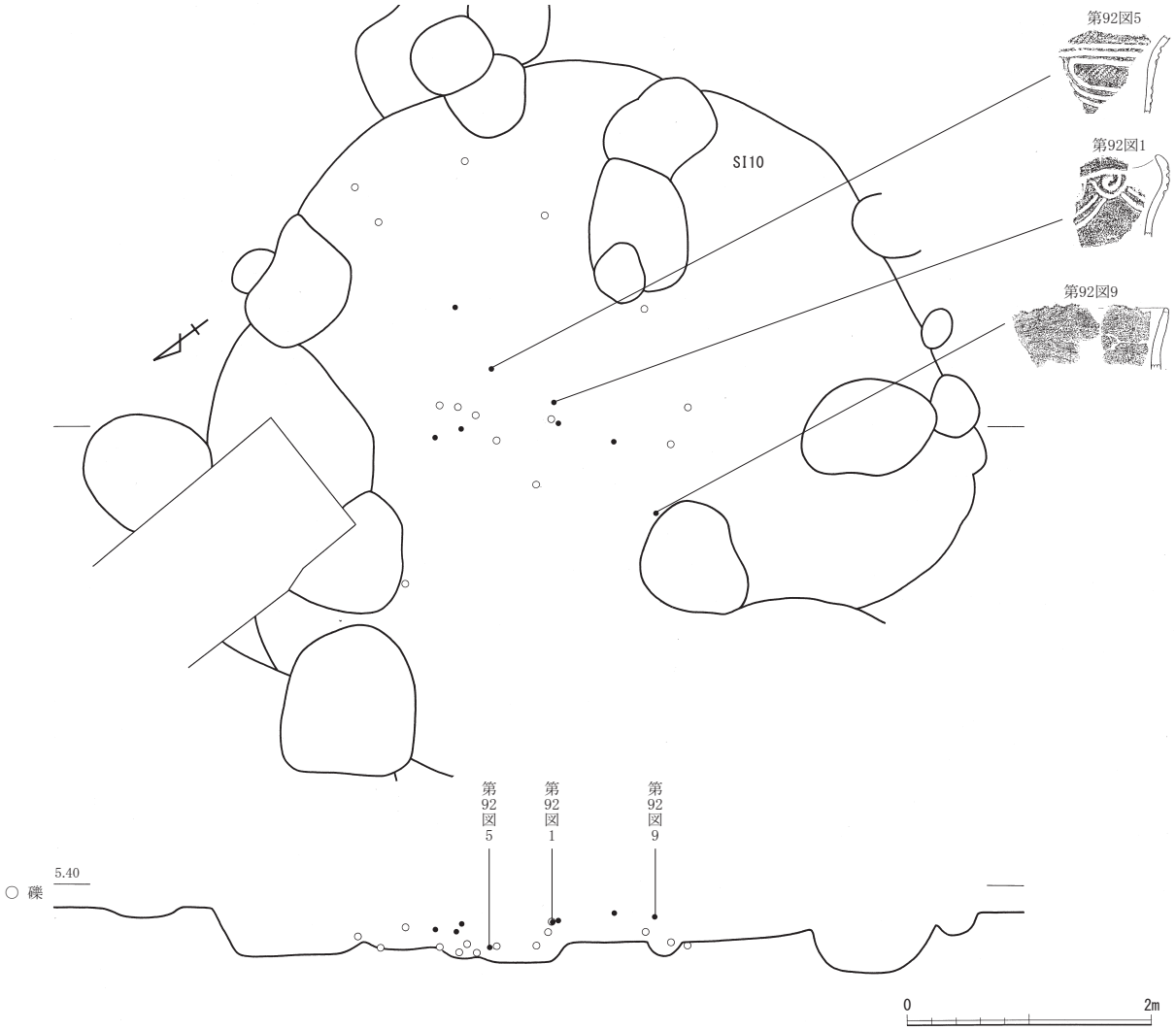
SI10 炉
1 暗黄褐色土　炭化物多く含む(炉廃棄後堆積土)
2 黄褐色砂質土　地山ブロック多く含む
3 暗灰色粘質土　炭化物多く含む
4 赤褐色土　（焼土層）
5 青灰色粘質土　地山主体（炉覆土）

SI10 P5
1 暗青灰色土

SP710
1 暗褐色土　炭化物多く含む

SP711
2 暗褐色土

第28図　SI10 実測図（縮尺 1/100・1/60）



第29図　SI10 遺物出土状況図（縮尺 1/60）

SI09（第25・26図）　位置はB7・8区を中心とする。

形態・規模　平面は隅丸多角形を呈し、主軸方向はN61°Eとなると推測される。規模は現在値で長軸581cm、短軸559cm、深さ24cmを測る。床面は北東側がやや高くなる。

切り合い　SI06・10を切り、SI08、SK38・46に切られる。

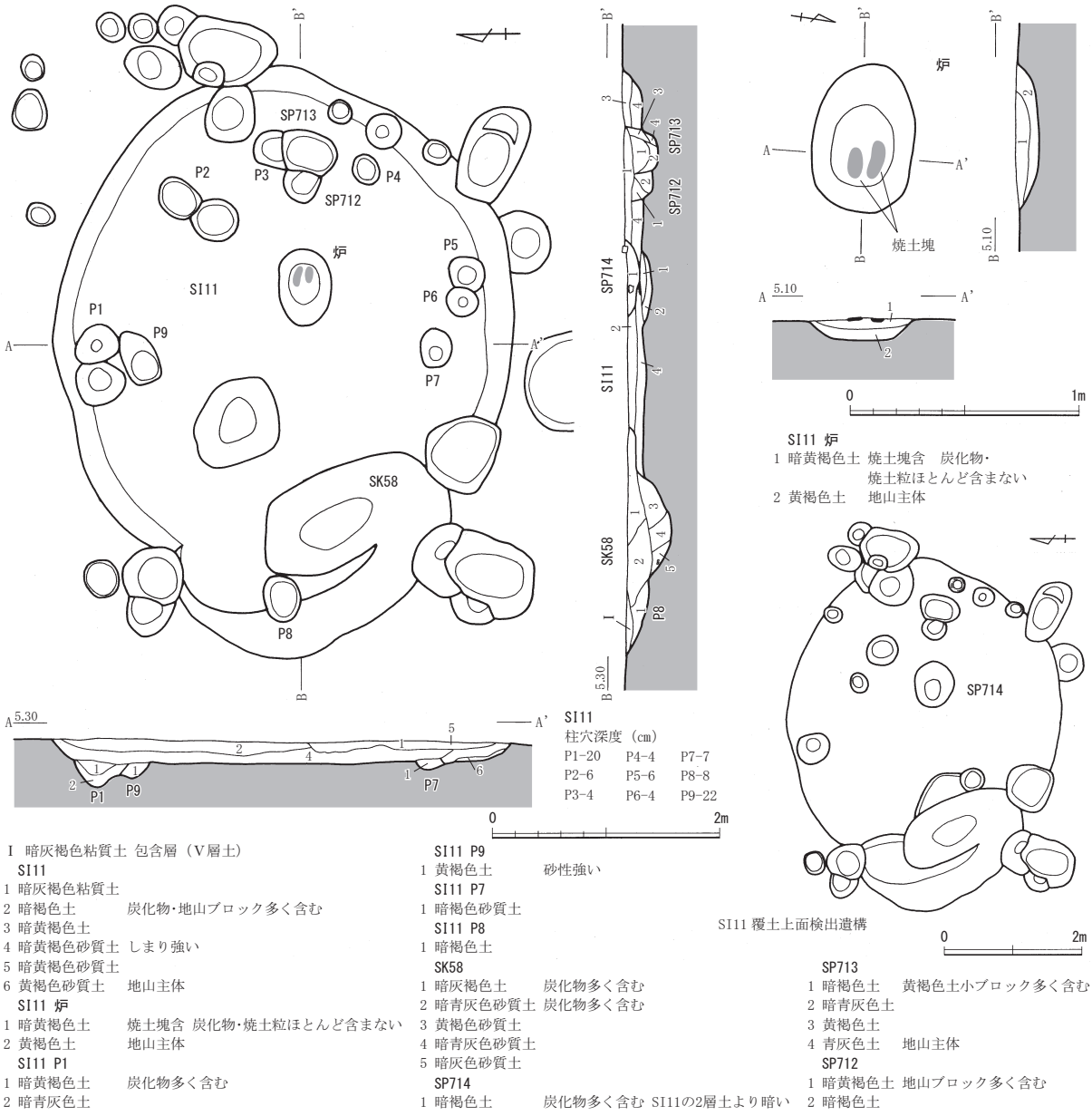
覆土　Ⅵ層土を基本とする。11層に分層した。

炉　検出できなかった。

柱穴　７基（P1～7）検出した。P7はSI08bに伴う可能性がある。配置形は住居長軸と異なるが、P1～4・P5・P6・P7をそれぞれ隅角となる長方形を呈すと推定される。

遺物出土状況（第26図）　遺物量は比較的少ない。遺物分布では住居南半部に集中する傾向がうかがえ、主に覆土下層から出土した。

関連遺構　床面中央で平面が隅丸長方形を呈す土坑を２基（SK95・96）検出した。切り合いはSK96がSK95を切る。覆土は住居とは明確に異なる。住居と土坑の覆土には貼り床の痕跡がみとめられないため、本住居と並存あるいは廃棄直後に掘削といった時間的関係が推測される。なお、本土坑と住居の覆土出土土器が接合した事例（第26図）が認められる。



Ⅰ 暗灰褐色粘質土 包含層（Ⅴ層土）

SI11
1 暗灰褐色粘質土
2 暗褐色土　炭化物･地山ブロック多く含む
3 暗黄褐色土
4 暗黄褐色砂質土 しまり強い
5 暗黄褐色砂質土
6 黄褐色砂質土　地山主体

SI11 炉
1 暗黄褐色土　焼土塊含 炭化物･焼土粒ほとんど含まない
2 黄褐色土　地山主体

SI11 P1
1 暗黄褐色土　炭化物多く含む
2 暗青灰色土

SI11 P9
1 黄褐色土　砂性強い

SI11 P7
1 暗褐色砂質土

SI11 P8
1 暗褐色土

SK58
1 暗灰褐色土　炭化物多く含む
2 暗青灰色砂質土 炭化物多く含む
3 黄褐色砂質土
4 暗青灰色砂質土
5 暗灰色砂質土

SP714
1 暗褐色土　炭化物多く含む SI11の2層土より暗い

SP713
1 暗褐色土　黄褐色土小ブロック多く含む
2 暗青灰色土
3 黄褐色土
4 青灰色土　地山主体

SP712
1 暗黄褐色土 地山ブロック多く含む
2 暗褐色土

第30図　SI11 実測図（縮尺 1/100・1/60・1/30）

SI10（第27～29図）　位置はC8区を中心とする。

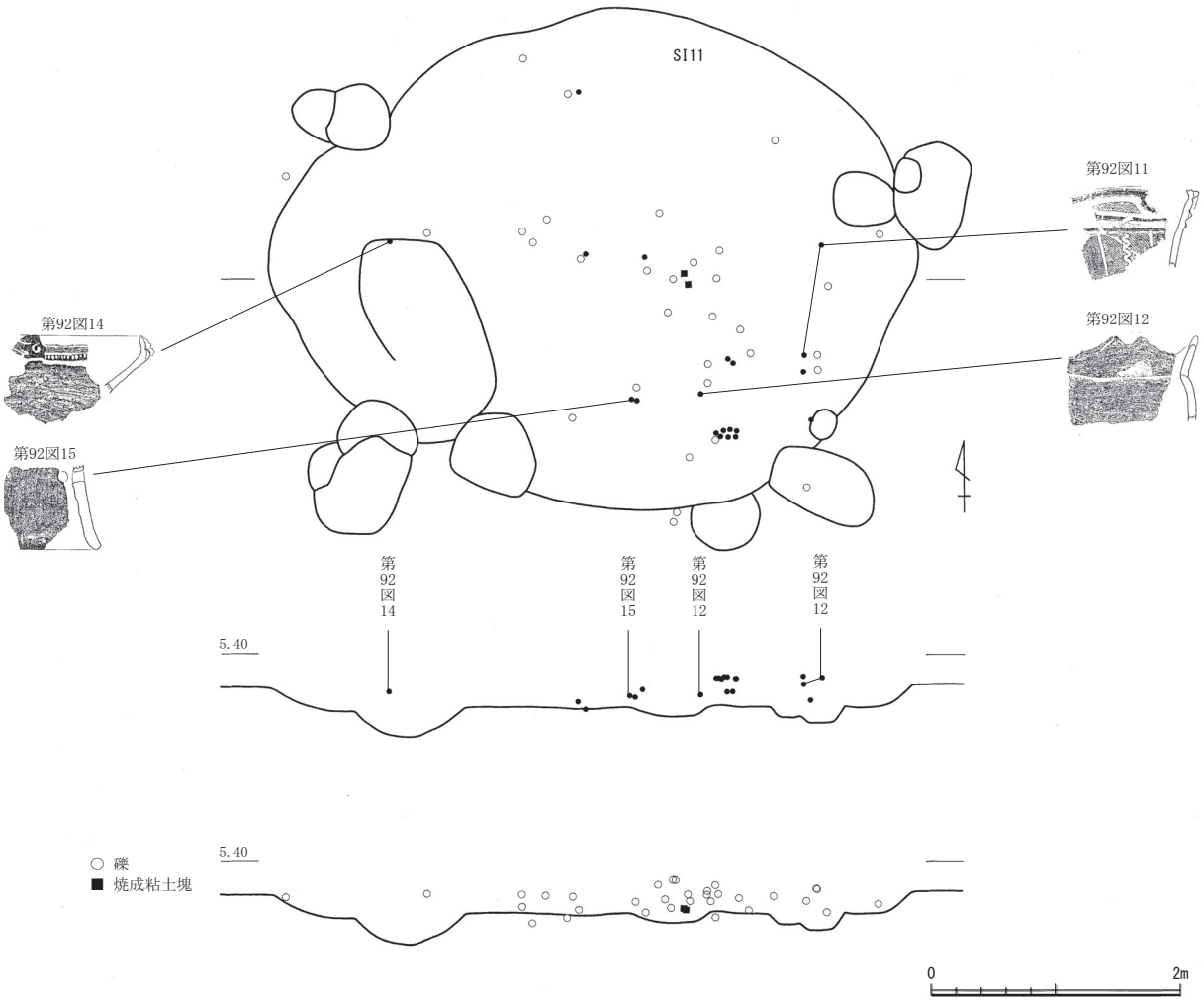
形態・規模　平面は不整楕円形を呈し、主軸方向はN56°Eとなると推測される。規模は現在値で長軸626cm、短軸525cm、深さ29cmを測る。床面は南東側に向かいやや高くなる。

切り合い　SI09、SB08、SK39に切られる。その他、本住居埋没後に柱穴やピットが多数構築される。

覆土　Ⅵ層土を基本とする。３層に分層した。

炉（第27図）　床面中央北東寄りで１基検出した。炉穴内部に炉石と考えられる焼礫３点が入ることから使用時は石囲炉であった可能性がある。炉穴は平面が不整楕円形を呈し、規模が長軸114cm、短軸103cm、深さ29cmを測る。覆土上層は炉廃棄後に堆積した土層（１層）と北西壁側には炉石抜跡に推測される部分的な堆積土（２層）となる。下層は炭化物を多く含む粘質土（３層）および人為堆積土（５層）とその被熱硬化部（４層）となる。かさ上げの痕跡は明確には認められない。

柱穴　12基（P1～12）検出した。床面中央寄りに分布する傾向が認められる。



第31図　SI11 遺物出土状況図（縮尺 1/60）

遺物出土状況（第29図）　遺物量は比較的少ない。遺物分布では住居中央部寄りの傾向がうかがえ、覆土上層から下層にかけて出土した。土器は上層、礫は下層に分布する傾向がうかがえる。

SI11（第30・31図）　位置はA9区を中心とする。

形態･規模　平面は楕円形を呈し、主軸方向はN85°Wとなる。規模は現在値で長軸379cm、短軸402cm、深さ16cmを測る。床面はほぼ平坦である。

切り合い　SK58に切られる。その他、本住居埋没後に柱穴やピットが多数構築される。

覆土　Ⅵ層土を基本とする。６層に分層した。

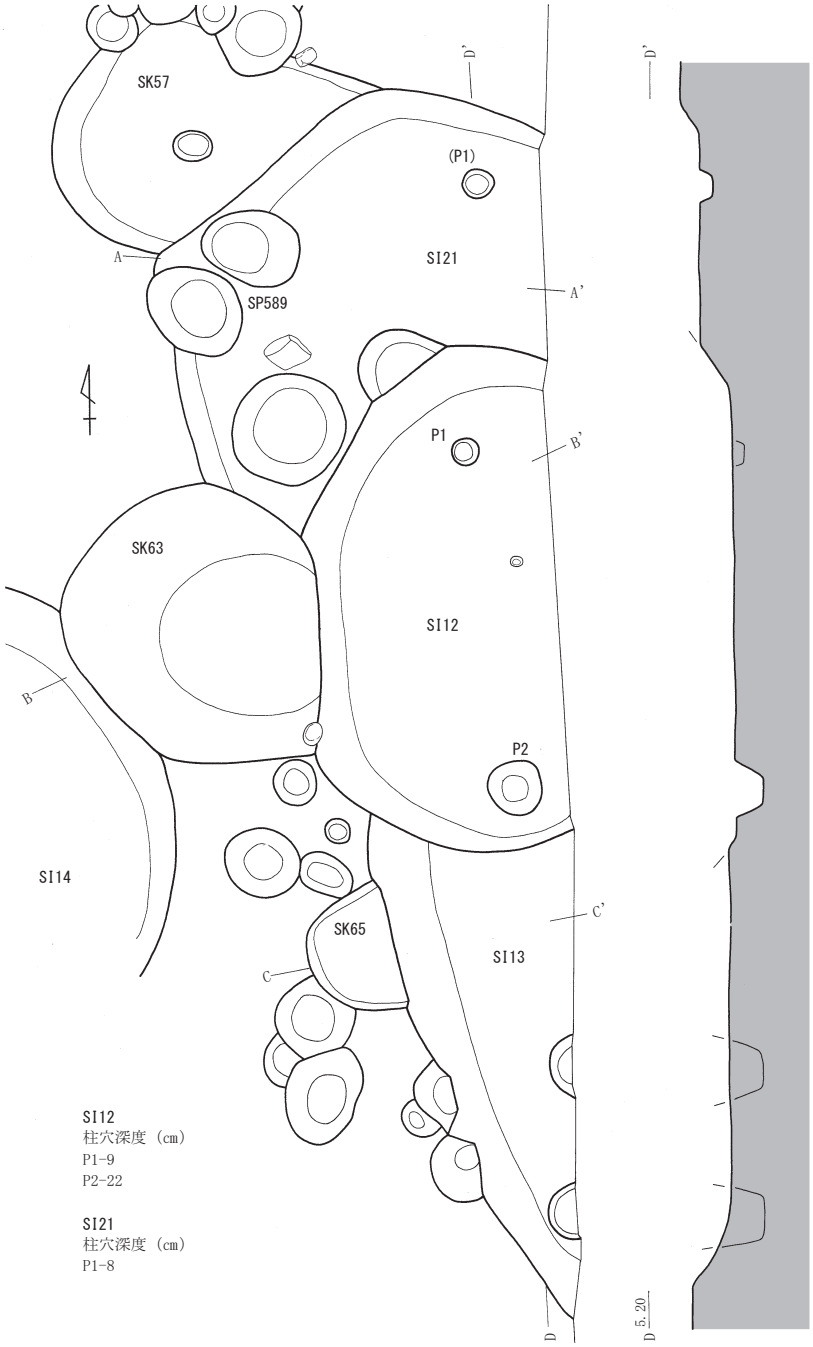
炉　床面北寄りで１基検出した。炉穴は平面が楕円形を呈し、規模が長軸65cm、短軸44cm、深さ11cmを測る。覆土中に炭層や被熱硬化部は確認できなかったが、最上面で焼土塊を２箇所検出した。この焼土塊が移動していないとすれば、住居床面とほぼ同じ高さで火床となるため、石囲部などの施設を有していた可能性がある。覆土が２層に分層できることから、かさ上げも推測されるが不明な点が多い。

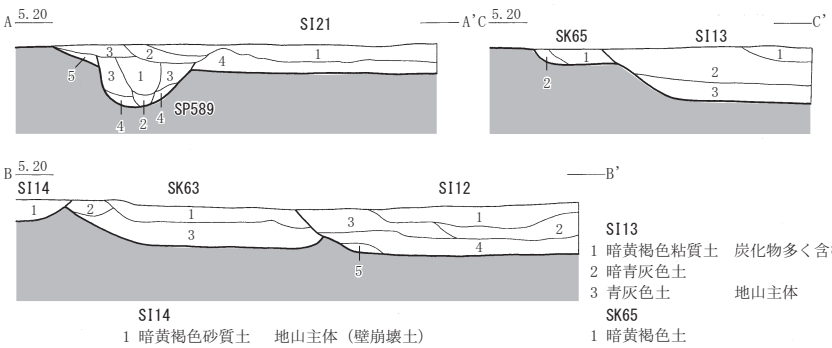
柱穴　９基（P1～9）検出した。壁面寄りに分布する傾向が認められる。

遺物出土状況（第31図）　遺物量は比較的少ない。遺物分布では住居南東側に集中する傾向がうかがえ、覆土上層から下層にかけて出土した。

SI12（第32図）　位置はD10区を中心とする。東側は調査区外に延びる。

形態・規模　平面は楕円形を呈し、主軸方向はN８°Wとなると推測される。規模は現在値で長軸408





SI14
1 暗黄褐色砂質土　地山主体（壁崩壊土）
SK63
1 暗黄褐色土　炭化物多く含む
2 暗黄褐色砂質土
3 青灰色土　地山主体 しまり強

SI13
1 暗黄褐色粘質土　炭化物多く含む
2 暗青灰色土
3 青灰色土　地山主体

SK65
1 暗黄褐色土
2 黄褐色土　地山主体

SI21
1 暗黄褐色粘質土　暗灰色土しみ状に多く混入
2 暗青灰色粘質土　炭化物多く含む しまり強い
3 暗黄褐色粘質土
4 暗青灰色粘質土
5 黄褐色土　地山主体（壁崩壊土）

SP589
1 暗灰色土　炭化物多く含む
2 緑灰色土　1層土しみ状に多く混入
3 暗緑灰色土
4 緑灰色土　地山主体

SI12
1 暗褐色粘質土　炭化物多く含む
2 暗灰色粘質土　炭化物多く含む
3 暗黄褐色土　炭化物多く含む 地山土しみ状に多く混入
4 暗青灰色粘質土
5 青灰色粘質土　地山主体

0　2m

第32図　SI12・13・21 実測図（縮尺 1/60）

切り合い　SI13・21、SK63を切る。

覆土　Ⅵ層土を基本とする。５層に分層した。

炉　確認できなかった。

柱穴　２基(P1～2)検出した。壁面寄りの分布が認められる。

遺物出土状況　出土量は比較的少ない。主に覆土上層から出土した。

SI13（第32図）　位置はD10・11区を中心とする。住居西側縁辺部のみ検出した。

形態・規模　平面形・主軸方向は不明である。深さは45cmを測る。

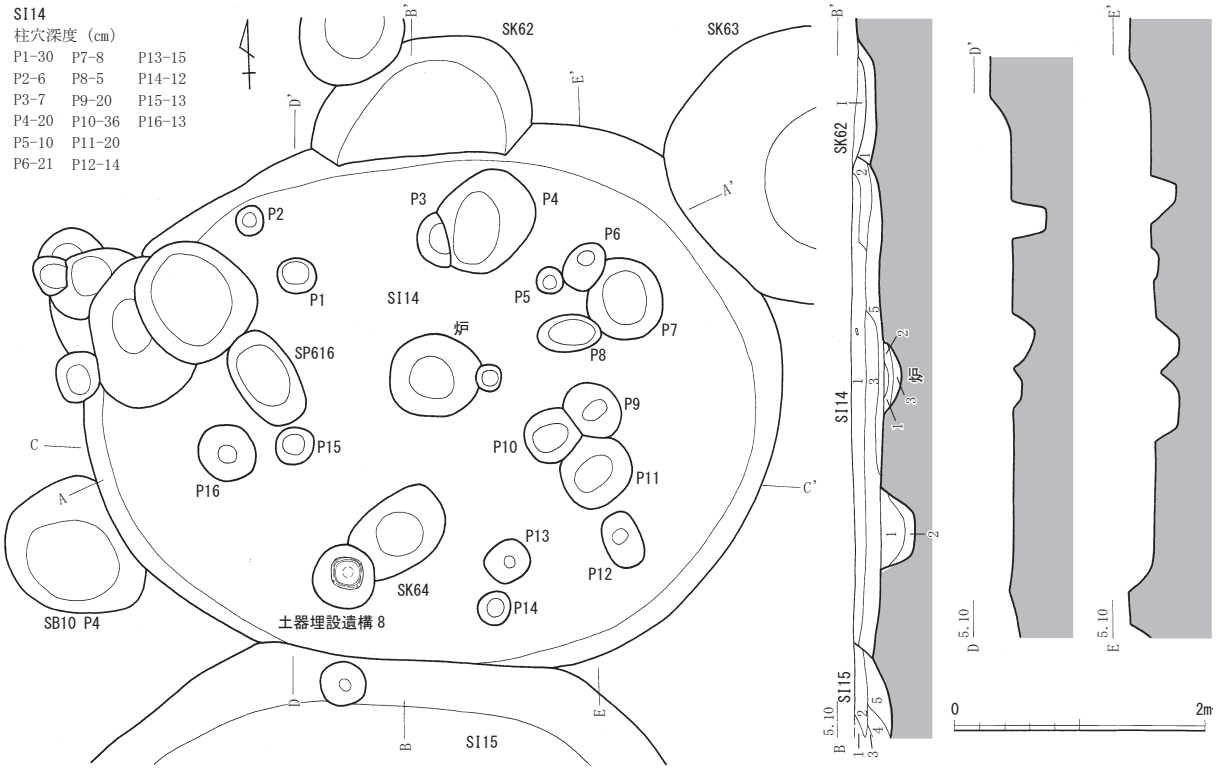
切り合い　SK65を切り、SI12に切られる。

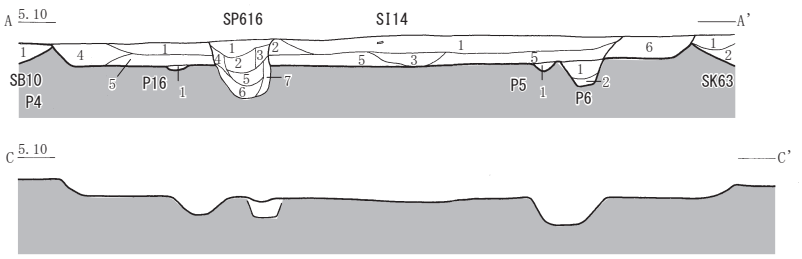
覆土　Ⅵ層土を基本とする。３層に分層した。

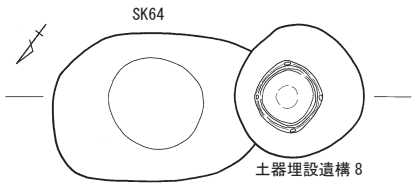
炉　確認できなかった。

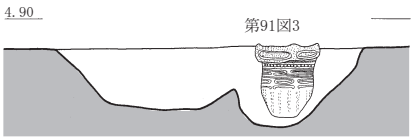
柱穴　確認できなかった。

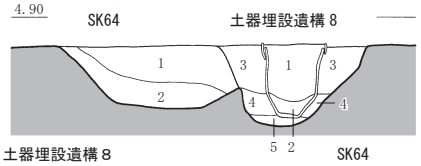
遺物出土状況　遺物量は比較的少ない。主に覆土上層から出土した。

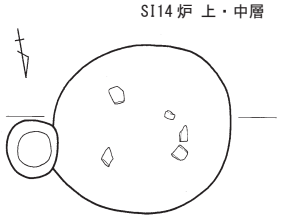


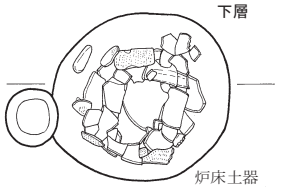


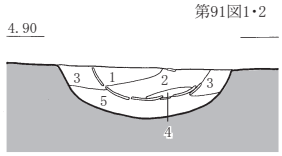














土器埋設遺構８
1 暗黄褐色土　炭化物若干含む　粘性有
2 暗灰色土　炭化物若干含む　粘性有
3 暗青灰色土
4 暗青灰色土
5 暗青灰色粘質土

SK64
1 暗青灰色土
2 青灰色土　地山主体

SI14 炉
1 暗灰色土　炭化物多く含む（炉廃絶後の堆積土か）
2 暗灰色土　炭化物・地山ブロック多く含む（炉廃絶後の堆積土か）
3 赤褐色土　（焼土層　砂質土の被熱硬化土）
4 青灰色砂質土　地山主体　炭化物若干含む
5 青灰色土　地山主体　炭化物・焼土粒若干含む

Ⅰ 暗灰褐色土　包含層（Ⅴ層土）

SI14
1 暗褐色土　炭化物多く含む
2 暗褐色土　地山しみ状に多く混入
3 暗灰色土　地山ブロック多く含む
4 黄褐色砂質土　地山主体　（壁崩壊土）
5 暗青灰色砂質土
6 暗黄褐色砂質土　地山主体　（壁崩壊土）

SI14 炉
1 暗灰色土　炭化物・地山ブロック多く含む
2 青灰色砂質土　地山主体　炭化物若干含む
3 青灰色土　地山主体　炭化物・焼土粒若干含む

SK64
1 暗青灰色土
2 青灰色土　地山主体

SK62
1 暗青灰色土

SI15
1 暗灰褐色粘質土　炭化物多く含む
2 暗灰褐色粘質土　1層土より淡色
3 暗黄褐色土　炭化物多く含む　砂性強い
4 暗青灰色土　砂性強い
5 青灰色土　地山主体　（壁崩壊土）

SI14 P5
1 暗青灰色砂質土

SI14 P6
1 暗青灰色砂質土
2 青灰色砂質土　地山主体

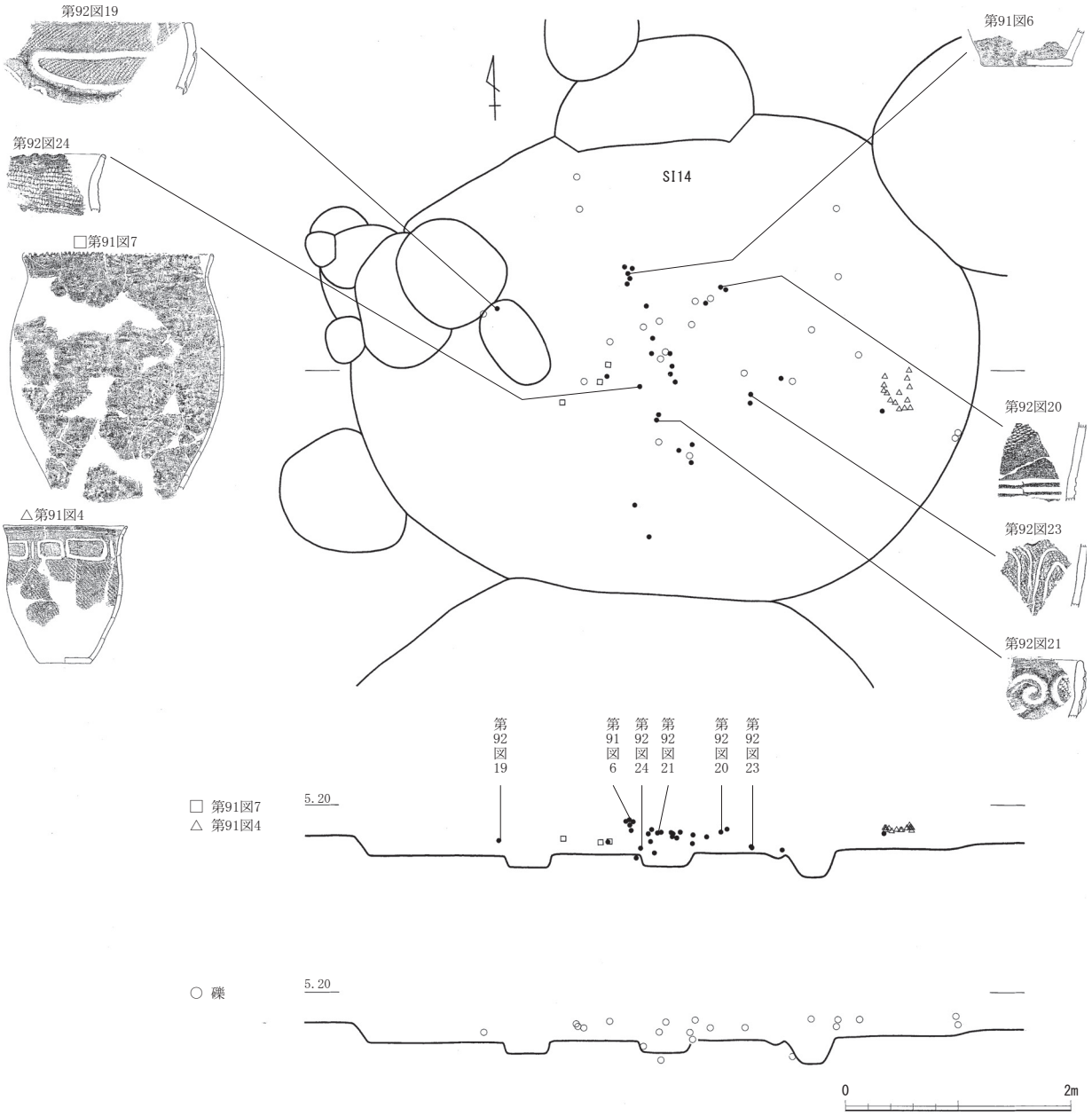
SI14 P16
1 暗青灰色砂質土

SK63
1 暗黄褐色砂質土
2 青灰色土　地山主体　しまり強

SP616
1 暗褐色土　炭化物多く含む
2 暗灰色土　炭化物・地山ブロック多く含む
3 暗黄褐色土　地山しみ状に多く混入
4 暗灰色土　地山ブロック多く含む
5 暗青灰色土　地山しみ状に多く混入
6 青灰色砂質土　地山主体
7 青灰色土　地山主体

SB10 P4
1 暗褐色土

第33図　SI14 実測図（縮尺 1/60・1/30）



第34図　SI14 遺物出土状況図（縮尺 1/60）

SI21（第32図）位置はD9・10区を中心とする。

形態・規模　平面は隅丸多角形を呈し、主軸方向はN22°Wとなると推測される。規模は現在値で長軸383cm、短軸211cm、深さ24cmを測る。床面はほぼ平坦である。

切り合い　SK57・63を切り、SI12に切られる。

覆土　Ⅵ層土を基本とする。２層に分層した。

炉　確認できなかった。

柱穴　北壁側で１基（P1）検出した。

遺物出土状況　遺物量は比較的少ない。主に覆土上層から出土した。

SI14（第33・34図）位置はC10区を中心とする。

形態･規模　平面は均整がとれた楕円形を呈し、主軸方向はN88°Eとなる。規模は現在値で長軸559cm、短軸399cm、深さ24cmを測る。床面はほぼ平坦である。

切り合い　SK63を切り、SI15、SB10に切られる。本住居埋没後に柱穴やピットが多数構築される。

覆土　６層に分層した。質・色調などから上層（１・２層）・中層（３層）・下層（４～６層）に大別できる。上層と下層はⅥ層土を基本とする。中層はⅥ層土ブロックを多く含み、住居中央から南側にかけて堆積する。

炉　床面中央やや北寄りで土器囲土器敷炉を１基検出した。炉穴は平面が楕円形を呈し、規模が長軸75cm、短軸68cm、深さ19cmを測る。炉床土器には無文深鉢２個体の破片（第91図１・２）を使用し、炉穴の断面形態にあわせて「U」字状に湾曲させて設置する。土器は内面を外側に向けて配置されるが、土器個体ごとの配置は認められない。土器敷部の上位には炭層は確認できなかったが、被熱硬化部（４層）を検出した。土器敷部と炉穴の間にはⅥ層土を基本とする土層（３・５層）が堆積する。炉穴東側には炉石抜跡の可能性がある浅い小ピットを検出した。かさ上げの痕跡は明確には認められない。

柱穴　16基（P1～16）検出した。近接する２基が対となる傾向（P1－P2・P3－P4・P5－P6・P7－P8・P9－P10・P11－P12・P13－P14・P15－P16）がうかがえ、各単位が炉を中心として放射状に分布する。配置形は内外２重の六角形を呈す。この六角形の各辺のうち、南西側の最長辺に近接する位置で屋内埋甕（土器埋設遺構８）とこれに切られる土坑（SK64）を検出した。

遺物出土状況（第34図）　出土量は比較的多い。遺物分布では住居中央寄りの傾向がうかがえ、主に上層から中層にかけて出土した。器形復元土器は各個でまとまる傾向がうかがえる。

関連遺構　住居南西側の壁面寄りで土器埋設遺構８とした屋内埋甕を検出した。土器（第91図３）は有文深鉢の完形品であり、正位で埋置される。口縁部は住居床面よりわずかに突出し、口縁突起部先端は削れが認められる。土器内部に遺物や顕著な含有物は認められない。SK64を切る。

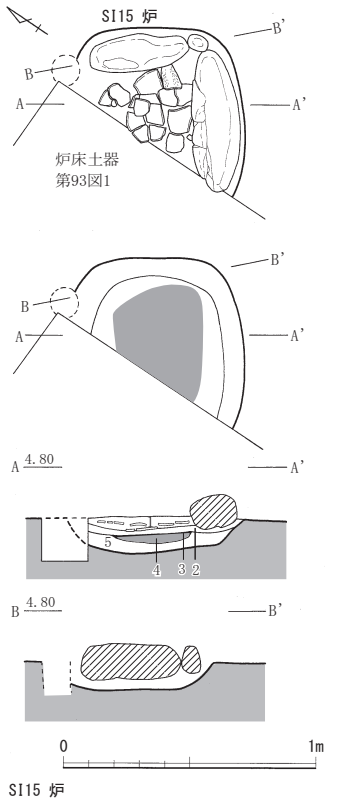
SI15（第35～37図）位置はC11区を中心とする。

形態・規模　平面は不整楕円形を呈し、主軸方向はN45°Eとなる。規模は長軸664cm、短軸512cm、深さ37cmを測る。床面は北側に向かいやや高くなる。

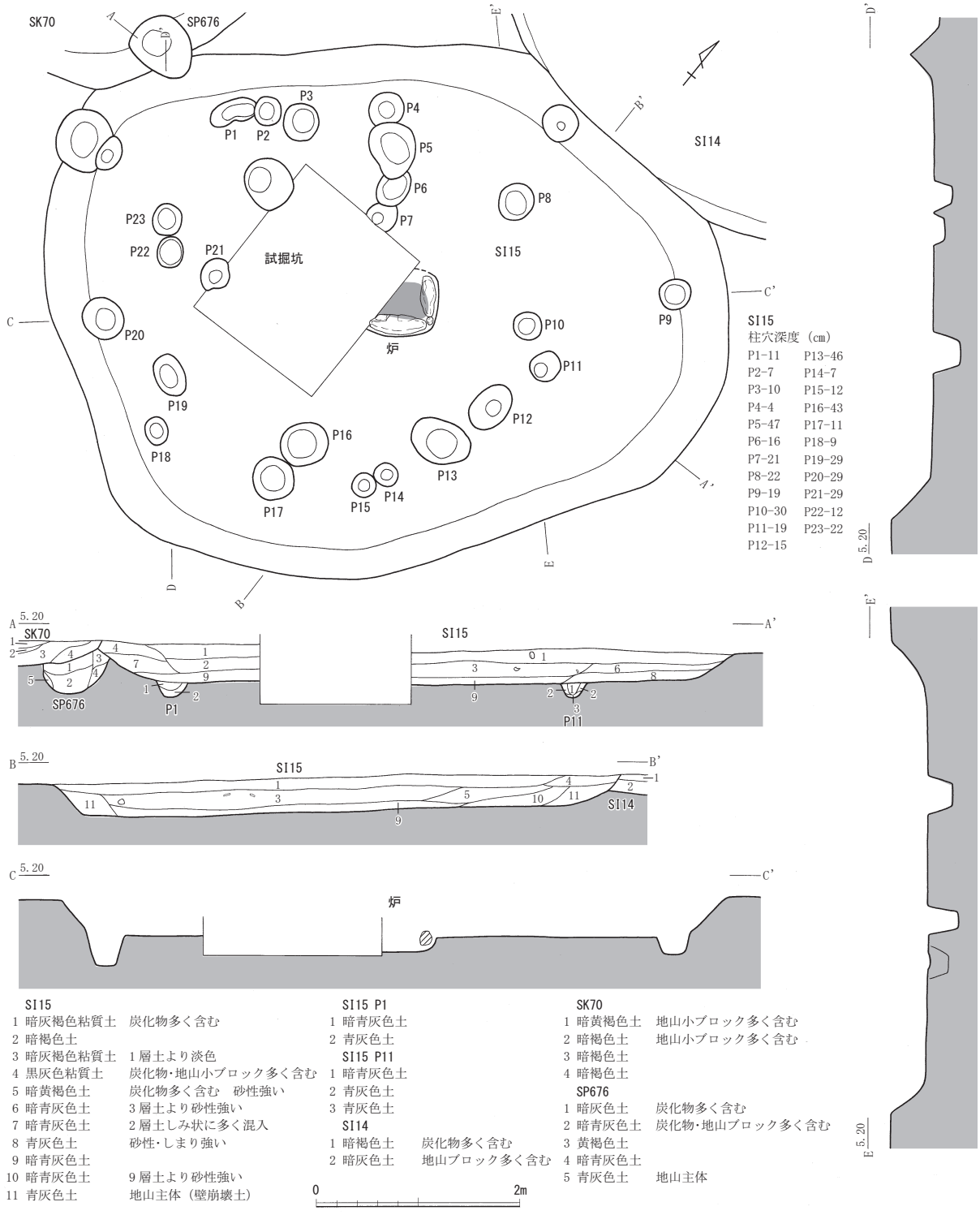
切り合い　SI14を切り、SK70に切られる。

覆土　11層に分層した。質･色調などから上層（１～３層）･中層（４～６層）・下層（７～11層）に大別できる。上層と下層はⅥ層土を基本とする。中層は主に住居東側で堆積する。

炉（第35図）　床面中央で方形石囲土器敷炉を１基検出した。西半部は試掘坑のため欠失する。炉石は炉穴内に設置される。石囲部は円柱状の礫を各辺に１点ずつ配置する。東隅角に短い棒状礫を縦位に配置するが、他の礫より突出しない。北東隅には炉石抜跡が存在する。炉穴は平面が長方形を呈し、規模は現在値で長軸63cm、短軸65cm、深さ15cmを測る。炉床土器には無文深鉢１個体の破片（第93図１）を使用し、内面を上方に向けて平坦に敷く。土器敷部は覆土上層（１層）中に設置されるが、上位には炭層や被熱硬化部は認められない。土器敷部下位は間層（２層）を挟み、人為堆積土（３層）とその被熱硬化部（４層）および炉床土（５層）となる。このことから、



第35図　SI15 炉実測図（縮尺 1/30）

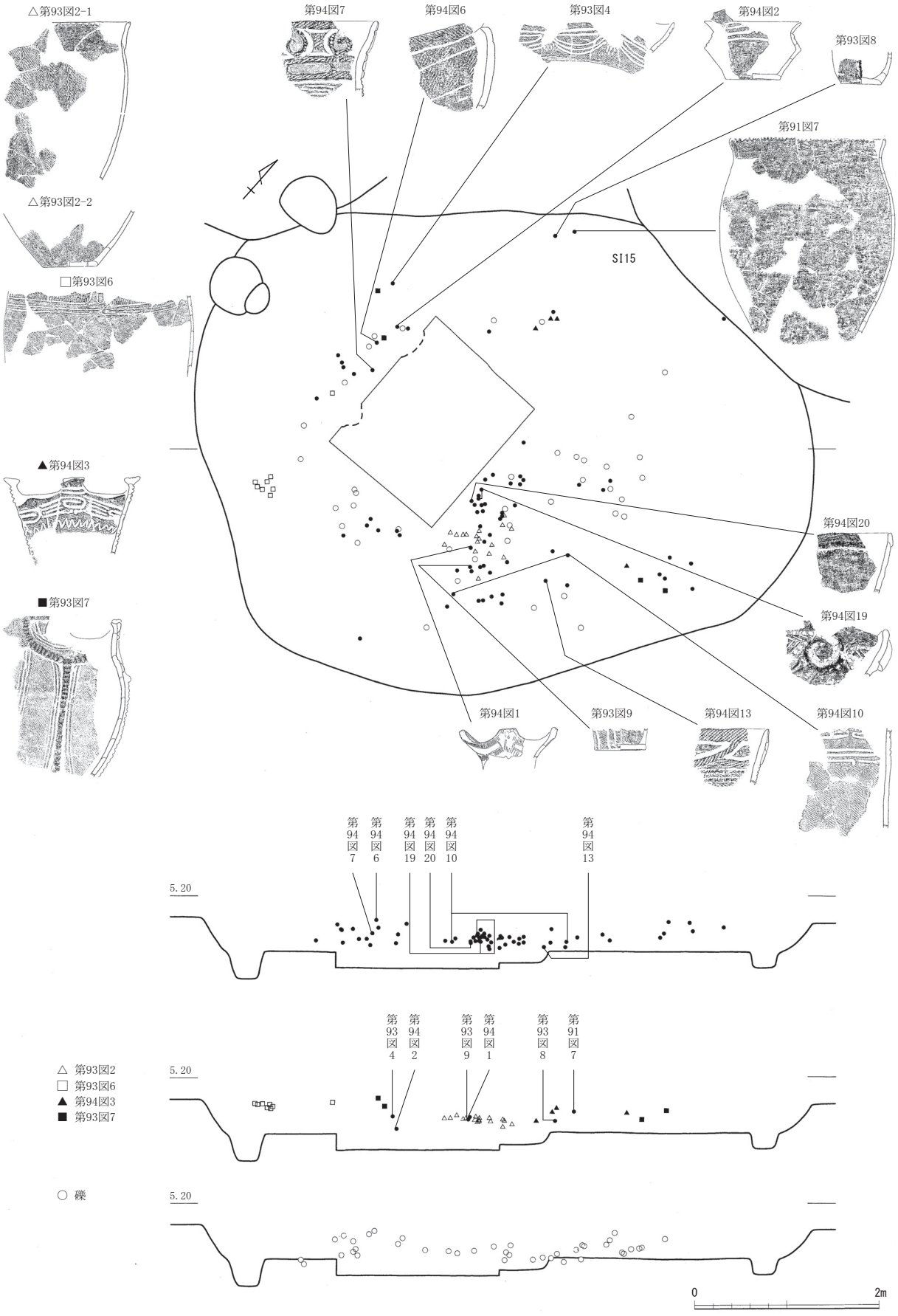


第36図　SI15 実測図（縮尺 1/60）

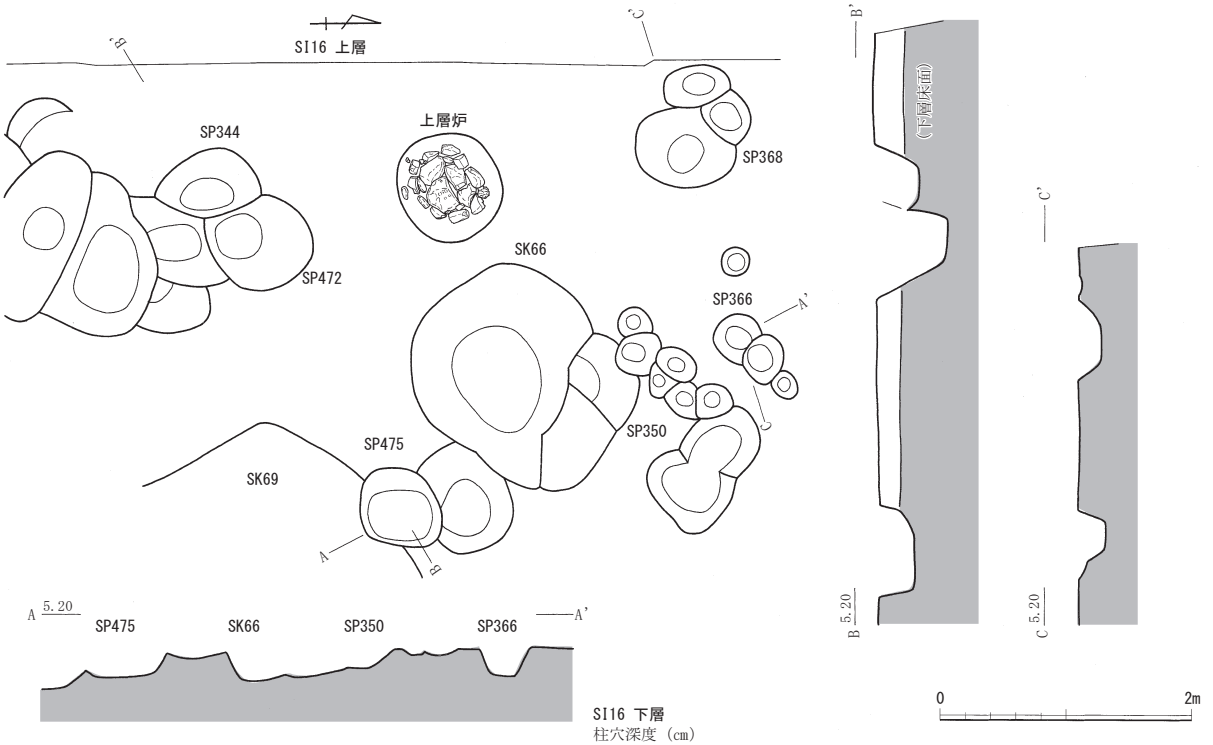
炉のかさ上げは最低１回行われ、炉床は初段階が埋土による地床で、次段階がそれを埋めて土器敷としたと推測される。

柱穴　23基（P1～23）検出した。配置形は比較的深い柱穴を対象とすれば、P9－P20 を中心軸とし、P8・P10またはP11・P13・P16・P19・P23を隅角とし、住居長軸とほぼ一致する長八角形が推測される。また、P22とP23・P18とP19・P16とP17には一対性がうかがえる。

遺物出土状況（第37図）　遺物量は比較的多い。遺物分布では住居中央から東側にかけて集中する傾

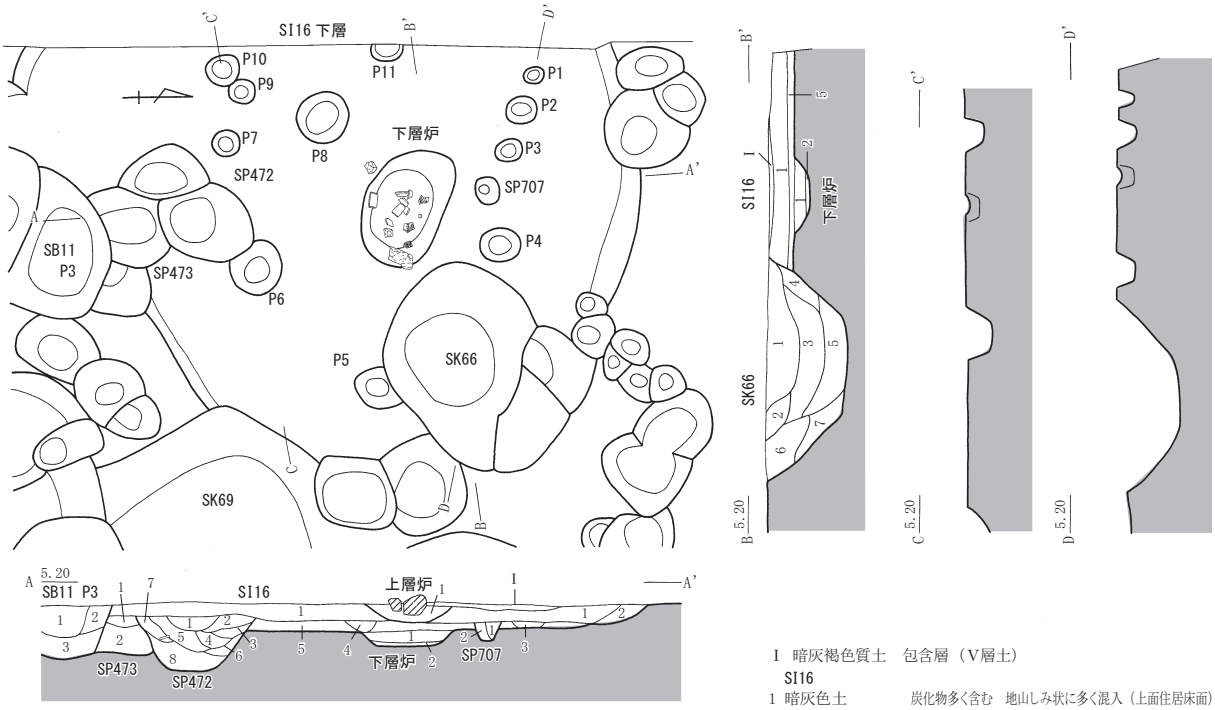


第37図　SI15 遺物出土状況図（縮尺 1/60）



SI16 下層
柱穴深度（cm）

P1-14	P4-15	P7-10	P10-13
P2-13	P5-11	P8-16	P11-15
P3-12	P6-21	P9-12	



SP472
1 暗灰色土　炭化物多く含む
2 暗灰色土　炭化物･地山ブロック多く含む　1層土より淡色
3 青灰色土
4 黒灰色土　炭化物多く含む
5 黒灰色土　炭化物･地山小ブロック多く含む
6 暗青灰色土　地山しみ状に多く混入
7 暗灰色土　炭化物多く含む
8 暗灰色土　炭化物多く含む　地山しみ状に多く混入

SP473
1 暗灰色土　炭化物多く含む
2 暗青灰色土

SB11 P3
1 暗灰色土
2 青灰色土
3 暗青灰色土

SK66
1 暗褐色土　炭化物多く含む
2 暗黄褐色土　1層土と地山との不均一な混合土
3 暗灰色土　炭化物多く含む　地山しみ状に多く混入
4 青灰色土　地山主体
5 青灰色土
6 暗黄褐色土
7 暗青灰色土

I 暗灰褐色質土　包含層（V層土）

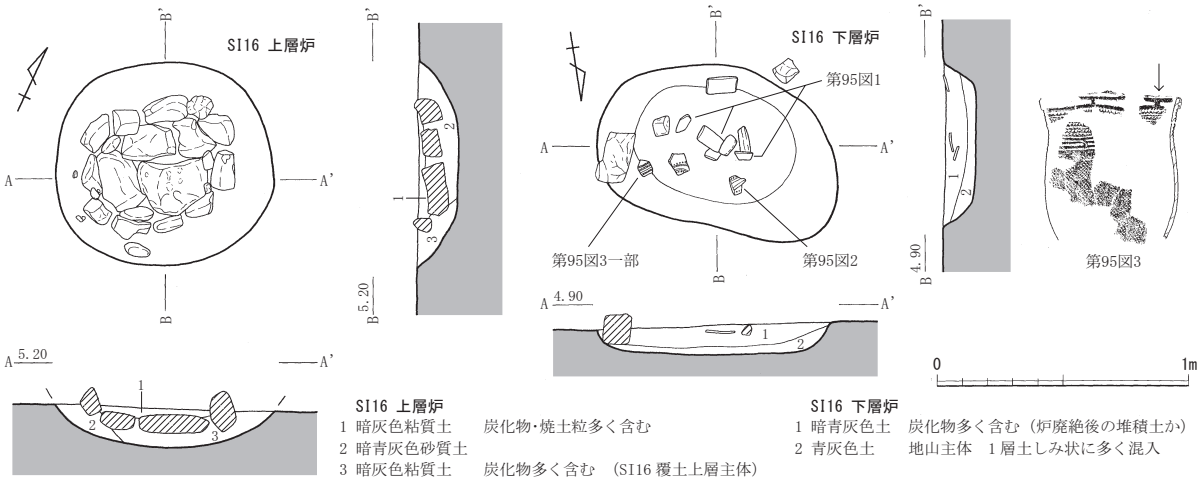
SI16
1 暗灰色土　炭化物多く含む　地山しみ状に多く混入（上面住居床面）
2 灰色土　砂性強い
3 暗褐色土　炭化物多く含む（ピット覆土か）
4 暗灰色土　炭化物多く含む（ピット覆土か）
5 淡青灰色砂質土

SI16 上層炉
1 暗灰色粘質土　炭化物多く含む　（SI16 覆土１層土主体）

SI16 下層炉
1 暗青灰色土　炭化物多く含む
2 青灰色土　地山主体　1層土しみ状に多く混入

SP707
1 暗灰褐色土
2 黄褐色砂質土

第38図　SI16 実測図（縮尺 1/60）



第39図　SI16 炉実測図（縮尺 1/30）

向がうかがえ、主に覆土中層から出土した。器形復元土器は各個でまとまる傾向が認められる。

SI16（第38・39図）位置はA11区を中心とする。遺物包含層Ⅴ層を除去後、Ⅵ層上面と同じ高さで石囲石敷床炉を単独で検出した。Ⅴ層土上面からの掘り込みは確認できず､住居壁面は検出できなかった。Ⅴ層土堆積以前に壁面が削平もしくは流出した可能性も考えられるが不明な点が多い。この石囲石敷炉の下位で、Ⅵ層土上面から掘り込まれる竪穴住居とこれに伴う別の炉を検出した。それぞれの炉の平面位置は上下でおおむね一致する。上層の石囲石敷炉を伴う住居の平面形や規模は不明であるが、各炉を付属する竪穴住居は上下で異なる床面をもつことから、重複住居や埋め戻し後の建替えの可能性がある。上下各棟をSI16上層とSI16下層と呼称し分離する。

SI16上層（第 38・39 図）

形態・規模　不明である。床面はほぼ平坦である。

切り合い　SI16下層の覆土上面が床面および炉構築面となる。

覆土　確認できなかった。

炉（第39図）　方形石囲石敷炉を１基検出した。拳大から人頭大の河原石や石器転用品を炉石とする。礫には煤が付着する。炉石は炉穴内に設置され、炉床部には石囲部より大形のやや扁平な礫を敷きつめる。石囲部は炉穴上端から突出しない。炉穴は平面が略楕円形を呈し、規模が長軸87cm、短軸80cm、深さ15cmを測る。覆土は３層に分層した。石敷部上位には炭層や被熱硬化部は検出できなかった。

柱穴　本住居に伴う柱穴は明確ではないが、SP344・366・368・472・475が該当する可能性がある。

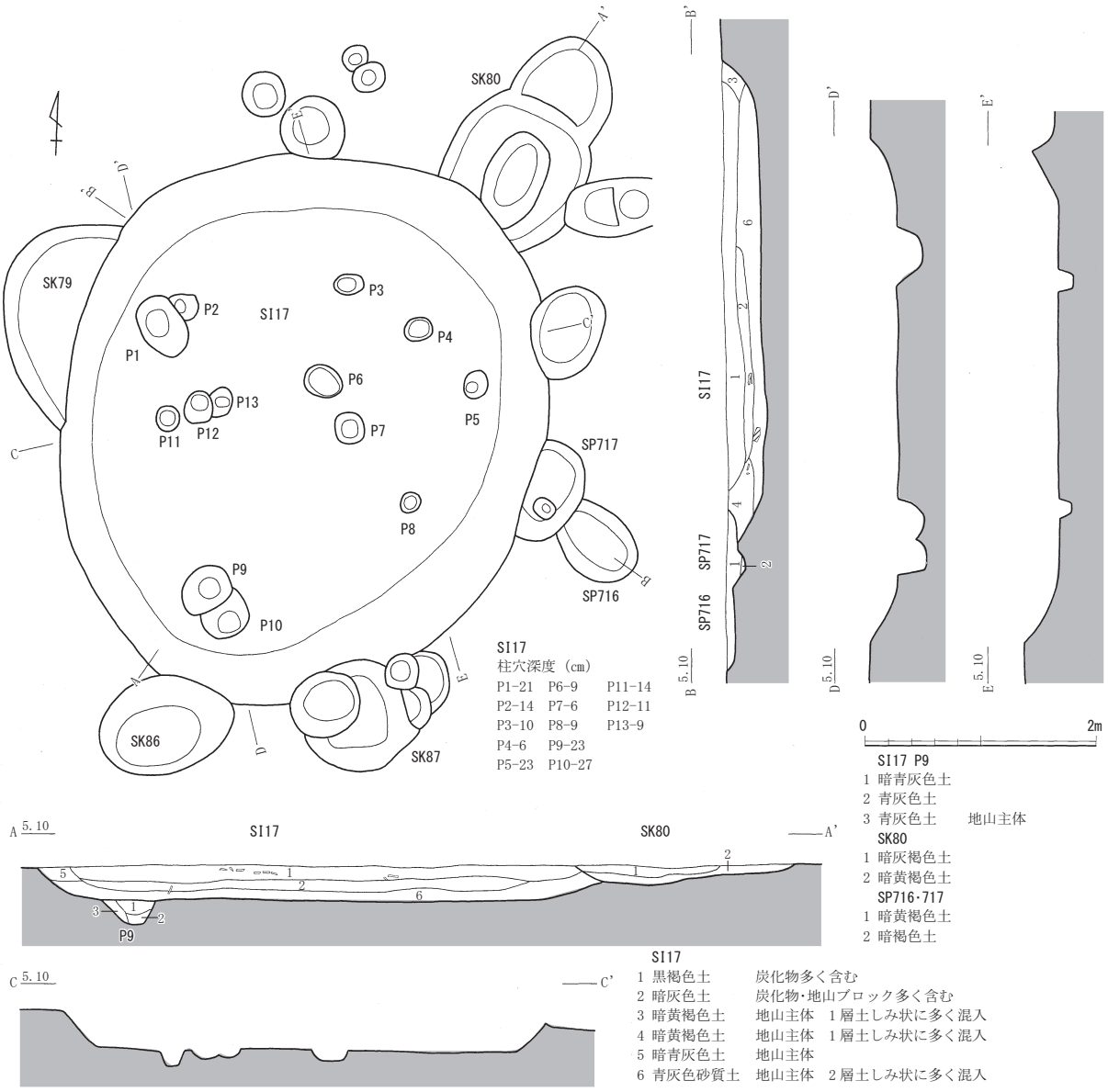
SI16下層（第38・39図）西側が調査区外に延びる。

形態・規模　平面は不整楕円形を呈し、主軸方向はN76°Eとなると推測される。規模は現在値で長軸509cm、短軸435cm、深さ23cmを測る。床面はほぼ平坦である。

切り合い　SB11、SK66・69・73に切られる。

覆土　Ⅵ層土を基本とする。５層に分層した。

炉（第39図）　床面中央北東寄りで１基検出した。上層の炉の直下に位置する。炉穴内や周辺には炉石と考えられる焼礫が点在しており、使用時は石囲炉であった可能性がある。炉穴は平面が不整楕円形を呈し、規模が長軸98cm、短軸66cm、深さ13cmを測る。覆土は上下２層に分層した。炭層や被熱硬化部は認められない。上層（１層）からは土器大形破片（第95図１～３）が出土した。住居覆土からは土



第40図　SI17 実測図（縮尺 1/60）

器小片のみ出土することから、これらの一部は炉床土器としての可能性がある。

柱穴　11基（P1～11）検出した。配置形はP5とP8を中心軸とし、P4やP6 などを隅角とする多角形が推測される。

遺物出土状況　遺物量は比較的少ない。主に覆土上層から出土した。

SI17（第40・41図）　位置はC12区を中心とする。

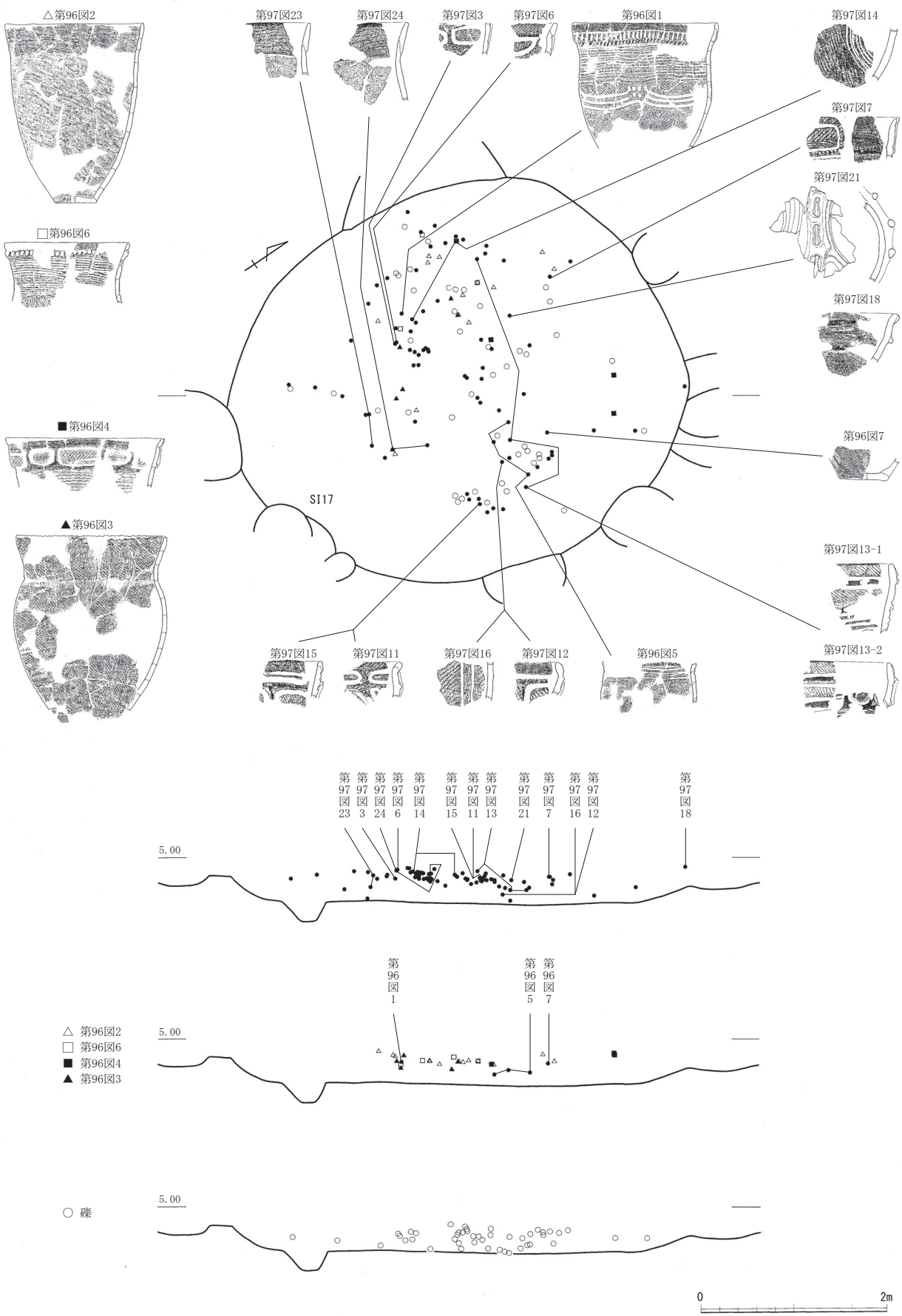
形態・規模　平面は楕円形を呈し、主軸方向はN38°Eとなる。規模は長軸476cm、短軸419cm、深さ31cmを測る。床面はほぼ平坦である。

切り合い　SK79・80・86・87に切られる。

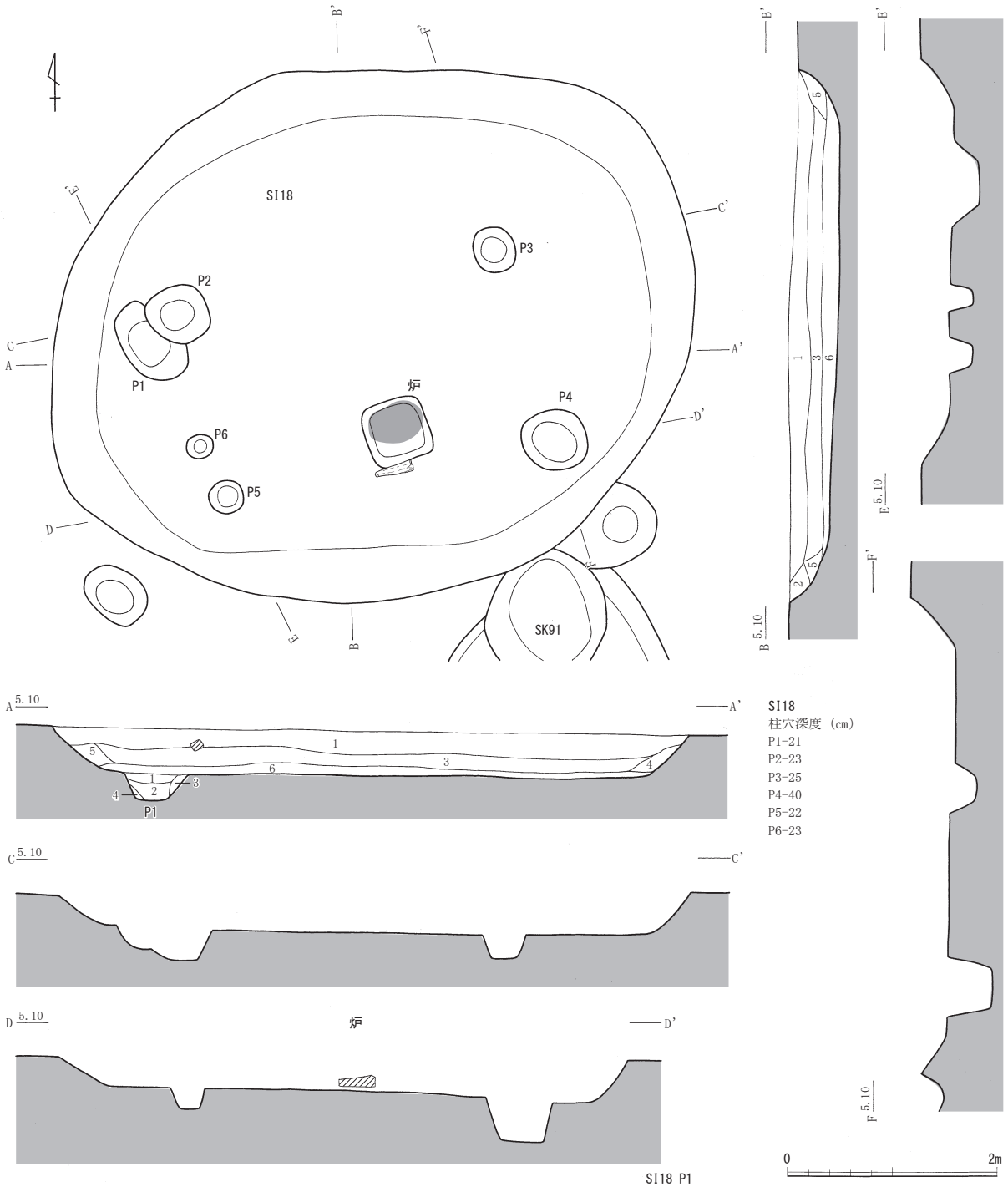
覆土　６層に分層した。質･色調などから上層（１層）･中層（２層）･下層（３～６層）に大別できる。下層はⅥ層土を基本とする。中層はⅥ層土ブロックを多く含み、住居中央から南西側で堆積する。

炉　検出できなかった。

柱穴　13基（P1～13）検出した。壁面寄りに分布する傾向が認められる。配置形はP3とP9またはP10



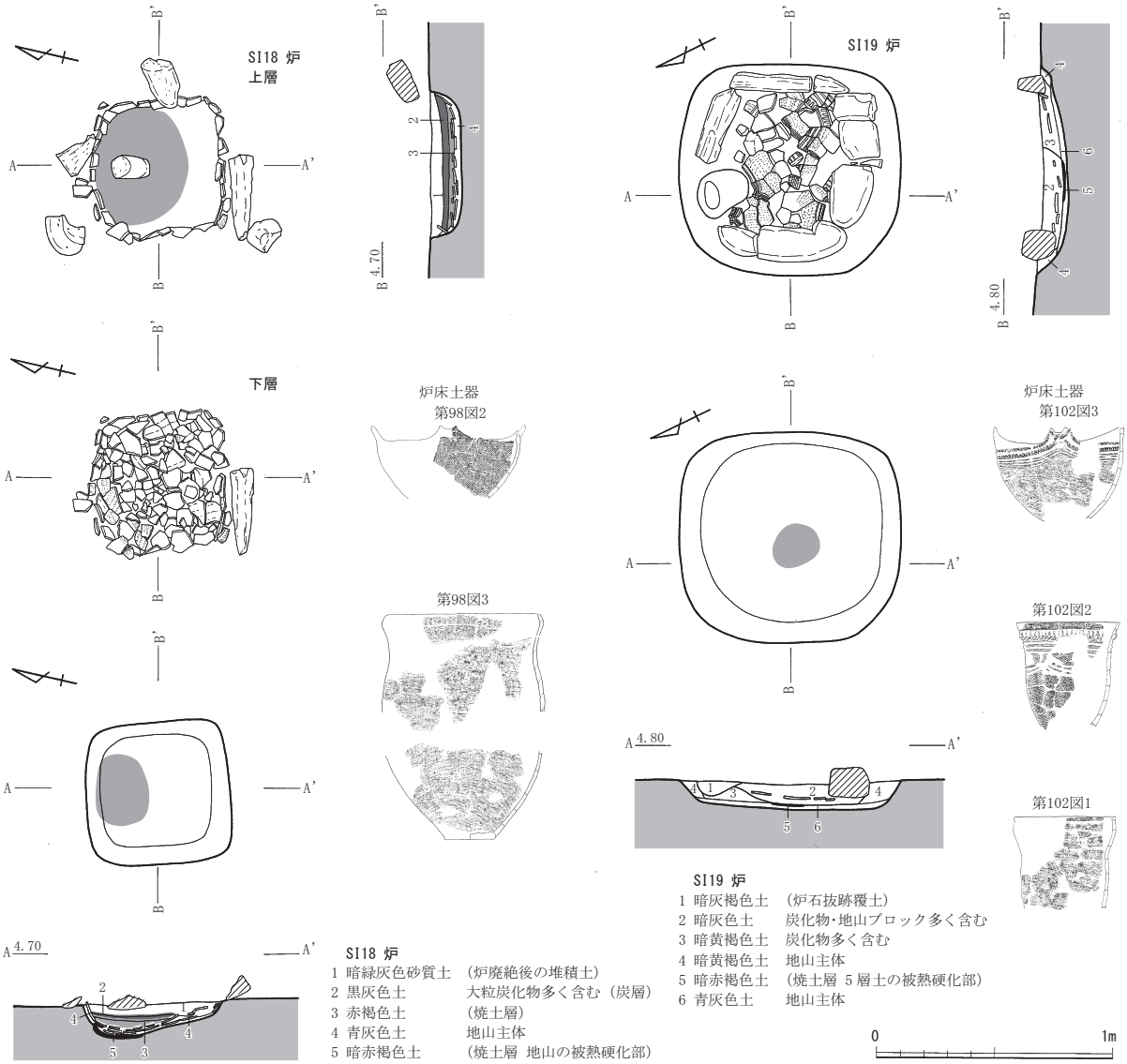
第41図　SI17 遺物出土状図（縮尺 1/60）



第42図　SI18 実測図（縮尺 1/60）

を中心軸とし、P1またはP2とP5・P11またはP12とP8 が対応する住居長軸とほぼ一致する長六角形が推測される。

遺物出土状況（第41図）　遺物量は比較的多い。遺物分布は住居中央寄りの傾向がうかがえ、覆土全域から出土した。器形復元土器は各個でまとまるが、破片は広範囲で接合する事例が多い。また、礫は土器と比べ、比較的下層に集中する傾向が認められる。



第43図　SI18・19 炉実測図（縮尺 1/30）

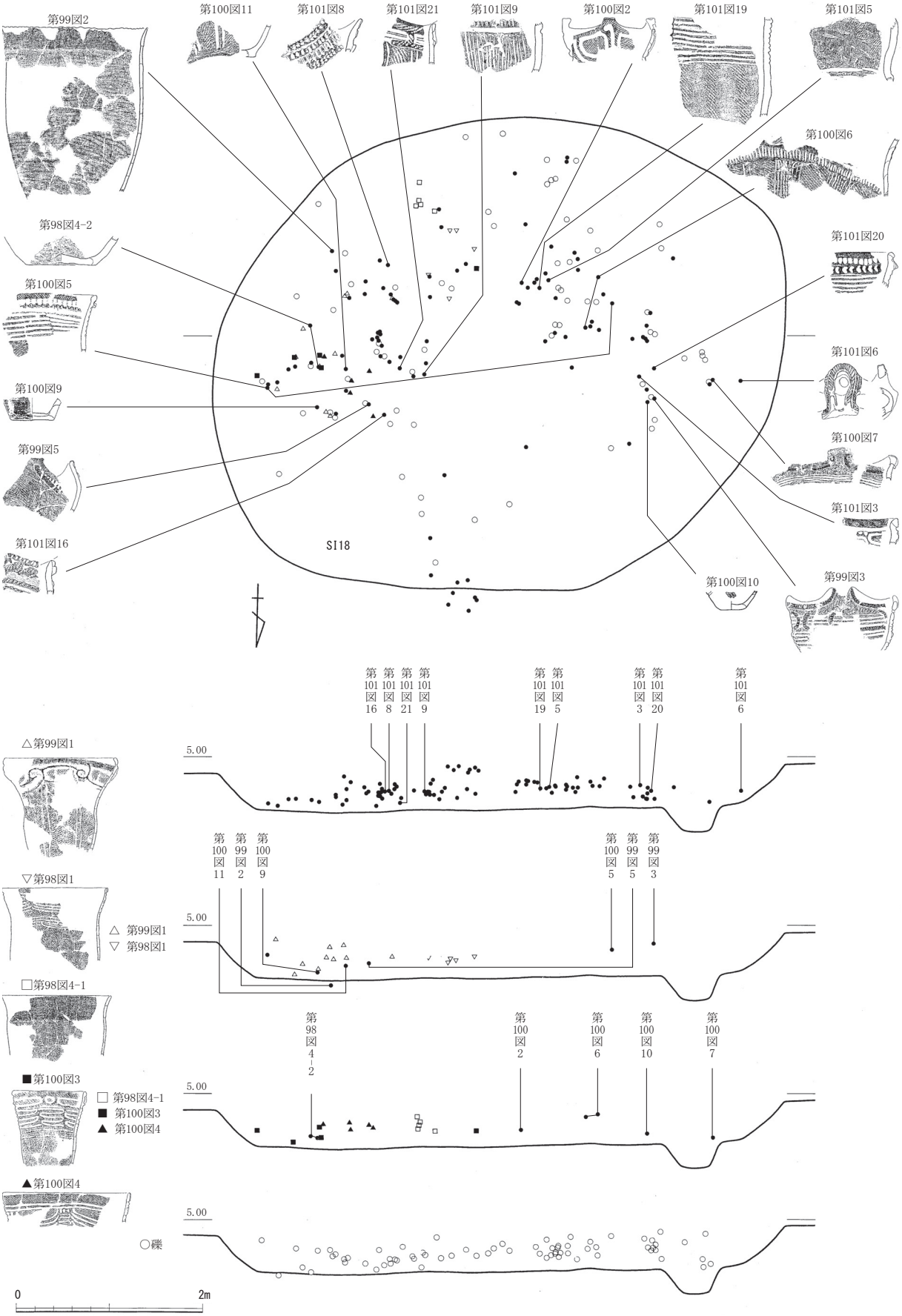
SI18（第42～44図）　位置はC13・14区を中心とする。

形態・規模　平面は楕円形を呈し、主軸方向はN77°Eとなる。規模は長軸639cm、短軸506cm、深さ43cmを測る。床面はほぼ平坦である。

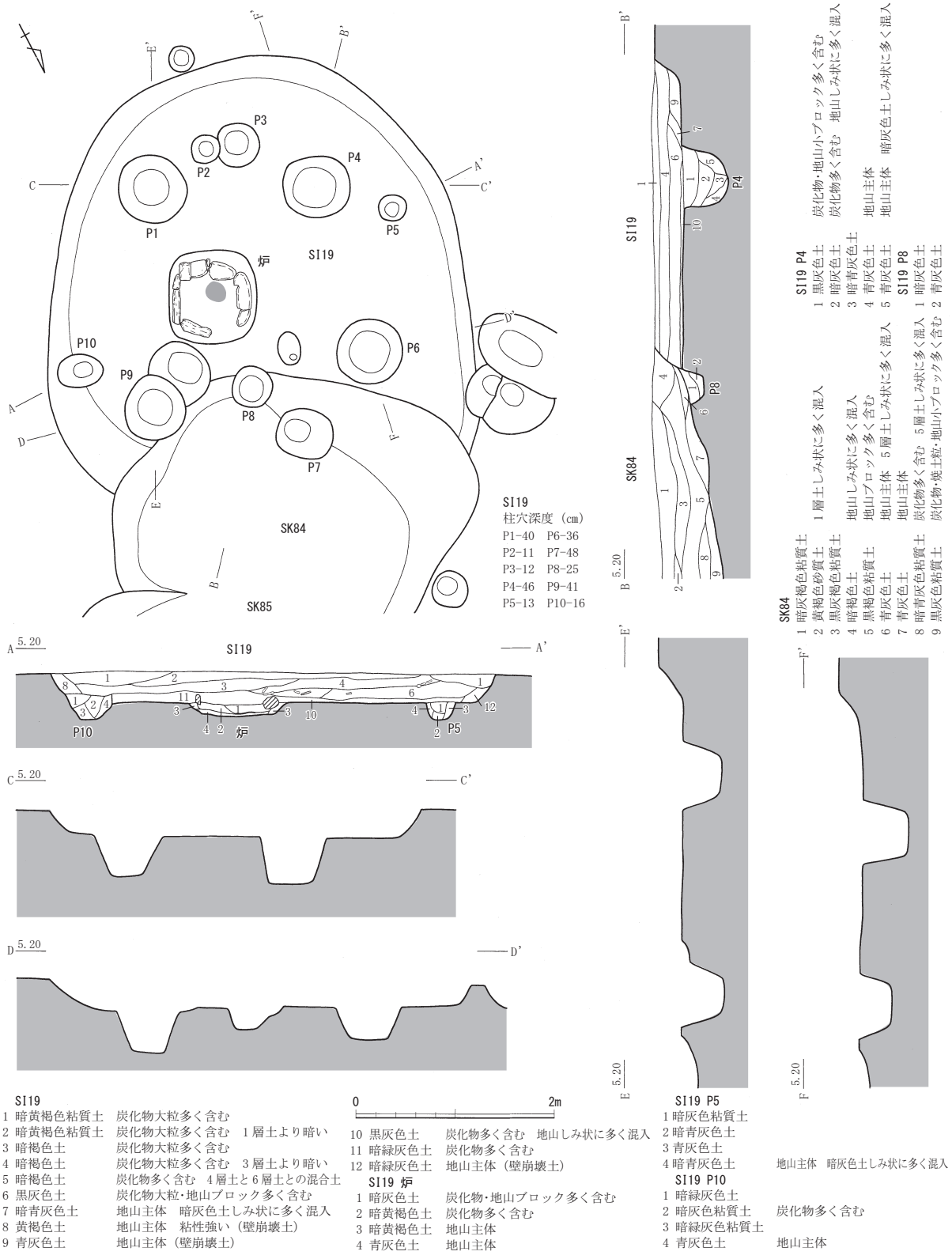
切り合い　SK91に切られる。

覆土　６層に分層した。質･色調などから上層（１層）･中層（３層）･下層（４～６層）に大別できる。上層と下層および中層の一部（２層）はⅥ層土を基本とする。

炉（第43図）　床面中央南寄りで土器囲土器敷炉を１基検出した。炉直上の住居覆土下層や炉穴内に拳大から人頭大程度の焼礫・自然礫が散在することから、使用時は石囲炉であった可能性が高い。炉穴は平面が隅丸方形を呈し、規模が一辺60cm、深さ13～19cmを測る。炉床面は西側の一部が緩やかに凹む。炉床土器には無文の深鉢・台付鉢の２個体の破片（第98図２・３）を使用し、床面凹部に応じて重ねて敷きつめ、炉穴壁面にも立て掛ける。土器個体ごとの配置や表裏面は特に意識されていない。他住居の土器敷部と比べ、土器片が細かい点、土器敷部が厚い点で異なる。覆土の最上層には住居覆土下層と近似する土層（１層）が堆積する。土器敷部上位には炭層（２層）と焼土層（３層）が堆積し、土器敷

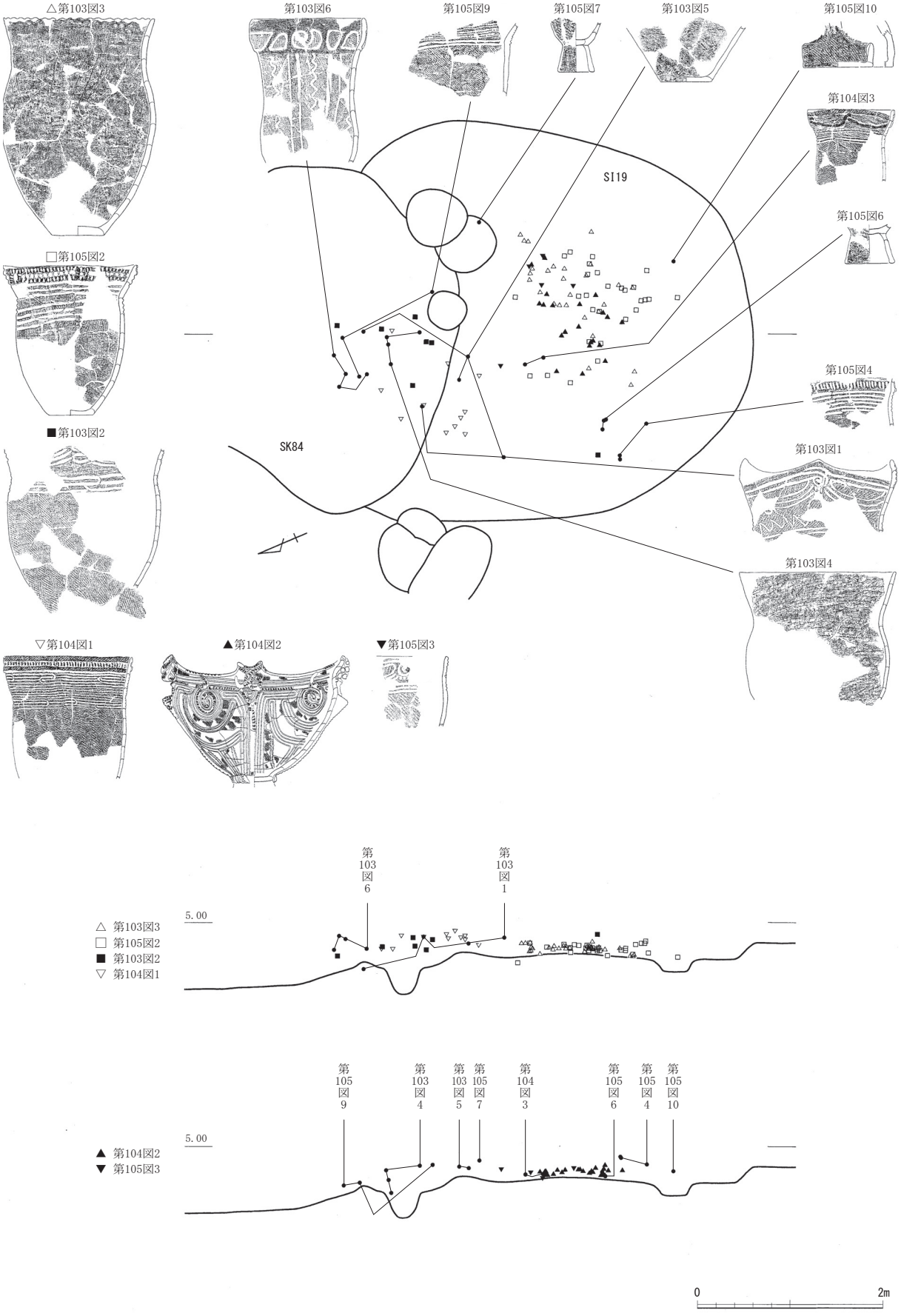


第44図　SI18 遺物出土状況図（縮尺 1/60）

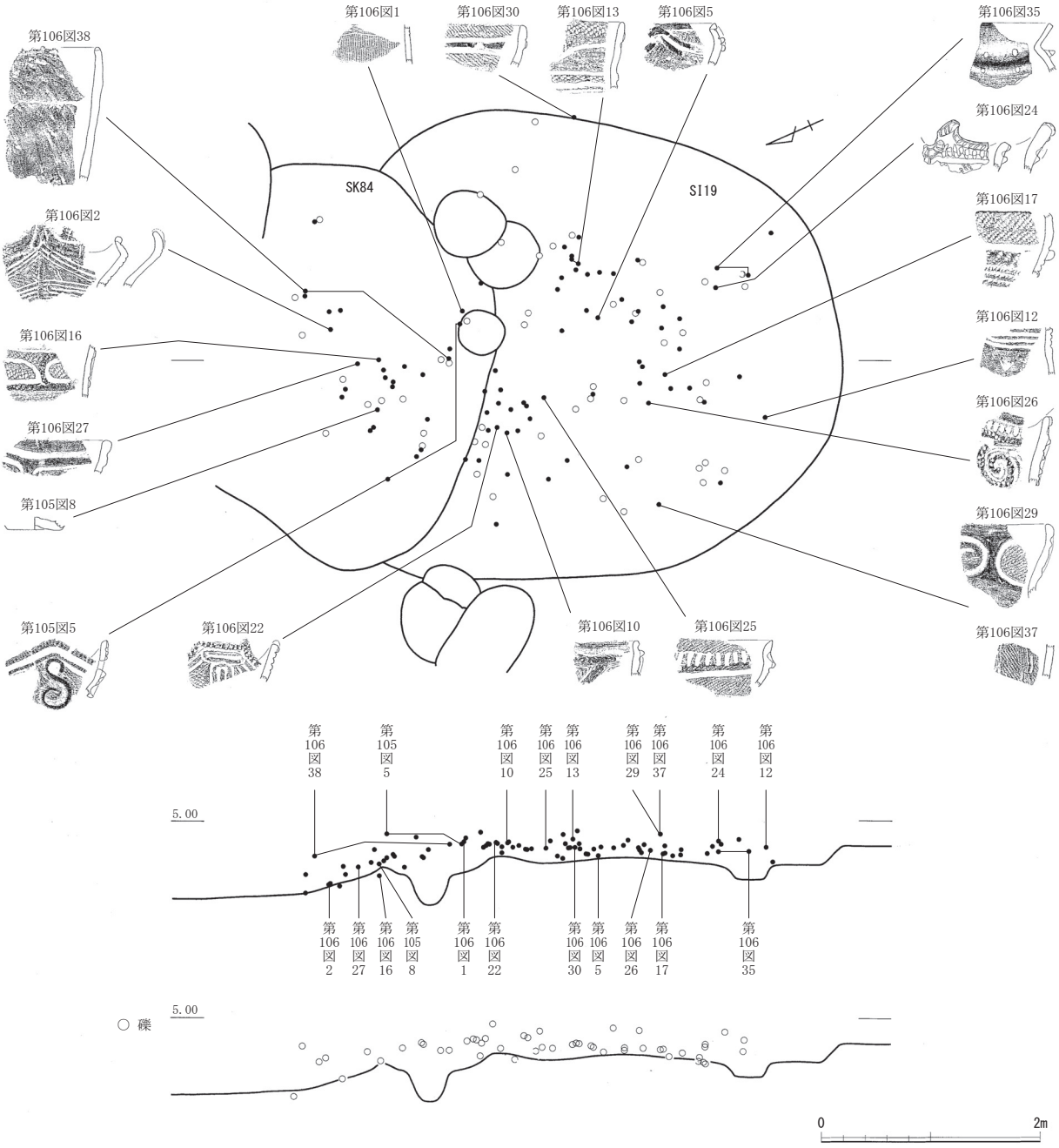


第45図　SI19 実測図（縮尺 1/60）

部直下にはⅥ層土を主体とする土層（４層）が薄く堆積する。また、炉穴底面が部分的に被熱硬化する（５層）。このⅥ層の被熱硬化部の成因については不明な点が多いが、本炉は当初から土器敷炉であり、４層と同時期に形成した、あるいは当初は土器敷ではなく地山床であり、４層以前に形成した、などが想定される。なお、土器敷部直下に被熱硬化部をもつ例は本炉以外に３例（SI06・19・20）ある。



第46図　SI19 遺物出土状況図１（縮尺 1/60）



第47図　SI19 遺物出土状況図２（縮尺 1/60）

柱穴　６基（P1～6）検出した。配置形はP1またはP2・P3・P4・P5を隅角とする長方形を呈す。この配置形は炉の各辺とほぼ平行するが、住居平面形とは一致しない。

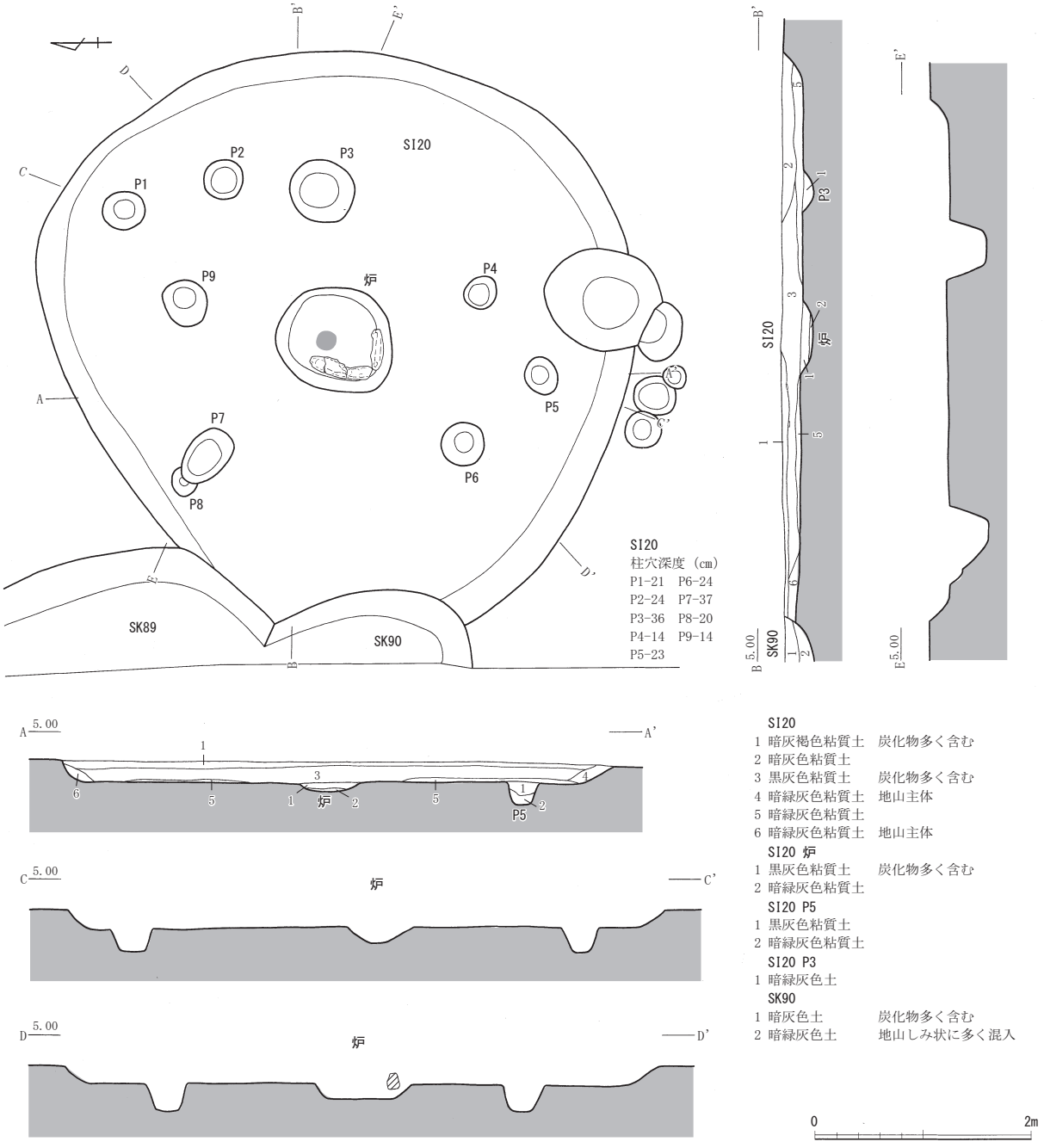
遺物出土状況況（第44図）　遺物量は比較的多い。遺物分布は住居北半部寄りの傾向がうかがえ、覆土中層から下層にかけて出土した。器形復元土器は広範囲に分散する傾向が認められる。

SI19（第43・45～47図）　位置はB13区を中心とする。

形態･規模　平面は楕円形を呈し、主軸方向はN20°Eとなると推測される。規模は現在値で長軸324cm、短軸425cm、深さ29cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、住居東側がやや高くなる。

切り合い　SK84に切られる。

覆土　12層に分層した。質・色調などから上層（１・２層）・中層（３・４層）・下層（５～10層）・



第48図　SI20 実測図（縮尺 1/60）

最下層（11層）に大別できる。上層と下層の一部（７～９層）および最下層はⅥ層土を基本とする。最下層は住居中央から南側にかけて堆積し、下層は主に住居北側で堆積する。

炉（第43図）　床面中央東寄りで方形石囲土器敷炉を１基検出した。炉石は炉穴内に設置される。石囲部は北東辺の一部を欠失するが、炉覆土に炉石抜跡（１層）を確認した。北西辺・南東辺に大形柱状礫を各１点配置し、その他２辺は複数の礫を列状に配置する。炉穴は平面が隅丸方形を呈し、規模が一辺90～95cm、深さ13cmを測る。炉床土器には有文・無文深鉢各１個体と有文台付鉢１個体の破片（第102図１～３）を使用する。土器個体ごとの配置や表裏面は意識されていない。土器敷部上位には炭層や焼土層は認められない。土器敷部直下のⅥ層を基本とする土層（６層）の上面には、部分的な被熱硬化部（５層）が認められる。炉石と壁面の間には、砂質土（４層）が裏込状に堆積する。

柱穴　10基（P1～10）検出した。規模から大型（P1･4･6・7・9）、小型（P2・3・5・8・10）に大別できる。大型柱穴の配置形はそれぞれが隅角となる五角形を呈す。

遺物出土状況（第46・47図）　遺物量は比較的多い。遺物分布は住居壁面周辺では少ない。覆土中層から下層にかけて出土した。器形復元土器は広範囲に分散する傾向が認められる。

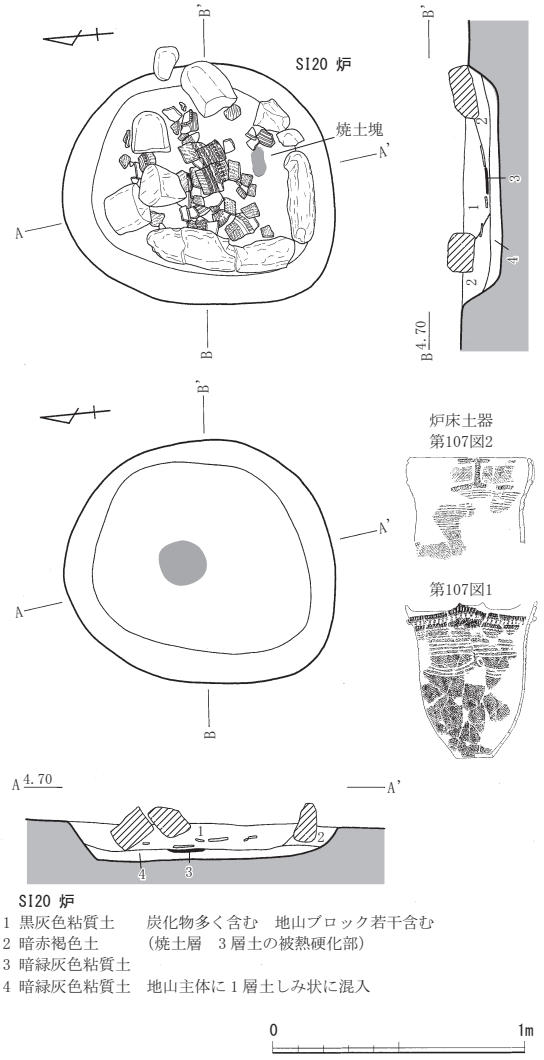
SI20（第48～50図）位置はA15区を中心とする。

形態・規模　平面は不整楕円形を呈し、主軸方向はN35°Eとなる。規模は長軸559cm、短軸517cm、深さ19cmを測る。床面はほぼ平坦である。

切り合い　SK89・90 に切られる。

覆土　６層に分層した。質･色調などから上層（１層）･中層（２・３層）･下層（４～６層）に大別できる。上層と下層はⅥ層土を基本とする。上層は主に住居西側で堆積する。

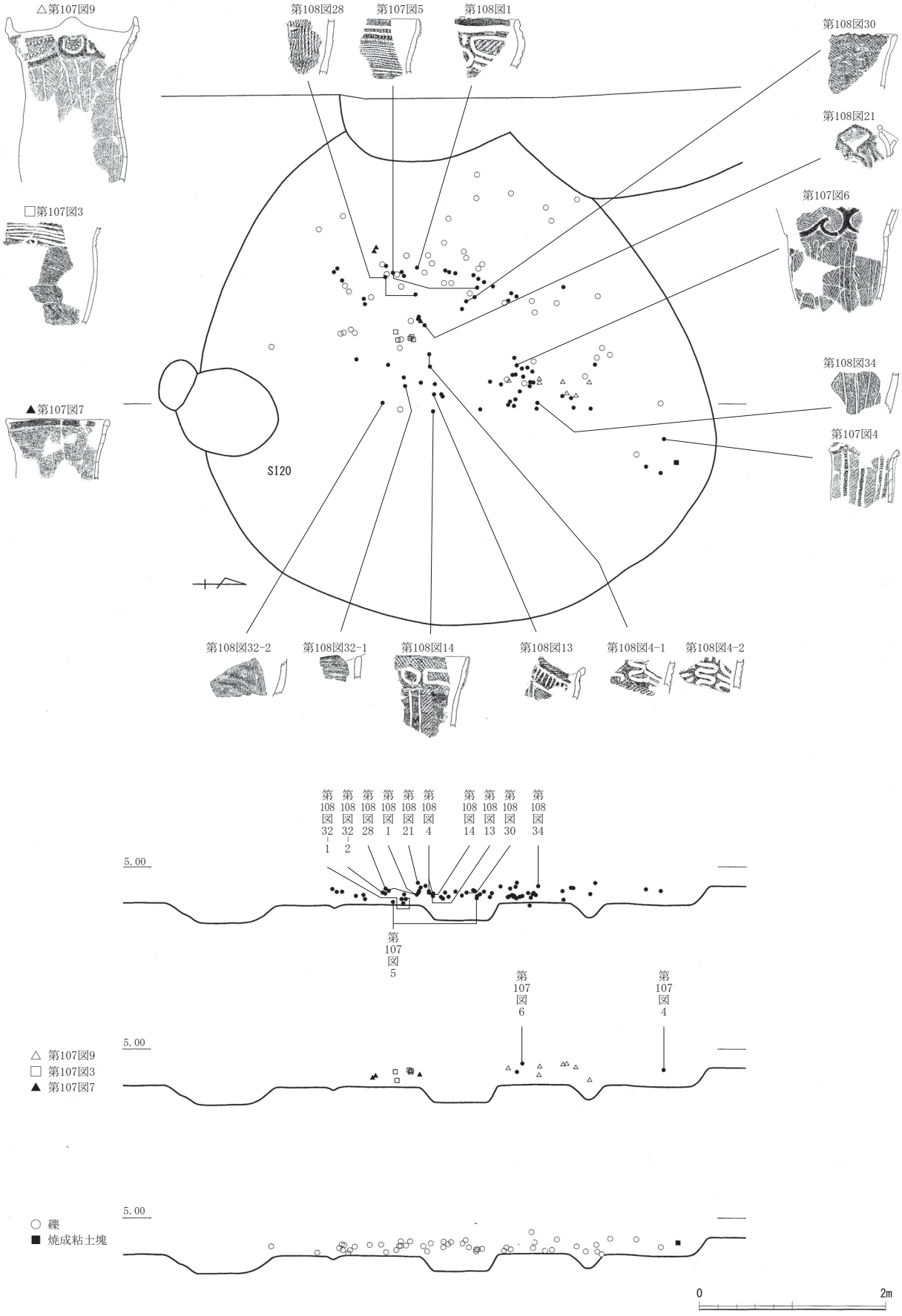
炉（第49図）　床面中央で方形石囲土器敷炉を１基検出した。炉石は炉穴内に設置される。石囲部は炉石の多くに欠失または移動が認められる。北辺と南辺に円柱状礫を各１点配置する。炉穴は平面が楕円形を呈し、規模が長軸108cm、短軸96cm、深さ16cmを測る。炉床土器には有文深鉢２個体の破片（第107図１・２）を使用する。土器片は密着せず、水平・垂直方向に分散し、顕著な空白部も認められる。覆土上層（１層）は多量の炭化物とともに、Ⅵ層土のブロックや焼土塊を多く含む。土器敷部直下のⅥ層土を基本とする土層（４層）の上面には、部分的な被熱硬化部（３層）が認められる。炉石と壁面の間には、粘質土（２層）が裏込状に堆積する。上層に含まれる焼土塊は土器敷部上位に存在した被熱硬化部の一部と判断され、炉石の顕著な移動や炉床土器の分散をあわせて、炉廃絶後の意識的なかく乱が想起される。



第49図　SI20 炉実測図（縮尺 1/30）

柱穴　９基（P1～9）検出した。床面中央寄りに分布する傾向が認められる。配置形に P1－P5を中心軸とし、P2－P9とP4－P6が対応する長六角形が推測され、P3とP7も対となる可能性がある。

遺物出土状況（第50図）　遺物量は比較的多い。主に覆土上層から中層にかけて出土した。石器や礫の分布は土器とは異なり、住居西側に分散する傾向が認められる。器形復元土器は比較的広範囲に分散する例も認められる。なお、本住居東半部は工事立会の対応範囲である。西側部より密度が低くまばらな遺物出土状況を確認したが、調査環境のため、出土状況図上には反映できなかった。



第50図　SI20 遺物出土状況図（縮尺 1/60）

第２節　掘立柱建物・柱穴列

ここでは、柱穴の規則的な配置により、何らかの建物が想定できた事例を扱う。複数の柱穴が方形状の配列となる遺構を掘立柱建物（SB）、直線状の配列となる遺構を柱穴列（SA）とする。

調査区内は遺構密度が高く、柱穴やピットは700基以上を検出した。このため、調査時において、形態や規模あるいは覆土によって、掘立柱建物や柱穴列を他の柱穴・ピットから分離抽出することは困難であり、その配列を特定できた事例はほとんどない。次に、実測図上での復元を試みたが、柱穴配列における定形性や規格性は明確には把握できなかった。このため、柱穴の間隔や深度に数値幅をもたせ、掘立柱建物に一般的に認められる方形あるいは亀甲形の柱穴配置を基準とし、類似の配列が認められた柱穴群を掘立柱建物および柱穴列として認定することとした。しかし、この認定には多少の恣意性に基づく誤認が含まれる可能性がある。また、掘立柱建物と柱穴列に認定した柱穴数は、柱穴・ピット総数の約1/7にあたることから、未抽出の建物が多数存在すると予想される。

１　掘立柱建物（第51～61図）

部分的な検出例を含め19棟を認定した。分布は大部分が調査区から西方に中心をもつ弧状を呈す柱穴・ピット集中域である弧状帯と重なり、一部が弧状帯外に位置する。全体的な配置としては弧状帯内と外側の二重弧状を呈す。弧状帯内に位置する掘立柱建物は11棟（SB03～12・17）がある。各建物はおおむね弧状帯に沿って長軸をもち、長軸面が弧中心を向く配列となる。建物間に距離をもたず比較的密着して構築される。弧状帯外に位置する掘立柱建物は８棟（SB01・02・13～16・18・19）がある。各建物はおおむね弧状帯に対して直交する長軸をもち、短軸面が弧中心を向く配置となる。弧状帯内の建物と比べて配置間隔が疎らであり、集中箇所も認められない。

全形がうかがえる建物を構成する柱穴基数とその配置の平面形には、以下の６類が認められる。

１類　柱穴４基で構成し、長方形を呈す建物（SB02・08・18・19）

２類　柱穴６基で構成し、長方形を呈す建物（SB12・17）

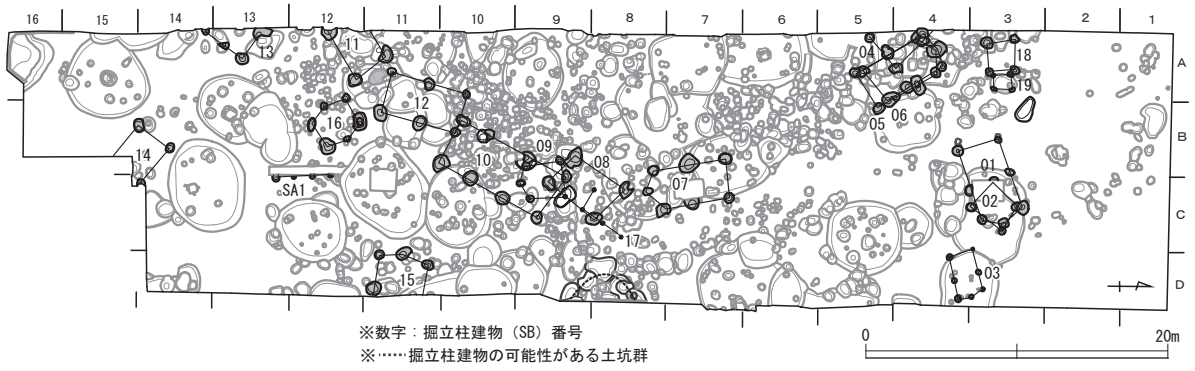
３類　柱穴８基で構成し、長方形を呈す建物（SB10）

４類　一短辺の中央外側に１基追加した柱穴７基で構成し、長五角形を呈す建物（SB01・03・05～07）

５類　両短辺の中央外側に１基追加した柱穴６基で構成し、六角形を呈す建物（SB09）

６類　両長辺の中央外側に１基追加した柱穴６基で構成し、長六角形を呈す建物（SB16）

以上の分類における帰属棟数では、１類と４類が多く、全体の６割が該当する。４～６類に認められる各辺の中央外側に配置される柱穴は、いわゆる棟持柱の柱穴として想定される。SB01・03・05～07・09・15では建物短軸面から50cm以内の距離に配置される。また、１類に一短辺の中央外側に１本追加



第51図　堀立柱建物・柱穴列配置図（縮尺 1/500）

する５本構成の配置や２類に両短辺の中央外側に各１本追加する８本構成の配置は確認できない。

規模では、４類のうち、SB01・05～07がほぼ共通する。長辺と短辺の比率は約1.7：１となる。この長短辺比は比較的小型のSB03においても共通し、さらに長短比が共通する比較的大型のSB01・05～07との規模割合も約1.7：１となることから、両者には一定の規格性・比率性がうかがえる。長辺に３本以上の柱を配置する建物（２～４類）では、長辺側の柱間が短辺よりやや短くなり、比率は長辺側１に対して短辺側が1.1～1.2となる事例が多い。４本柱を主体とする建物（１・５・６類）では、柱間の比率はSB08で約1.5：１、SB16で約1.4：１となる。ただし、比較的小型のSB16では柱間比率が約１：１となる。

出土遺物は大部分の柱穴で認められ､土器小片を主体とする。土器の時期は中期中葉から後葉であり、掘立柱建物は竪穴住居同様におおむね該期に属すと判断される。柱材抜き取り後の遺物廃棄が認められる事例には、SB04－P2（第70図）・SB13－P4（第71図）・SB16－P3（第71図）がある。その他、建物との直接的な関係はうかがえないが、SB10－P7の埋没後あるいは埋没途中に土器埋設遺構３が構築されている（第62図）。

以下、各掘立柱建物の内容を記述する。

SB01（第52図）位置はC・D3区を中心とする。P1～7で構成し、柱穴配列４類に該当する。主軸方向はN69°Eとなる。規模は長軸487cm、短軸284cm、長辺の柱間は215～281cmを測る。主な切り合い関係はSI01、SB02、SK13・16を切り、SQ6に覆われる。

SB02（第52図）位置はC3区である。P1～4 で構成し、柱穴配列１類に該当する。主軸方向はN40°Eとなる。P1 の大部分は試掘坑により欠失する。主な切り合い関係はSI01を切り、SB01に切られる。

SB03（第61図）位置はD3・4区を中心とする。P1～7 で構成し、柱穴配列４類に該当する。P7を除く平面形は平行四辺形となる。主軸方向はN73°Eとなる。規模は長軸287cm、短軸175cm、長辺の柱間は115～161cmを測る。主な切り合い関係はSI01・02を切り、SQ2 に覆われる。

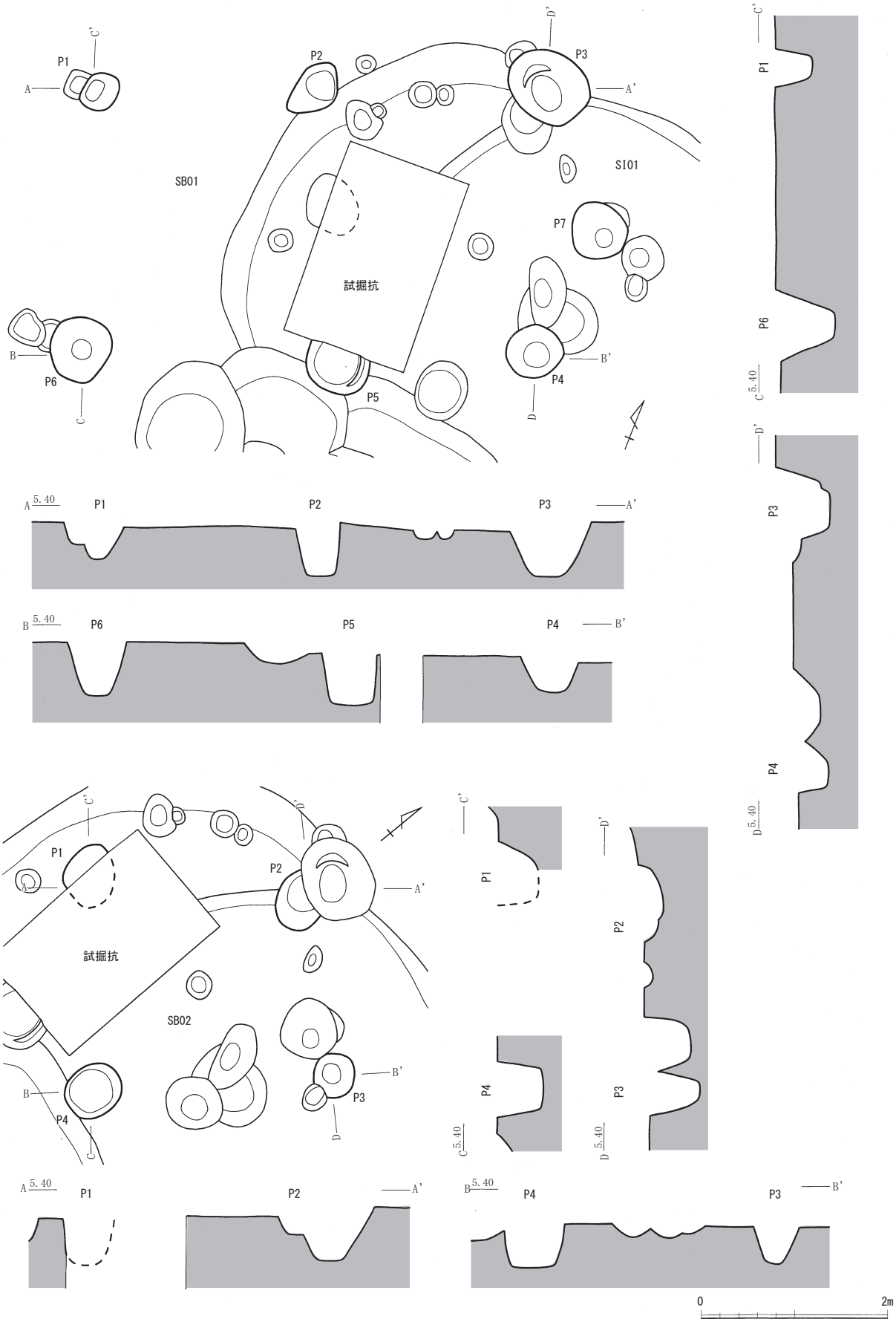
SB04（第53図）位置はA4・5区を中心とする。北西側は調査区外に延び、全体の柱穴配列は不明である。P1～3が該当する。主軸方向はN46°Wとなる。柱間は長辺で263cm、短辺で275cmを測る。主な切り合い関係はSK11を切り、SB05・06、SK22に切られる。

SB05（第53図）位置は A4・5区を中心とする。P1～7で構成する。SB06の柱穴とは40～80cmずれるのみであり、建て替えも推測される。同様な事例は SB05・06 に限られる。柱穴配列４類に該当させたが、P7の所属は明確ではない。P7の土層確認はできなかったが、比較的規模が大きいことから、SB05・06に対応して伴う切り合う２基の柱穴の可能性もある。主軸方向はN31°Wとなる。規模は長軸475cm、短軸279cm、長辺の柱間は212～255cmを測る。主な切り合い関係はSI03、SB04、SK11を切り、SB06、SK22に切られる。

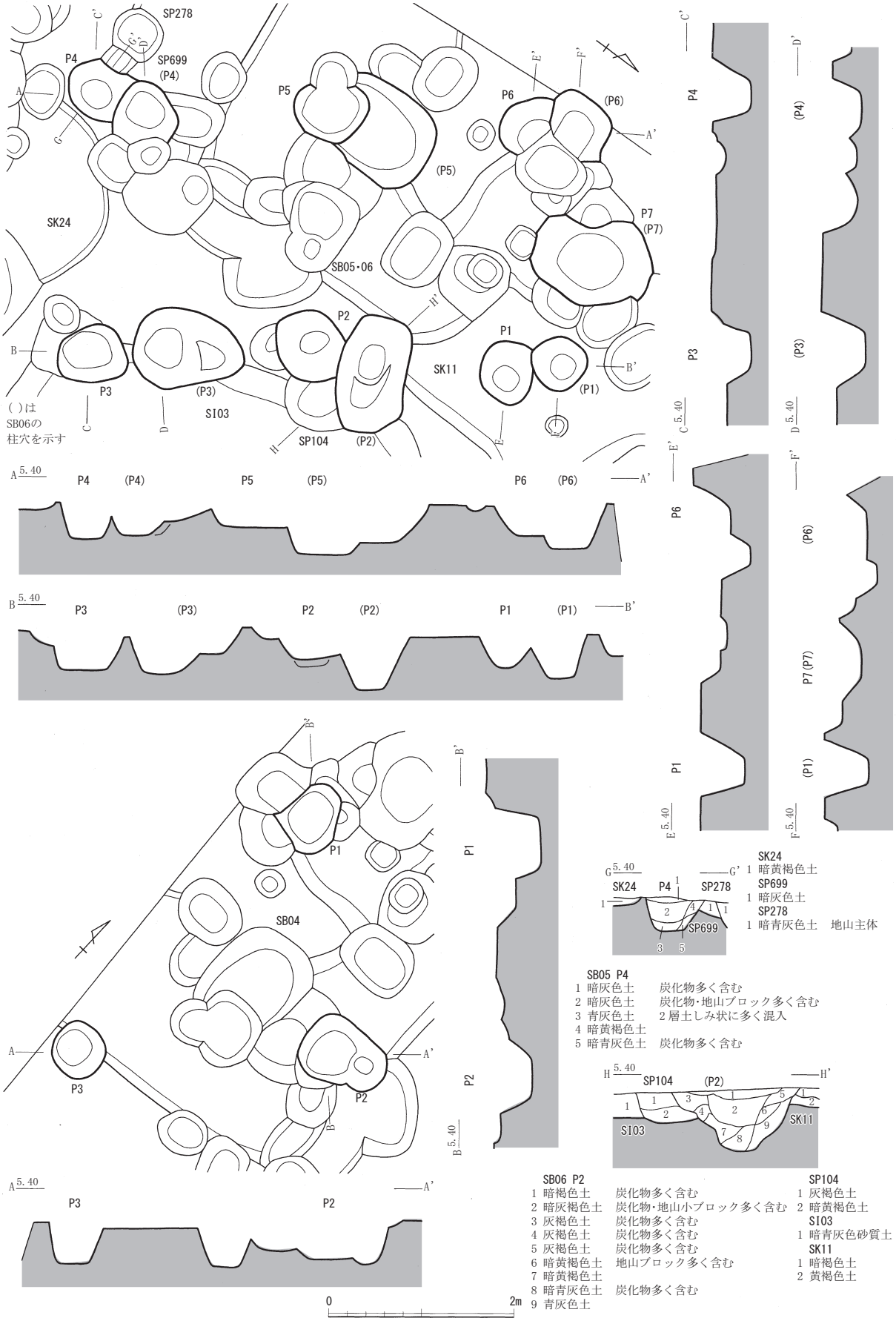
SB06（第53図）位置はA4･5 区を中心とする。P1～6で構成し､前述のとおりP7も付属する可能性がある。柱穴配列４類に該当させた。主軸方向はSB06と同じである。規模は長軸465cm、短軸258cm、長辺の柱間は209～254cmを測る。主な切り合い関係はSI03、SB04・05、SK11を切り、SK22に切られる。

SB07（第54図）位置はC7区を中心とする。P1～7 で構成し、柱穴配列４類に該当する。主軸方向はN13°Wとなる。規模は長軸489cm、短軸271cm、長辺の柱間は195～248cmを測る。主な切り合い関係はSI06・10、SK39を切る。

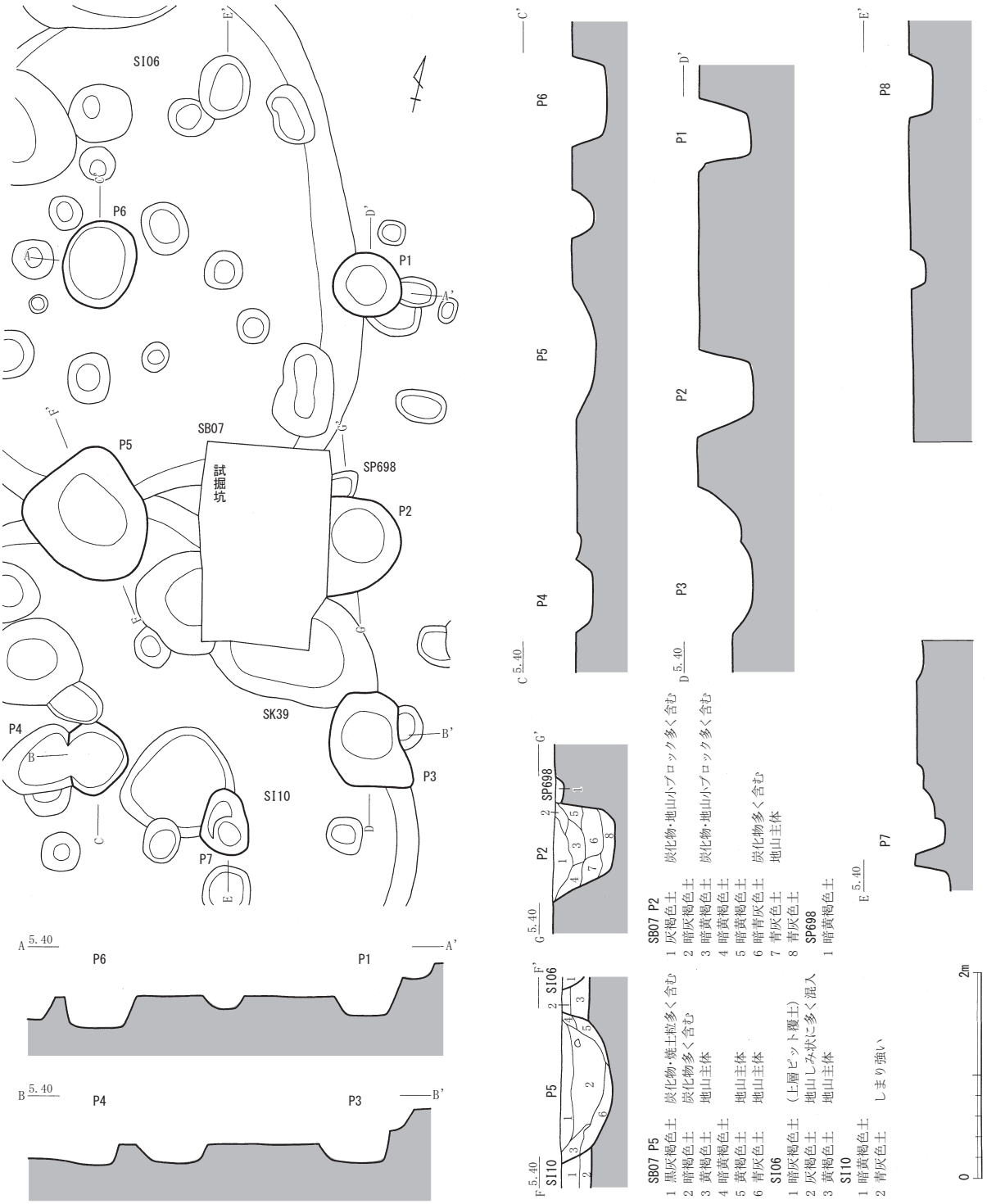
SB08（第55図）位置はC8区を中心とする。P1～4 で構成し、柱穴配列１類に該当する。主軸方向はN34°EWとなる。規模は長軸408cm、短軸281cmを測る。主な切り合い関係はSI10を切る。SK54との先



第52図　SB01・02 実測図（縮尺 1/60）



第53図　SB04ー06 実測図（縮尺 1/60）

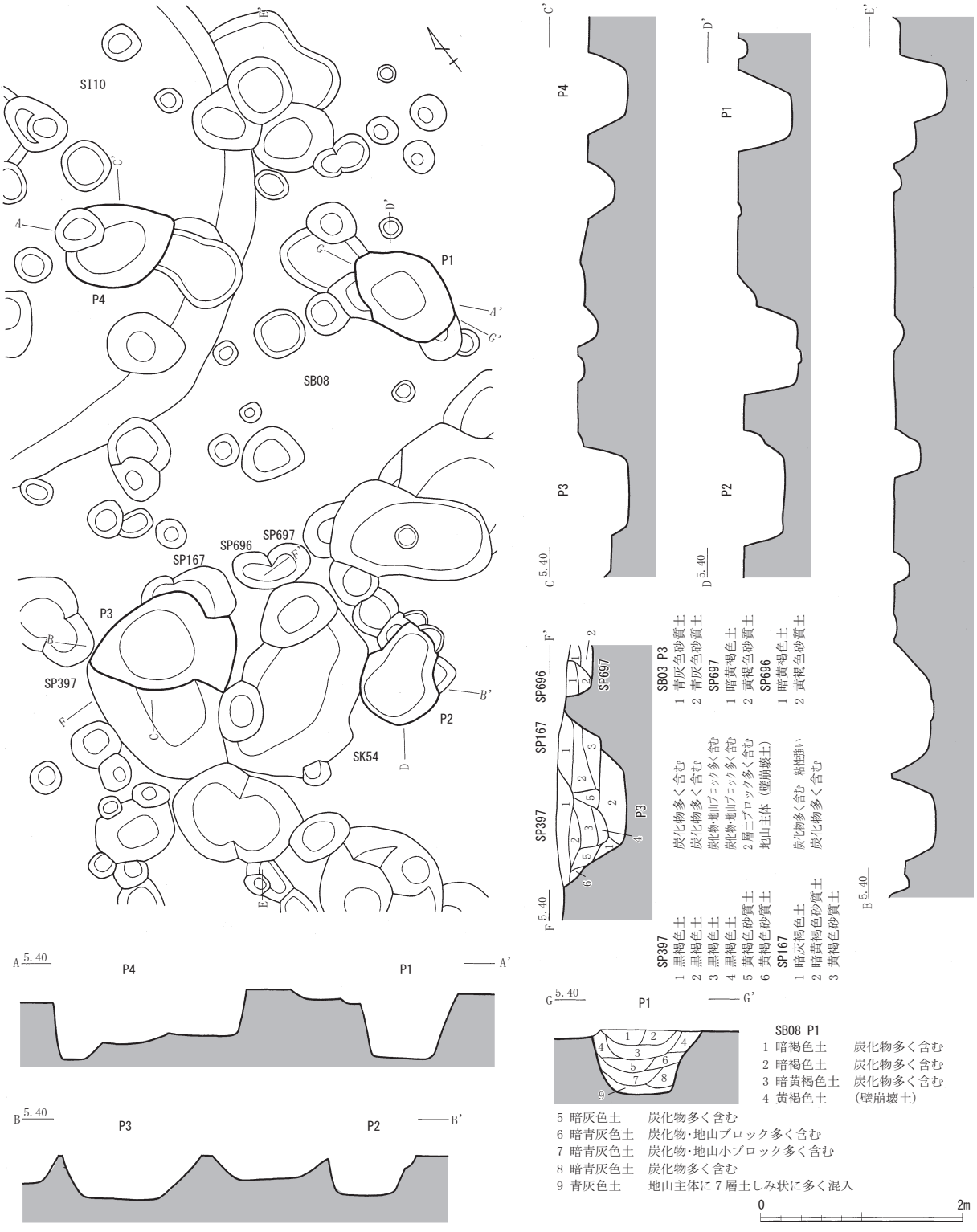


第54図　SB07 実測図（縮尺 1/60）

後関係は不明である。

SB09（第56図）位置はB・C9区である。P1～6で構成する。柱穴配列５類に該当するが、平面は正方形に近い。主軸方向はN7°Wとなる。規模は長軸309cm、短軸239cm、長辺の柱間は236・239cmを測り、長短辺の柱間比率はほぼ１：１となる。主な切り合い関係はSB10､土器埋設遺構２、SK54･59を切り、土器埋設遺構３に切られる。

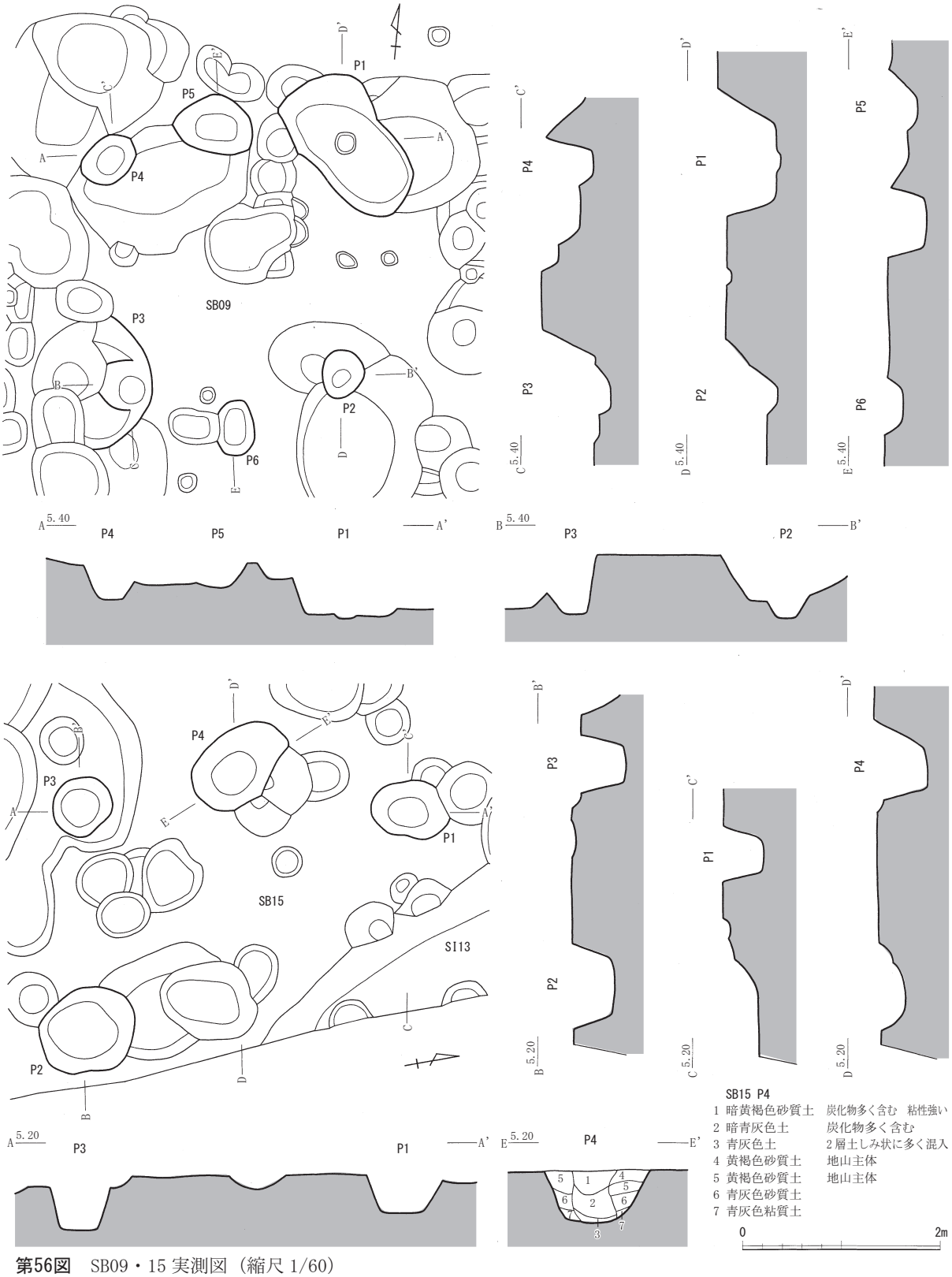
SB10（第57図）位置はB・C9・10区を中心とする。P1～8で構成し、柱穴配列３類に該当する。主軸



第55図　SB08 実測図（縮尺 1/60）

方向はN26°Wとなる。規模は長軸785cm、短軸325cmを測る。柱穴配列１類に該当する４本柱の建物としてP1・2・7・8とP3～6が分離し、２棟並列する可能性もある。主な切り合い関係はSI14、土器埋設遺構２、SK54・59を切り、SI08・09、土器埋設遺構３に切られる。

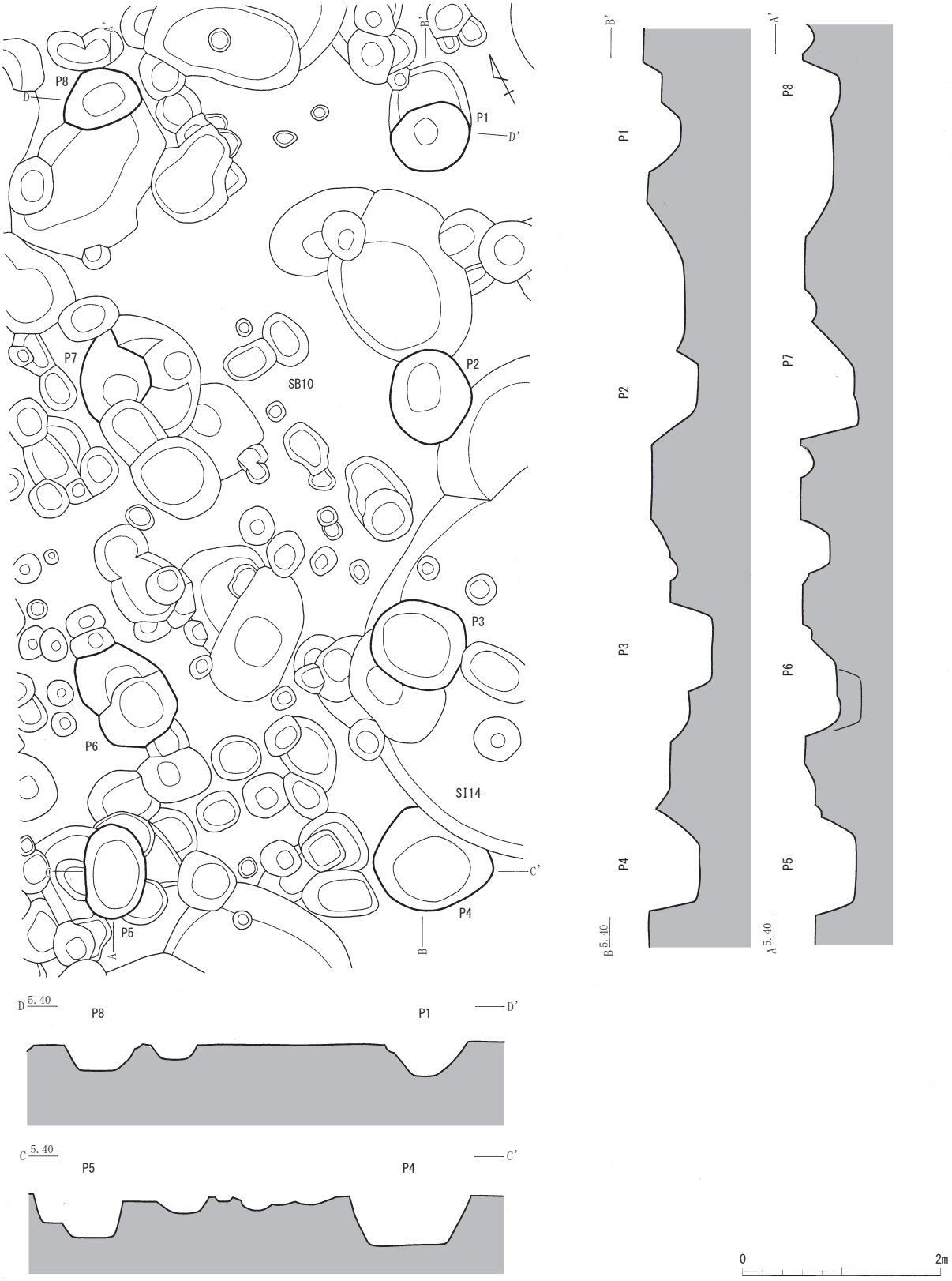
SB11（第59図）位置はA11・12区である。南西部側は調査区外に延びる。P1～3が該当する。主軸方向はN58°Eとなる。各柱間は277・375cmを測る。主な切り合い関係はSI16、SK74を切る。



第56図　SB09・15 実測図（縮尺 1/60）

SB12（第58図）A・B10・11区に位置する。P1～6で構成し、柱穴配列２類に該当する。主軸方向はN14°Eとなる。規模は長軸524cm、短軸282cm、長辺の柱間は242 ～282cmを測る。主な切り合い関係はSK68・70・72を切る。

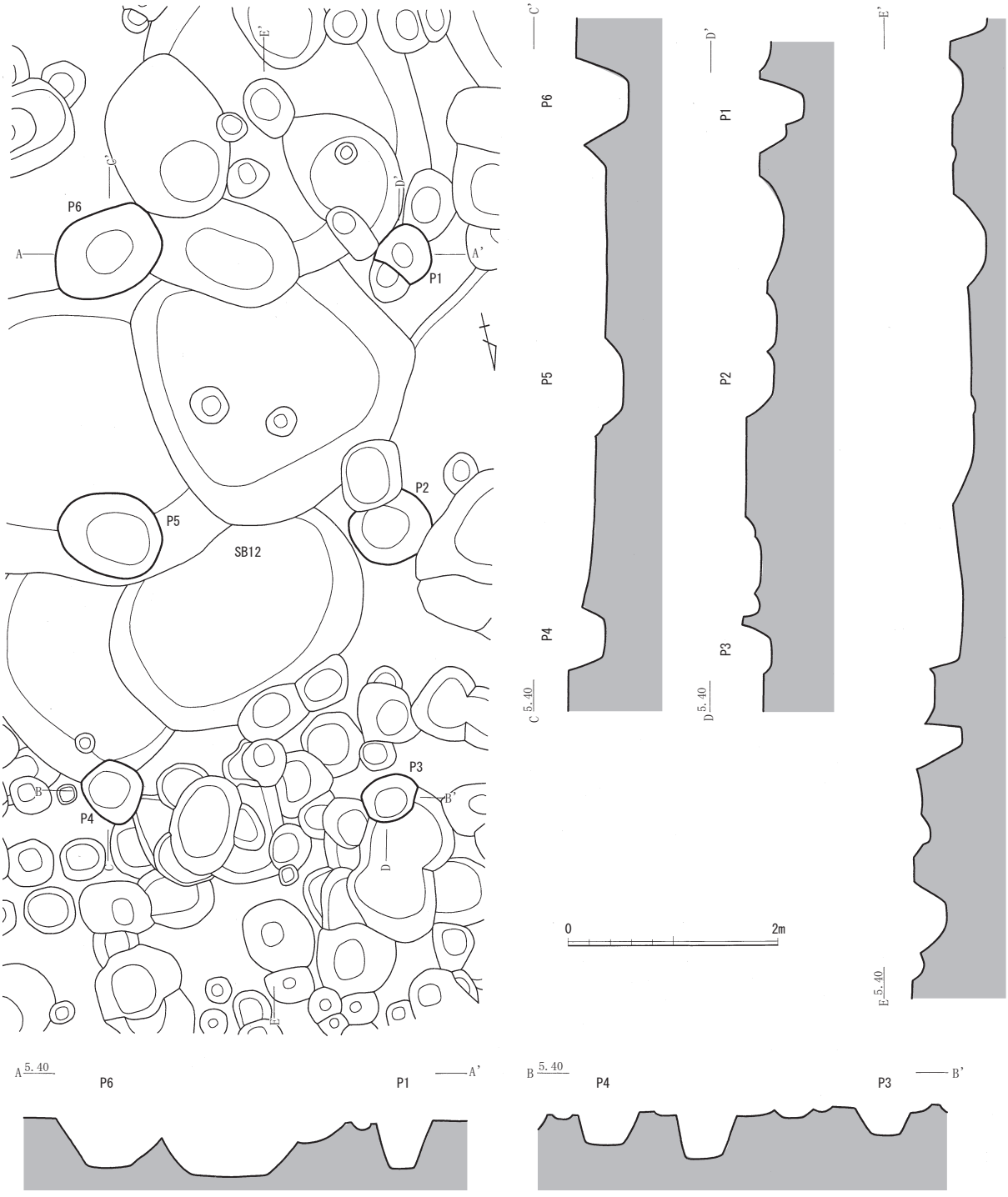
SB13（第59図）位置はA13区である。P1～4が該当する。柱穴配列２類もしくは４類に該当する可能



第57図　SB10 実測図（縮尺 1/60）

性がある。主軸方向はN36°Eとなる。規模は短軸258cm、長辺の柱間は145・155cmを測る。主な切り合い関係はSK83に切られる。

SB14（第59図）位置はB14区を中心とする。南西側は調査区外に延びる。P1～3が該当する。主軸方

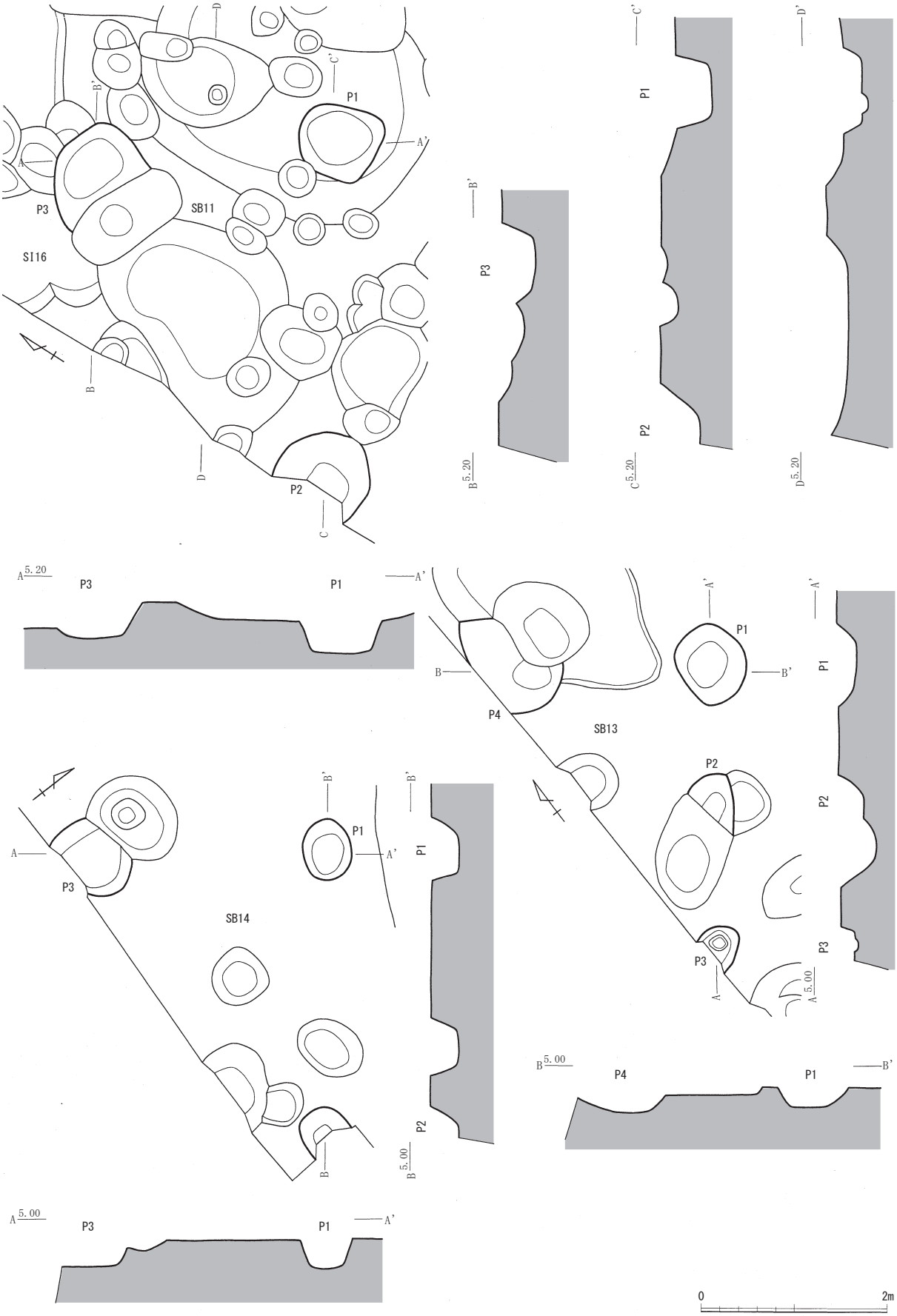


第58図　SB12 実測図（縮尺 1/60）

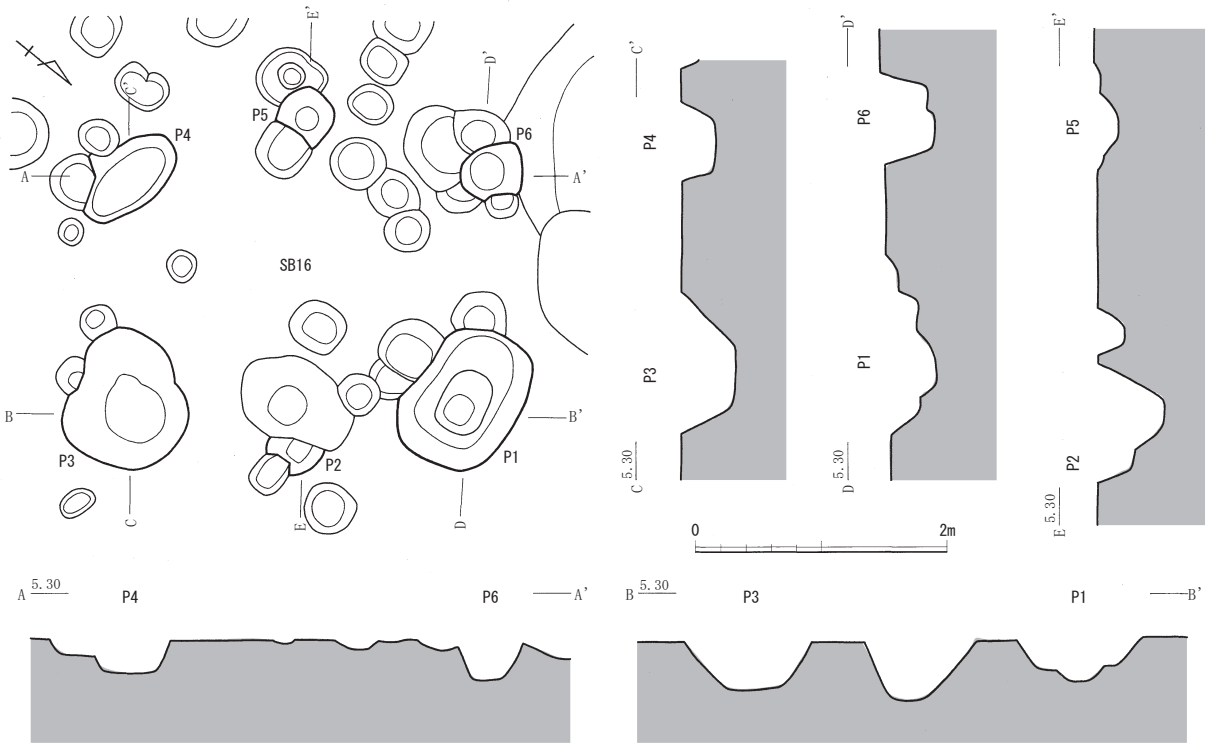
向はN52°Wと推測される。規模は短軸310cm、長辺の柱間は261cmを測る。

SB15（第56図）位置はD11区である。P1～4が該当する。柱穴の位置と柱間長からSB16と同様に柱穴配列６類の可能性がある。主軸方向はN79°Wとなる。規模は短軸335cm、長辺の柱間は232cmを測る。主な切り合い関係はSK94を切る。

SB16（第60図）位置はB12区である。P1～6で構成し、柱穴配列６類に該当する。P1・3は他と比べ規模が大きい。主軸方向はN38°Wとなる。規模は全長262cm、長軸285cm、短軸191cmを測る。主な切り合



第59図　SB11・13・14 実測図（縮尺 1/60）



第60図　SB16 実測図（縮尺 1/60）

い関係はSK74を切る。

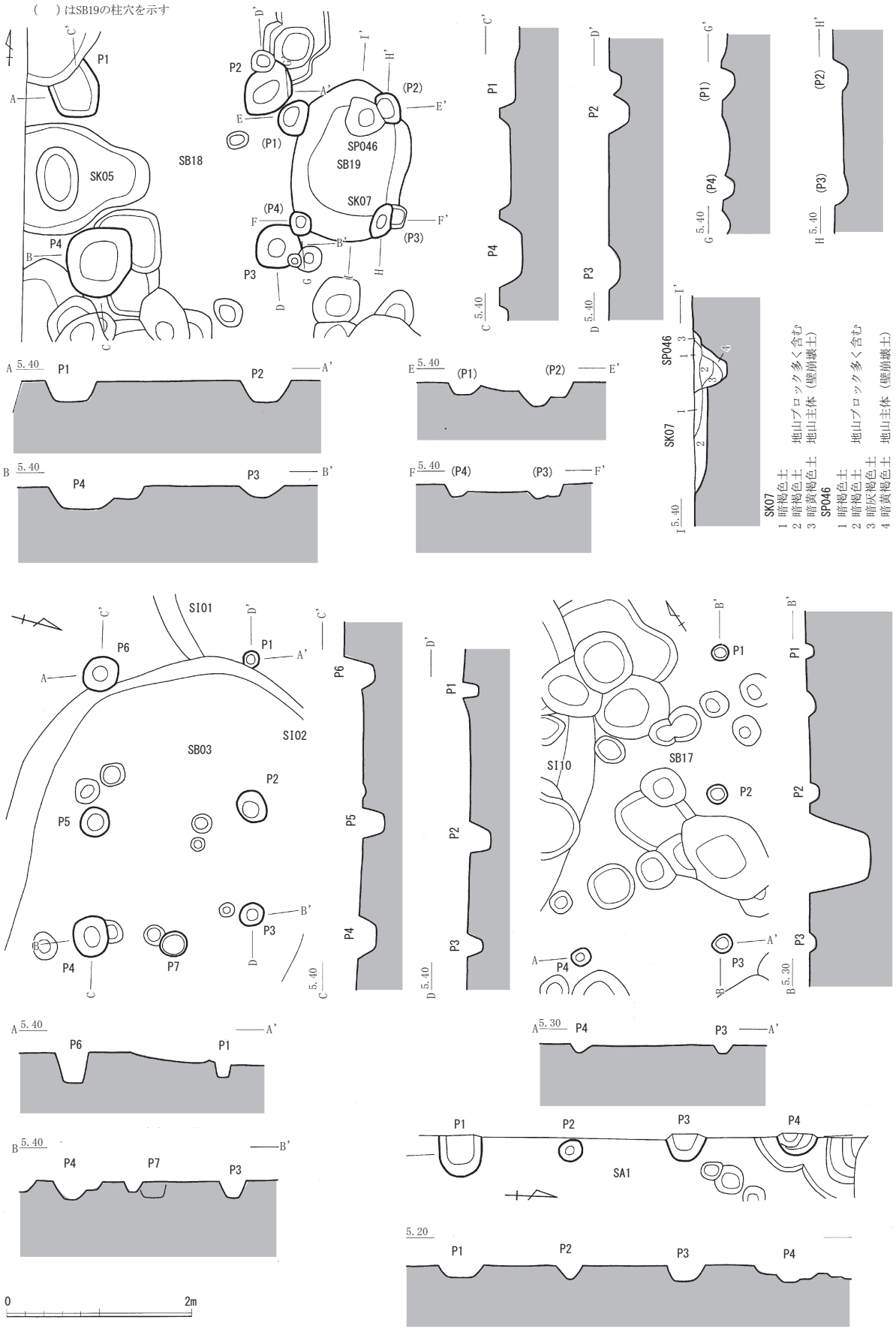
SB17（第61図）位置はC8区を中心とする。小規模な柱穴P1～4が該当する。北西辺の柱穴はSI10内に位置すると判断されるが確認できなかった。柱穴配列２類に該当すると判断される。主軸方向はN34°Eとなる。規模は長軸316cm、短軸155cm、長辺の柱間は155・163cmを測る。SI10との先後関係は不明である。なお、他の建物と同様な柱穴深度とするためには、遺物包含層であるⅤ層上面からの掘り込みが必要となることから、本建物は他の建物とは時期や性格が異なる可能性がある。

SB18（第61図）位置はA3区である。P1～4で構成し、柱穴配列１類に該当する。主軸方向はN88°Eとなる。規模は長辺で211cm、短辺で171cmを測る。近接するSB19、SK05・07とは施設的な関連性もうかがえる。主な切り合い関係はSK04に切られる。

SB19（第61図）位置はA3区である。小規模な柱穴P1～4で構成し、柱穴配列１類に該当する。主軸方向はN5°Wとなる。規模は長軸122cm、短軸88cmを測る。切り合い関係ではSK07を切って構築されるが、SK07の平面四隅に柱穴が位置することから関連性や配置性がうかがえる。

２　柱穴列（第61図）

SA1のみを認定した。周辺には対となる柱穴群は確認できなかった。位置はB12・13区である。４基の柱穴で構成する。列方向はN35°Eとなる。規模は362cm、柱間は113～125cmを測る。柱穴の形態や規模は掘立柱建物の柱穴と相違しない。各柱穴からは、土器小片が出土した。土器の時期は中期中葉から後葉であり、本遺構もおおむね該期に属すと判断される。



第61図　SB03・17ー19，SA1 実測図（縮尺 1/60）

第３節　土器埋設遺構（第 15・33・62 図）

ここでは、土坑や柱穴の内部に、完形に近い土器の埋置が認められた遺構を土器埋設遺構とする。計８基検出した。なお、１個体分の大形破片が密集して出土する事例は含めていない。

以下、土器を埋設する遺構の状態により分類し、各遺構の内容を記述する。

１類　土器埋設用の遺構を別途構築するもの。３例（土器埋設遺構１・２・８）が該当する。土器外側に裏込状の埋土が堆積する。いわゆる埋甕が該当し、土器の状態は正位（同１・８）または逆位（同２）がある。土器内部からの遺物の出土はなく、覆土にも特徴的な含有物は認められない。

２類　柱穴の埋没途中または埋没後に土器埋設用の遺構を別途構築するもの。２例(土器埋設遺構３・４）が該当する。土器は柱穴上端部に位置する。埋設用の遺構の平面規模には､柱穴幅を超えるもの（同４)、柱穴幅内に収まるもの（同３）がある。土器の状態は正位（同３）と横位（同４）がある。

３類　埋没途中の土坑や柱穴の内部に埋置するもの。３例（土器埋設遺構５～７）が該当する。土器は遺構中位から下位に位置する。土器の状態は逆位（同５・６）と横位（同７）がある。

土器埋設遺構１（第62図）位置はC3区である。遺構の平面は略円形を呈し、規模は径46cm、深さ27cmを測る。SI01から約40cm北西で検出したが、関連は不明である。土器（第112図２）は口縁部を一部欠損する。土器内部の土層は単層でⅥ層土を基本とする。土器は中期中葉に位置づけられる。

土器埋設遺構２（第62図）位置はC9区である。遺構の平面は略円形を呈し、規模は径65cm、深さ43cmを測る。SK59を切って構築される。土器（112図１）は胴部下端から底部を欠損する。打ち欠きの可能性が高い。炭化物の付着は認められない。土器内部の土層はⅥ層土を基本とし、３層に分層した。上位２層では炭化物の含有が認められた。土器は中期中葉に属す可能性が高い。

土器埋設遺構３（第62図）位置はB9区である。SB10－P7の上部で検出した。遺構の平面は略円形を呈し､規模は径40cm､深さ18cmを測る。土器（第113図１）は台付鉢であり､脚部と口縁部を一部欠損する。脚部の欠損は打ち欠きの可能性がある。その他、土器内部に重なる状態で１点（同図２)、埋設遺構内で１点（同図３）が出土した。３は中期後葉に位置付けられ、１・２も該期に属す可能性が高い。

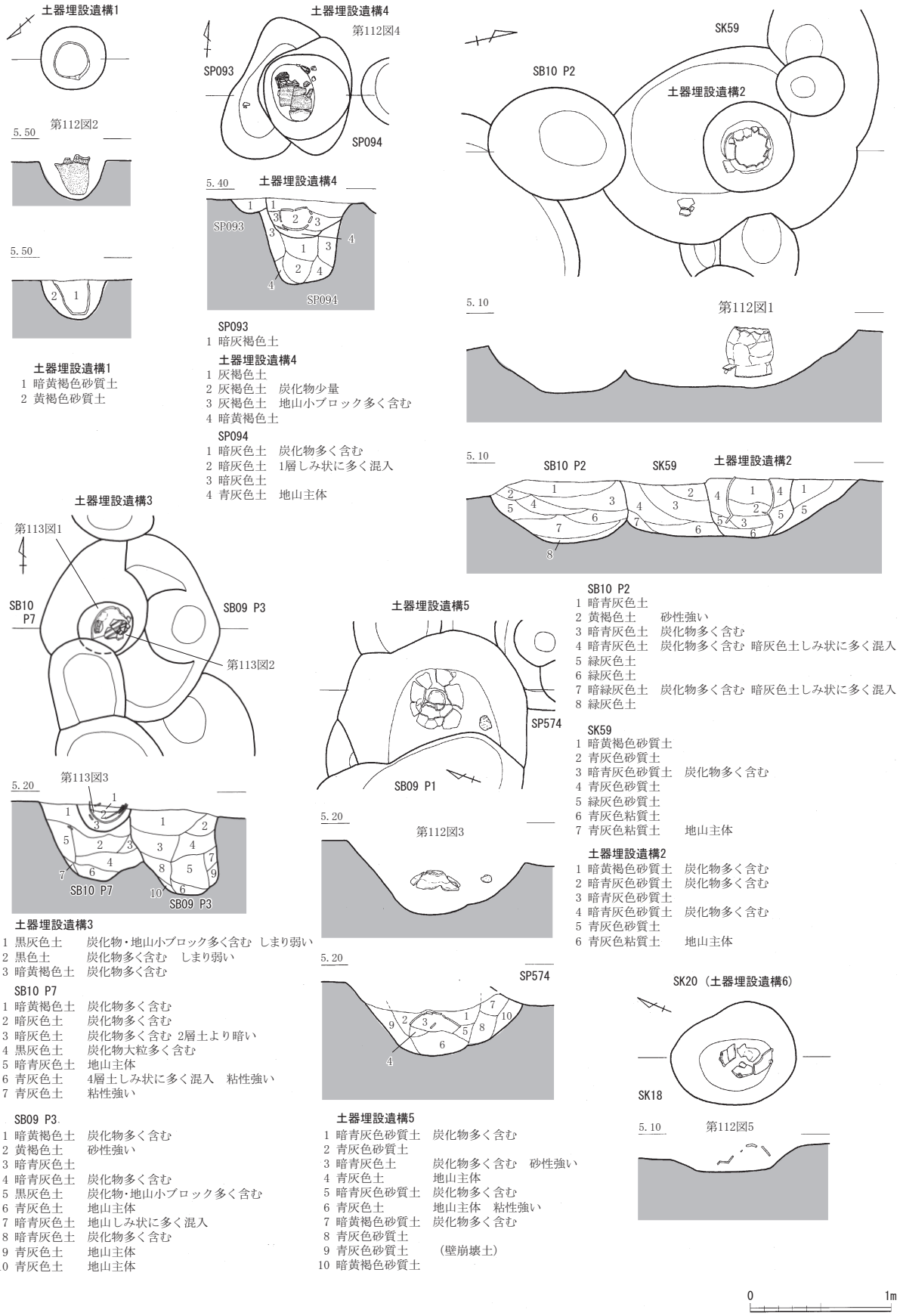
土器埋設遺構４（第62図）位置はC6区である。SP094の上部で検出した。遺構の平面は略円形を呈し、規模は長径85cm、短径63cm、深さ28cmを測る。土器（第112 図４）は口縁部と底部を一部欠損する。土器内部の土層は単層である。土器は中期中葉に位置づけられる。

土器埋設遺構５（第62図）位置はC9区である。SP549の下部で検出した。SP549の平面は略円形を呈すと推測され、規模は径133cm、深さ53cmを測る。土器（第112 図３）は胴部より上位を欠損する。土器付近から別の土器小片が１点出土した。いずれの土器も中期中葉に位置づけられる。

土器埋設遺構６（第62図）位置はC4区である。SK20の底部付近で検出した。SK20の平面は略楕円形を呈し、規模は長径89cm、短径73cm、深さ19cmを測る。土器（第112図５）は６割程度の残存率であり、その他の出土遺物はない。土器は中期中葉に位置づけられる。

土器埋設遺構７（第15図）位置はD7区である。SI05－P10の中位で検出した。P10の平面は略円形を呈すと推測され、深さ59cmを測る。土器（第83図４）は口縁部と底部中央を打ち欠きにより欠損する。土器内外からの遺物の出土はない。土器は中期後葉の可能性が高い。

土器埋設遺構８（第33図）位置はC11区である。SI14の南西側壁面付近で検出した。いわゆる屋内埋甕である。遺構の平面は略円形を呈し、規模は径59cm、深さ33cmを測る。土器（第91図３）は完形であり、SI14床面よりやや突出する。土器は中期中葉に位置づけられる。。



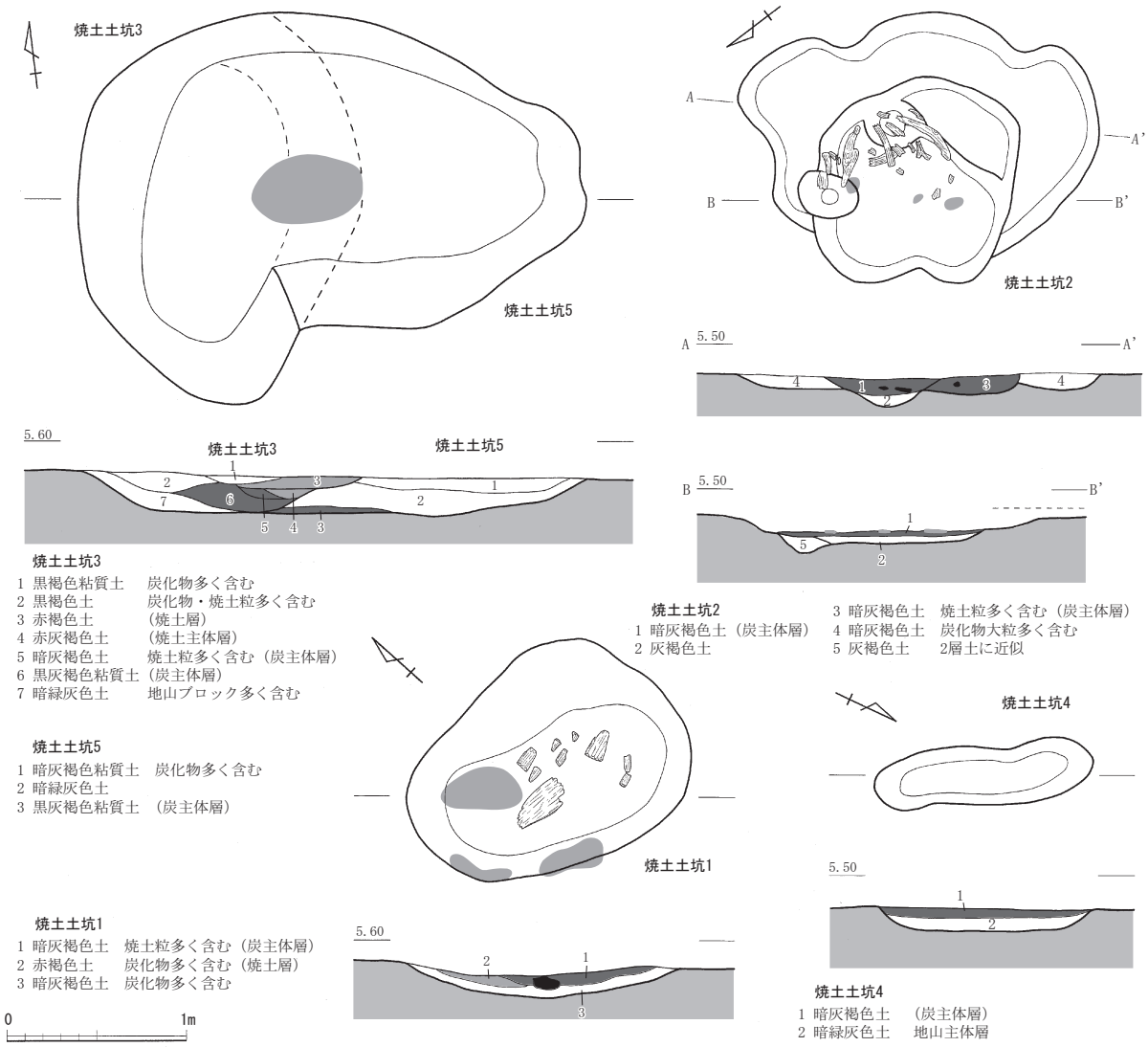
第62図　土器埋設遺構実測図（縮尺 1/40）

第４節　焼土土坑（第 63 図）

ここでは、内部に焼土や炭化物の集中が認められた土坑を焼土土坑とする。計５基検出した。分布は調査区北部のA・B1～3区に限られる。切り合い関係をもたず、単独で存在する例が３例ある。形態や規模には多様性が認められる。覆土上層を中心として、指頭大の炭化物を多量に含み、その他、上層で焼土面や複数の炭化木を検出した例がある。焼成粘土塊や焼骨片の出土はほとんどない。性格や用途は明確ではないが、炭化物や焼土面および炭化木から焚火場であったと判断される。出土遺物には土器や石器があるが、総じて少ない。大部分が覆土上層からの出土である。土器の多くが摩滅した小破片であることから、遺物は流れ込みなどによる二次的な混入品の可能性が高い。所属時期は特定できないが、出土土器から中期後葉に属す可能性がある。

以下、各基の内容を記述する。

焼土土坑１（第63図）位置はB3区である。平面は略楕円形を呈し、規模は長軸163cm、短軸123cm、深さ20cmを測る。主軸方向はN63°Wとなる。上方の遺物包含層のＶ層下部で、遺構確認面より盛り上がる状態で部分的に焼土面（２層上面）を確認した。覆土上層（１－３層間）で焚火材と考えられる大小の炭化木を９点検出した。炭化木は板状を呈すものが多い。



第63図　焼土土坑実測図（縮尺 1/40）

焼土土坑２（第63図）位置はB2区である。平面は不整楕円形を呈し、規模は長軸203㎝、短軸151㎝、深さ16㎝を測る。主軸方向はN23°Eとなる。焼土土坑１と同じく、遺構確認面より盛り上がる状態で部分的な焼土面３箇所を確認した。覆土上層（１層）中から焚火材と考えられる棒状炭化木を10数点検出した。棒状炭化木は平面的にも密集し、その西端側に焼土面が位置する。

焼土土坑３（第63図）位置はB1区である。平面は略楕円形を呈し、規模は長軸223㎝、短軸161㎝、深さ23㎝を測る。主軸方向はN24°Eとなる。焼土土坑５を切るが、底面はほぼ同一となる。覆土上層から中層にかけて焼土層と炭化物集中層が堆積する。

焼土土坑４（第63図）位置はB3区である。平面は不整長楕円形を呈し、規模は長軸123㎝、短軸33㎝、深さ13㎝を測る。主軸方向はN35°Wとなる。覆土上層に炭化物集中層が堆積する。

焼土土坑５（第63図）位置はB1区である。平面は略楕円形を呈し、規模は長軸が残存値で178㎝、短軸173㎝、深さ23㎝を測る。主軸方向はN87°Wとなる。覆土最下層が炭化物集中層となる。焼土土坑３に切られる。

第５節　土坑

ここでは、径が１ｍ以上の用途不明の遺構を土坑（SK）として扱う。計96基検出した。分布はおおむね調査区内全域に認められるが、竪穴住居や柱穴・ピット集中部である弧状帯近辺に存在する。形態や規模には多様性が認められる。出土遺物は土器を主体とし、すべての土坑で認められるが、出土量には多少がある。出土土器は全体として中期中葉から後葉にかけての時間幅を有する。竪穴住居同様に多くが混在した状況で出土するが、単時期のみの出土例が若干認められる。

以下、平面規模により分類し、類ごとに主要な土坑の内容を記述する。その他の土坑については、一覧表（第１表）への記載に替えることとする。

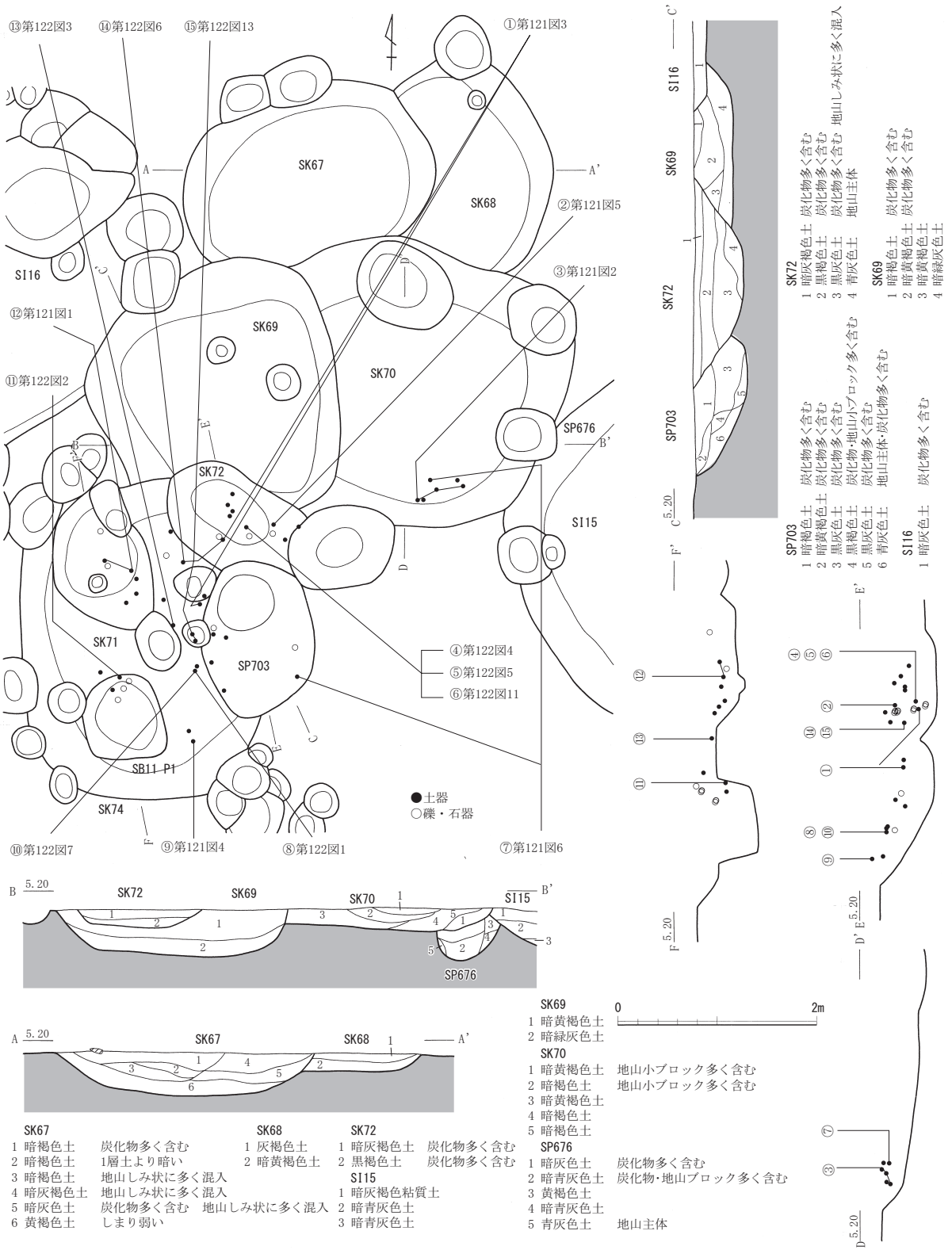
１類　平面が楕円形を中心とし、長軸が３ｍ以上を測る比較的大型のもの。24基が該当し、全体の約２割を占める。深さは0.1ｍ程度（SK16・68・70など）から0.4ｍ超（SK35・36・67・84・85）まであり、数値的な偏りは認められない。平面には長楕円形（SK55･61･88）や隅丸方形や長方形に近似（SK22･23・67～70・74）、隅丸五角形（SK18）、不整形（SK11）がある。規模とも関係すると考えられるが、単独で存在する事例は少なく、竪穴住居や本類土坑と近接する、または切り合う事例が多い。遺物はすべての土坑から出土するが、大形破片や略完形の土器が出土する事例は１例（SK74）と少ない。

SK11（第66図）位置はA4・5区である。調査区より西側へ延びる。平面は不整形であり、残存長は５ｍを超えるが、深さは0.2ｍ程度と浅い。覆土の色調は周辺の遺構とは異なり、灰色が強い。

SK18（第66図）位置はC4区である。SI04に切られる。平面はSI04と類似する隅丸五角形を呈す。内部に存在するSK19（土器埋設遺構６）・20とは、共時性を有する一連の遺構群の可能性がある。

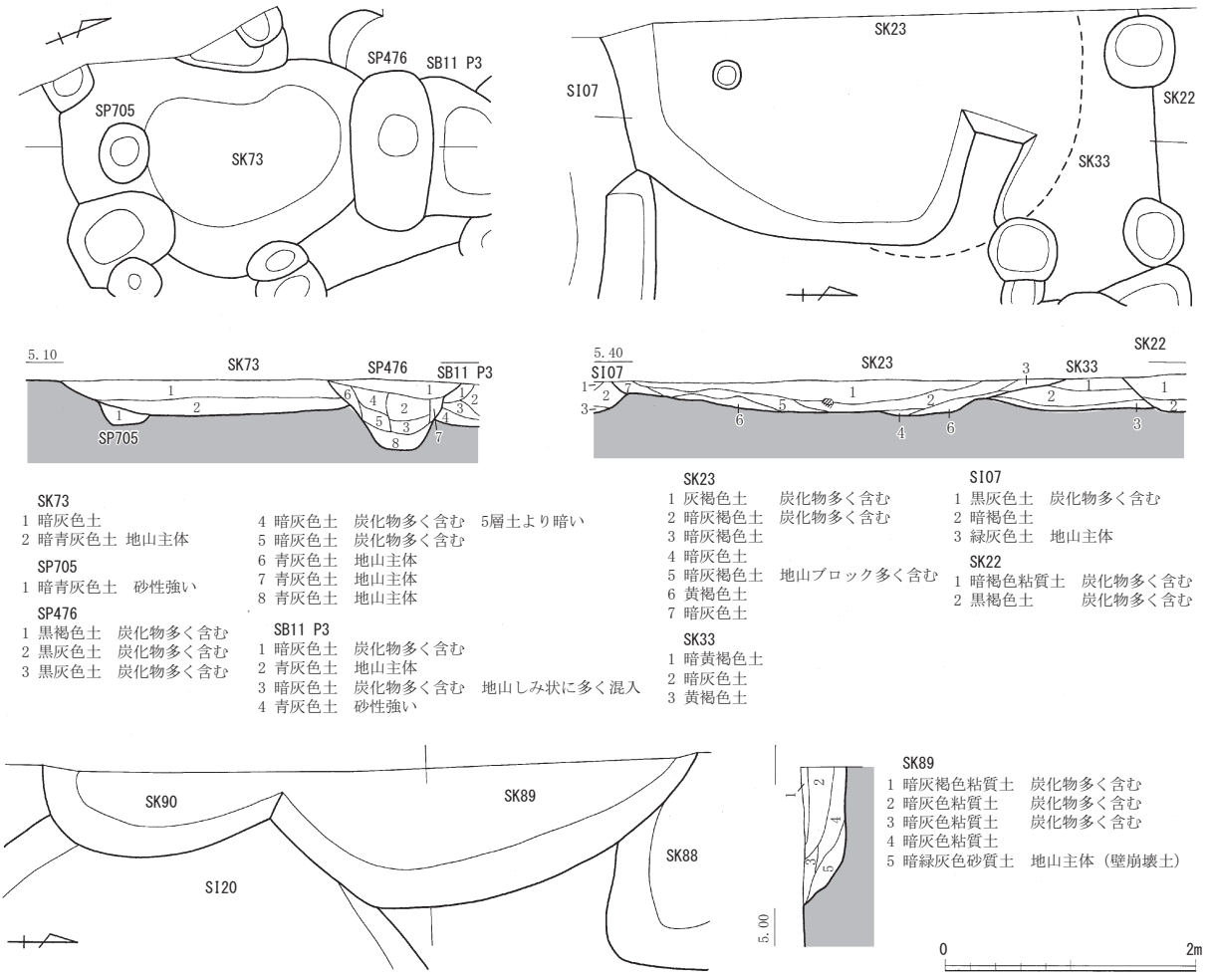
SK67～70・74（第64図）位置はB11区を中心とし、SI15とSI16の間に密集する。平面は隅丸長方形に近似し、規模も最大長2.5ｍ以上となる。深さには深浅があり、浅い土坑（SK68･70）が深い土坑（SK67･69）に切られる。覆土はおおむねレンズ状堆積となり、下層が厚く堆積する。出土遺物はSK67・74を除き少ない。SK74では大形破片の土器が多く出土した。平面･垂直分布からは顕著なまとまりはうかがえず、中期中葉と後葉の土器が混在して出土した（第121図・第122図１～13）。

SK89（第65図）位置はA14･15区である。大部分が調査区より西方に延びる。SI20、SK88･90を切る。柱穴や遺物の集中出土は認められないが、規模や形態から竪穴住居の可能性が指摘できる。



第64図　土坑実測図１（縮尺 1/60）

２類　平面が楕円形を中心とし、長軸が１～３ｍを測るもの。64基該当し、全体の約７割を占める。深さには深浅が認められ、0.1～0.7ｍまでの数値幅をもつ。0.3m以下が全体の７割を占め、中央値は0.2ｍとなる。深度が0.3mを超えるものは、覆土の観察からは判断できなかったが、柱穴の可能性がある。分布上での特徴は認められず、おおむね他の遺構と近接して存在する。単独存在する事例（SK02・04・



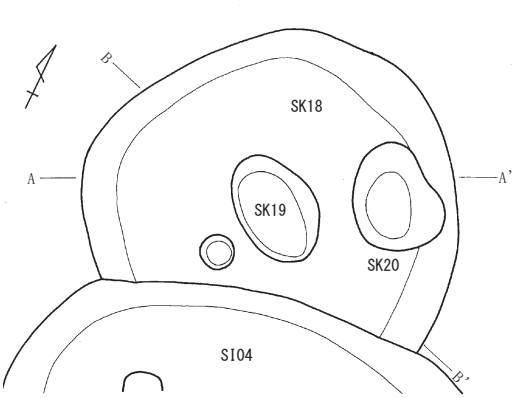
第65図　土坑実測図２（縮尺 1/60）

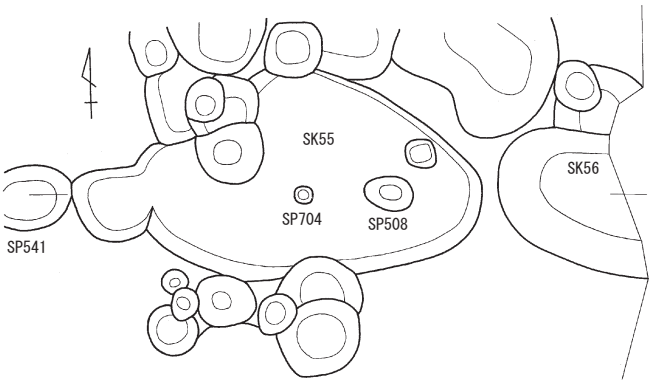
10 など）や１類と同様に竪穴住居に近接または切り合う事例（SK86・87・91 など）も認められる。遺物はすべての土坑から出土するが、大形破片や略完形の土器が多量に出土する事例は７例（SK05・09・30・38・40・41・76）と少ない。

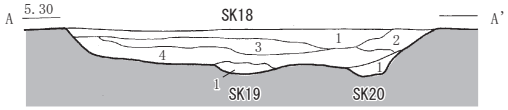
SK30（第69図）位置はA・B6区である。SI07の北東側に近接する。平面が不整楕円形を呈し、深さ18cmを測る。底面中央にピット状の落ち込みをもつが、覆土には柱跡は認められなかった。この落ち込み上位には自然礫の板状剥離片が蓋状に密集する。板状剥離片には被熱痕や付着物は認められない。落ち込み内部からの遺物の出土はない。用途・性格は不明であるが、このような事例は本土坑のみである。遺物は土器を中心とし、遺構確認面よりやや盛り上がる状態で覆土上層から比較的多く出土した。出土土器は中期後葉を中心とする（第116図）。

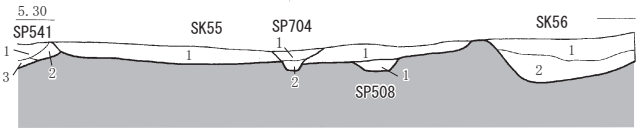
SK34（第68図）位置はB6区である。SI06を切る。底面には２箇所のピット状の落ち込みをもつが、覆土には柱跡は認められなかった。遺物は土坑の西側では上層、東側ではほぼ全域でまとまって出土した。出土土器は中期後葉を中心とする（第117図１～８）。

SK38（第69図）位置はB7区である。SI09とSI06の間に位置し、両住居を切る。底面にはピット状の落ち込みをもつが、覆土には柱跡は認められなかった。遺物は上・中層からまとまって出土した。出土土器は中期後葉を中心とする（第117図 13～15）。









SP704
1 暗黄褐色土
2 黄褐色土

SK55
1 暗黄褐色粘質土

SK56
1 暗黄褐色粘質土
2 暗黄褐色粘質土　暗灰色土ブロック多く含む

SP508
1 暗黄褐色砂質土

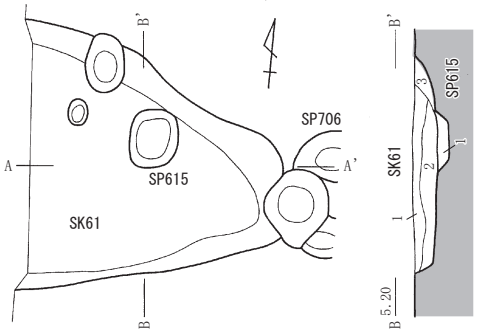
SP541
1 暗黄褐色土
2 暗黄褐色土
3 青灰色土

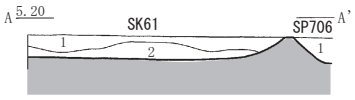


SK18
1 暗緑灰色粘質土
2 緑灰色砂質土
3 青灰色粘質土
4 青灰色粘質土

SK19
1 淡青灰色粘質土　砂性強い

SK20
1 淡青灰色粘質土　砂性強い

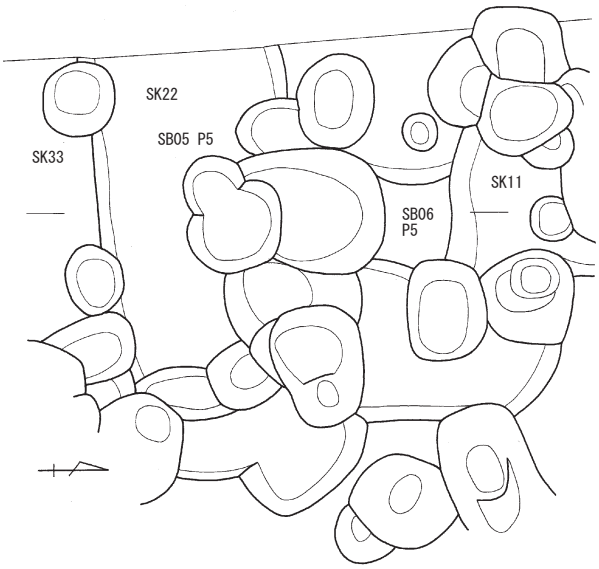


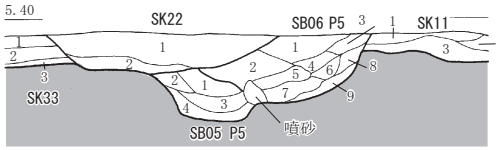


SK61
1 暗灰褐色粘質土　炭化物多く含む
2 黄褐色砂質土　1層土しみ状に多く混入
3 青灰色砂質土　地山主体

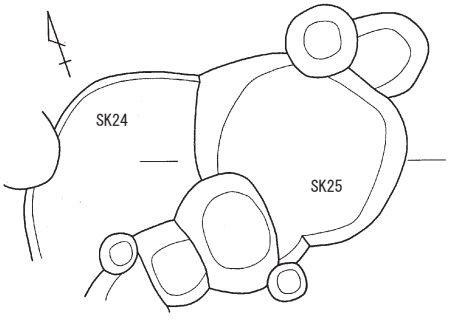
SP615
1 暗青灰色砂質土　炭化物多く含む

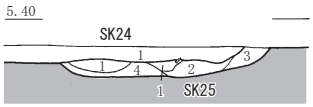
SP706
1 暗褐色土





SK33
1 暗黄褐色土　砂性強い
2 暗灰色土　砂性強い
3 黄褐色土　砂性強い





SK11
1 暗灰褐色土　炭化物・地山しみ状に多く混入
2 暗灰褐色土　炭化物多く含む　2層土より暗い
3 暗黄褐色土　炭化物・1層土ブロック多く含む

SK22
1 暗褐色粘質土　炭化物多く含む　粘性強い
2 黒褐色土　炭化物多く含む

SB06 P5
1 黒褐色土　炭化物多く含む
2 黒灰褐色土　炭化物多く含む
3 暗褐色土　炭化物・地山ブロック多く含む
4 黒褐色土　炭化物多く含む
5 黒灰褐色土　炭化物多く含む
6 黒褐色土　炭化物・焼土粒多く含む
7 黒褐色土　炭化物・地山小ブロック多く含む
8 暗灰色土　炭化物多く含む 地山しみ状に多く混入
9 暗青灰色土　炭化物多く含む

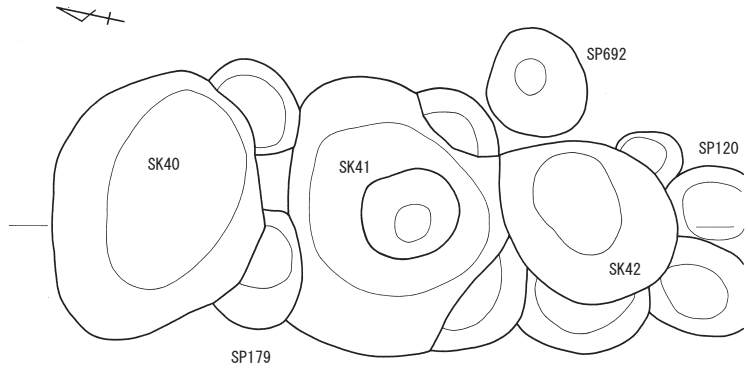
SB05 P5
1 暗灰色土　炭化物多く含む
2 黒褐色土　炭化物多く含む
3 暗緑灰色土
4 緑灰色砂質土

SK24
1 灰褐色土

SK25
1 暗灰褐色土
2 暗黄褐色土　1層土しみ状に多く混入
3 黄褐色土　地山主体（壁崩壊土）
4 黄褐色土　地山主体　しまり弱い

0　2m

第66図　土坑実測図３（縮尺 1/60）



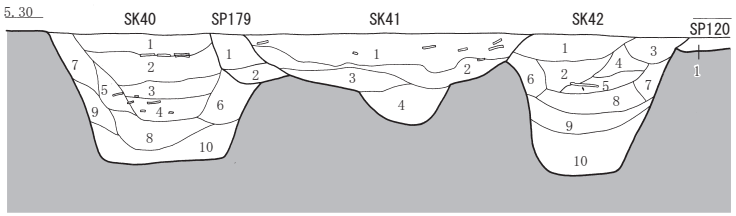
SK40
1 暗灰褐色土　炭化物多く含む
2 暗褐色土　炭化物・焼土粒多く含む
3 暗褐色土　炭化物多く含む
4 黄褐色土　炭化物多く含む
5 黄褐色土　地山主体
6 黄褐色土　地山主体（壁崩壊土）
7 黄褐色土　地山主体（壁崩壊土）
8 暗青灰色粘質土　炭化物多く含む
9 青灰色粘質土　地山主体（壁崩壊土）
10 青灰色粘質土　地山主体

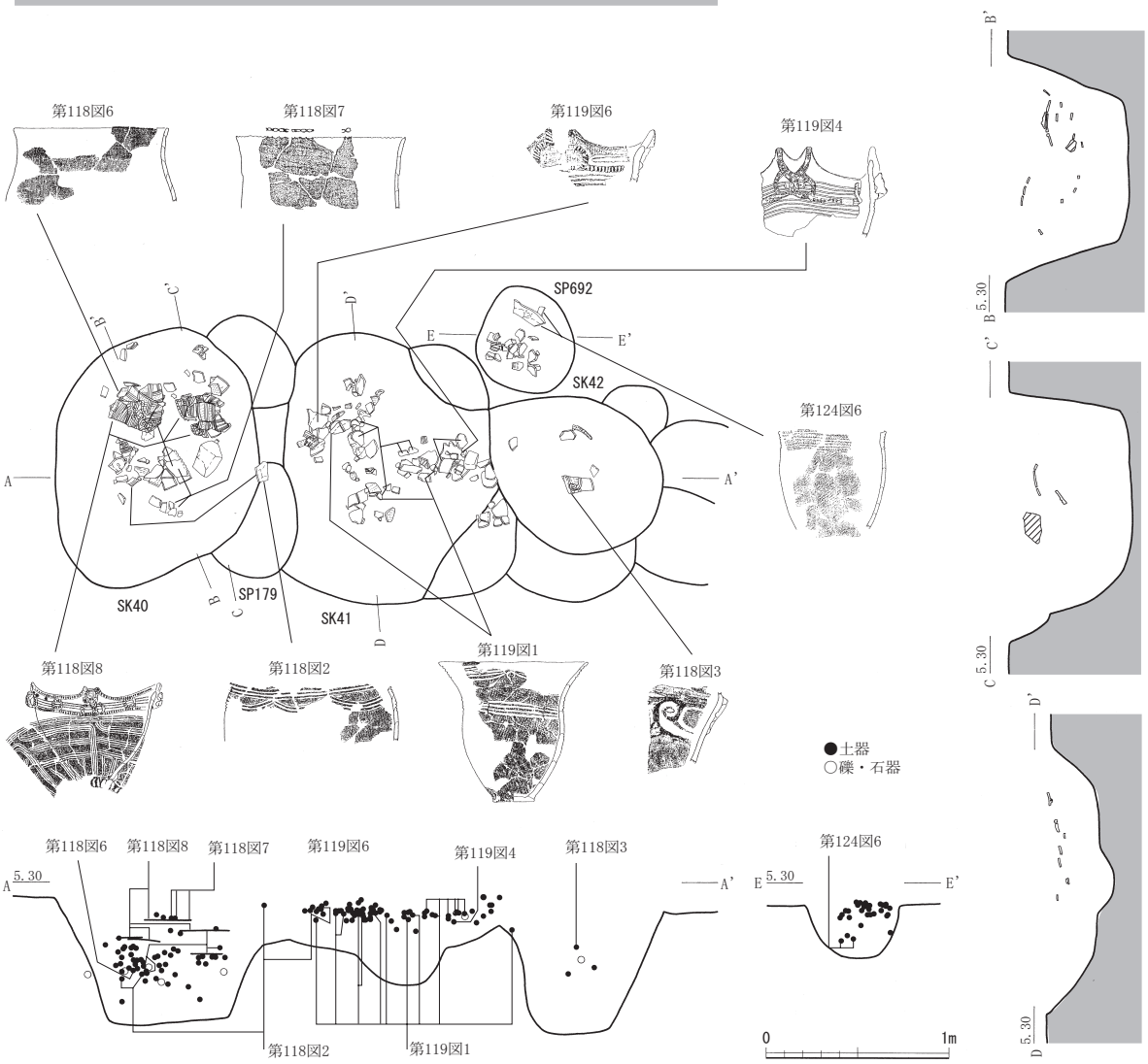
SP179
1 灰黄褐色土　炭化物・地山ブロック多く含む
2 黄褐色土　地山主体

SK41
1 灰黄褐色土　炭化物多く含む
2 黄褐色土　1層土しみ状に多く混入
3 黄褐色土
4 青灰色粘質土

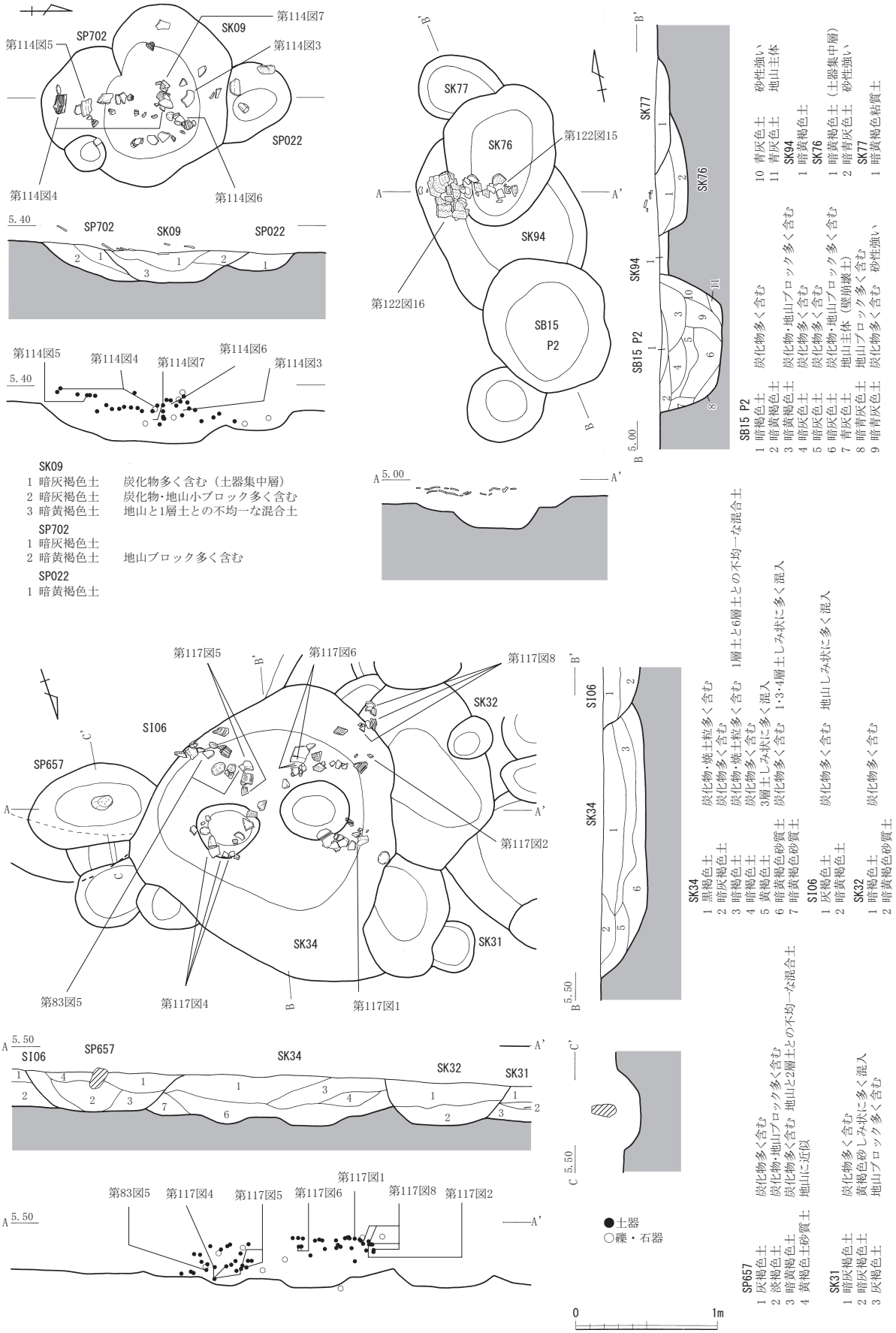
SK42
1 暗褐色土　炭化物多く含む
2 暗褐色土　炭化物多く含む
3 灰褐色土
4 暗黄褐色土　地山ブロック多く含む
5 暗黄褐色土　炭化物・地山ブロック多く含む
6 灰褐色土
7 灰褐色土
8 暗黄褐色粘質土　炭化物多く含む
9 暗青灰色粘質土　炭化物多く含む
10 青灰色粘質土　地山主体

SP120
1 暗褐色土

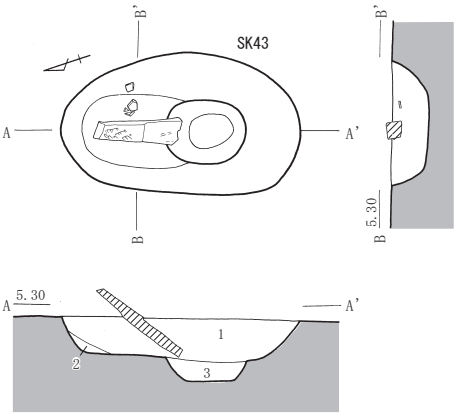




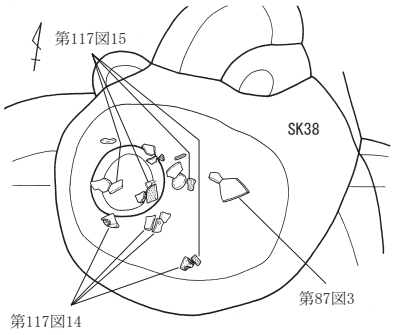
第67図　土坑実測図４（縮尺 1/40）

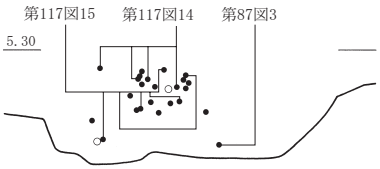


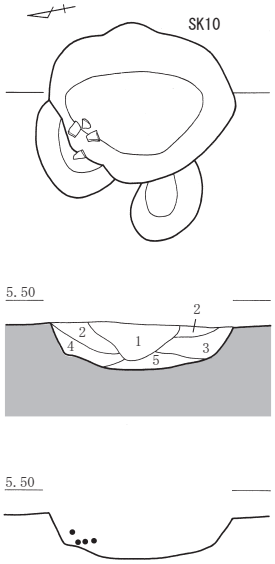
第68図　土坑実測図５（縮尺 1/40）



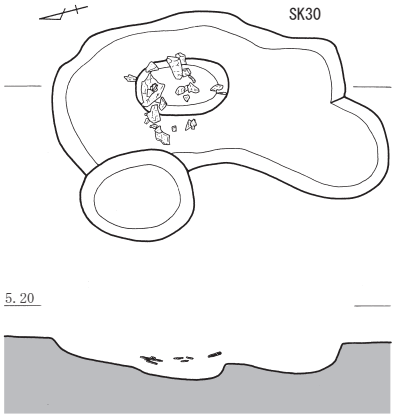
SK43
1 暗黄褐色土　　炭化物多く含む
2 暗黄褐色砂質土
3 黄褐色砂質土　　地山主体

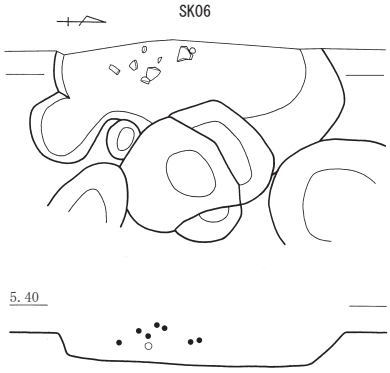


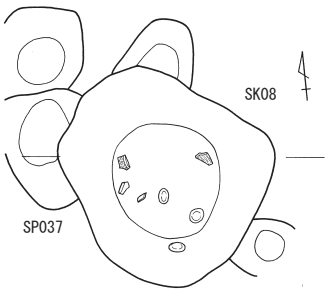


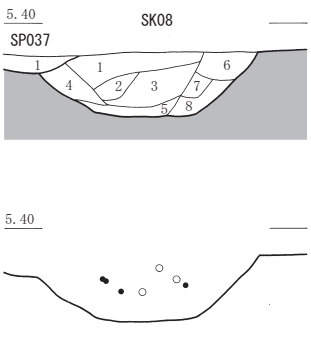


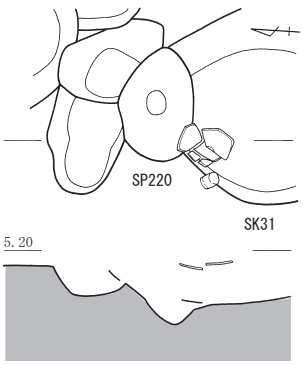
SK10
1 暗褐色土　　炭化物多く含む
2 暗褐色土　　炭化物多く含む
3 暗褐色土　　地山しみ状に多く混入
4 暗黄褐色土　1層土しみ状に多く混入
5 暗黄褐色土





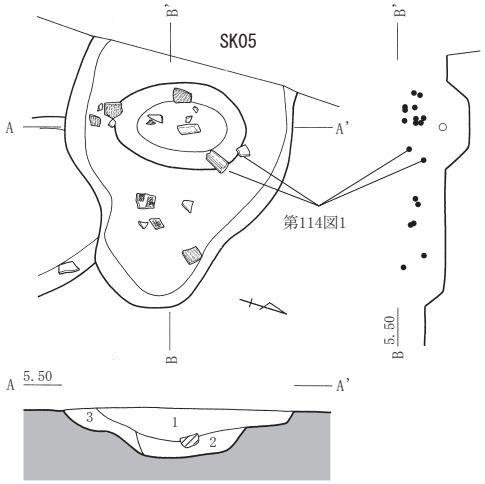






SK08
1 暗褐色土　　炭化物多く含む
2 暗褐色土　　炭化物多く含む
3 褐色土　　炭化物多く含む
4 暗黄褐色土　(壁崩壊土)
5 黄褐色土　　炭化物多く含む
6 暗褐色土　　地山小ブロック多く含む
7 暗褐色土　　炭化物多く含む
8 暗黄褐色土　地山主体

SP037
1 暗褐色土



SK05
1 暗灰褐色土　　炭化物多く含む
2 暗灰色土
3 暗青灰色土　　地山と2層土との混合土

●土器
○礫・石器

0　1m

第69図　土坑実測図６（縮尺 1/40）

SK40〜42（第67図）位置はD7・8区である。各土坑は切り合いにより連結して列状に存在する。切り合い関係はSK40・42がSK41に切られる。SK40・42は深さ0.7m程度と深く、柱穴の可能性がある。SK41にも底部にピット状の落ち込みをもつ。各土坑の覆土には柱跡は明確には認められなかったが、建物の柱穴とした場合、対となる柱穴は調査内には認められず、調査区より西側での存在が予想される。各土坑および近接するSP692からは、土器を主体とする多量の遺物が出土した。SK40では上層の層理面（覆土１・２層間）で器形復元個体１点（第118図８）や大形破片（同図６・７）とともに人頭大の自然礫を並置する状況を確認した。特に器形復元個体（同図８）は器体を縦位に二分割し、表面を上方に向けて設置されており、意図的な配置を看取できる。下層からも掌大以下の土器片が比較的多く出土したが、接合率は低い。上・下層出土土器はおおむね中期中葉に位置づけられる。このような上層と下層における土器片の大きさと出土状況の差異は、遺構埋没過程における遺物包含の要因が一様ではないことを示す事例である。SK41・42とSP692の出土土器は後葉に属す可能性が高い数点（第119図７）を除き、器形復元個体（第119図１、第124図６）を含め、多くが中期中葉に属す。

３類　平面が比較的整った長楕円形を基本とし、長軸が1.5m以下のもの。SK21・43・45・48・56・64の６基が該当する。深さは0.2〜0.4mとなる。分布には集中する傾向は認められないが、すべて単独で存在する。出土遺物はいずれも少量であり、土器小片に止まる。

SK43（第69図）位置はC8区である。内部にやや扁平な角柱状の礫が斜位に入る。この立石状の礫の方向は土坑長軸方向と一致する。底面中央南寄りにはピット状の落ち込みがあり、痕跡は認められないが、立石状の礫はこの内部に設置され、直立していた可能性がある。土坑の規模は長さ127cm、幅75cm、深さ19cmを測る。覆土は３層に分層したが、いずれもⅥ層土を基本とする。上層には炭化物が多く含まれる。立石状の礫は長さ55cm、幅８cm、厚み７cmを測る。先方部に剥離面をもつが、明確な加工痕や付着物などは確認できない。出土遺物は土器小片がわずかに出土したのみである。比較的長い立石状の礫を伴う事例は本例のみであることから、特殊性もうかがわれるが、用途・性格などは不明である。

SK56（第66図）位置はD8・9区である。２基とも深さが0.3mを超える。周辺には２類に属す複数の土坑（SK47・48・51・52・50）や柱穴・ピットが比較的まとまって存在する。視覚的にはSK48・56の長軸方向を円周とする環状の配置性もうかがえる。両土坑を含め近辺の土坑群を柱穴とみなせば、円形配列の柱穴群で構成される掘立柱建物が想定される。土坑群の一部には切り合い関係が認められる点、覆土からは柱穴と明確には判断できない点、深さには深浅が認められる点があり、断定はできないが、その可能性は指摘できる。

第１表　土坑計測一覧表

凡例　・切り合い部分や削平部分等の計測値は数値に（　）をつける。
・切り合い関係をもつ遺構がある場合、表記は以下とする。
＞遺構名：当該土坑が切る遺構　＜遺構名：当該土坑が切られる遺構　－遺構名：当該土坑と先後関係が不明の遺構

番号	位置	分類	規模			長軸方向	掲載遺物	主な切り合い	挿図
			長軸	短軸	深さ				
SK01	A3	2	(109)	57	11	N67° E			5
SK02	C2	2	133	107	22	N27° E			5
SK03	C2	2	(131)	(77)	11	N60° E			5
SK04	A3	2	(153)	(85)	21	N50° W		>SB18	5
SK05	A3	2	(199)	175	37	N86° E	土器(第114図1･2)	−SB18	61･69
SK06	A3	2	233	(73)	26	N14° E			69
SK07	A3	2	175	123	14	N4° E	土器(第114図1･2)	<SB19	61
SK08	A3･4	2	179	156	51	N46° W	土器(第115図1〜3)		69
SK09	B3	2	128	102	23	N6° E	土器(第114図3〜7)･打製石斧(第150図5)		68
SK10	B4	2	149	127	36	N17° E			69
SK11	A4	1	(554)	(411)	26	N82° W	土器(第114図8〜13)･焼成粘土塊(第161図14、第163図8･10)･石鏃(第139図23)	<SB04〜06	66
SK12	B4	2	(125)	125	47	N76° W		>SK17　<SK13･SK15	7
SK13	C4	2	(150)	(99)	28	N84° W		>SI01･SK12　<SB01･SK16　−SK14	4
SK14	C4	2	144	(127)	29	N89° W	土器(第114図14)	>SK15･SK17　<SK16　−SK13	7

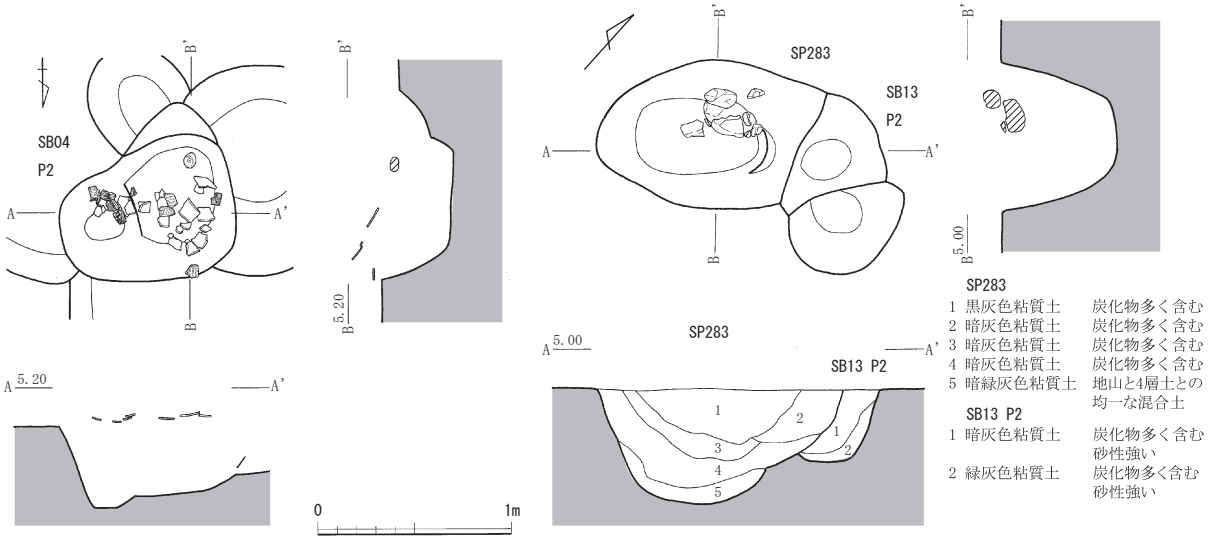
番号	位置	分類	規模			長軸方向	掲載遺物	主な切り合い	挿図
			長軸	短軸	深さ				
SK15	B·C4	2	(117)	(175)	23	N57° E		>SK12 <SK14	7
SK16	C4	1	(326)	208	14	N83° W		>SI01·SK13·SK14 <SB01·SB02	7
SK17	B·C4	2	(134)	(108)	58	N75° W	土器(第115図4)	>SK12·SK14·SK15	7
SK18	C4	1	302	294	27	N63° E	土器(第114図15)	<SI04 −SK19·SK20	66
SK19	C4	2	94	61	17	N52° W	土器(第115図5)	−SK18	66
SK20	C4	2	84	74	18	N35° W		−SK18	66
SK21	D4	4	187	(59)	(17)	N8° E			5
SK22	A4·5	1	(254)	187	31	N85° E	土器(第115図6～10)·焼成粘土塊(第163図7)·打欠石錘(第153図2)	>SB04·SB05·SB06·SK33	66
SK23	A5	1	365	(179)	25	N13° E	土器(第115図11·12)·石鏃(第140図2)·打製石斧(第146図8、第147図4)	>SI07·SK33	65
SK24	A5	2	(181)	(118)	14	N65° E	土器(第115図14～21)·石鏃(第139図4)·打欠石錘(第152図22)	>SK25	66
SK25	B5	2	178	(165)	24	N54° W	石鏃(第139図5)·切目石錘(第152図5)·打欠石錘(第153図5)	<SK24	66
SK26	B5	2	(77)	117	22	N63° E	土器(第115図13)		5
SK27	B5	2	133	(61)	11	N75° E			5
SK28	D5	1	(216)	(95)	26	N8° E		−SK29	5
SK29	D5·6	1	(276)	(128)	14	N9° W		<SK35 −SK28	5
SK30	B6	2	184	88	18	N26° E	土器(第116図)·石鏃(第139図16)		69
SK31	B6	2	(95)	109	26	N55° E		<SK32	68·69
SK32	B6	2	(126)	(117)	31	N37° W	打欠石錘(第152図26)	>SK31 <SK34	68
SK33	A5	1	(222)	(141)	24	N80° E		<SK22·SK23	65
SK34	B6	2	211	(195)	33	N60° W	土器(第117図1～8)·土製円盤(第162図31·37·40)·焼成粘土塊(第163図17)	>SI06·SK32	68
SK35	D6	1	(259)	331	44	N89° W	土器(第115図22～24)·土製円盤(第162図30)·焼成粘土塊(第163図15)·打欠石錘(第152図37)·砥石(第158図5)	>SI05·SK29	14
SK36	C・D6	1	(255)	214	47	N15° W	土器(第117図9～12)、打欠石錘(第153図18)	>SI05·SK37	14
SK37	C7	2	(118)	74	24	N45° W	土器(第117図16·17)	>SI05 <SK36	5
SK38	B7	2	(219)	(189)	56	N78° W	土器(第117図13～15)·切目石錘(第152図2)·打欠石錘(第152図31)	>SI06·SI09	69
SK39	C7	2	(75)	(134)	37	N88° E	石鏃(第140図28)·打欠石錘(第152図30)	>SI10 <SB07	28
SK40	D7	2	148	113	69	N73° W	土器(第118図1·2·5～8)·石鏃(第140図24)	<SK41	67
SK41	D7·8	2	153	148	49	N67° W	土器(第119図1～8)·土製円盤(第162図65)·石鏃(第140図14)·石匙(第144図5)	>SK40·SK42	67
SK42	D8	2	(105)	(83)	75	N36° E	土器(第118図3·4)·石匙(第144図7)	<SK41	67
SK43	C8	4	127	75	19	N20° E			69
SK44	A8	2	114	(61)	21	N76° W			5
SK45	A8	4	125	84	44	N5° E			5
SK46	B8	2	(134)	136	15	N21° W		>SI09	5
SK47	D8	2	114	85	29	N21° E		<SK49·SK51	5
SK48	D8	4	(145)	95	36	N53° E		>SK49	5
SK49	D8	2	(142)	(159)	20	N73° W		<SK48 >SK47·SK50	5
SK50	D8	2	(117)	(52)	18	N6° W		<SK49	71
SK51	D8	2	209	174	21	N8° E		>SK47·SK52·SK55	5
SK52	D8·9	2	(173)	(88)	32	N45° W		<SK51	5
SK53	A9	2	118	100	17	N65° E			5
SK54	B9	2	(134)	128	27	N70° E		<SB09·SB10 −SB08	57
SK55	C·D9	1	328	(168)	15	N87° E	土器(第119図11～15)·焼成粘土塊(第163図2)	<SK51	66
SK56	D9	4	(118)	(106)	39	N74° W			66
SK57	C·D9	1	(238)	181	18	N64° W	土器(第120図1)	<SI21	32
SK58	A9	2	251	134	39	N34° W	土器(第120図2)	>SI11	30
SK59	C9	2	(168)	120	42	N15° E		<SB09·SB10·土器埋設遺構2	62
SK60	A10	2	(136)	118	20	N65° W		>SI11	5
SK61	A10	1	(205)	216	13	N89° W	土器(第119図9·10)		66
SK62	C10	2	(115)	(74)	18	N38° E		<SI14	33
SK63	C·D10	1	(242)	(199)	32	N78° W	土器(第120図3)	<SI12·SI14·SI21	32
SK64	C10	4	(97)	76	32	N50° E		<土器埋設遺構8	33
SK65	D10	2	(68)	104	12	N88° E		<SI13	32
SK66	A11	2	183	150	64	N77° E	土器(第120図4～7)·石鏃(第139図18)·打欠石錘(第152図28、第156図9)	>SI16 −SB12	38
SK67	B10·11	1	(259)	(164)	44	N60° E	土器(第120図8～15)·土製円盤(第162図23·48·49)·石鏃(第140図12)·石鏃未成品(第142図8)	>SK68·70 <SK69	64
SK68	B10·11	1	(215)	(178)	18	N39° E	石鏃(第139図32)	>SK70 <SB12·SK67	64
SK69	A·B11	1	(262)	(249)	39	N70° E		>SI16·SK67·SK70 <SK72·SK74	64
SK70	B11	1	(304)	271	23	N72° W	土器(第120図16·17)·石鏃(第140図8)	>SI15 <SB12·SK67·SK68·SK69	64
SK71	A11	2	(151)	(103)	45	N32° W		>SK74	64
SK72	A11	2	(155)	(105)	60	N60° W	土器(第120図18·19)·磨製石斧(第151図19)	>SK69·SK74 <SB12	64
SK73	A11·12	2	(231)	181	28	N66° E	土器(第120図20～24)·石鏃(第139図1·35)	>SI16	65
SK74	A11·12	1	316	(199)	26	N3° W	土器(第121図、第121図1～13)·土製円盤(第162図68)·石錐(第143図7)·打欠石錘(第152図23)	>SK69 <SB11·SB16·SK71·SK72	64
SK75	C·D11	2	143	84	22	N78° W			5
SK76	D11	2	106	81	23	N24° E		>SK94 <SK77	68
SK77	D11	2	91	58	11	N63° W	土器(第122図14～16)	>SK76	68
SK78	A12	2	(89)	(108)	37	N71° W	土器(第120図25)		5
SK79	C12	2	(178)	(77)	18	N55° W		>SI17	40
SK80	D12	2	(169)	117	18	N26° E	土器(第120図26)	>SI17	40
SK81	D12	1	(327)	(104)	7	N15° E		>SK82	5
SK82	D12	2	(104)	88	19	N53° E		<SK81	5
SK83	A13	2	268	(163)	10	N36° W		>SB13	59
SK84	B13	1	(364)	(252)	44	N73° W	土器(第123図1～9)·石鏃未成品(第142図6·14)	>SI19 SK85と一連か	45
SK85	B13	1	(258)	217	54	N75° W	土器(第123図1～9)·打欠石錘(第152図38)	SK84と一連か	5
SK86	C13	2	116	83	21	N67° E		>SI17	40
SK87	C13	2	(96)	(88)	21	N64° E		>SI17	40
SK88	A14	1	(233)	(149)	37	N43° W	土器(第123図10·11)	<SK89	5
SK89	A13·14	1	(336)	(127)	34	N46° W	土器(第123図12～15)·石鏃未成品(第142図11)	>SI20·SK88·SK90	48·65
SK90	A15	1	(129)	(71)	32	N14° W		>SI20 <SK89	48·65
SK91	C14	2	(114)	(123)	37	N18° W		>SI18	42
SK92	D14	1	(351)	(153)	22	N33° W		<SK93	5
SK93	D14	2	(130)	(99)	27	N78° W		>SK92	5
SK94	D11	2	(108)	(103)	8	N14° W		<SB15·SK76	68
SK95	A8	2	264	(124)	21	N65° E		<SI08·SK96 −SI09	25
SK96	B8	2	229	156	37	N80° E		>SK95 −SI09	25

第６節　柱穴

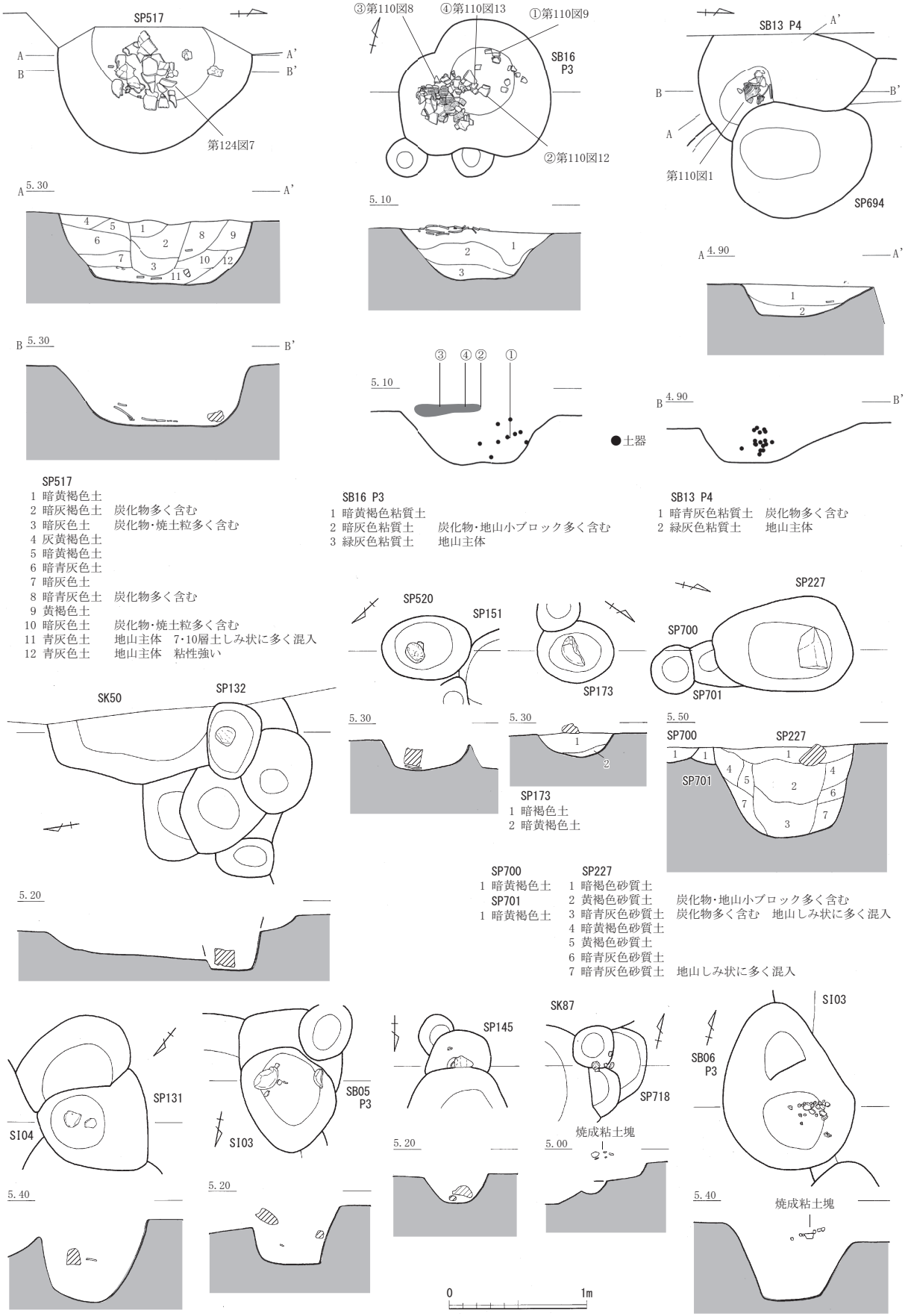
柱穴・ピットは700基以上検出した。調査区のほぼ全域に分布する。特に集中する範囲は調査区より西側に中心をもつ弧状を呈す。この弧状帯の全長は調査区内で50m程度、幅は４m程度を測る。弧状帯内部には掘立柱建物が弧列状に展開する。掘立柱建物と認定した柱穴には大小の規模差が認められることから、検出した多くのピットが柱穴であると判断される。このため、ここでは両遺構を一括して柱穴（SP）とする。また、以下の記述においては、便宜的に掘立柱建物の柱穴も扱うこととする。

柱穴の時期は各基には特定できないが、出土土器から判断すれば、おおむね中期中葉から後葉に属すと考えられる。出土遺物は土器を中心とするが、多くが小片少量である。略完形土器や大形破片が出土した柱穴には、SB04－P2（第70図）・SB13－P4（第71図）・SB16－P3（第71図）・SP517（第71図）・SP692（第67図）がある。垂直分布には上層（SB04－P2･SB16－P3）､中･下層（SB13－P4）､下層（SP517）がある。SB16－P3の出土状況はSK76（第68図）と共通する。また、中・下層からも土器小片が多く出土する状況はSK40（第67図）と同様である。SP517出土土器（第124図７）は覆土に認められる柱跡よりも下位に位置し、広範囲で面的に広がるため、柱材を据える前に敷かれていたことがわかる。礎石･礎板状の用途も想定されるが、他に類例もなく詳細は不明である。これらの遺物を多く含む柱穴と土器埋設遺構３類（土器埋設遺構５～７）との違いは、土器の器形が保持されていないことの他に、同じ出土位置で略完形土器以外の破片が多数出土することにある。つまり、土器埋設遺構３類には柱材抜き取り後に単一土器の埋置・設置という行為の可能性が認められるのに対して、その他には複数の土器を廃棄・投棄する小規模な遺構として位置づけられる。

土器･石器以外の遺物として、自然礫や焼成粘土塊がある。人頭大程度の自然礫を検出した柱穴には、SB05－P3、SP131・132・145・173・227・520（第71図）、SP283（第70図）・SP657（第68図）の９例がある。複数の礫による石組状となる事例はなく、多くが１、２点である。礫の垂直位置には上層･中層･下層が認められる。その他、遺構中央で円柱状の礫が確認面より突出するもの（SP657）や短円柱状の礫が遺構底面に接地するもの（SP132・520）などがある。これらの出土状況のうち、SP657を除く８例には、土器と同様に、柱材抜き取り後の廃棄が想定される。焼成粘土塊がまとまって出土した柱穴にはSB06－P3（第71図）とSP718（同図）の２例がある。いずれも覆土上層から出土する。焼成粘土塊は廃棄品と考えられるが、１回の使用個数と関連する可能性がある。



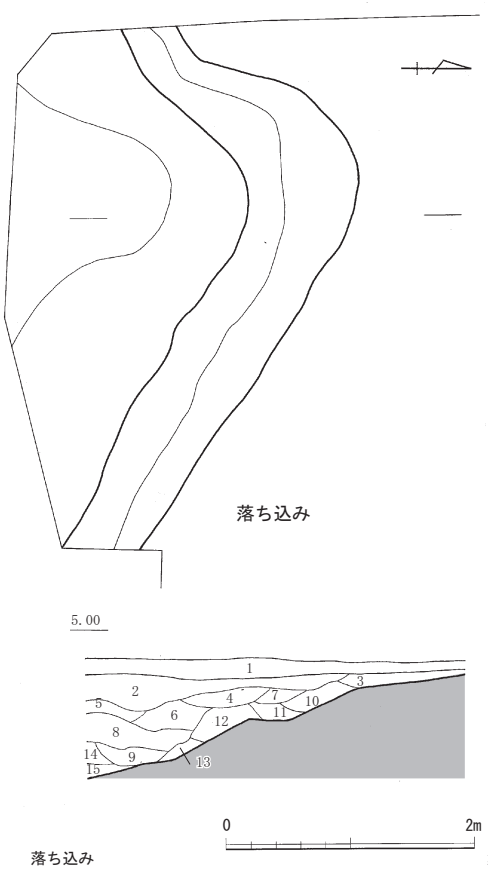
第70図　柱穴実測図１（縮尺 1/40）



第71図　柱穴実測図２（縮尺 1/40）

第７節　落ち込み

調査区南端の16区で１箇所検出した（第72図）。試掘調査で検出した調査区南方に広がる湿地状地形の落ち込み肩部である。平面は北側に向かい突出する弧状を呈し、断面は段をもちながら緩やかに傾斜する。平面・断面形状から、自然河川屈曲部の肩部である可能性も推測される。調査区内では幅275cm、深さ95cmを測る。覆土は粘質土を主体とする。15層に細分したが、土質・色調から上層・中層・下層に三大別できる。上層（１～４層）は炭化物を多く含む。中層（５～７層）では黒色の泥炭状を呈す。下層（８～15）では植物遺体が若干混入する。出土遺物は比較的少なく、土器や石器などがある。土器は小破片を主体とし、主に上層～中層にかけて出土した。時期は中期中葉から後葉を主体とし、中期前葉の土器も１点（第123図28）認められる。層位的な出土傾向は認められないが、SI20や近辺の包含層出土土器と接合した事例も認められる。これらの点から出土遺物は集中投棄品ではなく、多くは流れ込みなどによる混入品の可能性が高い。時期は明確ではないが、SI20との距離が約1.2ｍと極めて近接する点を考慮すれば、遺跡存続期間の中期中葉から後葉には存在せず、それより後の時期に新たに形成した、もしくは調査区内に延伸した可能性が高いと推測される。



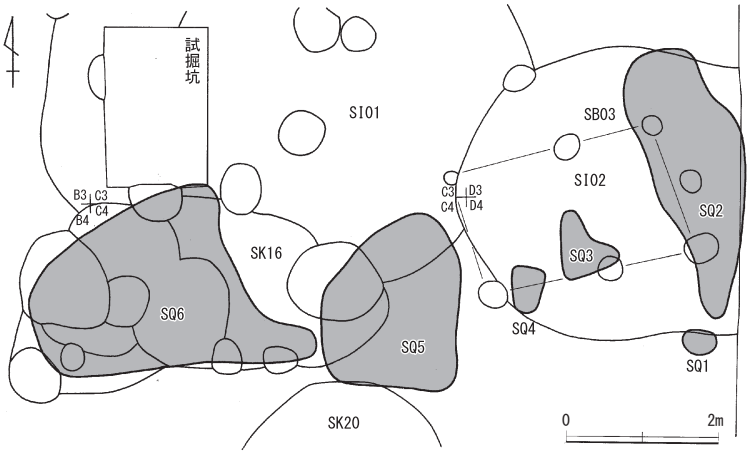
落ち込み
1　暗灰色粘質土　炭化物多く含む
2　暗灰色粘質土　炭化物多く含む
3　暗灰色粘質土　炭化物大粒多く含む
4　灰色粘質土
5　黒灰色粘質土　炭化物大粒多く含む
6　黒灰色粘質土
7　黒色粘質土　炭化物多く含む
8　緑灰色粘質土　炭化物・暗灰色土小ブロック多く含む
9　緑灰色粘質土　炭化物多く含む　砂性強い
10　暗緑灰色粘質土
11　暗緑灰色粘質土　炭化物多く含む　ピート若干含む　砂性強い
12　暗灰色粘質土　ピート若干含む
13　緑灰色粘質土　炭化物多く含む
14　暗灰色粘質土　ピート若干含む　砂性強い
15　暗灰色粘質土　ピート若干含む

第72図　落ち込み実測図（縮尺 1/60）

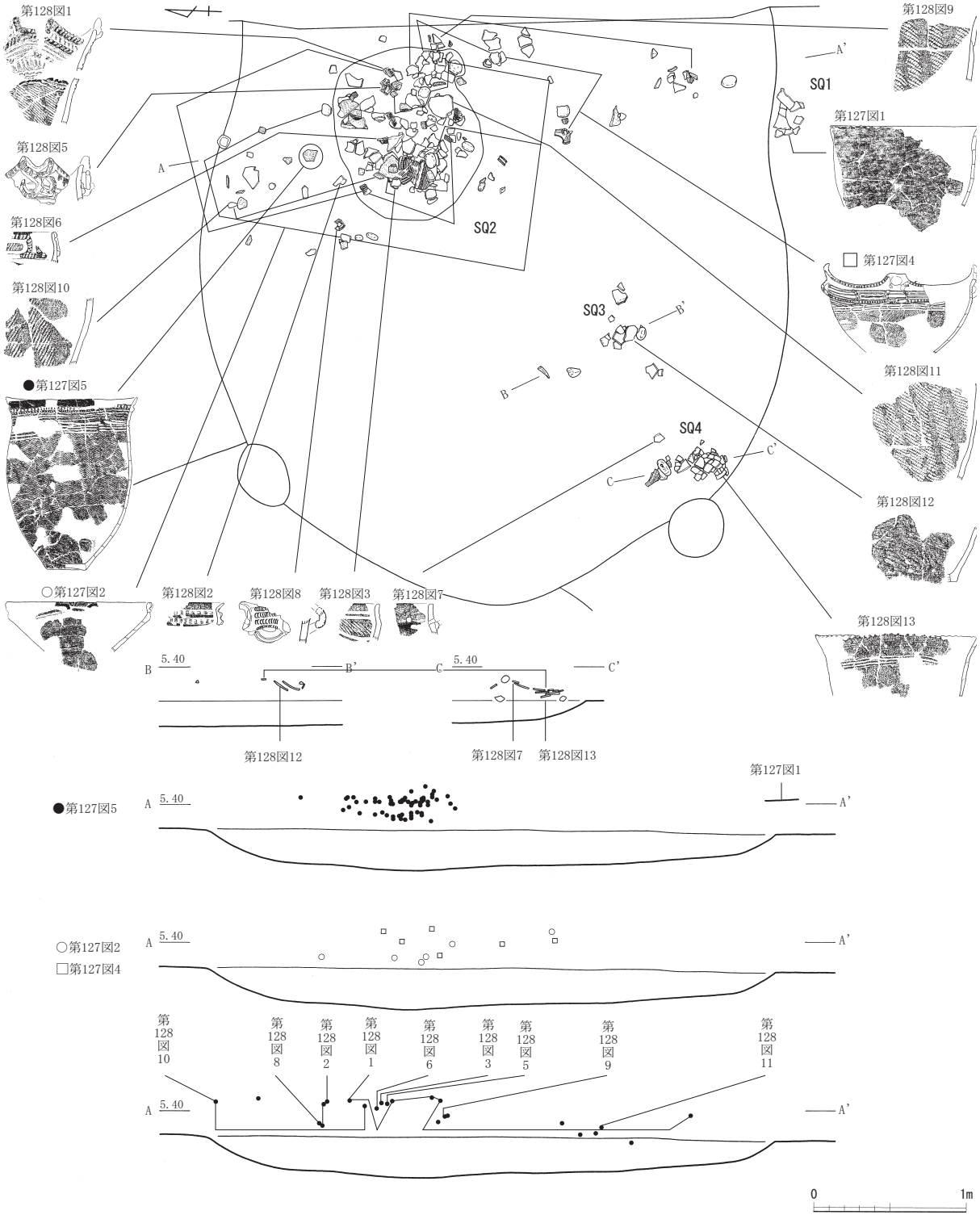
第８節　遺物集中域

ここでは、遺物包含層（Ⅳ・Ⅴ層）中に土器を主体とする遺物が一定の範囲で集中する箇所を遺物集中域（SQ）とする。調査区北西部のC・D4区を中心に分布する。遺物の有無を境界として大小６箇所の集中域（SQ1～6）を認定した（第73図）。出土土器は略完形品や大形破片を主体とし、別地区の遺物包含層出土品とは異なるため、部分的な廃棄場と推測される。なお、遺物集中の範囲内において、遺物包含層中や各層理面からの掘り込みは確認できなかった。

以下、各個の内容を記述する。



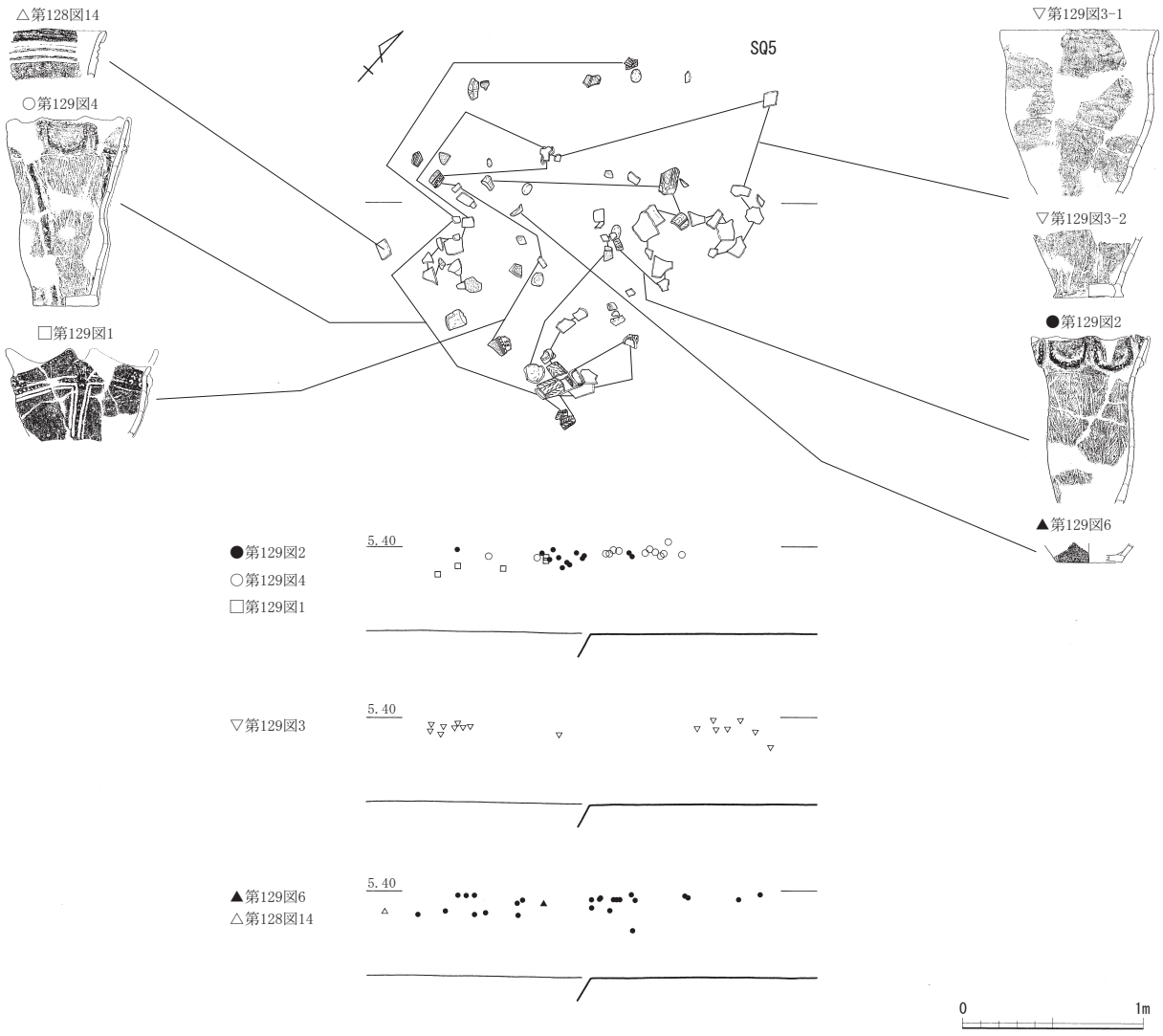
第73図　遺物集中域配置図（縮尺 1/100）



第74図　SQ１～４遺物出土状況図（縮尺 1/40）

SQ１（第74図）位置はD4区である。Ⅳ層下半から晩期中葉に属す無文土器の大形破片（第127図１）が半個体分まとまって出土した。なお、周辺には該期土器の出土は認められない。

SQ２～４（第74図）位置はD3・4区である。SI02上位のⅣ層下半からⅤ層上半で検出した。時間的先後関係はSI02→SB03→SQ２～４となる。出土遺物は中期中葉の土器を中心とする。SQ２は平面分布では約3.5mの範囲に遺物が集中する。垂直分布では約20～30cmの厚みを測る。集中範囲の中心部で検出し

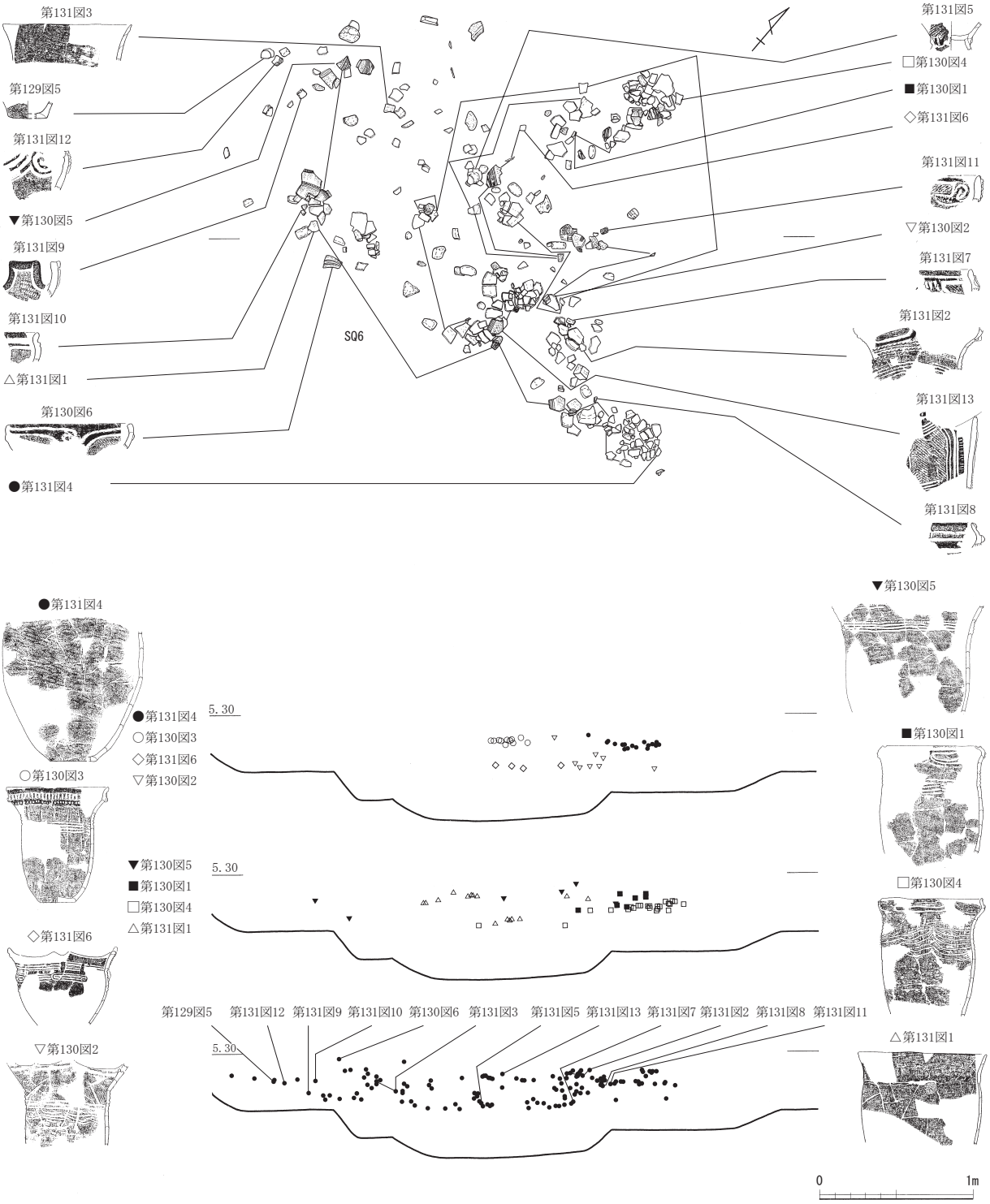


第75図　SQ ５遺物出土状況図（縮尺 1/40）

た略完形土器（第127図５）は、底部中央を欠損しており、打ち欠きの可能性がある。平面・垂直分布上で比較的広範囲に点在する個体（第128図１）も認められる。SQ３・SQ４は70～80㎝程度の狭い範囲で遺物が面的にまとまる。略完形土器は出土していない。

SQ５（第75図）位置はC4区である。SI01とSK16の上位のⅣ層土下半で検出した。時間的先後関係はSI01→SK16→SQ ５となる。遺物は中期後葉の土器を中心とする。平面分布では約２ｍの範囲に集中する。垂直分布では約15㎝の厚みを測る。土器は個体ごとに密集する傾向ではなく、比較的分散する。第129図４は約1.5ｍの距離で二分する状況にあり、同図３は底部のみが約1.5ｍ離れる。なお、同図２・４は文様をはじめ器形・寸法においても極めて近似する。同一遺構出土の器形復元個体における同様な事例は、本例以外には認められない。

SQ６（第76図）位置はC3・4区である。Ⅴ層土中で検出した。近接するSQ５と同じくSI01とSK16の上位に位置し、同遺構との時間的先後関係も同様である。遺物は中期中葉の土器を中心とする。平面分布では４ｍ四方の範囲に集中する。土器の平面分布では集中してまとまる個体と比較的分散する個体が認められる。垂直分布ではⅤ層内に収まるが、個体ごとに検出高が異なる傾向が認められる。この検出高における高低差は遺物が廃棄時から大幅に移動していないと仮定すれば、廃棄の順序や廃棄時の地



第76図　SQ ６遺物出土状況図（縮尺 1/40）

表面を示すと推測される。中期後葉の土器を主体とするSQ５との比較では、垂直的分布において、包含される土層差と対応して、SQ５が約10～20cm高い傾向にある。廃棄箇所ごとの期間差・時間差が土層差および土器の時期差として明確に認識できる事例である。

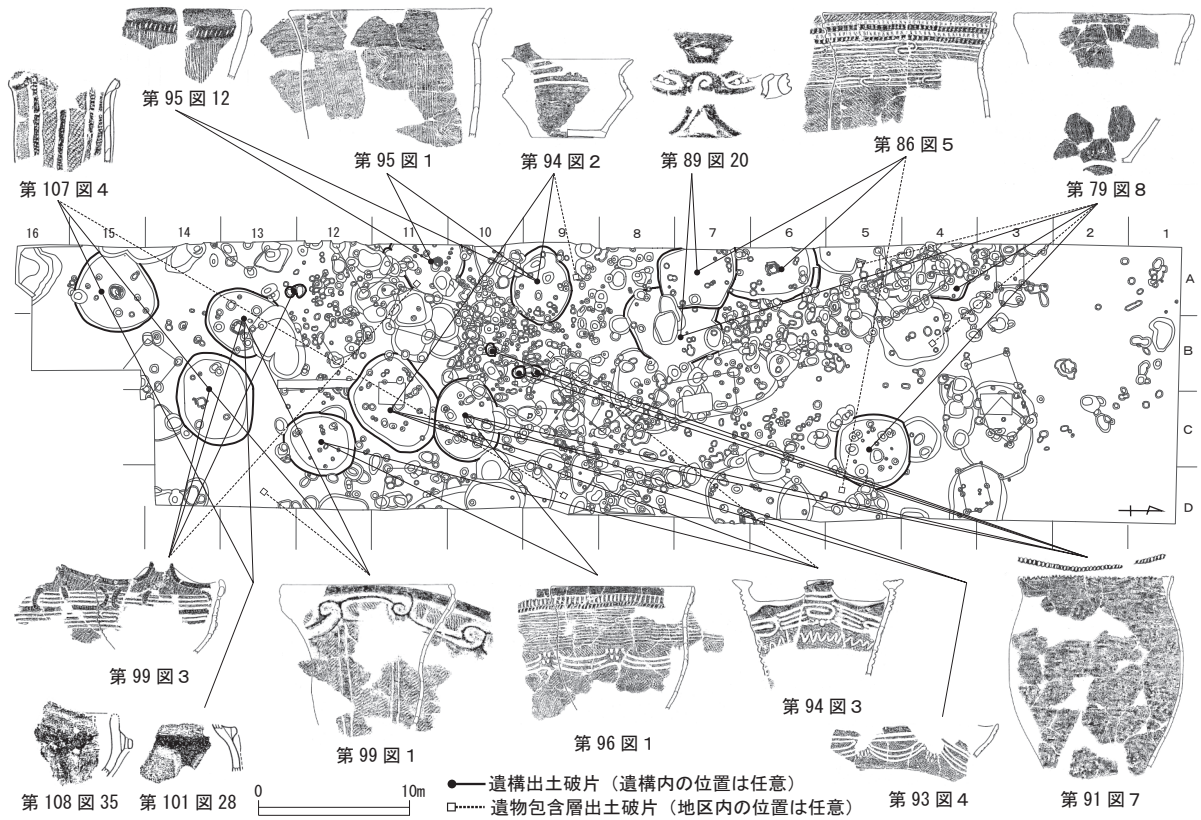
第９節　同一個体土器の異所的分布

ここでは、掲載した縄文土器のうち、同一個体の破片が出土箇所を異にする事例を扱う。同一個体の認定は接合関係以外に器形や文様あるいは胎土や色調などの属性によった。掲載土器991点中186点が認められ、２割程度を占める。出土箇所には遺物包含層と遺構があり、さらに地区や遺構ごとに多数の箇所がある。遺構の種類または遺構単位や地区単位における傾向性はうかがえないが、全体とすれば、切り合い関係にある遺構間出土例を除いても、近接や隣接する地区や遺構からの出土事例が多い。

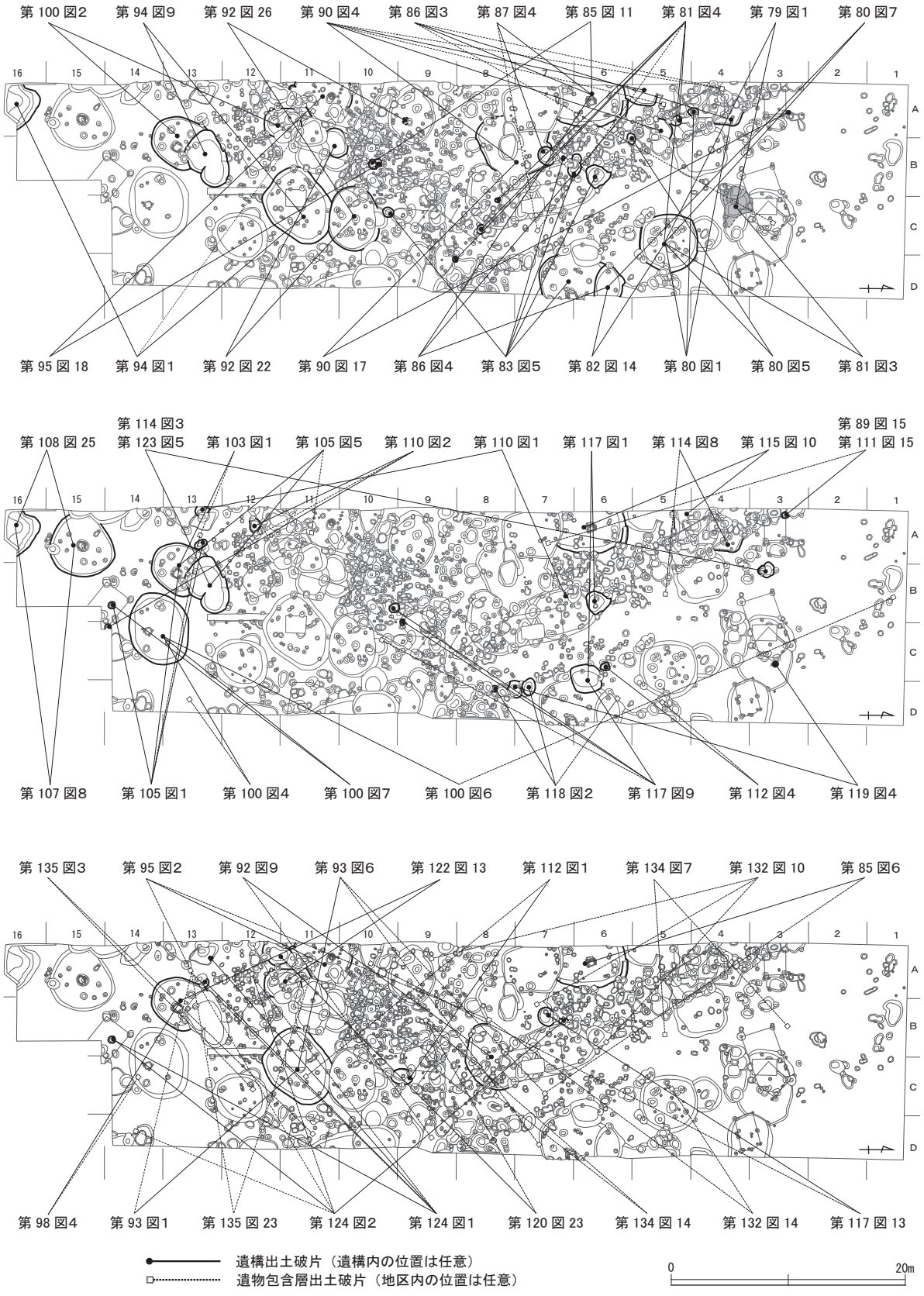
竪穴住居間出土例は14例があり、すべてを提示した（第77図）。３棟以上からの出土例はない。内訳はSI04+09、SI07+08、SI08+09、SI11+15、SI14+17、SI15+17、SI18+20、SI19+20 が各１例、SI11+16、SI14+15、SI18+19が各２例となる。このうち、SI07・08、SI08・09、SI14・15には切り合い関係にある。住居間最長距離は床面中央間でSI04とSI09の約15mを測る（第79図８）。竪穴住居と他遺構からの出土例は46例がある。住居と同一地区内出土例が24例となり、その他の５ｍより離れる地区出土の22例を提示した（第78図）。遺構間最長距離はSI15と落ち込み間の約27mを測る（第94図１）。竪穴住居と遺物包含層からの出土例は28例がある。住居と同地区が19例となり、その他の５ｍより離れる地区出土の９例を提示した（第78図）。住居地区間最長距離はSI18とB1区の約60mを測る（第100図６）。

竪穴住居を除く遺構間出土例は51例がある。同地区内の遺構が40例となり、その他の５ｍより離れる地区出土の11例を提示した（第78図）。遺構間最長距離はSK09とSK84・85間の約48mを測る（第114図３・第123図５）。遺構と遺物包含層からの出土例は48例がある。同地区が41例となり、その他の５ｍより離れる地区出土の７例を提示した（第78図）。遺構地区間最長距離はSP233とD14区の約38mを測る（第124図２）。

遺物包含層の地区間出土例は13例がある。隣接地区が７例となり、その他の5 ｍより離れる地区出土の６例を提示した（第78図）。最長距離はA13区とB8区間の約26mを測る（第95図２）。



第77図　同一個体土器出土箇所図１（縮尺 1/500）



第78図　同一個体土器出土箇所図２（縮尺 1/500）

第５章　遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナで230箱分の出土量がある。主体は縄文土器であり、次いで石器・土製品・石製品となる。これら出土遺物の大半は中期中葉から後葉に位置づけられる。出土箇所には遺構および遺物包含層がある。ここでは、種類ごとに一括して記述する。

第１節　縄文土器

出土量はコンテナ196箱分である。このうち約６割を占める遺構出土品は遺物包含層出土品と比べ、残存率が高く、略完形品や大形破片も多い。土器の所属時期は大部分が中期中葉から後葉であり、その他に中期前葉・後期中葉・後期末・晩期中葉の土器が各数点認められる。

ここでは、まず出土土器に対して分類を行い、つづいて編年的位置づけを行い、その後出土箇所ごとに内容について触れることとする。提示にあたり、器形復元個体については大半を扱い、破片については文様の有無・部位・大小を考慮して選択的に抽出した。そのため、遺構出土土器の提示においては、以下で示す分類土器群を網羅的あるいは数量比的に反映した内容となっていない。ただし、器形復元個体に限れば、量的傾向を示し得ると思われる。提示した各個についての詳細な記述は、分類を行うことで替え、主要例についてのみ行うこととする。なお、各個の所属分類群・出土箇所および層位・地文などについては一覧表（第２表）へ記載を行った。

１　分類

分類はまず文様の有無により有文土器と無文土器に大別し、つづいて器種による分別を行い、さらに部位片として底部・脚部を分離した。有文土器は主に口縁部形態や文様の構成・要素・描出手法により分類を行ったが、各群における分類基準は一定ではない。器種は深鉢・台付鉢・鉢・浅鉢・鍔付土器・壺形土器・釣手土器に分別した。深鉢と台付鉢が量的主体となる。越前地方における中期中葉の土器様相は多系統構成であると想定されている。本遺跡も例外ではなく、多様な内容であり、出土土器を計59群に分類した。内訳は有文土器が第１～49群、無文土器が第50～57群、底部と脚部が第58･59群である。各土器群の内容は以下のとおりである。

１）有文土器

第１群（第138図24）口縁部に楔状陰刻文とこれに連結する縦位沈線文を配す深鉢。

第２群（第123図28）背の低い刻目隆帯により文様を描出する深鉢。

第３群（第134図９など）口縁部に半隆起線や爪形文列を平行して配す深鉢を一括する。

第４群（第112図２）口縁部全域に半隆起線による横位区画帯を配し、内部に単位的な瘤状垂下隆帯と充填的な斜行半隆起線を配す波状口縁深鉢。器形は口縁部が内湾するキャリパー形を呈す。

第５群（第132図４）各部位に隆帯や半隆起線による横位を中心とした区画帯を配し、内部に渦文や縦位半隆起線などを配す深鉢。

第６群（第81図５など）胴部に幅の狭い隆帯と側縁の有節沈線による渦文や対向弧線文などを配す波状口縁深鉢。器形は口縁部がやや内湾し､胴部が直線的に開いてたちあがる。波頂部は小突起状となり、側面に単位的な円孔をもつ。曲線文間は区画文状となり、縄文施文の有無がある。

第７群（第133図１・３など）口縁部に交互刺突を施す細い粘土紐や細沈線などによる渦文や弧線文

を配し、胴部上方に弧線文などを配す深鉢。器形は口縁部が内湾するキャリパー形を中心とする。地文は撚糸文を中心とする。器形と文様構成は第８群と近似する。比較的小型の深鉢が多い。

第８群　口縁部に沈線や半隆起線などによる弧線文・渦文・楕円形文などを配し、胴部上方に多条の弧線文や周回直線文などを配す深鉢。器形は口縁部が内湾するキャリパー形を中心とする。頸部に沈線による鋸歯状文や半隆起線による小蛇行文を配す例が多く認められる。口縁形には水平と波状があり、後者には口縁上面形が方形を呈す例（第130図２・第133図９など）が認められる。口縁部形態や文様配置などにより細分する。

１類（第109図３など）口縁部が強く内湾・内屈し、屈曲部の上下にわたり文様を配すもの。

２類（第79図５など）口縁部が強く内湾・内屈し、屈曲部下方を中心として文様を配すもの。

３類（第81図２など）口縁部がゆるやかに内湾し、屈曲部下方を中心として文様を配すもの。

４類（第105図３など）口縁部が直立ぎみのもの。

５類　口縁部が外反するもの。口縁部文様には有無がある。文様を配す部位には、口縁部または口縁部と端部（A－第119図１など）、刻目を含め端部のみ（B－第130図２など）があり、文様を配さない例には、口唇部が折り返し状に肥厚するもの（C－第88図16）がある。

６類（第94図３）波状口縁を呈し、口縁部が直線的に開き、波頂部が円柱状突起、波底部が舌状突出部となるもの。器形とともに口縁部と口縁端部に文様を配す点で５A類と共通する。

７類　１～６類に分別が困難な口頸部を一括する。

第９群（第134図25など）口縁部に沈線による分断直線文や弧線文を配す深鉢。口縁部が外反もしくは直立するものを中心とする。口縁部文様は第８群の胴部文様と共通する。

第10群　口縁部に細い粘土紐と沈線による「S」字状文などの曲線文を単位的に配し、曲線分間に細い粘土紐による斜格子文や刺突を充填的に配す深鉢。器形は口縁部が内湾または内屈するキャリパー形を呈す。曲線文間の充填的な文様により細分する。

１類（第133図23など）細い粘土紐による格子文を配すもの。

２類（第133図24など）刺突を施すもの。

第11群　口縁部にすかしをもつ立体装飾部を配す深鉢を一括する。口縁部が強く内湾し、立体装飾部は主に屈曲部に配置される。立体装飾部の形態により細分する。

１類（第119図８）楕円形を呈す把手状の立体装飾部をもつもの。口縁部は屈曲部上方へさらに直立してのびる。装飾部は楕円形のすかしをもち、棒状の脚部３箇所で口縁部に接着する。側面には口縁部と同様に有節沈線を２条配す。その他の口縁部文様はおおむね第８群と共通する。

２類（第101図６）窓枠状の立体装飾部をもつもの。口縁形と一致する単位的な逆「U」字状と楕円形のすかしをもつ。装飾部には細い粘土紐を密着して貼付する。口縁部には逆「U」字状のすかしと対応する位置に円孔をもつ。

３類（第122図７）眼鏡状の立体装飾部をもつもの。装飾部は口縁部と一体化し、１・２類に比べ平板化する。その他の口縁部文様は第32群と共通する。

第12群（第134図８）波頂部が台形を呈す大波状口縁を有し、口縁部に沈線による蕨手状文や弧線文などを配す深鉢。波頂部形状は第24～26群の台付鉢と類似し、段により区分される波頂側部に縦位短沈線を配すことから、第25群との関連もうかがえる。

第13群　口縁部に肥厚する口唇部と隆帯による横位区画帯を配し、内部に隆帯や沈線による直線文

や対向弧線文などの区切文を配す深鉢。区画帯を構成する口唇部や隆帯には基本として縄文や刺突文を施す。口縁形状には水平・波状がある。区切文により細分する。

１類（第134図10など）区切文が直線的なもの。

２類（第134図22など）区切文が対向弧線文で、区切文間が楕円形区画文となるもの。

３類　文様構成が不明な口縁部を一括する。

第14群　口縁部に口唇部や隆帯による横位区画帯を配し、内部に隆帯と側縁沈線による方形･楕円形･円形の区画文を配す深鉢。口縁部形態には内湾や外反・直立ぎみなどがある。後者には、内面に粘土貼付による断面三角形の段をもつ例（第97図７など）が認められる。横位区画帯が上下２帯に分帯化する例（第94図７など）もある。区画文内部の縄文には、充填縄文の例と区画文描出前の地文縄文を残す例がある。区画文構成により細分するが､区画帯を構成する口唇部と隆帯には､縄文や刺突を施すもの（A）と無施文のもの（B）がある。小片では第32群と類似し、識別が困難な場合がある。

１類（第85図１など）方形区画文を連続して配すもの。区画隆帯は細い例が多い。

２類（第91図３、第109図10など）楕円文や平行四辺形文などの単一な区画文を連続して配すもの。区画隆帯には太細がある。

３類（第96図４､第100図３など）単位性のある円形区画文と楕円形･長方形区画文を交互に配すもの。区画隆帯は太いものや微隆帯状となる例が多い。

４類　文様構成が不明な口縁部を一括する。

第15群（第132図２）口縁部から頸部にかけて沈線による楕円形区画文を上下２帯配し、胴部に横走沈線を配す深鉢。器形は口縁部が内湾するキャリパー形を呈す。区画文内は縄文を磨消して無地文部とする。口縁部横位区画帯が多帯化する第13・14群の沈線描出化であると考えられる。

第16群（第91図４）無地文部とする口頸部に沈線による方形区画文と縦位短直線文を配す深鉢。器形は口縁部が外反し、頸部でくびれ、胴部がやや張る。胴部には地文縄文のみを施す。第13・14群の口縁部横位区画帯の沈線描出化であると考えられる。口頸部の無地文手法は第41群と共通する。

第17群（第137図２）肥厚し下部がやや突出する口唇部に沈線による楕円形区画文を配す深鉢。口縁部は直立ぎみとなる。口唇部は縄文帯とするが、区画文内は磨消無文部とする。頸部以下には縦位展開する文様を配す可能性が高い。

第18群　口縁部に口唇部と隆帯による幅の狭い横位区画帯を１帯または２帯配し、内部に縦位文様を充填的に配す深鉢。口縁部形態には「く」字状・直立ぎみ・外反などがある。頸胴部には横位展開する文様を多段に配すものを基本とするが、文様や描出手法には多種性が認められる。区画帯を構成する口唇部や隆帯には基本として縄文や刺突を施す。口唇部には長短があり、折り返し状や微隆帯状に肥厚する例が多い。区画帯内の縦位文様により細分する。

１類（第79図３、第86図５など）半隆起線を施すもの。

２類（第79図４、第107図１など）刺突を施すもの。長半円状文や円形文がある。

第19群　口縁部に縦位文様を列状に２帯以上配す深鉢。口縁部形態には内湾・外反・直立ぎみがある。口縁部区画帯は明確には描出されず、口縁部全域が微隆帯状に肥厚する例がある。縦位文様により細分する。

１類（第84図６）半隆起線を施すもの。出土量は少ない。

２類（第84図３・16、第85図11など）刺突を施すもの。縦位文様間に渦文などの他の文様が付随し、

胴部に縦位区画文を配す例が認められる。

第20群（第132図９、第134図27）口縁部から頸部にかけて沈線による楕円形文や弧線文などを多段に配す深鉢。口縁部形態には外反・直立ぎみがある。

第21群　口唇部直下に沈線や半隆起線による弧線文や直線文などの横位展開する文様を多段に配す深鉢。口縁部が外反し、口唇部が肥厚する例が多い。口唇部文様の有無により細分する。

１類（第82図８）口唇部に横走する文様を配すもの。

２類（第84図22、第88図25など）口唇部に文様を配さないもの。口唇部には長短がある。

第22群（第87図４など）口縁部を無文帯とし、頸部から胴部上半にかけて沈線による横位区画帯を配し、内部に楕円文や直線文などの横位展開する文様を多段に配す深鉢。口縁部が外反する例が多い。

第23群　横位展開する文様を配す深鉢の頸胴部を一括する。文様により細分する。

１類　沈線や半隆起線などによる直線文や小蛇行文などを配すもの。

２類　沈線や半隆起線による半円状文や楕円形文などを配すもの。

第24～26群　器種が台付鉢であり、口縁上面形が舟形を呈し、長軸口径が器高以上となる鉢部と角度をもたず直線的に開く脚部からなる。口縁形は４単位の波状口縁を呈し、波頂部は中央が凹む台形状を基本とする。口縁部が外反もしくは直線的にひらき、口縁長軸側の体部が脚部から大きく開いて立ち上がる器形を通例とする。波頂部側面に孔をもつ例が多数を占めるが、紐ずれなどの使用痕は認められない。その他、口頸部に交差部がねじれ棒状となる立体的な「X」字状の隆帯文を配す例が多い。文様はおおむね部位に応じて配され、文様構成も異なる。文様は櫛状工具や二枚貝による刺突や縄文を施す基軸隆帯と半隆起線や沈線により描出され、口頸部には横位区画帯、胴部には渦文や半円状文などの曲線文あるいは区画状の方形文などを配す。脚部との接合部には、指による押圧を施す幅太の隆帯を巡らす例が主体となる。主に口頸部の横位区画帯により３大別した。

第24群　口縁部や頸部に口唇部と隆帯による横位区画帯を配し、内部に横走する半隆起線や沈線とともに隆帯による区切文状となる弧線文や円形文を配す台付鉢。区切文状の隆帯文の貼付位置や上下幅が区画帯の位置と幅として理解されることから、区画帯の位置により細分する。

１類（第80図２、第118図８など）区画帯を口縁部から頸部にかけて配置するもの。区画帯は口縁形に沿わず水平に横走し、区画帯内の上位には口縁無文様部が位置する。

２類（第80図７、第127図５など）区画帯を頸部に配置するもの。１類同様に口縁無文様部が存在し、区画帯は基本的に横走する。区切文が不明な例は１類の可能性もあるが本類に含めた。

３類（第86図１、第129図１など）区画帯を口縁部に配置するもの。１・２類に認められる口縁無文様部は存在しない。区画帯は第24･25群と同様に口縁形に沿って波状を呈し、波頂部下には１・２類の体部上端に施される「Y」字状文の変形と考えられる単位文様が施される。

第25群　口縁部に口唇部と隆帯による横位区画帯を配し、内部に縦位文を充填的に配す台付鉢。区画帯は第18群と共通し、区画帯の位置は第24群３類と共通する。区画帯内の縦位文様により細分する。

１類（第128図１、第136図３など）半隆起線を施すもの。

２類（第102図３、第113図１など）刺突を施すもの。

第26群（第101図13、第116図６）口縁部文様をもたず、縄文を施す幅広の肥厚部のみとする台付鉢。口唇肥厚部は第24群３類や第25群の区画帯と対応する。

第27群　第24～26群に分別が困難な有文台付鉢の鉢部を一括する。部位により細分する。

１類　波頂部を一括する。肥厚する口唇部の断面が丸みをもつもの（A－第110図９など）と稜をもつもの（B－第136図13～18など）がある。後者は口唇部が厚く、幅も広い。

２類　頸部・体部を一括する。

第28群　口縁部に隆帯や側縁沈線による弧線文や渦文などの曲線文を配す深鉢。器形は口縁部が内湾するキャリパー形を呈す。主に第８群の口縁部文様を隆帯描出する土器群である。第29・30群と類似し、小片では分離困難な場合もあるが、口縁部の内湾が強く、隆帯による区画帯をもたない点で異なる。隆帯の加飾の有無により細分する。

１類（第133図30・31など）隆帯に縄文や刺突を施すもの。

２類（第79図２、第133図26・27など）隆帯を無施文とするもの。

第29群（第83図３、第134図７など）口縁部に隆帯とその側縁沈線による幅の広い横位区画帯を配し、内部に同じ手法による渦文などの曲線文を配す深鉢。器形は口縁部が内湾するキャリパー形を呈す。隆帯への加飾は基本として行なわない。横位区画帯内には縄文を充填的に施す。第32群と比べ、隆帯と側縁沈線が細く、区画帯の下端隆帯をもつ点で異なる。

第30群（第133図34など）口縁部に隆帯とその側縁沈線による幅広い横位区画帯を配し、内部に渦文からのびる垂下文による方形区画文を配す深鉢。器形は口縁部が内湾するキャリパー形を呈す。隆帯への加飾は基本として行なわない。

第31群（第134図１・２）口頸部に２条一対の隆帯と側縁沈線による渦文を配す深鉢を一括する。口縁部が内湾・内屈する。渦文内外には沈線や条線を充填的に施す。

第32群　口縁部に隆帯や微隆帯と側縁沈線による雲形文などの曲線的な区画文を配し、胴部に隆帯や沈線による縦位区画文を配し、各区画文内に縄文などを施す深鉢。口縁部が緩やかに内湾または直立ぎみに開き、胴部が円筒状を呈す器形を中心とする。口縁部に横位区画帯を配す例は少なく、口縁部文様と胴部文様が接続する例や口頸部境に横走刻目隆帯を配す例がある。第29群と比べ、区画隆帯は幅が太く、低い例が多く、側縁沈線は指ナデ状の太い例が多い。口縁部に楕円形文などの小区画文を上下多段に配す例も認められる。口唇部・隆帯の加飾の有無により細分する。

１類（第117図４、第119図12など）口唇部または隆帯に縄文や刺突を施すもの。

２類（第81図１、第85図6・7、第99図１など）口唇部・隆帯ともに無施文とするもの。

第33群　口縁部に隆帯や沈線による雲形文などの曲線的な区画文を配し、胴部に隆帯や沈線による縦位区画文を配し、各区画文内に刺突や矢羽根状沈線文を施す深鉢。文様構成は第32群とほぼ共通する。各区画文内に縄文と矢羽根状文や刺突を併用する例も認められるが、矢羽根状文を優先させて本群に帰属させた。口縁部文様により細分する。

１類（第107図６・９、第129図２・４など）口縁部に隆帯区画文を配すもの。

２類（第116図１、第137図21・23など）口縁部に沈線区画文を配すもの。

３類（第123図26）口縁部に区画文を配さず、無文帯とするもの。

第34群（第82図29、第137図24・25）口縁部に沈線による幅の狭い横位区画帯を配し、内部に矢羽根状沈線文や「S」字状文を施す深鉢。器形は円筒形を呈す。

第35群（第101図27など）口縁部を無文帯とし、頸部以下に沈線による縦位区画文を配す深鉢。

第36群　縦位展開する文様を配す深鉢の頸胴部を一括する。文様により細分する。

１類　縄文地に直線文や蛇行文などを配し、明確な磨消無文部をもたないもの。

２類　明確な沈線区画文や磨消無文部をもつもの。充填文には縄文･矢羽根状沈線文･刺突文がある。

３類　隆帯区画文を配すもの。充填文には縄文・矢羽根状沈線文・刺突文があり、無文の例もある。

第37群（第124図10、第138図15など）第32･33群と関連すると考えられる台付鉢の口縁部を一括する。台形を呈す波頂部は第24群と比べ大形で肥厚し、両側端部が円柱状に突出する例が多い。

第38群　第32・33群と関連すると考えられる器種が特定できない口縁部や突起を一括する。多くは端面に蕨手状文や「S」字状文などを配す点で共通する。部位や形態により細分する。

１類（第138図１）側面が縁帯状に幅広く肥厚する波状口縁部。台付鉢の可能性がある。

２類（第138図２～５）側面に円孔をもつ波状口縁部。

３類　突起を一括する。形態には断面が「C」字形・円柱状・円筒形・楕円形などがある。

第39群（第106図28）口縁部に口唇部と隆帯による横位区画帯を配し、内部に沈線によるクランク状文を配す深鉢。口縁部はやや内湾する。口唇部と隆帯には二枚貝による刺突を施す。

第40群　口頸部や胴部に「工」字状区画文を配し、内部に二枚貝による刺突を施す土器を一括する。３点確認した。器形により細分する。

１類（第94図１）波頂部が台形を呈す４単位の波状口縁の口頸部に区画文を配す深鉢。

２類（第138図25）直線的に立ち上がる頸部に区画文を配す深鉢。

３類（第93図６）丸味をもつ胴部上半に区画文を配す深鉢。鍔付土器や樽型土器の可能性がある。

第41群（第121図２）口縁部に入組状の沈線区画文を配し、区画文内外部を磨消無文部とする深鉢。

第42群（第138図20・21）爪形文を施す台形状の口縁部や把手状の立体的装飾部を一括する。

第43群　環状・橋状把手や鍔状隆帯をもつ土器を一括する。器種は鍔付土器あるいは壺形土器と考えられる。部位や装飾により細分する。

１類（第101図29、第138図17）口縁部に環状把手やこれに類する装飾をもつものを一括する。

２類　頸部や体部に橋状把手や鍔状隆帯をもつものを一括する。小円孔をもつもの（A－第106図35、第132図11など）と確認できないもの（B－第114図１など）がある。

３類　部位不明の把手部を一括する。橋状把手（A－第128図８など）と上方に湾曲する板状把手（B－第111図４、第123図17など）がある。

４類（第123図９、第138図22など）体部を一括する。沈線による曲線文を施す例が主体となる。

第44群（第93図７、第124図４など）樽形土器を一括する。比較的大型の土器で、器形は口縁部が直立ぎみで、頸部でくびれ、長い体部が緩やかに張る。第43群と器形が共通するが、鍔状隆帯をもたない点から分離した。各部位の文様は台付鉢の第24群との共通性がうかがえる。

第45群　鉢を一括する。器形や部位により細分する。

１類（第115図23など）口縁部が内湾または内屈するもの。

２類（第94図２など）口頸部が「く」字状を呈し、体部が算盤玉状を呈すもの。

３類（第79図６、第100図８など）体部を一括する。

第46群　浅鉢を一括する。器形により細分する。

１類（第92図14、第112図５、第127図２など）口縁部が「く」字状に内屈するもの。

２類（第106図31、第114図14など）口縁部が強く内屈するもの。

３類（第92図４、第136図22など）口縁下端部が鍔状に突出あるいは肥厚するもの。

４類（第108図36）口縁部が肥厚し「N」字状を呈すもの。

５類（第132図15）口縁部が直立ぎみで、器形が椀状を呈すもの。

第47群（第97図21、第105図10）釣手土器を一括する。器形が異なる２点を確認した。

第48群（第138図26～28）多条の横走沈線や磨消縄文により文様を描出する土器を一括する。器種には深鉢・鉢・浅鉢がある。

第49群（第132図10）口縁端部に沈線連結三叉状文を配す浅鉢。

２）無文土器

第50群（第102図１、第107図７など）口縁部が折り返し状に短く肥厚する深鉢。

第51群（第95図12）口唇部下方に刻目を施す横走隆帯を１条配す深鉢。

第52群（第95図１、第118図６・７など）口縁部が幅広く肥厚ぎみとなり、口頸部境に段をもつ深鉢。段は主に外傾接合部となる。口縁部が外半する例が多い。無文深鉢の主体となる。

第53群（第79図８、第91図１・７など）第50～52群以外の深鉢を一括する。口縁部形態には内湾・直立ぎみ・外反などがある。

第54群　文様が確認できない深鉢の胴部を一括する。

第55群　台付鉢を一括する。部位や口縁部形態により細分する。

１類（第117図５）口縁部が折り返し状に短く肥厚するもの。第50群と共通する。

２類（第80図６、第92図12 など）口縁部が幅広く肥厚ぎみとなるもの。第52群と共通する。

３類（第118図１）口唇部に刺突を施す隆帯を貼付するもの。

４類（第86図２、第98図２など）素口縁のもの。口縁端部に刺突の有無がある。

５類　文様が確認できない体部を一括する。

第56群（第111図15）鉢を一括する。

第57群　浅鉢を一括する。器形により細分する。

１類（第84図14、第89図14など）口縁下端部が鍔状に突出あるいは肥厚するもの。有文浅鉢第46群３類と共通する。

２類（第95図13）口縁内面がやや肥厚し、皿状に近い器形を呈すもの。

３）底部・脚部

底部は胴部が残存する例は胴部に帰属させた。脚部は有文・無文を一括して扱う。

第58群　底部を一括する。一般的な平底と底面中央部にむかい湾曲する上げ底状の形態があり、前者が主体となる。底面調整には研磨や丁寧なナデ（A）と粗いナデ（B）があり、敷物圧痕として網代圧痕（C）、スダレ状圧痕（D）、植物葉圧痕（E）がある。敷物圧痕が残る例は極めて少ないが、部分的に残る例も認められることから、底面調整時にナデ消される場合が多いと推測される。

第59群　台付鉢あるいは台付深鉢の脚部を一括する。文様の有無により細分する。脚部上端の器体接続部に指による押圧を施す隆帯を貼付する例は台付鉢の脚部であり、１類の多くが該当する。脚端部が顕著に肥厚する例は台付深鉢に伴うと推測され、３類の多くが該当する。

１類（第80図３・４など）無文様かつ無地文のもの。円孔を中心とし、楕円孔も認められる。比較的小型の例（第105図６・７）では孔をもたない。

２類（第80図５など）無文様で地文に縦位縄文を施すもの。楕円孔が認められる。

３類（第117図14など）隆帯による楕円形区画文を配すもの。区画文内部の文様には矢羽根状沈線文や刺突文があり、無文の例もある。円孔や楕円孔の他、両者の併用も認められる。

２　編年的位置づけ

以上の分類土器群のうち、有文土器を対象として、所属時期ごとに比定される土器型式や系統を列挙し、編年的位置づけを行う。

中期前葉　第１・２群が該当する。第１群は新保式、第２群は船元Ⅱ式に相当する。

中期中葉　おおむね加曽利ＥⅡ式に併行する時期であり、第３～31群の大部分が該当する。第３～６群は古府式や古串田新式などの北陸系土器群、第７群は里木Ⅱ式、第８～10群、第11群１・２類は中富式・咲畑式・神明式などの東海系土器群にそれぞれ比定される。第12～27群は大別すれば北陸系に比定されるが、型式学的に相違する。また、東海系第８群をはじめとする他の共出土器群との相互影響も看取される。さらに、第14・18・24・25群は第８群とともに該期土器群の量的主体となり、越前地方の他遺跡においても同様な傾向を指摘できる。これらの点からは、北陸系の地域的変容土器群としての位置が与えられる。第28～31群は大木８ｂ式の影響がうかがえる土器群である。

中期後葉　おおむね加曽利ＥⅢ式に併行する時期であり、第11群３類、第32～41群が該当する。加曽利ＥⅢ式の影響を受けた土器群（第11群３類、第30～34群）と北陸系土器群（第39～41群）に大別でき、前者が量的主体となる。このうち、第32～34群は加曽利ＥⅢ式の強い影響がうかがえる土器群であり、一部は大杉谷式の範疇に含まれる。第39～41群は串田新式に比定される。

後期中葉　第48群が該当する。加曽利Ｂ式に類似する土器群である。

後期末　第49群が該当する。八日市新保式に相当する。

晩期中葉　無文深鉢が１点（第127図１）ある。

なお、第17群（第137図２）と第36群の一部（第114図10）は小片のため明確に識別できなかったが、中期末に所属する可能性がある。

３　竪穴住居出土土器（第79～108図）

炉床土器の時期が中期中葉となる竪穴住居には、SI05（第83図３－第29群）、SI19（第102図２－第18群、同図３－第25群）、SI20（第107図１－第18群、同図２－第14群）の３例があり、同じく中期中葉の可能性が高い住居には、SI06（第84図14－第57群）がある。埋設土器が中期中葉となる住居にはSI14（第91図３－第14群）がある。その他、炉床土器の可能性がある土器が中期後葉となる住居にはSI16（第95図１－第52群、同図２－第36群）がある。

覆土出土土器は多くの住居において中葉と後葉の混在が認められる。量的傾向として中葉土器が多く出土した竪穴住居にはSI04・05・14・18があり、後葉土器がやや多く出土した竪穴住居にはSI06～09・11・15・17・19・20がある。

以下、竪穴住居ごとに主要な個体例について記述を行う。

SI01　小片が多く、図化は行っていないが、主に第８・25群などが認められる。

SI02（第82図24～26）26は第24群３類に属し、すべて半隆起線により文様を描出する。

SI03（第82図27～30）27は第27群１類に属し、すべて沈線により文様を描出する。

SI04（第79～81図、第82図１～23）第79図２は第28群に属し、口縁部半円状区画文内に縄文を施す。同図５は第８群２類に属し、口縁部・頸部は沈線、胴部は半隆起線により文様を描出する。口縁部に楕円形区画文と渦文や「S」字状文を配し、区画文内に縄文を充填状に施す。胴部には櫛状工具による縦位条線を施文後、両端が内向きに巻く弧文を配す。第80図２は第24群１類に帰属させた。口縁上面形は八角形を呈す。半隆起線により文様を描出する。口唇部には爪形文を施す２条一対の隆帯を貼付する。

同図７は第24群２類に属す。文様は頸部半隆起線帯のみとなる。

SI05（第83図･第84図１～13）第83図３は炉床土器と考えられ、口縁部文様から第29群に帰属させた。頸胴部文様は第８群と共通する。地文縄文を施文後、口縁部に隆帯を貼付する。同図４はP10（土器埋設遺構８）出土土器であり、口縁部文様から第8群に帰属させた。口縁部上方と底部中央を打ち欠きにより欠失する。断面が平坦となる浅い沈線で文様を描出する。口縁部には幅の狭い弧状楕円形文が２列残る。頸胴部境には文様施文工具による「D」字状の刻目隆帯を配す。胴部は下端まで縦位長方形区画文を配し、内部に蛇行文を配す。区画文間の磨消無文部は認められない。

SI06（第84図14～28）第84図14は炉床土器であり、第57群に属す無文浅鉢である。内外面ともに研磨する。同図16は第19群に属す。口縁部に隆帯による横位区画帯を３帯配し、内部に縦位刺突を施す。区画最下帯には単位的な円形文を配す。胴部に隆帯による縦位区画文を配し、幅の広狭にかかわらず、すべての区画文内部に矢羽根状沈線を施す。

SI07（第85・86 図、第87図１～７､第88図、第89図１～16）第85図７は第32群に属す。口縁端部に４単位の山形小突起をもつ。口縁部に隆帯による雲形文を４箇所、楕円形区画文を１箇所配す。頸胴部は胴最大径付近で上下２帯に分帯し、縦位楕円形区画文を配す。口縁部雲形文間と胴部縦位楕円形区画文間には円形刺突文を２点一対で施す。各区画文内には半撚り縄文 LL を充填的に施すが、口縁・胴部区画文の各１箇所には付加条縄文 RL+r を施す。同図11は第19群２類に帰属させた。口縁部区画帯内の渦文と胴部の沈線区画文内の矢羽根状文からは、第33群と型式学的距離が近い。第86図１は第24群３類に属す台付鉢である。口縁上面形が樽形を呈す。他の同群土器と比べ簡略な文様構成となり、かつ口縁短軸側の体部文様構成も体部ごとに異なる。文様は口縁部区画帯内を半隆起線､体部を沈線で描出する。

SI08（第87図８・９、第89図17～31）第89図20は浅鉢である。突起部には縦位孔をもつ。

SI09（第90図）１は第33群に属す。２の縦位区画文を配す胴部と同一個体の可能性が高い。

SI10（第92図１～９）１は第８群に属す。SI04出土土器と同一個体（第82図１）の可能性がある。

SI11（第92図10～15）11は第32群に属す。口縁部上半を欠損する。隆帯文の上下が幅狭の区画文となると考えられる。胴部に蛇行文を施す縄文部と磨消無文部となる縦位区画文を交互に配す。

SI12（第97図25・26）２例とも第８群に属す。

SI13（第97図27～29）第８群（27）と第52群などの無文土器（28・29）がある。

SI14（第91図・第92図16～26）第91図１・２は無文の炉床土器である。同図３は土器埋設遺構８の埋設土器であり、第14群に属す。口縁端部に４単位の山形小突起をもち、口縁部に４単位の長楕円形区画文を配す。頸部に多条の横走半隆起線帯､胴部に沈線による楕円形文と両端が鍵手状となる弧文を配す。同図４は第16群に属す。方形文と縦位短沈線文は厳密には交互配置とならない。

SI15（第93・94図）第93図１は炉床土器である。縦位帯縄文を口縁部から施す。同図６は第40群３類に属す。樽型土器の可能性がある。横位区画帯内には長方形区画文と楕円形区画文を配す。地文に撚糸文Ｌを施す。同図７は第44群の樽型土器である。半隆起線と隆帯により文様を描出する。色調が灰色を呈し、胎土に砂粒を多く含む点で他の土器とは異なる。第94図１は第40群１類に属す。波頂端部中央は弱い押圧により凹み、両端に円形刺突文を施す。波側部内面に指ナデ状の浅い沈線を沿わす。

SI16（第95図）１は集合条線により、第32・33群の胴部と近似する文様を描出する。

SI17（第96図･第97図１～24）第96図６は第18群２類に属す。頸胴部文様は半隆起線により描出する。第97図21は釣手土器である。内外面には部分的に赤彩痕が残る。釣手部には長方形のすかしをもつ立体

装飾を連続して配す。釣手部の両側には隆帯と側縁沈線による半円形文を配す。

SI18（第98～101図）第98図２・３は無文の炉床土器である。第99図１は第32群に属す。口縁部の隆帯文は側縁の強いナデにより断面三角形状となる。頸胴部の縦位区画沈線間は磨消無文部とし、区画帯内の縦位縄文間にもナデによる磨消無文部をもつ。第100図３は第14群に属す。頸部には第91図３などに認められる半隆起線文の沈線化と考えられる蛇行文を配す。

SI19（第102～106図）第102図１～３は炉床土器である。２は第18群２類に属し、胴部上端には第８群と共通する楕円形文を配す。近似例には第105図１がある。３は第25群２類に属す台付鉢である。横走半隆起線帯下には文様を配さない。第103図６は第33部に属す。口縁部に微隆帯による横位区画帯を配し、内部に雲形文と類似する２種の区画文を交互に配す。内部には集合条線を施す。胴部の縦位沈線区画文内には集合条線による矢羽根状文を充填する。第105図10は釣手土器である。釣手部は欠失する。口縁端部も含め地文には縄文を施す。釣手基部には隆帯と沈線による文様がわずかに残る。

SI20（第107・108図）第107図１・２は炉床土器である。１は第18群２類に属す。４単位の波状口縁を呈し、波頂部は低い台形状を呈す。波頂部下には横位のねじれ棒状隆帯文を器面に貼付する。地文には縦位帯縄文を施す。波頂部形状や隆帯文から台付鉢第25群との関連がうかがえる。２は第14群に属す。口縁部の区画隆帯には爪形文を施す。区画内の縄文は充填的ではなく、地文である縦位帯縄文を残した可能性が高い。胴部には多条の半隆起線帯を配す。第108図14は第14群に帰属させた。口縁部には微隆帯による横位区画帯を配す。区画帯内には円形と長方形を呈す区画文を配す。微隆帯と区画文内には同時に縄文を施す。頸胴部には区画帯直下から垂下沈線文と縦位帯縄文を施す。磨消無文部と垂下沈線文の配置には規則性が認められず、縦位区画帯化していないと判断される。同図24は口縁部に方形に近い隆帯区画文を配すことから第14群に帰属させた。区画文内部に集合条線を充填する。頸胴部には縦位帯縄文のみを施す。

４　掘立柱建物出土土器（第109～111図）

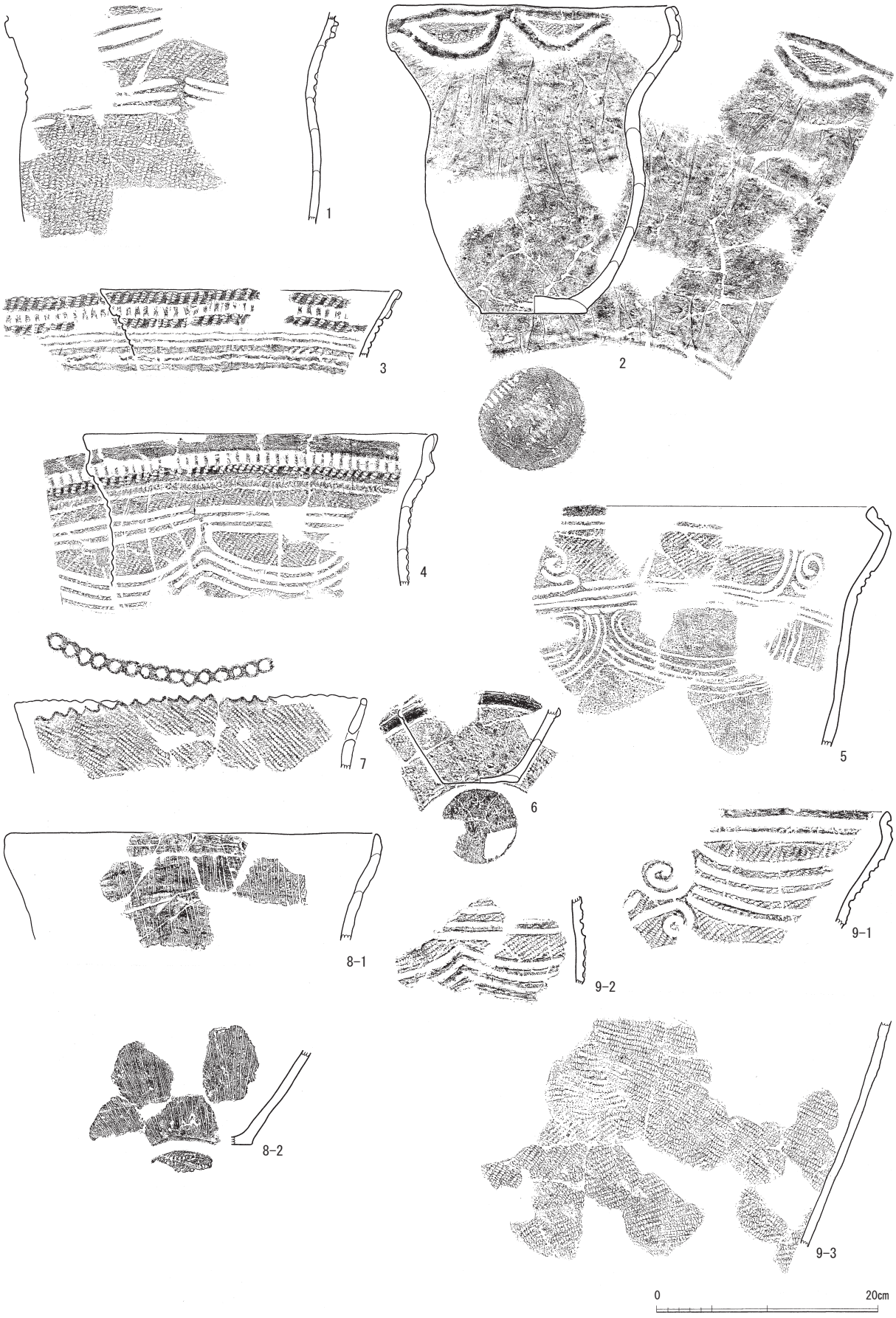
以下、主要な個体例について記述する。

第109図１はSB04－P2の上層から同図２・５・６とともに出土した（第71図）。第24群２類に属す。口縁部を幅広く無文様部とする。半隆起線により文様を描出する。同図７はSB06－P2から出土した。第14群に属す。口縁部の隆帯区画はSQ5出土の第33群（第129図２・４）と近似する。胴部には縦位帯縄文が認められる。第110図１はSB13－P4の上層から出土した（第71図）。第８群に属す。半隆起線により文様を描出する。口縁部の半円状区画文内には円形刺突文列を１列配し、渦文上方にも刺突を施す。同図３はSB14－P3から出土した。第25群２類に属す。口縁短軸側であり、波頂部は小山形を呈す。同図２とともに体部文様は簡略化された半円状文と垂下文であり、縄文地に沈線により描出する。同図７はSB16－P3から同図８～12とともに出土した（第71図）。７・11・12が上層で重なって出土し、その他は柱穴内部から出土した。７は第18群２類に属す。沈線により文様を描出する。11・12は同一個体の可能性がある。第111図14・15はSB18－P1から出土した。14は台付鉢の体部であり、脚部との接合部に押圧隆帯が残る。地文に縦位帯縄文を施す。16は鉢あるいは浅鉢の体部であり、内面に赤彩痕が残る。同一個体（第89図15）はSI07から出土した。

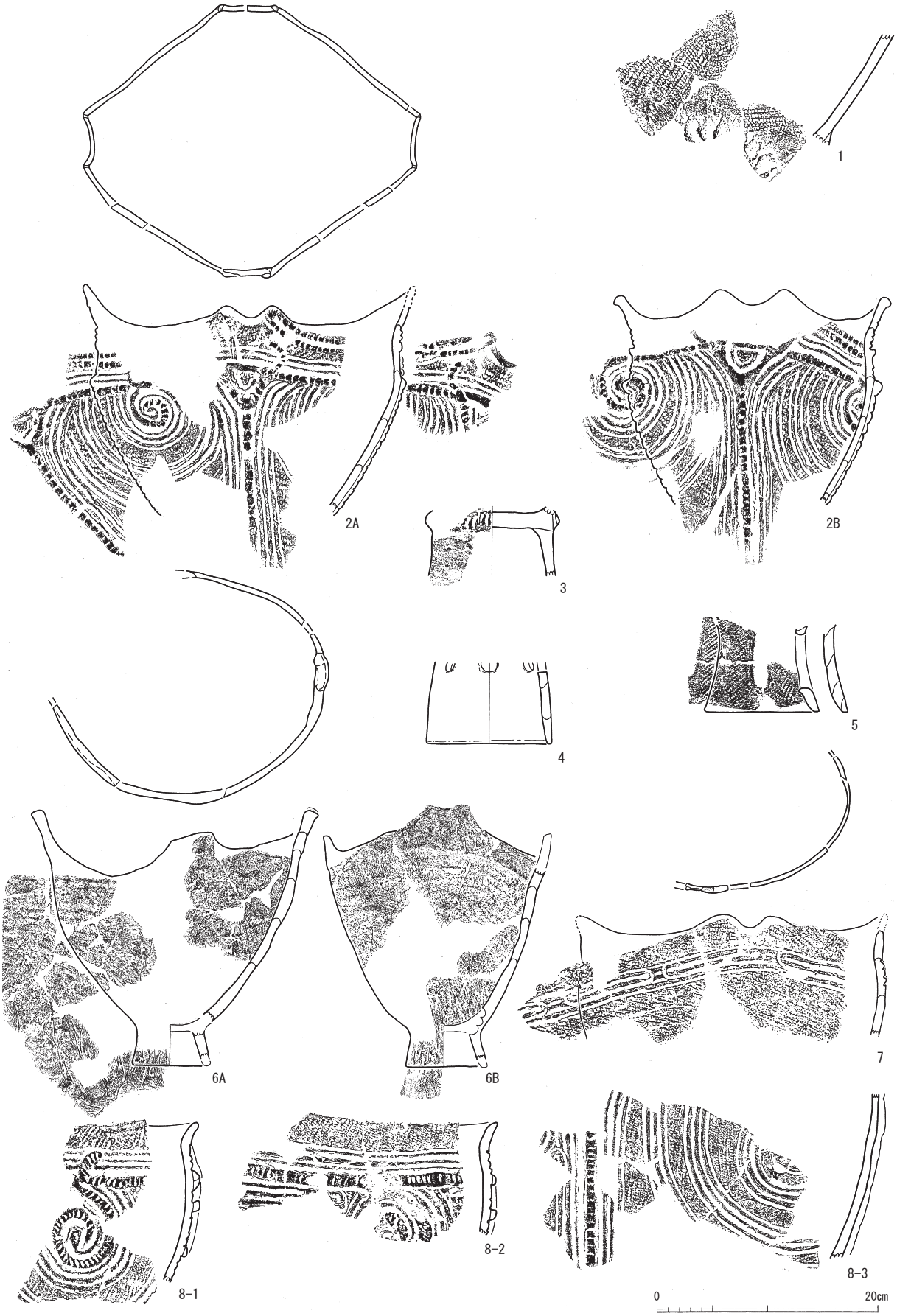
５　土器埋設遺構出土土器（第112・113図）

以下、埋設土器を中心として各個について記述する。

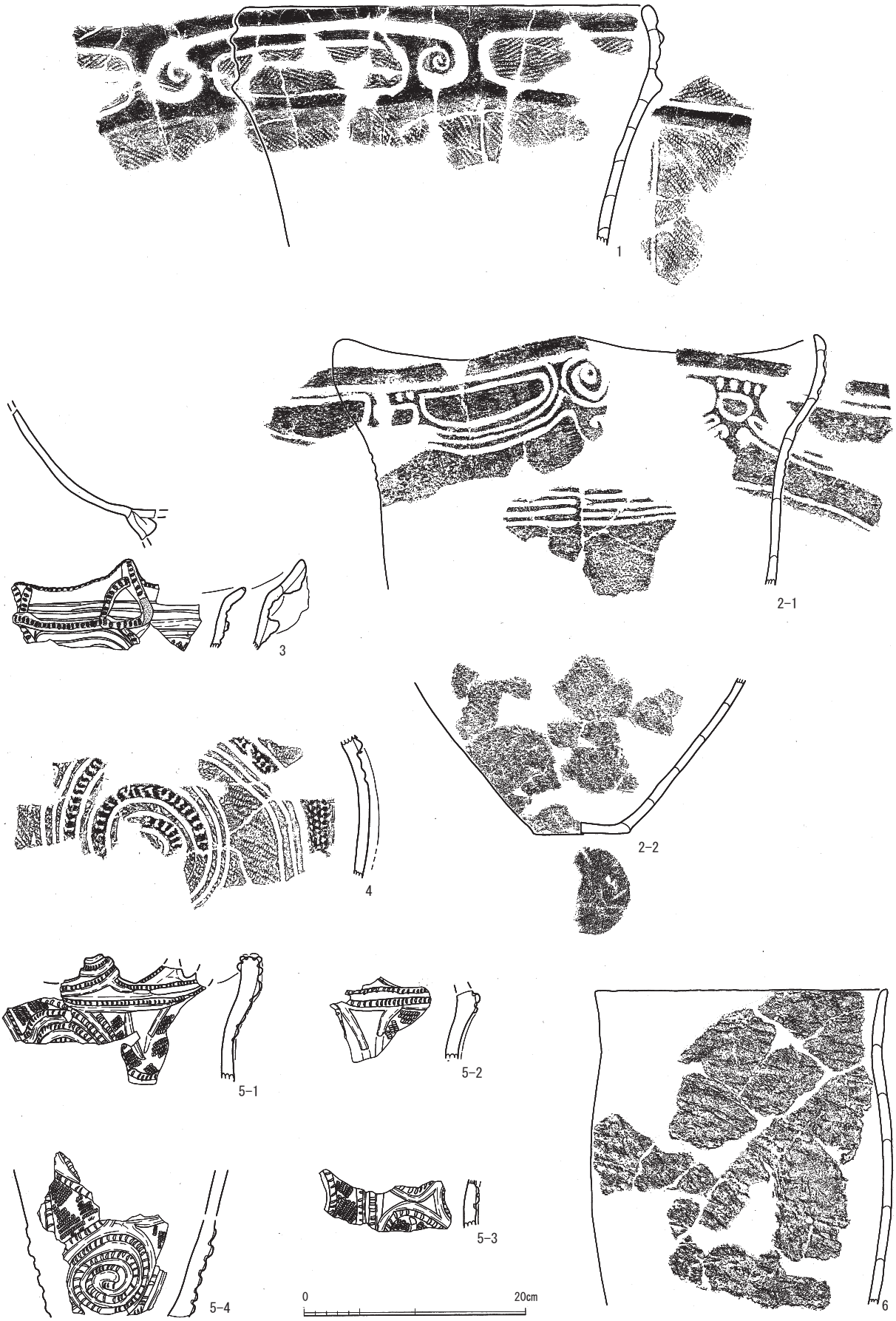
第112図１は土器埋設遺構２から出土した。胴部下方を打ち欠きにより欠失する。口頸部が「く」字



第79図　SI04 出土土器実測図１（縮尺 1/5）



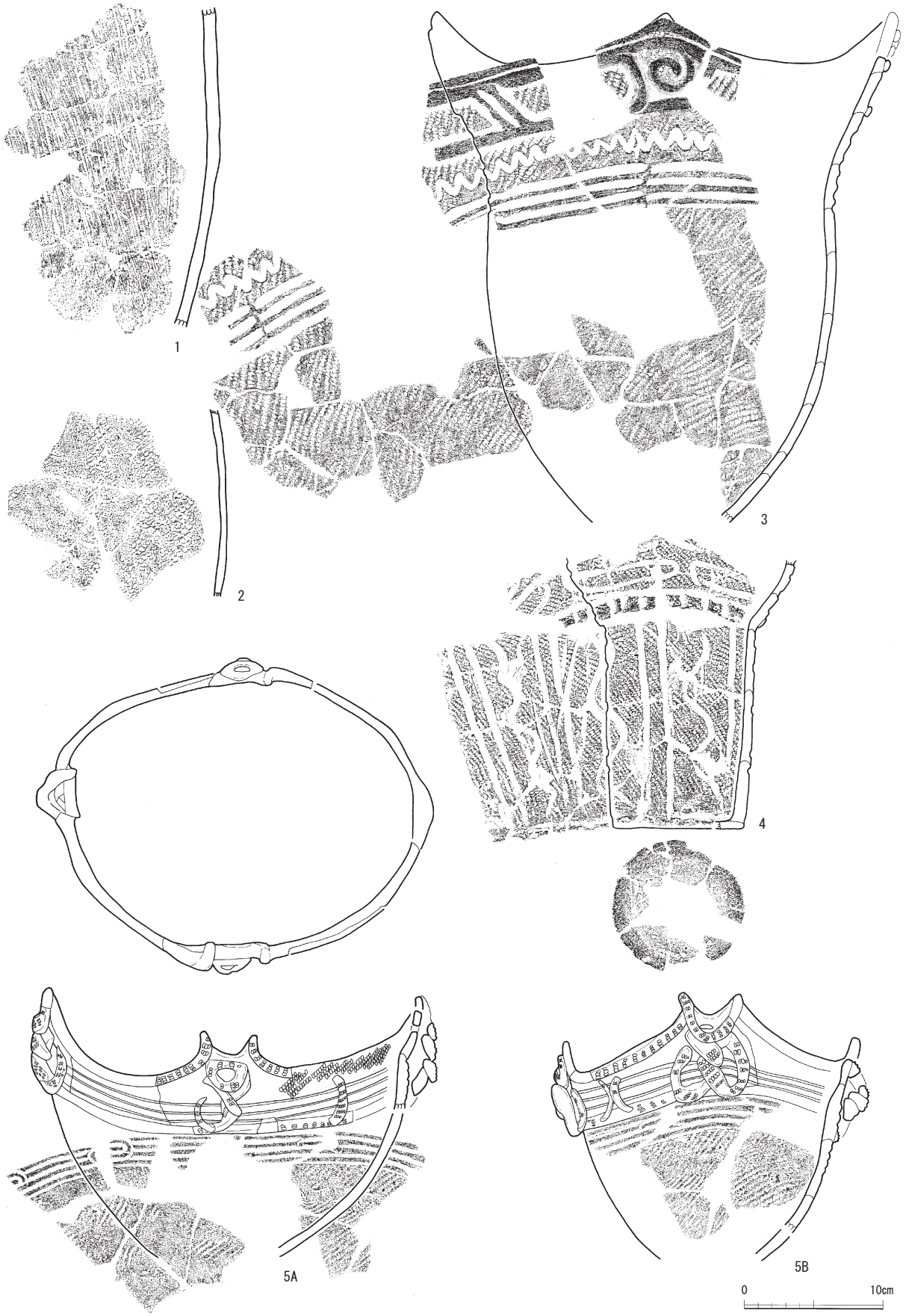
第80図　SI04 出土土器実測図２（縮尺 1/5）



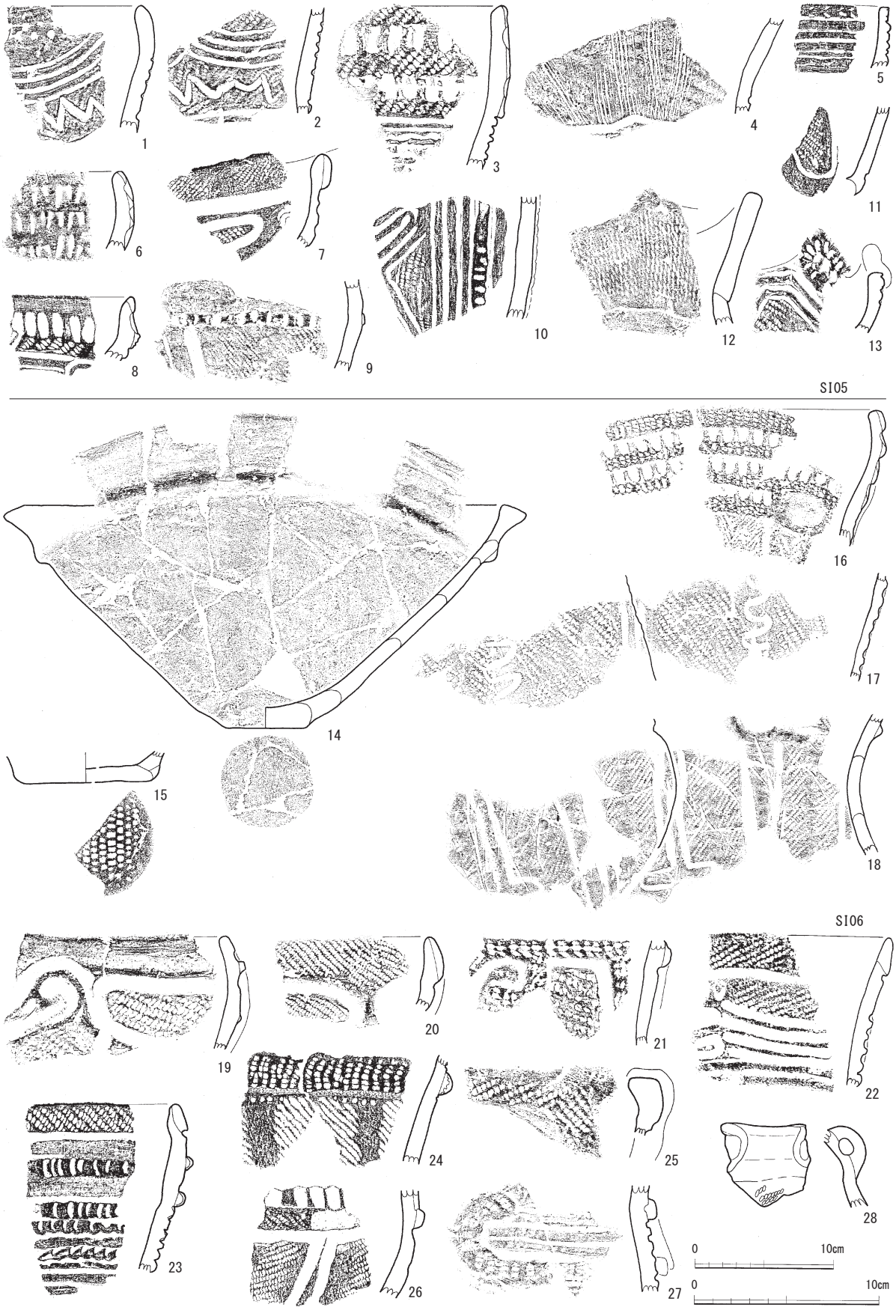
第81図　SI04 出土土器実測図３（縮尺 1/5）



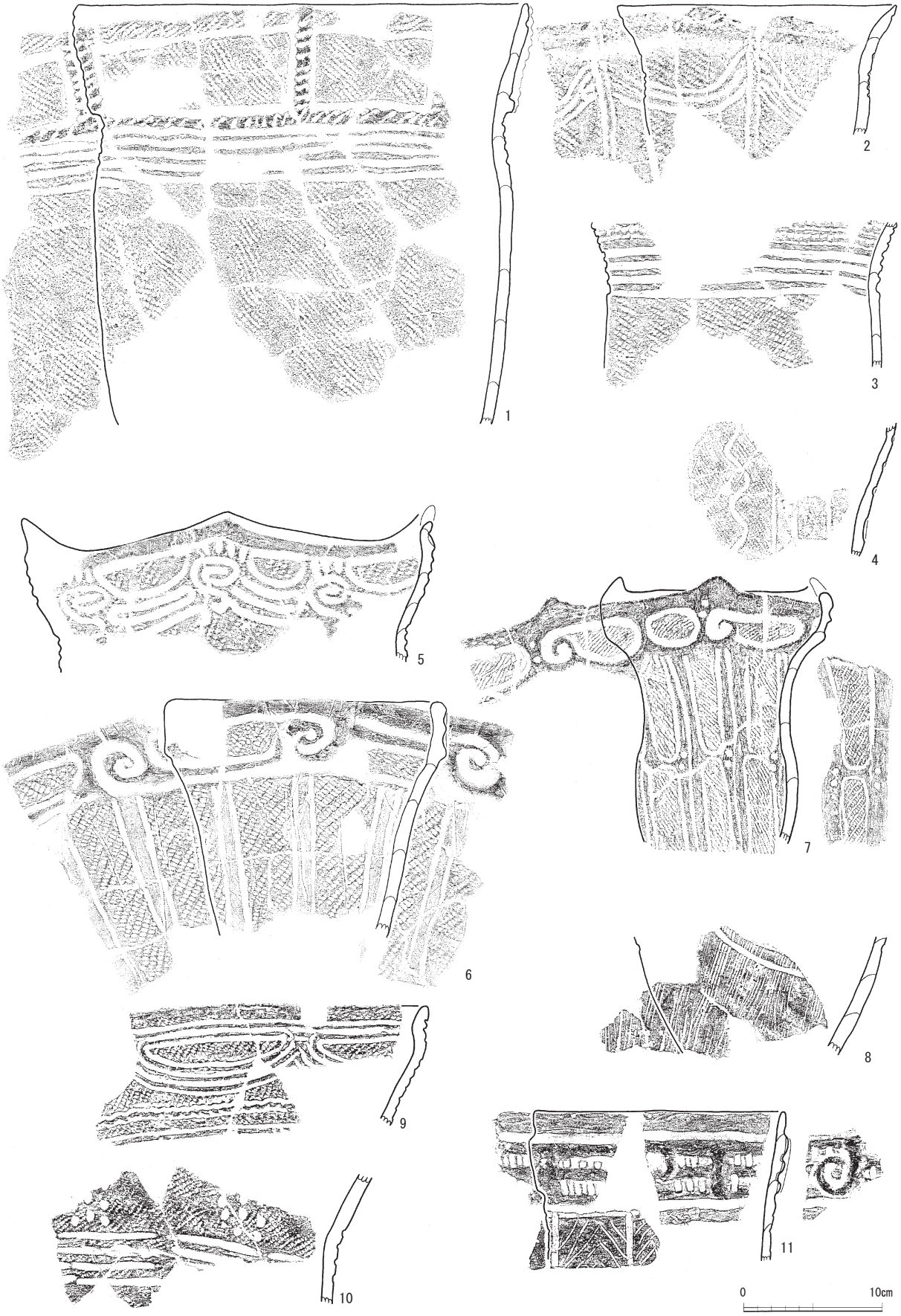
第82図　SI02ー04 出土土器実測図（縮尺 1/3）



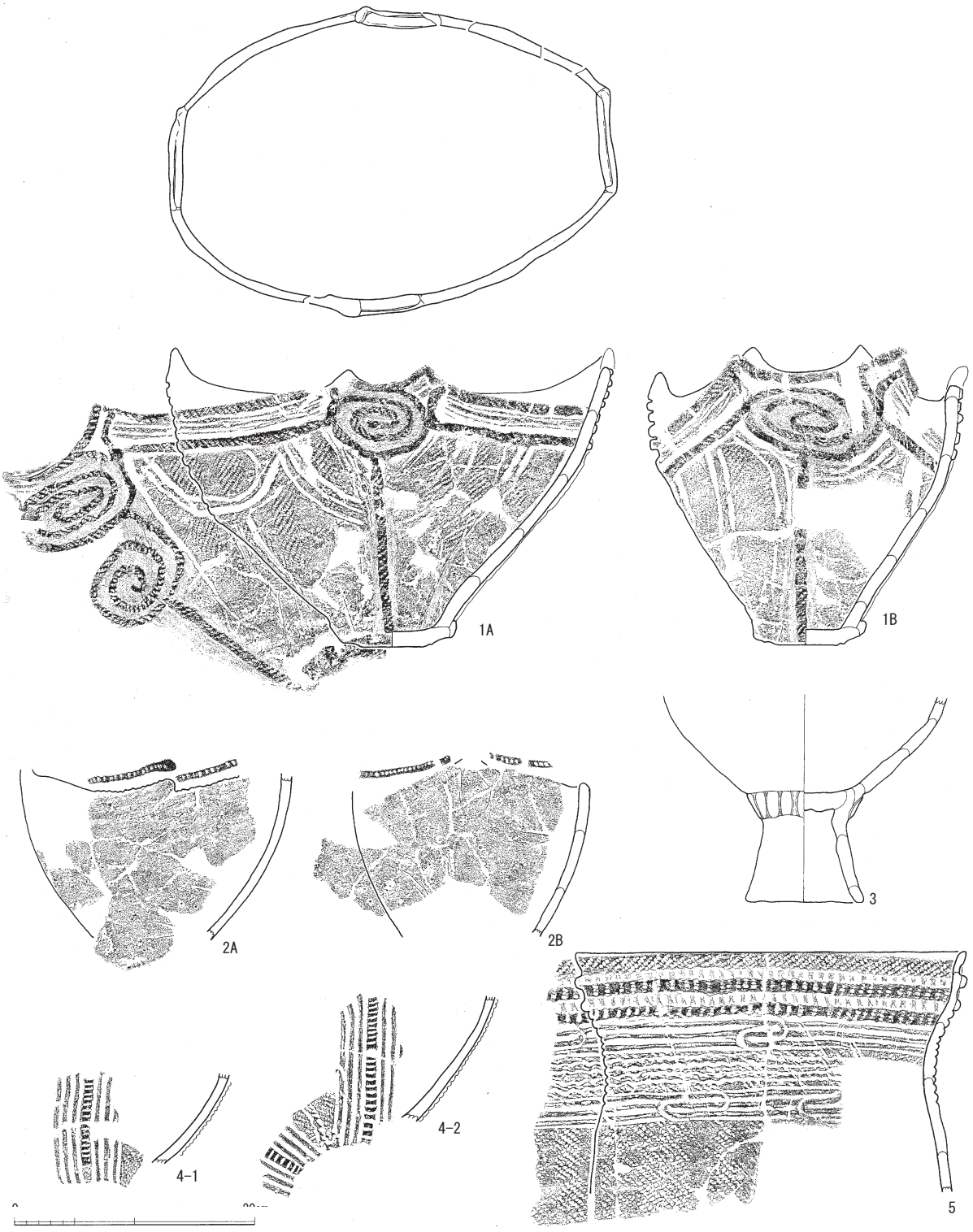
第83図　SI05 出土土器実測図（縮尺 1/4）



第84図　SI05・06 出土土器実測図（縮尺 1/4：14・16ー18　1/3：その他）



第85図　SI07 出土土器実測図１（縮尺 1/4）



第86図　SI07 出土土器実測図２（縮尺 1/5）

状に屈折する。口縁端部に指による押圧を施す。横位縄文RLを施文後、胴部下半に横位ナデを施す。縄文は節が細かい０段多条であり、部分的に単独の横位結節縄文が認められる。器形や縄文などから中期中葉に属すと判断される。胴部内面下方には環状に煤が付着することから、転用品と考えられる。同図２は土器埋設遺構１から出土した。第４群に属す。胴部下方で急にすぼまる器形は他と比べ特徴的である。同図４は土器埋設遺構４から出土した。第18群２類に属す。沈線により文様を描出する。地文は



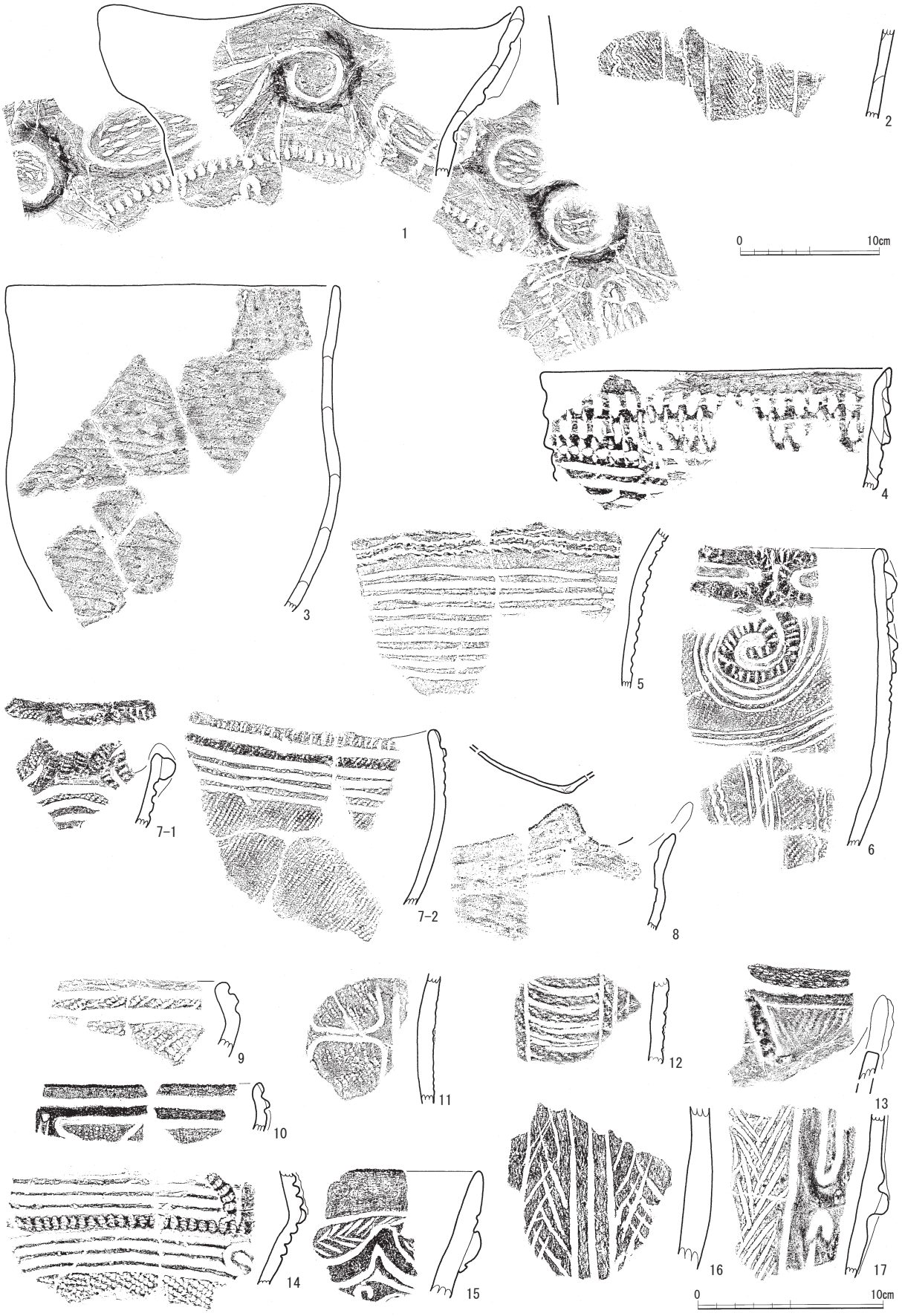
第87図　SI07・SI08 出土土器実測図１（縮尺 1/5）



第88図　SI07 出土土器実測図３（縮尺 1/3）



第89図　SI07・08 出土土器実測図２（縮尺 1/3）



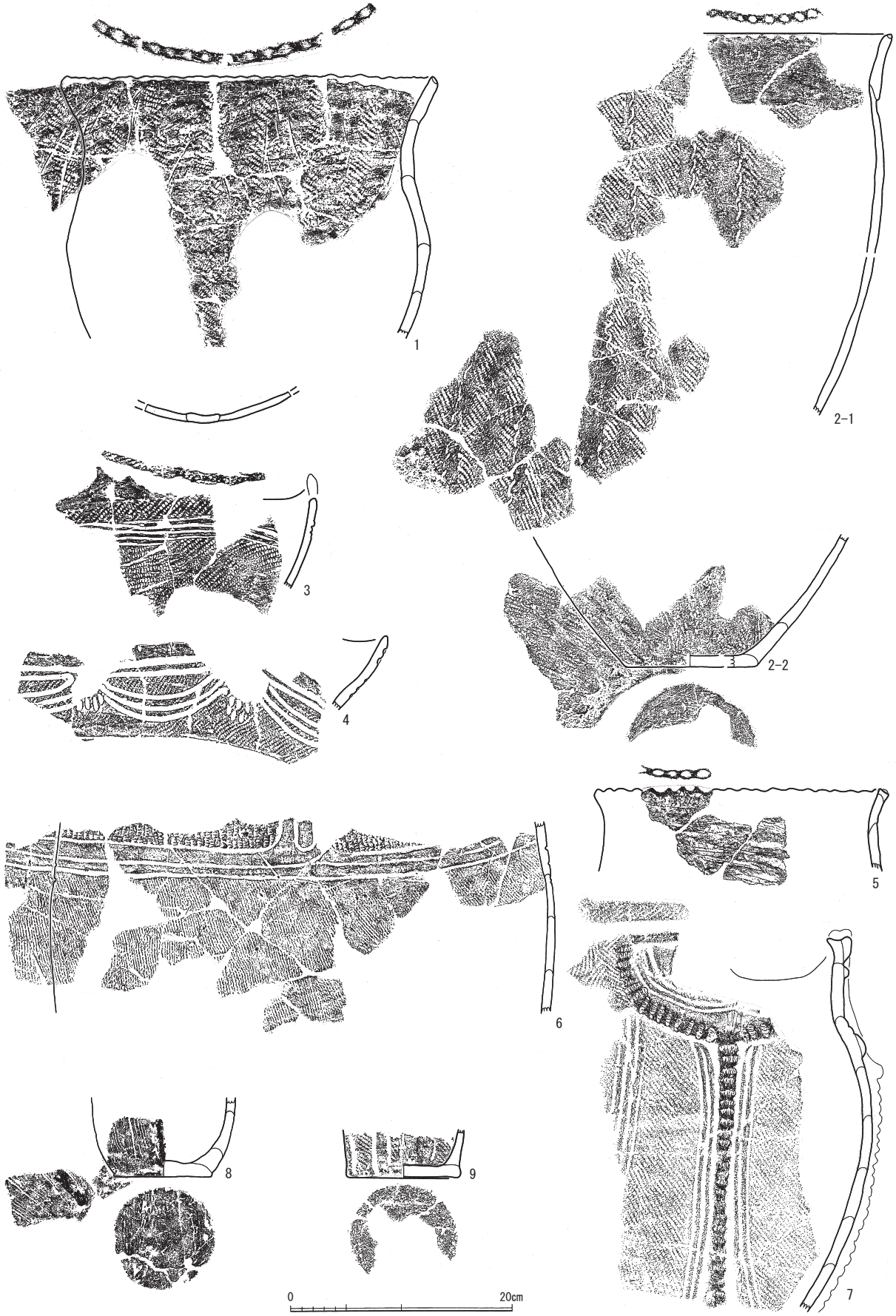
第90図　SI09 出土土器実測図（縮尺 1/4：1ー8　1/3：その他）



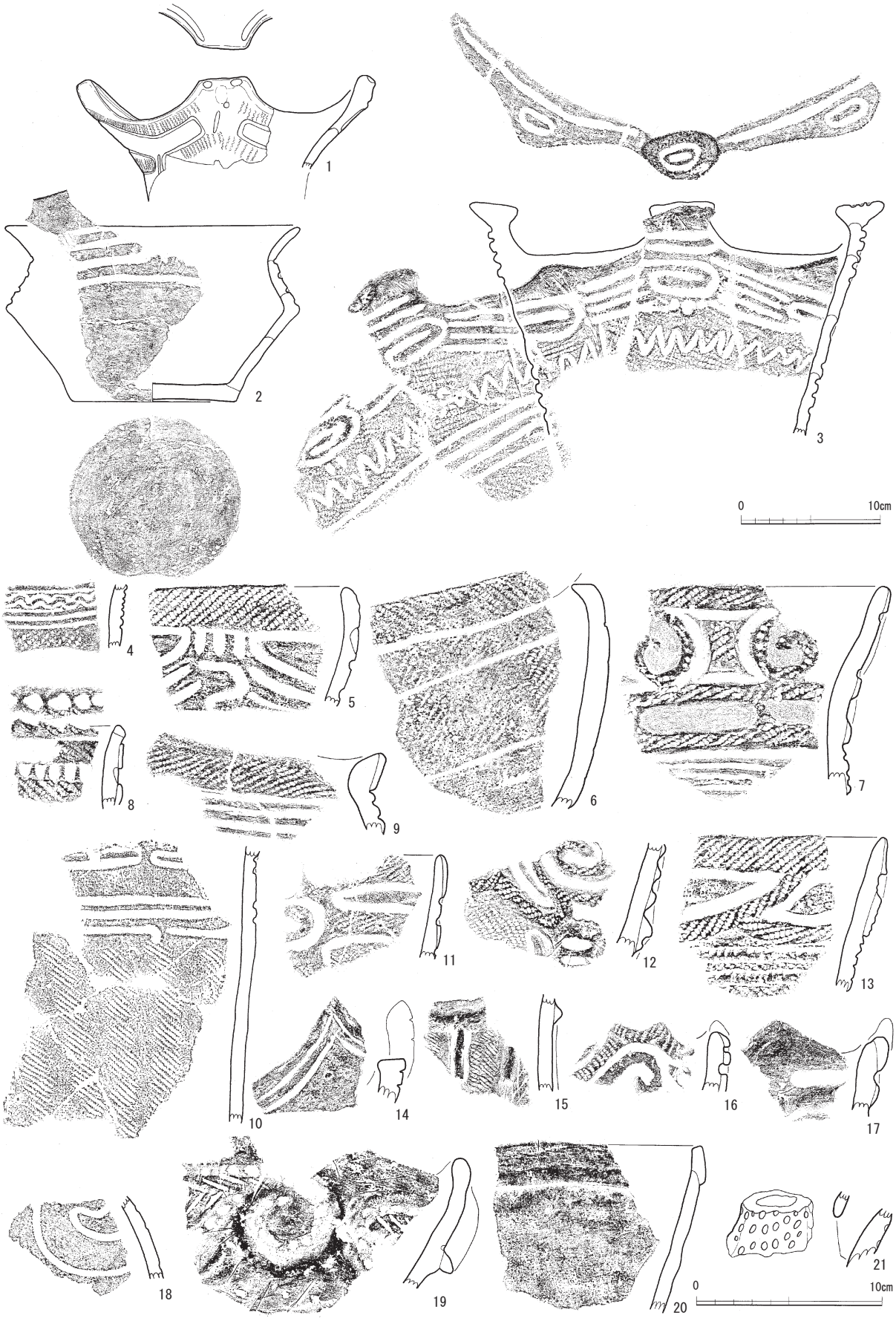
第91図　SI14 出土土器実測図（縮尺 1/5）



第92図　SI10・11・14 出土土器実測図（縮尺 1/3）



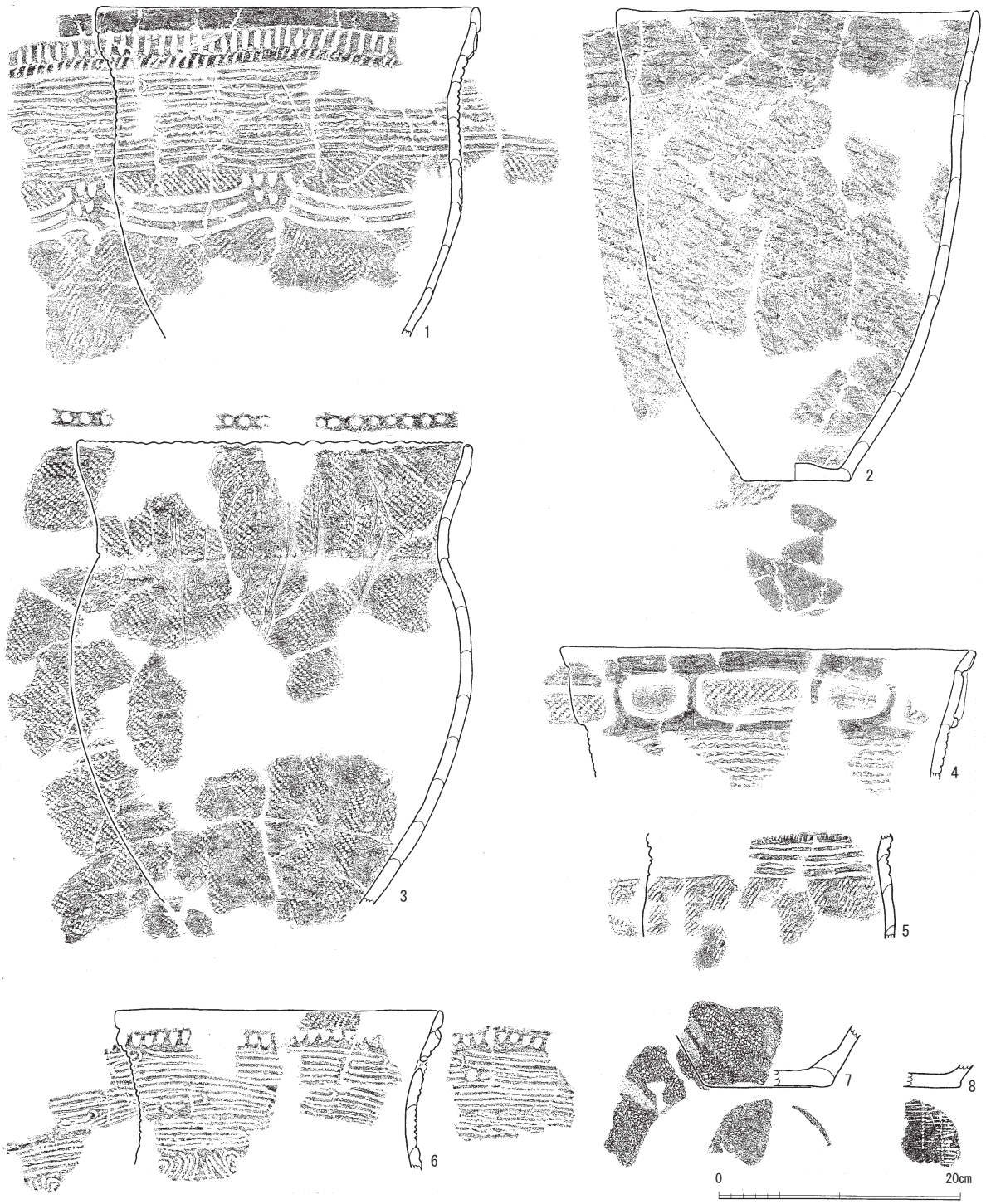
第93図　SI15 出土土器実測図１（縮尺 1/5）



第94図　SI15 出土土器実測図２（縮尺 1/4：1ー3　1/3：その他）

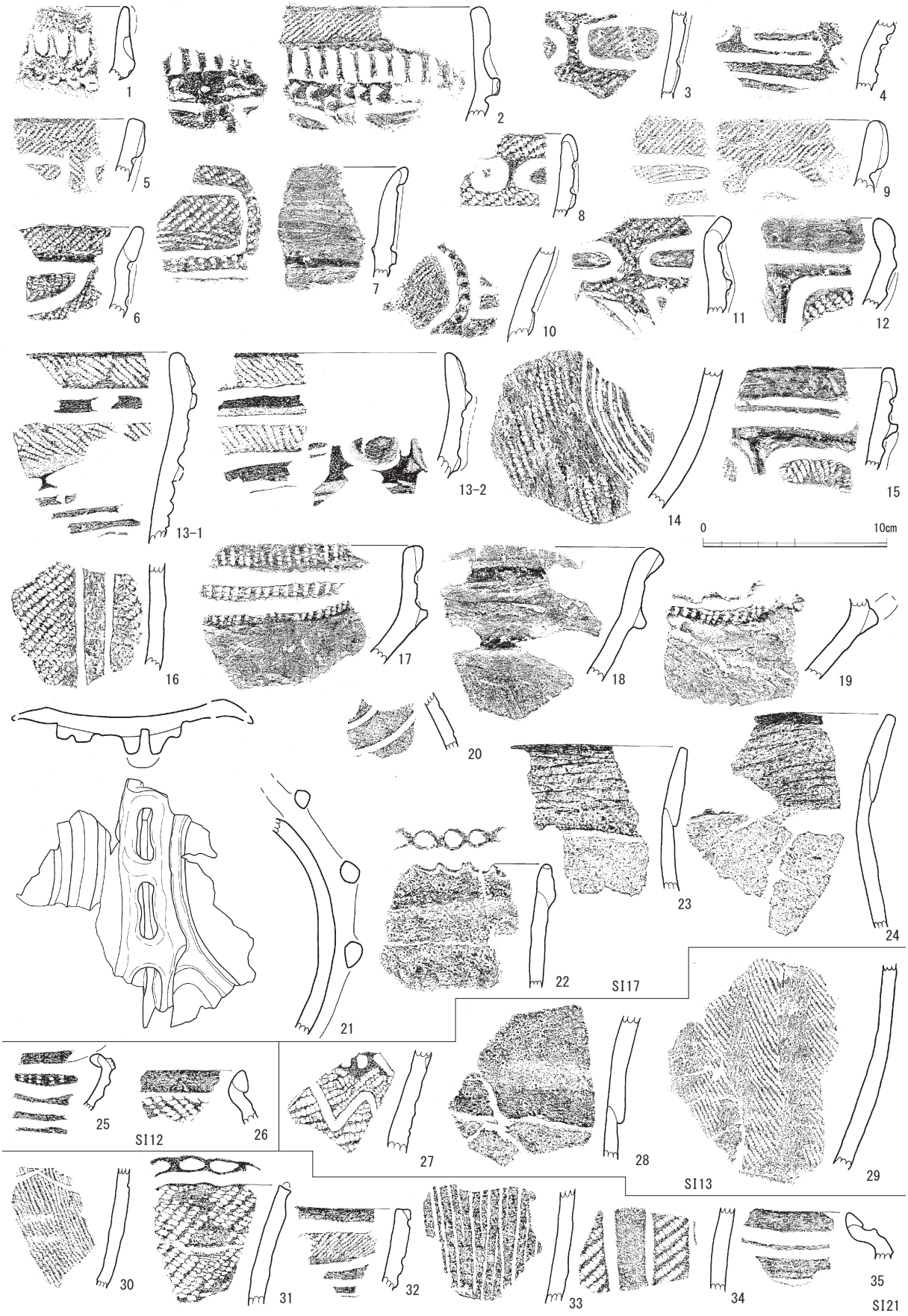


第95図　SI16 出土土器実測図（縮尺 1/4：1ー4　1/3：その他）

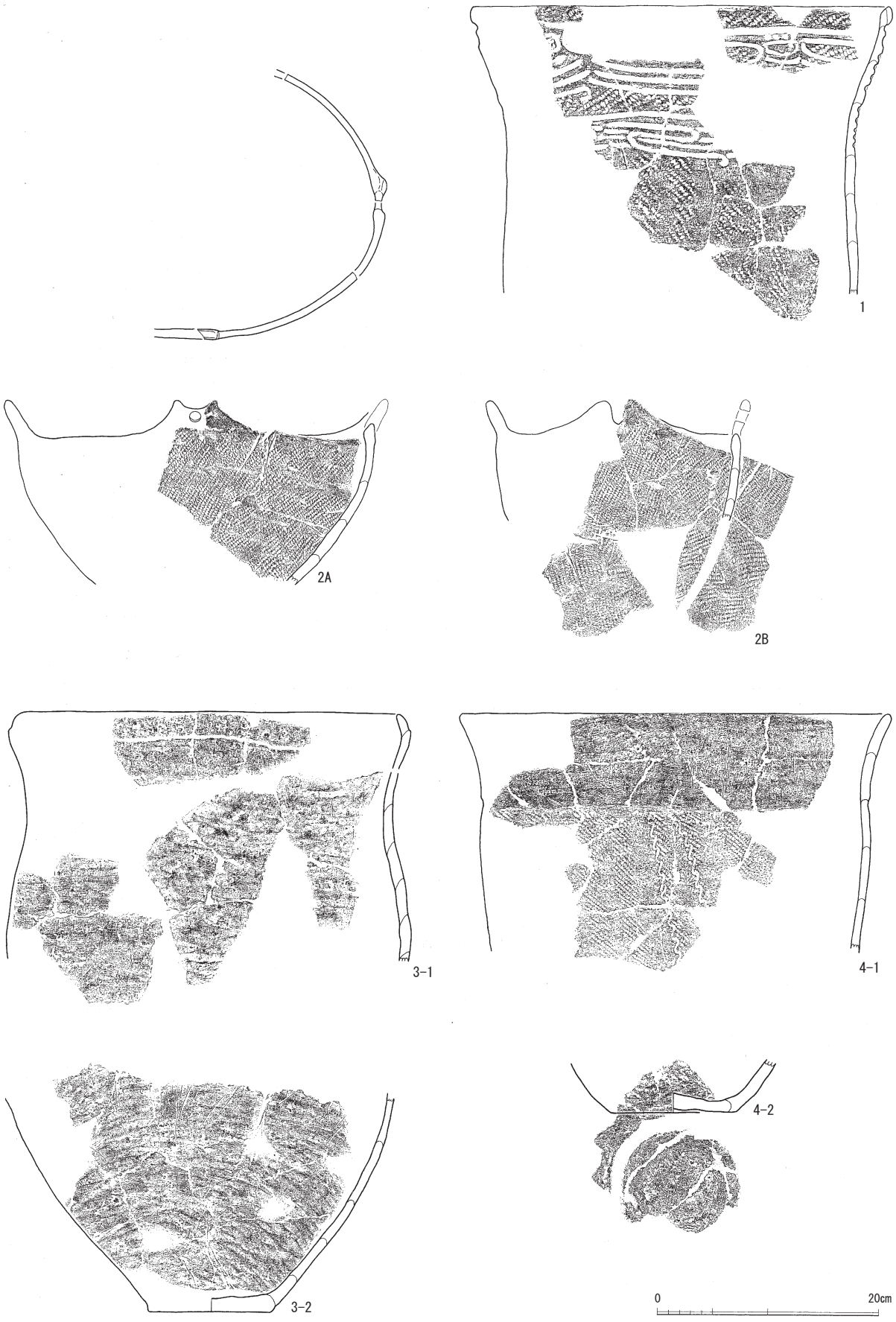


第96図　SI17 出土土器実測図（縮尺 1/5）

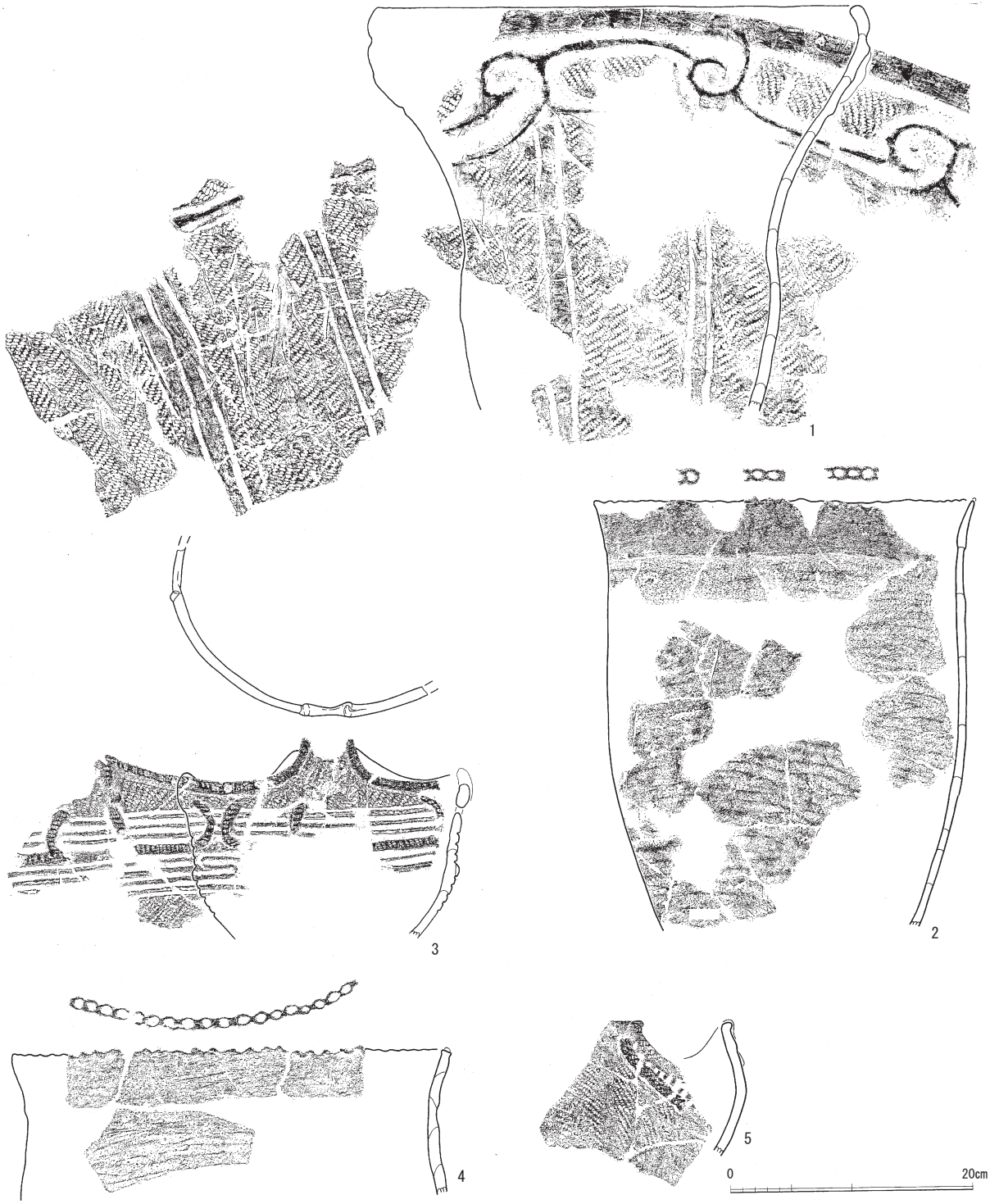
帯縄文ではない。同図５は土器埋設遺構６から出土した。口縁部に４単位の立体装飾と隆帯区画帯を配す浅鉢である。第29群に属す浅鉢であると判断され、大木 8b 式の影響もうかがえる。装飾部内面には曲線的な文様を配す。第113図１～３は土器埋設遺構５から出土した。１の内部に２が密着して入り込み、３は遺構内から出土した（第62図）。１は第25群２類に属す。体部文様は沈線による簡略化された方形区画文状となる。２は第52群に属す。間隔をあけて集合条線を施す。３は胴部に縦位区画文を配し、内部に蛇行沈線文と縦位帯縄文を施す。区画文間には磨消無文部が認められない。



第97図　SI12・13・17・21 出土土器実測図（縮尺 1/3）



第98図　SI18 出土土器実測図１（縮尺 1/5）

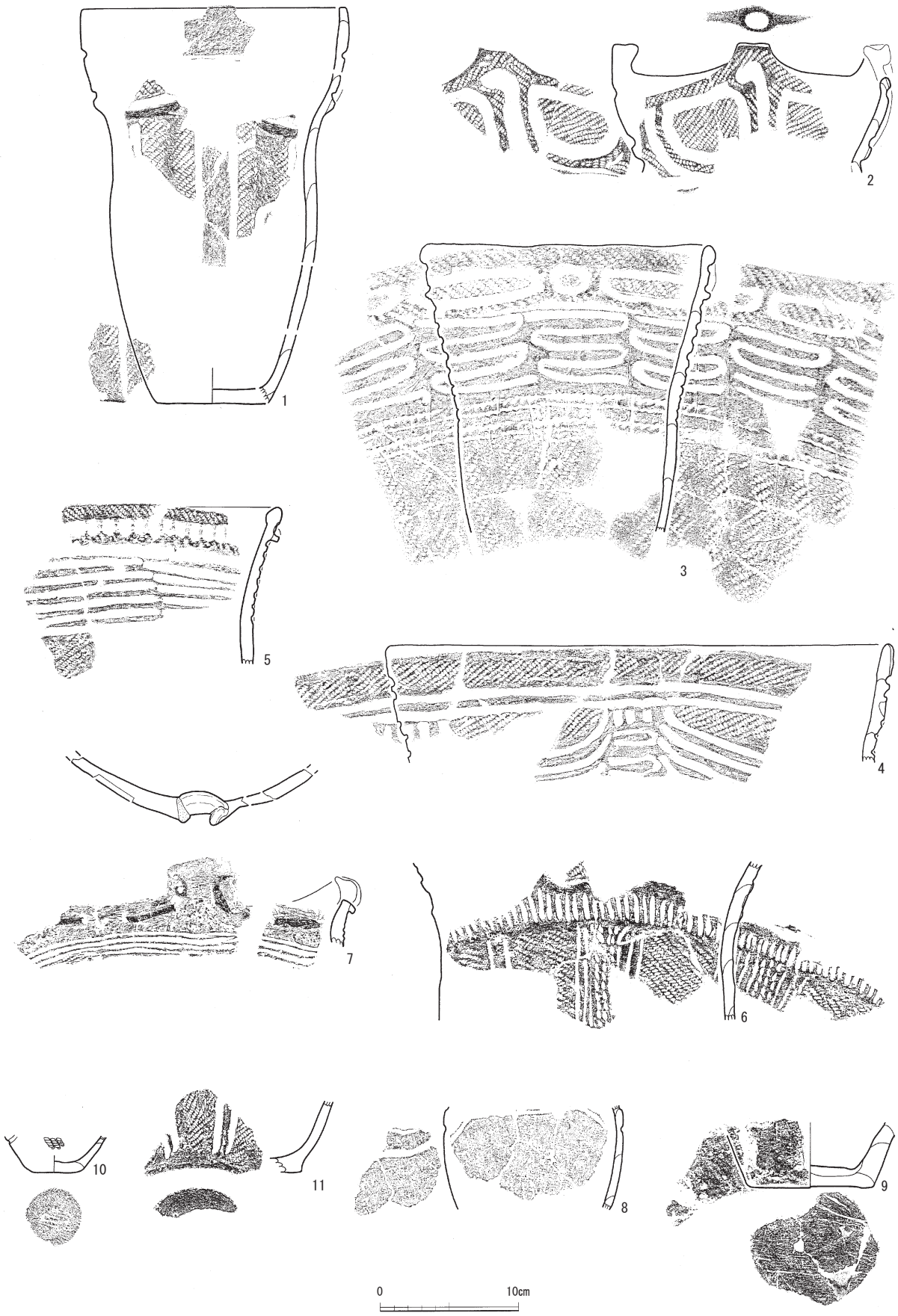


第99図　SI18 出土土器実測図２（縮尺 1/5）

６　土坑出土遺物（第114～123図）

以下、主要な個体例について記述する。

第114図３～７はSK09から出土した。３は第33群に属す深鉢・浅鉢以外の器種と考えられ、内外面に赤彩痕が残る。同一個体（第123図５）はSK84・85から出土した。５は第18群２類に属す。肥厚する口唇部がやや長い。口縁部区画帯下にさらに隆帯区画帯を１帯配し、内部に区切文による楕円形文を配す。類似例にはSK34出土土器（第117図６）がある。同図14は浅鉢であり、口縁部の隆帯区画文から第13群



第100図　SI18 出土土器実測図３（縮尺 1/4）



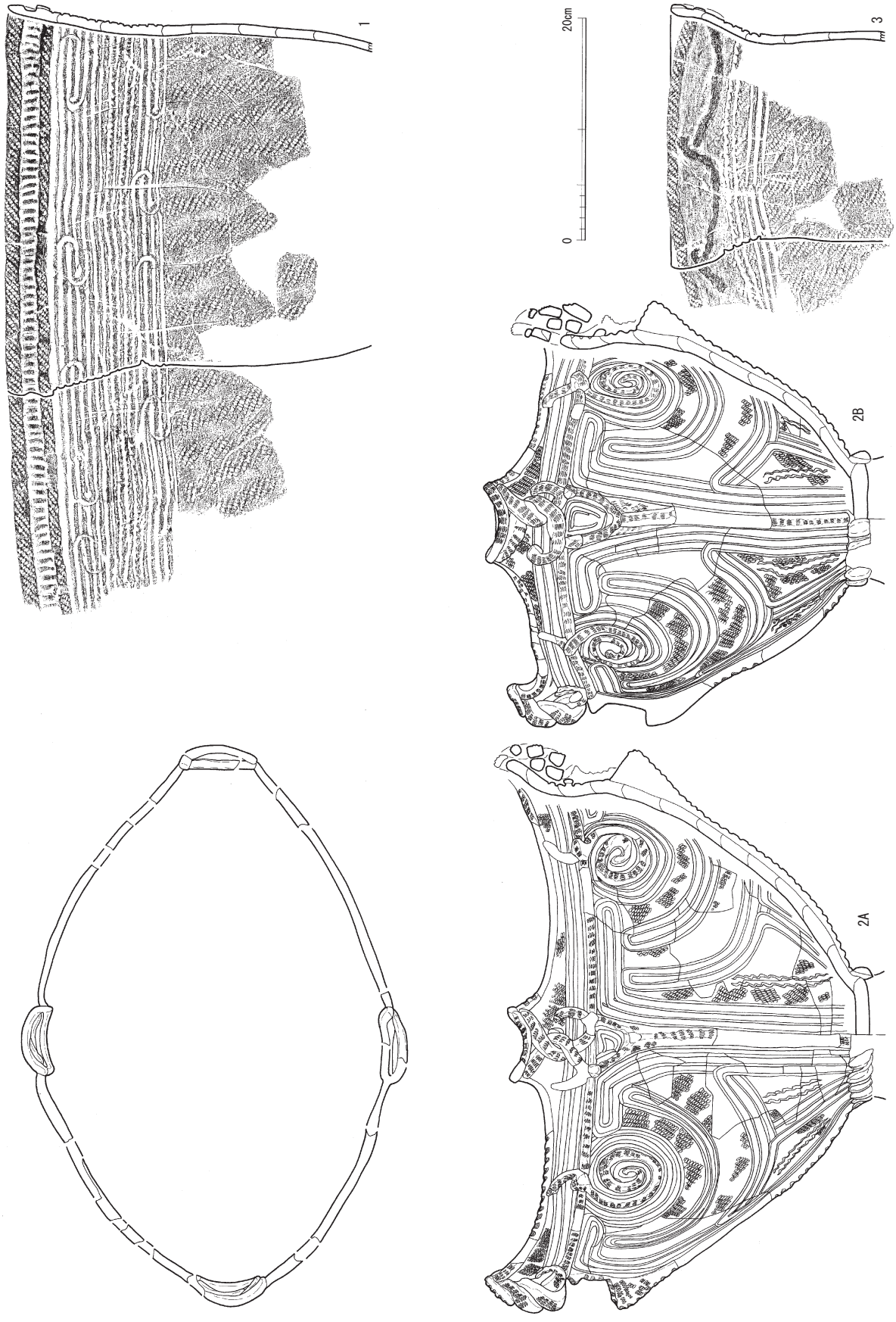
第101図　SI18 出土土器実測図４（縮尺 1/3）



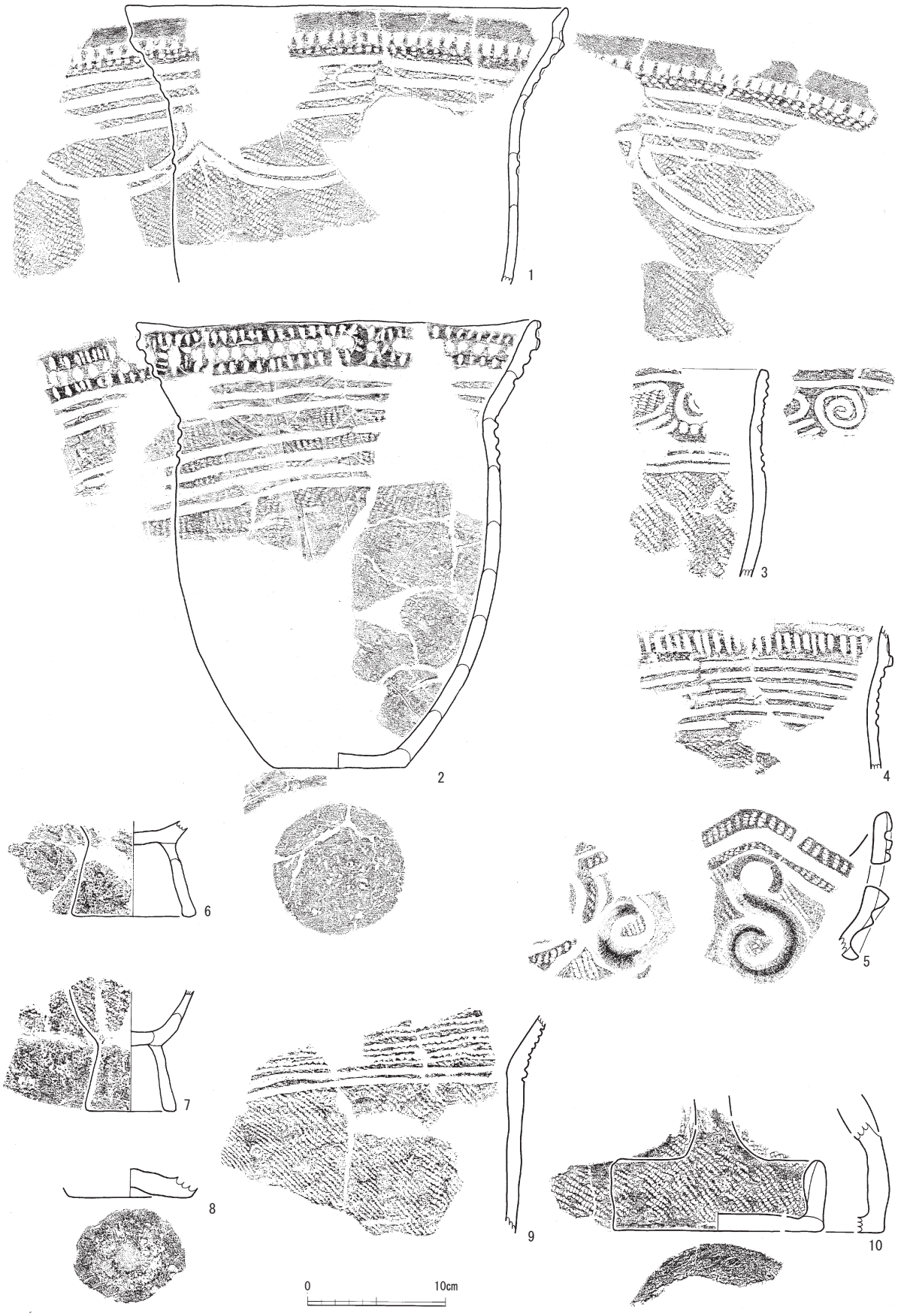
第102図　SI19 出土土器実測図１（縮尺 1/4）



第103図　SI19 出土土器実測図２（縮尺 1/5）



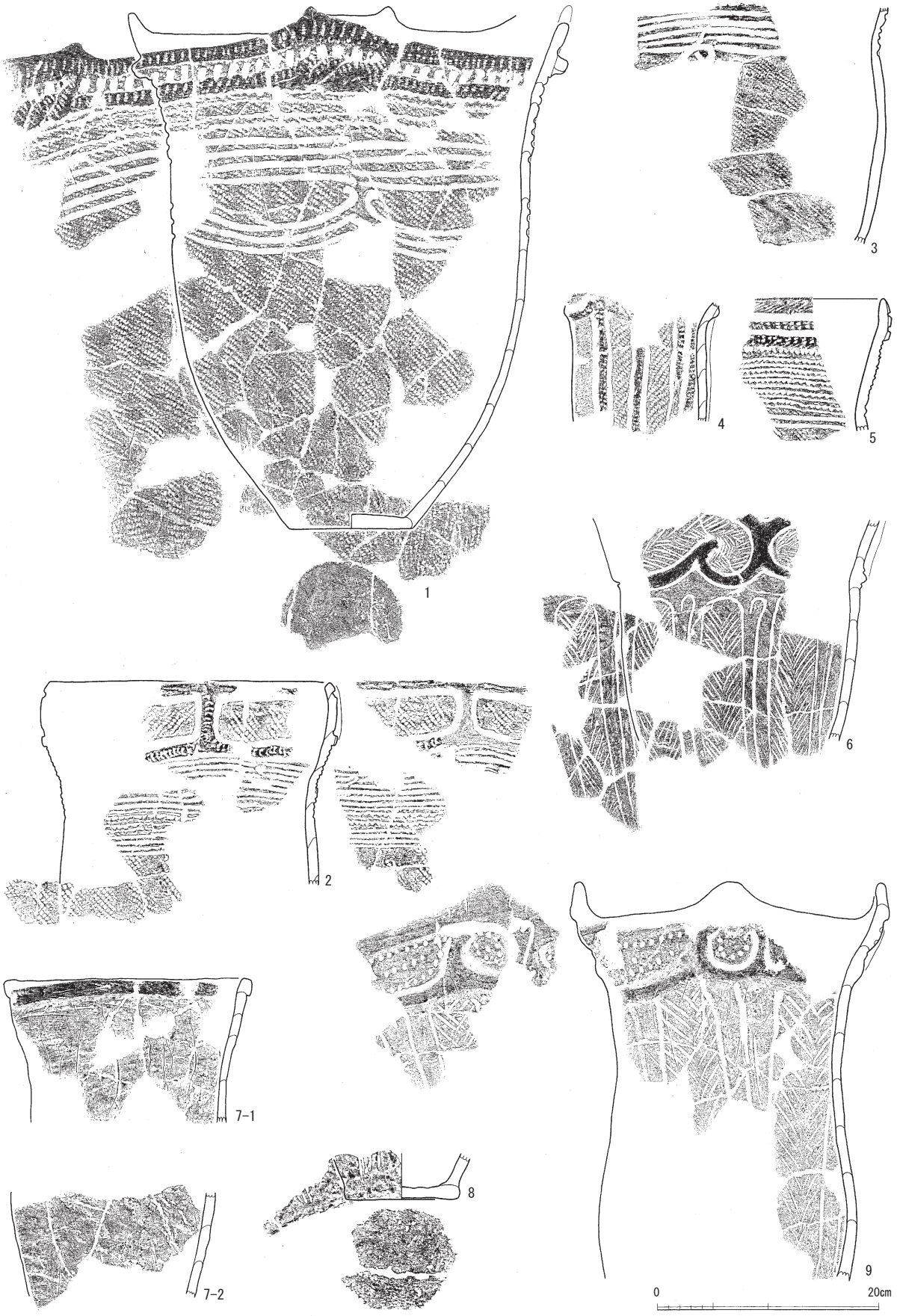
第104図　SI19 出土土器実測図３（縮尺 1/5）



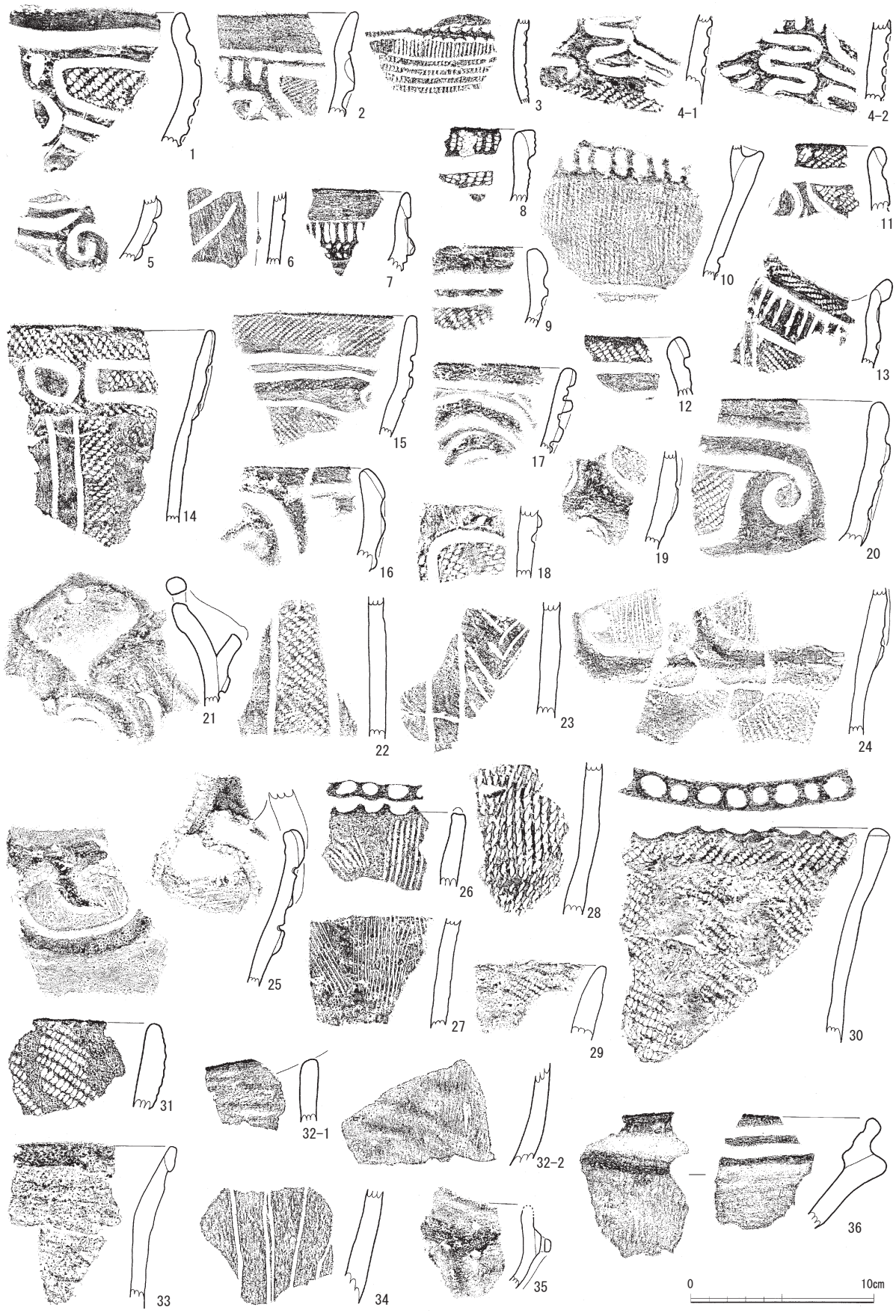
第105図　SI19 出土土器実測図４（縮尺 1/4）



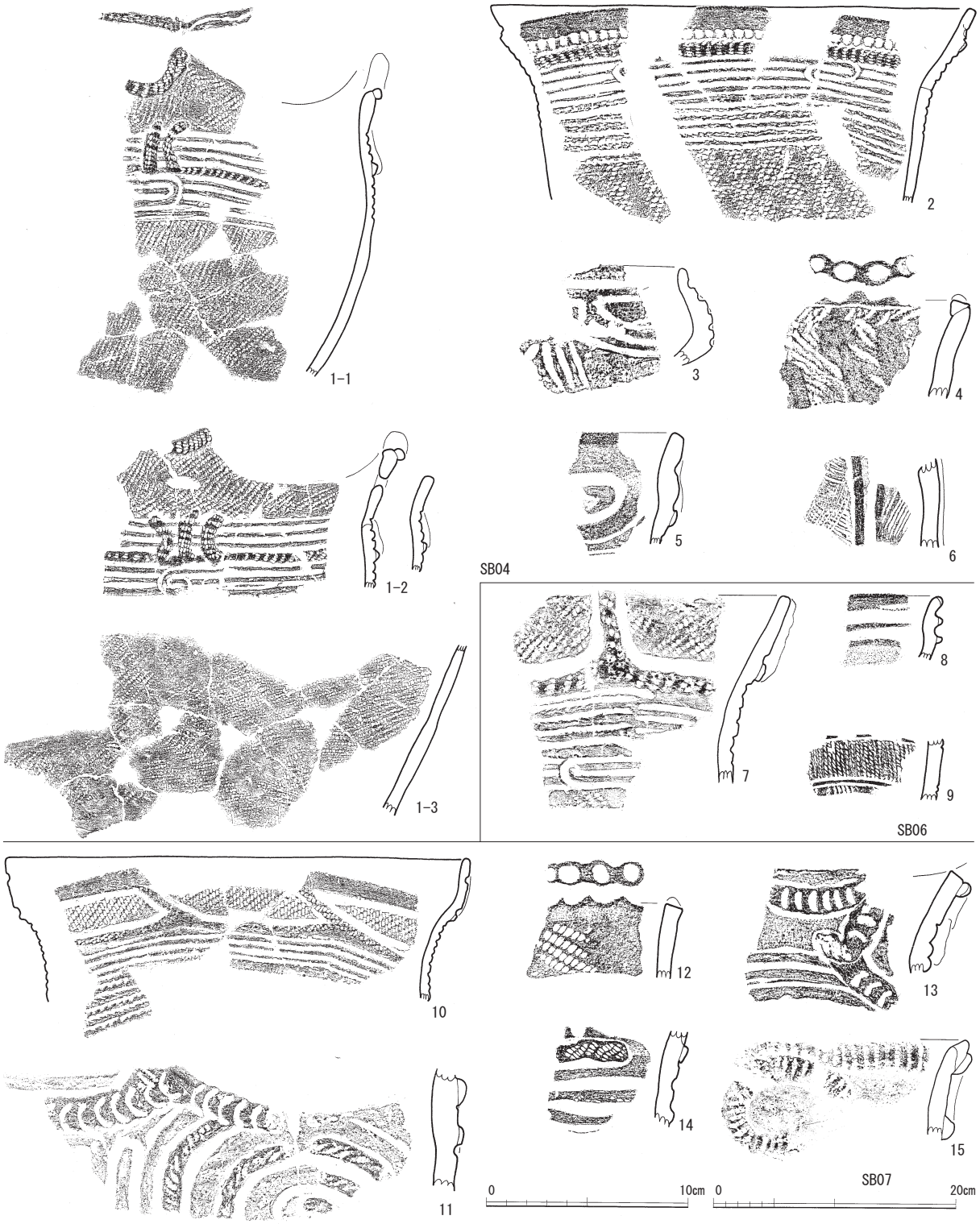
第106図　SI19 出土土器実測図５（縮尺 1/3）



第107図　SI20 出土土器実測図１（縮尺 1/5）

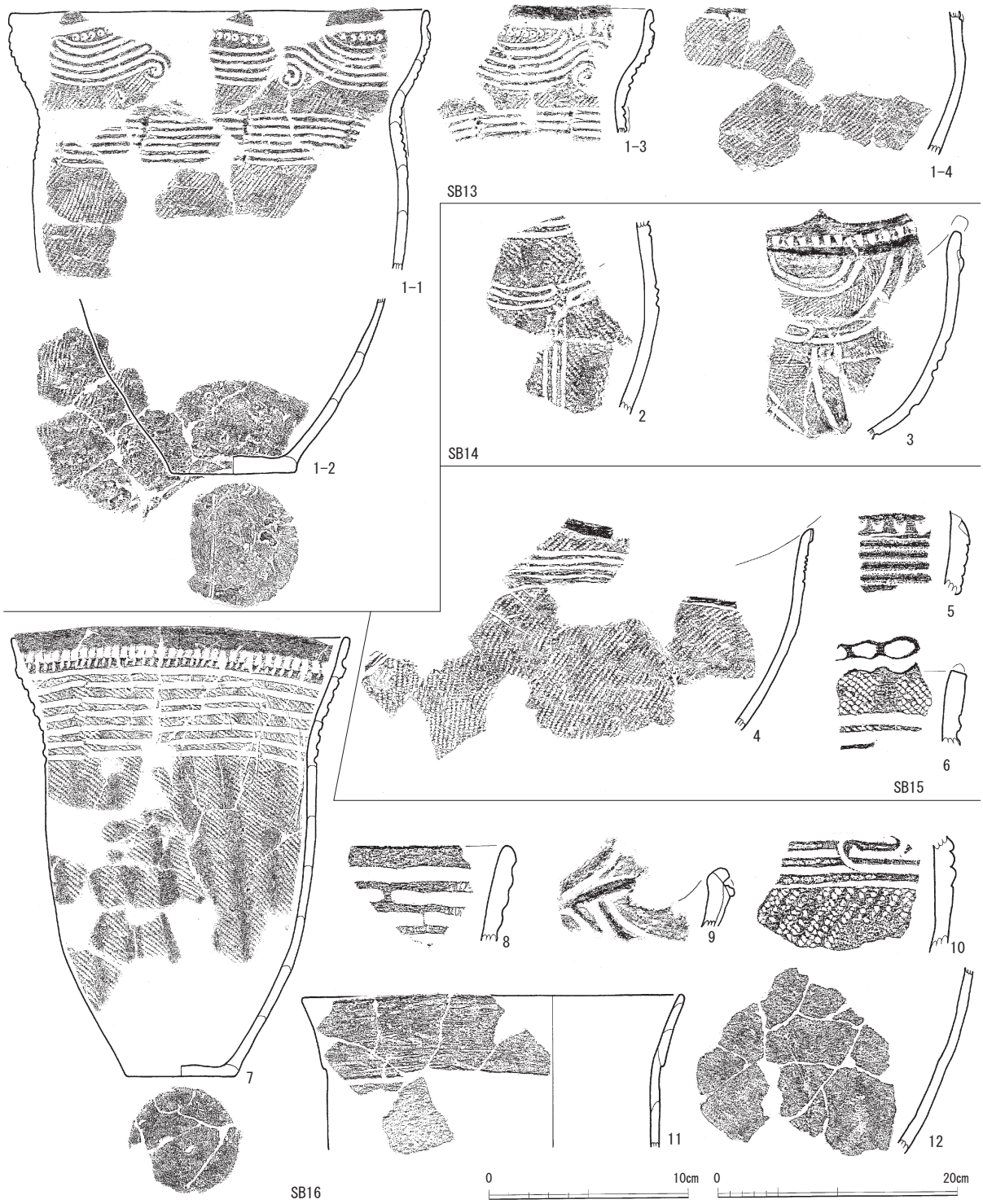


第108図　SI20 出土土器実測図２（縮尺 1/3）



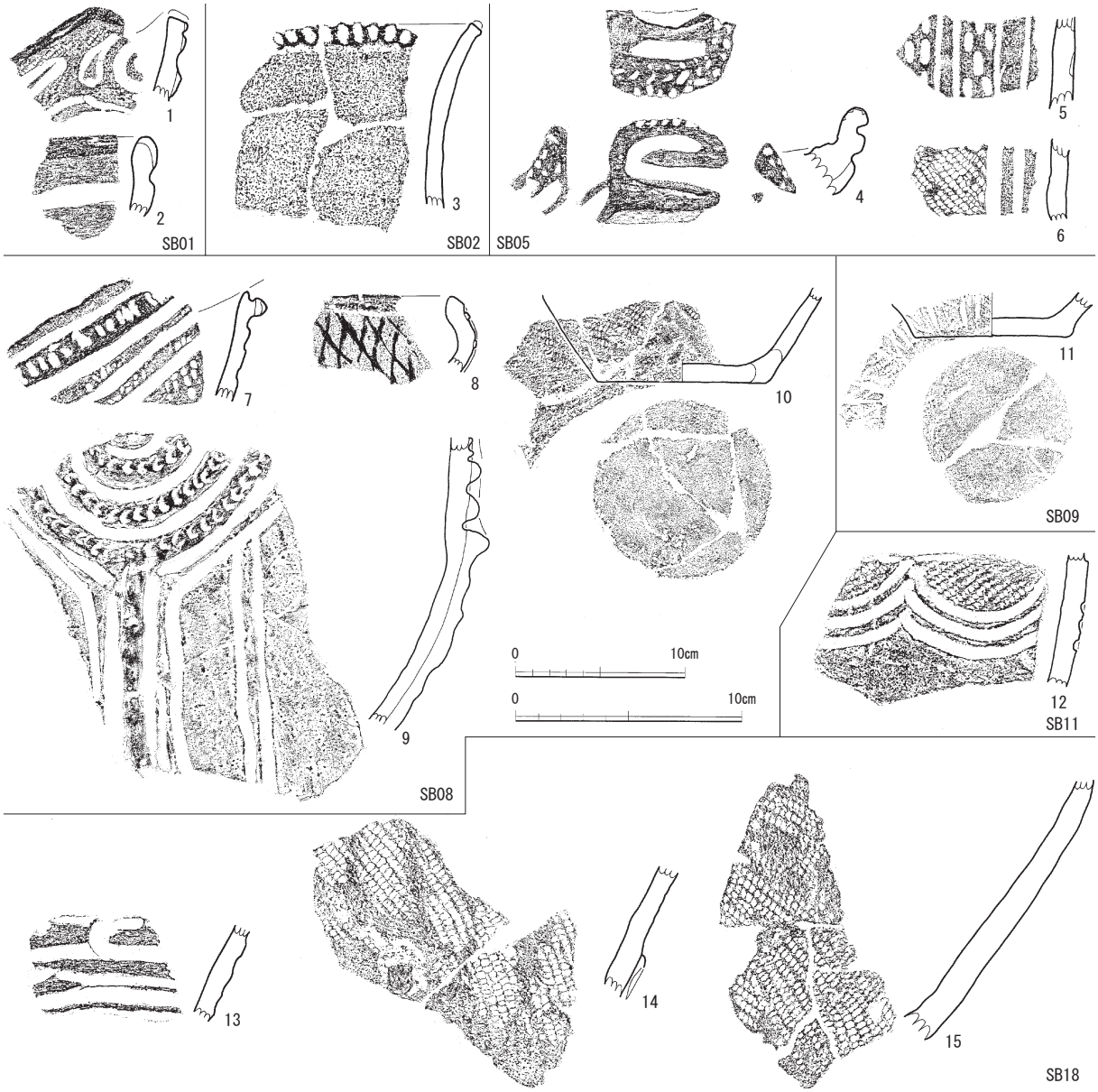
第109図　掘立柱建物出土土器実測図１（縮尺 1/5：1・2・10　1/3：その他）

や台付鉢第24群との共通性がうかがえる。第116図はSK30出土土器で、第33群を主体とする。１は口縁部に渦文と楕円形文による雲形文状の沈線区画文を配す。胴部には垂下隆帯文と蛇行沈線文を配すが、充填文などは施さない。同図10とともに、同図７・９などの典型的な大杉谷式とは異なる。第117図４はSK34から出土した。第32群１類に属す。口縁部に縄文と円形刺突文を施す隆帯による雲形文を配す。雲形文内部は無文部とする。頸部に円形刺突文を施す横走微隆帯を配す。胴部に沈線による縦位区画文



第110図　堀立柱建物出土土器実測図２（縮尺 1/5：1ー4・7・11・12　1/3：その他）

を配し、縄文部と磨消無文部を交互配置する。第118図８はSK40から出土した。第24群１類に属す。半隆起線により文様を描出する。体部上半には、縦位や横位に展開する直線的な文様を連続して配す。この文様は古府式の斜行渦文の変形とも考えられる。第119図１はSK41から出土した。第８群5A類に属す。口縁部から縦位帯縄文を施す。同図10はSK61から出土した。第８群に属す。口縁部文様下端に区画線状の波状沈線が認められ、内部に鋸歯状文を配す頸部区画帯が成立していると判断される。主文様施文域である口縁部と胴部上方が地文縄文磨消部となる。同図12は第32群１類に属す。口縁部の雲形文と



第111図　掘立柱建物出土土器実測図３（縮尺 1/4：10・11　1/3：その他）

口頸部境の横走隆帯文との間は幅狭の区画文となる。第123図２・９はSK84・85から出土した。２は第33群に属す。口縁部区画文内にはヘラ状工具による刻みを施す。９は第43群４類に属す。曲線的な区画文内に単独条線を交差状に充填する。区画文の両側は隆帯が剥離する。

７　焼土坑出土土器（第123図１～25）

小破片を主体とする。全体として第33群が多く認められる。

８　落ち込み出土土器（第123図26～40）

大形破片は第33群を中心とする。26は第33群に属す。胴部中央はやや屈曲する。胴部隆帯区画内は細沈線による矢羽根状文部と無文部との交互配置となる。

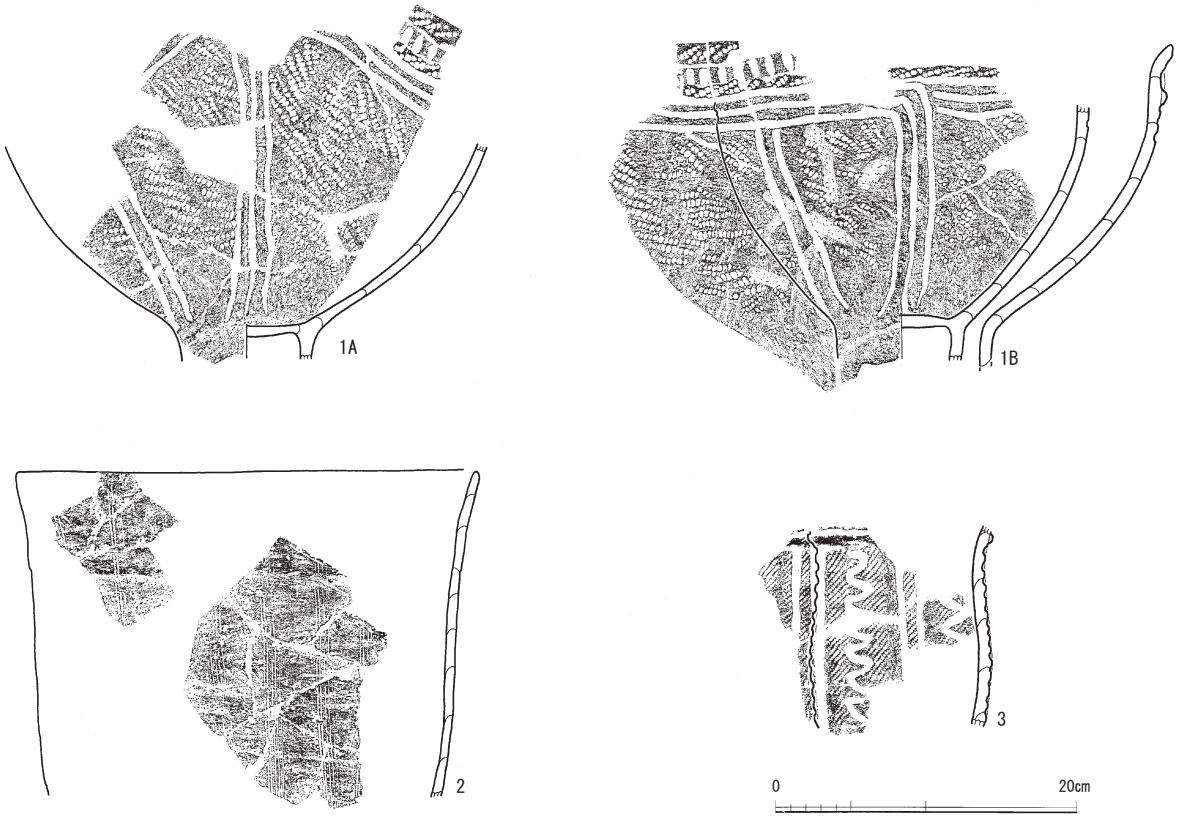
９　柱穴出土土器（第124～126図）

以下、主要な個体例について記述する。

第124図９は SP637から出土した。第32群の胴部である。胴部の区画隆帯の上部は頸部無文帯内にのびる。同図10はSP376 から出土した。第33群に属す台付鉢の波頂部である。波頂側端部は断面「C」字



第112図　土器埋設遺構出土土器実測図１（縮尺 1/5）



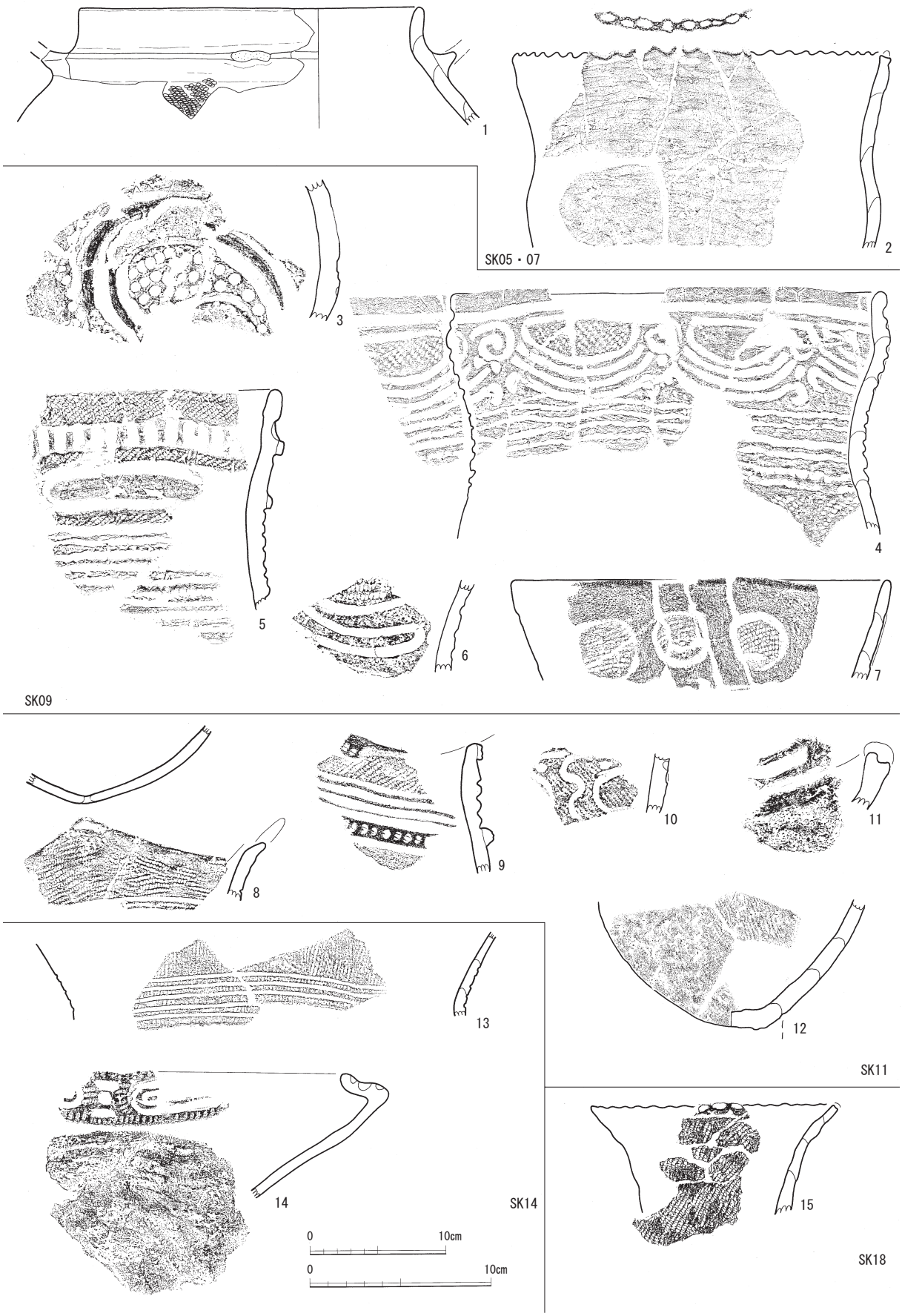
第113図　土器埋設遺構出土土器実測図２（縮尺 1/5）

形を呈す突起となる。第125図９はSP064から出土した。第14群に帰属させた。口縁部に大振りな逆「S」字状文と楕円形文を配す。類似例にはSI19出土土器（第105図５）がある。逆「S」字状文の上方渦文内に円孔を配し、波頂部に縦位細沈線を施す。胴部上端には横走隆帯文が認められる。同図16はSP214から出土した。第32群に帰属させた。胴部隆帯区画文内には縦位縄文を施すが、口縁部渦文下の区画文内にのみ矢羽状沈線文を施す。同図17はSP174から出土した。第32群２類に属す。口縁部隆帯文様に頸胴部の沈線区画文を接続させる。内部には連続する弧線文を配す。

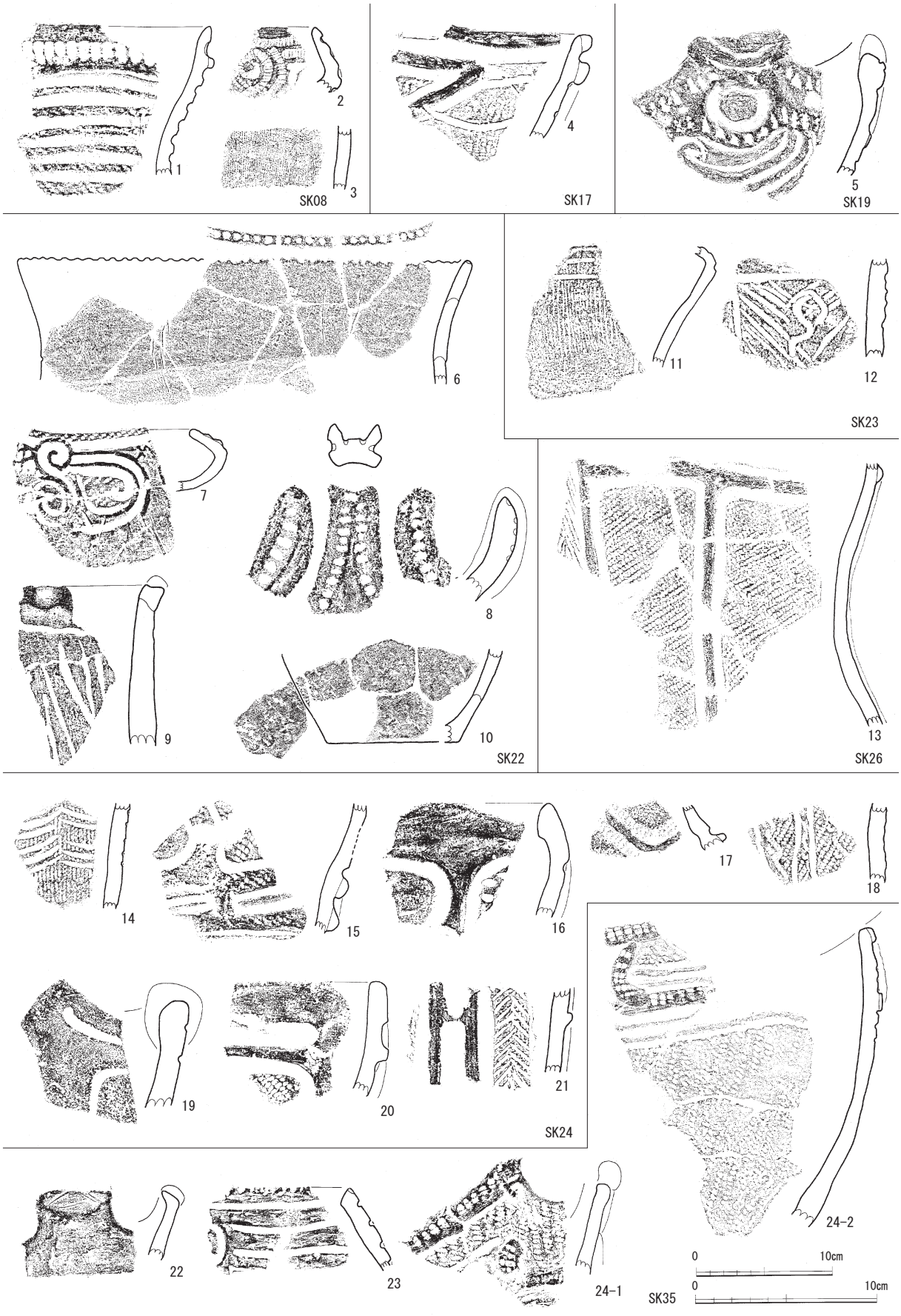
10　遺物集中区出土土器（第127～131図）

以下、主要な個体例について記述する。

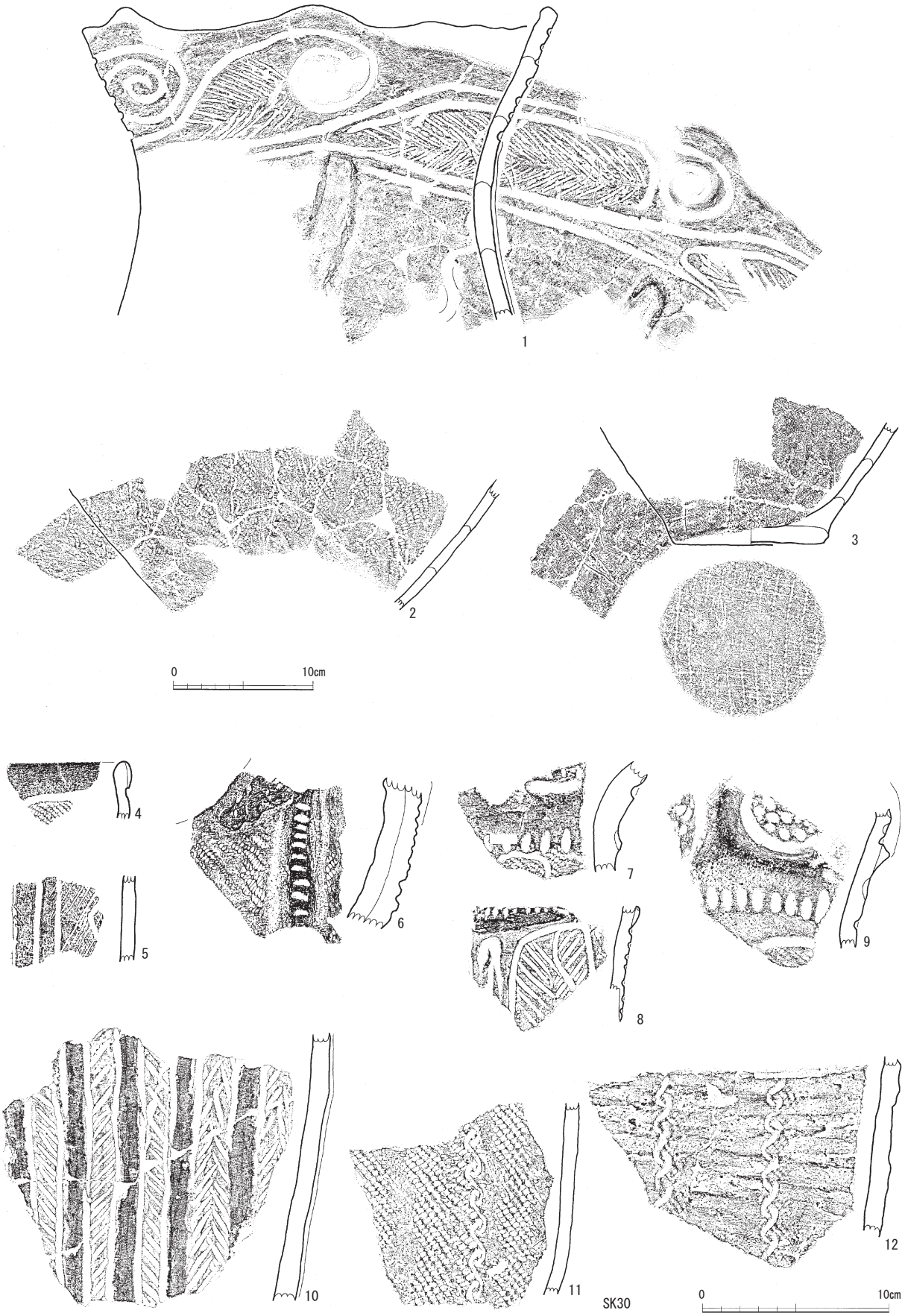
第127図１はSQ １から出土した。晩期中葉に属す無文深鉢である。口唇外面に指による押圧を施す。外面はナデを施すが、部分的に輪積痕を残す。第128図１はSQ ２から出土した台付鉢である。第25群１類に属す。半隆起線により文様を描出する。口縁部横位区画帯直下に縦位半隆起線帯を配す。体部には文様を配さない。地文に縦位帯縄文を施す。第129図はSQ05から出土した。１は第24群３類に属す。沈線と爪形文を施す隆帯により文様を描出する。体部文様は隆帯に沿った区画状文のみである。地文に撚糸文ｒを施す。２・４は第33群に属す。両例ともに器形・文様などが近似する。ともに口縁部の隆帯区画文が半円状を呈し、内部を無文部とする。胴部は２が沈線区画、４が隆帯区画となる。第130・131図はSQ ６から出土した。第130図３は第18群２類に属す。器形・文様施文域が第8群と共通する。第131図１は無文土器第52群に属す。外面にナデを施す。器壁が比較的薄い。口縁形が楕円形を呈すことから、台付鉢との関連性がうかがえる。同図 13は第３群に帰属させた。口縁部形態から波状口縁深鉢と考えられる。口辺部全域に基軸隆帯と半隆起線による方形区画状文を配す。



第114図　土坑出土土器実測図１（縮尺 1/4：1・2・4・5・7・8・12ー15　1/3：その他）



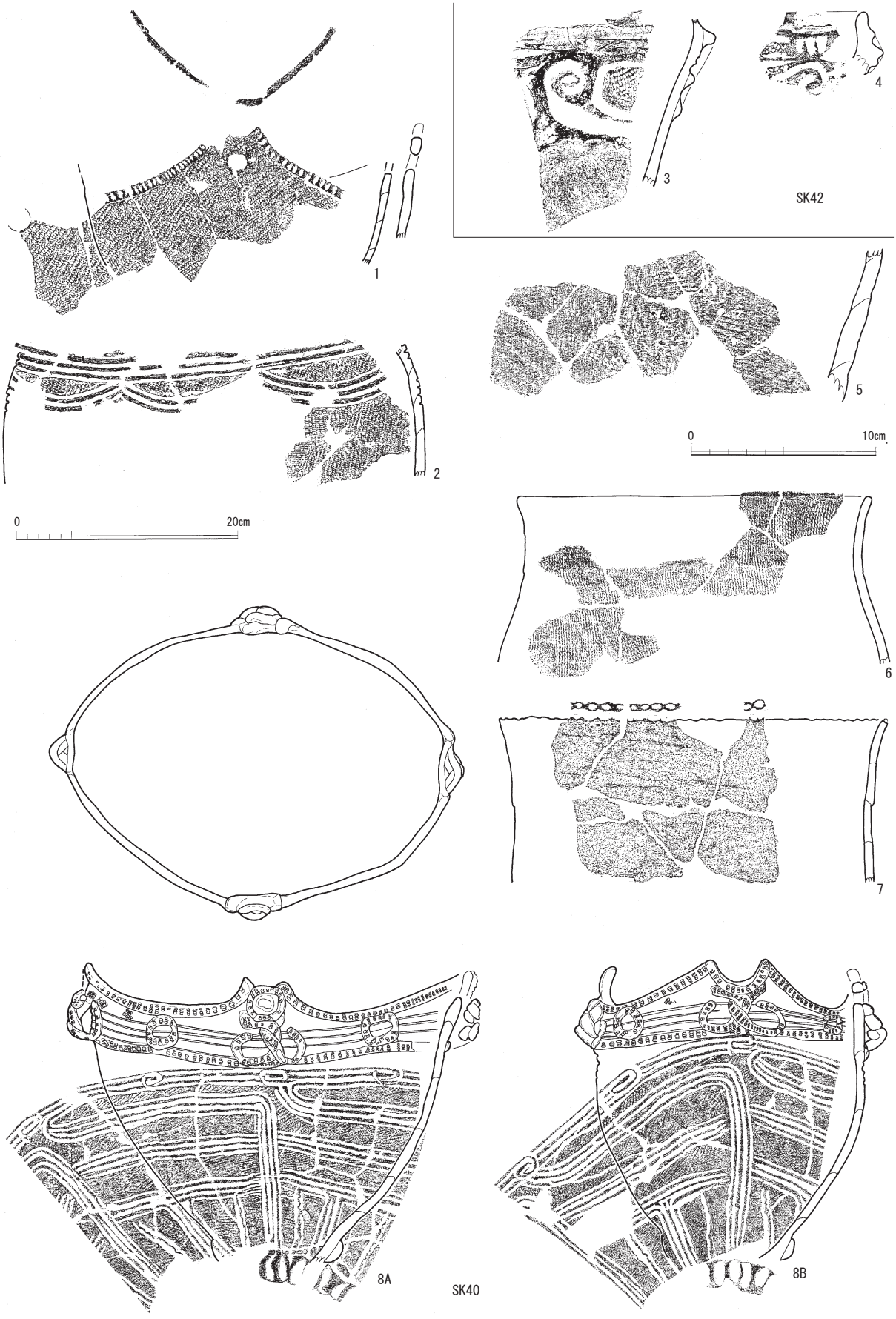
第115図　土坑出土土器実測図２（縮尺 1/4：6　1/3：その他）



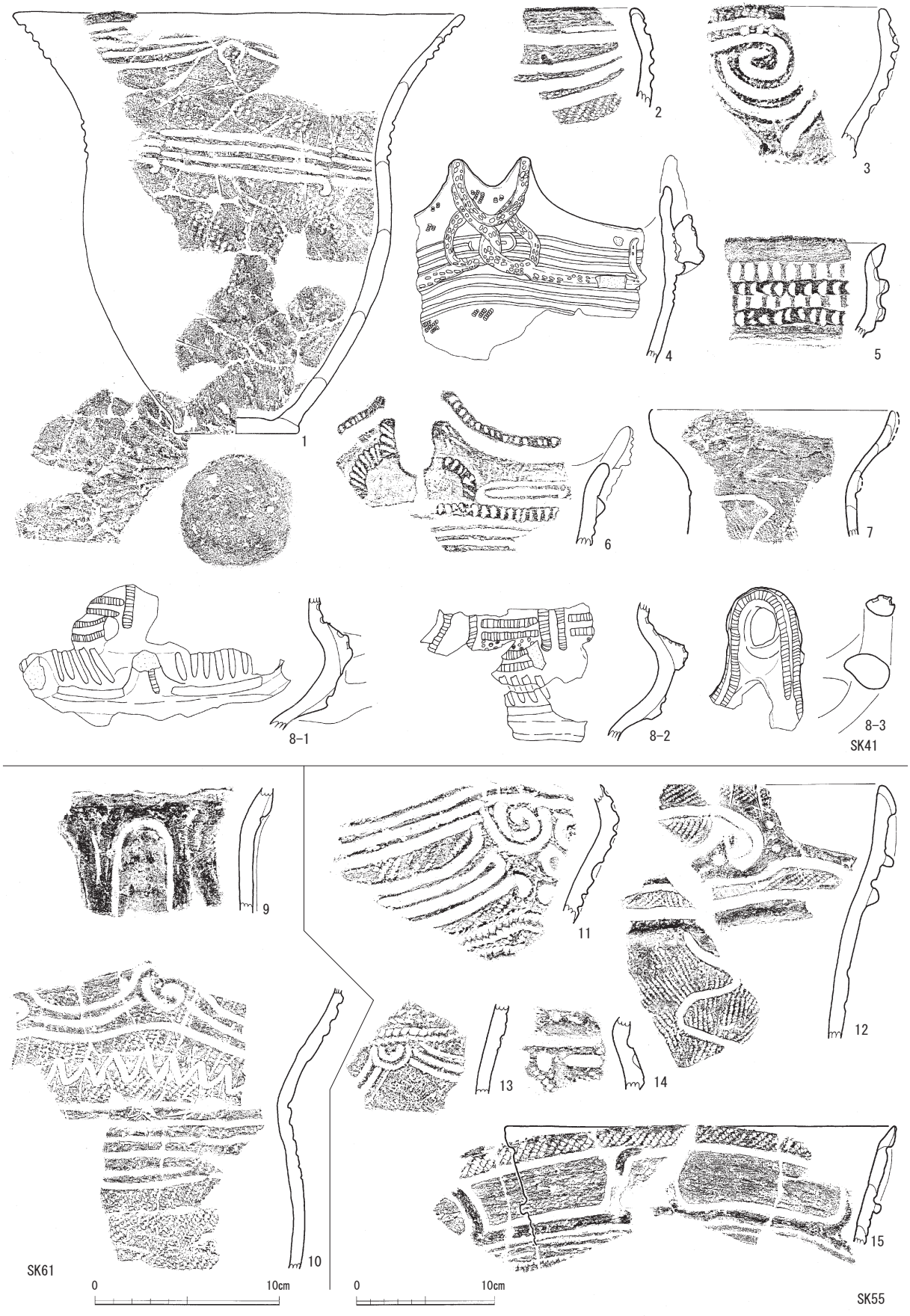
第116図　土坑出土土器実測図３（縮尺 1/4：1ー3　1/3：その他）



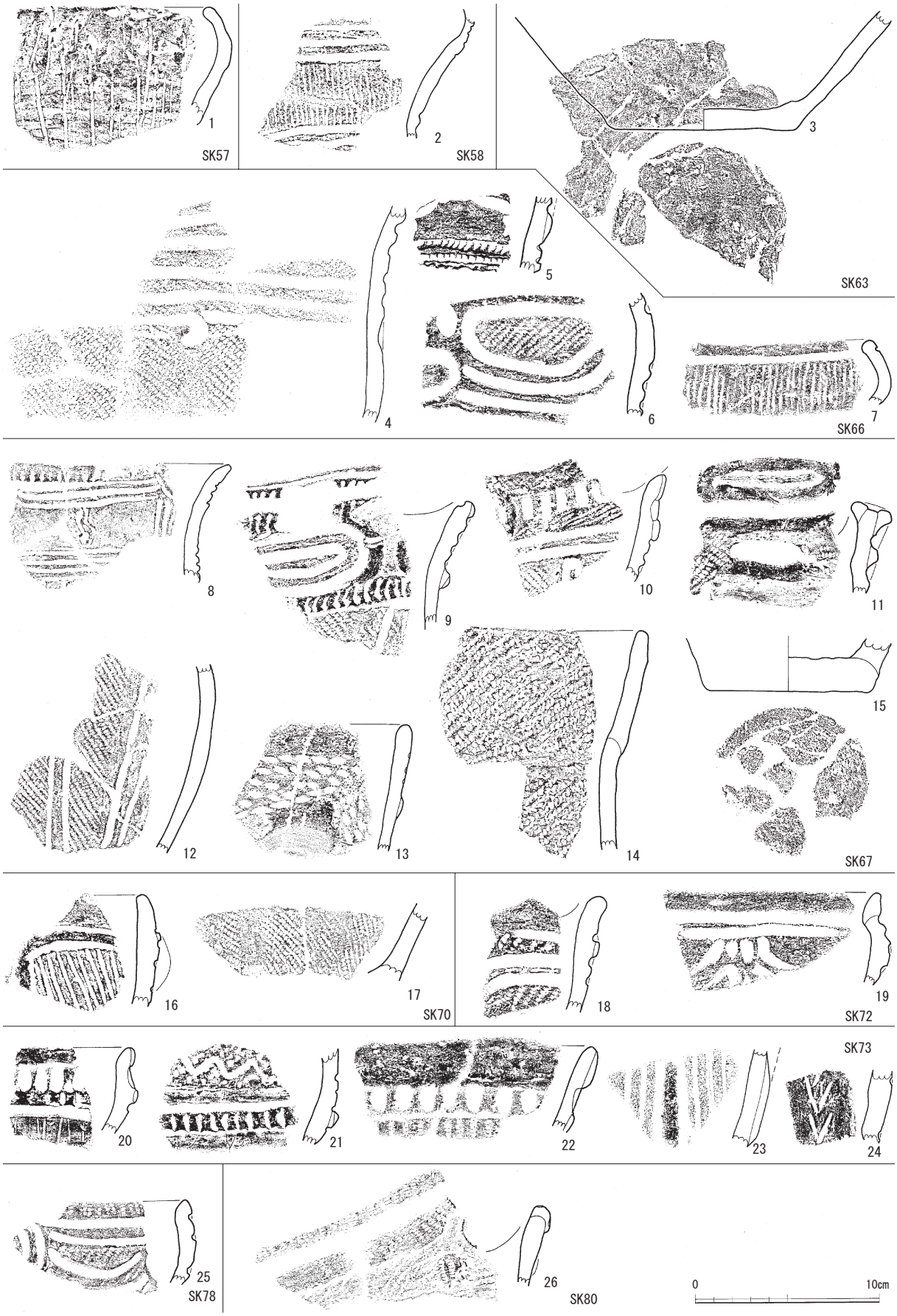
第117図　土坑出土土器実測図４（縮尺 1/4：8・14・15　1/3：その他）



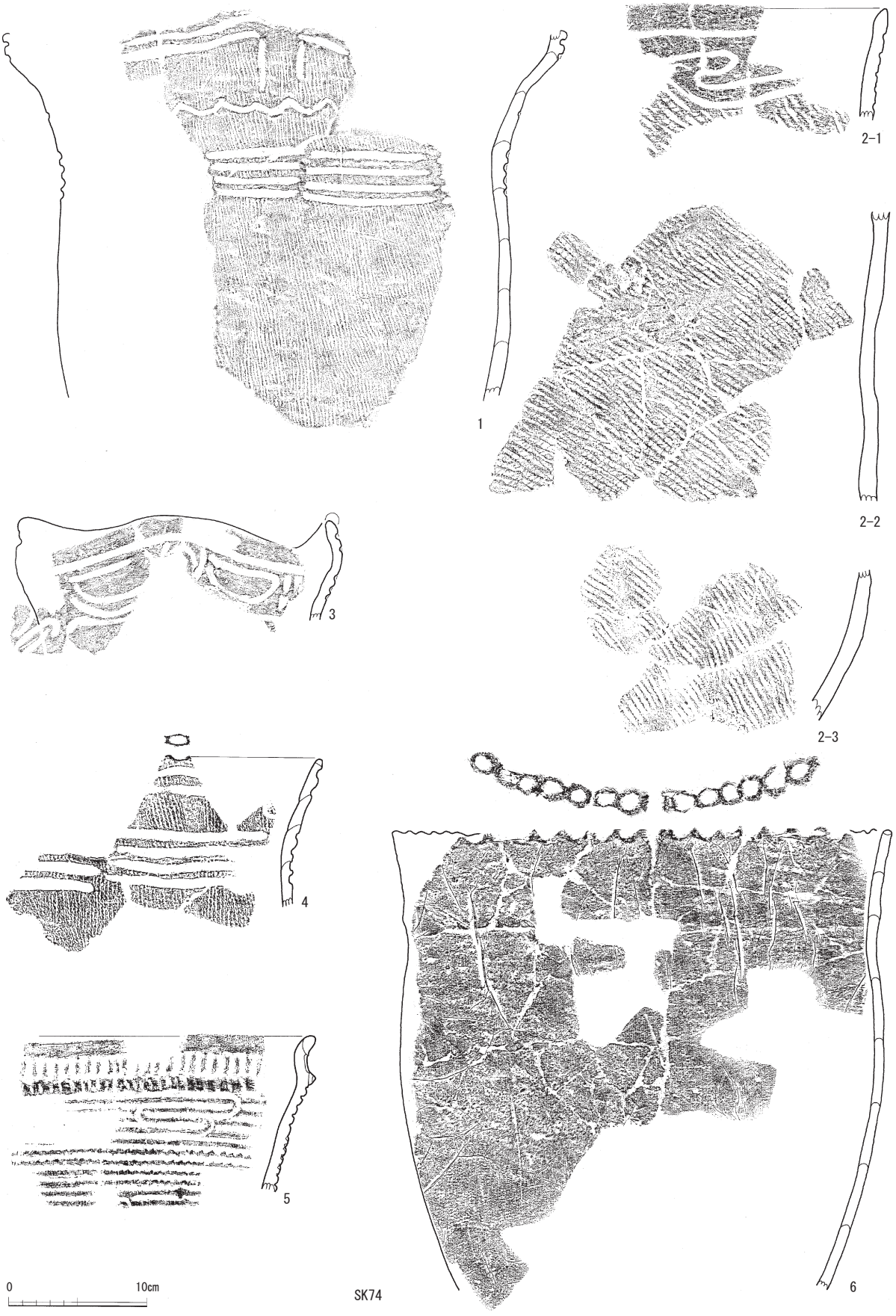
第118図　土坑出土土器実測図５（縮尺 1/5：1・2・6ー8　1/3：その他）



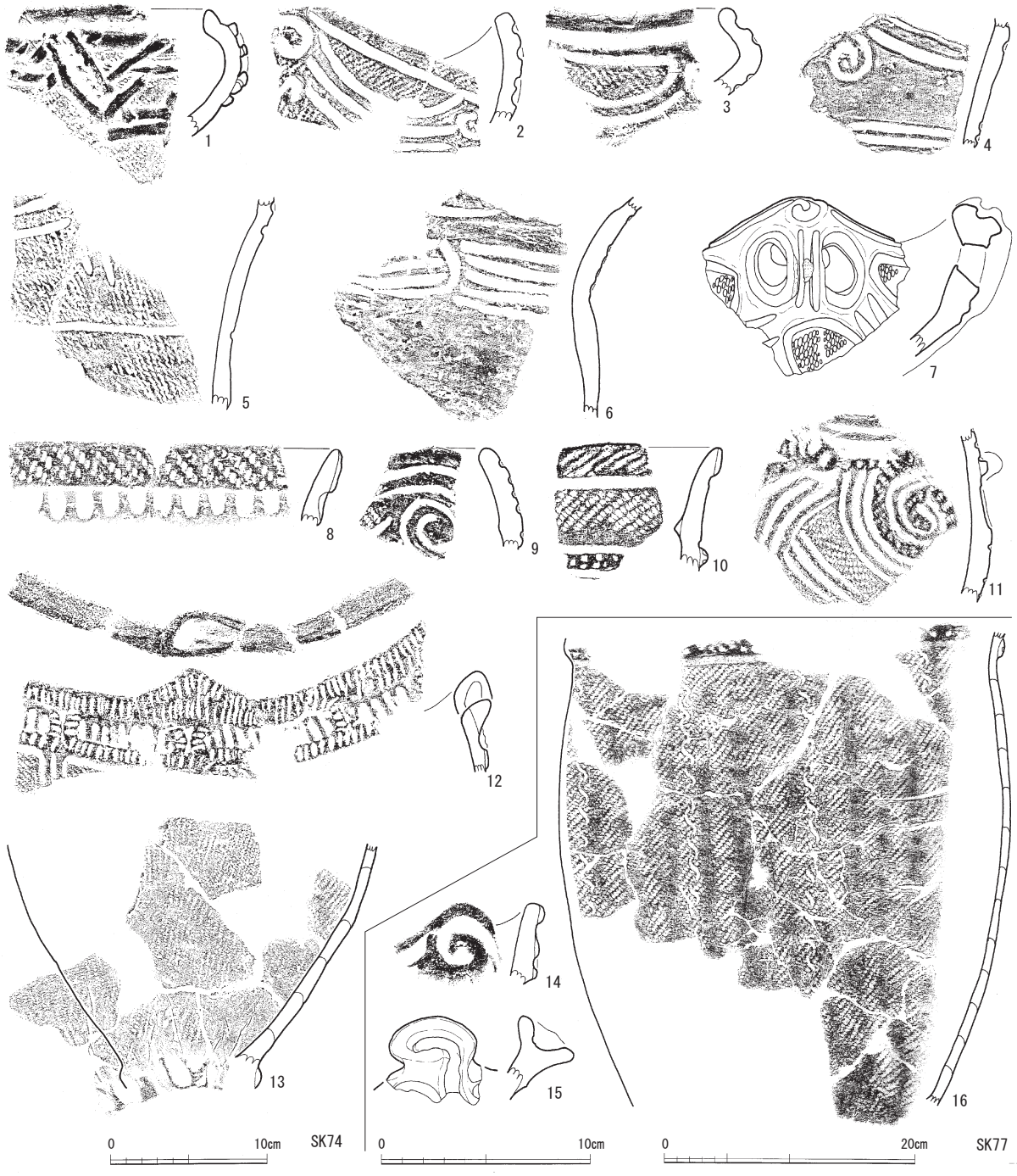
第119図　土坑出土土器実測図６（縮尺 1/4：1・4・6・7・10・15　1/3：その他）



第120図　土坑出土土器実測図７（縮尺 1/3）



第121図　土坑出土土器実測図８（縮尺 1/4）

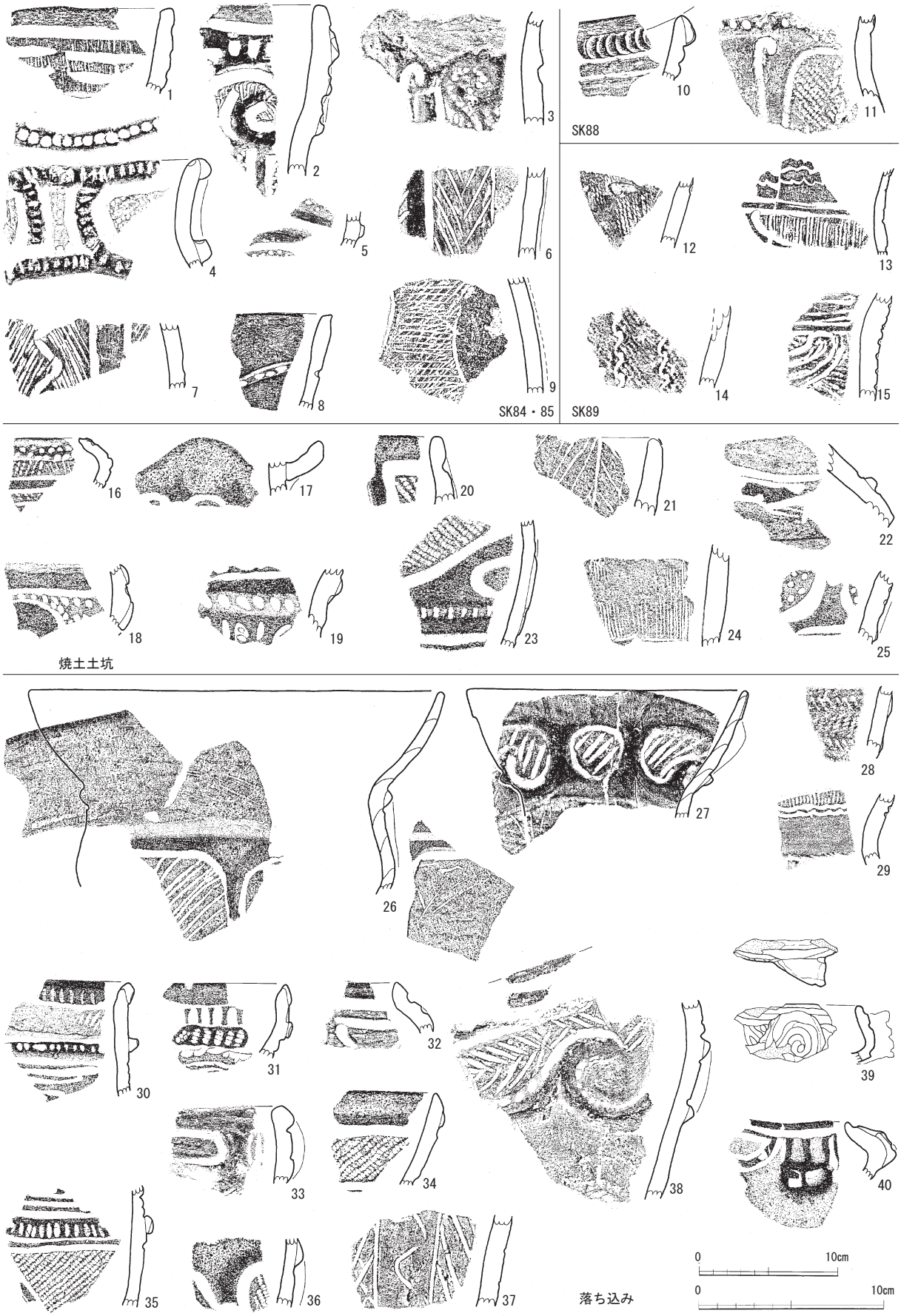


第122図　土坑出土土器実測図９（縮尺 1/5：16　1/4：12・13　1/3：その他）

11　包含層出土土器（第132～138図）

以下、主要な個体例について記述する。

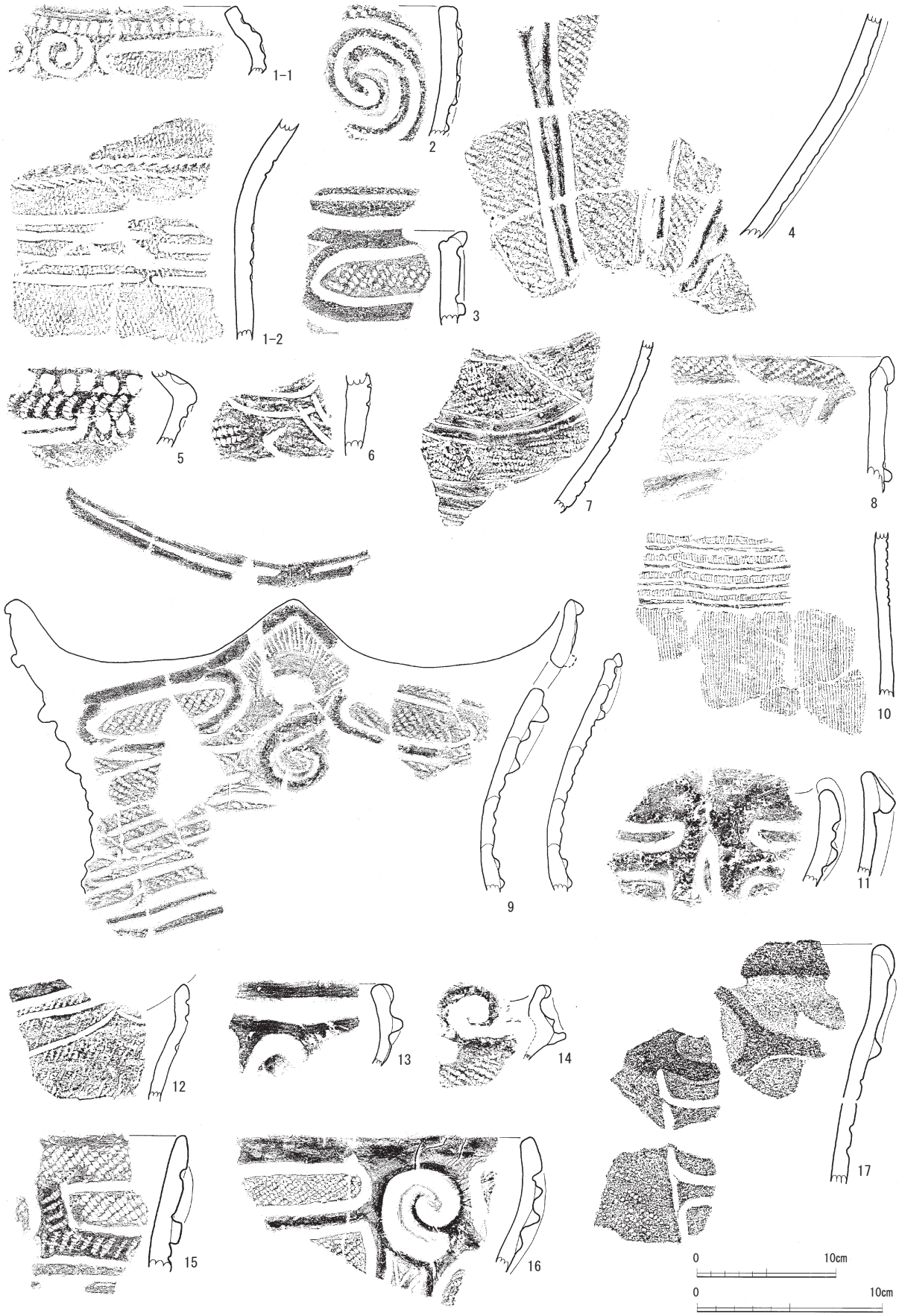
第133図23は第10群１類に属す。口縁上面形が方形を呈す。色調は黒褐色を呈し、胎土に黒色鉱物をやや多く含む。搬入品の可能性がある。同図38は第28群に帰属させた。折り返し状に肥厚し縄文を施す口唇部に沈線による文様を配す。第134図２は第31群に属す。色調は灰褐色を呈し、胎土に微細な砂粒とともに白色鉱物を多く含む。搬入品の可能性がある。同図６は第28群に帰属させた。６－１は波頂部、６－２は波頂部間の小突起部である。波頂部には区画状の垂下隆帯を配し、円環状となる波頂端部と



第123図　土坑・焼土土坑・落ち込み出土土器実測図（縮尺 1/4：26・27　1/3：その他）



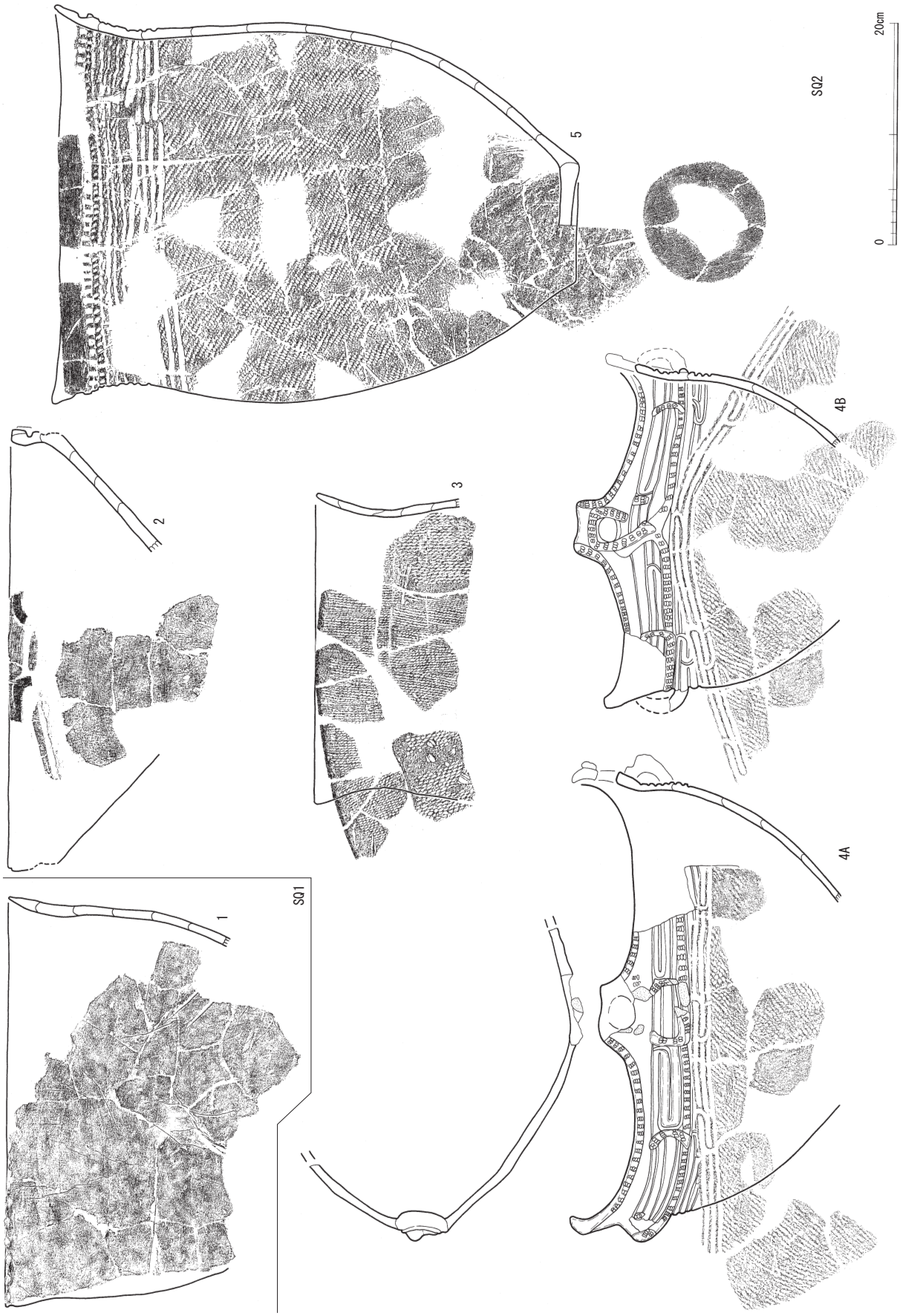
第124図　柱穴出土土器実測図１（縮尺 1/4）



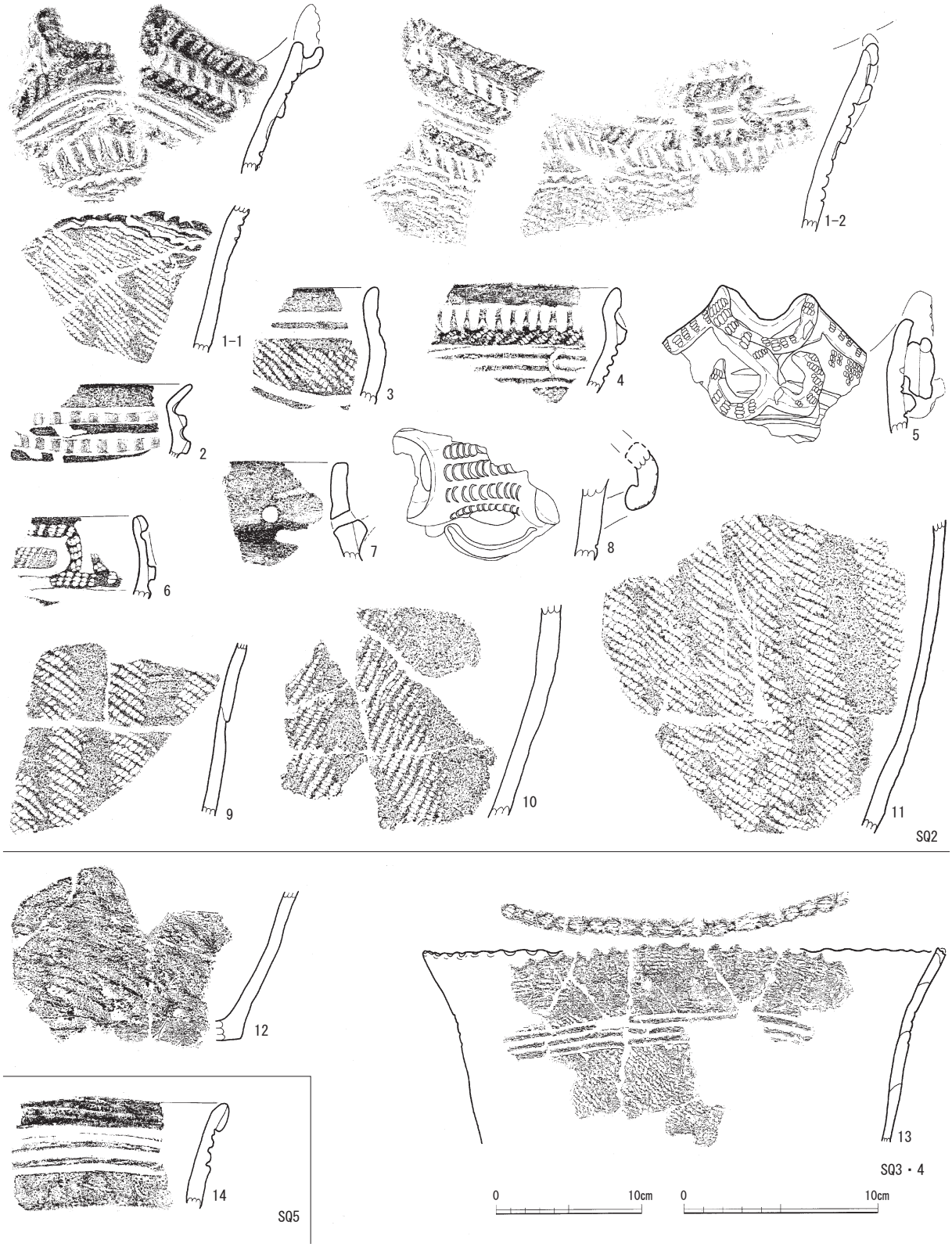
第125図　柱穴出土土器実測図２（縮尺 1/4：7・9・10　1/3：その他）



第126図　柱穴出土土器実測図３（縮尺 1/3）

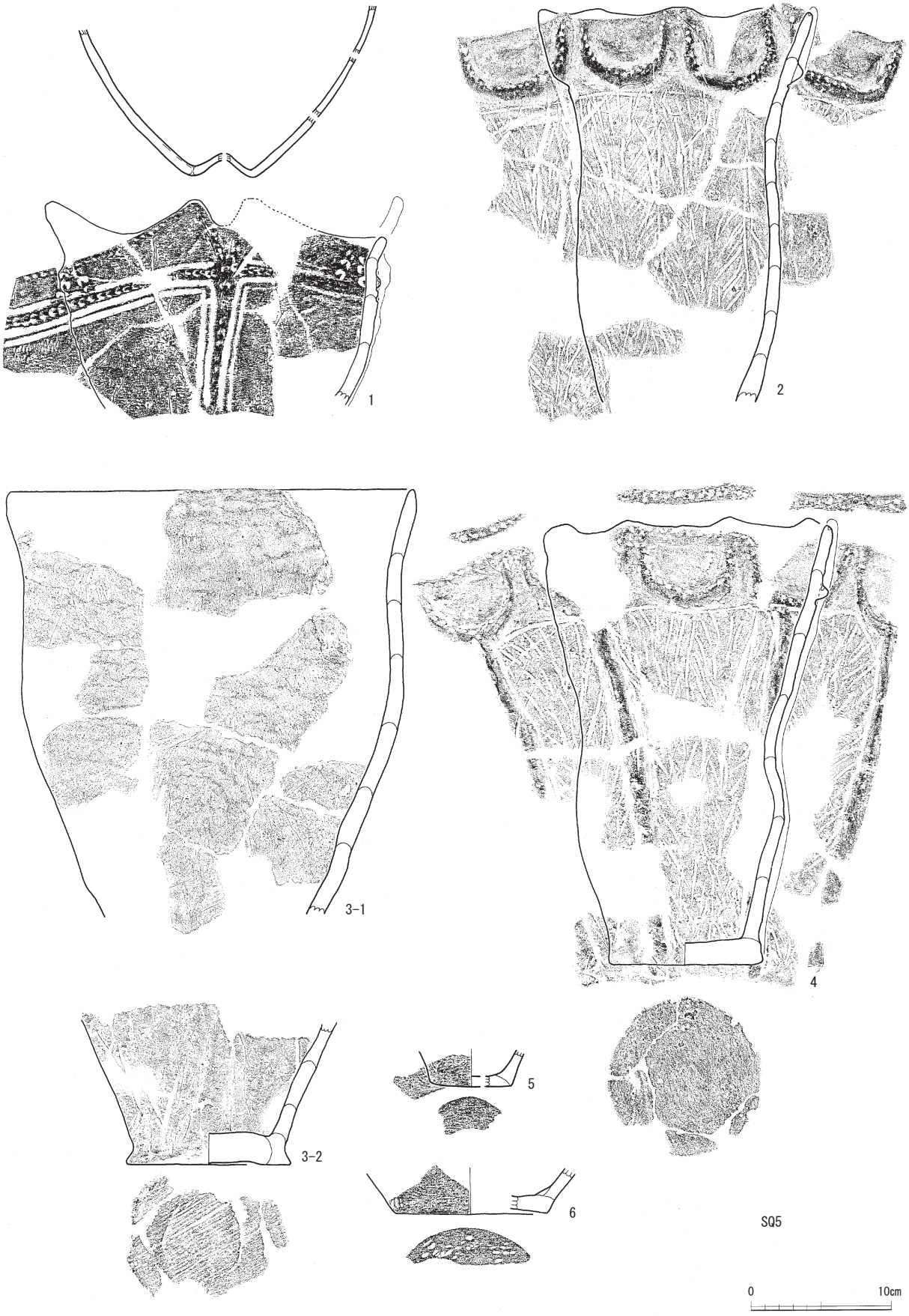


第127図　遺物集中域出土土器実測図１（縮尺 1/5）

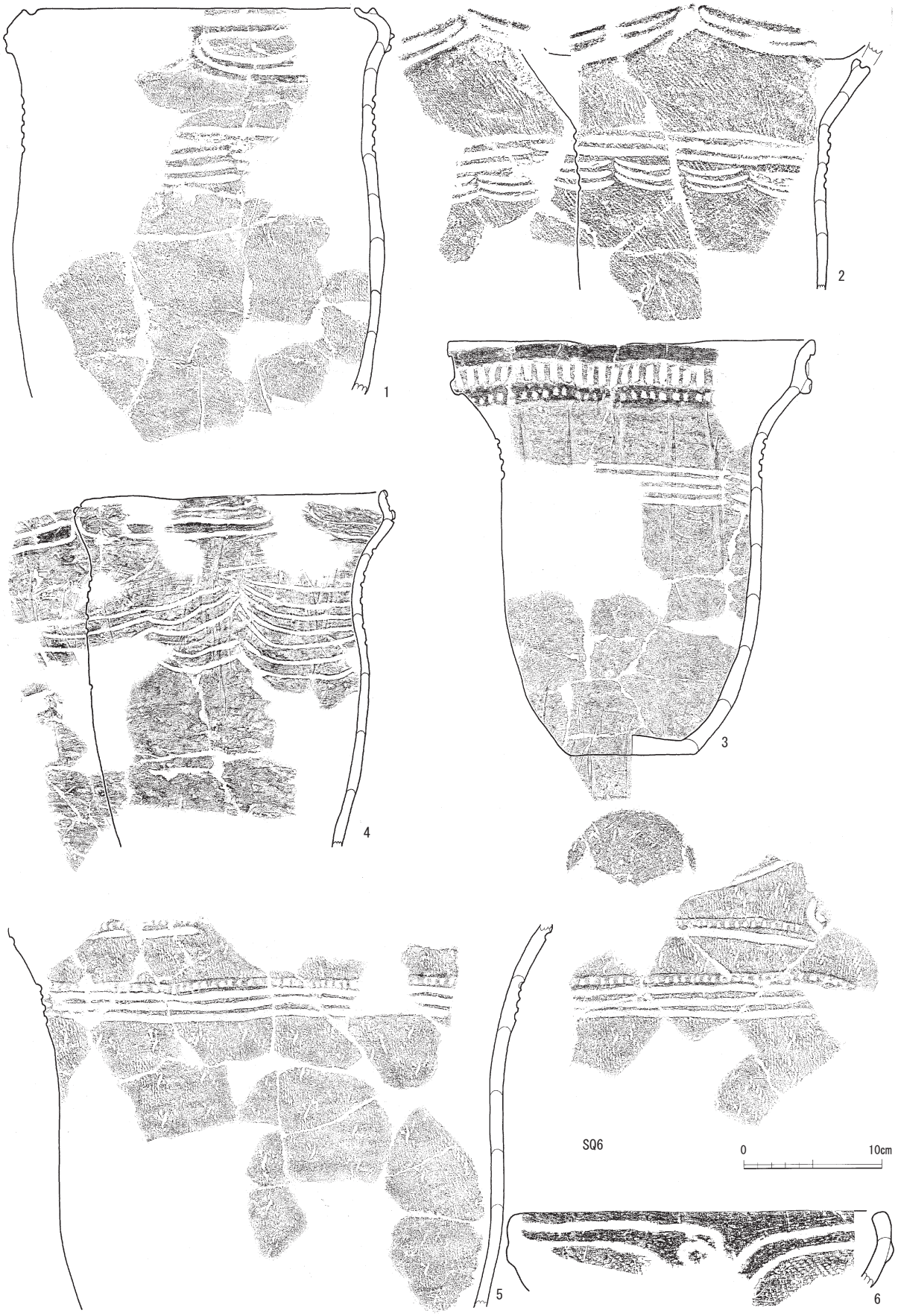


第128図　遺物集中域出土土器実測図２（縮尺 1/4：12・13　1/3：その他）

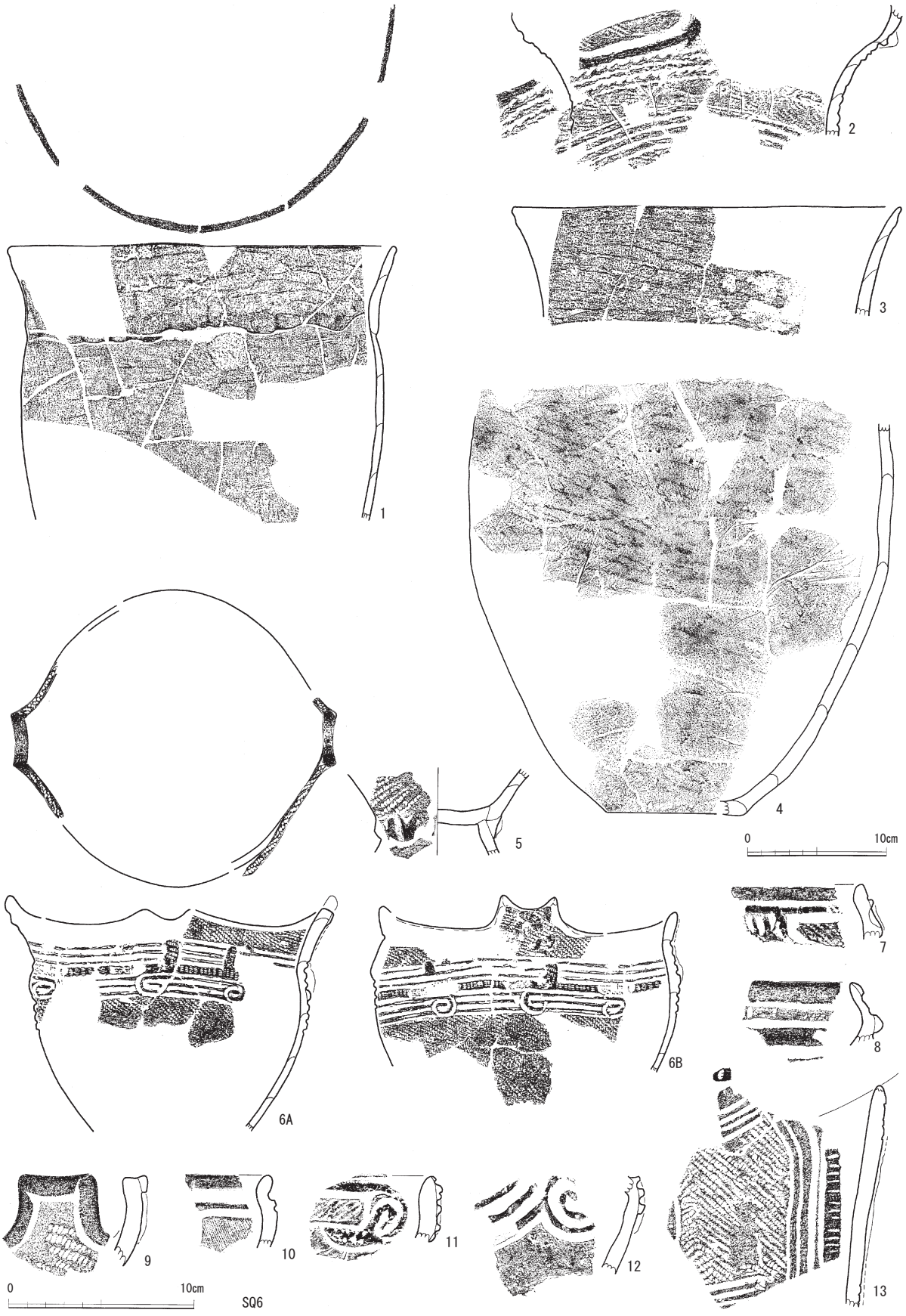
接続させる。同一個体（第107図４）はSI20から出土した。第137図１は第32群１類に帰属させた。口頸部境に細い横走隆帯を配し、胴部に沈線区画文を配す。文様構成や器形において第34群（第137図24・25）との類似性が指摘できる。



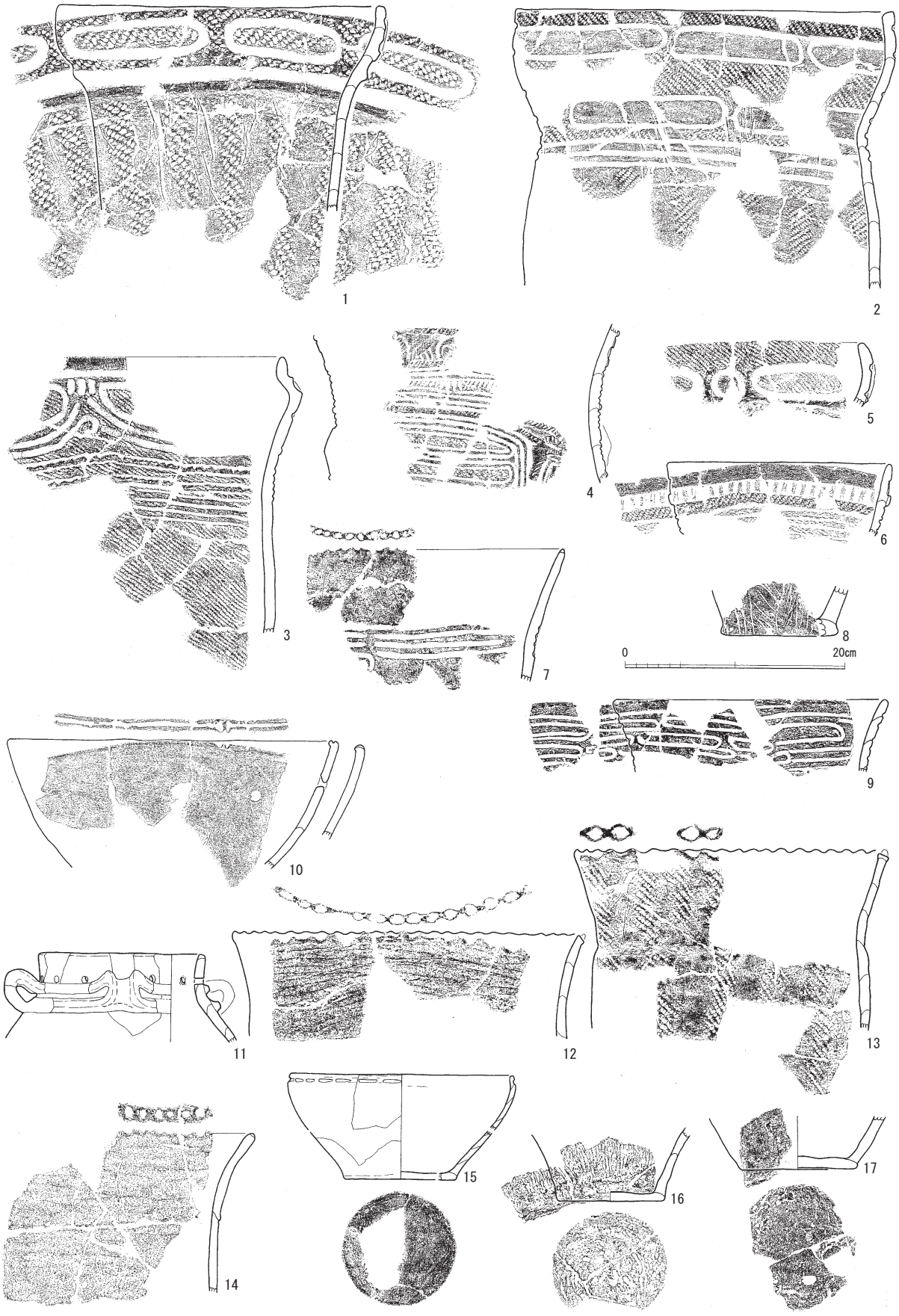
第129図　遺物集中域出土土器実測図３（縮尺 1/4）



第130図　遺物集中域出土土器実測図４（縮尺 1/4）



第131図　遺物集中域出土土器実測図５（縮尺 1/4：1ー6　1/3：その他）



第132図　遺物包含層出土土器実測図１（縮尺 1/5）



第133図　遺物包含層出土土器実測図２（縮尺 1/3）



第134図　遺物包含層出土土器実測図３（縮尺 1/3）



第135図　遺物包含層出土土器実測図４（縮尺 1/3）



第136図　遺物包含層出土土器実測図５（縮尺 1/3）



第137図　遺物包含層出土土器実測図６（縮尺 1/3）



第138図　遺物包含層出土土器実測図７（縮尺 1/3）

第２表　縄文土器一覧表

凡例：略記は次のとおりである。　　縄：縄文　撚：撚糸文　集条：複数条１単位の条線文　単条：１条単位の条線文　帯：縦位帯縄文
結：結節縄文　－：地文が確認できない有文土器　地文（ ）：底部の調整・圧痕　記号は本文に対応

挿図		出土位置	層位	群	類	地文	同一個体出土遺構
79	1	SI04		28	2	縄RLR	SQ6
	2	SI04		28	2	口：縄文LR 口以外：ナデ(C)	
	3	SI04		18	1	－	
	4	SI04		18	2	縄RL(帯か)	
	5	SI04		8	2	口：縄LR 胴：集条	SP090
	6	SI04		45	3	縄RLR,(A)	
	7	SI04		53		縄LR帯	
	8	SI04		53		集条,(C)	SI09,SK11
	9	SI04		8	3	縄LR	SP292
80	1	SI04		55	5	縄LR	SB04－P2, SK11
	2	SI04		24	1	縄LR	
	3	SI04		59	1	－	
	4	SI04		59	1	－	
	5	SI04		59	2	縄RL帯	SP259
	6	SI04		55	2	ナデ	
	7	SI04		24	2	縄RL	SK35
	8	SI04		24	2	縄LR	
81	1	SI04		32	2	縄RL	
	2	SI04		8	3	－,(B)	
	3	SI04		24	1	－	SQ6
	4	SI04		27	2	縄LR	SP137・197・572・573
	5	SI04		6		縄LR	
	6	SI04		53		ナデ	
82	1	SI04		8	3	－	
	2	SI04	上層	7		撚r	
	3	SI04	中層	7		撚r	
	4	SI04		8	3	縄LR	
	5	SI04		8	3	縄LR	（同一個体か）
	6	SI04		8	3	縄LR	
	7	SI04		23	2	縄LR	
	8	SI04		21	1	縄LR帯	
	9	SI04		28	2	－	
	10	SI04		23	1	縄LR結	
	11	SI04		7		－	
	12	SI04	中層	14	4A	－	
	13	SI04		23	1	縄LR	
	14	SI04		23	1	縄RLR(帯か)	SK35
	15	SI04		18	2	－	
	16	SI04		18	2	縄RLR	
	17	SI04		14	4A	－	
	18	SI04		27	2	－	
	19	SI04		27	2	縄LRL	
	20	SI04		27	2	縄LR	
	21	SI04		25	1	－	
	22	SI04		27	2	－	
	23	SI04	中層	54		撚r	
	24	SI02		54		縄LR帯	
	25	SI02		29		縄RL	
	26	SI02		24	3	縄LR	
	27	SI03		27	1A	縄LR	
	28	SI03	下層	33	1	－	
	29	SI03		34		－	
	30	SI03		55	4	ナデ	
83	1	SI05		54		集条(二枚貝か)	
	2	SI05		54		縄RLR帯	
	3	SI05	炉床	29		縄LR	
	4	土器埋設遺構7		8	7	縄RL,(E)	
	5	SI05		24	1	縄LR	SB10－P2, SK34,SP216・230
84	1	SI05		8	3	縄LR	
	2	SI05		8	7	縄LR	
	3	SI05	中層	19	2	縄LR	
	4	SI05		8	7	集条	
	5	SI05	炉内	3		－	
	6	SI05	上層	19	1	－	
	7	SI05		8	3	縄LR	
	8	SI05		18	2	－	
	9	SI05		27	2	縄LR	
	10	SI05	中層	27	2	縄LR	
	11	SI05	中層	36	2	縄LR(帯か)	
	12	SI05	上層	55	2	撚r	
	13	SI05	炉内	25	2	縄RL	
	14	SI06	炉床	57	1	研磨,(A)	
	15	SI06		58		(C)	
	16	SI06		19	2	－	
	17	SI06		36	1	縄LR帯	
	18	SI06		32	2	縄PL帯	

挿図		出土位置	層位	群	類	地文	同一個体出土遺構
84	19	SI06		32	2	縄LR	
	20	SI06		14	3A	縄LR	
	21	SI06		14	4A	縄RLR	
	22	SI06		21	2	縄LR	
	23	SI06		14	4A	縄RL	
	24	SI06		14	3A	縄LR帯	
	25	SI06		27	1B	縄LR	
	26	SI06		25	2	縄RL	
	27	SI06		24	2	－	
	28	SI06		43	2B	縄LR	
85	1	SI07		14	1A	縄LR帯	
	2	SI07		35		縄LR帯	
	3	SI07		23	1	縄LR帯	
	4	SI07		36	2	縄LR	
	5	SI07		8	3	縄RLR	
	6	SI07		32	2	縄RL帯	
	7	SI07		32	2	縄LL(半撚),縄L(RL・r)	
	8	SI07		27	2	集条	
	9	SI07		8	3	縄LR	
	10	SI07		8	7	縄LR	
	11	SI07		19	2	－	SP468
86	1	SI07		24	3	縄RL(帯か)	
	2	SI07		55	4	ナデ	
	3	SI07		55	5	ナデ	SK11
	4	SI07		27	2	縄RL	SK23・35
	5	SI07		18	1	縄LR帯	SI08
87	1	SI07		53		ナデ	
	2	SI07		54		ナデ,(B)	
	3	SI07		53		集条(草木結束か)	
	4	SI07		22		縄RL帯	SK30・38
	5	SI07		54		ナデ	
	6	SI07		54		ケズリ,(B)	
	7	SI07		54		ナデ,(D)	
	8	SI08		53		ナデ	SP150
	9	SI08		27	2	縄LR	
88	1	SI07	上層	7		撚r	
	2	SI07	中層	7		撚r	
	3	SI07	中層	7		撚LR	
	4	SI07		7		撚l	
	5	SI07	上層	7		撚r	
	6	SI07	中層	8	7	縄LRL	
	7	SI07	上層	23	1	集条	
	8	SI07	中層	8	7	撚l	
	9	SI07	上層	8	5A	縄LR	
	10	SI07	上層	36	3	－,(B)	
	11	SI07		23	1	縄RL(帯か)	
	12	SI07	上層	14	1A	縄LR	
	13	SI07		8	4	－	
	14	SI07		23	1	縄RL	
	15	SI07	上層	29		縄LR	
	16	SI07	上層	8	5C	－	
	17	SI07	上層	36	1	縄LR(帯か)	
	18	SI07	上層	32	1	縄LR	
	19	SI07		24	3	縄LR	
	20	SI07	上層	32	2	－	
	21	SI07	炉内	13	3	－	
	22	SI07		18	1	縄LR	
	23	SI07		18	1	縄LR帯	
	24	SI07		18	1	縄LR帯	
	25	SI07		21	2	縄LR帯	
	26	SI07	上層	18	2	－	
	27	SI07		24	2	縄LR	
	28	SI07	中層	24	3	縄RL	
	29	SI07	中層	27	2	縄LR	
	30	SI07	中層	13	2	－	
89	1	SI07		44		縄LR	
	2	SI07		27	2	縄LR	
	3	SI07	中層	27	2	縄RLR	
	4	SI07		27	2	－	
	5	SI07	上層	59	1	－	
	6	SI07	上層	27	2	縄LR	
	7	SI07	上層	36	1B	縄LR	
	8	SI07		33	1	－	
	9	SI07	上層	53		縄RLR帯	SP629
	10	SI07		53		縄RLR帯	
	11	SI07	上層	53		ナデ	
	12	SI07	上層	57	1	研磨	
	13	SI07		46	4	－	
	14	SI07	上層	57	1	縄RL	

挿図		出土位置	層位	群	類	地文	同一個体出土遺構
89	15	SI07		56		縄RL	SB18－P1
	16	SI07		53		縄RL	
	17	SI08	中層	8	7	縄LR	
	18	SI08	中層	8	7	縄LR(頭部無文部有)	
	19	SI08	中層	29		撚r	
	20	SI08	上層	46	1	－	SI09
	21	SI08		23	1	集条	
	22	SI08		8	5B	縄RLR帯	
	23	SI08	上層	27	2	縄LR	
	24	SI08		20		－	
	25	SI08	上層	43	2A	縄LR	
	26	SI08	上層	18	1	縄RL	
	27	SI08	上層	18	1	縄LR	
	28	SI08		46	1	研磨	
	29	SI08	中層	36	2	－	
	30	SI08	中層	24	3	縄LR	
	31	SI08		36	2	－	
90	1	SI09		33	1	－	SP513
	2	SI09	上層	36	2	縄RL帯	
	3	SI09		53		ナデ	SK96,SP200
	4	SI09	上層	19	2	縄LR(帯か)	SK23・24
	5	SI09		23	1	－	
	6	SI09	上層	24	3	縄LR	
	7	SI09		24	3	縄LR	SK96
	8	SI09		55	4	ナデ	
	9	SI09	上層	8	3	縄LR	
	10	SI09	下層	29		撚l	
	11	SI09	上層	36	2	縄LR	
	12	SI09	下層	36	1	縄LR	
	13	SI09	上層	27	1	縄LR	
	14	SI09		13	2	縄LRL	
	15	SI09	上層	33	1	－	
	16	SI09	上層	36	2B	－	
	17	SI09	上層	36	3	－	SP050
91	1	SI14	炉床	53		縄LR	
	2	SI14	炉床	54		縄RL	
	3	土器埋設遺構8		14	2A	縄LR帯,(E)	
	4	SI14		16		縄LRL帯,(B)	
	5	SI14		52		ナデ	
	6	SI14		54		ナデ,(C)	
	7	SI14		53		ナデ	SI15,SB10・P7,SP417・468
92	1	SI10		8	3	－	
	2	SI10	上層	14	2A	－	
	3	SI10	上層	45	2	－	
	4	SI10	下層	46	3	－	
	5	SI10		23	2	縄LR	
	6	SI10	上層	14	2A	縄LR	
	7	SI10	下層	23	2	縄LR	
	8	SI10	上層	7		撚r	
	9	SI10		52		ナデ	
	10	SI11		8	3	縄LR	
	11	SI11		32	2	縄LR帯	
	12	SI11		55	2	ナデ	
	13	SI11		14	3A	縄LR	
	14	SI11		46	1	－	
	15	SI11		59	1	－	
	16	SI14	上層	8	1	－	
	17	SI14		28	1	擦痕状工具刺突文	
	18	SI14		14	4	集条	
	19	SI14		32	1	縄LR	
	20	SI14		8	7	撚l(頭部無文部有)	
	21	SI14		32	2	縄RL	
	22	SI14	上層	18	2	－	SK67
	23	SI14		36	1	撚l	
	24	SI14		52		縄LR	
	25	SI14	下層	27	1A	－	
	26	SI14		53		縄LR	SP534
93	1	SI15	炉床	53		縄LR帯	
	2	SI15		52		縄LR結帯,(B)	
	3	SI15	上層	24	2	縄LR	
	4	SI15		8	5A	縄LR	SI14
	5	SI15		53		ナデ	
	6	SI15		40	3	撚l	
	7	SI15		44		縄LR	
	8	SI15		36	3	集条,(E)	
	9	SI15		36	2	縄LR帯,(B)	SP637
94	1	SI15		40	1	二枚貝刺突文	落ち込み
	2	SI15		45	2	研磨,(A)	SI11
	3	SI15		8	6	縄RLR	SI17
	4	SI15	中層	7		縄RL	
	5	SI15		8	3	縄LR	

挿図		出土位置	層位	群	類	地文	同一個体出土遺構
94	6	SI15		45	1	縄RL	
	7	SI15		14	2A	縄LR	
	8	SI15	中層	18	2	縄RL	SP637
	9	SI15	中層	24	2	縄LR	SK84
	10	SI15		8	7	縄LR帯	
	11	SI15	上層	32	1	縄LR	
	12	SI15		27	2	縄LR	
	13	SI15		14	2A	縄LR	
	14	SI15	上層	27	1A	－	
	15	SI15	上層	32	2	縄LR(胴：一部矢羽根)	
	16	SI15	中層	27	1A	－	
	17	SI15	上層	32	2	－	
	18	SI15	上層	43	4	研磨	
	19	SI15		33	1	－	
	20	SI15		50		ナデ	
	21	SI15	上層	38	3	円形刺突文	
95	1	SI16	炉内	52		集条	SI11
	2	SI16	炉内	36	3	－	
	3	SI16	炉内	13	2	縄RLR帯	SK66
	4	SI16		59	3	研磨	SK66
	5	SI16		8	2	集条	
	6	SI16	下層	29		縄LR	
	7	SI16		16	2	縄LR	
	8	SI16		8	3	縄LR	
	9	SI16	上層	27	2	縄LR	
	10	SI16		27	2	縄LR	
	11	SI16		27	2	縄LR	
	12	SI16		51		集条	SI11
	13	SI16		57	2	ナデ	
	14	SI16		36	2	縄LR	
	15	SI16		44	3	研磨	
	16	SI16		54		撚r	
	17	SI16	上層	54		ナデ	SP472
	18	SI16	上層	54		ケズリ・ナデ	SP349,SB10－P6
96	1	SI17		18	2	縄RL帯	SI14
	2	SI17		52		ナデ,(B)	
	3	SI17		52		縄LR帯	
	4	SI17		14	3B	縄LR	
	5	SI17		23	1	縄RL帯	
	6	SI17		18	2	縄LR	
	7	SI17		54		縄LR帯,(B)	
	8	SI17	上層	58		(E)	
97	1	SI17	上層	18	2	－	
	2	SI17	上層	25	1	縄LR	
	3	SI17		14	4A	縄LR	
	4	SI17	上層	8	7	－	
	5	SI17	上層	14	4A	縄LR	
	6	SI17		32	1	縄LR	
	7	SI17		14	1A	縄LR	
	8	SI17	上層	24	3	縄LR	
	9	SI17	上層	32	1	縄LR	
	10	SI17	中層	14	4A	縄LR	
	11	SI17		24	3	縄LR	
	12	SI17		32	2	縄LR	
	13	SI17		32	1	縄LR	
	14	SI17		27	2	縄LR帯	SP646
	15	SI17		32	2	縄RL	
	16	SI17		36	2	縄RL帯	
	17	SI17	上層	46	3	－	
	18	SI17		57	1	研磨	
	19	SI17	中層	46	3	－	
	20	SI17	上層	43	4	研磨	
	21	SI17		47		研磨	
	22	SI17	上層	50		ナデ	
	23	SI17		52		ナデ	
	24	SI17		52		ナデ	
	25	SI12		8	2	－	
	26	SI12		8	2	縄LR	
	27	SI13		8	7	縄LR	
	28	SI13		52		ナデ	
	29	SI13		54		縄LR帯	
	30	SI21		7		撚r	
	31	SI21		53		縄RLR帯	
	32	SI21		8	4	縄LR	
	33	SI21		54		単条	
	34	SI21		36	2	縄RL帯	
	35	SI21		8	1	－	
98	1	SI18		8	5A	縄LR帯	
	2	SI18	炉床	55	4	縄LR	
	3	SI18	炉床	53		ナデ	
	4	SI18		52		縄LR結帯,(B)	
99	1	SI18		32	2	縄RL帯	SI19,SK84
	2	SI18		52		ナデ	
	3	SI18		24	1	縄LRL	SI19,SP315・316
	4	SI18		52		ナデ	
	5	SI18		25	2	縄LR(帯か)	

挿図		出土位置	層位	群	類	地文	同一個体出土遺構
100	1	SI18	上層	32	2	縄RL帯	
	2	SI18		14	2A	縄LR	SK74
	3	SI18		14	3A	縄RL帯	
	4	SI18		8	5A	縄LR	
	5	SI18		18	2	縄RL	
	6	SI18		32	1	縄LR帯	
	7	SI18		24	2	－	SP295
	8	SI18	中層	45	3	－	
	9	SI18		54		ナデ,(E)	
	10	SI18		47	3	縄LR,(B)	
	11	SI18		36	2A	縄LR帯,(A)	
101	1	SI18	中層	8	3	縄LR	
	2	SI18	上層	8	5A	縄LR	
	3	SI18		8	3	－	
	4	SI18	中層	28	2	円形刺突文(竹管状工具)	
	5	SI18		8	7	撚l	
	6	SI18		11	2	－	
	7	SI18	中層	23	1	縄LR	
	8	SI18		25	1	－	
	9	SI18		23	1	集条(二枚貝か)	
	10	SI18	中層	28	1	－	
	11	SI18	中層	24	2	縄LR	
	12	SI18	上層	18	1	－	
	13	SI18	上層	26		縄LR	
	14	SI18	中層	27	2	－	
	15	SI18	中層	7		撚r	
	16	SI18		24	3	縄LR	
	17	SI18	上層	25	2	縄LR	
	18	SI18	上層	23	1	－	
	19	SI18	上層	23	1	縄LR帯	
	20	SI18		18	2	－	
	21	SI18		24	3	縄LR	
	22	SI18	上層	24	3	縄LR	
	23	SI18	上層	36	2	縄LR,(A)	
	24	SI18	上層	33	1	－	
	25	SI18	上層	36	2	縄LR	
	26	SI18	上層	21	2	縄LR帯	
	27	SI18	上～下層	35		縄LR結帯	
	28	SI18	上層	43	2A	研磨	
				43	2B		
	29	SI18	中層	43	1	－	
	30	SI18	上層	52		縄LR帯	
102	1	SI19	炉床	50		ナデ	
	2	SI19	炉床	18	2	縄LR帯	SK84
	3	SI19	炉床	25	2	縄RLR	SK84
103	1	SI19		8	3	縄LR	
	2	SI19		8	7	胴：縄LR帯	SK84
	3	SI19		53		ナデ,(B)	
	4	SI19		53		ナデ	SK84
	5	SI19		54		縄LR,(B)	SK84
	6	SI19		33	1	集条	SK84
104	1	SI19		18	1	縄LR帯	B13
	2	SI19		24	1	縄LR	
	3	SI19		28	1	縄LR帯	
105	1	SI19	下層	18	2	縄LR帯	SP295・306
	2	SI19		18	2	縄LR,(B)	
	3	SI19		8	4	縄LR帯	
	4	SI19		18	2	縄LR帯	
	5	SI19		14	3A	縄LR	SK84
	6	SI19		59	1	－	
	7	SI19		59	1	縄LR	
	8	SI19		58		(B)	
	9	SI19		23	1	縄LR	
	10	SI19		47		縄LR,(B)	
106	1	SI19	中層	7		撚1(頭部無文部有)	
	2	SI19		13	2	縄LR	
	3	SI19	中層	8	7	縄RL	
	4	SI19	中層	8	1	縄LR	
	5	SI19		28	2	縄LR	
	6	SI19	中層	8	3	－	
	7	SI19	中層	8	3	縄LR	
	8	SI19	下層	32	2	縄RL	
	9	SI19	下層	23	1	集条	
	10	SI19		29		縄LR	
	11	SI19	中層	28	2	縄LR	
	12	SI19		8	7	撚r	
	13	SI19		32	1	縄LR	
	14	SI19	中層	14	4B	櫛歯状工具刺突文	
	15	SI19	中層	14	2A	縄RLR	
	16	SI19		14	2A	縄LR	
	17	SI19		14	4A	縄LR	
107	1	SI20	炉上・炉床	18	2	縄LR帯,(B)	
	2	SI20	炉上・炉床	14	1A	縄LR帯	
	3	SI20		23	1	縄LR帯	
	4	SI20		28	1	縄RL	SI18
	5	SI20		13	3	縄LR	
	6	SI20		33	1	－	SK89
	7	SI20	上～下層	50		ナデ	SK89
	8	SI20		36	1	集条,(B)	落ち込み
	9	SI20		33	1	－	
108	1	SI20		8	3	縄LR	
	2	SI20	中層	8	3	縄LR	
	3	SI20	中層	7		撚l(頭部無文部有)	
	4	SI20		8	7	縄LR	
	5	SI20	中層	28	2	縄LR	
	6	SI20	中層	8	7	－	
	7	SI20	中層	18	1	－	
	8	SI20	中層	24	3	－	
	9	SI20	中層	8	3	縄RL	
	10	SI20	中層	8	3	撚r	
	11	SI20	下層	8	3	縄LR	
	12	SI20	中層	8	3	縄RL	
	13	SI20		25	1	縄LR	
	14	SI20		14	3A	縄RLR帯	
	15	SI20	中層	32	1	縄LR(帯か)	
	16	SI20	中層	32	2	－	
	17	SI20	中層	28	2	－	
	18	SI20	中層	14	4A	縄RLR帯	
	19	SI20	中層	32	2	縄RL	
	20	SI20	中層	32	2	縄LR	
	21	SI20		38	3	－	
	22	SI20	中層	36	2	縄LR帯	
	23	SI20	中層	36	2	縄LR	
	24	SI20	中層	14	1B	縄LR帯	
	25	SI20	中層	33	1	－	落ち込み
	26	SI20	中層	53		集条(垂下文間曲線文)	
	27	SI20		54		集条(矢羽根状)	
	28	SI20		54		撚l	
	29	SI20	中層	53		縄LR帯	
	30	SI20		53		縄LR帯	
	31	SI20	中層	53		縄LR帯	
	32	SI20	中層	56		研磨	
	33	SI20	中層	50		ナデ	
	34	SI20		54		単条	
	35	SI20	中層	43	2A	研磨	
	36	SI20	中層	46	4	－	
109	1	SB04-P2		24	2	縄LRL	SK11
	2	SB04-P2		18	2	縄RLR帯	
	3	SB04-P3		8	1	－	
	4	SB04-P3		53		縄LR帯	
	5	SB04-P2		32	2	－	
	6	SB04-P2		36	3	集条	
	7	SB06-P2		14	1A	縄LR(帯か)	SK11
	8	SB06-P2		28	2	－	
	9	SB06-P1		7		撚r	
	10	SB07-P3		14	2A	縄LRL	SP135
	11	SB07-P4		27	2	－	
	12	SB07-P2		53		縄LR帯	
	13	SB07-P3		24	2	－	
	14	SB07-P4		18	2	縄LR	
	15	SB07-P3		24	3	－	SP147
110	1	SB13-P4		8	3	縄RLR,(B)	SP235
	2	SB14-P2		27	2	縄LR	SK78
	3	SB14-P3		25	2	縄LR	
	4	SB15-P2		24	2	縄LR	
	5	SB15-P3		18	2	－	
	6	SB15-P4		21	2	縄LR帯	
	7	SB16-P3		18	2	縄LR帯,(B)	
	8	SB16-P3		9		－	
	9	SB16-P3		27	1A	－	
	10	SB16-P1		23	1	縄LRL,(B)	

挿図		出土位置	群	類	地文	同一個体出土遺構
110	11	SB16-P3	52		ナデ,(B)	
	12	SB16-P3	54		ナデ	
111	1	SB01-P6	32	1	縄LR	
	2	SB01-P6	8	8	−	
	3	SB02-P4	52		ナデ	
	4	SB05-P1	43	3B	−	
	5	SB05-P3	36	2	−	
	6	SB05-P3	36	2	縄LR	
	7	SB08-P3	27	1A	縄LR	
	8	SB08-P1	10	1	−	
	9	SB08-P3	27	2	−	
	10	SB08-P5	54		縄LR帯,(B)	
	11	SB09-P1	36	2A	縄LR帯,(B)	
	12	SB11-P1	23	2	縄LR	
	13	SB18-P1	23	1	−	
	14	SB18-P1	55	5	縄LR帯	
	15	SB18-P1	56		縄RL	SI07
112	1	土器埋設遺構2	53		縄RL(横位結節縄文有)	(C11区V層)
	2	土器埋設遺構1	4		縄LR,(C)	
	3	土器埋設遺構5	54		ナデ,(B)	
	4	土器埋設遺構4	18	2	縄LR,(B)	(D5区V層)
	5	土器埋設遺構6	46	1	縄LR,(B)	
113	1	土器埋設遺構3	25	2	縄LR	
	2	土器埋設遺構3	52		集条	
	3	土器埋設遺構3	36	1	縄RL帯	
114	1	SK05・07	43	2B	縄LR	
	2	SK05・07	53		ナデ	
	3	SK09	45	3	−	SK09･84･85
	4	SK09	8	3	縄RL帯	
	5	SK09	18	2	縄LR	
	6	SK09	8	7	縄LR	
	7	SK09	32	2	縄RL	
	8	SK11	24	2	縄LR	
	9	SK11	24	2	縄LR	
	10	SK11	36	1	縄LR	
	11	SK11	8	5B	−	
	12	SK11	54		縄LR結帯	
	13	SK11	7		撚r	
	14	SK14	46	2	−	
	15	SK18	53		縄LR	
115	1	SK08	18	1	縄LR	
	2	SK08	8	1	−	
	3	SK08	54		撚r	
	4	SK17	28	2	縄LR	
	5	SK19	25	2	−	
	6	SK22	52		ナデ	
	7	SK22	10	1	縄LR	
	8	SK22	33	1	−	
	9	SK22	50		単条(棒状工具)	
	10	SK22	54		ナデ	
	11	SK23	7		撚r(頸部無文部有)	
	12	SK23	36	2	−	
	13	SK26	36	3	縄LR	SP232
	14	SK24	7		撚l	
	15	SK24	14	3A	縄RL	
	16	SK24	33	1	−	
	17	SK24	6		−	
	18	SK24	36	1	縄RL結帯	
	19	SK24	37		−	
	20	SK24	32	2	縄LR	
	21	SK24	36	3	−	
	22	SK35	55	4	ナデ	
	23	SK35	45	1	研磨	
	24	SK35	24	1	縄LR	
116	1	SK30	33	2	−	SI07,SP272
	2	SK30	54		縄LR結帯	SP272
	3	SK30	54		ナデ,(E)	SP272
	4	SK30	32	2	縄LR	
	5	SK30	36	2	−	
	6	SK30	26		縄LR	
	7	SK30	33	1	縄LR	
	8	SK30	36	2	−	
	9	SK30	33	1	−	
	10	SK30	36	3	−	
	11	SK30	54		縄LR結帯	
	12	SK30	54		縄LR結帯	
117	1	SK34	32	2	縄RL	SK36
	2	SK34	23	1	集条	
	3	SK34	32	1	縄LR	
	4	SK34	32	1	縄LR帯	
	5	SK34	55	1	縄LR結帯	
	6	SK34	18	2	縄LR帯	
	7	SK34	32	1	縄LR(帯か)	
	8	SK34	43	2B	縄LR	
	9	SK36	8	3	縄LR	SP417･537
	10	SK36	8	2	−	
	11	SK36	8	7	−	

挿図		出土位置	群	類	地文	同一個体出土遺構
117	12	SK36	24	2	縄RL	SP131
	13	SK38	36	3B	−	
	14	SK38	59	3	−	
	15	SK38	53		縄RLR帯	
	16	SK37	52		縄LR	
	17	SK37	8	2	縄LR	
118	1	SK40	55	1	縄LR	SP120
	2	SK40	27	2	縄LR	SK41
	3	SK42	32	2	縄LR	
	4	SK42	8	3	縄RL	
	5	SK40	55	4	縄LR	SK41
	6	SK40	52		撚r	
	7	SK40	52		ナデ	
	8	SK40	24	1	縄LR	
119	1	SK41	8	5A	縄RL帯,(B)	
	2	SK41	8	3	縄LR	
	3	SK41	8	3	縄LR	
	4	SK41	24	1	縄LR	SB02－P3
	5	SK41	18	2	−	
	6	SK41	24	2	縄LR	
	7	SK41	32	2	縄LR	SK42
	8	SK41	11	1	円形刺突文(竹管状工具)	
	9	SK61	36	3	−	
	10	SK61	8	3	縄LR	
	11	SK55	8	2	縄RL	SP691･692
	12	SK55	32	1	縄LR	
	13	SK55	23	2	−	
	14	SK55	8	3	縄LR	
	15	SK55	14	3A	縄LRL	SK50
120	1	SK57	53		単条	
	2	SK58	7		撚r	SP383
	3	SK63	54		ナデ,(B)	
	4	SK66	23	1	縄LR帯	
	5	SK66	7		撚r	
	6	SK66	8	3	縄LR	
	7	SK66	14	4B	−	
	8	SK67	3		−	SP450
	9	SK67	24	3	縄LR	
	10	SK67	25	2	縄LR	
	11	SK67	27	1B	縄LR	
	12	SK67	36	2	縄LR帯	
	13	SK67	33	1	−	
	14	SK67	52		縄LR	
	15	SK67	58		ナデ,(B)	
	16	SK70	33	1	−	
	17	SK70	54		縄LR異条帯	SP642
	18	SK72	24	3	縄RL	
	19	SK72	8	3	−	
	20	SK73	18	2	単条	
	21	SK73	27	2	縄LR	
	22	SK73	18	2	−	
	23	SK73	27	2	−	
	24	SK73	36	2	−	
	25	SK78	8	3	縄LR	
	26	SK80	24	2	縄LR	
121	1	SK74	8	7	撚r	SK72
	2	SK74	41		縄l	SK70
	3	SK74	8	3	−	
	4	SK74	8	5A	撚r	
	5	SK74	18	1	−	SK72
	6	SK74	52		ナデ	
122	1	SK74	10	1	縄LRL	
	2	SK74	8	3	縄LR	
	3	SK74	8	2	縄LR	
	4	SK74	8	7	−	
	5	SK74	7		撚r	SK72
	6	SK74	8	7	−	SK72
	7	SK74	11	3	縄LR	
	8	SK74	18	2	縄RLR	SK72
	9	SK74	8	3	縄RL	
	10	SK74	14	4A	縄LR	
	11	SK74	27	2	縄LR	
	12	SK74	25	2	縄LR	
	13	SK74	55	5	縄LR	SI18,SK67･72･74
123	14	SK77	30		−	
	15	SK77	38	3	−	
	16	SK77	23	1	縄RLR帯	SP503
	1	SK84・85	9		集条	
	2	SK84・85	33	1	ヘラ状工具キザミ	
	3	SK84・85	36	3	−	
	4	SK84・85	24	3	縄LR	
	5	SK84・85	45	3	−	SK09･84･85
	6	SK84・85	36	2	−	
	7	SK84・85	36	3	−	
	8	SK84・85	33	2	−	
	9	SK84・85	43	4	単条	
	10	SK88	36	2	縄LR結帯	

挿図		出土位置	群	類	地文	同一個体出土遺構
123	11	SK88	3		−	
	12	SK89	7		集条(頸部無文部有)	
	13	SK89	54		撚r	
	14	SK89	54		縄LR結帯	
	15	SK89	23	2	縄LR	
	16	焼土土坑1	7		撚r	
	17	焼土土坑1	43	3B	−	
	18	焼土土坑1	33	1	−	
	19	焼土土坑1	33	1	−	
	20	焼土土坑2	32	2	縄LR	
	21	焼土土坑2	36	2B	−	
	22	焼土土坑2	43	2B	−	
	23	焼土土坑3	32	2	縄RL	
	24	焼土土坑3	7		集条	
	25	焼土土坑5	33	1	−	
	26	落ち込み	33	3	単条	
	27	落ち込み	33	1	−	
	28	落ち込み	2		縄RL	
	29	落ち込み	7		撚l(頸部無文部有)	
	30	落ち込み	24	3	縄LR	
	31	落ち込み	18	2	−	
	32	落ち込み	8	2	−	
	33	落ち込み	32	2	−	
	34	落ち込み	32	2	縄LR	
	35	落ち込み	27	2	縄LR	
	36	落ち込み	32	2	縄LR	
	37	落ち込み	36	2	−	
	38	落ち込み	33	1	−	
	39	落ち込み	46	1	−	
	40	落ち込み	46	1		
124	1	SP295	8	3	−	SP306･320
	2	SP295	8	3	−	SP233
	3	SP538	29		縄RL	
	4	SP220	44		縄LR	
	5	SP591	29		縄LR	
	6	SP692	23	1	縄RL結帯	SP138
	7	SP517	52		ナデ,(B)	
	8	SP484	59	1	−	
	9	SP637	36	3	縄LR帯	
	10	SP376	37		−	
125	1	SP056	8	2	撚r	SK11
	2	SP056	28	1	縄LR	
	3	SP056	14	2B	縄LR	
	4	SP056	27	2	縄LR	
	5	SP056	18	2	縄LR	
	6	SP056	23	2	縄LR	
	7	SP070	27	2	縄LR	
	8	SP134	14	3A	縄LRL	
	9	SP064	14	3B	縄LR	SK11
	10	SP064	7		撚r	SK11,SP056
	11	SP230	32	2	縄LR	
	12	SP130	8	3	縄RL	
	13	SP187	33	2	−	
	14	SP197	46	1	縄LR	SP573
	15	SP120	14	3A	縄LR	
	16	SP214	32	2	縄LR	SP216
	17	SP174	32	2	縄LR(帯か)	
126	1	SP193	8	3	縄LR	
	2	SP299	7		撚l	
	3	SP236	28	2	縄LR	
	4	SP197	8	5B	−	
	5	SP232	43	2B	−	SP276
	6	SP240	14	1B	−	
	7	SP299	19	2	−	
	8	SP240	14	4A	縄RL	SP241
	9	SP313	8	2	縄LR	
	10	SP315・316	14	4B	縄LR	SP323
	11	SP315・316	3		縄LR	SP323
	12	SP320	8	3	縄LR	
	13	SP320	28	2	縄LR	
	14	SP366	28	2	縄LR	
	15	SP476	24	3	縄LR	
	16	SP370	33	1	−	
	17	SP376	43	3B	縄LR	
	18	SP495	13	2	縄RL	
	19	SP476	27	1A	−	
	20	SP417	7		撚l	
	21	SP601	7		撚l	
	22	SP378	18	1	縄LR	
	23	SP451	7		撚l	
	24	SP476	33	1	−	
	25	SP520	28	2	縄RL	
	26	SP554	24	1	縄LR	
	27	SP637	36	2	縄LR帯	
127	1	SQ1	53		ナデ	SQ4
	2	SQ2	46	1	−	
	3	SQ2	52		撚l	
	4	SQ2	18	2	縄LR帯,(B)	

挿図		出土位置	層位	群	類	地文	同一個体出土遺構
127	5	SQ2		24	2	縄LR	
128	1	SQ2		25	1	縄LRL帯	SI02
	2	SQ2		28	2	－	
	3	SQ2		8	3	縄LR	
	4	SQ2		18	2	－	
	5	SQ2		24	2	縄LRL	
	6	SQ2		24	3	縄LR	
	7	SQ2		43	2A	－	
	8	SQ2		43	3A	－	
	9	SQ2		52		縄LRL帯	
	10	SQ2		54		縄RLR帯	
	11	SQ2		54		縄LRL帯	
	12	SQ3・4		54		ナデ	
	13	SQ3・4		8	5B	撚l	
	14	SQ5		3		－	
129	1	SQ5		24	3	撚r	
	2	SQ5		33	1	－	
	3	SQ5		53		ナデ,(E)	
	4	SQ5		33	1	－,(B)	SQ6
	5	SQ5		54		ナデ,(B)	
	6	SQ5		54		ナデ,(C)	
130	1	SQ6		28	2	撚r	
	2	SQ6		8	5B	撚r	SP685
	3	SQ6		18	2	－	
	4	SQ6		28	2	－,(B)	
	5	SQ6		8	7	撚r結	SK14･17,SP073
	6	SQ6		32	2	縄RL	
131	1	SQ6		52		ナデ	
	2	SQ6		28	2	縄LR	
	3	SQ6		52		ナデ	
	4	SQ6		54		ナデ	
	5	SQ6		27	2	縄LR	
	6	SQ6		24	2	縄RLR	SK14･SP684
	7	SQ6		29		縄LR	
	8	SQ6		46	1	－	
	9	SQ6		27	1A	縄LR	
	10	SQ6		8	3	撚r	
	11	SQ6		46	1	縄LR	
	12	SQ6		28	2	縄RL	
	13	SQ6		3		縄LRL	
132	1	A14	IV	14	2A	縄LR帯	
	2	A9・10	V	15		縄RL帯	
		B9	IV・V				
	3	C4	V	8	2	縄LR	
	4	B3	V	5		縄RL	
	5	C6	V	14	3A	縄RL	
	6	A15	IV	18	1	縄LR	
	7	C6	IV・V	8	5B	－	
	8	B14・15	IV・V	36	2	－	
	9	C7	V	20		－	
	10	A9,B7	IV	49		－	
		B6	V				
	11	D11	IV・V	43	2A	－	
	12	A13	IV・V	52		ナデ	
	13	C10･12	V	52		縄LR帯	
	14	B8,C5	V	52		ナデ	
	15	A13	IV・V	46	5	研磨,(A)	
	16	A2	IV・V	54		撚l,(B)	
	17	A11	IV	54		ナデ,(B)	
133	1	B10	IV	7		縄LR	
	2	B6	V	54		撚l	
	3	A9	V	7		撚LR	
	4	B13	V	7		縄LR	
	5	A8	V	7		縄LR	
	6	B14	IV	8	2	集条	
	7	A 区一括	IV・V	8	2	－	
	8	B7	V	8	2	縄LR	
	9	D11	V	8	2	縄LR	
	10	A13	V	8	2	縄LR	
	11	B6	V	8	4	縄LR	
	12	C9	V	8	2	縄LR	
	13	B7	V	8	3	縄LR	
	14	B8	V	8	3	縄RL	
	15	B9	IV・V	8	3	縄LR	
	16	D4	V	8	3	縄LR	
	17	D7	V	8	2	縄LRL	
	18	C10	V	8	3	縄LR	
	19	B9	IV	8	3	縄RL	
133	20	A12	IV	8	5A	縄LR	
	21	C12	IV	8	3	縄LR	
	22	A6	IV	8	3	縄LR	
	23	C3	V	10	1	－	
	24	C6	IV	10	2	－	
		D5	V				
	25	C12	IV	10	2	－	
	26	A8	V	28	2	縄LR	
	27	C9	V	28	2	縄LR	
	28	A12	IV	28	2	－	
	29	A12	V	28	2	縄LR	
	30	C・D7	V	28	1	単条	
	31	A12	IV・V	28	1	縄LR	
	32	C3	V	29		沈線	
	33	D8	V	29		沈線	
	34	D11	IV	30		縄RL	
	35	B12	IV	28	2	縄RL	
	36	D11	V	30		－	
	37	C7	V	8	2	集条	
	38	B7	IV	28	1	縄LR	
134	1	C10	V	31		沈線	
	2	A7	V	31		集条	
	3	B12	V	29		縄RL	
	4	B12	IV	14	3B	縄LR	
	5	B11	IV	29		沈線	
	6	D9	IV・V	28	1	－	
	7	B3	V	29		縄RL	
		B5	IV				
	8	B3	V	12		－	
	9	B7	V	3		－	
	10	D10	V	13	1	縄RL	
	11	C11	V	13	3	縄LRL	
	12	C11	V	20		縄RL	
	13	A6	V	18	2	－	
	14	B9,C8	V	13	2	縄LRL	
	15	B5	V	18	1	縄LR	
	16	A7	V	18	2	－	
	17	A15	IV	14	1	縄LR	
	18	B5	V	14	3A	縄LR	
	19	B11	IV	14	3A	縄LRL	
	20	D10	V	14	3B	縄LR	
	21	A3	IV	14	1A	縄LRL	
	22	B9	V	13	2	縄RL	
	23	A13	IV	13	1	縄LR帯	
	24	B13	IV	13	2	縄RL	
	25	D9	V	9		－	
	26	C12	IV	14	4A	縄LR	
	27	B12	IV	20		－	
135	1	A8	IV・V	24	2	－	
	2	C4	V	24	2	－	
	3	C12,D11	IV	24	2	縄LR	
	4	C4	V	24	3	－	
	5	C3	V	27	1A	－	
	6	A14	IV・V	24	2	縄RL	
	7	B3	V	24	2	縄LRL	
	8	B11	IV・V	27	1A	－	
	9	B7	V	24	1	－	
	10	C4	V	24	3	－	
	11	A12	IV	24	2	縄LR	
	12	C7	V	24	2	－	
	13	A6	V	24	2	縄RL	
	14	A11	IV	27	2	－	
	15	A6	V	24	2	縄LR	
	16	C5	V	24	3	－	
	17	C4	V	24	2	縄LR	
	18	C6	IV	27	1A	－	
	19	C7	IV	27	1A	－	
	20	A13	IV	24	2	縄LR	
	21	D7	V	24	3	縄LR	
	22	B・C7	V	24	3	縄LR	
	23	A11	IV	24	3	縄LRL	
		A13	V				
	24	A11	IV	24	3	縄RL	
	25	A8	V	24	3	－	
	26	C11・12	V	24	3	縄LR	
136	1	C11	IV	24	3	縄LRL	
	2	B6	V	25	1	縄LR	
	3	C9	V	25	1	縄LR	
	4	D6	V	25	1	縄LR	
	5	B10	V	25	2	縄LR	
	6	A11	V	27	2	縄LR	
	7	C12	V	27	1A	単条	
	8	B10	IV	25	2	縄LR	
	9	A4	V	25	2	縄LR	
	10	C11	V	25	2	縄LRL	
	11	B10	IV	25	2	縄LR	
	12	C3	V	25	2	－	
	13	B3	V	27	1B	縄LR	
	14	B10	IV	27	1B	縄LR	
	15	B9	V	27	1B	縄LR	
	16	C10	V	27	1B	縄LR	
	17	B6	IV	27	1B	縄LR	
	18	A7	V	27	1B	縄LRL	
	19	B9	IV	27	2	－	
	20	D1	IV	27	1B	縄LR	
	21	A5	V	27	2	縄LRL	
	22	A13	V	46	3	縄LR	
	23	B8	V	46	1	縄LR	
	24	C4	V	46	1	縄LR	
	25	A11	V	46	1	－	
137	1	C7	V	32	1	縄LR	
	2	D1	V	17		縄LR	
	3	B8	IV	33	2	縄LR	
	4	B6	V	33	2	縄LR	
	5	D12	V	33	2	縄RL	
	6	B15	IV・V	33	2	縄LR	
	7	C11	IV	33	2	縄RLR	
	8	B7	IV・V	33	2	縄RL	
	9	C10	V	33	2	縄RL	
	10	B8	V	33	2	縄LR	
	11	B6	V	33	1	－	
	12	B13	V	33	1	－	
	13	C12	IV	33	1	－	
	14	B10	IV・V	33	1	－	
	15	C4	V	33	1	－	
	16	A3	V	33	1	－	
	17	A1	V	33	1	－	
	18	A15	V	33	1	－	
	19	B8	V	33	1	－	
	20	A13	IV	36	3	－	
	21	C6	IV	33	2	－	
	22	A9	IV・V	33	1	－	
	23	D6	V	33	2	－	
	24	B6	V	34		－	
	25	B7	V	34		－	
	26	C7	V	36	3	集条	
	27	A13	IV	36	2	－	
	28	B9	V	33	3B	(E)	
	29	C4	IV	51		集条	
138	1	A12	IV	38	1	－	
	2	C3	V	38	2	－	
	3	B9	V	38	2	－	
	4	B10	IV	38	2	－	
	5	A11	IV	38	2	－	
	6	B10	IV	38	3	－	
	7	A11	IV	38	3	－	
	8	A11	IV	38	3	－	
	9	D7	V	38	3	－	
	10	A4	V	38	3	－	
	11	B7	IV	38	3	－	
	12	A11	IV	38	3	－	
	13	B4	IV	37		－	
	14	A14	V	36	3	－	
	15	A15	IV	37		－	
	16	A11	IV	59	3	－	
	17	C7	V	43	1	－	
	18	A14	IV	36	3	－	
	19	B10	V	43	2B	－	
	20	D6	IV・V	42		－	
	21	A2	IV	42		－	
	22	B5	V	43	4	研磨	
	23	C9	V	43	2B	縄LRL	
	24	A 区一括		1		－	
	25	C4	V	40	2	二枚貝キザミ	
	26	C・D2	IV	48		研磨	
	27	C4	V	48		縄LR	
	28	D1	IV	48		縄LR	

第２節　石器・石製品

１　概要

舟寄遺跡の調査で出土した石器・石製品の内訳と遺構別出土数量は第３表のとおり。狭義の石器のなかでは石鏃、打製石斧、石錘、磨石類が数量的に器種組成の中心となる。石器群の大半は、出土土器からみて縄文時代中期中葉～後葉に帰属すると考えられる。

２　器種各説

１）石鏃（第139～142図、143図１～４）

分類　刺突に適した尖頭部と着柄に適した基部を有す薄手・軽量の小形剥片石器。未成品（失敗品）とみられるものも含め389点を認めた。調整加工が全周におよび、平面形・側面形ともほぼ左右対称となるものを石鏃（完成品）、形状が歪なものや、調整加工が不十分なものを石鏃未成品とする。完成品241点、未成品148点。完成品は基部形状からⅠ～Ⅴ類に大別し、それぞれ側縁形状から細別した。未成品は全体形状や調整加工の状態により１～３類に分類した。

Ⅰ類：凹基無茎鏃（第139・140図、第141図１～18）。208点。側縁形状には直線的なもの（ａ：第139図１～19）42点、やや外湾するもの（ｂ:第139図20～40、第140図１～18）103点、強く外湾するもの（ｃ：第140図19～34）30点、やや内湾するもの（ｄ：第140図35、第141図１～４）９点、屈曲するもの（ｅ：第141図５～16）14点、段をもつもの（ｆ：第141図17～18）２点がある。Ⅰｃ類には先端がペン先状に細くなるもの（第140図32～34）も含めた。すべての類型において、基部の抉りは概して浅い。また、長大な大形品（第140図６など）が特徴的に組成する。

Ⅱ類：平基無茎鏃（第141図19・20）。４点。側縁形状には直線的なもの（ａ：20）１点とやや外湾するもの（ｂ：19）３点が認められる。

Ⅲ類：円基鏃（第141図21・22）。４点。側縁形状には直線的なもの（ａ：21）１点とやや外湾するもの（ｂ：22）３点が認められる。

Ⅳ類：尖基鏃（第141図23）。１点。

Ⅴ類：有茎鏃（第141図24）。１点。

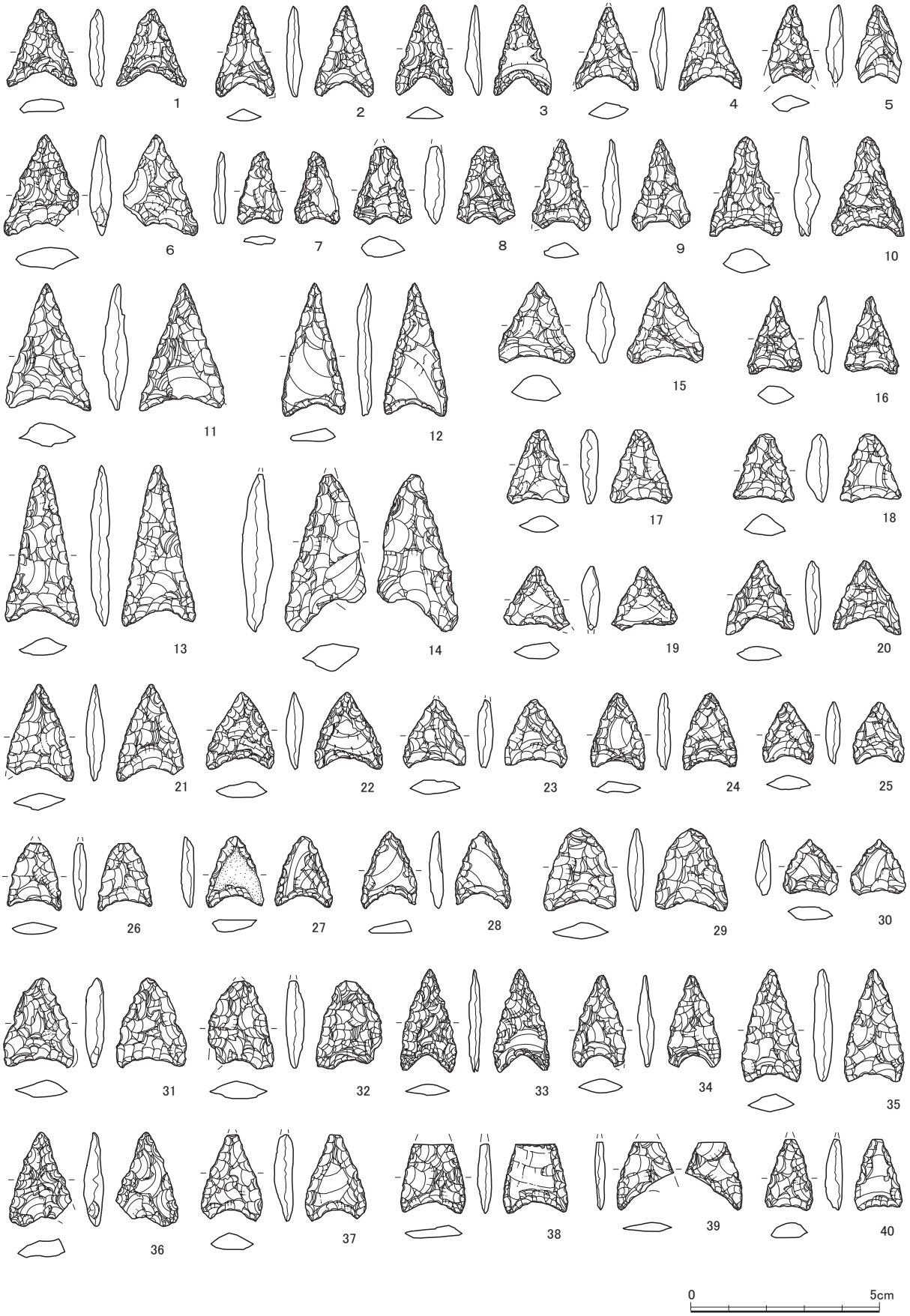
未成品１類：完成品に準じる形状であるが、平面形・側面形がいびつなものや、調整加工が一部にとどまるもの（第141図25～33、第142図１～13）。77点。完成品Ⅰ類を志向するものが多い。

未成品２類：比較的小形・薄手の剥片を素材とし、周縁部を中心に調整加工を加え、おおよその形を整えたもの（第142図14～19）。38点。

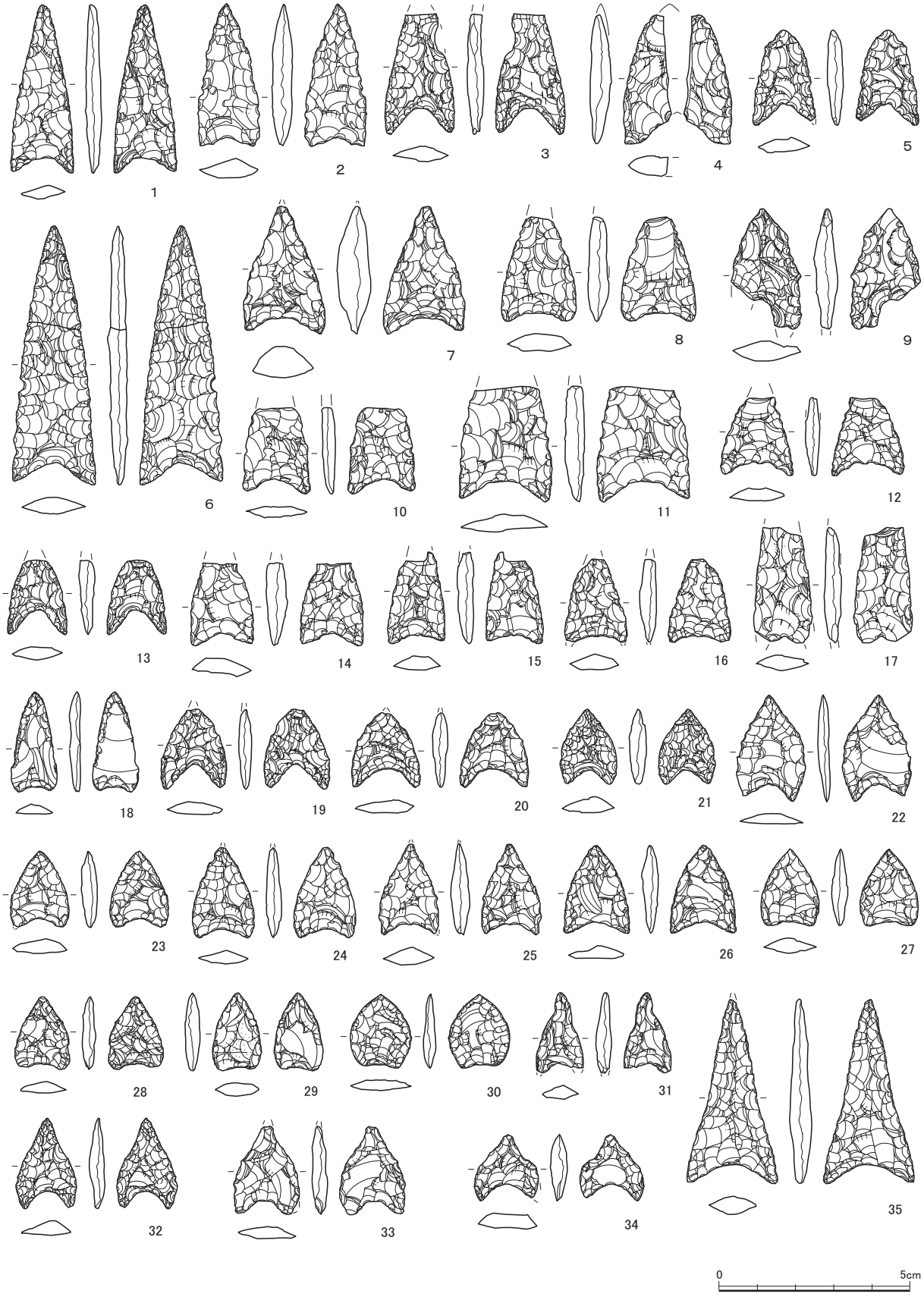
未成品３類：比較的大形・厚手の剥片を素材とし、両面調整により尖頭状に成形したもの。（第142図20～26、第143図１～４）。33点。

石材　チャート308点、流紋岩39点、ガラス質安山岩26点、黒曜石８点、凝灰岩３点、珪質頁岩４点、石英１点である。ガラス質安山岩とした中には下呂石とみられるものが10点程認められる。

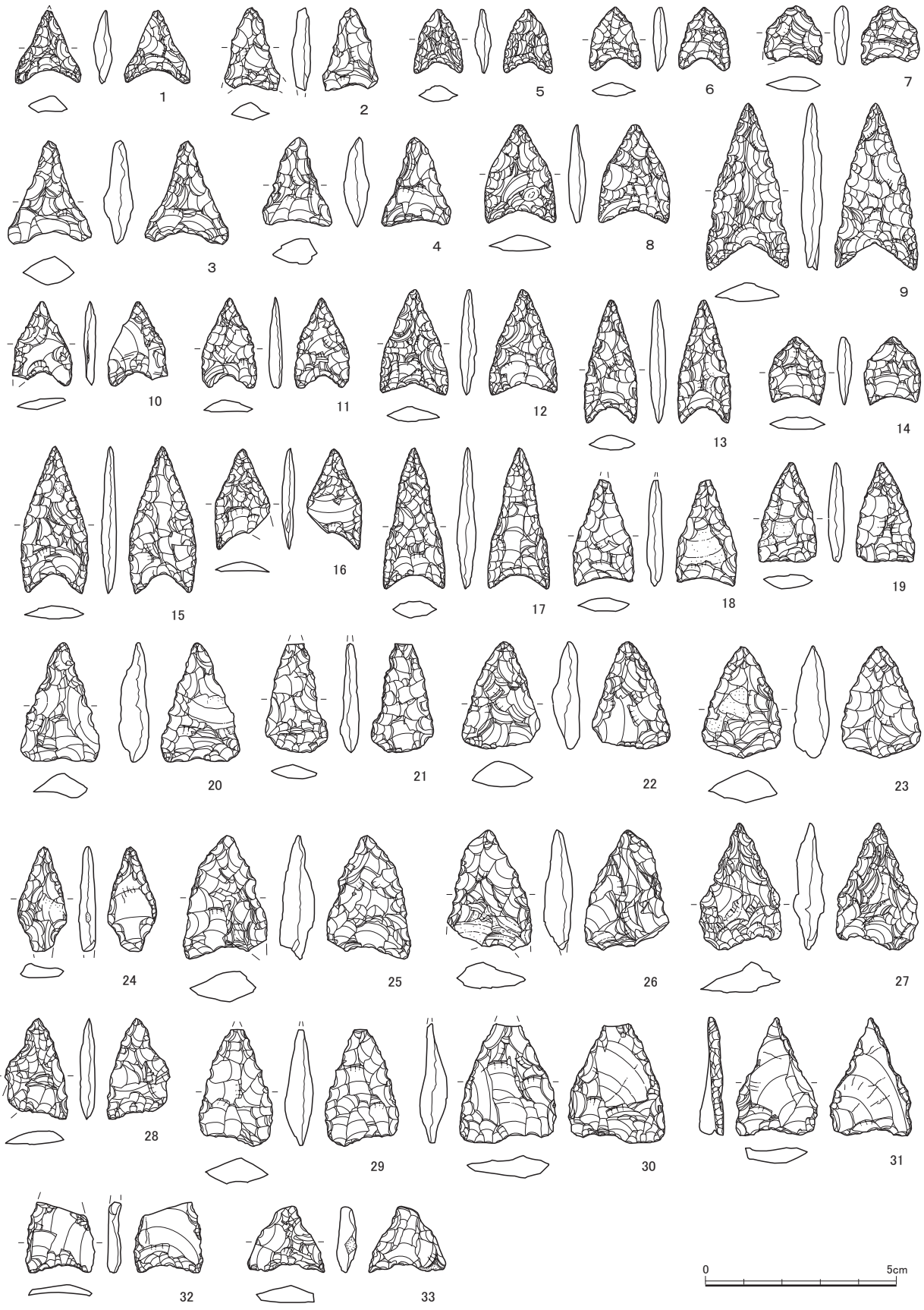
製作　石器群中には石鏃と石材の共通する剥片・砕片や石核（残核）が多数認められ、当該地で製作が行われたことは間違いない。素材剥片の剥離工程については検討できなかったが、調整加工については未成品２類および３類の存在から二通りの工程が想定される。ひとつは完成品と法量の近似する薄手・小形の剥片を押圧剥離によって直接的に仕上げていく工程で、素材剥片の腹面・背面を残す例（第139図12・28など）がその工程による完成品の典型といえる。未成品２類はその初期段階において何らかの理由により製作が中止されたものであろう。もうひとつの工程は厚手・大形の剥片を素材とするも



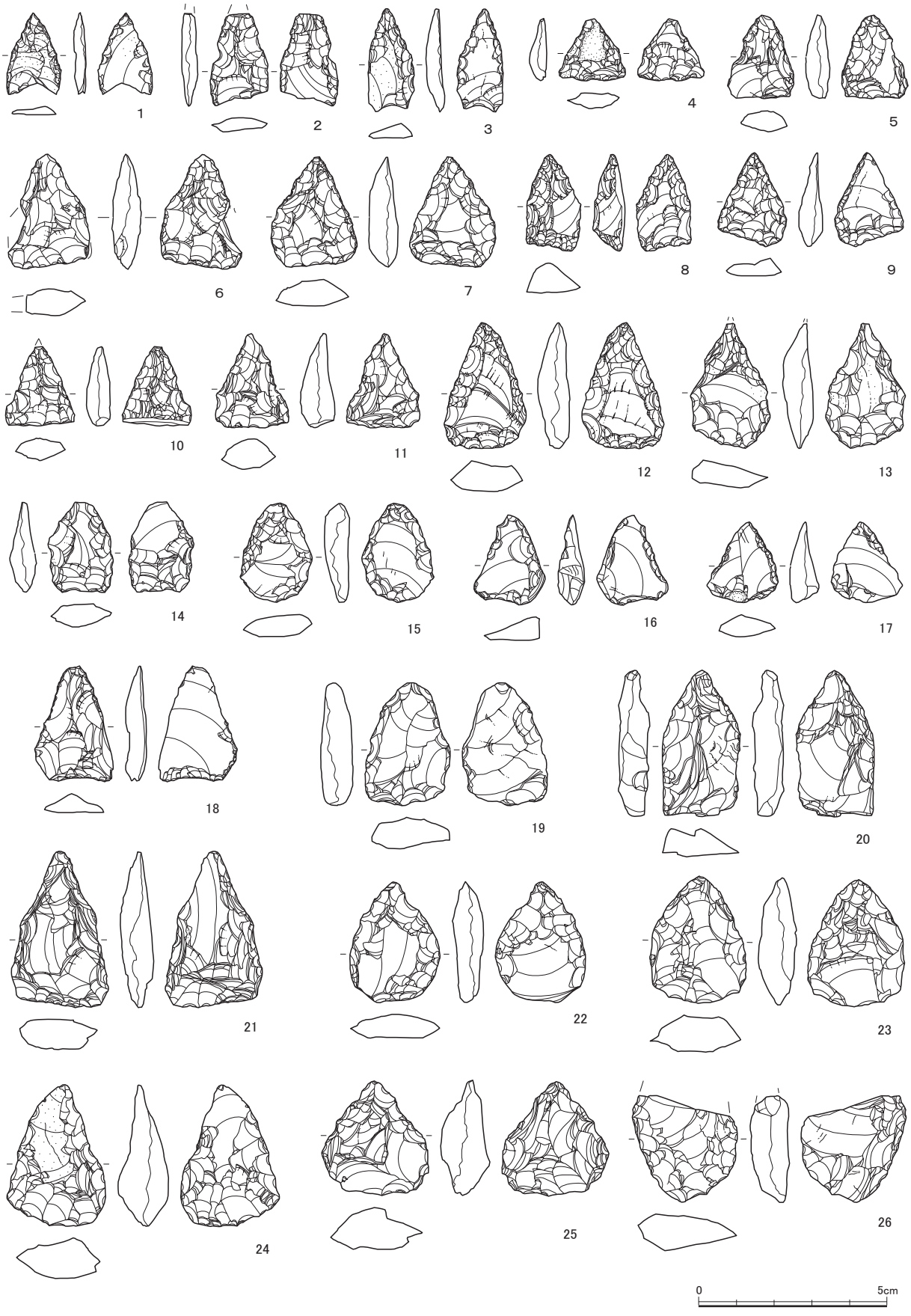
第139図　石鏃実測図１（縮尺 2/3）



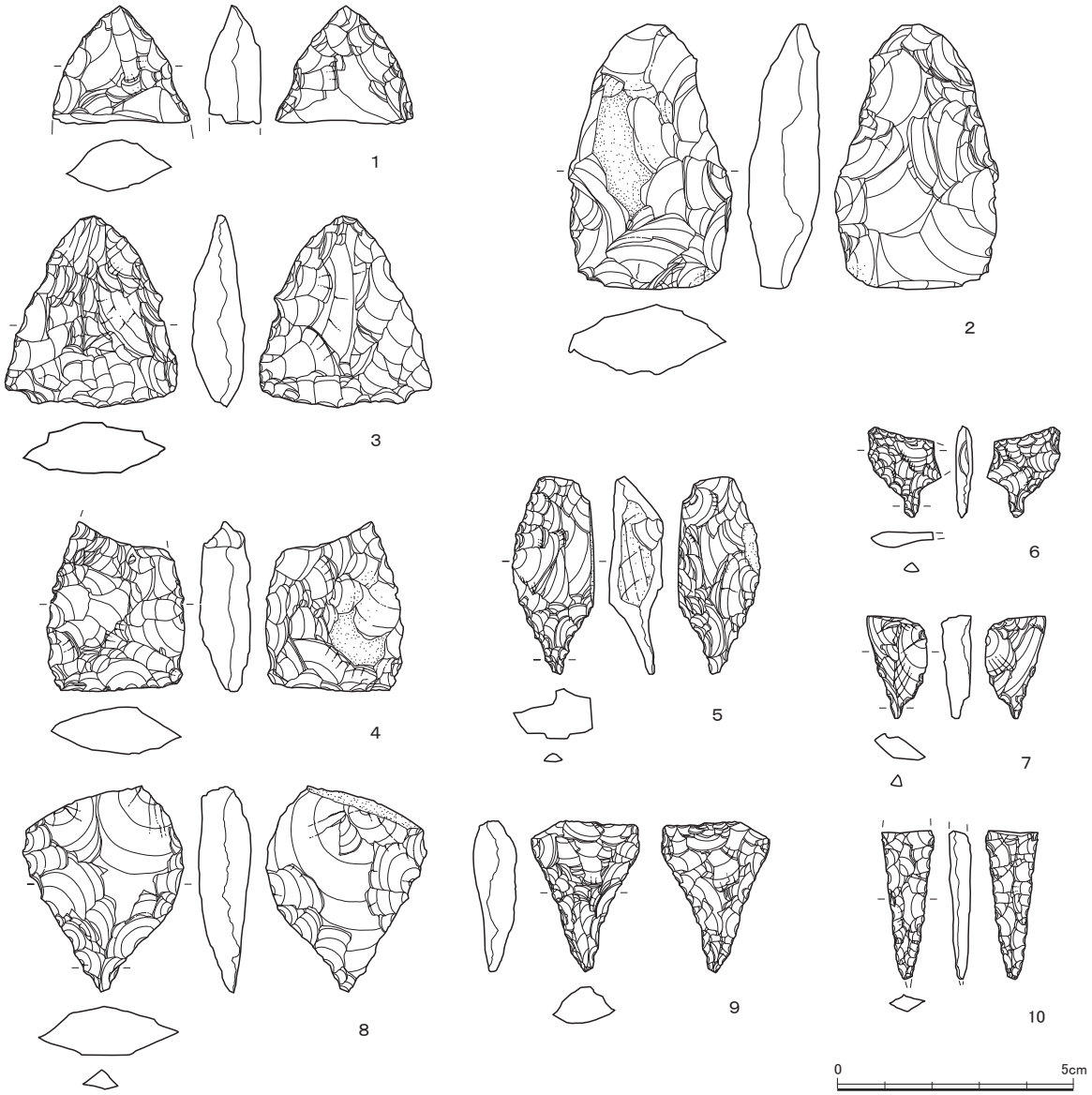
第140図　石鏃実測図２（縮尺 2/3）



第141図　石鏃実測図３（縮尺 2/3）



第142図　石鏃実測図４（縮尺 2/3）



第143図　石鏃・石錐実測図（縮尺 2/3）

ので、おそらくは軟質ハンマーによる直接打撃によって器厚を大幅に減じると同時に尖頭器状の祖形をまず作出し、その後、押圧剥離を併用して徐々に仕上げていく工程である。大形の完成品（第140図６・35 など）はこの工程によるものであろう。未成品３類はこの工程途中に破損したものや、器厚を十分に減じきれず放棄されたものと考えるが、一部は尖頭器に分類すべきかもしれない。

遺存状況　使用に伴う痕跡として、先端部から樋状に延びる剥離痕が28点に認められる。正裏面に形成されたもの26点、側辺に形成されたもの２点である。完成品に分類したものが中心だが、未成品１類にも少量認められる。先端部の折れを伴うものもある（第140図８・12）。これらを含む遺存状況の内訳は、まず完成品で完形70点、欠損品171点である。未成品では、完形91点、欠損品57点である。

２）石錐（第143図５～10）

分類　錐状の尖頭部（錐部）が作出された小形剥片石器で、総数14点を認めた。全形がわかるものはいずれも幅広の頭部（つまみ部）をもつ。平面形態から以下のように分類した。

Ⅰ類：錐部とつまみ部の境界が明瞭なもの（５～７）。６点。いずれも錐部は短い。つまみ部を二次加工によって成形しているもの（５・６）と素材剥片の形状を保つもの（７）がある。

Ⅱ類：錐部とつまみ部の境界が明瞭でないもの（８・９）。６点。二次加工はつまみ部までおよぶ。

石材　チャート11点、黒曜石２点、ガラス質安山岩１点が認められる。

遺存状況　錐部に明瞭な摩耗痕跡や擦痕は観察できない。遺存状況の内訳は、完形10点、錐部欠損１点、つまみ部欠損１点、錐部のみ２点である。

３）石匙（第144図１～８）

分類　縁辺に刃部様の連続的な剥離痕が認められる小形剥片石器の中で、つまみ状の突起が作出されたもの。総数10点を認めた。平面形態から以下のように分類した。

Ⅰ類:つまみ部に対し刃部が横長のもの（１～４）。５点。なお､４には刃部の調整加工がみられないが､平面形が類似することから本器種に含めた。

Ⅱ類：つまみ部に対し刃部が縦長のもの（６・７）。２点。

Ⅲ類：つまみ部に対し刃部が斜めに延びるもの（５・８）。３点

石材　チャート４点、ガラス質安山岩４点、流紋岩１点が認められる。ガラス質安山岩とした中にはサヌカイトや下呂石に類似するものがある。

遺存状況　完形６点、刃部欠損２点、側辺欠損１点である。

４）スクレイパー類（第144図９～17）

分類　縁辺に刃部様の連続的な剥離痕が認められる小・中形剥片石器の中で、他の器種に分類しがたい不定形なものを一括し、総数34点を認めた。刃部の範囲と調整加工により以下のように分類した。

Ⅰ類:刃部が素材剥片の一辺のみに形成されたもの。14点。刃部の作出がほぼ片面加工によるもの（ａ：９～12）９点と両面加工によるもの（ｂ：13）６点がある。

Ⅱ類:刃部が素材剥片の二辺以上に形成されたもの。９点。刃部の作出がほぼ片面加工によるもの（ａ）３点と両面加工によるもの（ｂ：14～16）５点、片面加工の刃部と両面加工の刃部を併せもつもの（ｃ）１点がある。

Ⅲ類：平面形が略円形・楕円形を呈するもの。８点。刃部の加工がほぼ片面加工によるもの（ａ）１点と両面加工によるもの（ｂ：17）４点がある。

石材　デイサイト12点、チャート10点、ガラス質安山岩５点、凝灰岩３点、流紋岩２点、珪質頁岩１点、石英１点が認められる。

遺存状況　完形21点、欠損品13点である。ただし、欠損品とした中には元々破断した剥片を素材とする資料を含む可能性がある。

５）異形石器（第145図）

分類　特徴的な形状に成形された小形剥片石器で、他の器種に含めがたいものを異形石器としてまとめた。総数15点。平面形態から以下のように分類した。

Ⅰ類：石鏃様のもの（１・２）。４点。１・２は雁股鏃に分類されることもある。

Ⅱ類：鉤爪状のもの（３～７）。６点。３～５は石匙に近い形状である。

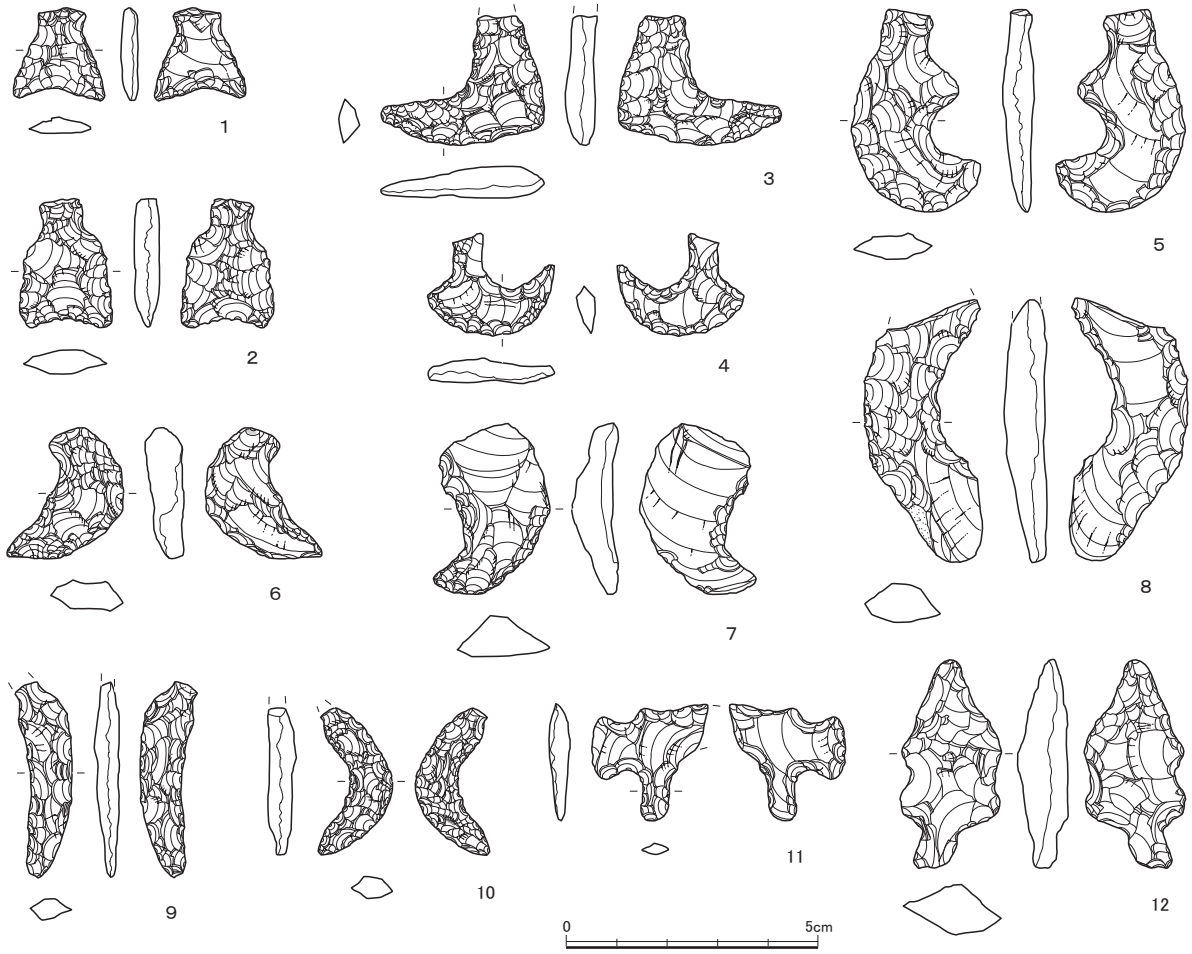
Ⅲ類：湾曲した棒状のもの（８～10）。３点。

Ⅳ類：その他（11・12）。２点。11は石錐、12は有茎鏃に近い平面形を呈す。

石材　チャート６点、ガラス質安山岩４点、流紋岩３点、黒曜石１点、珪質頁岩１点が認められる。



第144図　石匙・スクレイパー類実測図（縮尺 1/2）



第145図　異形石器実測図（縮尺 2/3）

６）打製石斧（第146～150図）

分類　剥片あるいは偏平な自然礫を直接打撃によって斧形に成形した石器で、総数221点を認めた。平面形態から以下のように分類した。

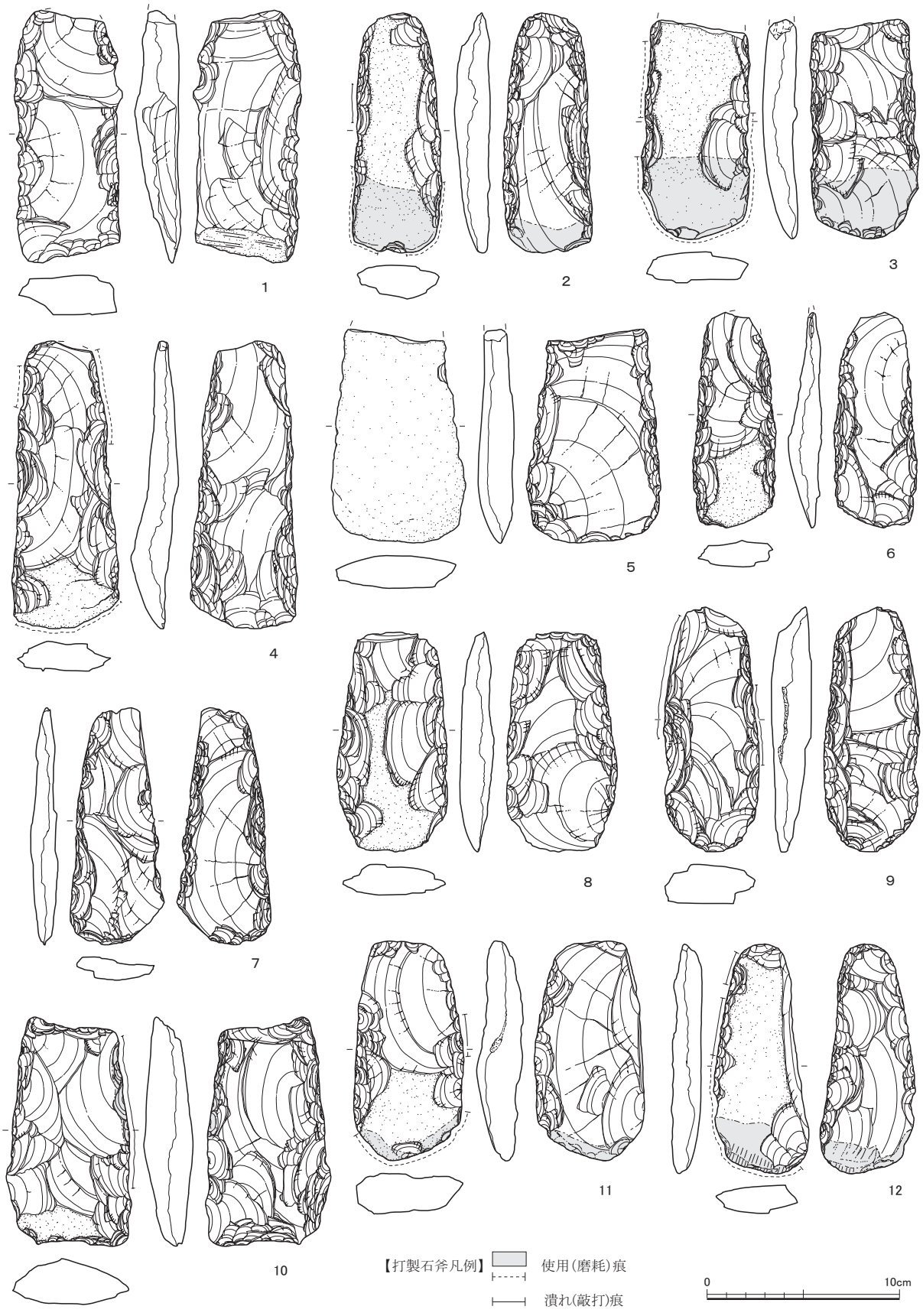
Ⅰ類:短冊形。刃部幅が基部幅の1.5倍未満､あるいは全長が最大幅の２倍以上のものとする（第146図、第147図１～７、第149図、第150図１・２・４・５）。67点。側縁が直線的なもの（ａ：第146図１～７、第149図１～４）38点、外湾するもの（ｂ：第146図８～12、第147図１・２、第150図１・４）21点、内湾するもの（ｃ:第147図３～５、第150図２）３点、刃部側縁が外湾して張り出すもの（ｄ:第147図６・７、第149図５）３点がある。

Ⅱ類：撥形。刃部幅が基部幅の1.5倍以上で、さらに全長が最大幅の２倍に満たないものとする（第147図８～12、第148図、第150図３）。61点。側縁が直線的なもの（ａ：第147図８～12、第148図１、第150図３）７点、外湾するもの（ｂ：第148図２～６）19点、内湾するもの（ｃ：第148図７・８・10・11）６点、刃部側縁が外湾して張り出すもの（ｄ：第148図９）３点がある。

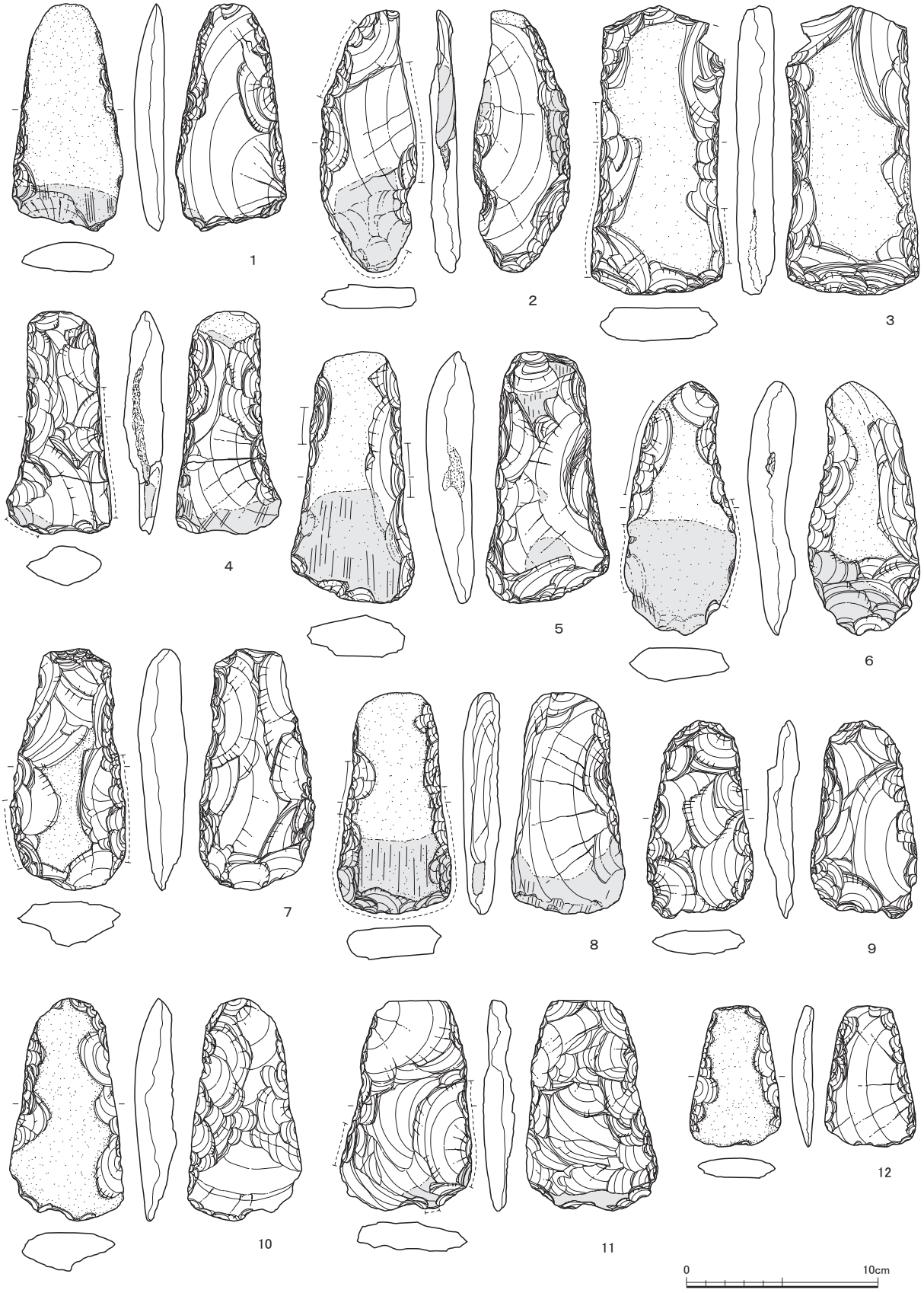
Ⅲ類：側辺中央部で強く括れるもの（第150図６）。撥形と分銅形の中間的な形態である。３点。

石材　デイサイトが174点と大半を占める。板状節理を有する石質により多用されたものと考えられる。他には安山岩37点、砂岩６点、流紋岩２点、閃緑岩１点、ひん岩１点。

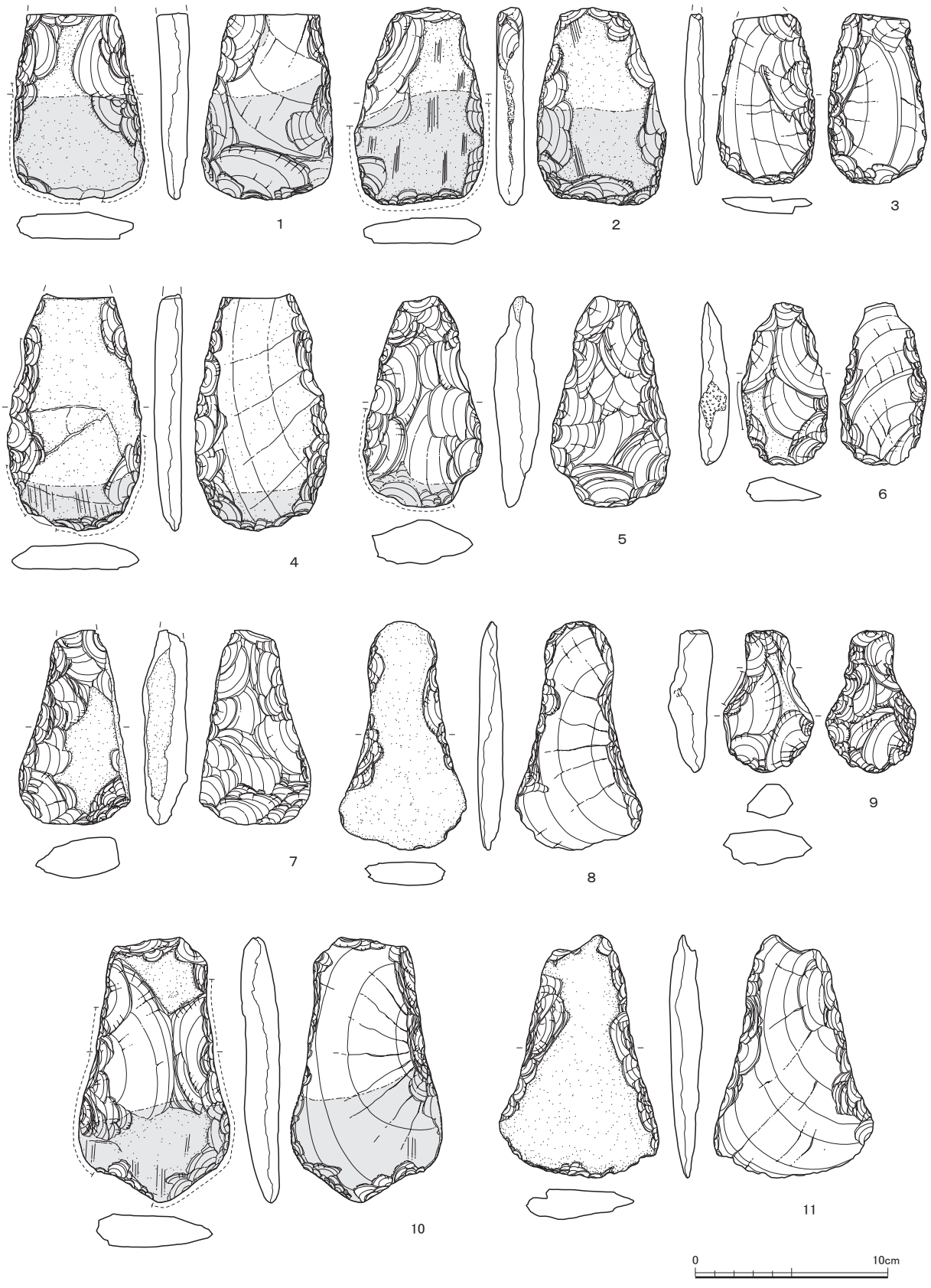
製作　多くの資料において、片面あるいは両面で自然面が観察できることから、円礫の表皮を打ち剥



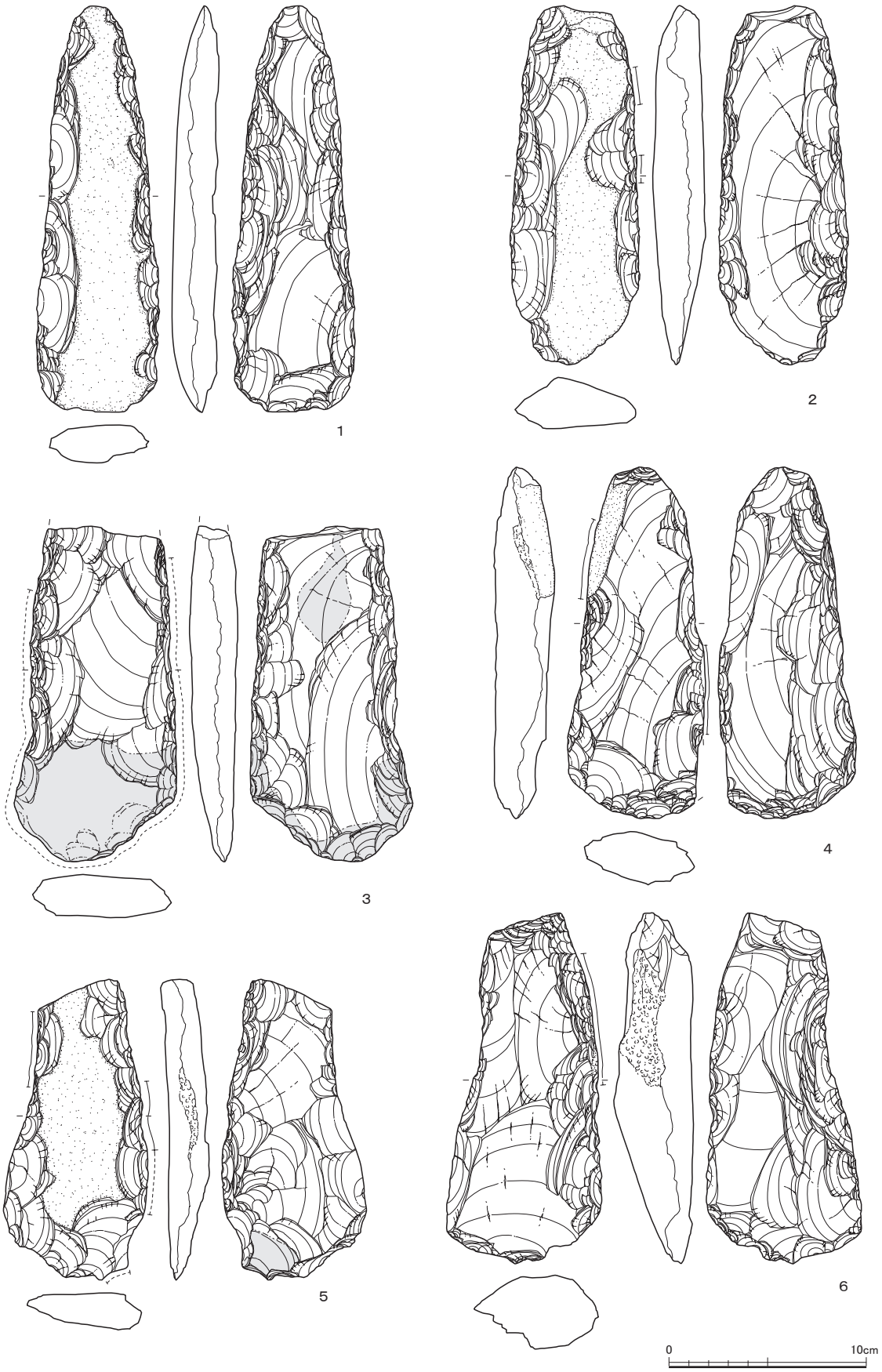
第146図　打製石斧実測図１（縮尺 1/3）



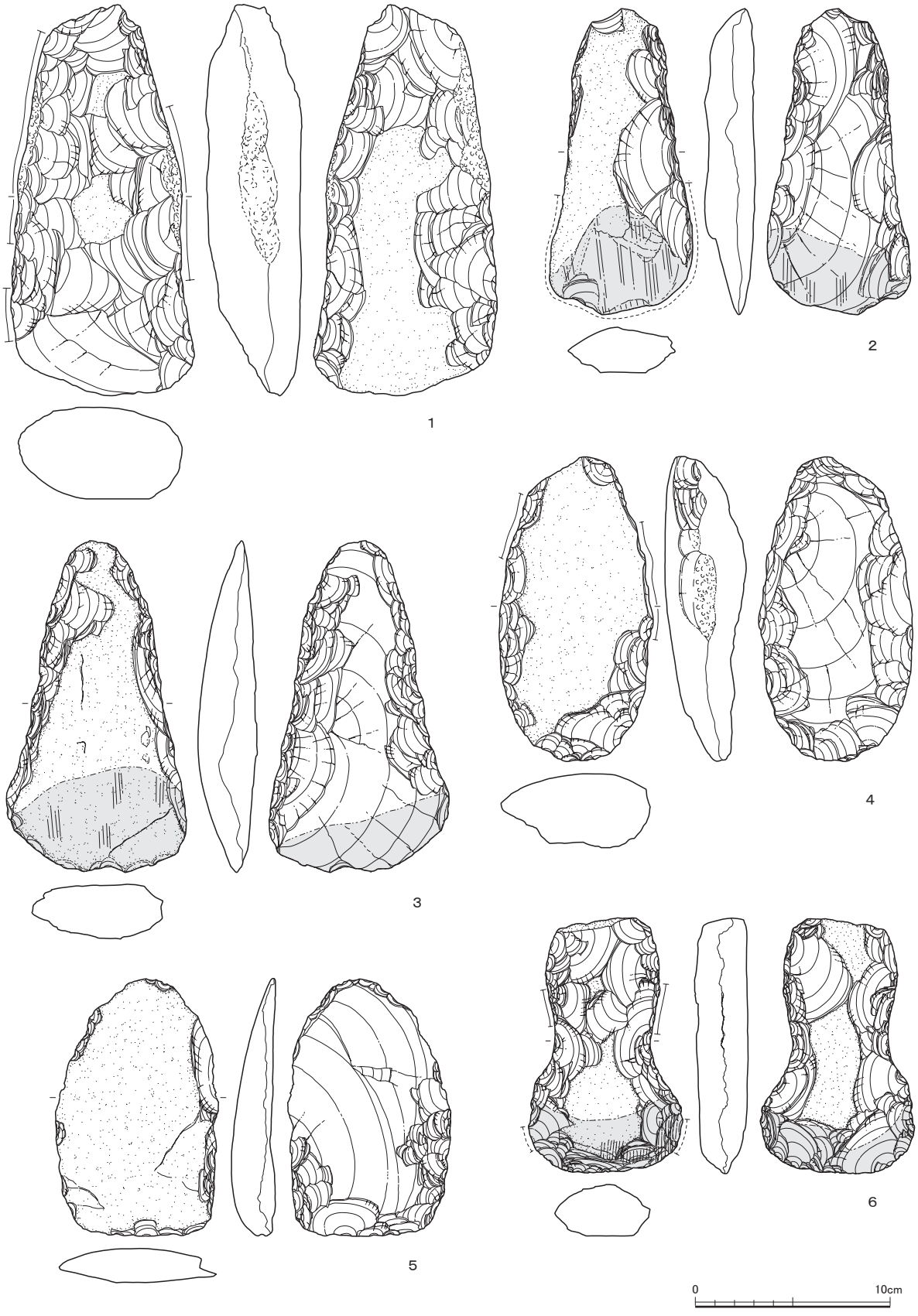
第147図　打製石斧実測図２（縮尺 1/3）



第148図　打製石斧実測図３（縮尺 1/3）



第149図　打製石斧実測図４（縮尺 1/3）



第150図　打製石斧実測図５（縮尺 1/3）

いだ剥片を素材としたものと、偏平な円礫に直接調整剥離を加えて製作したものの両者の存在がわかる。自然面は基部から刃部まで広範囲にわたるものと、刃部に限って残されるものがあり、自然面の湾曲や滑らかさを機能に生かそうとする意図がうかがえる。調整はほとんどが両面加工である。側縁のつぶれや著しい階段状剥離が認められるものについては垂直打撃が行われたと考えられるが、その痕跡が側縁の広範囲におよぶ例は少なく、資料全体として交互剥離による調整加工が主だったとみられる。

使用痕　大半の資料で、刃部を中心に顕著な摩耗が観察できる。縦方向に延びる線状痕を伴う例も多い。また、基部側の中央部に認められる摩耗（第149図３など）は着柄によるものと考えられる。

遺存状況　完形・略完形60点、刃部欠損56点、基部欠損76点、器体中央部のみ23点、縦方向の欠損２点である。

７）磨製石斧（第151図）

分類　全体を研磨によって仕上げた斧形石器で、総数60点を認めた。その他、集計から除外した砕片が16点ある。形状が把握できるものはすべて側辺に明瞭な面を形成したいわゆる定角式石斧である。大きさなどから以下のように分類した。

Ⅰ類：刃部幅５㎝以上のもの（１～16）。35点。側面が平坦に面取りされ、主面との稜線が鋭く立つもの（ａ：１～15）30点、側面の面取りがあまく、主面との境の稜線が鈍いもの（ｂ：16）３点がある。

Ⅱ類：刃部幅３㎝以上～５㎝未満のもの（17～20）。６点。

Ⅲ類：刃部幅３㎝未満のもの（21～23）。６点

石材　蛇紋岩46点、安山岩８点、凝灰岩３点、砂岩２点、ホルンフェルス１点である。

遺存状況　完形・略完形５点、刃部欠損26点、基部欠損22点、その他欠損品・破片７点で、欠損品の割合が極めて高い。完形・略完形とした資料についても、Ⅰａ類の３点は、刃部を剥離で再生したもの（４）と刃部や基部が潰れているもの（７・10）である。後者は楔に転用されたものであろう。

出土状況　形態・サイズの類似する１・２は、SI04の床面直上で並んで出土した（第11図）。

８）切目石錘（第152図１～７）

分類　円礫周縁の対向する位置に擦り切りによる溝を作出した礫石器で、13点を認めた。溝の位置によって以下のように分類した。

Ⅰ類：素材の長軸方向に溝が延びるもの（１～６）。12点。溝が端部にとどまるもの（１～５）と中央付近におよぶもの（６）がある。

Ⅱ類：素材の短軸方向に溝が延びるもの（７）。１点。

石材　凝灰岩５点、砂岩４点、安山岩２点、頁岩２点。

遺存状況　完形７点、欠損品６点。

重量　完形品で最小12.0g、最大90.8g、平均約40.6g。７点中５点は40g 未満で軽量に偏る。

９）打欠石錘（第152 図８～42、153図）

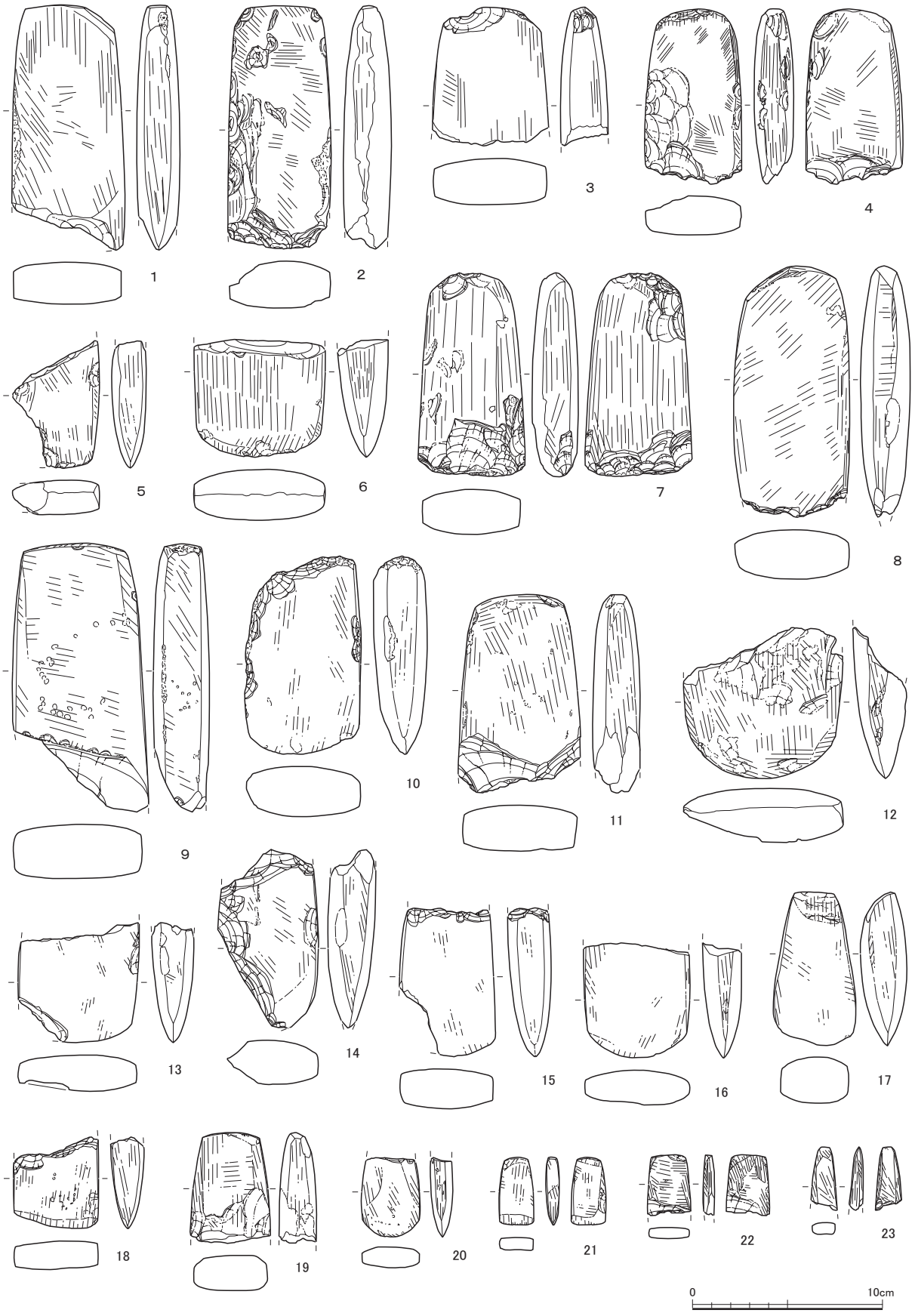
分類　円礫周縁の対向する位置を剥離して凹部を作出した礫石器で、155点を認めた。凹部の位置によって以下のように分類した。

Ⅰ類：素材の長軸方向に凹部をもつもの（第152図８～42、第153図１・３～12・14～20）。145点。

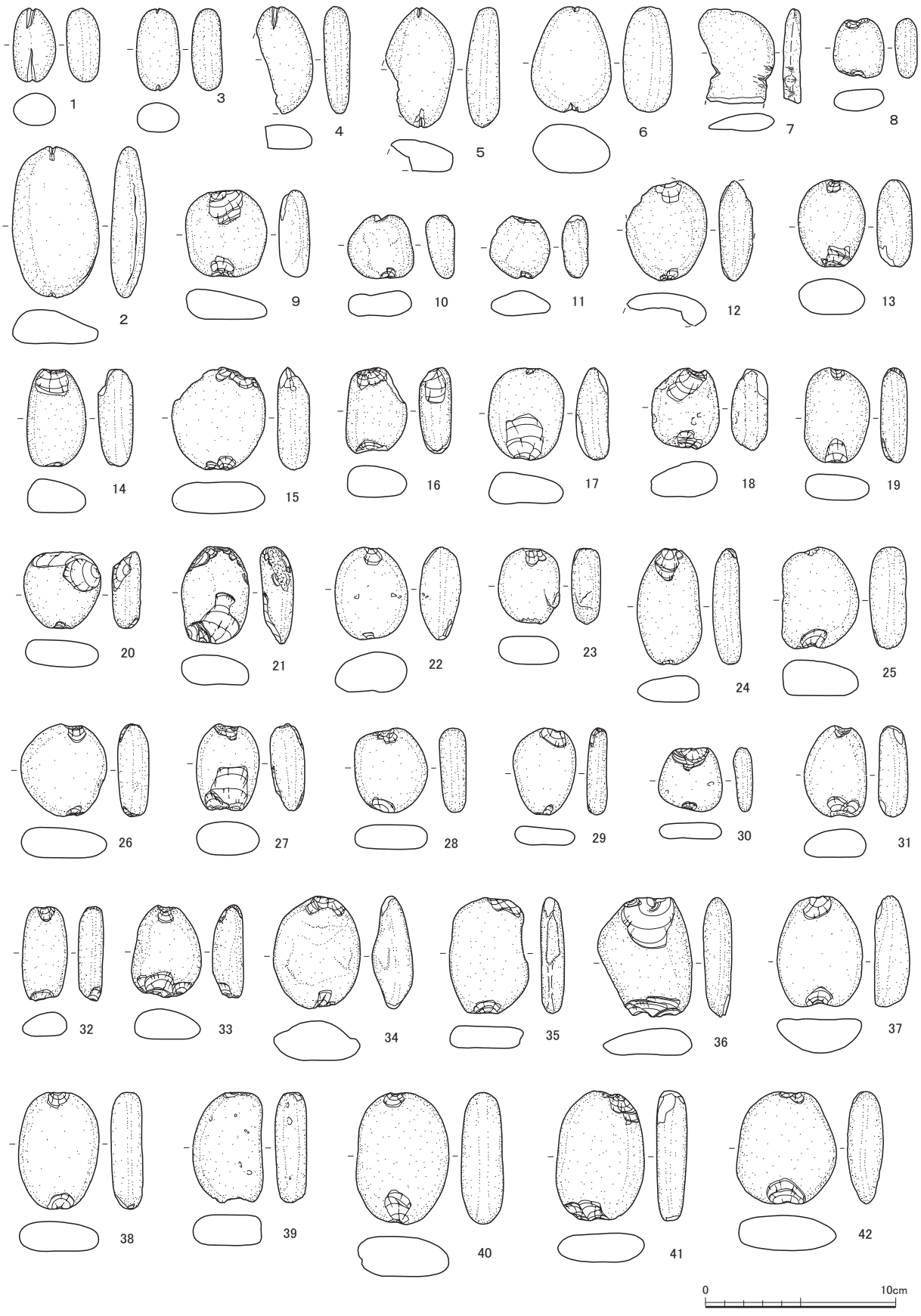
Ⅱ類：素材の短軸方向に凹部をもつもの（第153図21・22）。２点。

Ⅲ類：素材の長軸・短軸の両方向に凹部をもつもの（第153図２・13・23）。８点。

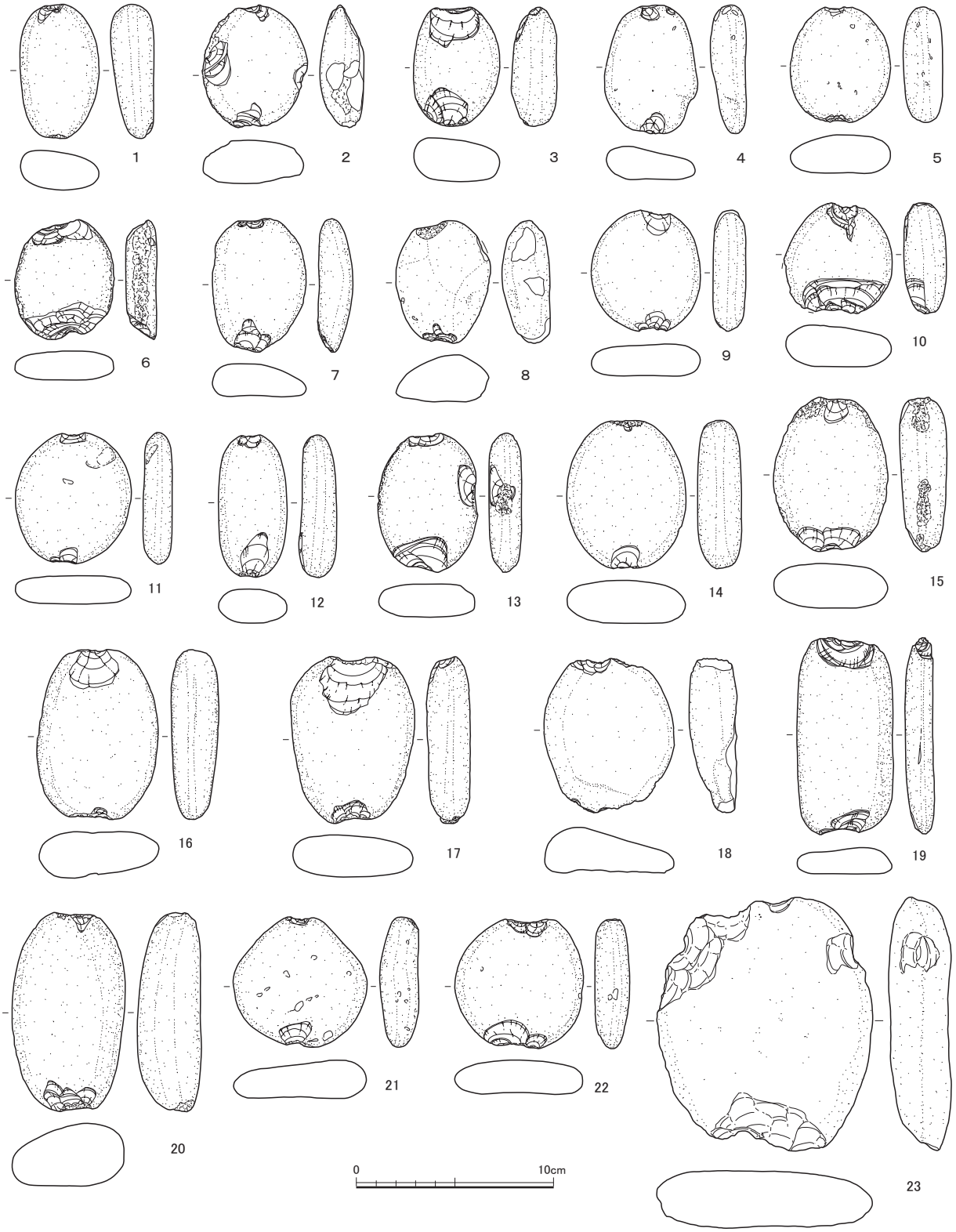
石材　安山岩70点、砂岩36点、デイサイト27点、凝灰岩15点、流紋岩５点、頁岩１点、花崗岩類１点。



第151図　磨製石斧実測図（縮尺 1/3）



第152図　石錘実測図１（縮尺 1/3）



第153図　石錘実測図２（縮尺 1/3）

遺存　完形137点、欠損品18点である。

重量　完形品で最小10.6ｇ、最大514.1ｇ、平均約64.6ｇである。137点中89点が平均値未満で、その他もほとんどは150ｇ未満におさまる。150ｇを超えるのは９点に過ぎない。

10）磨石類（第154～156図）

分類　自然礫あるいは分割礫を素材とし、磨痕や敲打痕、敲打痕の重複による凹みが観察される中形の礫石器。総数289点を認めた。使用痕の組み合わせと位置によって以下のように分類した。なお、敲打痕については、正裏面（主面）に形成されたもの（主面敲打痕）と側面や端部といった周縁に形成されたもの（周縁敲打痕）に区別する。

Ⅰ類：磨痕のみ認められるもの（第154図１～４）。18点。

Ⅱ類：磨痕＋主面敲打痕（第154図５～10）。17点。

Ⅲ類：磨痕＋周縁敲打痕（第154図11～13）。27点。

Ⅳ類：磨痕＋主面・周縁敲打痕（第154図14～25、第155図１～15）。66点。

Ⅴ類：主面敲打痕のみ（第155図16～18）。11点。

Ⅵ類：周縁敲打痕のみ（第155図19～25）。42点。

Ⅶ類：主面・周縁敲打痕（第155図26～28、第156図１～14）。61点。

石材　安山岩類151点、デイサイト54点、砂岩54点、流紋岩13点、花崗岩類７点、凝灰岩７点、珪質岩１点、頁岩１点、石灰岩１点。

使用痕　磨痕については、石材に含まれる鉱物の斑晶が平坦に磨滅し、その範囲が面的に広がることを基準に認定した。ただし、石質や風化・被熱などにより斑晶の磨滅が明瞭でない場合でも、不自然な平坦面を形成する摩耗や、器面の一部が他より明らかに滑らかな範囲は磨痕に含めている。また、磨痕には凹凸のないもの（磨痕Ａ）と敲打面上に形成された凹凸のあるもの（磨痕Ｂ）がある。磨痕Ｂは磨痕Ａに囲まれた主面中央部（第154図４・18、第155図４）や側面（第154図４・13、第155図１・13）で観察され、平坦面を形成する場合が多い。ここで行われる敲打作業は、成形や使用面（磨面）を再生する「目立て」を意図した可能性が高いと考えられ、磨痕Ａの中にも、磨痕Ｂから漸移的に発達したものの存在が想定される。

付着物　赤色顔料の付着が20点で観察された（第154図１・２・13・14・18・22、第155図６）。磨痕を有す資料（Ⅰ～Ⅳ類）に多く、さらに敲打痕を有す例（Ⅱ～Ⅳ類）が大半を占める。

遺存状況　完形品209点、略完形品18点、遺存率50％以上が見込まれる欠損品36点、遺存率50％未満の破片26点である。

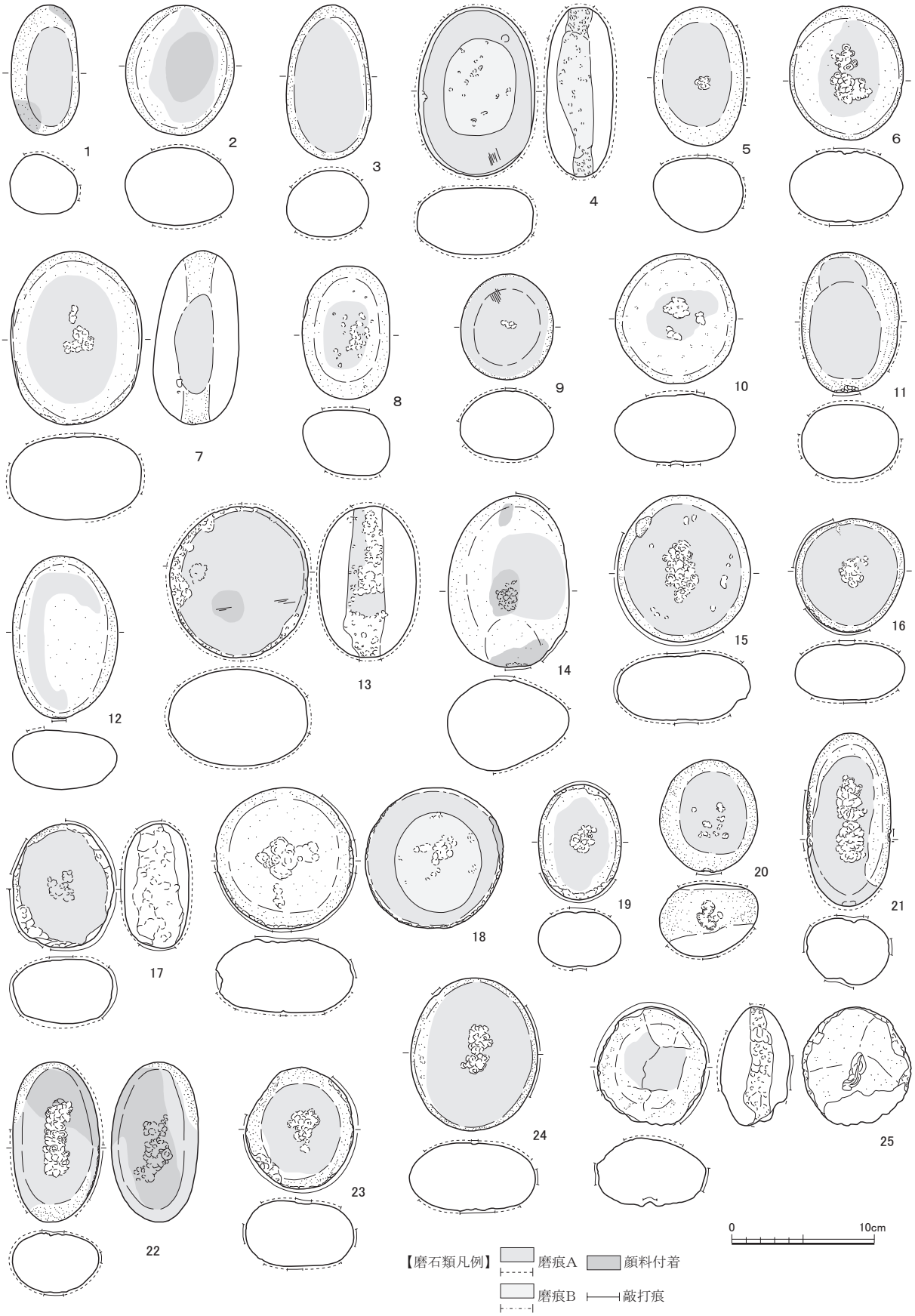
11）石皿類（第157 図、158図１～３）

分類　主に偏平な自然礫を素材とし、正裏面（主面）を中心に磨痕や敲打痕、凹部が観察される大形の礫核石器で、総数78点を認めた。ブロック状に破断した資料が多いため、同一個体を重複して数えている可能性は否定できない。形状および使用痕から以下のように分類した。

Ⅰ類：磨痕を有し、使用面（皿部）や底面を成形したもの（第157図１・３～６、第158図３）。23点。両面を使用面として成形したもの（第157図１）と片面のみ使用面とし、一方を底面として平坦に敲打成形したもの（第157図３・４、第158図３）がある。他のものについても底面や側面で部分的に敲打痕が観察され､ある程度の成形がなされているようである｡第158図３は使用面を特に深く彫り込んでいる。

Ⅱ類：磨痕を有し、自然礫をそのまま使用したと考えられるもの（第157図２・７・８）。23点。使用面が緩く窪むもの（ａ：２）５点、使用面が平坦あるいはやや凸面をなすもの（ｂ：７・８）15点がある。８は破断面に磨痕を形成しており、破損後に転用されたものとみられる。

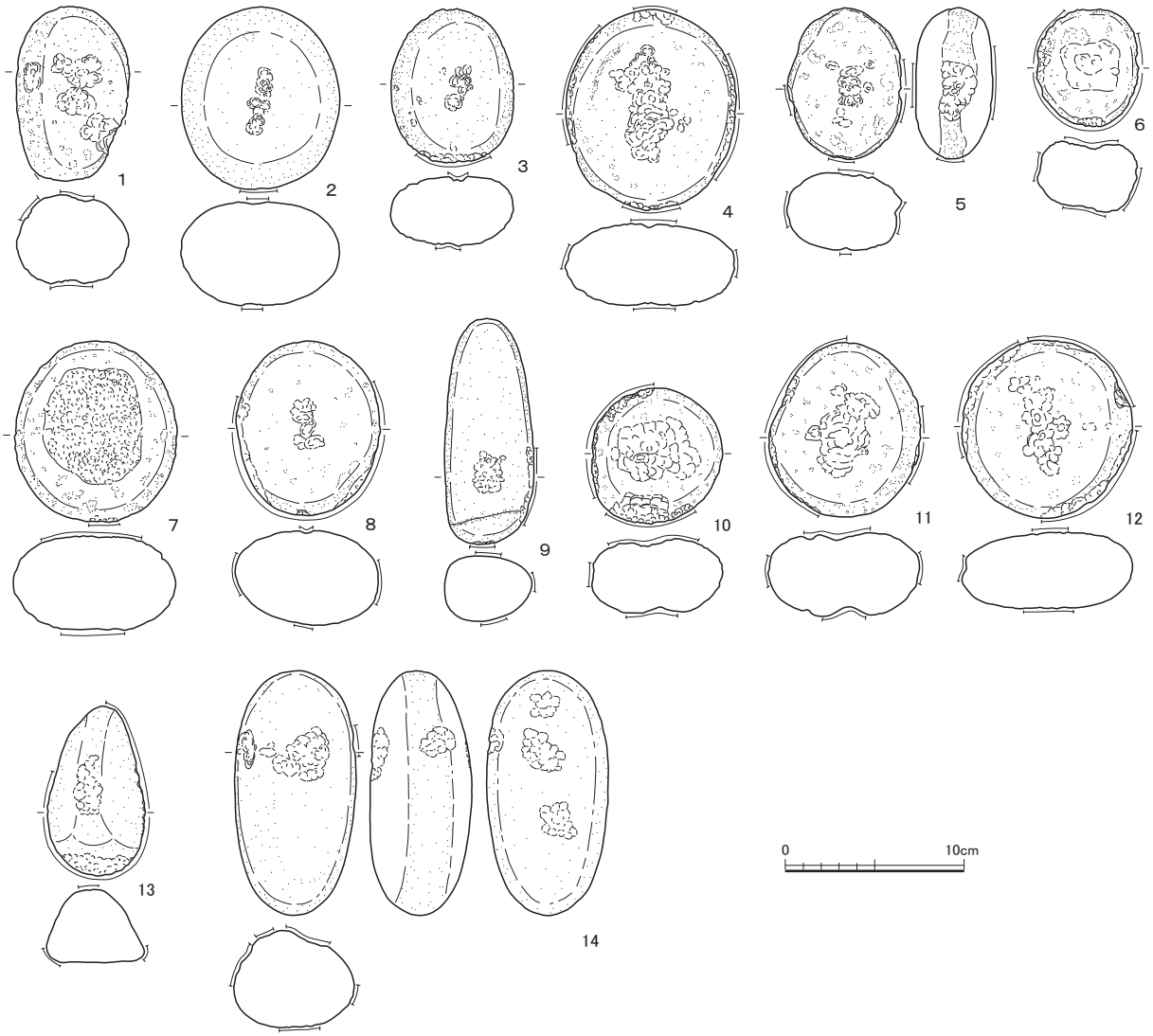
Ⅲ類：敲打痕およびその重複による凹部のみ有すもの（第158図１・２）。３点。球状の円礫を利用し



第154図　磨石類実測図１（縮尺 1/4）



第155図　磨石類実測図２（縮尺 1/4）



第156図　磨石類実測図３（縮尺 1/4）

たもの（ａ：１）２点と板状の亜角礫を利用したもの（ｂ：２）１点がある。Ⅲａ類は使用痕と形状では磨石類Ⅶ類と共通するが、大きさからここに分類した。Ⅲｂ類はいわゆる蜂の巣石である。

石材　安山岩31点、砂岩26点、デイサイト14点、花崗閃緑岩５点、流紋岩２点。類型別ではⅠ類で安山岩の使用率が高く50％を超える。中でも多孔質のものがⅡ類に比べて多い。Ⅱ類では安山岩、砂岩、デイサイトがほぼ同数でそれぞれ 25％前後を占める。Ⅰ類に比べて石材の選択性に乏しいといえる。

遺存状況　完形３点、遺存率50％以上が見込まれる欠損品16点、遺存率50％未満の破片59点である。欠損品の割合が圧倒的に高く、ある程度形になる資料でもブロック状に割れたものが多い。

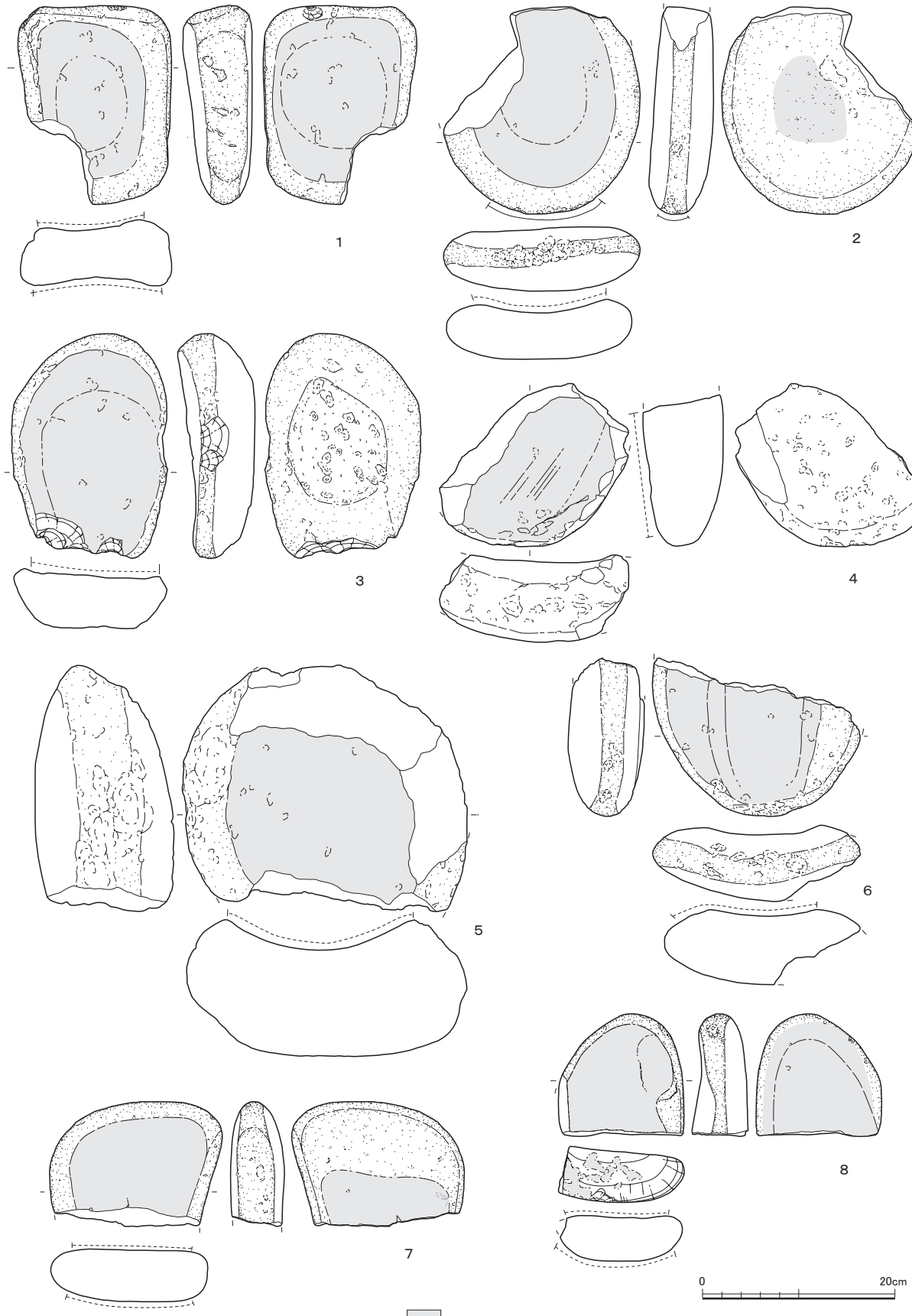
12）砥石（第158図４～12）

分類　自然礫あるいは分割礫の表面に研磨痕が観察される中～大形の礫核石器で、総数23点を認めた。砥面の形状により、以下のように分類した。

Ⅰ類：砥面が平坦もしくは緩やかな曲面をなすもの（５～７・９）。７点。

Ⅱ類：溝状の研磨痕を有すもの（８・10～12）。８点。ほとんどが面的な研磨痕を伴う。

Ⅲ類：帯状の研磨痕を有すもの（13）。２点。



第157図　石皿類実測図（縮尺 1/6）

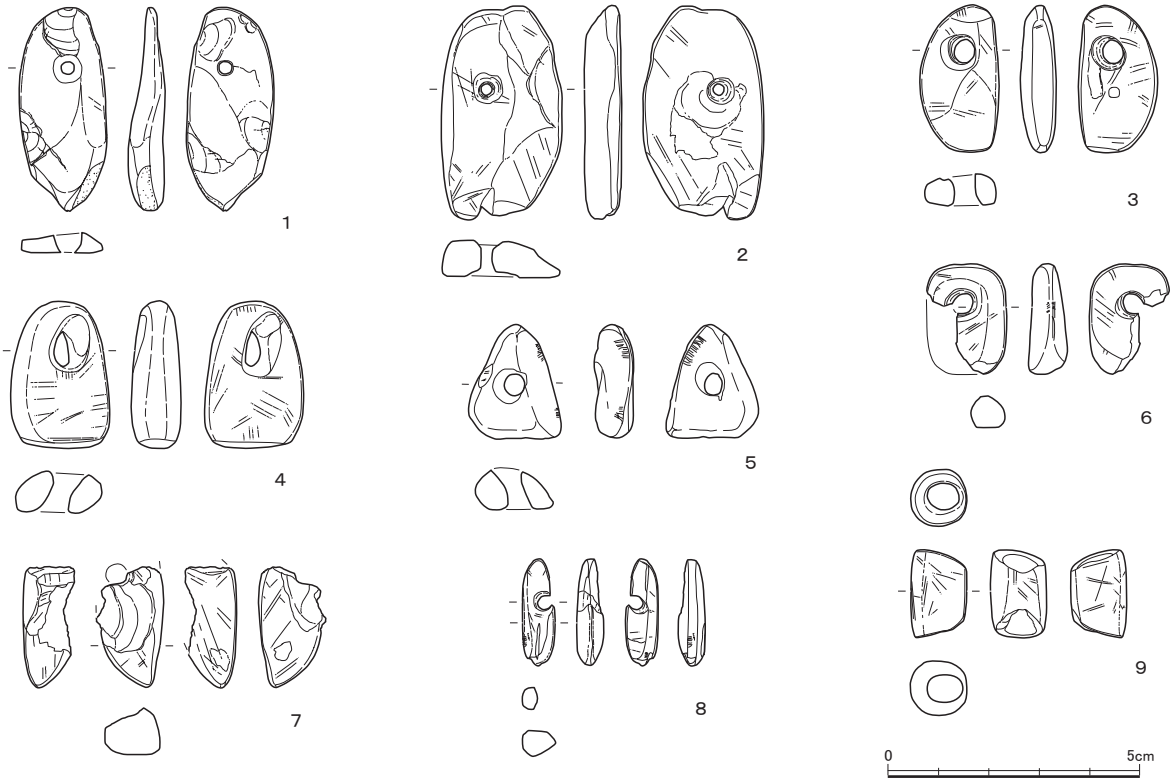


第158図　石皿類・砥石実測図（縮尺 1/6:1～6　1/4:7～12）

石材　砂岩15点、安山岩４点、凝灰岩３点、デイサイト１点。類型別ではⅠ類に安山岩、Ⅱ類に砂岩が優先的に用いられているようである。

使用　Ⅰ類は重量が最小でも３kg以上、最大で10 kg近くを量り、地面に固定して使用する置き砥とみられる。一方、いわゆる有溝砥石のⅡ類は最大でも約600ｇで手持ち砥と考えられる重量である。Ⅰ・Ⅱ類とも破断面を使用する例があり、意図的に打ち割って使用面を再生した可能性も考えられる。

遺存状況　完形６点、遺存率50％以上の欠損品６点、遺存率 50％未満の破片11点である。

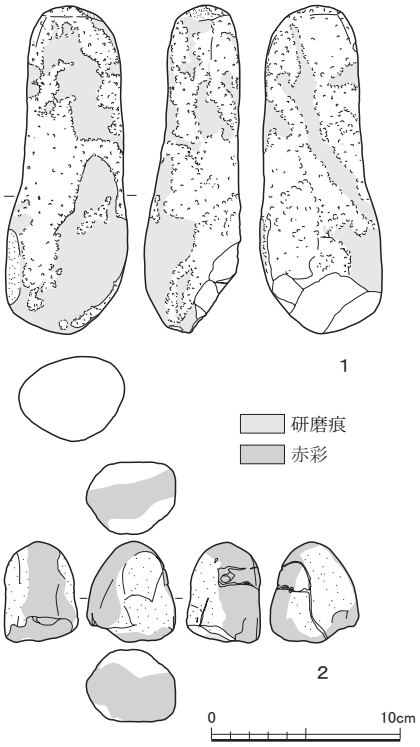


第159図　玉類実測図（縮尺 2/3）

13）玉類（第159図）

本遺跡から出土した玉類は垂飾玉８点（１～８）、管玉１点（９）の計９点である。石材は翡翠が１点（１）、瑪瑙質のものが８点（２～９）である。

１は扁平な形で、上部が薄く下部は厚みがある。側面に自然風化面があることから、転石を打割し整形されたと考えられる。穿孔口は上半部にあり、片面穿孔である。色調は白色部を多く含む半透明で、穿孔口の上部と下部内面に淡い緑色部を含む。２は垂飾玉の中で最大で、扁平である。片側の側面は厚みをもち、もう一方にかけて薄くなる。穿孔は上半部に両面から施される。３は半月状を呈し、表裏は均等に整形されている。穿孔口は上半部にあり、両面穿孔である。４は全体に丸みを帯びた楕円形状を呈し、底部には面をもつ。楕円形状の穿孔口が上半部にあり、両面穿孔である。５は平面が丸みを帯びた三角形状を呈する。穿孔口は中心部にあり、両面穿孔である。側面には、先端が不揃いの幅１㎜に満たない筋が数条入る。６は下の角部の大半を欠損するが、下部に厚みをもつ隅丸長方形と考えられる。穿孔口は上半部にあり、両面穿孔である。５と同様の筋が側面にあり、それに交差して１㎜の筋が直線状に２条入る。これらには研磨で消そうとした痕跡が認められることから、研磨効率を上げるためにつけられた人為的な傷と考えられる。７は上半部を欠損している。上部に厚みをもち、下部が尖る逆三角錐状と考えられる。穿孔痕が欠損部断面でわずかに確認でき、穿孔部が上半部にあったことがうかがえる。８は垂飾玉の中では最小で、上半部の穿孔口付近が剥離欠損している。片面中央部に縦方向の稜をもち、上部は丸みを帯びながらも尖り、下部に厚みをもつ棒状を呈する。穿孔口は稜を避けるように中央やや上部の側辺寄りにあり、両面から側辺方向に傾斜して穿孔されている。９は全体的に丸みを帯びた管玉で、縦断面は台形状を呈する。穿孔軸がずれているため短辺側は薄くなり、両端部は丸のみ状に整形されている。穿孔は直線的であることから、管状錐で穿孔を行った可能性が高い。



第160図　その他の石製品実測図
（縮尺 2/3）

14）その他の石製品（第160図）

第160図１は石棒の類とみられる。敲打と研磨で成形しているが、素材礫の形状は大きく変更していないようである。敲打痕が研磨面を切っており、再加工途上の可能性がある。

同図２は自然礫の周囲に赤彩を施したもの。磨痕などは観察されず、円礫の側面にのみ帯状に赤色顔料が認められる。

以上の他、軽石が15点出土している。３㎝～８㎝角の不整形なもので、一部に磨痕様の平坦面や線状痕が観察される以外に使用や成形の痕跡は認められない。

３　小結

以上のように今回の舟寄遺跡の調査では多種多様な石器・石製品が数多く出土した。これらは縄文後期以降の資料を交える可能性があるものの、大半は縄文中期中葉～後葉に帰属すると考えられ、時間幅を比較的限定できる石器群として貴重な事例である。以下、その特徴について、いくつか所見を述べておきたい。

石器組成・形態について　狭義の石器では石鏃、打製石斧、石錘、磨石類が多い。特に石鏃の出土量は嶺北地域の縄文中期の遺跡の中で際立っている。未成品や剥片・石核も多量に出土していることから当地において盛んに製作活動を行っていたと考えられる。石鏃の形態は凹基無茎鏃がほとんどだが、１点のみ確認した有茎鏃については、中期の所産とすれば東北地方との関係も視野にいれる必要があろう。打製石斧は短冊形ないし撥形で、典型的な分銅形は認められない。平面形態を問わず多くの資料の刃部で土擦れとみられる摩耗と線状痕を観察できる。但し、比較的厚手で片刃状を呈する一群や小形の一群には同様の痕跡がほとんど認められず、機能を異にした可能性がある。石錘は打欠石錘が切目石錘の出土量を大きく上回る。嶺北地域では中期後葉～後期初頭にかけて切目石錘が盛行することから、その過渡的な様相を示すといえよう。磨石類には赤色顔料の付着するものが認められる。一般的に堅果類の加工具とみなされる同器種が、顔料の製作にも用いられたことがうかがえ、石器組成の背景を考察する際には注意が必要である。

石鏃石材について　舟寄遺跡の石器石材は、全体では安山岩やデイサイトといった火山岩が多数を占め、九頭竜川流域の地質環境を反映した構成となっている(1)。しかし、小形剥片石器に限るとチャートの利用が目立ち、周辺の地質環境からみると特異な様相を呈する。中でも石鏃および石鏃未成品では８割がチャート製であり、舟寄遺跡の北に隣接する舟寄福島通遺跡(2)の縄文晩期を主体とする石鏃の９割がガラス質安山岩製であることと対照的である。九頭竜川流域では小形剥片石器にガラス質安山岩を多用する遺跡が多いが、多くは晩期主体の遺跡であることに注意すべきであろう。同じ流域にあっても時期によって石材利用の在り方が異なっていた可能性がある。例えば、九頭竜川中流域で中期前葉を主体とする勝山市古宮遺跡(3)では、ガラス質安山岩の産地として知られる法恩寺山麓に立地するにもかかわらず、石鏃には主としてチャートを用いている。また、丹生山地に目を転じると、天王川流域で舟寄遺跡と主体時期を同じくする越前町栃川遺跡(4)ではチャートを石鏃に多用するが、その上流域

第３表　遺構別石器数量一覧表

	石鏃	石鏃未成品	石錐	石匙	スクレイパー類	異形石器	打製石斧	磨製石斧	切目石錘	打欠石錘	磨石類	石皿類	砥石	玉類	石棒類等	軽石
SI01							1				2		1			
SI02	2									1	1					
SI03	2						1									1
SI04	6	2		1			3	5		4	9	2				
SI05	2	1					1		1		4	1				
SI06	2		1			1	2			2	2	2				
SI07	2			1			5	4		7	7	1				
SI08		2					3	1		1	5	3	1			
SI09	5	2					1	1	1	2	5	2		1		
SI10	1	3			1	1	3		1	1	1	1				
SI11								2		1	5	2				
SI12										1						
SI14	2	1					2			2	6	1				
SI15		5			3		3				11	1	1			
SI16		1									1	4				
SI17	2				1		5	1		3	4		1			
SI18	2	1					4	3			5	4	2			
SI19	6	3				1	5	2		2	3	6	4	1		
SI20	3	6	2		1	1	2	1		3	5		2			
SB02											1					
SB04			1													
SB05								1				1				
SB06			1								2					
SB07	1	1				1	2									
SB08							1			1	3					
SB09											1	1				
SB10											2					
SB11							1									
焼土土坑2	1															
SK02							1									
SK08											1					
SK09							1									
SK11	1															
SK17					1											
SK22	1						3			1						
SK23	1						2			1	1					
SK24	1				1					1						
SK25									1							
SK30	1															
SK32										1						
SK34											1					
SK35		1								1						
SK36						1	1			2	3		1			
SK38									1	1	1					
SK39	1									1						
SK40	1															
SK41	1			1												
SK42				1	1											
SK46							1									
SK47										1						
SK49											1					
SK51												1				
SK55							1				3	1				
SK61	1															
SK63											1		1			
SK66	1									2						
SK67	1	1			2						2					
SK68		1														
SK69							2	1				1	1			
SK70	1											1				
SK73	2		1													
SK74		1	1				3			2			1			
SK84	2	2														
SK85										1						
SK84･85		1														
SK88		1														
SK89		1														
SK45	1															

	石鏃	石鏃未成品	石錐	石匙	スクレイパー類	異形石器	打製石斧	磨製石斧	切目石錘	打欠石錘	磨石類	石皿類	砥石	玉類	石棒類等	軽石
SP01																1
SP11										1						
SP18												1				
SP46												1				
SP70									1							
SP92										1						
SP94							1									
SP113												1				
SP136							1									
SP142												1				
SP146							1									
SP155	1															
SP169							1					1				
SP170	1	1														
SP173												1				
SP186	1															
SP210												1				
SP220						1										
SP230							1					1				
SP240												1				
SP252												1				
SP253																1
SP259	1															
SP263	1															
SP276	1							1								
SP283							1									
SP303		1														
SP324												1				
SP327												1				
SP329							1					1				
SP336	1															
SP337													1			
SP339								1								
SP376								1		1						
SP377	1						2									
SP395							1									
SP418												1				
SP435												1				
SP442												1				
SP444	1															
SP446												1				
SP450												1				
SP451												1				
SP461												1				
SP508							1									
SP511	1	1														
SP540					1											
SP561												1				
SP583	1															
SP586			1													
SP587				1												
SP590												1				
SP593												1				
SP597		1							1	1						
SP612												1				
SP632	1															
SP638												1				
SP650												1				
SP691										1						
落ち込み	1				1		1			3		1				1
SQ1	1											1				
SQ2	3		1						1			3				
SQ3												1				
SQ5												2				
SQ6		1							1	1	4	2	1	1		
その他遺構	1						1							7	2	
包含層	167	106	5	5	21	9	148	32	5	98	164	31	5	9	2	11
計	241	148	14	10	34	15	221	60	13	155	289	78	23			15

※遺構は各器種の出土があるもののみ記載。
※剥片類（二次加工・微細剥離を有するもの含む）や石核の記載は省いた。

第４表　石器観察表

挿図番号	器種	遺構地区	層位	分類	遺存状態	石材	法量（cm・g）				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
第139図1	石鏃	SK73		Ⅰａ類	完形	流紋岩	2.1	1.9	0.4	1.0	
第139図2	石鏃	B9	Ⅴ層	Ⅰａ類	片脚端欠	チャート	2.4	(1.6)	0.4	(1.1)	
第139図3	石鏃	B3	Ⅴ層	Ⅰａ類	完形	チャート	2.4	1.5	0.5	0.9	素材の主剥離面残す。
第139図4	石鏃	SK24		Ⅰａ類	先端・片脚端欠	チャート	(2.2)	(1.7)	0.5	(1.0)	
第139図5	石鏃	SK84		Ⅰａ類	両脚欠	チャート	(2.1)	(1.2)	0.5	(0.9)	
第139図6	石鏃	SI04	下層	Ⅰａ類	片脚欠	チャート	(2.7)	(2.0)	0.6	(2.0)	
第139図7	石鏃	SI07	上層	Ⅰａ類	完形	チャート	1.9	1.2	0.3	0.6	素材の主剥離面・背面残す。
第139図8	石鏃	SI19	下層	Ⅰａ類	先端欠	チャート	(2.1)	1.5	0.6	(1.5)	
第139図9	石鏃	SI19	下層	Ⅰａ類	片脚端欠	チャート	(2.4)	(1.6)	0.5	(1.2)	
第139図10	石鏃	SI17	上層	Ⅰａ類	完形	チャート	2.7	1.9	0.7	1.9	形状ややいびつ。
第139図11	石鏃	B7	Ⅴ層	Ⅰａ類	完形	安山岩	3.4	2.3	0.7	3.2	
第139図12	石鏃	D3	Ⅳ・Ⅴ層	Ⅰａ類	完形	チャート	3.5	1.7	0.4	1.7	素材の主剥離面・背面残す。
第139図13	石鏃	SI10	中・下層	Ⅰａ類	完形	凝灰岩	4.3	2.0	0.5	3.1	
第139図14	石鏃	SI19	上層	Ⅰａ類	先端・片脚欠	チャート	(4.2)	(2.1)	0.8	(4.9)	
第139図15	石鏃	SI03		Ⅰａ類	完形	チャート	2.2	2.0	0.8	2.4	形状ややいびつ。厚手。
第139図16	石鏃	SK30		Ⅰａ類	完形	チャート	2.1	1.4	0.5	1.1	
第139図17	石鏃	SI04	上層	Ⅰａ類	完形	チャート	2.0	1.6	0.5	1.2	先端の整形あまい。
第139図18	石鏃	SK66		Ⅰａ類	完形	チャート	1.8	1.6	0.6	1.4	先端の整形あまい。
第139図19	石鏃	SI09	上層	Ⅰａ類	片脚端欠	チャート	(1.7)	(1.8)	0.5	(1.1)	素材の主剥離面・背面残す。
第139図20	石鏃	A6	Ⅴ層	Ⅰａ類	完形	チャート	2.0	1.8	0.4	1.1	
第139図21	石鏃	SP377		Ⅰｂ類	片脚端欠	チャート	(2.6)	(1.8)	0.5	(1.4)	
第139図22	石鏃	SI14		Ⅰｂ類	完形	流紋岩	2.1	1.8	0.5	1.2	素材の主剥離面残す。
第139図23	石鏃	SK11		Ⅰｂ類	先端欠	ガラス質安山岩	(1.8)	1.7	0.4	(1)	下呂石か。
第139図24	石鏃	A13	Ⅴ層	Ⅰｂ類	完形	チャート	(2.0)	1.4	0.4	(1.4)	
第139図25	石鏃	SI06	中層	Ⅰｂ類	完形	チャート	1.7	1.4	0.4	0.7	
第139図26	石鏃	SI19	上層	Ⅰｂ類	先端欠	ガラス質安山岩	(1.8)	1.4	(0.4)	(0.8)	下呂石か。
第139図27	石鏃	SI06	中層	Ⅰｂ類	先端欠	チャート	(1.9)	1.5	0.4	(0.8)	素材の主剥離面・背面（自然面）残す。
第139図28	石鏃	B5	Ⅳ層	Ⅰｂ類	完形	チャート	2.1	1.5	0.4	0.9	
第139図29	石鏃	C6	Ⅴ層	Ⅰｂ類	完形	流紋岩	2.2	1.9	0.4	1.2	
第139図30	石鏃	C10	Ⅳ層	Ⅰｂ類	完形	チャート	1.5	1.5	0.4	0.8	素材の主剥離面・背面残す。
第139図31	石鏃	SP263		Ⅰｂ類	片脚端欠	チャート	2.4	(1.9)	0.5	(2.1)	
第139図32	石鏃	SI19・SK84・85		Ⅰｂ類	先端・片脚欠	チャート	(2.3)	(1.8)	0.5	(1.9)	
第139図33	石鏃	SB07-P6		Ⅰｂ類	完形	黒曜石	2.7	1.5	0.4	0.9	素材の主剥離面残す。
第139図34	石鏃	SI07	上層	Ⅰｂ類	片脚端欠	流紋岩	2.4	(1.4)	0.5	(1.1)	
第139図35	石鏃	SK73		Ⅰｂ類	完形	チャート	3.0	1.6	0.5	1.9	
第139図36	石鏃	SI05	上層	Ⅰｂ類	片脚欠	チャート	(2.5)	(1.7)	0.5	(1.7)	
第139図37	石鏃	SP186		Ⅰｂ類	先端欠	チャート	(2.3)	1.6	0.5	(1.7)	素材の主剥離面残す。
第139図38	石鏃	SI18	上層	Ⅰｂ類	先端欠	チャート	(1.9)	1.7	0.4	(1.3)	素材の主剥離面残す。
第139図39	石鏃	SI20	上層	Ⅰｂ類	先端・片脚欠	チャート	(1.8)	(1.5)	(0.3)	(0.6)	
第139図40	石鏃	SI18	下層	Ⅰｂ類	先端欠	流紋岩	(1.9)	1.3	0.5	(1.1)	素材の主剥離面残す。
第140図1	石鏃	SI02		Ⅰｂ類	完形	チャート	4.4	1.7	0.4	2.4	
第140図2	石鏃	SK23		Ⅰｂ類	完形	ガラス質安山岩	3.7	1.6	0.6	3.0	
第140図3	石鏃	D8		Ⅰｂ類	先端・側縁欠	流紋岩	(3.2)	1.8	0.5	(2.1)	素材の主剥離面残す。
第140図4	石鏃	焼土土坑2		Ⅰｂ類	片側欠	流紋岩	(3.4)	(1.3)	(0.6)	(2.2)	
第140図5	石鏃	B6	Ⅴ層	Ⅰｂ類	完形	流紋岩	(2.5)	(1.7)	0.4	(1.3)	先端再生品か。
第140図6	石鏃	D10	Ⅴ層	Ⅰｂ類	完形	流紋岩	6.8	2.2	0.5	5.4	
第140図7	石鏃	A13	Ⅴ層	Ⅰｂ類	先端欠	チャート	(3.4)	2.1	0.9	(4.8)	厚手。
第140図8	石鏃	SK70		Ⅰｂ類	先端欠	流紋岩	(2.8)	2.0	(0.6)	(2.9)	先端部片面に樋状剥離（衝撃剥離痕）。
第140図9	石鏃	SP155		Ⅰｂ類	先端・両脚(端)欠	チャート	(3.2)	(1.9)	(0.7)	(2.5)	基部抉り比較的深い。
第140図10	石鏃	B7	Ⅳ層	Ⅰｂ類	先端欠	黒曜石	(2.3)	1.8	(0.4)	(1.4)	
第140図11	石鏃	SI20	上層	Ⅰｂ類	先端欠	流紋岩	(3.0)	2.4	0.5	4.1	
第140図12	石鏃	SK67		Ⅰｂ類	先端欠	チャート	(2.1)	1.9	0.4	(1.3)	先端部両面に樋状剥離（衝撃剥離痕）。
第140図13	石鏃	SI20	上層	Ⅰｂ類	先端欠	流紋岩	(2.0)	1.6	0.4	(1.0)	基部抉り比較的深い。
第140図14	石鏃	SK41		Ⅰｂ類	先端欠	チャート	(2.2)	1.7	0.6	(2.0)	
第140図15	石鏃	SI04		Ⅰｂ類	先端欠	チャート	(2.4)	1.5	0.5	(1.6)	
第140図16	石鏃	SI02		Ⅰｂ類	先端・両脚端欠	チャート	(2.2)	1.7	0.5	(1.6)	
第140図17	石鏃	落ち込み	上層	Ⅰｂ類	先端・両脚欠	ガラス質安山岩	(3.0)	(1.6)	(0.5)	(2.2)	
第140図18	石鏃	C3	Ⅴ層	Ⅰｂ類	完形	チャート	2.6	1.2	0.3	0.9	素材の主剥離面・背面残す。
第140図19	石鏃	SP632		Ⅰｃ類	先端欠	チャート	(2.1)	1.7	(0.4)	(1.0)	基部抉り比較的深い。
第140図20	石鏃	B5	Ⅳ層	Ⅰｃ類	先端欠	チャート	(2.0)	1.8	0.4	(1.0)	
第140図21	石鏃	D6	Ⅴ層	Ⅰｃ類	完形	チャート	2.0	1.5	0.5	1.1	
第140図22	石鏃	B8	Ⅴ層	Ⅰｃ類	完形	チャート	2.8	1.8	0.3	1.3	素材の主剥離面残す。
第140図23	石鏃	SP444		Ⅰｃ類	完形	チャート	2.0	1.6	0.4	1.2	
第140図24	石鏃	SK40		Ⅰｃ類	先端欠	流紋岩	(2.4)	1.6	0.4	(1.4)	
第140図25	石鏃	C8	Ⅳ層	Ⅰｃ類	先端・片脚端欠	流紋岩	(2.4)	(1.6)	0.5	(1.0)	
第140図26	石鏃	SK45		Ⅰｃ類	完形	チャート	2.3	1.7	0.5	1.4	
第140図27	石鏃	A5	Ⅴ層	Ⅰｃ類	完形	チャート	2.0	1.5	0.4	1.1	
第140図28	石鏃	SK39		Ⅰｃ類	完形	チャート	1.9	1.5	0.4	0.9	
第140図29	石鏃	SI04	下層	Ⅰｃ類	完形	チャート	2.1	1.3	0.4	1.1	
第140図30	石鏃	SI17	上層	Ⅰｃ類	完形	チャート	1.9	1.6	0.4	1.0	
第140図31	石鏃	SI14		Ⅰｃ類	両脚端欠	チャート	(2.1)	(1.2)	0.4	(0.8)	先端ペン先状。
第140図32	石鏃	A6	Ⅳ層	Ⅰｃ類	完形	チャート	2.4	1.6	0.4	1.1	先端ペン先状。
第140図33	石鏃	SI04	下層	Ⅰｃ類	先端・片脚端欠	チャート	(2.3)	1.7	0.4	(1.5)	先端ペン先状。
第140図34	石鏃	SP170		Ⅰｃ類	片脚端欠	チャート	(1.7)	(1.7)	0.5	(0.9)	
第140図35	石鏃	B6	Ⅳ層	Ⅰｄ類	先端欠	チャート	(4.8)	2.4	0.6	(4.1)	
第141図1	石鏃	SP259		Ⅰｄ類	先端欠	チャート	(1.9)	1.7	0.5	(0.9)	
第141図2	石鏃	SP276		Ⅰｄ類	両脚端欠	チャート	(2.2)	(1.5)	(0.5)	(1.2)	調整粗い。形状ややいびつ。
第141図3	石鏃	A6	Ⅳ層	Ⅰｄ類	完形	ガラス質安山岩	2.7	2.2	0.8	2.5	厚手。
第141図4	石鏃	SQ2	下層	Ⅰｄ類	完形	チャート	2.3	1.8	0.7	1.9	調整粗い。厚手。形状ややいびつ。
第141図5	石鏃	C11	Ⅳ層	Ⅰｅ類	完形	チャート	1.7	1.3	0.4	0.6	
第141図6	石鏃	C6	Ⅳ層	Ⅰｅ類	完形	チャート	1.7	1.4	0.4	0.7	
第141図7	石鏃	SI19	下層	Ⅰｅ類	片脚端欠	流紋岩	(1.6)	(1.5)	(0.4)	(0.8)	
第141図8	石鏃	A15・16	Ⅳ・Ⅴ層	Ⅰｅ類	完形	流紋岩	2.6	1.9	0.5	1.6	
第141図9	石鏃	A13	Ⅴ層	Ⅰｅ類	完形	チャート	4.4	2.2	0.6	3.8	
第141図10	石鏃	C8	Ⅳ層	Ⅰｅ類	片脚端欠	黒曜石	(2.2)	(1.6)	0.3	(0.7)	素材の主剥離面・背面残す。
第141図11	石鏃	B3	Ⅴ層	Ⅰｅ類	完形	チャート	2.4	1.4	0.4	1.2	
第141図12	石鏃	C7	Ⅴ層	Ⅰｅ類	完形	チャート	2.8	1.8	0.4	1.5	

挿図番号	器種	遺構地区	層位	分類	遺存状態	石材	法量（cm・g）				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
第141図13	石鏃	A9	Ⅳ層	Ⅰe類	完形	チャート	3.2	1.4	0.4	1.6	
第141図14	石鏃	SP336		Ⅰe類	完形	チャート	1.8	1.5	0.4	0.9	
第141図15	石鏃	A14	Ⅴ層	Ⅰe類	完形	チャート	3.9	1.8	0.4	2.2	
第141図16	石鏃	C1	Ⅳ層	Ⅰe類	片脚欠	チャート	(2.6)	(1.4)	0.3	(1)	
第141図17	石鏃	A5	Ⅴ層	Ⅰf類	完形	チャート	3.7	1.6	0.5	2.2	
第141図18	石鏃	A13	Ⅳ層	Ⅰf類	先端欠	チャート	(2.8)	1.6	0.4	(1.7)	素材の主剥離面（節理？）残す。
第141図19	石鏃	SQ2	下層	Ⅱb類	完形	チャート	2.6	1.5	0.4	1.5	
第141図20	石鏃	SI09	下層	Ⅱa類	完形	チャート	3.1	2.1	0.8	3.8	調整粗い。厚手。形状ややいびつ。
第141図21	石鏃	B10	Ⅴ層	Ⅲa類	先端欠	チャート	(2.9)	1.6	0.5	(1.9)	
第141図22	石鏃	SI02		Ⅲb類	完形	チャート	2.8	2.1	0.7	(3.5)	素材の主剥離面残す。厚手。
第141図23	石鏃	C8	Ⅴ層	Ⅳb類	完形	チャート	2.9	2.1	0.9	4.7	厚手。
第141図24	石鏃	SI04		Ⅴ類	茎部端欠	チャート	(2.7)	1.3	0.4	(1.5)	素材の主剥離面残す。
第141図25	石鏃未成品	C12	Ⅳ層	1類	片脚端欠	チャート	(3.3)	(2.2)	0.9	(4.7)	
第141図26	石鏃未成品	SI15	下層	1類	両脚欠	チャート	(3.2)	(2.2)	0.8	(4.4)	
第141図27	石鏃未成品	SP511		1類	完形	チャート	3.3	2.2	0.8	3.5	
第141図28	石鏃未成品	D12	Ⅴ層	1類	片脚欠	チャート	(2.6)	(1.7)	0.4	(1.4)	
第141図29	石鏃未成品	SB07-P2		1類	先端欠	チャート	(3.1)	1.9	0.8	(3.2)	
第141図30	石鏃未成品	SI18	中・下層	1類	先端欠	チャート	(3.1)	2.5	0.7	(4.6)	素材の主剥離面残す。
第141図31	石鏃未成品	A6	Ⅴ層	1類	完形	チャート	3.1	2.1	0.7	2.5	ほぼ周縁調整のみ。片側縁は急斜度調整。
第141図32	石鏃未成品	SI20		1類	先端欠	チャート	(1.9)	1.8	0.4	(1.3)	素材の主剥離面・背面残す。
第141図33	石鏃未成品	SI15	下層	1類	完形	黒曜石	1.7	2.0	0.5	1.2	
第142図1	石鏃未成品	SK68		1類	完形	チャート	2.2	1.5	0.3	0.9	周縁調整のみ。基部は節理割れ。
第142図2	石鏃未成品	SI08	中層	1類	先端欠	チャート	(2.5)	1.6	0.4	(1.5)	素材の主剥離面残す。
第142図3	石鏃未成品	SP597		1類	完形	チャート	2.7	1.2	0.5	1.4	素材の主剥離面・背面残す。
第142図4	石鏃未成品	C6	Ⅴ層	1類	完形	黒曜石	1.7	1.8	0.5	1.1	素材の主剥離面・背面（自然面）残す。
第142図5	石鏃未成品	A7	Ⅳ層	1類	完形	チャート	2.2	1.8	0.7	2.4	素材の主剥離面・背面残す。
第142図6	石鏃未成品	SK84		1類	側縁一部欠	チャート	3.1	(2.2)	0.8	(4.3)	
第142図7	石鏃未成品	SI15	下層	1類	完形	珪質頁岩	2.9	2.3	0.8	5	素材の主剥離面残す。
第142図8	石鏃未成品	SK67		1類	完形	チャート	2.6	1.5	0.9	2.7	素材の主剥離面・背面残す。
第142図9	石鏃未成品	C7		1類	完形	チャート	2.5	1.8	0.7	2.3	素材の主剥離面残す。
第142図10	石鏃未成品	SI05	上層	1類	完形	チャート	(2.1)	(1.9)	(0.6)	(2.1)	基部側は二次加工以前の破断面。
第142図11	石鏃未成品	SK89		1類	完形	チャート	2.5	2	0.9	3.4	基部側は破断面を二次加工か。
第142図12	石鏃未成品	SI10	上層	1類	完形	チャート	3.4	2.2	0.9	6	素材の主剥離面・背面残す。
第142図13	石鏃未成品	SI09	上層	1類	先端欠	チャート	(3.3)	2.1	0.8	(4.7)	素材の主剥離面・背面残す。
第142図14	石鏃未成品	SK84		2類	完形	流紋岩	2.4	1.7	0.7	2.4	
第142図15	石鏃未成品	C10	Ⅳ層	2類	完形	チャート	2.6	1.9	0.7	3.5	
第142図16	石鏃未成品	SI19	下層	2類	完形	チャート	2.4	1.9	0.7	2.2	
第142図17	石鏃未成品	SI20	上層	2類	完形	黒曜石	(2.2)	(1.9)	(0.8)	(2)	
第142図18	石鏃未成品	B9	Ⅴ層	2類	完形	チャート	3.1	2.1	0.6	2.8	
第142図19	石鏃未成品	SI20	下層	2類	完形	ガラス質安山岩	3.3	(2.3)	0.9	(7.4)	
第142図20	石鏃未成品	SI04	中・下層	2類	完形	チャート	3.9	2.1	0.9	7.3	片側辺折断加工か。
第142図21	石鏃未成品	A8	Ⅴ層	3類	完形	ガラス質安山岩	4.1	2.6	0.9	8.5	
第142図22	石鏃未成品	C4	Ⅴ層	3類	完形	チャート	3.2	2.4	0.8	5.9	
第142図23	石鏃未成品	C8	Ⅴ層	3類	完形	チャート	3.4	2.6	1.0	8.2	
第142図24	石鏃未成品	A12	Ⅳ・Ⅴ層	3類	完形	チャート	3.8	2.6	1.4	9.3	
第142図25	石鏃未成品	SI10	下層	3類	完形	流紋岩	3.1	2.8	1.3	8.1	
第142図26	石鏃未成品	SI10	下層	3類	先端欠	チャート	(2.8)	(2.8)	(1.1)	(8.2)	木葉形尖頭器か。
第143図1	石鏃未成品	C9	Ⅴ層	3類	基部欠	チャート	(2.5)	(2.9)	(1.2)	(7.2)	木葉形尖頭器か。
第143図2	石鏃未成品	C11・12	Ⅴ層	3類	完形	チャート	5.6	3.5	1.5	29.2	
第143図3	石鏃未成品	SI15	上層	3類	完形	流紋岩	4.1	3.7	1.1	14.2	
第143図4	石鏃未成品	SP170		3類	先端欠	チャート	(3.6)	2.9	1.1	(11.7)	
第143図5	石錐	C5	Ⅴ層	Ⅰ類	完形	チャート	4.2	1.7	1.2	7.5	つまみ部片側辺は節理面。
第143図6	石錐	SI20	上層	Ⅰ類	つまみ一部欠	チャート	1.9	(1.6)	0.4	(1.0)	
第143図7	石錐	SK74		Ⅰ類	完形	黒曜石	2.2	1.3	0.6	1.2	つまみ部の二次加工わずか。
第143図8	石錐	SQ2	下層	Ⅱ類	完形	ガラス質安山岩	4.4	3.4	1.1	13.8	素材剥片の打面（自然面）・背面残す。
第143図9	石錐	A11	Ⅳ層	Ⅱ類	完形	チャート	3.2	(2.3)	0.9	(5.2)	
第143図10	石錐	A5	Ⅴ層	—	錐部のみ	チャート	(3.2)	(1.1)	(0.5)	(1.3)	
第144図1	石匙	B6	Ⅴ層	Ⅰ類	刃部端欠	チャート	3.2	(3.3)	0.8	(6.4)	
第144図2	石匙	SI04	上層	Ⅰ類	完形	チャート	2.4	2.9	0.7	3.7	
第144図3	石匙	D7	Ⅳ層	Ⅰ類	完形	ガラス質安山岩	1.9	2.5	0.6	1.9	
第144図4	石匙	C9	Ⅳ層	Ⅰ類	完形	チャート	1.9	2.1	0.6	1.3	二次加工はつまみ部の抉りのみ。
第144図5	石匙	SK41		Ⅲ類	完形	ガラス質安山岩	3.8	5.2	1.1	14.0	下呂石か。
第144図6	石匙	SP587		Ⅱ類	刃部端欠	ガラス質安山岩	(6.3)	3.2	(1.0)	(25.5)	
第144図7	石匙	SK42		Ⅱ類	完形	ガラス質安山岩	10.8	3.3	1.4	33.7	二上山産サヌカイトか。部分的に摩耗。
第144図8	石匙	A12	Ⅳ層	Ⅲ類	完形	流紋岩	6.5	(4.2)	1.6	(30.6)	
第144図9	スクレイパー類	D11	Ⅳ層	Ⅰa類	完形	ガラス質安山岩	3.6	4.6	1.0	15.0	
第144図10	スクレイパー類	B6	Ⅴ層	Ⅰa類	基部欠	チャート	(4.3)	(2.7)	(1.3)	(10.4)	
第144図11	スクレイパー類	C12	Ⅳ層	Ⅰa類	完形	デイサイト	6.6	3.3	0.7	12.0	
第144図12	スクレイパー類	C4		Ⅰa類	完形	流紋岩	4.3	3.6	1.3	13.8	
第144図13	スクレイパー類	B8	Ⅴ層	Ⅰb類	端部欠	デイサイト	(6.3)	3.2	0.8	(13.8)	
第144図14	スクレイパー類	A14-25	Ⅳ層	Ⅱ類	完形	凝灰岩	6.3	4.1	1.1	37.4	両面中央部に研磨面。転用品か。
第144図15	スクレイパー類	B4-12	Ⅳ層	Ⅱ類	端部欠	デイサイト	(8.1)	(3.8)	0.6	(22.8)	
第144図16	スクレイパー類	A15	Ⅴ層	Ⅱ類	完形	チャート	4.0	1.7	0.7	4.7	
第144図17	スクレイパー類	C9	Ⅴ層	Ⅱ類	完形	ガラス質安山岩	3.8	2.8	0.7	8.0	石鏃未成品か。
第145図1	異形石器	A2	Ⅳ層	Ⅰ類	完形	流紋岩	1.9	1.8	0.4	1.0	
第145図2	異形石器	SP220		Ⅰ類	完形	流紋岩	2.6	1.9	0.5	2.3	
第145図3	異形石器	SI06	中層	Ⅱ類	端部欠	チャート	(2.6)	(3.2)	(0.6)	(3.6)	全面摩耗。
第145図4	異形石器	SK36		Ⅱ類	完形	チャート	2.1	2.5	0.5	1.7	
第145図5	異形石器	SI10	上層	Ⅱ類	完形	ガラス質安山岩	4.0	2.6	0.6	5.1	
第145図6	異形石器	SI20	上層	Ⅱ類	完形	チャート	2.6	2.3	0.8	3.4	
第145図7	異形石器	A5	Ⅴ層	Ⅱ類	完形	珪質頁岩	3.4	2.3	0.9	4.9	
第145図8	異形石器	A15	Ⅳ層	Ⅲ類	欠損	流紋岩	(2.4)	(5.2)	(0.9)	(8.0)	
第145図9	異形石器	C3	Ⅴ層	Ⅲ類	片端欠	ガラス質安山岩	(3.9)	(1.1)	(0.5)	(1.8)	
第145図10	異形石器	B10	Ⅳ層	Ⅲ類	完形	黒曜石	(1.5)	(2.9)	(0.6)	(1.7)	
第145図11	異形石器	C6	Ⅴ層	Ⅳ類	端部欠	ガラス質安山岩	(2.3)	(2.3)	0.4	(1.6)	下呂石か。
第145図12	異形石器	SI19		Ⅳ類	完形	ガラス質安山岩	4.2	2.0	1.0	6.5	
第146図1	打製石斧	SI17	上層	Ⅰa類	基部欠	デイサイト	(13.1)	5.6	2.4	(199.9)	片側辺に折断面。

挿図番号	器種	遺構地区	層位	分類	遺存状態	石材	法量（cm・g）				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
第146図2	打製石斧	C7	Ⅴ層	Ⅰａ類	完形	デイサイト	12.5	4.7	1.9	126.9	刃部摩耗。
第146図3	打製石斧	B9	Ⅴ層	Ⅰａ類	基部欠	デイサイト	(11.4)	(5.7)	(1.8)	(153.8)	刃部摩耗。
第146図4	打製石斧	SI07		Ⅰａ類	略完形	デイサイト	(15.0)	5.6	2.5	(165.2)	
第146図5	打製石斧	SI19		Ⅰａ類	基部欠	デイサイト	(11.1)	(7.0)	(1.9)	(184.8)	背面はほぼ自然面。
第146図6	打製石斧	A11	Ⅳ層	Ⅰａ類	略完形	デイサイト	(11.2)	4.3	1.7	(73.3)	
第146図7	打製石斧	SB08-P3		Ⅰａ類	完形	デイサイト	12.3	4.9	1.4	77.3	
第146図8	打製石斧	SK23		Ⅰｂ類	完形	安山岩	11.4	5.8	1.8	131.6	
第146図9	打製石斧	S117		Ⅰｂ類	完形	デイサイト	12.7	5.0	2.1	156	
第146図10	打製石斧	D3	Ⅴ層	Ⅰｂ類	完形	デイサイト	11.9	6.5	2.6	196.2	
第146図11	打製石斧	D8	Ⅳ層	Ⅰｂ類	完形	砂岩	11.6	5.8	2.5	175.7	刃部摩耗。
第146図12	打製石斧	B3	Ⅴ層	Ⅰｂ類	完形	デイサイト	12.1	5.0	1.6	107.3	片側辺に折断面。刃部摩耗。
第147図1	打製石斧	SP169		Ⅰｂ類	完形	デイサイト	12.0	5.9	1.6	133.8	刃部摩耗。
第147図2	打製石斧	S117		Ⅰｂ類	完形	デイサイト	13.7	5.1	1.7	116.6	片側辺に折断面。刃部摩耗。
第147図3	打製石斧	B4	Ⅴ層	Ⅰｃ類	完形	デイサイト	15.3	(7.1)	2.1	(325.4)	板礫素材。
第147図4	打製石斧	SK23		Ⅰｃ類	完形	安山岩	11.8	5.6	2.1	127.6	刃部摩耗。
第147図5	打製石斧	B3	Ⅴ層	Ⅰｃ類	完形	デイサイト	13.3	6.5	2.6	236.7	刃部摩耗。
第147図6	打製石斧	D1	Ⅴ層	Ⅰｄ類	完形	砂岩	13.4	5.9	2.6	202.7	刃部摩耗。
第147図7	打製石斧	C7	Ⅴ層	Ⅰｄ類	完形	デイサイト	12.8	6.2	2.6	203.8	
第147図8	打製石斧	SI03		Ⅱａ類	完形	デイサイト	11.7	6.0	2.0	170.1	片側辺に折断面。刃部摩耗。
第147図9	打製石斧	B9	Ⅴ層	Ⅱａ類	完形	安山岩	10.5	5.7	1.9	91.1	
第147図10	打製石斧	S110		Ⅱａ類	完形	デイサイト	11.8	6.1	2.2	153.5	
第147図11	打製石斧	SP329		Ⅱａ類	完形	デイサイト	11.2	7.0	1.7	121.9	刃部摩耗。
第147図12	打製石斧	S107	上層	Ⅱａ類	完形	デイサイト	7.5	4.8	1.2	47.4	
第148図1	打製石斧	SP146		Ⅱａ類	基部欠	安山岩	(9.7)	(6.8)	(1.7)	(134.5)	刃部摩耗。
第148図2	打製石斧	S108	上層	Ⅱｂ類	完形	デイサイト	10.3	6.7	1.5	155.1	板礫素材。刃部摩耗。
第148図3	打製石斧	SI19		Ⅱｂ類	基部欠	デイサイト	(8.9)	(5.1)	(1.0)	(51.3)	
第148図4	打製石斧	S115		Ⅱｂ類	基部欠	デイサイト	(12.3)	(7.0)	(1.5)	(162.6)	刃部摩耗。
第148図5	打製石斧	B10	Ⅳ層	Ⅱｂ類	完形	デイサイト	11.1	6.3	2.4	149	刃部摩耗
第148図6	打製石斧	A6	Ⅳ層	Ⅱｂ類	完形	デイサイト	8.5	4.5	1.6	63.1	
第148図7	打製石斧	B2	Ⅳ層	Ⅱｃ類	基部欠	デイサイト	(10.1)	5.8	2.4	(134.5)	片側辺自然面。
第148図8	打製石斧	SI06		Ⅱｃ類	完形	デイサイト	12.1	6.7	1.4	96.6	
第148図9	打製石斧	A7	Ⅳ層	Ⅱｄ類	完形	流紋岩	7.5	4.8	2.3	64.7	
第148図10	打製石斧	SI08		Ⅱｃ類	完形	デイサイト	14.0	8.0	2.1	256.7	刃部摩耗。刃部再生。
第148図11	打製石斧	D12	Ⅴ層	Ⅱｃ類	完形	デイサイト	12.8	8.4	1.7	154.9	
第149図1	打製石斧	S108		Ⅰａ類	完形	デイサイト	20.6	6.3	2.4	342.6	
第149図2	打製石斧	S118		Ⅰａ類	完形	デイサイト	18.2	6.6	2.7	367.8	
第149図3	打製石斧	SI01		Ⅰａ類	基部欠	デイサイト	(17.0)	(8.2)	(2.5)	(421.5)	刃部および基部側中央部摩耗。
第149図4	打製石斧	A12	Ⅳ層	Ⅰａ類	完形	デイサイト	17.8	(7.0)	3.1	(388.6)	
第149図5	打製石斧	A11	Ⅳ層	Ⅰｄ類?	完形	デイサイト	15.3	7.3	2.5	240.7	刃部摩耗。
第149図6	打製石斧	SI04		Ⅰｄ類?	完形	安山岩	18.0	8.0	4.1	555.3	
第150図1	打製石斧	D11		Ⅰｂ類	完形	安山岩	20.4	9.6	5.0	1284.6	
第150図2	打製石斧	S119		Ⅰｃ類	完形	安山岩	16.0	7.5	2.7	310.8	刃部摩耗。線状痕顕著。
第150図3	打製石斧	SI06		Ⅱａ類	完形	デイサイト	17.3	9.4	3.1	453.6	刃部摩耗。
第150図4	打製石斧	D13	Ⅳ層	Ⅰｂ類	完形	デイサイト	15.9	8.1	4.3	540.9	
第150図5	打製石斧	SK09		Ⅰｂ類	完形	デイサイト	13.2	8.4	2.3	256.7	背面はほぼ自然面。
第150図6	打製石斧	C6	Ⅴ層	Ⅲ類	完形	デイサイト	13.3	8.0	2.8	353.6	板礫素材。刃部摩耗。
第151図1	磨製石斧	SI04	下層	Ⅰａ類	刃部欠	蛇紋岩	(12.9)	(6.0)	(2.3)	(344.5)	刃縁わずかに遺存。刃部は叩き折り。
第151図2	磨製石斧	SI04	下層	Ⅰａ類	刃部欠	蛇紋岩	(12.8)	(5.5)	(2.5)	(332.0)	
第151図3	磨製石斧	SI07		Ⅰａ類	刃部欠	蛇紋岩	(7.3)	(6.2)	(2.5)	(197.3)	
第151図4	磨製石斧	SI07		Ⅰａ類	略完形	蛇紋岩	9.2	5.2	2.1	179.5	剥離調整により刃部再生。
第151図5	磨製石斧	SI04		Ⅰａ類	基部欠	蛇紋岩	(6.7)	(4.6)	(1.8)	(77.1)	
第151図6	磨製石斧	SI07	上層	Ⅰａ類	基部欠	蛇紋岩	(6.2)	(6.9)	(2.7)	(175.6)	
第151図7	磨製石斧	SI08	上層	Ⅰａ類	略完形	蛇紋岩	10.7	5.7	2.5	253.5	刃部つぶれ。基端部剥離。
第151図8	磨製石斧	SI19		Ⅰａ類	刃部欠	蛇紋岩	(13.2)	(6.2)	(2.6)	(396.6)	
第151図9	磨製石斧	A13	Ⅳ層	Ⅰａ類	刃部欠	砂岩	(14.1)	(7.2)	(3.0)	(431.2)	
第151図10	磨製石斧	SI11		Ⅰａ類	略完形	蛇紋岩	10.4	6.2	2.8	304.2	基端部～片側面敲打による剥離・つぶれ。
第151図11	磨製石斧	S118		Ⅰａ類	刃部欠	蛇紋岩	(10.5)	(6.5)	(2.5)	(300.7)	
第151図12	磨製石斧	SI11		Ⅰａ類	基部欠	凝灰岩	(8.1)	(8.5)	(2.8)	(184.7)	
第151図13	磨製石斧	SI18	上層	Ⅰａ類	基部欠	蛇紋岩	(6.3)	(6.4)	(2.2)	(119.8)	
第151図14	磨製石斧	SQ6		Ⅰａ類	基部欠	蛇紋岩	(9.4)	(5.3)	(2.5)	(182.1)	刃部～片側面剥離調整。
第151図15	磨製石斧	D14	Ⅳ層	Ⅰａ類	基部欠	蛇紋岩	(7.8)	5.1	(2.3)	(154.7)	
第151図16	磨製石斧	SI20	下層	Ⅰｂ類	基部欠	蛇紋岩	(6.1)	(5.6)	(2.1)	(118)	
第151図17	磨製石斧	A7	Ⅳ層	Ⅱ類	完形	安山岩	8.1	4.4	2.5	126.6	
第151図18	磨製石斧	S118		Ⅱ類	基部欠	蛇紋岩	(4.8)	(4.5)	(1.8)	(56.6)	
第151図19	磨製石斧	SK72		Ⅱ類	刃部欠	蛇紋岩	(5.8)	(4.3)	(2.0)	(89.1)	
第151図20	磨製石斧	A	Ⅳ層	Ⅱ類	基部欠	安山岩	(4.2)	(3.1)	(1.2)	(25)	
第151図21	磨製石斧	S119		Ⅲ類	完形	蛇紋岩	3.6	1.9	0.7	10.1	
第151図22	磨製石斧	SP276		Ⅲ類	刃部欠	蛇紋岩	(3.2)	(2,.3)	(0.6)	(8.5)	
第151図23	磨製石斧	S117	上層	Ⅲ類	刃部欠	蛇紋岩	(3.3)	(1.4)	(0.8)	(4.7)	両頭石斧か。
第152図1	切目石錘	A11	Ⅳ層	Ⅰ類	完形	砂岩	4.0	2.3	1.8	20.1	
第152図2	切目石錘	SK38		Ⅰ類	完形	安山岩	7.9	4.6	1.8	90.8	
第152図3	切目石錘	S110	下層	Ⅰ類	完形	砂岩	4.3	2.3	1.6	20.8	
第152図4	切目石錘	SQ6		Ⅰ類	1/3欠	頁岩	(5.7)	(3.0)	1.4	(30.1)	
第152図5	切目石錘	SK25		Ⅰ類	1/4欠	凝灰岩	6.3	(3.6)	(1.8)	(38.3)	
第152図6	切目石錘	SP597		Ⅰ類	完形	凝灰岩	5.5	4.2	2.6	68.3	
第152図7	切目石錘	SI09	上層	Ⅱ類	1/3欠	頁岩	(4.3)	(4.9)	(0.9)	(23.8)	
第152図8	打欠石錘	S117	上層	Ⅰ類	完形	砂岩	3.2	2.7	1.2	12.3	
第152図9	打欠石錘	SI04	下層	Ⅰ類	完形	安山岩	4.6	4.3	1.6	38.8	
第152図10	打欠石錘	SI04	上層	Ⅰ類	完形	安山岩	3.3	3.5	1.5	20.2	
第152図11	打欠石錘	SI07	上層	Ⅰ類	完形	安山岩	3.3	3.2	1.4	15.4	
第152図12	打欠石錘	SI07	上層	Ⅰ類	片面一部欠	流紋岩	(5.3)	(4.3)	(1.8)	(33.6)	
第152図13	打欠石錘	SI07	上層	Ⅰ類	完形	流紋岩	4.6	3.5	1.9	34.3	
第152図14	打欠石錘	SI07	中層	Ⅰ類	完形	安山岩	5.1	3.1	1.9	41	
第152図15	打欠石錘	SI07	上層	Ⅰ類	完形	安山岩	5.4	4.9	1.7	57.4	端部の欠損は紐掛け部作出前のもの。
第152図16	打欠石錘	SI08	上層	Ⅰ類	完形	砂岩	4.5	3.2	1.7	35.6	端部敲打により側面剥離。
第152図17	打欠石錘	SI09	上層	Ⅰ類	完形	砂岩	4.9	4.0	1.8	43.7	
第152図18	打欠石錘	SI12		Ⅰ類	完形	花崗閃緑岩	4.3	3.6	1.9	38.4	

挿図番号	器種	遺構地区	層位	分類	遺存状態	石材	法量（cm・g）				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
第152図19	打欠石錘	SI14	上層	Ⅰ類	完形	安山岩	5.1	3.5	1.4	38.2	
第152図20	打欠石錘	SI20	上層	Ⅰ類	完形	砂岩	4.1	4.1	1.6	35.5	
第152図21	打欠石錘	SI20	上層	Ⅰ類	完形	砂岩	5.2	3.6	1.8	44.8	側辺に敲打痕。
第152図22	打欠石錘	SK24		Ⅰ類	完形	デイサイト	4.9	3.8	2.2	44.5	
第152図23	打欠石錘	SK74		Ⅰ類	完形	安山岩	4.0	3.2	1.5	31.7	
第152図24	打欠石錘	落ち込み	上層	Ⅰ類	完形	安山岩	6.2	3.5	1.5	39.7	
第152図25	打欠石錘	落ち込み	上層	Ⅰ類	完形	デイサイト	5.4	4.1	2.0	62.6	
第152図26	打欠石錘	SK32		Ⅰ類	完形	デイサイト	5.0	4.6	1.7	52.4	
第152図27	打欠石錘	SI06	中層	Ⅰ類	完形	デイサイト	4.6	3.4	1.8	35.5	
第152図28	打欠石錘	SK66		Ⅰ類	完形	安山岩	4.4	3.8	1.4	40.7	
第152図29	打欠石錘	SB08-P1		Ⅰ類	完形	安山岩	4.6	3.4	1.1	24.4	
第152図30	打欠石錘	SK39		Ⅰ類	完形	安山岩	3.4	3.4	1.1	16.7	
第152図31	打欠石錘	SK38		Ⅰ類	完形	砂岩	4.8	3.3	1.5	33.4	
第152図32	打欠石錘	SQ6		Ⅰ類	完形	砂岩	5.0	2.4	1.4	17.4	
第152図33	打欠石錘	SQ6		Ⅰ類	完形	安山岩	4.9	3.7	1.7	37.3	
第152図34	打欠石錘	SI07	上層	Ⅰ類	完形	安山岩	5.9	4.6	2.2	68.6	
第152図35	打欠石錘	SI09	上層	Ⅰ類	完形	凝灰岩	6.1	4.2	1.3	48.2	
第152図36	打欠石錘	SI14		Ⅰ類	完形	凝灰岩	6.4	5.0	1.5	62.7	
第152図37	打欠石錘	SK35		Ⅰ類	完形	珪質砂岩	5.8	4.5	1.9	64.7	
第152図38	打欠石錘	SK85		Ⅰ類	完形	安山岩	6.1	4.2	1.7	68.3	
第152図39	打欠石錘	SP376		Ⅰ類	完形	砂岩	5.8	3.7	1.7	58.9	
第152図40	打欠石錘	SI02		Ⅰ類	完形	安山岩	6.9	4.9	2.2	108.8	
第152図41	打欠石錘	SI11		Ⅰ類	完形	凝灰岩	6.8	4.7	1.6	66.8	
第152図42	打欠石錘	SI17		Ⅰ類	完形	凝灰岩	6.0	5.3	1.9	66.8	
第153図1	打欠石錘	SI20	上層	Ⅰ類	完形	砂岩	6.9	4.1	2.2	88.2	
第153図2	打欠石錘	SK22		Ⅲ類	完形	デイサイト	6.2	5.4	2.2	91.5	
第153図3	打欠石錘	SP92		Ⅰ類	完形	デイサイト	6.1	4.5	2.4	92.8	
第153図4	打欠石錘	SQ6	下層	Ⅰ類	完形	安山岩	6.5	4.7	1.8	74.7	
第153図5	打欠石錘	SK25		Ⅰ類	完形	砂岩	5.8	5.1	2.0	75	
第153図6	打欠石錘	落ち込み	下層	Ⅰ類	完形	安山岩	6.2	5.1	1.6	75.7	側辺に敲打痕。
第153図7	打欠石錘	SP11		Ⅰ類	完形	安山岩	6.9	4.9	1.8	80.5	
第153図8	打欠石錘	SI06		Ⅰ類	側辺一部欠	凝灰岩	6.3	4.9	2.5	(64.2)	
第153図9	打欠石錘	SK66		Ⅰ類	完形	砂岩	6.1	5.6	1.7	84.6	
第153図10	打欠石錘	A3	Ⅴ層	Ⅰ類	片面一部欠	安山岩	5.7	(5.6)	2.2	(83.3)	
第153図11	打欠石錘	C1	Ⅴ層	Ⅰ類	完形	砂岩	6.8	6.0	1.5	85.5	
第153図12	打欠石錘	C4	Ⅴ層	Ⅰ類	完形	凝灰岩	7.3	3.6	2.0	77.3	
第153図13	打欠石錘	C4	Ⅴ層	Ⅲ類	完形	砂岩	7.2	5.2	1.7	94.1	
第153図14	打欠石錘	D4	Ⅴ層	Ⅰ類	完形	砂岩	7.6	6.2	2.3	160.9	
第153図15	打欠石錘	SQ6		Ⅰ類	完形	安山岩	7.9	5.9	2.5	151.2	側辺に敲打痕。
第153図16	打欠石錘	SI04		Ⅰ類	完形	デイサイト	8.6	6.2	2.5	157.4	
第153図17	打欠石錘	SI19	上層	Ⅰ類	完形	流紋岩	8.6	6.4	2.3	167.7	
第153図18	打欠石錘	SK36		Ⅰ類	完形	珪質砂岩	7.8	6.6	2.4	159.4	分割礫を素材とする。
第153図19	打欠石錘	D6	Ⅳ・Ⅴ層	Ⅰ類	完形	凝灰岩	10.1	5.0	1.5	123.0	
第153図20	打欠石錘	D10	Ⅴ層	Ⅰ類	完形	デイサイト	10.3	5.9	3.3	260.0	被熱。
第153図21	打欠石錘	B7	Ⅴ層	Ⅱ類	完形	安山岩	6.7	6.9	2.0	114.1	
第153図22	打欠石錘	SI19	上層	Ⅱ類	完形	安山岩	6.7	6.6	1.8	130.7	
第153図23	打欠石錘	B14	Ⅳ・Ⅴ層	Ⅲ類	完形	デイサイト	12.6	10.7	3.1	514.1	
第154図1	磨石類	SI04		Ⅰ類	完形	デイサイト	9.2	4.8	4.2	264.7	赤色顔料付着。被熱。
第154図2	磨石類	SI04		Ⅰ類	完形	安山岩	9.2	7.6	5.5	549.8	赤色顔料付着。
第154図3	磨石類	SI11		Ⅰ類	完形	安山岩	10.9	6.0	4.7	446.9	
第154図4	磨石類	SI11		Ⅰ類	完形	安山岩	11.8	8.2	4.7	758.2	周縁は敲打後に磨り。
第154図5	磨石類	SI07		Ⅱ類	完形	デイサイト	9.7	6.4	5.3	481.8	被熱。
第154図6	磨石類	SI07		Ⅱ類	完形	安山岩	9.4	8.0	5.0	451.3	両面中央部に浅い凹部。
第154図7	磨石類	SI02		Ⅱ類	完形	安山岩	12.2	9.2	5.9	1018.5	両側辺に面形成。被熱。
第154図8	磨石類	SI04		Ⅱ類	完形	安山岩	9.4	6.2	4.6	442.4	敲打痕は顕著でない。
第154図9	磨石類	SI15		Ⅱ類	完形	安山岩	7.4	6.6	4.8	317.6	
第154図10	磨石類	SI19	上層	Ⅱ類	完形	デイサイト	9.1	8.5	4.8	534.4	
第154図11	磨石類	SI05		Ⅲ類	完形	安山岩	9.8	6.8	5.3	552.2	全体的に風化・摩耗。
第154図12	磨石類	SI17		Ⅲ類	完形	砂岩	11.4	7.4	4.2	524.8	
第154図13	磨石類	SI15		Ⅲ類	完形	デイサイト	10.6	9.7	6.8	1034.5	赤色顔料微量付着。周縁敲打後に磨り。
第154図14	磨石類	SI04	下層	Ⅳ類	完形	デイサイト	12.1	8.5	6.4	936.6	赤色顔料付着。裏面はやや凹面をなす。
第154図15	磨石類	SI04		Ⅳ類	完形	安山岩	10.3	9.4	4.7	618.5	多孔質。周縁敲打痕は顕著でない。
第154図16	磨石類	SI05		Ⅳ類	完形	安山岩	8.0	7.7	4.0	371.0	
第154図17	磨石類	SI08		Ⅳ類	完形	安山岩	8.7	7.1	4.5	439.5	
第154図18	磨石類	SI08		Ⅳ類	略完形	砂岩	9.9	9.7	5.2	714.7	周縁の一部自然崩壊。
第154図19	磨石類	SI09		Ⅳ類	完形	砂岩	8.1	5.8	3.9	277.8	
第154図20	磨石類	SI07	下層	Ⅳ類	完形	安山岩	7.9	6.9	5.1	385.3	赤色顔料微量付着。
第154図21	磨石類	SI07		Ⅳ類	完形	砂岩	12.1	6.0	4.7	458.4	
第154図22	磨石類	SI14		Ⅳ類	完形	砂岩	11.2	6.1	4.2	388.3	赤色顔料付着。
第154図23	磨石類	SI14		Ⅳ類	完形	安山岩	8.5	7.6	4.6	448.5	
第154図24	磨石類	SI11		Ⅳ類	完形	流紋岩	10.7	8.9	4.7	633.7	磨痕は正面、敲打痕は裏面がより顕著。
第154図25	磨石類	SI14		Ⅳ類	略完形	安山岩	(8.3)	7.7	4.9	(376.1)	片端欠。周縁は敲打成形。
第155図1	磨石類	SI14		Ⅳ類	完形	デイサイト	10.2	6.0	4.4	425.9	側面敲打後に磨り。
第155図2	磨石類	SI15		Ⅳ類	完形	砂岩	10.4	6.2	4.0	377.5	
第155図3	磨石類	SI15		Ⅳ類	完形	デイサイト	10.0	8.0	6.3	668.7	
第155図4	磨石類	SI17		Ⅳ類	完形	デイサイト	10.5	7.8	4.0	461.5	全面敲打成形により石鹸形を呈す。
第155図5	磨石類	SI17		Ⅳ類	完形	デイサイト	11.5	6.6	4.4	480.5	
第155図6	磨石類	SI15		Ⅳ類	完形	安山岩	8.6	7.3	4.8	401.5	赤色顔料付着。
第155図7	磨石類	SI18		Ⅳ類	完形	安山岩	11.1	10.4	6.8	1035.2	全面敲打後に磨っている可能性あり。
第155図8	磨石類	SI18		Ⅳ類	完形	デイサイト	7.9	7.0	4.0	345.0	
第155図9	磨石類	SI18		Ⅳ類	完形	デイサイト	15.3	7.3	4.3	714.6	全面摩耗。
第155図10	磨石類	SI18		Ⅳ類	完形	デイサイト	8.3	7.0	4.4	351.8	
第155図11	磨石類	SI19		Ⅳ類	完形	デイサイト	10.9	6.2	5.0	465.4	
第155図12	磨石類	SI20		Ⅳ類	完形	安山岩	11.8	7.0	5.1	553.6	多孔質。被熱。
第155図13	磨石類	SP327		Ⅳ類	完形	流紋岩	10.2	7.3	5.4	590.4	両端の敲打痕は凹凸少ない。
第155図14	磨石類	SI20		Ⅳ類	完形	安山岩	10.6	6.6	4.4	415.9	
第155図15	磨石類	SI20		Ⅳ類	完形	流紋岩	7.7	7.1	4.6	239.7	全面風化。

挿図番号	器種	遺構地区	層位	分類	遺存状態	石材	法量（cm・g）				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
第155図16	磨石類	SI05		Ⅴ類	完形	安山岩	15.1	10.3	5.7	767.1	
第155図17	磨石類	SI04	下層	Ⅴ類	完形	安山岩	9.8	5.5	3.4	287.1	
第155図18	磨石類	SI09		Ⅴ類	完形	砂岩	8.2	7.4	3.3	259.9	被熱。
第155図19	磨石類	SI04		Ⅵ類	完形	花崗閃緑岩	10.1	5.4	4.2	331.3	
第155図20	磨石類	SI06		Ⅵ類	完形	砂岩	11.1	5.6	4.9	418.5	
第155図21	磨石類	SI08		Ⅵ類	完形	安山岩	13.2	4.8	4.4	370.4	
第155図22	磨石類	SI20		Ⅵ類	完形	デイサイト	7.7	6.0	4.4	282.3	
第155図23	磨石類	SI07		Ⅵ類	完形	砂岩	8.4	5.8	3.1	207.6	
第155図24	磨石類	SI14		Ⅵ類	略完形	デイサイト	11.8	6.6	5.7	621.4	
第155図25	磨石類	SP142		Ⅵ類	完形	安山岩	11.3	4.2	3.3	254.9	
第155図26	磨石類	SI01		Ⅶ類	完形	流紋岩	8.2	7.2	3.8	296.7	
第155図27	磨石類	SI04		Ⅶ類	完形	安山岩	8.2	6.3	4.5	267.4	
第155図28	磨石類	SI04	上層	Ⅶ類	完形	安山岩	6.8	4.9	4.3	145.2	
第156図1	磨石類	SI05		Ⅶ類	一部欠	安山岩	(9.8)	6.3	5.2	363.8	多孔質。
第156図2	磨石類	SI06		Ⅶ類	完形	安山岩	10.1	8.9	5.8	651.8	被熱。
第156図3	磨石類	SI07		Ⅶ類	完形	安山岩	8.6	6.9	3.9	259.0	多孔質。
第156図4	磨石類	SI08		Ⅶ類	完形	安山岩	11.1	9.6	4.6	618.1	
第156図5	磨石類	SI09		Ⅶ類	完形	安山岩	8.4	6.4	4.3	315.1	
第156図6	磨石類	SI09		Ⅶ類	完形	安山岩	6.6	5.7	4.0	129.1	
第156図7	磨石類	SI11		Ⅶ類	完形	安山岩	10.1	9.1	5.3	606.3	主面敲打痕は平坦面を形成。
第156図8	磨石類	SI10		Ⅶ類	完形	デイサイト	9.8	8.1	5.3	544.5	
第156図9	磨石類	SI14		Ⅶ類	完形	砂岩	12.6	5.0	3.7	339.6	
第156図10	磨石類	SI17		Ⅶ類	完形	デイサイト	7.6	7.3	4.2	313.9	
第156図11	磨石類	SI15		Ⅶ類	完形	デイサイト	9.7	8.5	4.8	456.2	
第156図12	磨石類	SI19		Ⅶ類	完形	デイサイト	9.9	9.6	4.3	556.8	
第156図13	磨石類	SP113		Ⅶ類	完形	砂岩	9.5	5.5	4.4	248.6	断面三角形をなす礫の稜線上を利用。
第156図14	磨石類	SB02-P3		Ⅶ類	完形	砂岩	13.7	6.9	5.7	766.6	側縁の凹部は横断面Ｖ字をなす。
第157図1	石皿類	SI15		Ⅰ類	3/4以上	安山岩	(20.7)	(16.0)	7.2	(2647.5)	
第157図2	石皿類	SI06		Ⅱａ類	2/3	砂岩	(21.5)	(20.4)	(6.7)	(3286.4)	
第157図3	石皿類	SI04		Ⅰ類	完形	安山岩	23.4	16.3	8.1	2614.1	底面を平坦に成形。
第157図4	石皿類	SI16	上層	Ⅰ類	1/4	砂岩	(16.9)	(19.6)	(9.3)	(3048.9)	
第157図5	石皿類	B4	Ⅴ層	Ⅰ類	2/3	安山岩	(25.5)	(29.5)	14.4	(12000)	
第157図6	石皿類	SP173		Ⅰ類	1/3	安山岩	(16.4)	(21.5)	(7.9)	(2279.2)	
第157図7	石皿類	SI08		Ⅱｂ類	1/2	砂岩	(12.9)	(17.9)	(5.6)	(1819.2)	
第157図8	石皿類	SI11		Ⅱｂ類	1/2	砂岩	12.7	(13.0)	5.8	(1293.1)	破断面摩耗。
第158図1	石皿類	SI09		Ⅲ類	2/3	安山岩	(14.9)	11.9	10.8	(1460.3)	多孔質。
第158図2	石皿類	SI16		Ⅲ類	完形	安山岩	24.2	27.0	6.5	4419.3	板状角礫素材。蜂の巣石（雨垂れ石）。
第158図3	石皿類	SI18		Ⅰ類	1/4	安山岩	(18.0)	(15.9)	(13.0)	(3208.9)	多孔質。底面・側面成形。臼状。
第158図4	砥石	SI19		Ⅰ類	3/4以上	安山岩	(36.5)	(12.1)	(8.1)	(4744.6)	2片接合。
第158図5	砥石	SK35		Ⅰ類	完形	砂岩	21.1	20.5	16.2	9791.0	
第158図6	砥石	SI18		Ⅰ類	完形	安山岩	18.1	14.7	12.7	4978.7	分割面を砥面に使用。
第158図7	砥石	A11	上層	Ⅱ類	2/3	砂岩	9.9	(8.2)	4.1	(501.3)	主面・周縁に敲打痕。
第158図8	砥石	SI01		Ⅰ類	1/2	デイサイト	(11.8)	(7.3)	(2.3)	(318.5)	砥面に線状痕あり。
第158図9	砥石	SI18		Ⅱ類	完形	砂岩	11.9	8.0	2.7	323.1	周縁に敲打痕。
第158図10	砥石	SI08	下層	Ⅱ類	完形	砂岩	16.1	10.5	2.5	638.70	
第158図11	砥石	D1	Ⅴ層	Ⅱ類	3/4以上	砂岩	13.8	(7.7)	3.4	(464.3)	主面・周縁に敲打痕。
第158図12	砥石	SI20		Ⅲ類	1/2	安山岩	(24.5)	8.5	(8.5)	(1337.4)	
第159図1	玉類	B8	Ⅴ層	算盤形	完形	翡翠	4.1	1.8	0.7	6.3	有孔
第159図2	玉類	A6	Ⅴ層	略楕円形	完形	瑪瑙質	4.3	2.4	0.8	12.0	有孔
第159図3	玉類	A7	Ⅴ層	略楕円形	完形	瑪瑙質	2.9	1.6	0.7	5.0	有孔
第159図4	玉類	SI19		略楕円形	完形	瑪瑙質	2.9	2.0	0.1	8.8	有孔
第159図5	玉類	C12	Ⅳ層	三角形	完形	瑪瑙質	2.2	1.8	0.7	4.3	有孔
第159図6	玉類	A4	Ⅳ層	隅丸方形	1/2	瑪瑙質	(2.2)	(1.6)	0.8	(2.7)	有孔
第159図7	玉類	D5	Ⅴ層	算盤形?	残欠	瑪瑙質	(2.4)	(1.4)	(1.0)	(4.1)	有孔
第159図8	玉類	A4	Ⅳ・Ⅴ層	棒状	端部欠	瑪瑙質	2.1	0.7	0.5	0.9	有孔
第159図9	玉類	SI09	Ⅳ層	円筒形	完形	瑪瑙質	1.8	1.1	1.1	2.5	
第160図1	石棒類	D6	Ⅳ・Ⅴ層		端部欠	安山岩	(17.3)	6.4	(5.1)	(734.6)	研磨後に敲打。再加工途上か。
第160図2	赤塗り礫	A3	Ⅴ層		完形	安山岩	5.3	4.7	3.8厚さ	116.9	自然礫の側辺に帯状の赤彩。

に立地する後・晩期主体の下糸生脇遺跡ではガラス質安山岩を主に用いており、やはり対照的である。チャートは南条山地に産出することが知られ、日野川沿いに立地する中期後葉の南越前町上平吹遺跡(5)では､その転石を利用した石器製作が想定されている。以上のことから､当該地域の縄文中期にはチャートを石鏃石材とする志向性があり、舟寄遺跡における石材選択もそれを反映したものと理解できよう。石鏃製作を主たる目的としてチャートを搬入し、その製作の過程で生じた剥片を利用して石錐など他の小形剥片石器を製作していたと推測される。

註

1　(財)福井県建設技術公社『福井県地質図　2010年版　福井県』

2　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2011　『福井県埋蔵文化財調査報告　第120集　舟寄福島通遺跡』

3　勝山市教育委員会　1978　『勝山市文化財調査報告書　第３集　福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書』

4　朝日町教育委員会　2004　『朝日町文化財調査報告書　第４集　栃川遺跡』

5　福井県教育委員会　1977　『北陸自動車道関係遺跡調査報告書　第12集　上平吹遺跡』

第３節　土製品

土器以外の土製の遺物には、製品として小形土器と三角壕形土製品、転用品として土製円盤がある。その他、厳密には製品ではないが、焼成粘土塊がある。ここでは、これらを一括して土製品として扱うこととし、以下、種類ごとに記述する。所属時期については、各種類や各個において特定はできないが、おおむね、遺跡の主体時期である中期中葉から後葉の時間幅を与えられる。

１　小形土器（第161図１～11）

11点確認し、すべて図化掲載した。特徴的な出土状況や分布の集中は認められない。器形には胴部が丸く張り出す鉢形（１・２・５）、朝顔形を呈す深鉢形（３）、バケツ形を呈す鉢形（４）、杯形（10）があり、部位には口縁部（７）・底部（６・９）・脚部（８・11）がある。器壁が厚く内外面に接合痕が顕著に残るもの（２・４）がある。以下、各個について記述する。

１はSI14上層から出土した。外面調整は横位ナデである。内面に煤が若干付着する。２はSI07上層から出土した。外面調整は粗い横位ナデである。外面に煤が若干付着する。３はC4区Ⅴ層から出土した。口唇部に低い粘土を貼付する。内外面と底面は研磨される。４はSI12上層から出土した。器壁厚は均一ではなく、口縁部は比較的厚い。地文に複節縄文RLRを施す。底面にはナデを施す。５はSI08上層から出土した。外面には丁寧なナデを施す。内面に赤彩痕が残る。６はSI10中層から出土した。外面には粗いナデを施す。底部は胴部と一体で成形し、周縁部に粘土を貼付して底面を作出する。７はSI15上層から出土した。地文に縄文LRを施す。口縁端部にヘラ状工具による細い刻目を施す。８はSP175から出土した。底部は比較的厚く、脚長は短い。９はSI14上層から出土した。地文に縄文RLを施す。底面は丁寧なナデを施す。10はSI08中層から出土した。口縁部の突起や小形土器の脚部の可能性もある。器壁が極めて薄い。11はＡ１区Ⅴ層から出土した。隆帯と沈線による縦位楕円形区画文を８単位で配し、そのうち３箇所で区画内に円孔を施す。区画内には円孔以外には文様を施さない。

所属時期については、４は複節縄文の使用から中期中葉、11は区画文を配す脚部から中期後葉に属すと判断される。

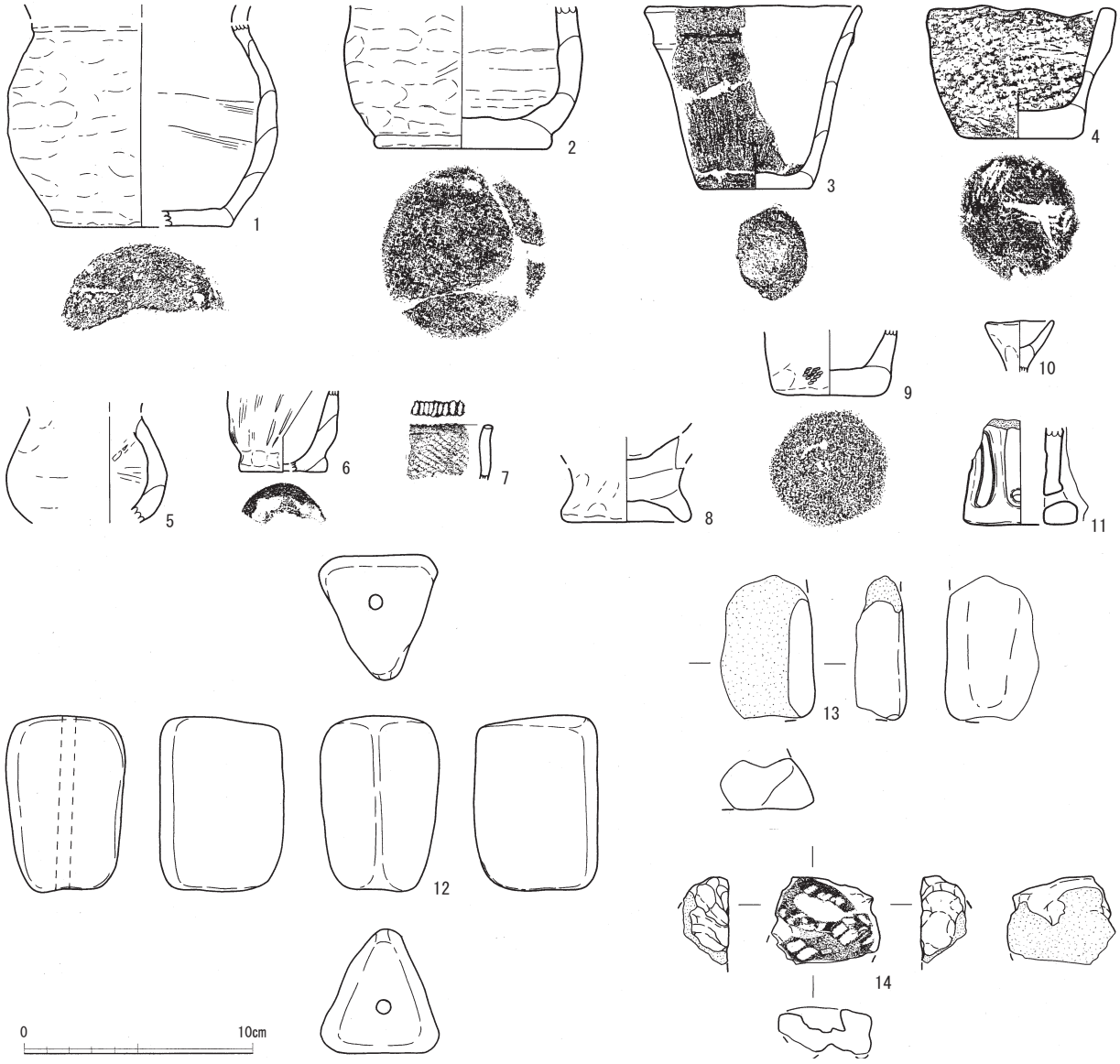
２　三角壕形土製品（第161図12・13）

２点確認した。いずれも無文である。12はSI05中層から出土した。完形品である。断面は二等辺三角形を呈し、各隅角は丸みをもって整形される。長さ7.3㎝、幅5.1㎝、高さ5.3㎝、重さ210ｇを測る。器体表面には研磨を施す。器体中央に長軸方向に沿った円孔をもつ。円孔周縁には紐ずれなどの使用痕は認められない。色調は灰黄色を呈す。胎土には微細な砂粒の混入が確認できる。13は焼土土坑２から出土した。破損品である。残存値で長さ6.1㎝、幅3.5㎝、高さ2.3㎝、重さ39.8ｇを測る。円孔は確認できない。全体的に著しく摩滅する。胎土には砂粒とともに焼成粘土粒を多く含む点で土器と近似する。破断面の観察から、粘土板を折り込んで成形されたことがわかる。色調は淡橙褐色を呈す。

所属時期については、県内外の出土事例から、おおむね中期後葉に属すと判断される。

３　土製円盤（第162図）

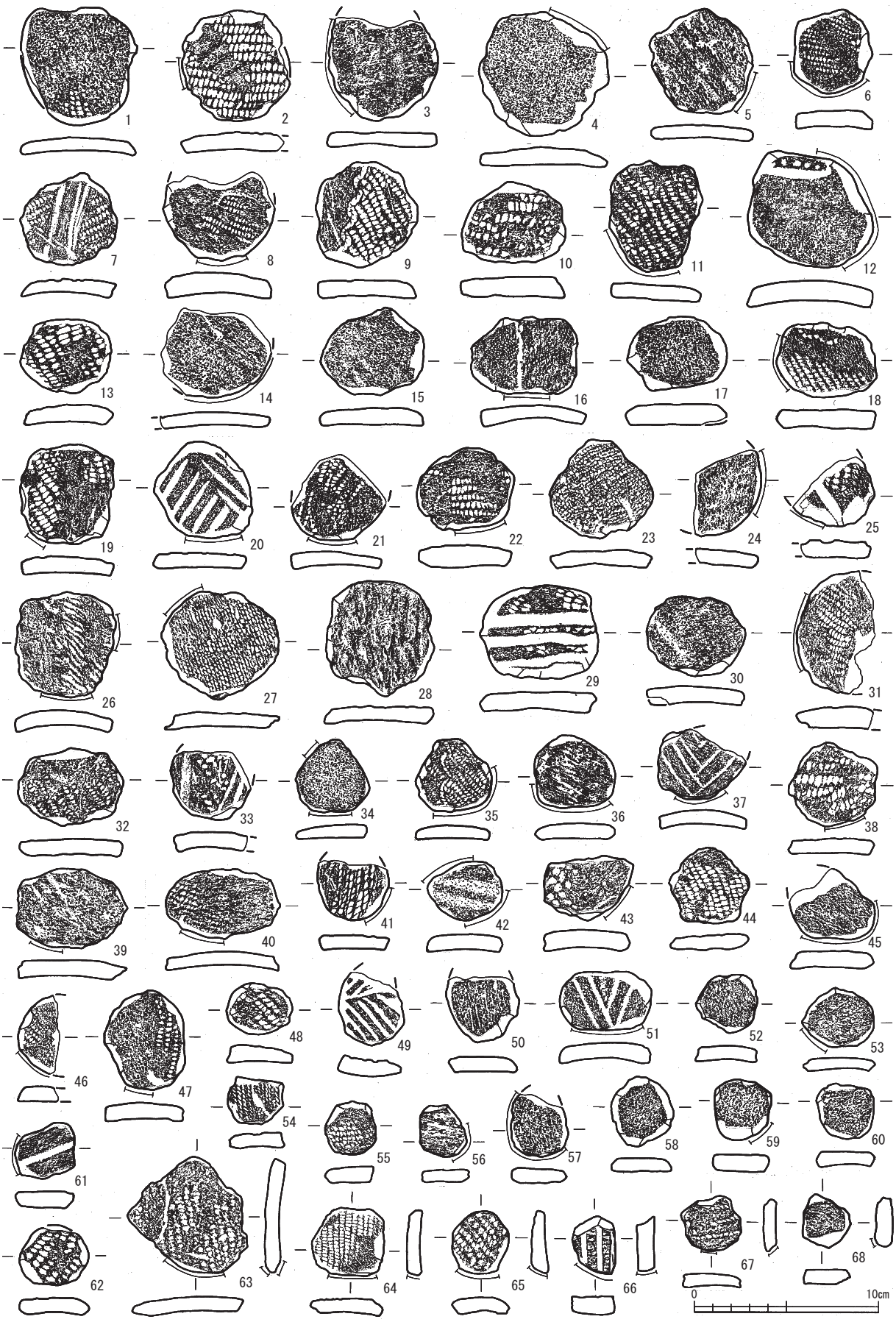
116点確認し、68点掲載した。縄文土器片の周縁に打ち欠きを施し、平面が円形・楕円形を基本とする形態に加工した転用品である。使用する土器の部位は深鉢の口縁端部を残す例２点､底部円盤２点（４など）を除き、大半が深鉢の胴部片である。土器の時期は中期中葉から後葉に属す。有文と無文の量的な傾向はうかがえない。形態には特に定型性は認められない。整形調整と考えられる打ち欠きが周縁全体におよばない例も認められ、土器成形時の接合面を残す例が17点認められる。長軸径は最大7.1㎝、



第161図　土製品・焼成粘土塊実測図（縮尺 1/3）

最小2.9cm、重量は最大55.3ｇ、最小5.2ｇを測る。径が５～６cm程度と３cm程度となる例が多い。周縁の状態には、①打ち欠き（１・７・23など）、②弱い摩滅（2・16・34など）、③強い摩滅（25・35・49など）の３種が認められる。②は断面が丸味をおびる。③は断面が直線的で、研磨状の光沢をもつ例が多い。②と③は①とは異なり周縁の一部にのみ認められ、全体にはおよばない。このことから、②と③は整形に伴う調整加工痕ではないと判断される。各状態が重複する例も多く認められるため、③→②→①の順で優先的に帰属させれば、打ち欠きのみは44点あり、全体の４割を占め、弱い摩滅は48点あり、全体の４割を占め、強い摩滅は24点あり、残り２割となる。

③の強い摩滅痕が認められる周縁形状には傾斜（25・40・49・53・63・67・68など）とほぼ直角（14・21・25・35・36・43・43・45 など）の２種がある。前者は器体を寝かし、主に直線的な運動により生じた痕跡であり、後者は器体を直立させ、主に往復の直線的な運動により生じた痕跡であると推察される。このことから、③の強い摩滅痕は使用痕であり、③が認められる土製円盤には、何らかの対象物を磨るまたは擦るといった用途が想起される。②の弱い摩耗痕と③との形状差は同一用途における使用頻度や対象物の差異としても考えられる。同様に①の打ち欠きのみも、②や③の使用頻度の低い個体、あ



第162図　土製円盤実測図（縮尺 1/3）

るいは使用前の個体としても考えられる。しかし、出土した土製円盤の多くを廃棄品としてみなす場合には、低頻度の使用での廃棄を容認しなければ、製作途中段階の未製品あるいは整形失敗品としての説明が必要となる。また、全体の４割を占める出土量や全体の形態や調整の点で②や③を残す個体との分離が困難な点を含めて考慮すれば、①のみの仕上げで②や③とは異なる用途、あるいは同一用途でも異なる対象物に使用した可能性もうかがえる。

出土箇所には遺構・包含層があり、遺構出土品の割合がやや高い。集中出土する地区や遺構は認められない。分布では土器とおおむね一致する傾向であると判断される。

４　焼成粘土塊（第161図14・第163図）

３㎝以下の小片を除き277点確認し、24点を掲載した。胎土に砂粒を含むもの（Ａ類）と含まないもの（Ｂ類）の２種がある。以下、種類ごとに記述する。

Ａ類（第161図14、第163図22・23）　５点のみの出土であり、いずれも小形の破損品である。表面には調整をほとんど行わず、凹凸をもつ。硬く焼きしまり、もろさはない。色調・胎土ともに縄文土器とほぼ同様である。平坦面を持つ例は無い。第161図14 は一部環状に成形されるが、全体として不定形である。網代痕が残るものの底部ではないと判断して焼成粘土塊に含めた。

Ｂ類　272点出土し、大きさは指頭大から人頭大まで認められる。最大の個体はSI05出土品で長さ34㎝、半乾燥重量で約３㎏を計る。胎土はおおむね共通し、被熱により一定の硬度を保っているがもろく、表面が砂粒状に解離する。縄文土器の胎土とは明確に異なり、混和材混入前の生粘土でもないと判断される。形態は不定形で、摩滅が著しく、丸味を帯びる例が多く、破断面の識別や調整の観察が困難な場合が多い。表面にはナデや指頭痕の他に棒状工具痕（第163図１・13）を残す例もわずかに認められる。完形品と認識できた例は極めて少なく、５㎝程度の小形品の７例（同図６・12～14・23など）のみである。平坦面をもつ例は131点あり、全体の約５割を占める。平坦面の断面形状には、直線（同図１・２など）と湾曲（同図７・８など）の２種がある。両者のうち、約３割を占める34例（同図１～５・７～10・17・21 など）の平坦面には、砂粒や焼成粘土粒あるいは土器粒の付着やこれら付着物の剥離跡と考えられる微細な小穴が認められる。この付着物から平坦面は設置面であり、被熱時に底面であったと推察される。色調は器体上下で異なる例が多く、平坦面を下側とした場合、下側が灰黄色、上側が赤褐色を呈す例が多い。色調は被熱温度と関連するため、色調の差異は被熱時の粘土塊の状態を示すものと判断される。このため、多くの個体が平坦面より上側での被熱温度が高いこととなり、平坦面の設置性と整合する。ただし、色調が上下で逆転し、平坦面が赤褐色、反対側が灰黄色を呈す例もわずかに認められる。これは上下面ともに平坦面となる例（同図１・21）の存在からの、上面部として理解できる。その他、高温の被熱により表面の一部が気泡化するとともに、煤吸着による灰色を呈し硬質化した例（同図２・3）も認められる。

出土箇所には遺構と遺物包含層があり、ほぼ同等の出土数である。遺構には出土量の偏りが認められ、特にSI05・07では多量に出土する。いずれも使用状況がうかがえるような出土状況ではなく、住居廃絶後の廃棄品と考えられる。SI05からは、拳大から人頭大までの粘土塊が多量に出土し、総重量は半乾燥重量で約13㎏を測る。また、SB06－P3やSP71の出土状況（第71図）に認められるように、粘土塊Ｂ類はまとまって出土する事例が多い。明確に接合できる例は確認できなかったが、使用後にまとめて廃棄された可能性がある。このため、廃棄場所となる遺構では結果的に出土数が増加すると判断される。このような出土状況からは、使用１回あたりの粘土塊の必要数は比較的多い、あるいは使用時には大形品



第163図　焼成粘土塊実測図（縮尺 1/3）

であったと推測される。

粘土塊Ｂ類の用途については、形状が変化する程度の未乾燥の状態で地面や礫などに設置され、被熱した状況がうかがえ、この推測からは燃焼時の支台（焼台）としての機能が想起される。ただし、調査区内で検出した焚火施設である竪穴住居の炉や焼土土坑からは粘土塊Ｂ類はほとんど出土していない。焚火後あるいは遺構廃絶後に粘土塊Ｂ類を残余なく片付けた可能性も否定できないが、これらの遺構での恒常的な使用は考えにくい。出土量が多い点や灰色硬質化する個体の存在からは、比較的日常的に行われる焚火で、かつ高温度となる燃焼、例えば、屋外における煮炊き、あるいは土器焼成時の支台といった用途も想起される。

第５表　土製円盤観察表

※数値は現在値　単位:cm・g

挿図		遺構/地区	層位	遺存	長さ	幅	厚み	重さ	調整・使用痕
162	1	SI08	上層	一部欠	6.3	6.4	0.7	33.7	打ち欠き
	2	落ち込み	上層	一部欠	6.0	5.7	1.0	38.8	弱い研磨
	3	SI14	上層	一部欠	5.5	5.9	0.8	30.9	弱い研磨
	4	SB09-P1		完形	6.7	7.0	1.0	43.3	弱い研磨
	5	SI17	中層	完形	5.7	5.5	0.7	26.2	弱い研磨
	6	SP417		完形	5.2	6.4	1.2	37.6	弱い研磨
	7	SP207		完形	5.0	5.3	0.8	20.0	打ち欠き
	8	SI14	上層	一部欠	4.9	6.0	1.2	33.7	弱い研磨
	9	SI08	上層	完形	5.7	5.6	0.9	34.6	打ち欠き
	10	SP377		完形	4.4	5.7	1.1	33.1	打ち欠き
	11	SI05	中層	完形	6.0	5.0	0.9	27.8	弱い研磨
	12	SP376		完形	6.3	6.8	1.1	55.1	弱い研磨
	13	SI16 上層 炉	石囲内	完形	4.1	4.9	0.9	20.2	打ち欠き
	14	SI07	中層	一部欠	4.8	5.9	0.8	25.9	強い研磨
	15	SP369		完形	4.8	5.7	0.9	27.2	打ち欠き
	16	SI05	中層	完形	4.2	5.7	0.8	26.9	弱い研磨
	17	SI17	上層	一部欠	4.0	5.4	1.1	27.1	打ち欠き
	18	SI18	中層	完形	4.0	5.4	1.0	23.2	弱い研磨
	19	SP431		完形	5.4	5.0	0.9	33.2	弱い研磨
	20	落ち込み	上層	完形	5.3	5.4	0.9	30.0	弱い研磨
	21	SI14	上層	一部欠	4.6	5.1	0.9	19.3	強い研磨
	22	SI17	中層	完形	4.5	5.3	1.2	27.4	弱い研磨
	23	SK67		完形	5.4	5.6	0.8	25.0	打ち欠き
	24	SI08	中層	約1/2欠	4.6	3.6	0.8	15.5	弱い研磨
	25	SI17	上層	約1/2欠	3.8	4.2	0.9	12.1	強い研磨
	26	SP200		完形	5.7	5.7	0.8	33.3	弱い研磨
	27	SB06-P2		完形	5.8	6.3	0.7	30.5	弱い研磨
	28	SI06	上層	完形	6.2	5.9	0.8	34.3	打ち欠き
	29	SI15	中層	完形	4.5	4.2	0.9	17.8	打ち欠き
	30	SK35	上層	完形	4.2	5.2	0.9	21.3	打ち欠き
	31	SK34		約1/2欠	6.7	4.2	1.1	32.5	弱い研磨
	32	SI16 上層 炉	石囲内	完形	4.2	5.7	0.9	21.8	打ち欠き
	33	SI07	中層	一部欠	3.7	4.2	0.9	16.4	打ち欠き
	34	SI14	上層	完形	4.0	4.0	0.7	9.9	弱い研磨
162	35	SI18	上層	完形	4.0	4.2	0.8	14.5	強い研磨
	36	SI05	上層	完形	3.8	4.4	0.8	13.5	強い研磨
	37	SK34		一部欠	3.8	4.6	0.7	13.5	弱い研磨
	38	SK89		完形	4.6	4.8	0.8	18.8	弱い研磨
	39	SI06	上層	完形	4.3	5.9	0.9	26.6	弱い研磨
	40	SK34		完形	3.7	6.1	0.7	19.3	強い研磨
	41	SI05	中層	一部欠	3.2	4.0	0.7	10.0	弱い研磨
	42	SQ６		完形	3.2	4.1	0.8	11.7	弱い研磨
	43	SP232		完形	3.3	4.6	1.0	17.2	強い研磨
	44	SP093		完形	4.0	4.3	0.7	13.3	打ち欠き
	45	SP216		一部欠	3.8	4.5	0.9	15.8	強い研磨
	46	SP207		約1/2欠	4.2	2.3	0.8	7.2	弱い研磨
	47	SI20	上層	完形	5.4	4.3	1.0	26.5	弱い研磨
	48	SK67		完形	2.7	3.6	0.9	8.5	弱い研磨
	49	SK67		一部欠	3.6	3.4	0.9	13.2	打ち欠き
	50	SP383		一部欠	3.5	4.0	0.8	11.2	打ち欠き
	51	焼土土坑1	上面	完形	3.2	4.9	1.0	17.4	弱い研磨
	52	SP629		完形	3.1	3.3	0.7	8.4	打ち欠き
	53	SP078		完形	3.2	3.3	0.6	8.6	弱い研磨
	54	SP608		完形	2.5	2.9	0.8	6.8	打ち欠き
	55	SP276		完形	2.9	2.7	0.9	6.3	打ち欠き
	56	SB10-P2		完形	2.8	2.6	0.7	5.2	弱い研磨
	57	SI08	中層	一部欠	3.4	3.1	0.8	9.2	弱い研磨
	58	SI15	中層	完形	3.8	3.4	0.8	11.1	打ち欠き
	59	SP370		完形	3.5	3.1	0.9	11.7	弱い研磨
	60	SI06	上層	完形	2.9	3.1	0.8	8.1	打ち欠き
	61	落ち込み	上層	完形	3.1	3.3	0.9	10.0	弱い研磨
	62	SI19	中層	完形	3.2	3.9	0.8	12.3	打ち欠き
	63	SP566		完形	6.5	6.5	0.8	30.8	強い研磨
	64	SP686		完形	3.7	4.0	0.8	14.2	強い研磨
	65	SK41		完形	3.4	3.1	0.8	8.9	強い研磨
	66	SP070		完形	3.0	2.3	1.0	7.3	強い研磨
	67	SB18-P1		完形	2.9	3.1	0.7	6.5	強い研磨
	68	SK74	上層	完形	2.7	2.6	0.9	6.2	強い研磨

第６表　焼成粘土塊観察表

※数値は現在値　単位:cm・g

挿図		遺構/地区	層位	遺存	長さ	幅	厚み	重さ	色調	平坦面形状	平坦面付着物	調整等	備考
161	14	SK11		破片	3.9	4.7	1.9	27.4	橙褐色	平坦		網代痕	胎土に砂粒含む
163	1	A3	Ⅴ層	破片	9.1	8.9	2.7	168.7	赤褐色	平坦	砂粒・焼土粒(土器粒か)	工具痕・指頭痕	
	2	SK55		破片	10.3	5.1	4.3	128.1	下:暗灰色　上:灰色・赤褐色	平坦	砂粒・不明物		
	3	SI07	中層	破片	5.2	3.3	83.8	160.5	下:暗灰色　上:灰色・赤褐色	平坦	砂粒・不明物		
	4	SI07	中層	破片	9.6	7.8	3.4	219.2	下:黒灰色　上:灰黄色	平坦	砂粒跡		
	5	SI07	中層	破片	5.7	4.0	2.3	37.0	下:灰黄色　上:赤褐色	平坦	砂粒		
	6	SI19	中層	完形	6.7	4.3	3.6	64.9	灰黄色	平坦		指頭痕・ナデ	
	7	SK22	上層	破片	3.5	2.8	2.2	14.4	下:灰黄色　上:赤褐色	湾曲	砂粒		
	8	SK11		破片	3.6	3.5	3.3	29.9	下:灰黄色　上:赤褐色	湾曲	砂粒		
	9	A3	Ⅴ層	破片	6.3	4.8	3.3	54.1	下:灰黄色　上:赤褐色	平坦	砂粒		
	10	SK11		破片	5.4	4.7	4.3	66.5	灰黄色	湾曲	砂粒		
	11	D9	Ⅴ層	破片	3.9	3.6	2.4	13.3	灰黄色・赤褐色	－		指頭痕	
	12	SI07	中層	完形	4.5	4.3	2.2	28.2	灰黄色・赤褐色	－		指頭痕・ナデ	
	13	A3	Ⅴ層	完形	4.8	3.4	3.5	34.5	黒灰色・灰色	－		指頭痕	
	14	A3	Ⅴ層	完形	5.3	2.4	3.4	32.7	下:黒灰色　上:灰黄色	－			
	15	SK35	上層	破片	3.4	2.6	1.7	10.7	灰黄色・赤褐色	平坦			
	16	SI20	上層	破片	4.5	3.0	2.3	29.5	赤褐色	－			
	17	SK34		破片	4.7	4.2	2.5	45.3	下:灰黄色　上:黒灰色	平坦	砂粒		
	18	SI05	上層	一部欠	6.6	5.2	3.5	73.5	下:黒灰色　上:灰色	平坦		工具痕	
	19	A4	Ⅳ層	一部欠	5.9	5.7	2.7	66.6	灰黄色	－			
	20	D7	Ⅴ層	破片	3.6	3.1	1.6	10.3	暗褐色	－			
	21	SI07	中層	破片	4.9	4.6	1.9	44.8	灰黄色	平坦	砂粒		
	22	D9	Ⅴ層	破片	5.2	3.5	2.5	24.6	赤褐色	－		指頭痕	胎土に砂粒含む
	23	SI18	上層	完形	7.7	4.3	4.6	85.3	黒灰色・赤褐色	－		指頭痕	胎土に砂粒含む

第６章　まとめ

第１節　集落構成

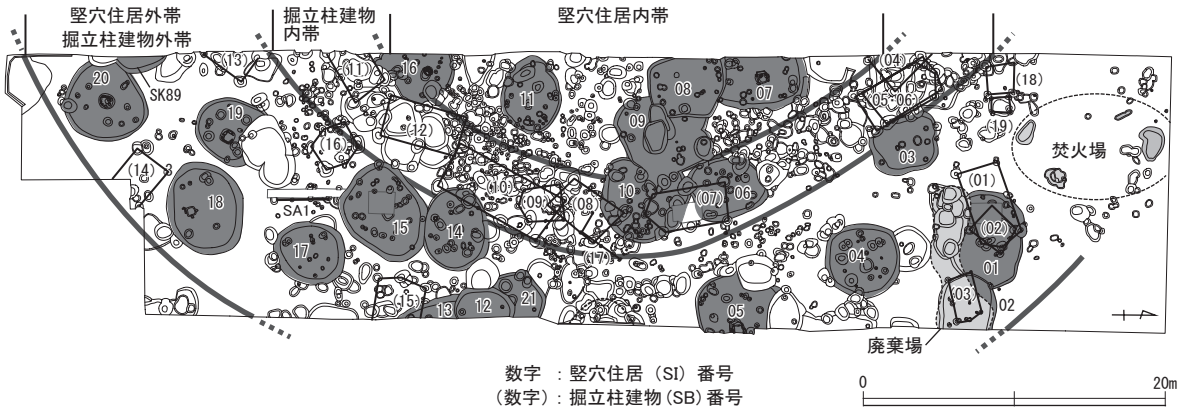
ここでは、各遺構の分布を再度確認し、視覚上認識できる傾向を集落内における配置性として捉え、集落存続期間である中期中葉から後葉にかけての経時的な集落における空間構成として提示する。

調査区内での遺構全体の分布状況では、柱穴・ピット集中域が調査区より西側に中心をもつ弧状帯として認識される。この弧状帯内の柱穴の一部は掘立柱建物として認定した。

掘立柱建物は計19棟認定した。弧状帯内部には10棟（SB04～12・17）が分布する。各建物はおおむね長軸方向を弧状帯に沿って弧列状に配置される。弧状帯幅は掘立柱建物幅の２倍以上にはならない点から、未確認も含め弧状帯内の掘立柱建物はほぼ単列配置であり、かつ長軸方向を弧状帯に対して直交しないと判断される。建物間の距離は総じて近接する。柱穴の切り合いは少ないが、隣接する建物間には同時存在を許容しない重複性や近接性も認められる。なお、SB05・06とSB07間には掘立柱建物が存在しない空白部が認められる。間隔は約10mであり、掘立柱建物１棟分となる。この空白部にも柱穴が多数存在するため、掘立柱建物を認定できなかった可能性は残る。

弧状帯内以外の掘立柱建物は９棟あり、すべて弧状帯より東側で存在する。分布は調査区の北側（SB01～03・18・19）と南側（SB13～16）に分散して認められる。４棟（SB13・16・18・19）は弧状帯に近接し、これら以外は５～10m程度離れる。建物間の距離は北側部では近接（SB18･19）または重複（SB01･02）が認められるが、南側では10～15m程度離れる。各建物はおおむね長軸方向を弧状帯に対し直交して配置され、弧状帯内部の建物とは異なる構築性がうかがえる。この分布と建物長軸方向の差異から、弧状帯内の掘立柱建物域（内帯）とは別の掘立柱建物域（外帯）として理解できる。

竪穴住居は計21棟検出した。経時的な分布はほぼ全域に展開するが、調査区北側の１・２区および南側のSI18・20の東側に空白部が認められる。この空白部の存在から、竪穴住居は弧状帯と同じ中心をもち、これに平行する配置がうかがえる。さらに、一部重複するものの弧状帯（掘立柱建物内帯）を挟み内側と外側に展開する状況も認められる。弧状帯より内側の住居（竪穴住居内帯）が５棟（SI07～09・11・16）、弧状帯と重複する住居が２棟（SI06・10）、弧状帯より外側の住居（竪穴住居外帯）が14棟（SI01～05・12～15・17～21）となる。竪穴住居外帯内に位置する住居については、視覚的な住居間隔を重視すれば、さらに弧列状に２分化でき、より内側の住居列にSI01・03～05・14・15・19・21、より



第164図　集落構成図（縮尺 1/500）

外側の住居列にSI02・12・13・17・18・20が位置する。同様に外帯の内側と外側の住居において、SI03とSI01またはSI02、SI14とSI12またはSI13、SI15とSI17、SI19とSI18、竪穴住居の可能性が高いSK89とSI20のように、近接住居において２棟一対的な配置性もうかがえる。以上から、竪穴住居の配置にも掘立柱建物と同様な弧列性が看取でき、同心弧状の配置をとるとみなした場合には、最大４帯構成で存在すると推測される。住居間の距離は内帯では比較的密集し、住居半域におよぶ切り合いが認められる。外帯では一部を除き、住居縁辺部での切り合いや５ｍ以内の間隔で隣接する傾向が認められる。この内外帯における住居間隔の差異は掘立柱建物の内外帯に認められる差異と共通し、内帯がより密集する傾向として指摘できる。その他、住居内帯のSI08・09とSI11間、および外帯のSI05とSI21間には空白部が認められる。空白部は内帯で約５ｍ、外帯で約10ｍを測る。位置は内外帯で完全に一致はしないが、弧状帯中心からは東方となる。なお、外帯の空白部には、SK48～52・56が弧状に密集する。これらの土坑が柱穴の場合には、円形配列の建物となる可能性がある。

土坑は計96基検出し、規模や形態により３類に大別した。大型の１類の分布はSK92・93など明確に住居外帯より東側に存在する例もあるが、おおむね掘立柱建物内外帯や竪穴住居外帯付近に存在し、竪穴住居と近接または切り合う事例が多い。共時的にみれば竪穴住居や掘立柱建物と離れた位置に構築された可能性はあるが、住居帯内への配置性をうかがえる。小規模で楕円形を呈する３類は、立石を有する土坑（SK43）も含め、形態から墓壙としての用途も想起される。しかし、基数が５基と少なく、かつ分散して存在するため、墓壙と仮定しても墓域としての展開は認められない。墓壙群が住居や建物と同様に一定の規則性で配置されると仮定した場合には、調査区外への存在を想定せざるを得ない。

焼土土坑は焚火箇所と想定され、５基検出した。分布は住居外帯の北限となる遺構希薄域のAB １・２区に集中する。住居帯から外れる配置からも用途・性格における特殊性がうかがえる。

遺物集中域は廃棄場所と想定され、該期に属すものは５箇所検出した。分布は住居外帯の北東端部に集中する。箇所により中葉と後葉に分離する事例があることから、廃棄場所としての継続性がうかがえる。ただし、廃絶後の竪穴住居と比べれば、検出数や規模あるいは遺物量の点で少なく、決して集落域の主要な廃棄場所とはいえない。規模や遺物量からは小規模な廃棄単位が想定され、廃棄頻度も相対的に低いと判断される。

以上の各遺構の分布状況からみた経時的な集落の空間構成として、竪穴住居・掘立柱建物などの主要な遺構が弧帯状に展開し、一部に切り合いは認められるが、遺構の種類ごとの弧帯状の配置が認められる。弧帯の内側から順に、竪穴住居内帯、掘立柱建物内帯、竪穴住居外帯・掘立柱建物外帯となる。その他､遺構の集中域を場とすれば､弧帯の北東縁辺に焚火場と廃棄場が配置される集落構成となる（第164図)。調査区内で認められたこの弧帯状の遺構配置からは、集落全体とすれば調査区より西側に中心部をもつ環状集落として類推でき、調査区内外で対称的な遺構配置が予想される。住居外帯北東側の空白部を重視すれば､「い」字状や馬蹄形も想定される。環状集落である場合には、集落の中心がA8区より西側へ約20mの地点にあり、その規模は掘立柱建物内帯の直径が約60m、竪穴住居外帯の直径が90ｍを測ると推測される。

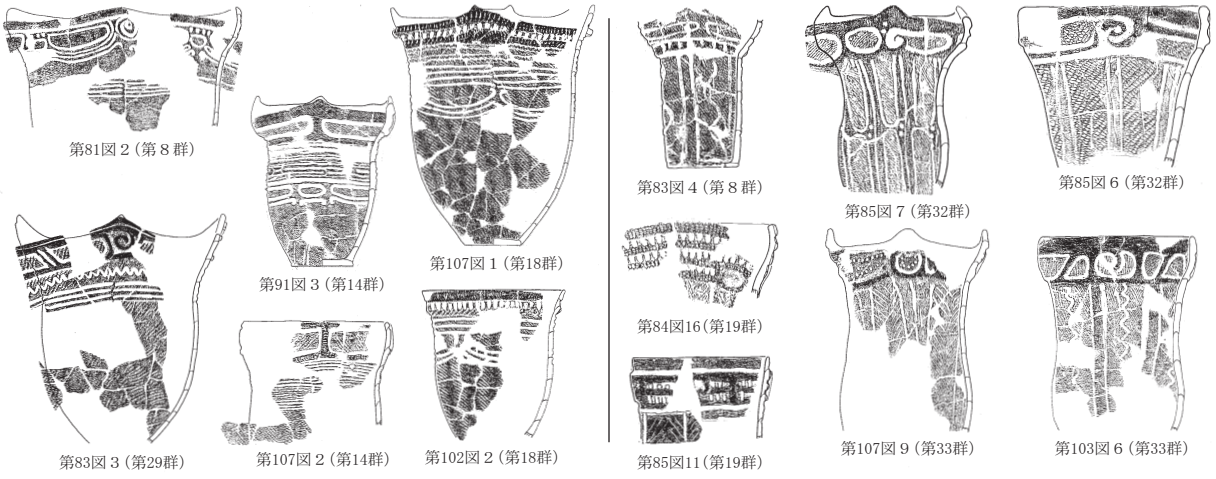
第２節　遺構変遷

ここでは、出土した縄文土器の編年的位置や遺構間の切り合い関係に基づき、遺構群を相対的に先後関係として大別し、一定の時間幅における集落内の遺構変遷を推測する。

舟寄遺跡集落の存続期間は前述のとおり、出土土器から中期中葉後半（古府式後半併行）から後葉前半（大杉谷式前半）に位置付けられ､比較的短い時期幅に収まる。遺構変遷を推測するにあたっては、各遺構の時間的序列化が必要であり、基準とする時間軸の設定と遺構時期の認定が問題となる。

時間軸は出土土器群の編年的位置により、遺跡存続期間を中葉期と後葉期に２大別した。後葉期は第33・34群の大杉谷式とこれに類似する土器群と第32群に代表される加曽利Ｅ３式類似土器および胴部に縦位区画文を配す土器群とし、その他の多くの土器群は中葉期として一括した（第165図)。集落変遷を扱う場合、より細かな時間軸を用いて、一時的集落景観の復元を指向する必要があると思われる。しかし、現状ではこれを行うための地域的な土器編年研究が十分ではないため、大枠での提示にとどめる。

遺構時期認定に際しての問題には、出土土器の性格と時期の混在があげられる。検出したほぼすべての竪穴住居の覆土からは、中葉と後葉の土器の混在が認められる。両時期土器は垂直分布や層位においても明確に分離される事例は認められなかった。土器使用期間の共時性や編年上の問題にも触れることとなるが、一括性を認定できる出土状況ではないと判断し、編年的位置により、土器群を両時期に分離することとした。この様な場合の遺構の時期認定として、後葉期の遺構に後葉土器とともに中葉土器が混入する事例としても解釈可能である。しかし、SI20などでは炉床土器が中葉、覆土出土の略完形土器の多くが後葉となる。仮にこの住居が土器敷炉ではない場合には、住居使用時期を後葉期に認定してしまう恐れがある。やはり、竪穴住居などから出土する略完形土器や大形破片は遺構廃絶後の凹地への廃棄行為に伴って埋没したと考えるのが従前の研究のとおり妥当であり、基本的に遺構使用期間は廃棄行為時よりも古く、廃棄された土器の時期よりも古く見積もる必要がある。この解釈では、後葉に属す炉床土器や埋設土器を付属する住居が少ないため、大半の住居が中葉期に属すと仮定される。竪穴住居の覆土出土土器に認められる時期幅は廃棄場所としての継続期間を示すものの、点的な時期を示す炉体土器や埋設土器とは異なり、住居使用時期そのものは間接的にしか示し得ないであろう。このため、直接時期と間接時期を同列に扱う問題や多少の恣意性を認めるが、一遺構への廃棄行為は一定の時間幅で終了すると仮定し、炉床土器や埋設土器の時期が判明できた事例を除き、覆土出土の器形復元個体や大形破片の数量比から時期を想定することとした。具体的には中葉期を前後に大別し、中葉土器群が主体的な場合には、より集落開始時期に近いという意味で中葉前半期、後葉土器群が比較的多い場合には、より後葉に近いという意味で中葉後半期とし、後葉期を含め３期を設定した。中葉期の前後区分は出土



第165図　主要深鉢時期分別図

土器に還元できるものではなく、単に覆土遺物の数量的な傾向であり、便宜的なものである。土器小破片のみ出土する遺構については、廃棄の結果か流れ込みか判断できないため、遺構間の切り合いの確認により時期が限定できる場合以外には時期推定は行わないこととした。

結果として、時期を割り振れない遺構が大半を占めることとなったが、各期の主要遺構における分布を示し（第166図）、その概要を述べる。

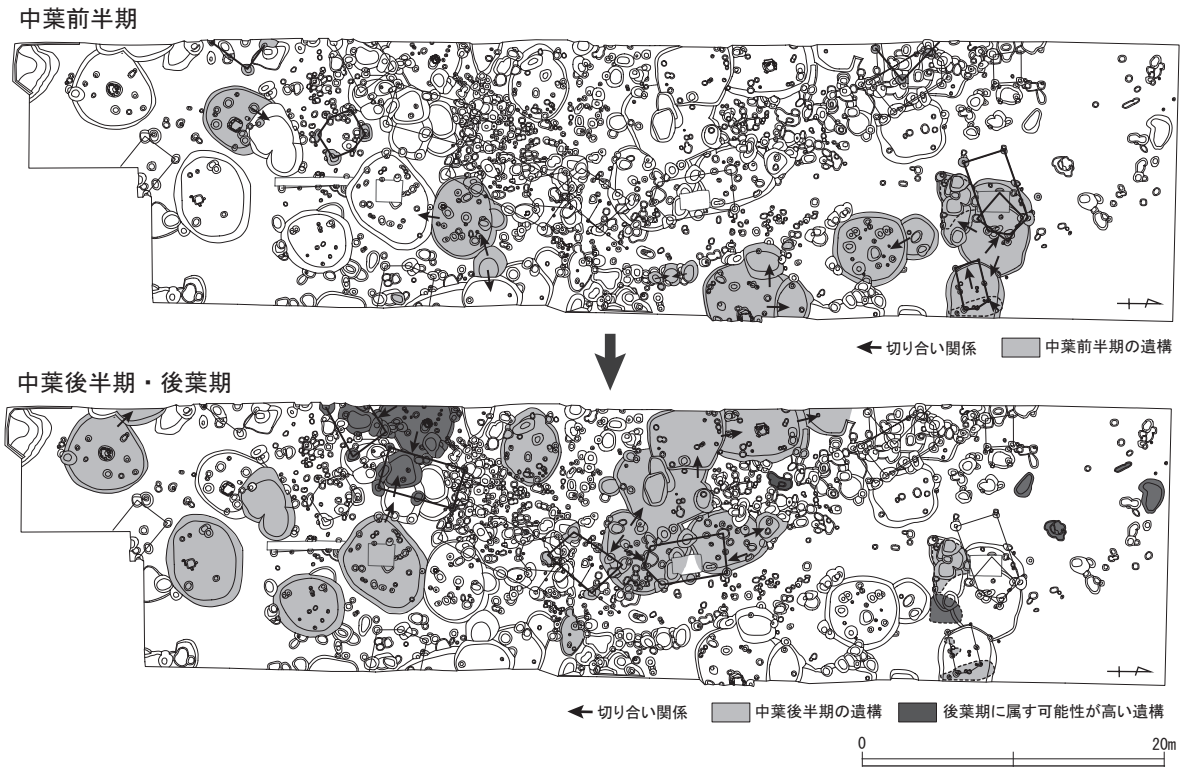
中葉前半期　竪穴住居は住居外帯にのみ存在し、特に北東部にまとまる傾向がうかがえる。近接する土器埋設遺構１も所属する可能性が高い。掘立柱建物は内外帯にそれぞれ存在するが、南北両側に分散する傾向がうかがえる。土坑も同時存在はしないものの、竪穴住居に近接する例が多い。

中葉後半期　竪穴住居は住居外帯南東側と内帯に存在する。掘立柱建物は内帯中央部で確認できる。土坑は住居内外帯にそれぞれ存在する。なお、遺物集中域は前半期と後半期への分離は困難であった。

後葉期　竪穴住居跡や遺物集中域などへの廃棄行為として認識される。所属遺構は土器埋設遺構７の他、出土遺物からSI16・SK30・焼土土坑群などが該当する可能性をもつ。竪穴住居では明確に特定できる事例はないが、廃棄行為とこれに伴う遺物量からは、調査区外への存在が推測される。

各期に認められる分布的差異を遺構変遷として捉えるならば、竪穴住居は住居外帯の北東部から南東部への移動、および住居外帯から内帯への移動がうかがえる。掘立柱建物は内帯を中心とする配置が維持されるが、各期ともに竪穴住居と近接し、これを切って構築される傾向がうかがえる。

このように、経時的・共時的にみても集落を構成する主な遺構には、調査区内において弧形を意識した移動･配置が指摘できる。さらに短時的にみた場合には、同時存在する遺構群の減少が予想されるが、弧形を維持する配置、つまり建物構築時における選地には、なんらかの規制や必要性が存在していたと推測される。なお、調査区内の標高差は１ｍ未満であり、さらに住居外帯の南東側がもっとも低地となるため、選地要因として地形的制約は考えにくい。



第166図　遺構変遷図（縮尺 1/500）

付　章　自然科学的分析

第１節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根久・中村賢太郎

１　はじめに

舟寄遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

測定試料の情報、調整データは第７表のとおりである。

試料は遺物包含層である基本土層Ⅳ層（第４図⑩層）中の炭化物（PLD－5800）、SI15炉床土器（第93図１）の外面付着炭化物（PLD－6102）、SI04覆土下層から出土した土器（第79図２）の外面付着炭化物（PLD－6105）、SI07覆土中層から出土した土器（第85図７）の外面付着炭化物（PLD－6869）、SI05の炉床土器（第83図３）の外面付着炭化物（PLD－6870）の５点である。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

３　結果

第８表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、第167図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後、暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

４　暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、Ox Calの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

5　考察

以下、小林謙一（2008）と山本直人（2007）を参照して、暦年較正結果と考古学編年との対応関係について整理する。

基本土層Ⅳ層（第４図⑩層）中の炭化物（PLD－5800）は、１σ暦年代範囲において770－740 cal BC（14.2%）、690－660 cal BC（14.5%）、650－590 cal BC（33.3%）、580－560 cal BC（6.2%）、２σ暦年代範囲において790－730 cal BC（22.8%）、700－540 cal BC（72.6%）であった。２σ暦年代範囲に着目すると、縄文時代晩期後半に相当する。

SI15の炉床土器（第93図１）の外面付着炭化物（PLD－6102）は、１σ暦年代範囲において2870－2830 cal BC（15.4%）、2820－2800 cal BC（5.4%）、2770－2670 cal BC（47.4%）であり、２σ暦年代範囲において2880－2830 cal BC（18.8%）、2820－2630 cal BC（76.6%）であった。２σ暦年代範囲に着目すると、縄文時代中期後葉に相当する。

SI04覆土下層から出土した土器（第79図２）の外面付着炭化物（PLD－6105）は、１σ暦年代範囲において2860－2810 cal BC（19.8%）、2750－2720 cal BC（8.0%）、2700－2620 cal BC（40.3%）であり、２σ暦年代範囲において2870－2800 cal BC（24.9%）、2760－2570 cal BC（70.5%）であった。２σ暦年代範囲に着目すると、縄文時代中期後葉に相当する。

SI07覆土中層から出土した土器（第85図７）の外面付着炭化物（PLD－6869）は、１σ暦年代範囲において2905－2875 cal BC（68.2%）であり、２σ暦年代範囲において2920－2860 cal BC（83.2%）、2810－2750 cal BC（12.2%）であった。２σ暦年代範囲に着目すると、縄文時代中期後葉に相当する。

SI05の炉床土器（第83図３）の外面付着炭化物（PLD－6870）は、１σ暦年代範囲において2905－2870 cal BC（68.2%）であり、２σ暦年代範囲において2910－2860 cal BC（75.1%）、2810－2750 cal BC（20.3%）であった。２σ暦年代範囲に着目すると、縄文時代中期後葉に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey C.　1995　Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy：The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425－430

Bronk Ramsey C.　2001　Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355－363

小林謙一　2008「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学２歴史のものさし』257－269 同成社

中村俊夫　2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の 14C 年代』3－20

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer.　2004　IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0 26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029－1058

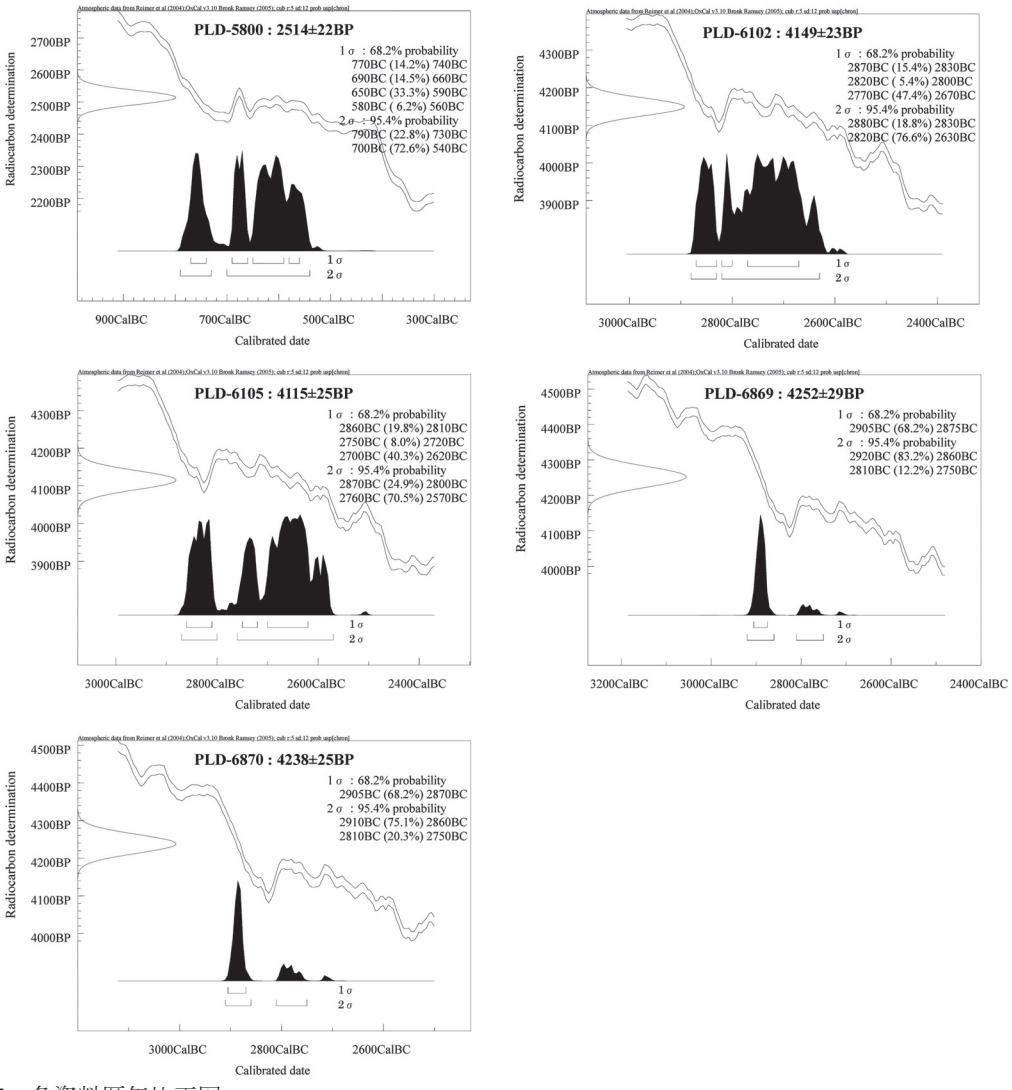
山本直人　2007「東海・北陸における弥生時代の開始年代」『新弥生時代のはじまり第2巻 縄文時代から弥生時代へ』35－44 雄山閣

第７表　測定試料および処理一覧表

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-5800	位置:A15区 土層:基本土層Ⅳ層(花粉分析等採取)	試料の種類:炭化物(植物遺体) 状態:wet　　カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N，水酸化ナトリウム0.1N，塩酸1.2N)
PLD-6102	遺構:SI15 遺物:炉床土器(第93図１)	試料の種類:土器外面付着物(吹きこぼれ) 状態:dry　　カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N，水酸化ナトリウム0.1N，塩酸1.2N)
PLD-6105	遺構:SI04 遺物:覆土下層出土土器(第79図２)	試料の種類:土器外面付着物(煤類) 状態:wet　　カビ:無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N，水酸化ナトリウム0.1N，塩酸1.2N)
PLD-6869	遺構:SI05 遺物:覆土中層出土土器(第85図７)	試料の種類:土器外面付着物(煤類) 状態:dry　　カビ:無	超音波煮沸洗浄　酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N,水酸化ナトリウム0.1N,塩酸1.2N) 処理時の知見:砂混じり
PLD-6870	遺構:SI05 遺物:炉床土器(第83図３)	試料の種類:土器外面付着物(煤類) 状態:dry　　カビ:無	超音波煮沸洗浄　酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N,水酸化ナトリウム0.1N,塩酸1.2N) 処理時の知見:砂混じり

第８表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果一覧表

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-5800	−12.64±0.15	2514±22	2515±20	770BC(14.2%)740BC 690BC(14.5%)660BC 650BC(33.3%)590BC 580BC(6.2%)560BC	790BC(22.8%)730BC 700BC(72.6%)540BC
PLD-6102	−24.01±0.15	4149±23	4150±25	2870BC(15.4%)2830BC 2820BC(5.4%)2800BC 2770BC(47.4%)2670BC	2880BC(18.8%)2830BC 2820BC(76.6%)2630BC
PLD-6105	−25.89±0.16	4115±25	4115±25	2860BC(19.8%)2810BC 2750BC(8.0%)2720BC 2700BC(40.3%)2620BC	2870BC(24.9%)2800BC 2760BC(70.5%)2570BC
PLD-6869	−28.42±0.23	4252±29	4250±30	2905BC(68.2%)2875BC	2920BC(83.2%)2860BC 2810BC(12.2%)2750BC
PLD-6870	−25.78±0.19	4238±25	4240±25	2905BC(68.2%)2870BC	2910BC(75.1%)2860BC 2810BC(20.3%)2750BC



第167図　各資料暦年比正図

第２節　珪藻化石群集

株式会社パレオ・ラボ
黒澤一男

１　はじめに

珪藻は淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小（0.01～0.5㎜程度）ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。

ここでは、舟寄遺跡より採取された試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

２　試料および分析方法

分析には調査区西側壁面の堆積層を用いた。A2区では試料①～③の３試料と、A15区では試料③～⑧の６試料、計９試料を採集した。資料の採集土層と調査区内基本土層との対応は、A2区では資料①が上層の遺物包含層であるⅣ層（第４図⑩層）、資料②が下層の遺物包含層であるⅤ層（同図⑪層）、資料③が遺構確認面であるⅥ層（同図⑫層）となり、A15区では資料③がⅢ層（同図⑧層）、資料④がⅢ層（同図⑨層）、資料⑤がⅣ層（同図⑩層）、資料⑥がⅤ層（同図⑪層）、資料⑦・⑧がⅦ層（同図⑫層の上位と下位）となっている。

これら９資料を用いて、以下の珪藻分析をおこなった。

① 試料を湿潤重量で約１ｇ程度（自然流路２）取り出し、秤量した後にトールビーカーに移し、30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

② 反応終了後、水を加え、１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで７回以上繰り返し行った。

③ ビーカーに残った残渣は遠心管に回収した。

④ マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア（封入剤）で封入し、プレパラートを作成した。

⑤ 各プレパラートを光学顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が少ない試料に関してはプレパラート全面について精査した。

３　珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤(1990)により設定された環境指標種群に基づいた。安藤(1990)は淡水域における環境指標種群を設定した。なお環境指標種群以外の珪藻種については、布種として、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に安藤（1990）において設定された環境指標種群の概要を記す。

上流性河川指標種群（Ｊ） 河川上流の渓谷部に集中して出現する種群。

中～下流性河川指標種群（Ｋ） 中～下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。

最下流性河川指標種群（Ｌ） 最下流域の三角州の部分に集中して出現する種群。

湖沼浮遊性指標種群（Ｍ）水深が1.5m以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する

種群。

湖沼沼沢湿地指標種群（Ｎ）　湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群。

沼沢湿地付着生指標種群（Ｏ）　水深が１ｍ内外で、植物が一面に繁茂しているところおよび湿地において付着状態で優勢な出現が見られる種群。

高層湿原指標種群（Ｐ）　ミズゴケを主とした植物群落および泥炭地の発達が見られる場所に出現する種群。

陸域指標種群（Ｑ）　前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群（陸生珪藻）。

４　珪藻化石群集の特徴

検出された珪藻化石は、59分類群24属43種４亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広布種を含め５種群である。以下に地点ごとにこれら種群の出現状況の特徴と堆積環境について述べる。

Ａ２区

Ⅳ・Ⅴ層（試料①・②）　堆積物１ｇ中の珪藻殻数は2.93×103個、3.25×103個と非常に少ない。このように検出された珪藻殻が少ないため、珪藻化石より環境を推定することはできない。

Ⅵ層（試料③）　堆積物１ｇ中の珪藻殻数は1.15×104個と少ない。しかし検出された珪藻殻が少ないにもかかわらず、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が検出されている。このことから堆積環境は陸域環境であると推定される。

Ａ15区

Ⅵ層（試料⑦・⑧）　堆積物１ｇ中の珪藻殻数は4.84×103個、5.96×103個と非常に少ない。このように検出された珪藻殻が少ないため、珪藻化石より環境を推定することはできない。

Ⅴ層（試料⑥）　堆積物１ｇ中の珪藻殻数は1.53×104 個と少ない。しかし少ないながらも、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* や、*Eunotia praerupta var.bidens* や *Neidium iridis* などの沼沢湿地付着生指標種群が検出されている。これらのことから堆積環境は陸域環境もしくは湿地環境であったと推定される。

Ⅳ層（試料⑤）　堆積物１ｇ中の珪藻殻数は1.52×104個と少ない。しかし少ないながら陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が特徴的に検出されている。これらのことから堆積環境はジメジメとした陸域環境と推定される。

Ⅲ層（試料④）　堆積物１ｇ中の珪藻殻数は2.38×105個、完形殻の出現率は約36％となる。この試料からは沼沢湿地付着生指標種群の *Eunotia praerupta var.bidens* と *Eunotia pectinalis var.undulata* が特徴的に検出され、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* や前述以外の沼沢湿地付着生指標種群が随伴して検出されている。これらのことから堆積環境は陸域環境を伴う沼沢地もしくは湿地環境と推定される。

Ⅲ層（試料③）　堆積物１ｇ中の珪藻殻数は2.23×105個、完形殻の出現率は約36％となる。この試料からは陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が特徴的に検出され、沼沢湿地付着生指標種群の *Eunotia praerupta var.bidens* が随伴して検出されている。このことから堆積環境はジメジメとした陸域環境から湿地環境と推定される。

５　考察

今回分析した試料からは２試料を除いては珪藻化石が希薄であった。特に A2区試料②・③、A15 区試料⑦・⑧では検出される珪藻殻が15個未満という少ない状況であった。珪藻は水生植物であるため、

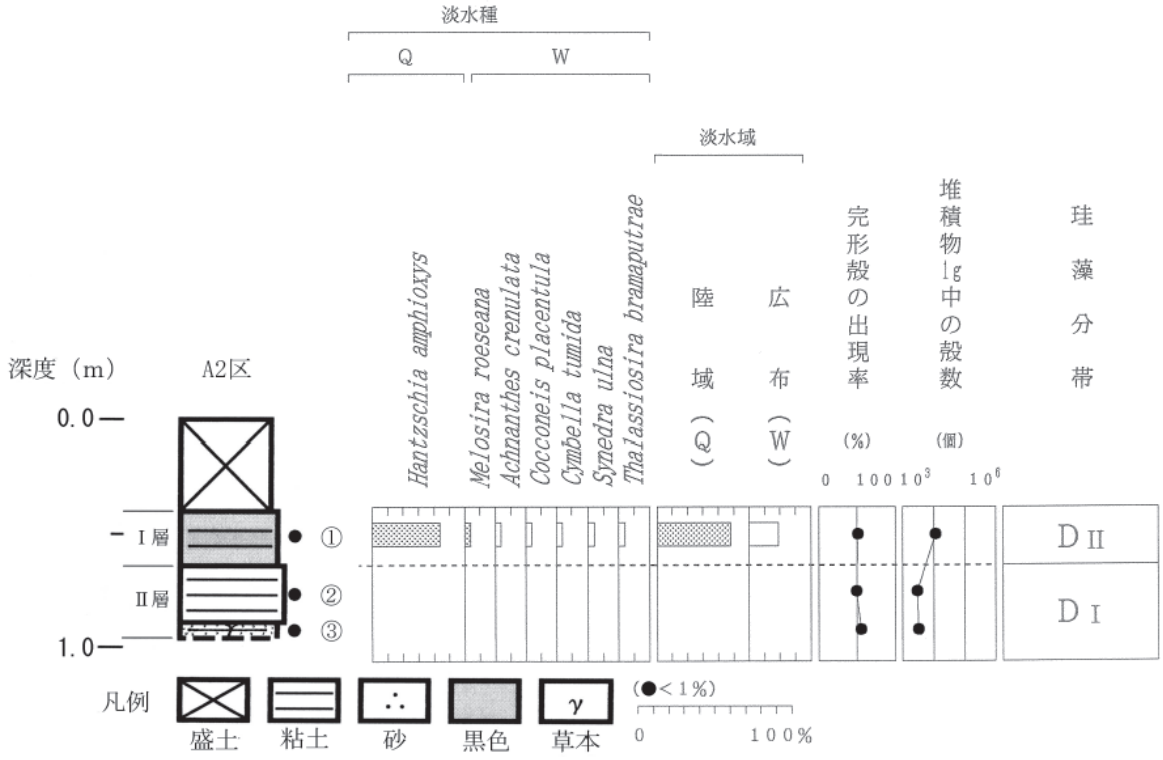
水分のない所には生育できない。今回分析した試料から珪藻化石が検出されなかった理由として、乾燥した陸域環境であったことが考えられる。また同一の試料を用いた花粉分析においてもその検出は少ないことが示されている。花粉化石は乾燥した環境下では保存されにくい。このことも珪藻化石の結果と矛盾がない。これらの試料は上面が縄文時代中期の遺構確認面となるⅥ層に相当し、このⅥ層堆積時には乾いた陸域環境であったと考えられる。A15区では下層の遺物包含層であるⅤ層最上部で湿地性の珪藻種が確認された。しかしながらその量は少なく、同時に陸生種も含まれており、常時水のある環境下ではなく、時折湿り気を持つような陸域環境と考えられる。その上位、縄文晩期の堆積層であるⅣ層（A2区試料①、A15区試料⑤）では少ないながらも陸域環境を示す珪藻種が確認されジメジメとした陸域環境であったと考えられる。Ⅳ層の上位では、急激に珪藻殻数が増加し、A15区試料④では沼沢湿地環境を示す珪藻種が多く検出されており、常時湿り気のある沼沢地もしくは湿地環境へと変わっていったと考えられる。その後再度陸生種が優先するものの、珪藻殻数は多く、沼沢湿地を示す珪藻種も随伴して検出されていることから時折湿地環境になるような湿った陸域環境であったと考えられる。

6　おわりに

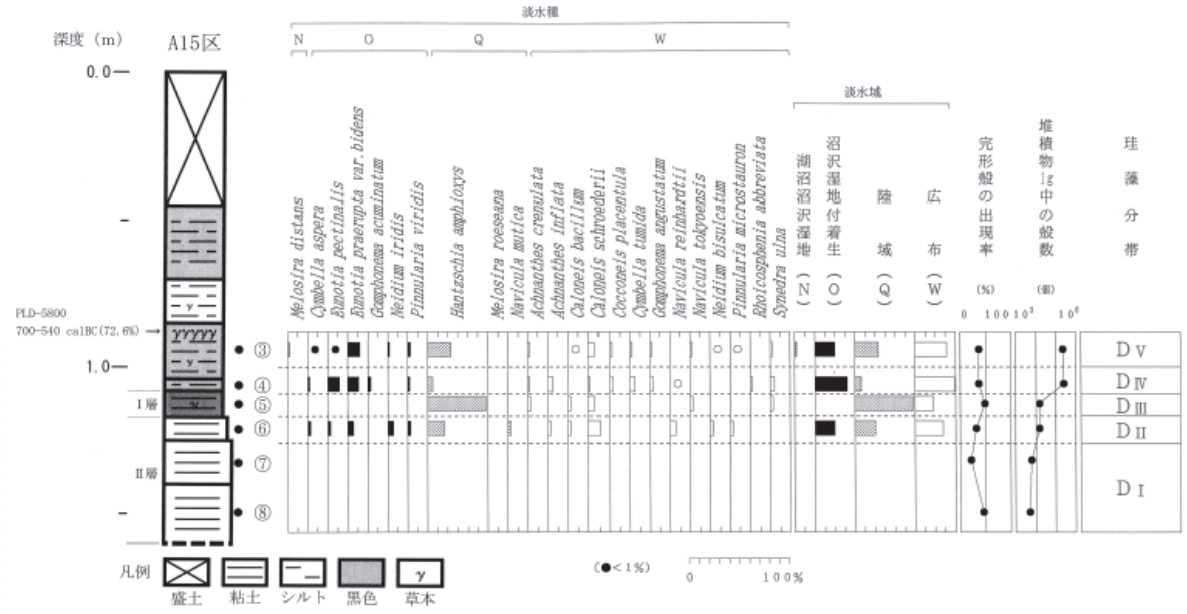
舟寄遺跡から採取された堆積物試料中の珪藻化石を検討した結果、縄文中期には乾燥した陸域環境であったがその後一時的に水に浸るような環境へと移り変わり、縄文晩期にはジメジメとした陸域環境となった。その後、常時水のある沼沢地もしくは湿地環境へと移り変わり、またジメジメとした陸域環境へと変化していったと考えられる。

引用文献

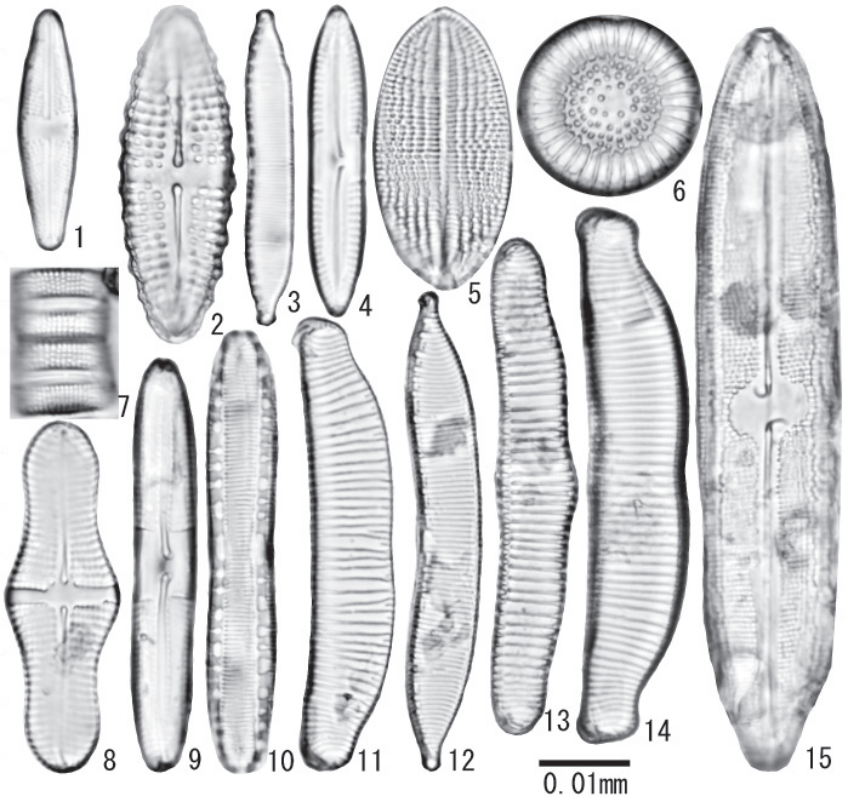
安藤一男　1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42　73－88



第168図　A2区における珪藻化石分布図（４％以上の分類群を表示）



第169図　A15区における珪藻化石分布図（２％以上の分類群を表示）



1. *Navicula mutica*（A15区 ④）　2. *Achnanthes crenulata*（A15区 ④）　3. *Hantzschia amphioxys*（A2区 ②）

4. *Caloneis schroederii*（A15区 ③）　5. *Cocconeis placentula*（A15区 ④）　6. *Cyclotella sp.*（ A15区 ⑧）

7. *Melosira distans*（A15区 ⑧）　8. *Achnanthes inflata*（A15区 ④）　9. *Caloneis bacillum*（A15区 ⑤）

10. *Hantzschia amphioxys*（A15区 ⑥）　11. *Eunotia praerupta var.bidens*（A15区 ③）

12. *Hantzschia amphioxys*（A15区 ③）　13. *Eunotia pectinalis var.undulata*（A15区 ④）

14. *Eunotia praerupta var. bidens*（A15区 ④）　15. *Neidium iridis*（A15区 ③）

第170図　珪藻化石顕微鏡写真

第９表　珪藻化石産出表（種群は安藤(1990)に基づく）

分類群	種群	A2区 ①	②	③	A15区 ③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
Achnanthes crenulata	W	1	-	-	4	4	1	-	-	-
A. inflata	W	-	-	-	1	11	-	1	-	-
A. spp.	?	-	-	1	-	3	-	-	-	-
Amphora ovalis var.libyca	W	-	-	-	2	1	-	-	-	-
Caloneis bacillum	W	-	-	-	2	-	1	1	1	-
C. lauta	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-
C. schroederii	W	-	-	-	12	4	2	4	-	-
Cocconeis placentula	W	1	-	-	4	6	-	-	1	-
Cyclotella spp.	?	3	2	4	4	-	1	3	5	4
Cymbella aspera	O	-	-	-	2	4	-	1	-	-
C. cuspidata	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-
C. minuta	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-
C. tumida	W	1	-	-	4	11	-	-	-	-
C. turgidula	K	-	-	-	-	1	-	-	-	-
C. spp.	?	-	1	-	4	1	1	-	-	-
Diploneis finnica	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-
D. spp.	?	-	-	-	2	1	-	-	-	-
Epithemia adnata	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis	O	-	-	-	2	24	-	1	1	-
E. praerupta var.bidens	O	-	-	-	24	22	-	2	-	-
E. veneris	W	-	-	-	3	-	-	-	-	-
E. spp.	?	-	-	-	5	22	-	-	-	-
Frustulia rhomboides var.saxonica	O	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Gomphonema acuminatum	O	-	-	-	1	7	-	-	-	-
G. angustatum	W	-	-	-	5	7	-	-	-	-
G. augur	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-
G. clevei	W	-	-	-	2	3	-	-	-	-
G. gracile	O	-	-	-	1	1	-	-	-	-
G. truncatum	W	-	-	-	-	2	-	-	-	-
G. spp.	?	3	-	-	1	3	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys	Q	12	1	-	46	11	19	6	-	-
Melosira distans	N	-	-	2	4	-	-	-	4	3
M. roeseana	Q	1	-	-	-	-	-	-	-	-
M. spp.	?	3	2	-	3	4	3	5	1	4
Meridion circulae var.constricta	K	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula cuspidata	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-
N. mutica	Q	-	-	1	-	1	-	1	-	-
N. reinhardtii	W	-	-	-	-	2	-	2	-	-
N. tokyoensis	W	-	-	-	4	1	1	-	-	-
N. spp.	?	-	-	-	3	-	-	-	-	-
Neidium bisulcatum	W	-	-	-	2	-	-	1	-	-
N. iridis	O	-	-	-	4	1	-	2	-	-
N. spp.	?	-	-	-	12	3	2	1	-	-
Nitzschia clausii	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-
N. spp.	?	-	-	-	-	5	1	-	-	-
Pinnularia cardinaliculus	W	-	-	-	3	-	-	-	-	-
P. hemiptera	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-
P. maior	W	-	-	-	1	1	-	-	-	-
P. microstauron	W	-	-	-	2	-	-	1	-	-
P. viridis	O	-	-	-	6	4	-	1	-	-
P. spp.	?	-	-	-	11	4	-	1	-	-
Rhoicosphenia abbreviata	W	-	-	-	-	5	-	-	-	-
Rhopalodia gibba	W	-	-	1	2	1	-	-	-	-
R. gibberula	W	-	-	-	1	3	-	-	-	-
Stauroneis acuta	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-
S. spp.	?	-	-	-	-	1	-	1	-	-
Synedra ulna	W	1	-	-	5	9	1	-	1	-
Tabellaria fenestrata	O	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Thalassiosira bramaputrae	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Unknown	?	-	-	-	1	-	-	-	-	-
中～下流性河川 (K)		-	-	-	1	1	-	-	-	-
湖沼沼沢湿地 (N)		-	-	2	4	-	-	-	4	3
沼沢湿地付着生 (O)		-	-	-	41	64	-	7	1	-
陸域 (Q)		13	1	1	46	12	19	7	-	-
広布種 (W)		5	-	1	63	77	6	10	3	-
不明 (?)		9	5	5	46	47	8	11	6	8
珪藻殻数		27	6	9	201	201	33	35	14	11

第３節　花粉化石群集

株式会社パレオ・ラボ
新山雅広

１　はじめに

ここでは、舟寄遺跡より採取された試料を用いて、縄文時代中期以降の古植生および古環境を明らかにする一端として花粉化石群集の検討を行う。

２　試料

花粉化石群集の検討は、A2区およびA15区で採取された合計９試料について行った。以下に、各試料の記載を示す。なお、これら９試料は珪藻化石群集の検討にも用いられた。

A2区（３試料;試料①～③):上位のⅣ層（試料①）は縄文時代晩期の土層である。遺物包含層でもあり、黒褐色粘土で炭化物片を含み、褐鉄鉱が少し認められる。下位のⅤ層（資料②）は遺物包含層である。灰色粘土（粘性高い）で褐鉄鉱が散在する。Ⅵ層（資料③）は上面が縄文時代中期の遺構確認面であり、灰オリーブ色砂質粘土で草本遺体を含み、褐鉄鉱が散在する。

A15区（６試料；試料③～⑧）：本地点は、現在の水田耕作土下に基盤整備事業等による近現代の土層が堆積し、時期不明の土層に続いて縄文時代の土層（Ⅳ・Ⅴ層）が堆積する。試料は盛土の直下より、各土層を連続して採取したが（試料①～⑧)、試料①・②は近現代の土層であるため、分析を行わなかった。試料③･④は時期不明の土層であり、試料③はオリーブ黒色シルト質粘土で炭化物片を含み、褐鉄鉱が散在する。また、上部を主体に草本遺体が密集するが､放射性炭素年代測定（AMS法）を行った結果、１σ歴年代範囲においてcal BC650－590年（33.3%)、２σ歴年代範囲においてcal BC700－540年（72.6%）と測定され、弥生時代前期の年代であった。試料④は灰色シルト質粘土で褐鉄鉱が少し認められる。試料⑤は縄文時代晩期のⅣ層より採取され、オリーブ黒色粘土で草本遺体、炭化物片を含み、褐鉄鉱が少し認められる。本層はA2区のⅣ層と対応するが、本地点の方が黒色味を強く帯びる。試料⑥は遺物包含層（Ⅴ層）であり、粘性が高い灰色粘土で炭化物片を含み、褐鉄鉱が散在する。試料⑦・⑧は遺構確認面の土層（Ⅵ層）である。試料⑦は資料⑥よりさらに粘性が高い灰色粘土で褐鉄鉱が散在する。下部の試料⑧はオリーブ灰色粘土で褐鉄鉱が発達する。

３　方法

花粉化石の抽出は、試料約２～３ｇを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去､フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解､アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重 2.1 に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

４　花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉７、草本花粉４、形態分類で示したシダ植物胞子１である。いずれの試料も花粉化石の産出個数は少なく、花粉化石分布図として示すことができなかった。以下に、

各試料の花粉化石群集を記載する。

A2区（試料①～③）

試料①（Ⅳ層）は草本のイネ科、ヨモギ属とシダ植物の単条型胞子が僅かに産出した。試料②（Ⅴ層）は木本のみでクリ属、ウコギ科が僅かに産出した。試料③（Ⅵ層）は、花粉・胞子化石を全く産出しなかった。

A15区（試料③～⑧）

試料③（Ⅲ層）は木本のツガ属、カバノキ属、ハンノキ属、クリ属、草本のイネ科、ヨモギ属、単条型胞子が僅かに産出した。試料④（Ⅲ層）は木本のハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、草本のカヤツリグサ科、セリ科、ヨモギ属、単条型胞子が僅かに産出した。試料⑤（Ⅳ層）は木本のサワグルミ属－クルミ属、草本のイネ科が僅かに産出した。試料⑥（Ⅴ層）と試料⑦（Ⅵ層上部）は花粉・胞子化石を全く産出しなかった。試料⑧（Ⅶ層下部）は単条型胞子のみが僅かに産出した。

5　考察

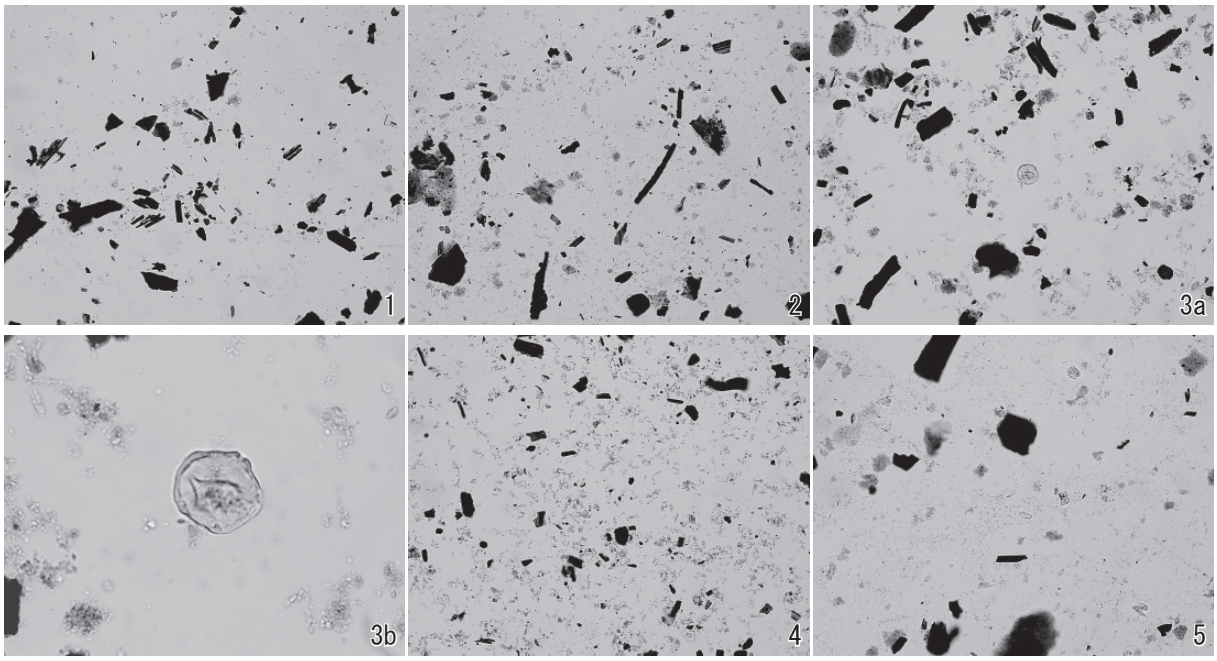
いずれの試料も十分な花粉化石が産出しなかったため、古植生について推定することはできなかった。ここでは、僅かに産出した花粉化石から、各時期の植物相を推定するに止める。縄文時代中期（Ⅴ層）は落葉広葉樹のクリ属、ハンノキ属、縄文時代晩期（Ⅳ層）は落葉広葉樹のサワグルミ属－クルミ属、草本ではイネ科、ヨモギ属、縄文時代晩期以降～弥生時代前期（Ⅲ層）は針葉樹のツガ属、落葉広葉樹のカバノキ属、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、草本ではイネ科、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギ属を含んでいた。なお、花粉化石は水成堆積物であれば、良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。試料とした堆積物はいずれも花粉化石の保存状況が悪いことから、水成堆積物の可能性は低く、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものとは考え難い。堆積環境の詳細については、珪藻分析を参照されたいが、花粉分析から判断する限りでは、乾燥した環境下であったか、一時的に水が溜まることがあっても頻繁に乾燥を繰り返すような環境であったと予想される。

6　おわりに

いずれの試料も花粉化石の保存状況が悪かったため、古植生について推定することはできず、植物相の一部が明らかになったのみであった。試料とした縄文時代中期以降の堆積物は、安定した滞水環境で堆積したものではないと考えられた。

第10表　花粉化石産出一覧表

和名	学名	A2区			A15区					
		1	2	3	3	4	5	6	7	8
樹木										
ツガ属	*Tsuga*	－	－	－	1	－	－	－	－	－
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	－	－	－	－	－	1	－	－	－
カバノキ属	*Betula*	－	－	－	1	－	－	－	－	－
ハンノキ属	*Alnus*	－	－	－	1	3	－	－	－	－
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	－	－	－	－	1	－	－	－	－
クリ属	*Castanea*	－	1	－	1	1	－	－	－	－
ウコギ科	Araliaceae	－	1	－	－	－	－	－	－	－
草本										
イネ科	Gramineae	2	－	－	1	－	1	－	－	－
カヤツリグサ科	Cyperaceae	－	－	－	－	1	－	－	－	－
セリ科	Umbelliferae	－	－	－	－	1	－	－	－	－
ヨモギ属	*Artemisia*	2	－	－	1	1	－	－	－	－
シダ植物										
単条型胞子	Monolete spore	6	－	－	2	2	－	－	－	1
樹木花粉	Arboreal pollen	0	2	0	4	5	1	0	0	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	4	0	0	2	3	1	0	0	0
シダ植物胞子	Spores	6	0	0	2	2	0	0	0	1
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	10	2	0	8	10	2	0	0	1
不明花粉	Unknown pollen	2	0	0	7	1	1	0	0	0



１プレパラート状況、A2区－試料①

２プレパラート状況、A15区－試料③

３プレパラート状況（中央はハンノキ属、3b は 3a の拡大）、A15区－試料④

４プレパラート状況、A15区－試料⑤

５プレパラート状況、A15区－試料⑧

第171図　花粉化石顕微鏡写真（scale bar 1,2,3a,4,5:50μm,3b:20μm）

第４節　動物遺存体

奈良文化財研究所
丸山真史

１　概要

今回の発掘調査では、縄文時代中期中葉から後葉の遺構および遺物包含層から、破片数にして 140 点が出土している。出土した動物遺存体のうち、種類や部位などを同定したものは哺乳類が 26 点を数える (第 11 表)。また、種類が判明しなかった鳥類も２点含まれている。いずれも白色を呈し、強く被熱したと考えられ、大部分が細片となっている。

２　種類別の特徴

第11表　種名表

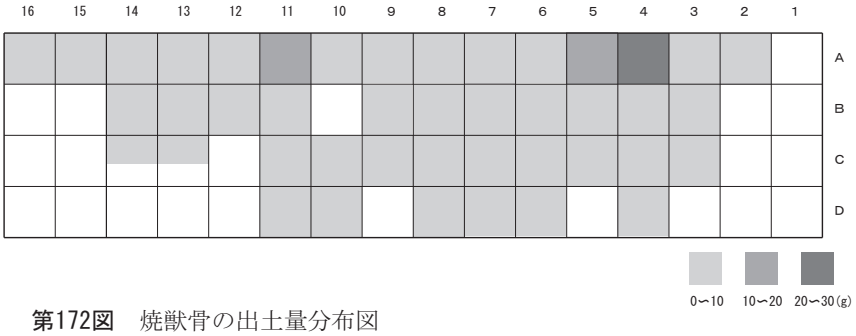
哺乳綱 *Mammalia*
食肉目 *Carnivora*
イタチ科 *Mustelidae*
テン *Martes melampus*
偶蹄目 *Artiodactyla*
イノシシ科 *Suidae*
イノシシ *Sus scrofa*
シカ科 *Cervidae*
ニホンジカ *Cervus nippon*

イノシシが最も多く出土しており、計18点を数える。その内訳は、指骨６点、手根骨５点（左１右４）、踵骨（右）２点、脛骨（右）、足根骨（左）、中足骨（右）が１点ずつ、中手骨あるいは中足骨２点である。踵骨のうち１点と、中手骨あるいは中足骨の２点は、骨端部が癒合していない若獣で多く出土したのはニホンジカであり、枝角２点、頭蓋骨、橈骨、手根骨、指骨、中手骨あるいは中足骨が１点ずつ、計７点が出土している。これら大型の野生獣のほかに、テンの踵骨（右）１点が出土している。これらの動物遺存体は、いずれも白色を呈し、収縮や変形が生じたものが含まれていることから、強く被熱したと考えられる。

３　遺跡における動物利用

今回の調査では、竪穴住居、掘立柱建物を含む柱穴、土坑、落ち込み、遺物集中域、ピットおよび遺物包含層から動物遺存体が出土しており、その最大の特徴はすべて強く被熱し、収縮、変形、亀裂が生じ、白色を呈することである。縄文時代後晩期の東日本の内陸部で集中的に出土することが多い。この焼獣骨について、食料残滓、動物祭祀、人の埋葬にかかわるものなどの議論がある。これら大部分の焼獣骨の共通点は、イノシシとニホンジカを主体としていることである。また、食料残滓とは考えられない鹿角やその加工品が含まれていることもある。高山純は関東・甲信越地域の縄文時代の配石遺構から出土した焼獣骨を集成し、それらを死者に持たせるために焼き、砕いて遺構あるいはその周辺に撒いたと解釈している（高山 1976・1977)。金子浩昌は縄文時代晩期にイノシシ、ニホンジカの出土量が増加することから、狩猟儀礼との関連を指摘している（金子 1984)。また、新津健は、聖なる火によって獣骨が清められ、再生や多産を祈る動物儀礼、豊猟を願う狩猟儀礼などを意義として掲げている（新津 1985)。これら以外にも焼獣骨が、動物骨を焼くことによる祭祀・儀礼の遺物であることが指摘されてきた。最近では、愛知県豊田市を中心として、縄文前期を含む焼獣骨が出土していること（山崎 2008 など)、新潟県でも焼獣骨が出土する縄文遺跡が広く分布することが指摘されている（山崎 2012)。また、京都の縄文時代晩期の上里遺跡でも焼獣骨が出土しており、東日本における焼獣骨との関連が注目されるが、イノシシやニホンジカを主体としておらず、小型哺乳類の骨片も焼けていることから、同様な意義を想定することは困難である（丸山 2010)。

当遺跡では、イノシシとニホンジカが大部分を占め、同定できなかった破片も大型哺乳類のものが圧倒的であり、鳥類や小型哺乳類は少量に留まる。当調査で出土している焼獣骨の総量は196.7ｇを測り、その重量による分布を見るとA4・5区に集中し、次いでA11区に集中する（第172図）。概ね、遺構が分布する範囲と合致しており、当遺跡が環状集落の一部と想定されることから、その内部の遺構に関連して焼獣骨が出土していると言えよう。ただし総量が少なく、実際の分布状況を示しているのか判断することは難しい。食料残滓とは考えられない被熱した鹿角は注目されるが、被熱した遺存体は無機化することで保存状態に恵まれることが知られており、被熱していない骨が土中で分解され、遺跡に保存されなかった可能性もある。



第172図　焼獣骨の出土量分布図

４　まとめ

当遺跡で出土した動物遺存体のうち、種類を同定したものはイノシシ、ニホンジカ、テンの３種類であり、種類を特定できなかった鳥類も含まれている。いずれも強く被熱しており、収縮や変形を生じ、白色を呈する。これらの焼獣骨の出土は遺構の分布範囲と重複するが、出土量が少なく、被熱しなかった骨が土中で分解された可能性もある。

近年、新潟県、愛知県、京都府で焼獣骨が出土していることが明らかになり、福井県でも従来から指摘される儀礼との関連に注目する必要がある。当遺跡が縄文中期から後期にかけて継続する集落であり、焼獣骨をともなう儀礼の時期的な問題にも注意が必要である。当遺跡における焼獣骨の出土にどのような意義があるのか、他の遺物との共伴関係などとともに検討することが、今後の課題となる。

参考文献

金子浩昌　1984「動物遺存体」『なすな原遺跡－No. 1 地区調査－』なすな原遺跡調査会　pp. 580－596

高山純　1976「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義・上」『史学』47－４　pp. 301－334

高山純　1977「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義・下」『史学』48－１　pp. 49－74

新津健　1985「縄文時代後晩期における焼けた獣骨について」『日本史の黎明』六興出版　pp. 125－153

西本豊弘　1983「縄文時代の動物と儀礼」『歴史公論』94雄山閣　pp. 52－56

丸山真史　2010「動物遺存体の分析」『上里遺跡Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24冊
（財）京都市文化財研究所　pp. 147－149

山崎健　2008「豊田市丸根遺跡から出土した焼骨片」『丸根遺跡・丸根城跡』　pp. 251－256

山崎健　2012「東海地方における縄文時代後晩期の生業研究の方向性」『晩期後半の地域社会　その３』
東海縄文研究会　第３回予稿集　pp. 11－22

第12表　動物遺存体一覧表

※想定時期は出土土器量による。　単位：g

番号	遺構	地区	層位	重量	想定時期	大分類	小分類	部位	左右	備考
1	SI01	C3		3.22	中葉	哺乳綱	イノ／シカ	膝蓋骨	左	被熱（白色）
2	SI03	B4･5	上層	1.18	中葉	哺乳綱	大型	不明	－	被熱（白色）･小片３点
3	SI04	C5	上層	0.86	中葉	哺乳綱	イノシシ	踵骨	右	被熱（白色） 踵骨隆起（未癒合）
4	SI04	C5	上層	0.88	中葉	哺乳綱	大型	四肢骨か	－	被熱（白色）
5-1	SI04	C5	中層	5.53	中葉	哺乳綱	イノシシ	踵骨	右	被熱（白色）
5-2	SI04	C5	中層	－	中葉	哺乳綱	イノ／シカ	基節骨／中節骨	－	被熱（白色）
5-3	SI04	C5	中層	－	中葉	哺乳綱	大型	不明	－	被熱（白色）
5-4	SI04	C5	中層	－	中葉	鳥綱	不明	脛足根骨	左	被熱（白色） カモ類に相当する大きさ
6	SI05	D6･7	中層	7.20	中葉	哺乳綱	イノ／シカ	腰椎	－	被熱（白色）
7	SI06	B･C6･7	上層	0.61	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
8	SI08	A7	上層	0.50	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
9	SI09	B7･8	上層	0.48	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
10	SI09	B7･8	上層	0.18	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
11	SI14	C10	上層	1.43	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
12	SI14	C10	下層	0.37	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
13	SI15	C11	下層	0.65	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（褐色）
14	SI16 下層面	A11		0.65	後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
15	SI16 下層面	A11		1.82	後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
16	SI18	C13･14	上層	0.85	中葉	哺乳綱	イノ／シカ	基節骨／中節骨	－	被熱（白色）
17	SI18	C13･14	中層	0.48	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
18	SI19	B13	上層	1.95	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
19	SI19	B13	上層	1.88	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
20	SI19	B13	下層	1.00	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
21-1	SI20	A15	上層	8.34	中葉	哺乳綱	イノ／シカ	中節骨か	－	被熱（白色）
21-2	SI20	A15	上層	－	中葉	哺乳綱	シカ	橈骨	左	被熱（白色）
21-3	SI20	A15	上層	－	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
22-1	SI20　炉内	A15	上層	0.54	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
22-2	SI20　炉内	A15	上層	－	中葉	鳥綱	不明	不明	－	被熱（白色）
23	SB05-P1	A4		0.42	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
24-1	SK10	B4		1.55	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	中心足根骨	左	被熱（白色）
24-2	SK10	B4		－	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	中間手根骨	右	被熱（白色）
24-3	SK10	B4		－	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色） イノシシ手根骨／足根骨か
25	SK11	A4		6.67	中～後葉	哺乳綱	イノ／シカ	長管骨	－	被熱（白色）
26	SK11	A4		2.11	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	中節骨	－	被熱（白色）
27	SK22	A4･5		1.81	中～後葉	哺乳綱	大型	不明	－	被熱（白色）
28	SK24	A5		0.88	中ー後葉	哺乳綱	イノシシ	中手骨／中足骨	－	被熱（白色） 未癒合（遠位端）
29	SK24	A5		0.71	中ー後葉	哺乳綱	大型	不明	－	被熱（白色） 距骨などの関節面か
30	SK36	C･D6	上層	0.27	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
31	SK34	B6		1.22	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
32	SK67	B10･11		0.47	中ー後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
33	SK73	A11･12		0.39	後葉	哺乳綱	イノ／シカ	基節骨／中節骨	－	被熱（白色）
34	SK76	D11		0.64	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
35-1	SP031	B3		6.85	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	中手骨／中足骨	－	被熱（白色） 未癒合（近位端･遠位端）
35-2	SP031	B3		－	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	中節骨	－	被熱（白色）
35-3	SP031	B3		－	中～後葉	哺乳綱	イノ／シカ	基節骨	－	被熱（白色）
35-4	SP031	B3		－	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	第３中足骨	右	被熱（白色）
35-5	SP031	B3		－	中～後葉	哺乳綱	大型	不明	－	被熱（白色）
36	SP033	B4		0.73	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
37	SP036	A4		0.16	中～後葉	哺乳綱	イノシシか	手根骨か	－	被熱（白色）
38	SP038	A3		0.57	中～後葉	哺乳綱	イノシシか	手根骨か	－	被熱（白色）
39	SP060	A4		1.25	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
40	SP070	A4		2.08	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
41	SP094	C6		0.21	中葉	不明	不明	不明	－	被熱（白色）
42	SP174	B8		1.68	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
43	SP181	D8		0.38	中～後葉	哺乳綱	大型	種子骨か	－	被熱（白色）
44	SP185	C8		0.41	中葉	骨角器か	不明	不明	－	被熱（白色）
45	SP194	D8		0.39	中～後葉	不明	不明	不明	－	被熱（白色）
46	SP220	B6		2.78	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
47-1	SP230	B6		2.04	中～後葉	哺乳綱	シカ	中手骨／中足骨	－	被熱（白色）
47-2	SP230	B6		－	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
48	SP232	B6		2.22	中～後葉	哺乳綱	大型	不明	－	被熱（白色） 眼窩／寛骨臼か
49	SP239	C4		0.99	中葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
50	SP247	A8		0.56	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
51	SP260	B6		0.56	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
52	SP306	A13		1.81	中～後葉	哺乳綱	シカ	末節骨	－	被熱（白色）
53	SP336	B12		1.71	中～後葉	哺乳綱	大型	不明	－	被熱（白色）
54	SP555	B4		0.37	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
55	SP574	B4		0.75	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
56-1	SQ2	D3･4		1.37	中葉	哺乳類	イノ／シカ	基節骨	－	被熱（白色）
56-2	SQ2	D3･4		－	中葉	哺乳類	不明	不明	－	被熱（白色）

番号	遺構	地区	層位	重量	想定時期	大分類	小分類	部位	左右	備考
57	SQ6	C3･4		0.43	中葉	哺乳類	不明	不明	－	被熱（白色）
58-1	SQ6	C3･4		3.98	中葉	哺乳類	イノ／シカ	末節骨	－	被熱（白色）
58-2	SQ6	C3･4		－	中葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
59	落ち込み	A16	上層	0.34	後葉以降	哺乳類	不明	不明	－	被熱（白色）
60		A区一括		1.45	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
61		A2	Ⅳ層	0.86	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
62		A3	Ⅳ層	1.07	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
63		A3	Ⅴ層	2.13	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
64		A4	Ⅳ層	8.25	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	脛骨	右	被熱（白色）
65		A4	Ⅳ層	2.76	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
66-1		A4	Ⅴ層	2.59	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	第４手根骨	右	被熱（白色）
66-2		A4	Ⅴ層	－	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
67		A5	Ⅳ層	0.29	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
68		A5	Ⅳ層	2.00	中～後葉	哺乳綱	大型	不明	－	被熱（白色）
69-1		A5	Ⅴ層	6.34	中～後葉	哺乳綱	シカ	枝角	－	被熱（白色）
69-2		A5	Ⅴ層	－	中～後葉	哺乳綱	イノ／シカ	末節骨	－	被熱（白色）　イノシシか
69-3		A5	Ⅴ層	－	中～後葉	哺乳綱	大型	不明	－	被熱（白色）
70-1		A6	Ⅳ層	1.94	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	指骨	－	被熱（白色）
70-2		A6	Ⅳ層	－	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
71		A6	Ⅴ層	0.97	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
72		A7	Ⅳ層	0.95	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
73		A7	Ⅴ層	0.90	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	末節骨	－	被熱（白色）
74-1		A7	Ⅴ層	3.97	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	中節骨	－	被熱（白色）
74-2		A7	Ⅴ層	－	中～後葉	哺乳綱	イノ／シカ	基節骨／中節骨	－	被熱（白色）
74-3		A7	Ⅴ層	－	中～後葉	哺乳綱	シカか	枝角か	－	被熱（白色）
75-1		A8	Ⅴ層	2.93	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	第３手根骨	右	被熱（白色）
75-2		A8	Ⅴ層	－	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
76		A9	Ⅳ層	0.49	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
77		A9	Ⅴ層	1.96	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	中間手根骨	右	被熱（白色）
78		A10	Ⅳ層	1.12	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
79-1		A11	Ⅳ層	10.02	中～後葉	哺乳綱	イノ／シカ	椎骨	－	被熱（白色）
79-2		A11	Ⅳ層	－	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
80		A11	Ⅴ層	0.78	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
81		A12	Ⅳ層	3.88	中～後葉	哺乳綱	大型	不明	－	被熱（白色）
82		A13	Ⅴ層	0.26	中～後葉	哺乳綱	イノシシか	中手骨／中足骨か	－	被熱（白色）
83		A14	Ⅳ層	1.50	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	橈側手根骨	左	被熱（白色）
84		A15	Ⅳ層	0.13	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
85		A15	Ⅴ層	0.35	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
86		B3	Ⅳ層	1.41	中～後葉	哺乳綱	イノシシ	末節骨	－	被熱（白色）
87		B3	Ⅴ層	1.28	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
88		B4	Ⅳ層	1.76	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
89		B5	Ⅳ層	1.55	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
90		B5	Ⅴ層	1.52	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
91		B6	Ⅳ層	0.42	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
92		B7	Ⅳ層	3.01	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
93		B7	Ⅴ層	0.78	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
94		B7	Ⅴ層	－	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
95		B8	Ⅴ層	3.77	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
96		B9	Ⅴ層	0.69	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
97		B11	Ⅳ層	3.36	中～後葉	哺乳綱	シカ	第２+３手根骨	左	被熱（白色）
98		B11	Ⅴ層	0.41	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
99		C3	Ⅴ層	0.54	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
100		C4	Ⅳ層	1.03	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
101		C4	Ⅴ層	2.24	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
102		C5	Ⅴ層	0.74	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
103		C7	Ⅳ層	1.68	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
104-1		C7	Ⅴ層	3.27	中～後葉	哺乳綱	シカ	枝角	－	被熱（白色）
104-2		C7	Ⅴ層	－	中～後葉	哺乳綱	イノ／シカ	基節骨	－	被熱（白色）
104-3		C7	Ⅴ層	－	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
105		C8	Ⅴ層	0.99	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
106		C9	Ⅴ層	0.69	中～後葉	哺乳綱	大型	長管骨	－	被熱（白色）
107		C10	Ⅴ層	1.00	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
108		C11	Ⅳ層	0.67	中～後葉	哺乳綱	テン	踵骨	右	被熱（白色）
109		C11	Ⅴ層	1.44	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
110		D4	Ⅳ層	0.40	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
111		D6	Ⅳ層	0.43	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
112		D7	Ⅳ層	1.45	中～後葉	哺乳綱	不明	不明	－	被熱（白色）
113		D10	Ⅳ層	1.28	中～後葉	哺乳綱	シカか	枝角か	－	被熱（白色）
114		D10	Ⅴ層	2.37	中～後葉	哺乳綱	シカか	枝角か	－	被熱（白色）

参考文献

石井寛　1989 「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

大野市教育委員会　1985 『右近次郎遺跡Ⅱ』

金沢市教育委員会　1974 『金沢市古府遺跡』

金沢市教育委員会　1985 『金沢市東市瀬遺跡』

狩野睦　2008 「串田新式・大杉谷式土器」『総覧　縄文土器』（株）アム・プロモーション

木下哲夫　1996 「大杉谷式土器」『日本土器辞典』雄山閣

工藤俊樹　1985 「右近次郎遺跡出土中期後葉土器群の検討」『右近次郎遺跡Ⅱ』 大野市教育委員会

倉敷考古館　1971 『里木貝塚』

小島俊彰　1974 「北陸の縄文時代中期の編年」『大鏡』５　富山県考古学会

小林謙一　2004 『縄紋社会研究の新視点』 六一書房

坂井町教育委員会　2004 『西・鯉地区遺跡群』

縄文時代文化研究会　1999 『縄文時代』10号

縄文時代文化研究会　2001 『縄文時代集落研究の現段階』第１回研究集会　発表要旨

縄文中期集落研究グループ　2004 『シンポジウム　縄文集落研究の新地平３（発表要旨・資料集)』

白川綾　1997 「常安王神の森遺跡出土縄文時代中期後葉～後期初頭土器群の検討」『常安王神の森遺跡』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

白川綾　2004 「縄文系土器群と縦位帯縄文・結節縄文を有す土器群について」『栃川遺跡』 朝日町教育委員会

鈴木保彦・山本暉久　1988 「加曾利Ｅ式土器様式」『縄文土器大観２　中期Ⅰ』 小学館

谷井彪ほか　1982 「縄文中期土器の再編」『研究紀要』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調布市原山遺跡調査会　1993 『はらやま』

冨井眞　1998 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1994年度』
京都大学埋蔵文化財研究センター

冨井眞　2008 「北白川Ｃ式土器」『総覧　縄文土器』（株）アム・プロモーション

新潟県教育委員会　1999 『和泉Ａ遺跡』

新潟県教育委員会　2004 『青田遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1988 『鳴鹿手島遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1997 『常安王神の森遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1998 『下黒谷遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1999 『大味地区遺跡群』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2004 『坂井兵庫地区遺跡群Ⅰ（遺構編)』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2005 『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ（遺物編)』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2005 『大牧遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2006 『乗兼・坪江遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2011 『舟寄福島通遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2011 「上蔵垣内遺跡」『年報18』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2011 「大牧遺跡」『年報18』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2012 『若宮遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2012 『大関東遺跡』

増子康眞　1981 「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階　本文編・補足改定版』

山本孝一　2004 「栃川遺跡出土縄文中期中葉土器群の検討」『栃川遺跡』 朝日町教育委員会

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ふなよせいせき
書 名	舟寄遺跡
副 書 名	国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査
巻 次	
シ リ ー ズ 名	福井県埋蔵文化財調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第136集
編 著 者 名	山本孝一・田中祐二・古山明日香・丸山真史・黒澤一男・新山雅広・ パレオラボAMS年代測定グループ
編 集 機 関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒910－2152　福井県福井市安波賀町４－10　　TEL　0776－41－3644
発 行 年 月 日	西暦2013年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふなよせいせき 舟寄遺跡	ふくいけんさかいし 福井県坂井市 まるおかちょうふなよせ 丸岡町舟寄	18210	13027	36° 14′ 51″	136° 24′ 10″	20050727 ～ 20060327	1,450	記録保存調査

遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
舟寄遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居21棟 掘立柱建物19棟 柱穴列１列 土器埋設遺構8基 焼土土坑５基 土坑96基 遺物集中域6箇所	縄文土器・石器・ 土製品・石製品	中期の環状集落の可能性がある。遺構には住居内外の埋甕を含む土器埋設遺構・焼土や炭化物を多量に含む焼土土坑・立石を有する土坑がある。遺物には釣手土器・三角壕形土製品・焼成粘土塊・ヒスイ製を含む玉類がある。

要 約	今回の調査で縄文時代中期中葉後半から後葉前半にかけての短時期の集落遺跡であることが判明した。経時的にみれば竪穴住居や掘立柱建物の配置は調査区内で弧状を呈し、集落全体として環状を呈す可能性がある。遺物は土器・石器を中心に多量に出土した。縄文時代の集落遺跡の発掘調査が少ない本県において、貴重な調査事例となった。

福井県埋蔵文化財調査報告　第136集

舟寄遺跡

― 国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査 ―

平成25年３月８日　印刷
平成25年３月22日　発行

発行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910－2152　福井市安波賀町４－10
印刷　株式会社リンクコーポレーション
〒910－0017　福井市文京１丁目18－15